三重県埋蔵文化財調査報告100-5

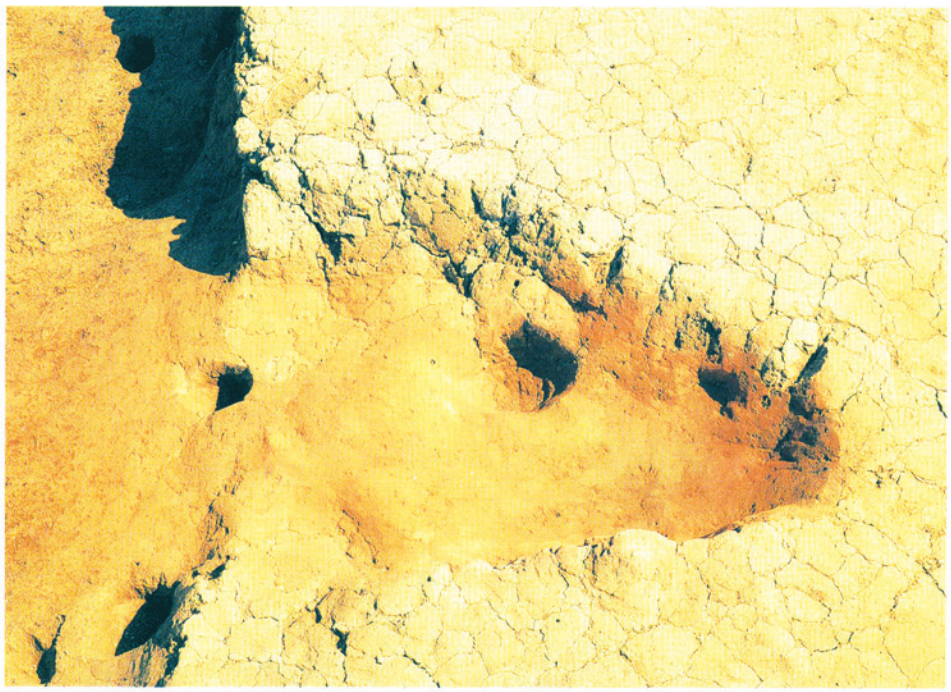
大鼻遺跡

——— 本文編 ———

1994・3

三重県埋蔵文化財センター

早期初頭頃の竪穴住居群



煙道付炉穴（ＳＦ９）

大鼻式土器

早期初頭頃の土偶

表裏縄文土器

大鼻式土器

例　言

1　本書は、三重県亀山市太岡寺町字大鼻・野田口・東組・下谷、布気町字手櫃・垣戸部・山ノ下・北瀬古・日原に所在する大鼻（おおばな）遺跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、一般国道１号亀山バイパス建設事業に係る埋蔵文化財発掘調査報告書第三分冊－２である。各分冊の概要は下記のとおりである。

第一分冊　　上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡
第二分冊－１　千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡
第二分冊－２　糀屋垣内遺跡
第三分冊－１　山城遺跡・北瀬古遺跡
第三分冊－２　大鼻遺跡

3　当分冊に係る発掘調査は、三重県が建設省中部地方建設局から受託し、発掘調査に係る費用は建設省中部地方建設局が全額を負担した。

4　当該業務全般に係る発掘調査は、昭和59～63年度は三重県教育委員会文化課が、平成元～５年度は三重県埋蔵文化財センターが担当した。なお、序文及び経過や現場調査の体制については、第三分冊－１に掲載した。

5　当大鼻遺跡に係る現場調査は、下記のとおりの者が担当した。

昭和60～61年度　梅澤　裕、山田　猛
昭和63年度　駒田利治、浅尾　悟、森川幸雄、近藤　健
平成２年度　駒田利治、平子　弘

6　当調査報告書の執筆分担は、目次と文末に示したとおりである。なお、編集は森川幸雄と岸田早苗、及び清水正明、小菅文裕等の協力を得て山田猛が担当し、遺物写真は山田猛と本堂弘之が撮影した。

7　発掘調査にあたっては、下記の方々にご指導やご協力をいただいた。なお、所属と敬称は省略させていただいた。

青木哲哉、安達厚三、曾田　進、網谷克彦、石黒立人、泉　拓良、磯部　克、伊藤篤史、伊藤正人、井上喜久男、漆畑　稔、江坂輝彌、江崎　武、太田正臣、大塚達朗、大参義一、岡田茂弘、岡田　登、奥　義次、笠井賢二、片岡　肇、金子直行、金子裕之、亀田修一、川江秀孝、川崎　保、堅田　直、神村　透、川合　剛、北村博義、木下哲夫、木下正史、草川貴紀、工藤俊樹、久保穣二郎、栗島義明、河野典夫、小林達雄、小林礼二、坂田孝彦、笹沢　浩、佐野康雄、下村晴文、菅原章太、鈴木重治、鈴木忠司、関野哲夫、高松龍暉、高見宜雄、辰巳和弘、田中　琢、田辺征夫、谷口和人、千葉　豊、土肥　孝、寺岡光三、中島　宏、西脇対名夫、新田剛、新田智子、濱　修、原　寛、八賀　晋、原田昌幸、広岡公夫、藤澤良裕、堀田隆長、穂積裕昌、馬飼野行雄、松澤　修、松田真一、松本岩雄、水谷芳春、水ノ江和同、宮崎朝雄、向坂鋼二、守屋豊人、矢野健一、吉朝則富、渡井英誉

8　当報告書では、全て真北を用いた。なお、当該地域の磁針方位は西偏6度30分（平成元年、国土地理院）である。また、当地域の第六座標系は0度16分43秒東偏する。

9　当報告書で使用した遺構表示略号は、下記のとおりである。

ＳＢ＝掘立柱建物　ＳＨ＝竪穴住居　ＳＡ＝柱列　ＳＤ＝溝　ＳＫ＝土坑　ＳＦ＝炉・竈・焼土
ＳＥ＝井戸　ＳＸ＝墓　ＳＺ＝その他

10　当報告書で報告した記録類や出土遺物は、全て三重県埋蔵文化財センターで保管している。

11　本書には、調査に係わって下記の方々から玉稿をいただき、付篇として掲載させていただいた。

付篇Ⅰ　大鼻式土器の熱ルミネッセンス時代……太田正臣
付篇Ⅱ　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定……広岡公夫、田中彰子

12 スキャニングによるデーター取り込みのため若干のひずみが生じています。
各図の縮尺率は、スケールバーを参照ください。

本　文　目　次

Ⅰ　前　　言 ……（山　田　猛）… 1
　1　概要 …… 1
　2　経過 …… 1

Ⅱ　位置と環境 ……（山　田　猛）… 3
　1　位置と地形 …… 3
　2　歴史的環境 …… 3
　(1)　旧石器時代 …… 3
　(2)　縄文時代 …… 3
　(3)　弥生時代 …… 4
　(4)　古墳時代 …… 4
　(5)　奈良・平安時代 …… 5
　(6)　中世 …… 5

Ⅲ　縄文時代 ……（山　田　猛）… 16
　1　遺構 …… 16
　(1)　竪穴住居 …… 16
　(2)　焼土坑 …… 17
　(3)　その他 …… 19
　2　遺物 …… 19
　(1)　草創・早期 …… 19
　　A　表裏縄文土器 …… 19
　　B　大鼻式土器 …… 20
　　C　搬入土器 …… 21
　　D　土偶 …… 21
　　E　石器 …… 21
　(2)　その他 …… 22

Ⅳ　弥生時代 ……（山　田　猛）… 47
　1　遺構 …… 47
　(1)　方形周溝墓 …… 47
　(2)　その他 …… 50
　2　遺物 …… 51

Ⅴ　古墳時代 ……（森川　幸雄）… 75
　(1)　竪穴住居 …… 75
　(2)　その他 …… 87

Ⅵ　飛鳥・奈良時代 ……（森川　幸雄）… 137
　(1)　竪穴住居 …… 137
　(2)　時期不明の竪穴住居 …… 140

(3) その他 …… 140
Ⅶ 平安時代～室町時代 ……（岸田 早苗）… 151
(1) 掘立柱建物と柱列 …… 151
(2) 中世墓 …… 156
(3) 井戸 …… 157
(4) 土坑 …… 157
(5) 溝 …… 159

Ⅷ 考察 …… 206
1 縄文時代 ……（山 田 猛）… 206
(1) 坂倉遺跡の類例 …… 206
(2) 表裏縄文土器 …… 208
(3) 大鼻式土器 …… 209
A 型式的特徴 …… 209
B 課題 …… 211
(4) 搬入土器 …… 212
(5) 土偶 …… 213
(6) 早期初頭頃の石器 …… 214
(7) 煙道付炉穴 …… 216
(8) 竪穴住居 …… 217
(9) 押型文期の文化 …… 218
2 弥生時代 ……（山 田 猛）… 243
(1) 方形周溝墓の型式 …… 243
(2) 方形周溝墓の造営順 …… 244
(3) 墓域の構成 …… 244
3 古墳時代～奈良時代 ……（森川 幸雄）… 247
(1) 古墳時代の集落 …… 247
(2) 飛鳥時代の集落 …… 249
(3) 奈良時代の集落 …… 249
(4) 竪穴住居出土の玉類 …… 252
4 平安時代～室町時代 ……（岸田 早苗）… 253
(1) 墨書土器 …… 253
(2) 土坑を伴う掘立柱建物 …… 253
(3) 建物小群 …… 254
(4) 区画の意識をもった溝・ピット列 …… 255
5 まとめ ……（山 田 猛）… 257

付編Ⅰ 大鼻式土器の熱ルミネッセンス年代 ……（太田 正臣）… 259
付編Ⅱ 大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定 ……（広岡公夫・田中彰子）… 265

巻　頭　目　次

早期初頭頃の竪穴住居群
煙道付炉穴（ＳＦ９）
大鼻式土器
早期初頭頃の土偶
表裏縄文土器
大鼻式土器

挿　図　目　次

Ⅱ　位置と環境
第１図　位置図 …… 7
第２図　地形図 …… 8
第３図　調査区全体主要遺構図 …… 9
第４図　Ⅰ区主要遺構図 …… 9
第５図　Ⅱ区主要遺構図 …… 10
第６図　Ⅲ区主要遺構図 …… 11
第７図　Ⅳ区主要遺構図 …… 12
第８図　Ⅴ区主要遺構図 …… 13
第９図　Ⅵ区主要遺構図 …… 14
第10図　Ⅶ・Ⅷ区主要遺構図 …… 15

Ⅲ　縄文時代
第11図　縄文時代遺構全体図 …… 25
第12図　ＳＨ１・８、ＳＦ２～６・８～10・13 実測図 …… 26
第13図　ＳＨ２～７等実測図 …… 27
第14図　表裏縄文(1～4)・大鼻式土器拓影図 …… 28
第15図　大鼻式土器拓影図 …… 29
第16図　大鼻式・搬入土器(25)拓影図 …… 30
第17図　大鼻式土器拓影図 …… 31
第18図　大鼻式土器拓影・土偶実測図 …… 32
第19図　大鼻式・搬入土器(25)実測図 …… 33
第20図　草創・早期の石器実測図(1) …… 34
第21図　草創・早期の石器実測図(2) …… 35
第22図　草創・早期の石器実測図(3) …… 36
第23図　その他の石鏃実測図 …… 37
第24図　その他の遺物出土位置図 …… 38
第25図　その他の遺物実測図 …… 38

Ⅳ　弥生時代
第26図　西群（ＳＸ１・２等）実測図 …… 54

第27図　中央群（ＳＸ３～８等）実測図 …… 55
第28図　ＳＸ３～８断面図 …… 56
第29図　ＳＸ４～７・９遺物出土状況図 …… 57
第30図　ＳＸ３・５、ＳＫ３実測図 …… 58
第31図　東群（ＳＸ９～11等）実測図 …… 59
第32図　ＳＸ４・９実測図 …… 60
第33図　ＳＸ６・11実測図 …… 61
第34図　ＳＸ７・８実測図 …… 62
第35図　ＳＸ10実測図 …… 63
第36図　弥生土器実測図 …… 64
第37図　弥生土器実測図 …… 65
第38図　弥生土器実測・拓影図 …… 66
第39図　弥生土器拓影図 …… 67
第40図　弥生土器拓影図 …… 68
第41図　ＳＸ12実測図 …… 68

Ⅴ　古墳時代
第42図　ＳＨ31出土子持勾玉実測図 …… 77
第43図　ＳＨ14・19～22・24～28実測図 …… 88
第44図　ＳＨ23・29～32・34～36、ＳＫ６実測図 …… 89
第45図　ＳＨ37～41・45・47、ＳＫ７実測図 …… 90
第46図　ＳＨ48・50～55実測図 …… 91
第47図　ＳＨ56～60・64実測図 …… 92
第48図　ＳＨ61・62・65～69実測図 …… 93
第49図　ＳＨ70・72～79実測図 …… 94
第50図　ＳＨ80～83・85・86・88実測図 …… 95
第51図　ＳＨ89～91・94・98実測図 …… 96
第52図　ＳＨ14・19～22・25出土遺物実測図 …… 97
第53図　ＳＨ25～27出土遺物実測図 …… 98
第54図　ＳＨ29～32・35～39・41出土遺物実測図 …… 99
第55図　ＳＨ45・47出土遺物実測図 …… 100
第56図　ＳＨ48・50・51出土遺物実測図 …… 101
第57図　ＳＨ52～56出土遺物実測図 …… 102
第58図　ＳＨ56～61出土遺物実測図 …… 103
第59図　ＳＨ61・62・64・65出土遺物実測図 …… 104
第60図　ＳＨ66～70・72～74出土遺物実測図 …… 105
第61図　ＳＨ74～78出土遺物実測図 …… 106
第62図　ＳＨ78～82出土遺物実測図 …… 107
第63図　ＳＨ82・83・85出土遺物実測図 …… 108
第64図　ＳＨ85・86・88・89出土遺物実測図 …… 109
第65図　ＳＨ89・90出土遺物実測図 …… 110
第66図　ＳＨ90～92出土遺物実測図 …… 111
第67図　ＳＨ94・98出土遺物実測図 …… 112

第68図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図 …… 112
第69図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図 …… 113
第70図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図 …… 114
第71図　竪穴住居出土玉類実測図 …… 115
第72図　ＳＫ４・６～10・13、包含層出土遺物実測図 …… 115

Ⅵ　飛鳥・奈良時代
第73図　ＳＸ13実測図 …… 140
第74図　ＳＨ９～13・15～17・33・49実測図 …… 141
第75図　ＳＨ44・63・71・84・87・93・95～97、ＳＺ１実測図 …… 142
第76図　ＳＨ９～11・13・15～17・24・33・42・43出土遺物実測図 …… 143
第77図　ＳＨ44・71・84・87・93・95出土遺物実測図 …… 144
第78図　ＳＨ95～97出土遺物実測図 …… 145
第79図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図 …… 145
第80図　ＳＺ１、ＳＸ13、ＳＫ５・11・12・14、包含層出土遺物実測図 …… 146

Ⅶ　平安時代～室町時代
第81図　ＳＢ２～４、ＳＡ１～３実測図 …… 160
第82図　ＳＢ１・５～７実測図 …… 161
第83図　ＳＢ８平面図 …… 162
第84図　ＳＢ８断面図 …… 163
第85図　ＳＢ10平面図 …… 164
第86図　ＳＢ10断面図 …… 165
第87図　ＳＡ４実測図 …… 165
第88図　ＳＢ12～14実測図 …… 166
第89図　ＳＢ15・16実測図 …… 167
第90図　ＳＢ９・11・17～21実測図 …… 168
第91図　ＳＢ22～24実測図 …… 169
第92図　ＳＢ25～29実測図 …… 170
第93図　ＳＢ30～34・37実測図 …… 171
第94図　ＳＢ35・36・38・39実測図 …… 172
第95図　ＳＢ40～45実測図 …… 173
第96図　ＳＸ14～21実測図 …… 174
第97図　ＳＥ１～４実測図 …… 175
第98図　ＳＥ５・６実測図 …… 176
第99図　ＳＫ15・23・26・31実測図 …… 177
第100図　ＳＫ25実測図 …… 178
第101図　ＳＫ28・33・35・38実測図 …… 179
第102図　ＳＫ39・43・46・49実測図 …… 180
第103図　ＳＫ52・70実測図及びＳＫ52周辺図 …… 181
第104図　ＳＫ62実測図 …… 182
第105図　ＳＫ64付近実測図 …… 183
第106図　ＳＫ74・84・85実測図 …… 184

第107図　ＳＤ９～13・33実測図 …… 185
第108図　ＳＢ１・２・８・11～15・36・38・44、ＳＸ14～18・20・21出土遺物実測図 …… 186
第109図　ＳＥ１・２出土遺物実測図 …… 187
第110図　ＳＥ３・５・６、ＳＫ16～19・22・23・25出土遺物実測図 …… 188
第111図　ＳＫ26・28・29・31・33・34～39・41～44・47～49出土遺物実測図 …… 189
第112図　ＳＫ51～56・61・62出土遺物実測図 …… 190
第113図　ＳＫ64～66・68～70・72・74出土遺物実測図 …… 191
第114図　ＳＫ75～78・80・81・84～86、ＳＤ３～６・８・15・18・19・23・29出土遺物実測図 …… 192
第115図　包含層出土遺物実測図 …… 193
第116図　包含層出土遺物実測図 …… 194
第117図　ＳＫ45出土銭貨拓影図 …… 194

Ⅷ　考察
1　縄文時代
第118図　参考遺物実測図 …… 226
第119図　坂倉遺跡Ａ地区平面図 …… 227
第120図　坂倉遺跡出土遺物(1) …… 228
第121図　坂倉遺跡出土遺物(2) …… 229
第122図　坂倉遺跡出土遺物(3) …… 230
第123図　坂倉遺跡出土遺物(4) …… 231
第124図　坂倉遺跡出土遺物(5) …… 232
第125図　大鼻式土器出土遺跡 …… 237
第126図　三重県下の押型文土器出土遺跡分布図 …… 240
第127図　櫛田川流域の集団領域 …… 241
第128図　煙道付炉穴・竪穴住居模式図、領域概念図 …… 242
2　弥生時代
第129図　方形周溝墓と四隅突出墳の基準線 …… 246
第130図　三重県下の方形周溝墓の類型 …… 246
第131図　墓道と築造順 …… 246
3　古墳時代～奈良時代
第132図　古墳時代～奈良時代竪穴住居変遷図 …… 250・251
4　平安時代～室町時代の遺構と遺物
第133図　建物小群位置関係図 …… 256

表　目　次

Ⅱ　位置と環境
第１表　亀山バイパス地内埋蔵文化財一覧表 …… 6
第２表　亀山バイパス周辺の主な遺跡一覧表 …… 7
第３表　発掘調査経過表 …… 8

Ⅲ　縄文時代
第４表　表裏縄文・大鼻式土器観察表 …… 39

第５表　大鼻式・搬入土器観察表 …… 40
第６表　大鼻式土器観察表 …… 41
第７表　大鼻式土器観察表 …… 42
第８表　大鼻式土器・土偶観察表 …… 43
第９表　草創・早期の石器観察表(1) …… 44
第10表　草創・早期の石器観察表(2) …… 45
第11表　その他の石鏃観察表 …… 46
第12表　その他の遺物観察表 …… 46

Ⅳ　弥生時代
第13表　受口壷形式分類表 …… 69
第14表　弥生土器観察表(1) …… 70
第15表　弥生土器観察表(2) …… 71
第16表　弥生土器観察表(3) …… 72
第17表　弥生土器観察表(4) …… 73
第18表　弥生土器観察表(5) …… 74

Ⅴ　古墳時代
第19表　古墳時代竪穴住居一覧表(1) …… 116
第20表　古墳時代竪穴住居一覧表(2) …… 117
第21表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(1) …… 118
第22表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(2) …… 119
第23表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(3) …… 120
第24表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(4) …… 121
第25表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(5) …… 122
第26表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(6) …… 123
第27表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(7) …… 124
第28表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(8) …… 125
第29表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(9) …… 126
第30表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(10) …… 127
第31表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(11) …… 128
第32表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表(12) …… 129
第33表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(1) …… 130
第34表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(2) …… 131
第35表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(3) …… 132
第36表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(4) …… 133
第37表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(5) …… 134
第38表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表(6) …… 135
第39表　古墳時代竪穴住居出土玉類観察表 …… 135
第40表　古墳時代土坑・包含層出土遺物観察表 …… 136

Ⅵ　飛鳥・奈良時代
第41表　飛鳥・奈良時代竪穴住居一覧表 …… 147

第42表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表(1) …… 147
第43表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表(2) …… 148
第44表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表(3) …… 149
第45表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土滑石製臼玉一覧表 …… 149
第46表　飛鳥・奈良時代土坑等出土遺物観察表 …… 150

Ⅶ　平安時代～室町時代
第47表　中世墓一覧表 …… 194
第48表　井戸一覧表 …… 194
第49表　掘立柱建物一覧表 …… 195
第50表　柱列一覧表 …… 196
第51表　溝一覧表 …… 196
第52表　土坑一覧表(1) …… 197
第53表　土坑一覧表(2) …… 198
第54表　出土遺物観察表(1) …… 199
第55表　出土遺物観察表(2) …… 200
第56表　出土遺物観察表(3) …… 201
第57表　出土遺物観察表(4) …… 202
第58表　出土遺物観察表(5) …… 203
第59表　出土遺物観察表(6) …… 204
第60表　出土遺物観察表(7) …… 205

Ⅷ　考察
第61表　坂倉遺跡出土遺物観察表(1) …… 233
第62表　坂倉遺跡出土遺物観察表(2) …… 234
第63表　坂倉遺跡出土遺物観察表(3) …… 235
第64表　坂倉遺跡出土遺物観察表(4) …… 236
第65表　大鼻・坂倉遺跡の押型文様 …… 237
第66表　尖頭器出土遺跡一覧表 …… 238
第67表　尖頭器出土遺跡文献一覧表 …… 238
第68表　三重県下の押型文土器出土遺跡地名表 …… 239
第69表　櫛田川流域の押型文土器出土遺跡とその存続期一覧表 …… 242
第70表　掘立柱建物・柱列の方向 …… 256

付　編　目　次

付編Ⅰ　大鼻式土器の熱ルミネッセンス年代
第１図　熱発光曲線 …… 259
第２図　温度コントロール回路と光検出部(1) …… 260
　　温度コントロール回路と光検出部(2) …… 261
第３図　コンピューターの画いた熱発光曲線 …… 262
第４図　スーパーリニアリティ …… 262
第５図　年間線量用較正曲線 …… 262

第６図　測定対象土器 …… 264

第１表　試料製作の過程図 …… 260

付編Ⅱ　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定

第１図　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定結果 …… 268
第１表　大鼻遺跡焼土坑９のＮＲＭの磁化測定結果 …… 268
第２表　大鼻遺跡焼土坑９の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 268
第３表　大鼻遺跡焼土坑９の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 269
第４表　大鼻遺跡焼土坑８のＮＲＭの磁化測定結果 …… 269
第５表　大鼻遺跡焼土坑８の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 269
第６表　大鼻遺跡焼土坑８の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 269
第７表　大鼻遺跡焼土坑３のＮＲＭの磁化測定結果 …… 269
第８表　大鼻遺跡焼土坑３の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 269
第９表　大鼻遺跡焼土坑３の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 270
第10表　大鼻遺跡焼土坑４のＮＲＭの磁化測定結果 …… 270
第11表　大鼻遺跡焼土坑４の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 270
第12表　大鼻遺跡焼土坑４の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 270
第13表　大鼻遺跡焼土坑２のＮＲＭの磁化測定結果 …… 270
第14表　大鼻遺跡焼土坑２の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 270
第15表　大鼻遺跡焼土坑２の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 271
第16表　大鼻遺跡焼土坑６のＮＲＭの磁化測定結果 …… 271
第17表　大鼻遺跡焼土坑６の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 271
第18表　大鼻遺跡焼土坑６の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 271
第19表　大鼻遺跡焼土坑10のＮＲＭの磁化測定結果 …… 271
第20表　大鼻遺跡焼土坑10の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 271
第21表　大鼻遺跡焼土坑10の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 272
第22表　大鼻遺跡焼土坑９のＮＲＭの磁化測定結果 …… 272
第23表　大鼻遺跡焼土坑９の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 272
第24表　大鼻遺跡焼土坑９の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 272
第25表　大鼻遺跡焼土坑12のＮＲＭの磁化測定結果 …… 272
第26表　大鼻遺跡焼土坑12の25 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 272
第27表　大鼻遺跡焼土坑12の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 273
第28表　大鼻遺跡焼土坑12の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 273
第29表　大鼻遺跡焼土坑14のＮＲＭの磁化測定結果 …… 273
第30表　大鼻遺跡焼土坑14の25 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 273
第31表　大鼻遺跡焼土坑14の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 273
第32表　大鼻遺跡焼土坑14の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 273
第33表　大鼻遺跡焼土坑14の100 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 274
第34表　大鼻遺跡焼土坑１のＮＲＭの磁化測定結果 …… 274
第35表　大鼻遺跡焼土坑１の50 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 274
第36表　大鼻遺跡焼土坑１の75 Oe消磁後の磁化測定結果 …… 274
第37表　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定結果 …… 274

Ⅰ　前　　言

当「国道１号亀山バイパス建設工事事業」に係る埋蔵文化財発掘調査業務の全体に関する経過と調査体制は、第三分冊－１（『山城遺跡・北瀬古遺跡』）で詳述したとおりである。したがって、当報告書では全体に関する事項は割愛し、大鼻遺跡に直接関係する問題に限定して以下に簡単に触れておく。

１　概　　要

大鼻（おおばな）遺跡は、三重県亀山市太岡寺町字大鼻ほかに所在する、縄文時代から室町時代に及ぶ集落跡である。昭和60・61・63年度と平成２年度に、８地区計約27,500㎡を発掘調査した。その結果、縄文時代の竪穴住居８棟、焼土坑16基、弥生時代の方形周溝墓11基、古墳時代から奈良時代に及ぶ竪穴住居90棟、平安時代から室町時代にかけての掘立柱建物45棟等を検出した。

２　経　　過

分布・試掘調査　昭和48年度に国道１号亀山バイパス建設工事が事業化されて以来、保護協議が重ねられ、昭和55年度には分布調査が実施された。

そして、当該業務に係る発掘調査を開始した昭和59年度に、再度の分布調査を全線にわたって実施した。その結果、大鼻遺跡の東部では従来の知見よりも広く遺物が分布することが確認された。また、後に押型文土器等が出土した西部では遺物の散布は認められなかったが、地形を考慮して試掘調査の対象地に追加した。

用地買収のほぼ終了した昭和60年８月に試掘調査を実施した。この結果、分布調査で追加した東部では遺構や遺物を認めたが、西部では特に認められなかった。それでもやはり地形も考慮し、とりあえず西端は農道までを本調査対象範囲とした。

本調査　本調査は、第２表のとおり実施した。昭和60年度の第一次調査（Ⅱ区）では、調査区の北西端で後に明らかになった縄文時代早期初頭の竪穴住居の一部と１片の土器が検出されたものの、調査時点では遺構の性格や時代が不明確なままであった。遺構検出は、弥生時代中期の方形周溝墓等が容易であるのに対し、この遺構の埋土は黄土色の地山との区別が極めて困難であった。したがって、縄文時代早期の遺構検出は昼前の２時間程だけが可能であり、他の時間帯では一度検出した部分さえも判断できない状況であった。それだけに相当古い時期に属するとの感触はあった。そこで、翌年の第二次調査では地元太岡寺地区のご了解を得、農道の下とこれより西方（Ⅰ区）も調査した。

その結果、農道の下を中心に、縄文時代早期の遺構や遺物が明らかになった。また、調査区最西端でも弥生時代中期の木棺墓らしい土坑も検出された。

以降の調査は、工事計画と用地買収の進捗に従って、順次各区を調査していった。調査範囲は、東西約640ｍ、南北最大70余ｍ、合計27,500㎡に及んだ。主な成果は、縄文時代早期の竪穴住居群と焼土坑群及び「大鼻式」土器や土偶、弥生時代中期の方形周溝墓群、古墳時代から奈良時代に及ぶ竪穴住居90棟、平安時代後期から室町時代の掘立柱住居45棟等である。なお、第二次調査の昭和61年度からは、竪穴住居の埋土は全て篩掛けした。その結果、滑石製臼玉や管玉が普遍的に出土する事実を、他の当該事業関係の遺跡と併せて確認できたことも大きな成果と言えよう。

現場内外の動向　大鼻遺跡は、昭和60年度の現地調査開始から当報告作成まで、８年度を費やしている。そこでこの間の、現地調査の終了後の調査に係わる主な出来事を簡単に記しておく。　　（山田　猛）

1985年11月13日　第一次調査（Ⅱ区）開始。
1986年１月17日　第一次調査終了。
1986年２月８日　現地説明会開催。
1986年３月　安達厚三氏（名古屋市）来訪。
1986年３月　『概要Ⅱ』出版。
1986年５月19日　第二次調査（Ⅰ・Ⅲ・Ⅶ区）開始。
1986年７月23～24日　高田高校生、体験発掘。以後、例年実施。
1986年８月９日　第二次調査終了。
1986年８月27日　土肥孝氏（奈良国立文化財研究所）の現地指導を受ける。
以後、重ねて指導・助言を得る。
1986年８月28日　土偶等を記者発表。
1986年８月30日　現地説明会開催。
1986年９月２日　第三次調査開始。
1986年９月６日　奥義次氏（宇治山田高校）来訪。
以後、重ねて指導・助言を得る。
1986年９月　西脇対名夫氏（京都大学）来訪。
以後、重ねて指導・助言を得る。
1986年９月18日　岡本東三（文化庁）・土肥孝・片岡肇（平安博物館）・鈴木忠司（平安博物館）・松田真一（橿原考古学研究所）・奥義次氏らの指導を受ける。この時、穂積裕昌氏（同志社大学）らも同席。
1986年９月22日　矢野健一氏（京都大学）来訪。以後、重ねて指導・助言を得る。
1986年10月21日　江崎武氏来訪。
1986年10月26日　山田猛、帝塚山大学で発表。
1986年10月28日　泉拓良氏（奈良大学）来訪。
以後、重ねて指導・助言を得る。
1986年10月28日　広岡公夫氏（富山大学）熱残留磁気測定。
1986年11月25日　川崎保氏（同志社大学）来訪。
1986年12月１日　広岡公夫氏等、熱残留磁測定。
1986年12月３日　江坂輝彌氏（慶應義塾大学）来訪。
1986年12月５日　太田正臣氏（近畿大学）熱ルミネッセンス測定。
1987年１月30日　第三次調査終了。
1987年１月31日　現地説明会開催。
1987年２月14日　太田正臣氏熱ルミネッセンス測定。
1987年３月５～６日　小林達雄（国学院大学）・土肥孝・大塚達郎氏（東京大学）の指導を受ける。この時、木下哲夫・西脇対名夫、奥義次・穂積裕昌氏らも同席。
1987年３月　『概要Ⅲ』で「大鼻式」を提唱。
1987年６月８日　原田昌幸氏（文化庁）来訪。
以後、重ねて指導・助言を得る。
1987年６月21日　宮崎朝雄・中島宏・金子直行氏（共に埼玉県）と土肥孝氏、及び川崎保・穂積裕昌氏来訪。
1988年５月９日　第四次（Ⅳ区）調査開始。
1988年７月11日　第四次（Ⅶ区）調査開始。
1988年９月24～25日　帝塚山大学でのシンポジュウムに山田猛が出席。
1988年９月30日　第四次（Ⅳ区）調査終了。
1988年10月８日　現地説明会開催。
1989年２月17日　第四次（Ⅶ区）調査終了。
1989年３月　『概要Ⅴ』出版。
1989年３月31日　山田猛、『三重県史研究』４号で押型文土器の編年観を提示。
1990年７月２日　第五次調査（Ⅷ区）開始。
1990年９月５日　神辺小学校生、体験発掘。
1991年１月14日　第五次調査終了。
1991年２月３日　現地説明会開催。
1991年３月15日　巾隆之氏（群馬県）来訪。
1991年３月　『概要Ⅶ』出版。
1992年８月30日　三重県埋蔵文化財センターで研究集会「前半期押型文土器の諸問題」を開催。
1993年３月31日　上記研究集会の記録集『研究紀要』２号、出版。

Ⅱ　位置と環境

1　位置と地形

三重県は西日本の東端に位置し、東海地方とも近畿地方とも呼ばれる。当県は、紀伊半島の東部にあって南北に長く、旧国名では伊賀国と伊勢国、志摩国さらに紀伊国の一部を含んでいる。さらに旧伊勢国は風土的に南北３地域に分かれ、それぞれ北勢、中勢、南勢と呼称される。亀山市は北勢地方の南端に位置し、東は鈴鹿市に、西は鈴鹿郡関町に、南は中勢の安芸郡芸濃町に、北は鈴鹿山脈を扼して滋賀県と接する。亀山市は、東西に国道１号線とＪＲ関西線が、南北に東名阪国道とＪＲ紀勢本線が貫通する交通の要衝地にある（７頁、第１図）。

鈴鹿山脈の南端と布引山地の北端が接する加太峠を源とする鈴鹿川は、35km程東流して伊勢湾に注ぐ。亀山市はこの中流域にあり、河岸段丘が良く発達している。この河岸段丘は、巨視的には上・中・下の３段丘に把握される。上位段丘には、新生代第三紀の一志層群に安芸層群、礫層及び黄褐色粘土層から成る。この段丘上に、旧東海道や旧市街が立地する。当亀山バイパスはこの段丘上を横切ることになり、大鼻遺跡もこの上位段丘上にある。また、北岸の上位段丘を滝川や椋川が開折し、鈴鹿川に合流している。中位段丘上にも縄文時代以降の遺跡が認められる。下位段丘は、現在ほとんど水田であるが、小規模な段丘が多く残っている。井尻古墳(26)に見るように、下位段丘にも遅くとも古墳時代には遺跡が営まれている。

大鼻遺跡は、この上位段丘の南縁に沿って東西に細長く広がる遺跡である。標高は、85～86ｍ程である。この南縁から40～100ｍ程北に東西に連なる微かな分水嶺があるが、当遺跡はこの南斜面を中心としている。調査前の現況は畑が中心であった。縄文時代の住居は遺跡の中では西部に属し、南にやや張り出した地点である。弥生時代の埋葬遺構も、やはり遺跡の西部に限られている。それも土廣墓は西端にあり、方形周溝墓はこれよりやや東に離れて３群に別れている。これらに対して、古墳時代以降の住居跡は、遺跡全体に広く分散している。

2　歴史的環境

(1) 旧石器時代

三重県下の旧石器は、サヌカイトやチャートを主体としており、宮川や櫛田川の流域を中心に多くの遺跡が確認されている。南勢地方の出張遺跡ではナイフ形石器と共に、石製有孔円盤等が出土した。また、同じく南勢地方のカリコ遺跡からは、小型のナイフ形石器が400点程採集されている。

また、鈴鹿川の下流域では、亀山市に接する長者屋敷遺跡等数遺跡でナイフ形石器が出土している。

(2) 縄文時代

当報告書では、草創期後半の多縄文土器の終わり頃に関東地方まで含めた広い範囲に表裏縄文土器が分布したとも考え、押型文土器や撚糸文土器以降を早期と呼ぶこととする。

草創期　近畿・東海地方の草創期文化は、奈良県の北野ウチカタビロ遺跡[①]、岐阜県の栃の湖遺跡[②]や九合洞窟遺跡[③]、愛知県の酒呑ジュリンナ遺跡[④]、福井県の鳥浜貝塚[⑤]等が著名である。

現在の三重県下では、表裏縄文系と推定される資料が広垣内遺跡や大鼻式を出土する遺跡から断片的に知られているに過ぎない。しかし、有茎尖頭器は北勢地方の高原遺跡や中勢地方の田尻上野遺跡を始

めとして、百カ所以上で出土している。また、北勢地方の西江野遺跡では11点の矢柄研磨器が、志摩地方の次郎六郎遺跡からは拇指形掻器等の良好な石器類が知られている。

鈴鹿川中流域の亀山市内では、椋川北岸の台地上に立地する正知浦遺跡(6)や名越遺跡[6]から、有茎尖頭器が発見されている。また、大鼻遺跡(12)出土遺物の一部は、表裏縄文系の土器であり、草創期末と推定される。

早期　紀伊半島には、前半期の押型文土器を出土する遺跡が多い。三重県下でも、押型文土器を出土する遺跡は100余確認されているが、やはりそのほとんどは前半期に属する。

先に型式設定した大鼻式を出土する遺跡は、三重県内の大鼻遺跡や坂倉遺跡[7]等のほかに、県外では滋賀県の粟津湖底遺跡[8]をはじめ、愛知県や岐阜県、長野県でも確認されている。大川式の分布の中心は現状では圧倒的に伊勢地方にあり、鐘突遺跡[9]や鴻ノ木遺跡[10]、射原垣内遺跡は型式細分する場合の基準遺跡である。特に、西出遺跡[11]では約 6,000点の土器が出土しており、鴻ノ木遺跡からは完形土器が煙道付炉穴から出土した。なお、奈良山地の大川遺跡[12]例は、伊勢地方の大川式とは微妙な地域差が認められる。県内の神宮寺式期の遺跡では、上寺遺跡[13]や井ノ廣遺跡[14]等が調査されている。なかでも井ノ廣遺跡は、単一期の遺跡でありながら20棟前後の竪穴住居が検出されている。また、西出遺跡はある程度の時期幅が想定されるが、やはり20棟程の竪穴住居が検出されている。さらに、大鼻遺跡では土偶も出土しており、重複する竪穴住居や煙道付炉穴と共に、当地方における定住生活の上限を考えるうえでの好例である。

押型文土器文化の前半期には、有茎尖頭器や五角形の石鏃が特徴的である。一方、後半期には神滝遺跡[15]から13点も出土したように、異形局部摩製石器が目につく。

県内の押型文土器後半期では、樋ノ谷遺跡[16]や釜生田遺跡[17]等がある。前者では竪穴住居、後者では陥坑が検出された。陥坑は、馬ノ瀬遺跡[18]や勝地大坪遺跡[19]でも検出されている。

鈴鹿川沿いでは、中流の上位段丘南縁に立地する大鼻遺跡や、景観上自然堤防のように細長く延びる低い浸食残丘上に位置する山城遺跡(2)からも、押型文土器が出土している。また、北岸の上位段丘を開折する滝川の北岸台地上に立地する北瀬古遺跡(11)では、条痕文土器が出土している。この2遺跡に関しては、当第三分冊－1で報告したところである。なお、鈴鹿川流域の東庄内A遺跡[20](13)や一色山遺跡[21]等からも前半期の押型文土器や有茎尖頭器が出土している。さらに、南岸の上位段丘上に立地する東榊野遺跡[22](14)からも早期の条痕文土器が出土している。

前期　鈴鹿川に北西から滝川が合流する付近の上位段丘に立地する野村遺跡[23](15)が古くから知られており、土器や石器が表面採集されている。

中・後期　鈴鹿川流域では、山城遺跡のほかに南岸の北一色遺跡(16)や沢遺跡[24](17)、地蔵僧遺跡(18)等が知られている。

晩期　鈴鹿川中流域では、大鼻遺跡や地蔵僧遺跡、小下遺跡(19)等から少量の突帯文土器が出土している。また、下流域では上箕田遺跡が調査され、前半期の突帯文土器がある程度まとまって出土した[25]。

(3) 弥生時代

伊勢地方の弥生遺跡は、主要河川のデルタ地帯に前期以降の大集落が営まれ、これより上流にも以後の遺跡が拡散する傾向が認められる。鈴鹿川のデルタでは、上箕田遺跡が著名である[25]。

亀山市域における弥生時代の前期に遡る遺跡・遺物は現段階では報告されていない。地蔵僧遺跡では中期中葉の方形周溝墓3基と後期後半の竪穴住居跡6基が報告されているほか、大鼻遺跡では中期中葉から後葉にかけての方形周溝墓11基や箱式木棺墓らしい土坑等が検出されている。また、太岡寺古墳群(20)の下層からは中期の住居跡が検出されている。

(4) 古墳時代

畿内から東国への玄関口に位置する鈴鹿川流域は、古墳も多く築造された。

鈴鹿川流域及び北勢地方で最古最大の古墳は、全長約90mの能褒野王塚古墳(21)とされる。4世紀後

半の前方後円墳であり、埴輪や葺石が認められる。それに続く古墳は、鈴鹿川流域では鈴鹿市の愛宕山１号墳（全長66ｍの前方後円墳か）や寺田山１号墳（全長70ｍ、前方後円墳）であり、おおむね５世紀前後の築造と考えられる。また、それらは規模的には近似しているが距離的には分散しており、鈴鹿川流域内にそれぞれの小グループが存在していたものと推定される。

上椎ノ木１号墳(3) や釣鐘山古墳(22)を含むグループは鈴鹿川流域の中でも特に卓越しており、上椎ノ木１号墳→愛宕山１号墳→西ノ野５号墳(23)（全長31ｍ、前方後円墳）→城山古墳(24)（全長40ｍ、前方後円墳）→西ノ野王塚古墳(25)（全長63ｍ、前方後円墳）→井尻古墳(26)（全長54ｍ、前方後円墳）→井田川茶臼山古墳[27](27)という首長墳の変遷をたどることができる。なお、谷山古墳(1) や木下古墳(28)等、鈴鹿川流域の後期古墳から出土する埴輪には、いわゆる淡輪技法が特徴的である。

この時代の発掘調査によって明らかになった集落遺跡には、大鼻遺跡(12)、山城遺跡（竪穴住居16棟、４～６世紀）、柴戸遺跡(29)（竪穴住居17棟、４～５世紀）、地蔵僧遺跡（18)(竪穴住居32棟、４～６世紀）等がある。

(5) 奈良・平安時代

この地域は、律令時代には鈴鹿郡に属していた。『和名類聚抄』によれば鈴鹿郡内には英多、高官、長世、鈴鹿、牧田、神戸、駅家の７郷があったようであるが、郡衙の所在地は不明である。

平城遷都(710年）に伴ない、北伊賀から鈴鹿川を経て東国に至る道が重視された。和銅の道、すなわち天平の東海道である。以後、伊勢国の国府や国分寺等はこの鈴鹿川沿岸に設置された。この地域には、伊勢国庁跡と推定され、亀山市に西接する長者屋敷遺跡も存在する。

一方、亀山市より上流の関町には鈴鹿関が存在した。すでに壬申の乱(672年）には設置されていたらしく、長岡遷都後も鈴鹿峠の麓にあって、延暦８年(789）の廃止まで軍事的に重要な役割を担っていた[28]。この推定地の対岸には、古厩遺跡も所在する。

鈴鹿郡内では、白鳳・天平時代の寺院跡は未確認である。しかし、大鼻遺跡付近からは白鳳時代の軒丸瓦が採集されている（第三分冊－１の19頁参照）。

(6) 中　世

院政期以降には、この地方でも荘園が認められる。『神鳳鈔』には豊田御厨、安乃田御厨、安楽御厨、葉若御厨、原御厨、井後（尻）御厨等が見えるが、その他の記録には畫生荘、和田荘、三箇荘等も散見する。一方、平安時代末期からの遺跡は前代より格段に増加している。当亀山バイパスに係る調査でも、大鼻遺跡をはじめ、大藪遺跡(8) や糀屋垣内遺跡(9) 等の平安時代末以後の集落跡が検出された。特に後者は葉若御厨との関係も推定されている。

（山田　猛）

〔註〕

① 松田真一ほか『布目川流域の遺跡６』(奈良県立橿原考古学研究所、1991年）。
② 紅村弘・原寛『椛の湖遺跡』(坂下町教育委員会、1974年)。
③ 大参義一ほか「九合洞窟遺跡」(名古屋大学文学部、1956年)。
安達厚三ほか「６　岐阜県九合洞穴」(『日本の洞穴遺跡』日本考古学協会洞穴遺跡調査特別委員会編、1967年)。
④ 大参義一『酒呑ジュリンナ遺跡(1) ・(2) 』(名古屋大学文学部、1967・1970年)。
⑤ 福井県教育委員会『鳥浜貝塚－縄文時代前期を主とする低湿地遺跡の調査』一～四(1979 ～1984年)。
⑥ 大場範久「三重県出土の有舌尖頭器」（『古代文化』第ＸＸ巻８・９、財団法人古代學協會、1968年)。
⑦ 奥義次「第二編　原始」(『多気町史　通史編』多気町、1992年)。
⑧ 松澤修ほか『粟津湖底遺跡』(滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、1992年)。
⑨ 奥義次ほか『鐘突遺跡発掘調査報告書』(松阪市教育委員会、1981年)。
⑩ 河瀬信幸ほか「Ⅱ　鴻ノ木遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。
小濱学・田村陽一「Ⅵ、鴻ノ木遺跡（第５次）」(『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、　1994年)。
⑪ 堀田隆長「30　三重県安芸郡美里村西出遺跡」〔『日本考古学年報』42(1989 年度版）、日本考古学協会、1991年〕。
⑫ 松田真一ほか『大川遺跡』(山添村教育委員会、1989年)。
⑬ 奥義次ほか『上寺遺跡発掘調査報告書』(松阪市教育委員会、1981年)。
⑭ 奥義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」(『研究紀要』第２号、三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
⑮ 津田守一「神滝遺跡出土の異形局部磨製石器」(『歩跡』第三号、皇学館大学考古学研究会、1976年)。
⑯ 高見宜雄「Ｉ度会郡大宮町　樋ノ谷遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年)。
⑰ 註⑭に同じ。

⑱ 伊勢野久好ほか『天花寺山』（一志町・嬉野町遺跡調査会、1991年）。
⑲ 吉澤良「Ⅶ　名賀郡青山町　勝地大坪遺跡（Ａ・Ｂ地区）、勝地大坪古墳群」（『平成３年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告―第１分冊―』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
⑳ 谷本鋭次「２．東庄内Ａ遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会、1970年）。
㉑ 井上光夫「１．一色山遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会、1970年）。
㉒ 伊藤裕偉『東櫟野２号墳・東櫟野遺跡発掘調査報告』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
㉓ 「野村遺跡」（『三重考古圖録』三重県教育委員会、1954年）。
㉔ 亀山隆『沢遺跡Ⅰ』（亀山市教育委員会、1988年）。
㉕ 新田剛『上箕田遺跡』（鈴鹿市教育委員会・鈴鹿市遺跡調査会、1993年）。
㉖ 仲見秀雄ほか『上箕田弥生式遺跡第一次調査報告』（三重県立神戸高等学校郷土研究クラブ、1961年）。
㉗ 大場範久ほか『上箕田弥生式遺跡第二次調査報告』（鈴鹿市教育委員会・上箕田遺跡調査会、1970年）。
㉘ 小玉道明『井田川茶臼山古墳』（三重県教育委員会、1988年）。
㉙ 八賀晋『伊勢国鈴鹿関に関する基礎的研究　研究成果報告書』（1992年）。

〔参考文献〕

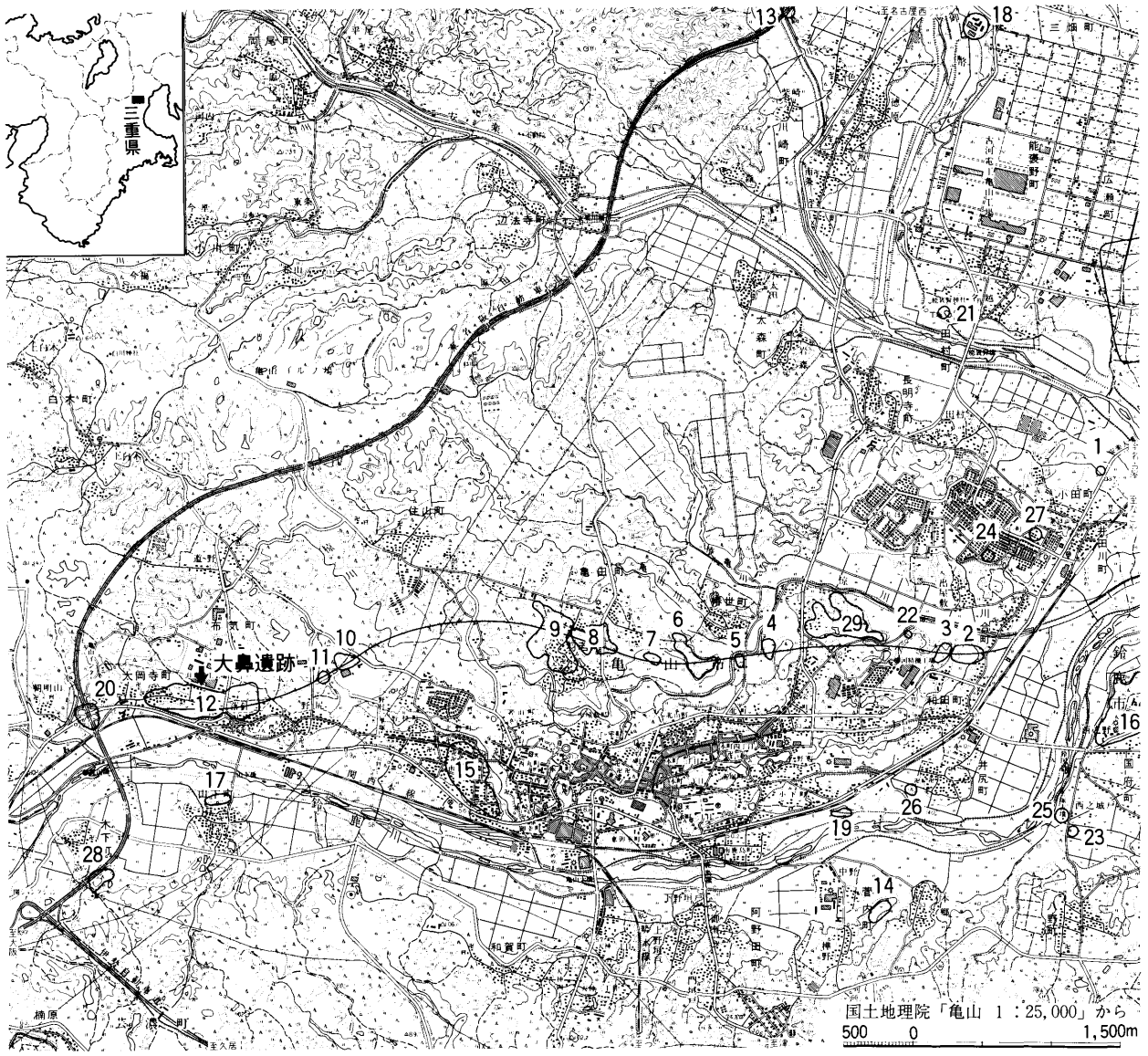
・『三重考古圖録』（三重県教育委員会、1954年）。
・昭和53年度日本考古学協会秋季大会三重県実行委員会編『三重の遺跡』三重県良書出版会、1978年）。
・三重の考古遺物編集委員会『図録　三重の考古遺物』（三重県良書出版会、1981年）。
・『三重の縄文時代』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
・『研究紀要』第２号（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。
・『鈴鹿市遺跡地図』鈴鹿市教育委員会、1987年）。
・『亀山市埋蔵文化財分布地図』亀山市教育委員会、1993年）。
㉔ 倉田直純ほか『地蔵僧遺跡発掘調査報告』（亀山市教育委員会、1978年）。
なお、「一般国道１号亀山バイパス建設事業」に係る、当報告書以外の埋蔵文化財の発掘調査報告書は、下記のとおりである。
第一分冊　駒田利治ほか『上椎ノ木古墳群・谷山古墳・正知浦古墳群・正知浦遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
第二分冊－１　駒田利治ほか『千本塚遺跡・大藪遺跡・堀越遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1993年）。
第二分冊－２　亀山隆ほか『椛屋垣内遺跡』（三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会、1994年）。
第三分冊－１　山田猛・岸田早苗『山城遺跡・北瀬古遺跡』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
また、各概要は次のとおりであり、大鼻遺跡に係わる概要はⅡ・Ⅲ・Ⅴ・Ⅶである。
『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財調査概要Ⅰ～Ⅴ』（三重県教育委員会、1985～1989年）。
『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財調査概要Ⅵ～Ⅶ』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1990～1991年）。

遺跡No.	中心杭No.	遺跡名	所在地	種別	時代	調査前地目	面積（㎡）全体	面積（㎡）調査面積	概要
1	No.4	谷山古墳	亀山市井田川町	古墳	古墳	山林	100	100	一辺13mの方墳。５世紀後葉の築造。木棺直葬の２主体部を検出
2	No.59～72	山城遺跡	亀山市川合町	集落跡	弥生～鎌倉	畑 水田 果樹園	7,500	2,500	古墳時代の竪穴住居16棟をはじめ、鎌倉時代の掘立柱建物等で構成される集落跡。
3	No.72～75	上椎ノ木館跡 上椎ノ木１号墳	亀山市川合町	城館跡 古墳	中世 古墳	山林	6,500	2,500	径18～24mの円墳。４世紀末の築造。粘土郭の主体部から四神鏡・石製模造品・勾玉が出土。
4	No.135～142	堀越遺跡	亀山市椿世町	集落跡	平安・鎌倉	畑	4,700	3,400	鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。
5	No.148.5～152	大坪遺跡	亀山市椿世町	集落跡	平安・鎌倉	畑	4,600	0	周囲より一段高い畑地に、土師器片が散布する。
6	No.158～169	正知浦遺跡	亀山市亀田町	古墳 集落跡	古墳～江戸	畑 果樹園 荒地	20,000	8,500	６世紀の横穴式石室を内部主体とする古墳２基と古墳時代から江戸初期にかけての集落跡。
7	No.169.5～169	千本塚遺跡	亀山市亀田町	集落跡	古墳～江戸	水田 荒地	36,000	1,230	奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。
8	No.196.5～200.5	大藪遺跡	亀山市羽若町	集落跡	古墳～室町	荒地	45,000	8,650	奈良時代の竪穴住居と掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。
9	No.214～224.5	椛屋垣内遺跡	亀山市羽若町	集落跡	古墳～室町	畑	28,000	9,500	平安時代から鎌倉時代の掘立柱建物群で構成される集落跡。
10	No.293.5～303.5	上野垣内遺跡	亀山市野村町	集落跡	古墳～室町	畑	8,000	0	茶畑とその周辺に土師器や近世陶器が散布する。
11	No.308～336	北瀬古遺跡	亀山市布気町	集落跡	縄文	山林 畑	64,000	600	縄文時代早期条痕文土器が出土。
12	No.338～369	大鼻遺跡	亀山市太岡寺町	集落跡	縄文～室町	水田	73,000	27,500	縄文時代早期の押型文土器と竪穴住居、弥生時代の方形周溝墓群、古墳時代から奈良時代の竪穴住居、鎌倉時代前後の掘立柱建物群で構成される集落跡であり、古代から中世にかけての複合遺跡。
合計　12　遺跡							287,400	64,480	

第１表　亀山バイパス地内埋蔵文化財一覧表

No.	遺跡名	所在地	種別	時代	備考
1	谷山古墳	亀山市井田川町	古墳	古墳	第一分冊で報告
2	山城遺跡	亀山市川合町	集落跡	縄文～鎌倉	当第三分冊－1で報告
3	上椎ノ木古墳・館跡	亀山市川合町	古墳・館跡	古墳・中世	第一分冊で報告
4	堀越遺跡	亀山市椿世町	集落跡	鎌倉	第二分冊－1で報告
5	大坪遺跡	亀山市椿世町	集落跡	鎌倉	試掘結果、遺跡周辺部
6	正知浦遺跡	亀山市亀田町	古墳・集落跡	古墳～江戸	第一分冊で報告
7	千本塚遺跡	亀山市羽若町	集落跡	古墳～鎌倉	第二分冊－1で報告
8	大藪遺跡	亀山市羽若町	集落跡	奈良～鎌倉	第二分冊－1で報告
9	粧屋垣内遺跡	亀山市羽若町	集落跡	奈良～鎌倉	第二分冊－2で報告
10	上野垣内遺跡	亀山市野村町	散布地	古墳～江戸	試掘結果、遺跡周辺部
11	北瀬古遺跡	亀山市布気町	散布地	縄文早期	第三分冊－1で報告
12	大鼻遺跡	亀山市太岡寺町	集落跡	縄文～室町期	第三分冊－2で報告
13	東庄内A遺跡	鈴鹿市東庄内町	集落跡	縄文早・中・後期	押型文土器等、1970年報告
14	東櫟野遺跡	亀山市阿野田町	集落跡	縄文早期	条痕文土器等、1992年報告
15	野村遺跡	亀山市野村町	散布地	縄文前期	前期土器等、1954年に紹介
16	北一色遺跡	鈴鹿市国府町	集落跡	縄文中・後期	住居や耳飾等、1968年調査
17	沢遺跡	亀山市山下町	集落跡	縄文～江戸	中期土器等、1988年に報告
18	地蔵僧遺跡	亀山市川崎町	集落跡	縄文～奈良	1978年に報告
19	小下遺跡	亀山市井尻町	散布地	縄文～鎌倉	晩期突帯文土器等を採集
20	太岡寺古墳群	亀山市太岡寺町	群集墳	古墳	6基、1964年調査
21	能褒野大塚古墳	亀山市田村町	古墳	古墳	全長90mの前方後円墳
22	釣鐘山古墳	亀山市川井町	古墳	古墳	径14mの円墳、箱式石棺等
23	西ノ野5号墳	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	全長30.5mの前方後円墳
24	城山古墳	亀山市みどり町	古墳	古墳	全長40mの前方後円墳
25	西ノ野大塚古墳	鈴鹿市国府町	古墳	古墳	全長63mの前方後円墳
26	井尻古墳	亀山市井尻町	古墳	古墳	全長54mの前方後円墳
27	井田川茶臼山古墳	亀山市みどり町	古墳	古墳	1988年に報告
28	木下古墳	亀山市木下町	古墳	古墳	全長30mの前方後円墳
29	柴戸遺跡	亀山市栄町	集落跡	古墳	1987～92年に調査

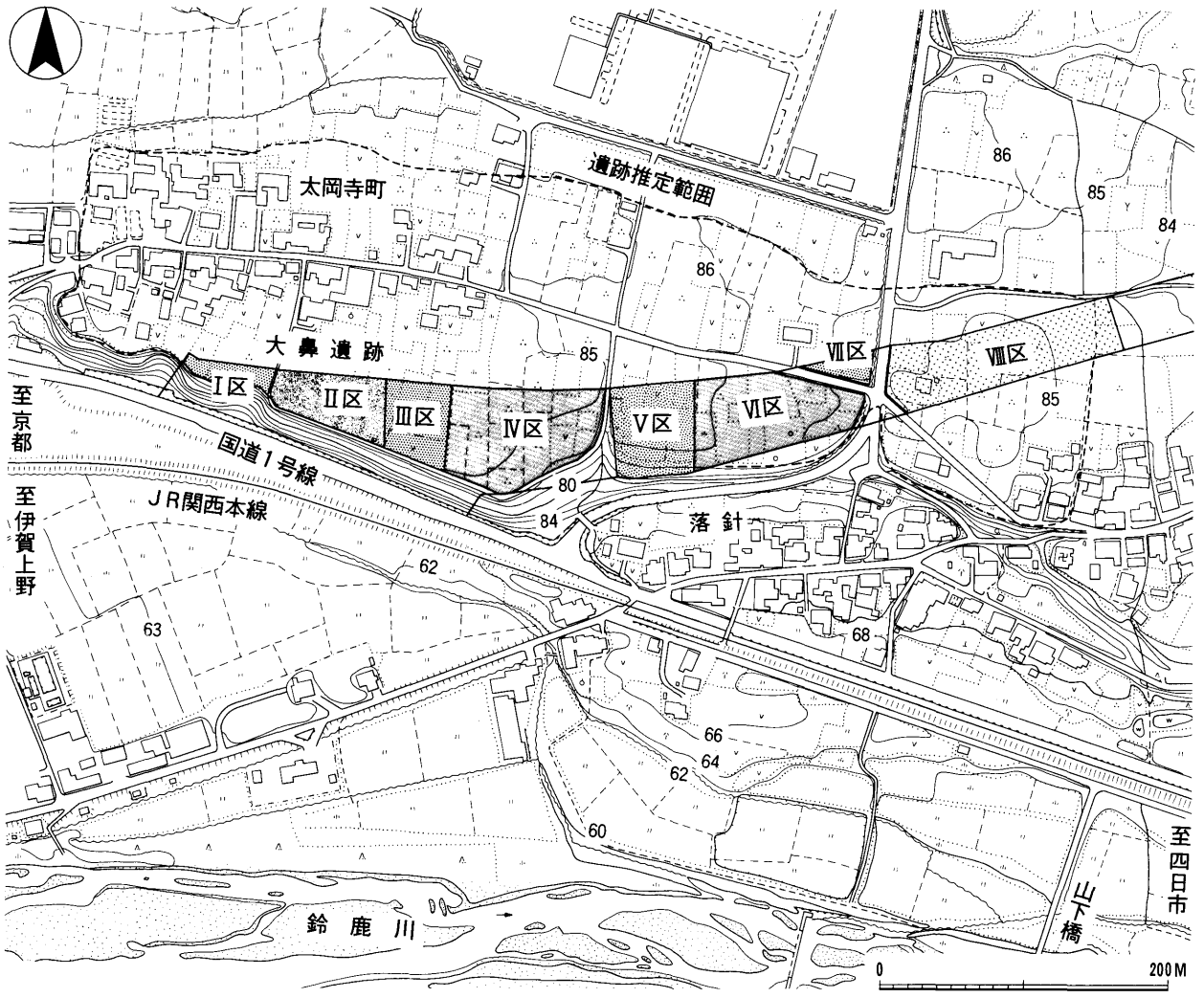
第2表　亀山バイパス周辺の主な遺跡一覧表



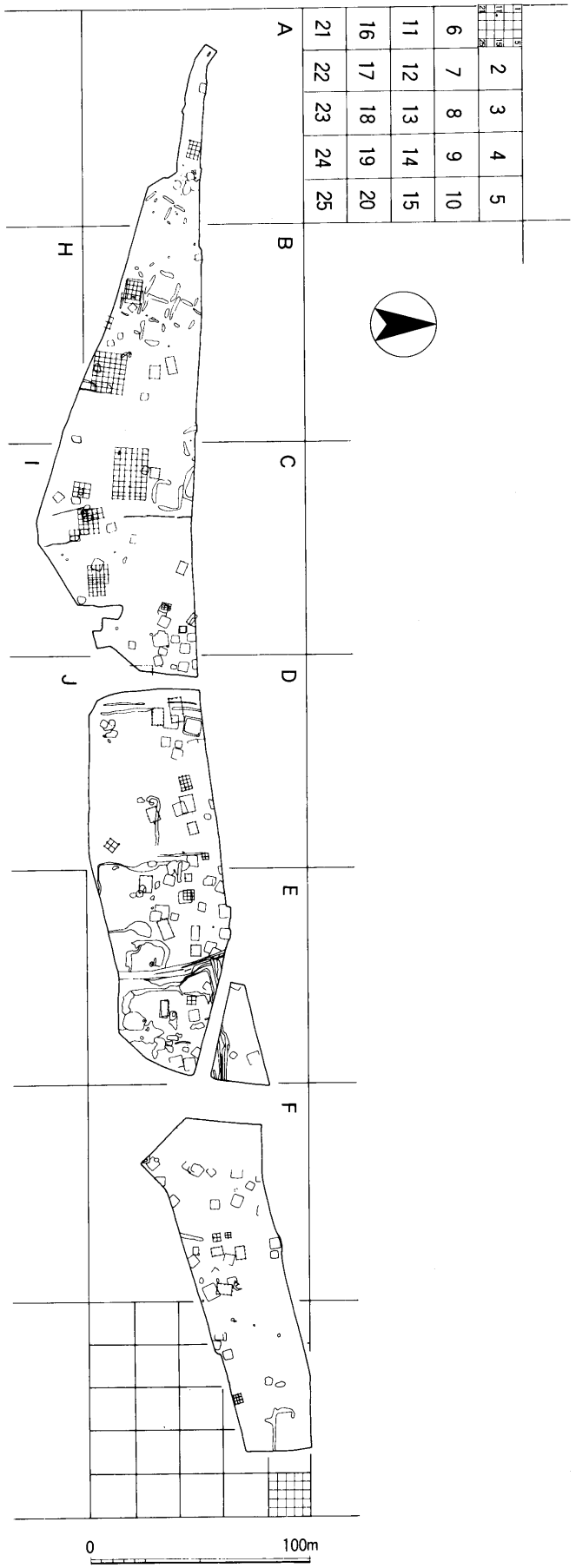
第1図　位置図（1：50.000）

	遺跡名	調査面積（㎡） 範囲確認調査	調査面積（㎡） 本調査	昭和59	60	61	62	63	平成元	2	3	4	5
1	谷山古墳	−	100	100									
2	山城遺跡	96	2,500	1,100範	1,000	400							
3	上椎ノ木館跡 上椎ノ木1号墳	−	2,500						2,500				
4	堀越遺跡	152	3,400			範	1,700範	1,700					
5	大坪遺跡	16	0			範							
6	正知浦遺跡	176	8,500			範	8,500						
7	千本塚遺跡	258	1,230				範		1,230				
8	大藪遺跡	360	8,650				範		8,650				
9	糀屋垣内遺跡	232	[9,500]				範		[3,000]	[6,500]			
10	上野垣内遺跡	88	0				範						
11	北瀬古遺跡	472	600	600	範								
12	大鼻遺跡	728	27,500		2,400範	7,500		11,100		6,500			
合計		2,578	54,980 [9,500]	1,800	3,400	7,900	10,200	12,800	12,380 [3,000]	6,500 [6,500]			
調査担当職員数				2	2	2	3	4	4 [1]	3 [1]	4 [1]	4	4

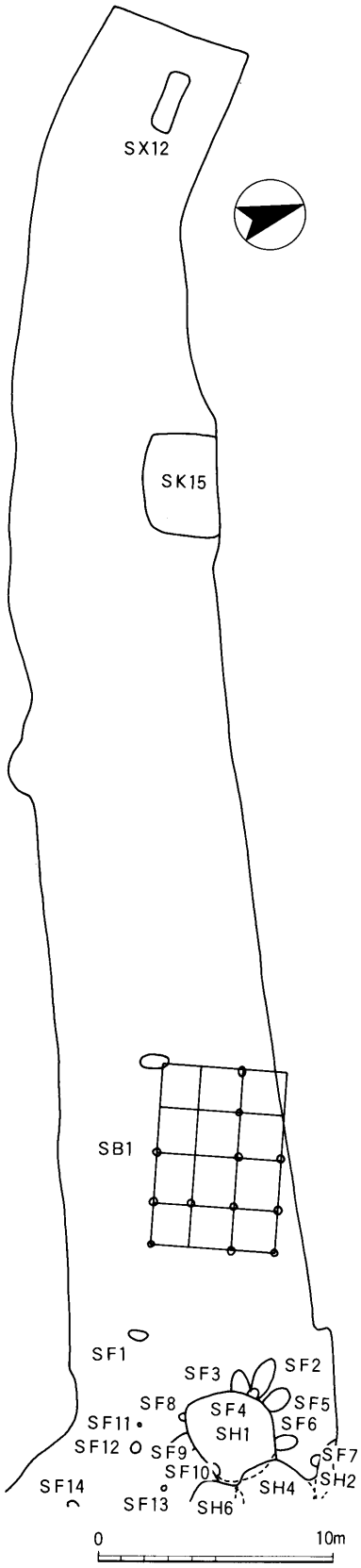
第3表　発掘調査経過表　　〔 〕は亀山市教育委員会が調査



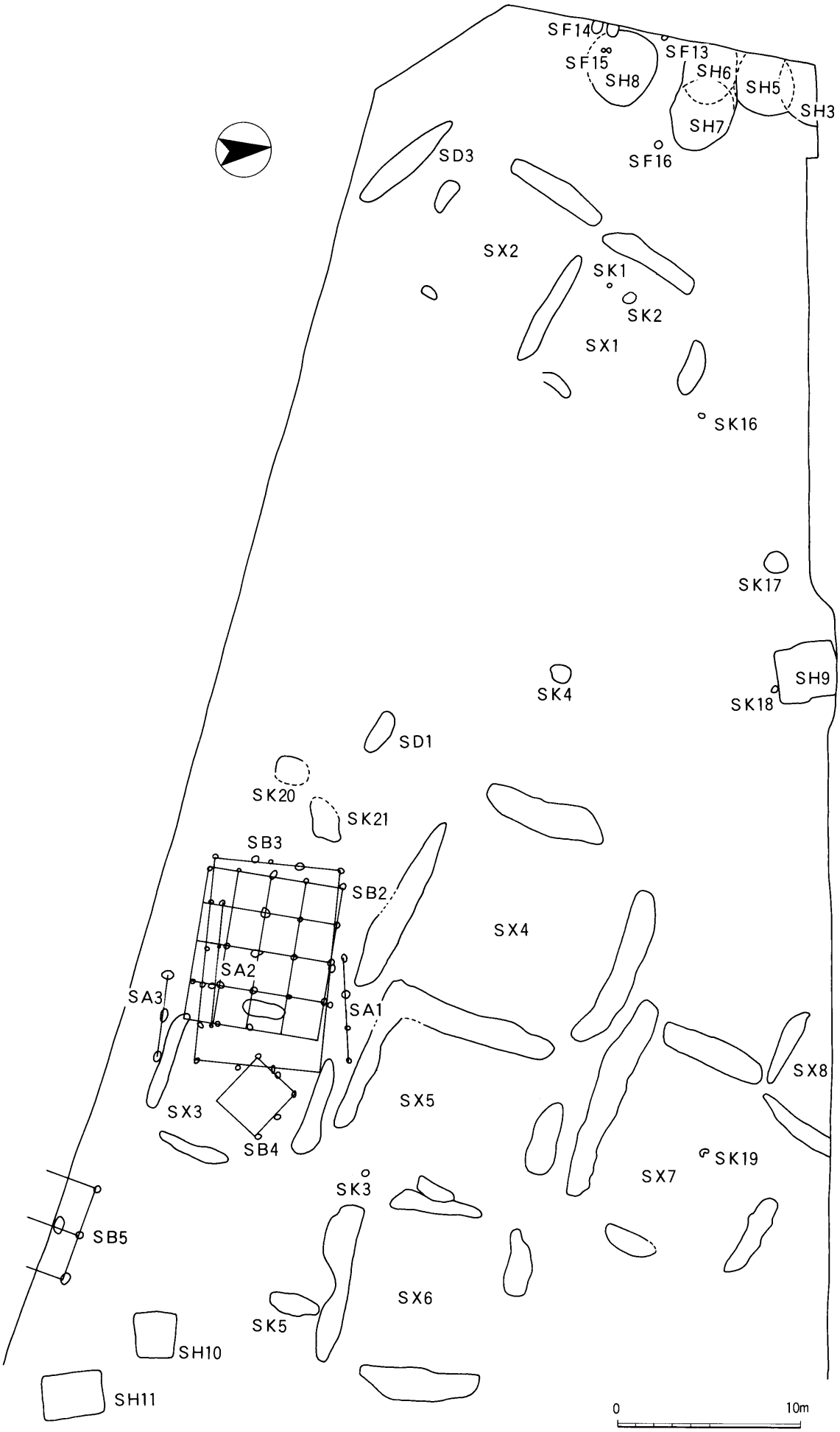
第2図　地形図（1：5,000）



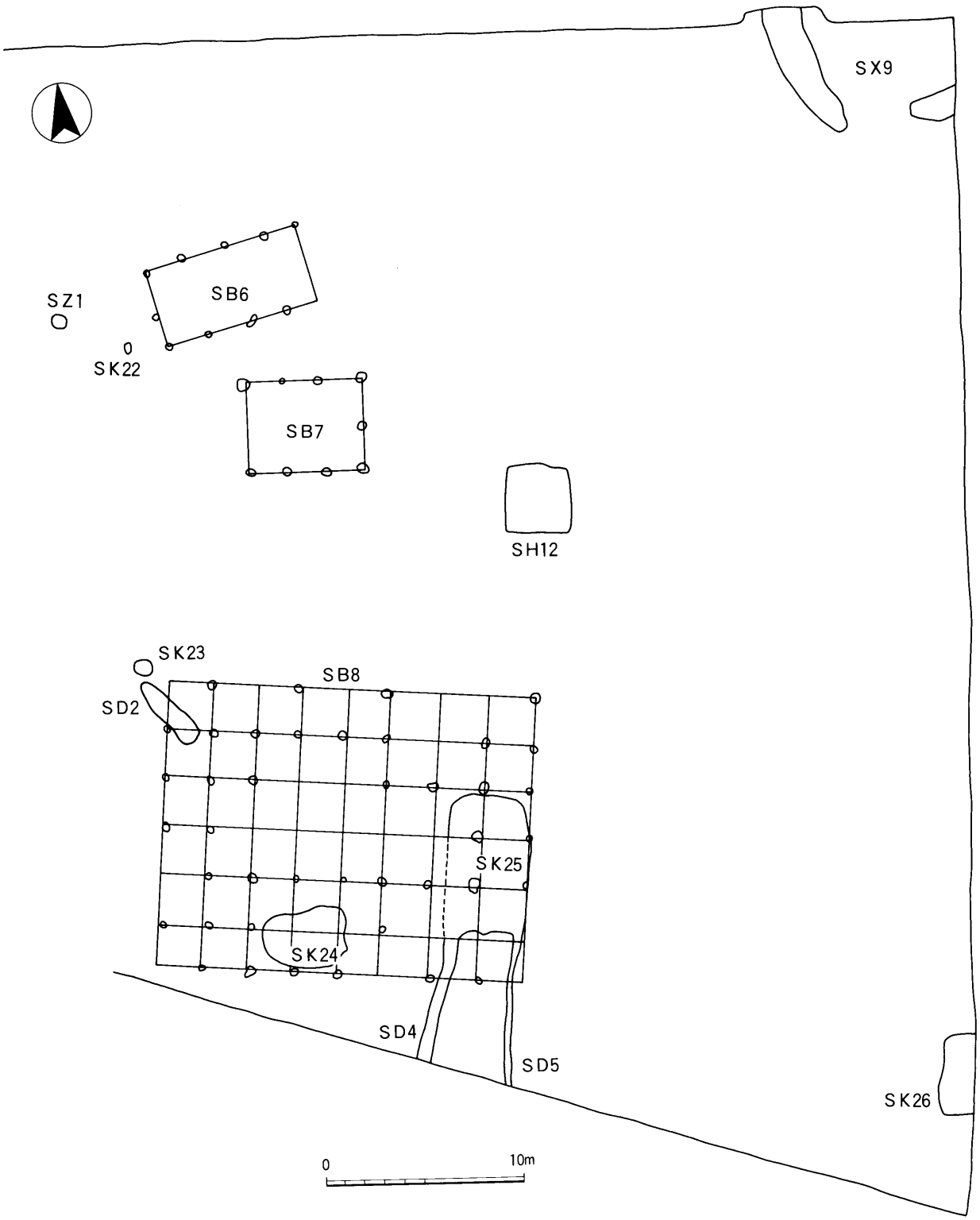
第3図　調査区全体主要遺構図（1：3,000）



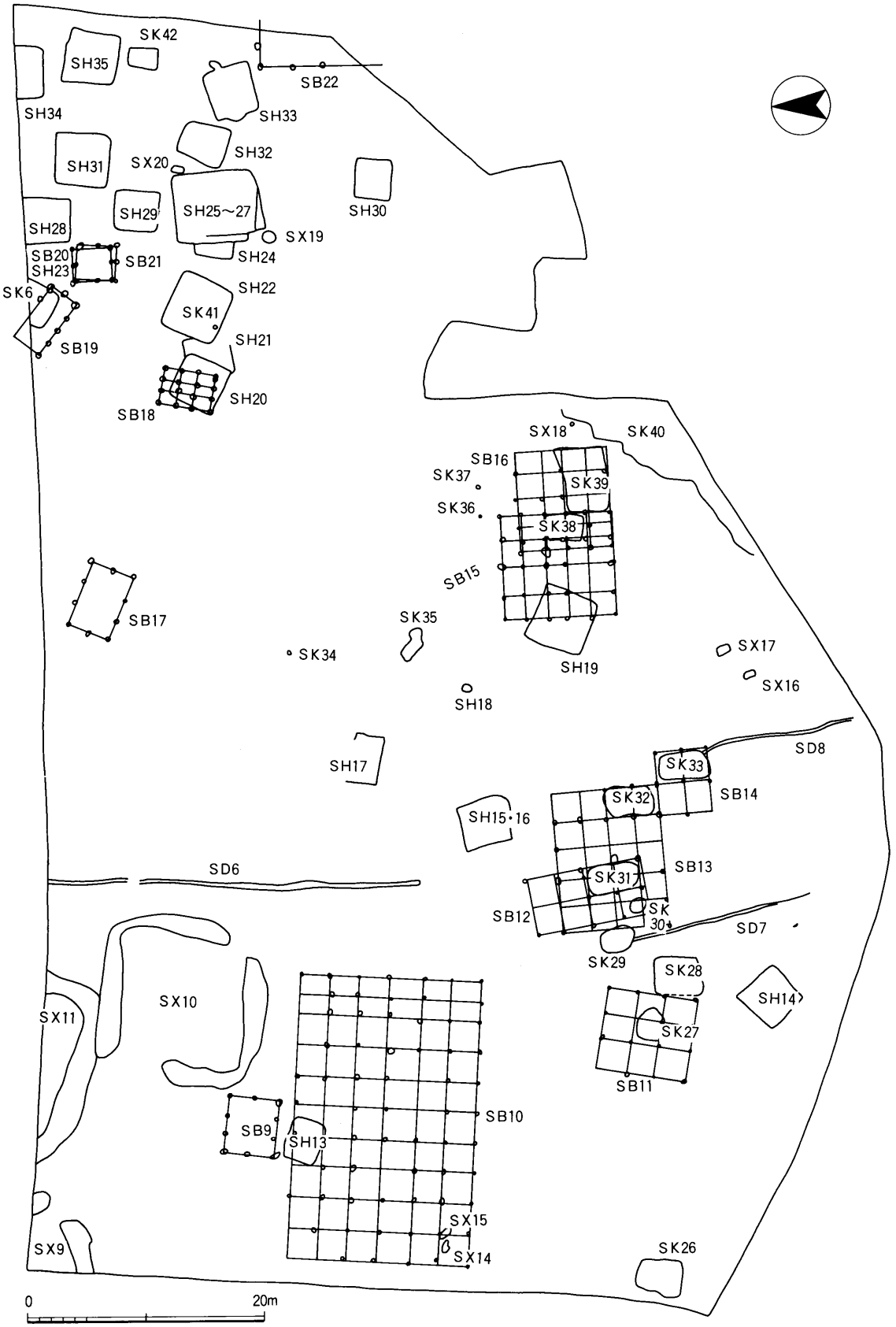
第4図　Ⅰ区主要遺構図（1：300）



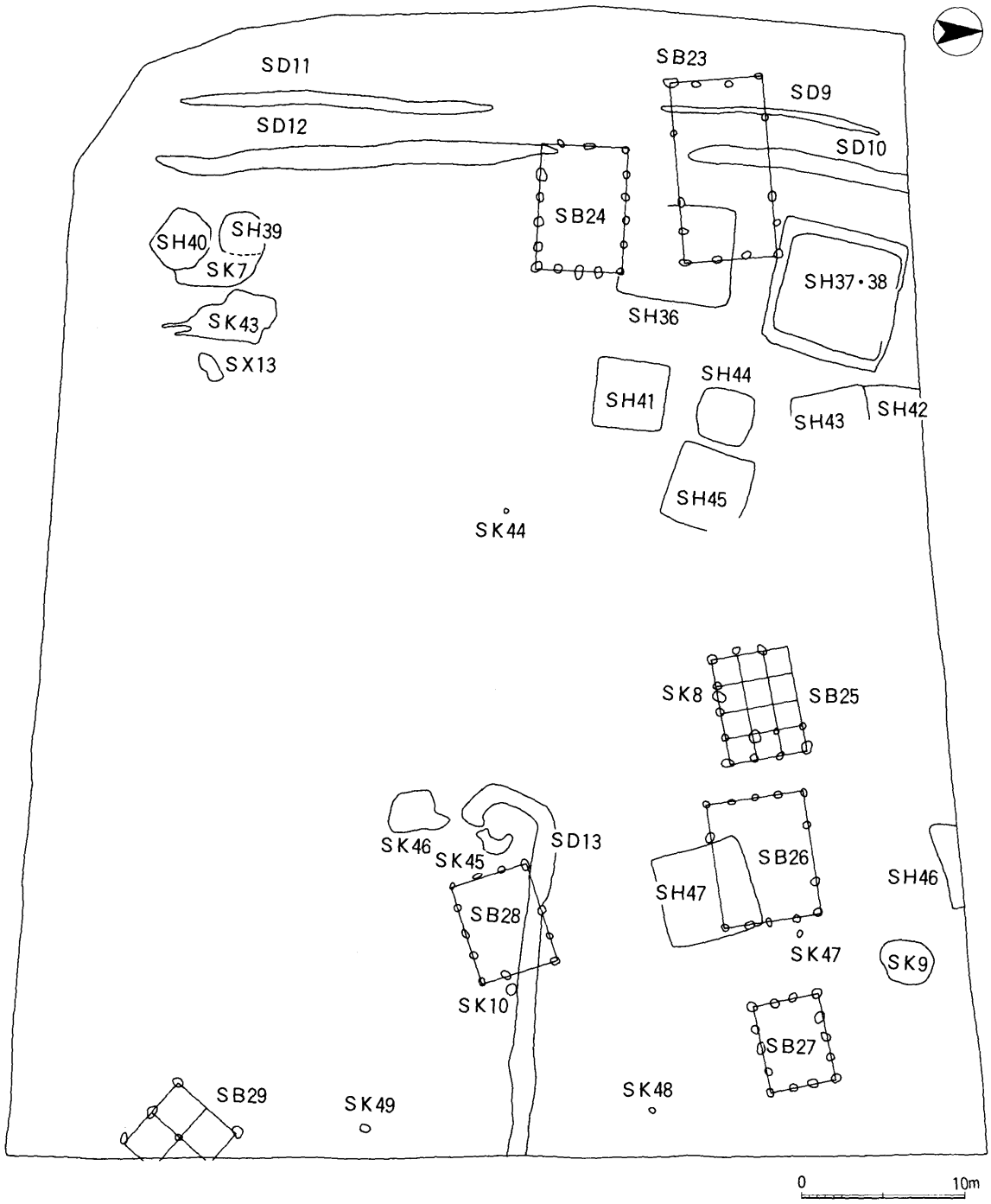
第5図　Ⅱ区主要遺構図（1：300）



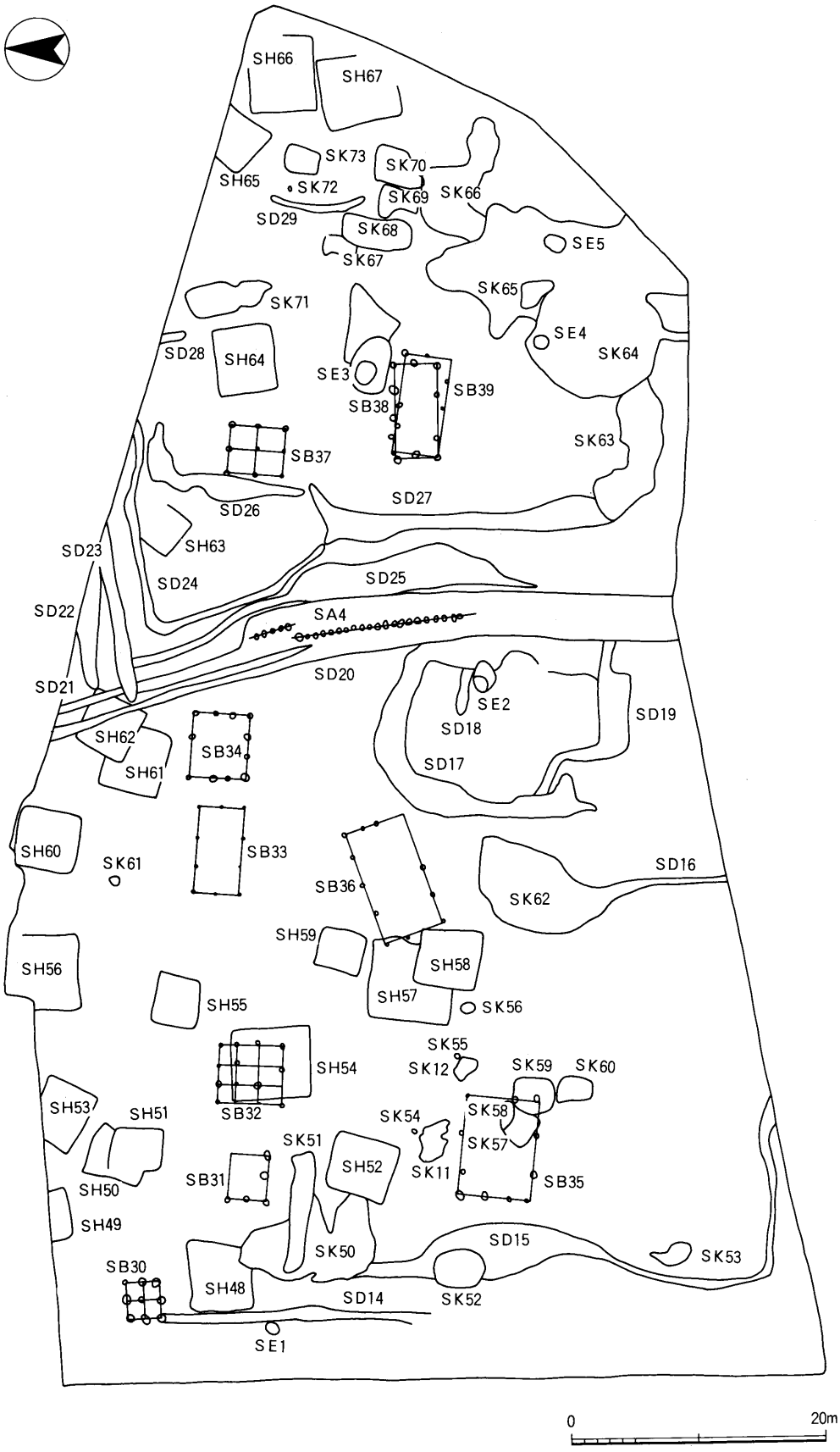
第6図　Ⅲ区主要遺構図（1：300）



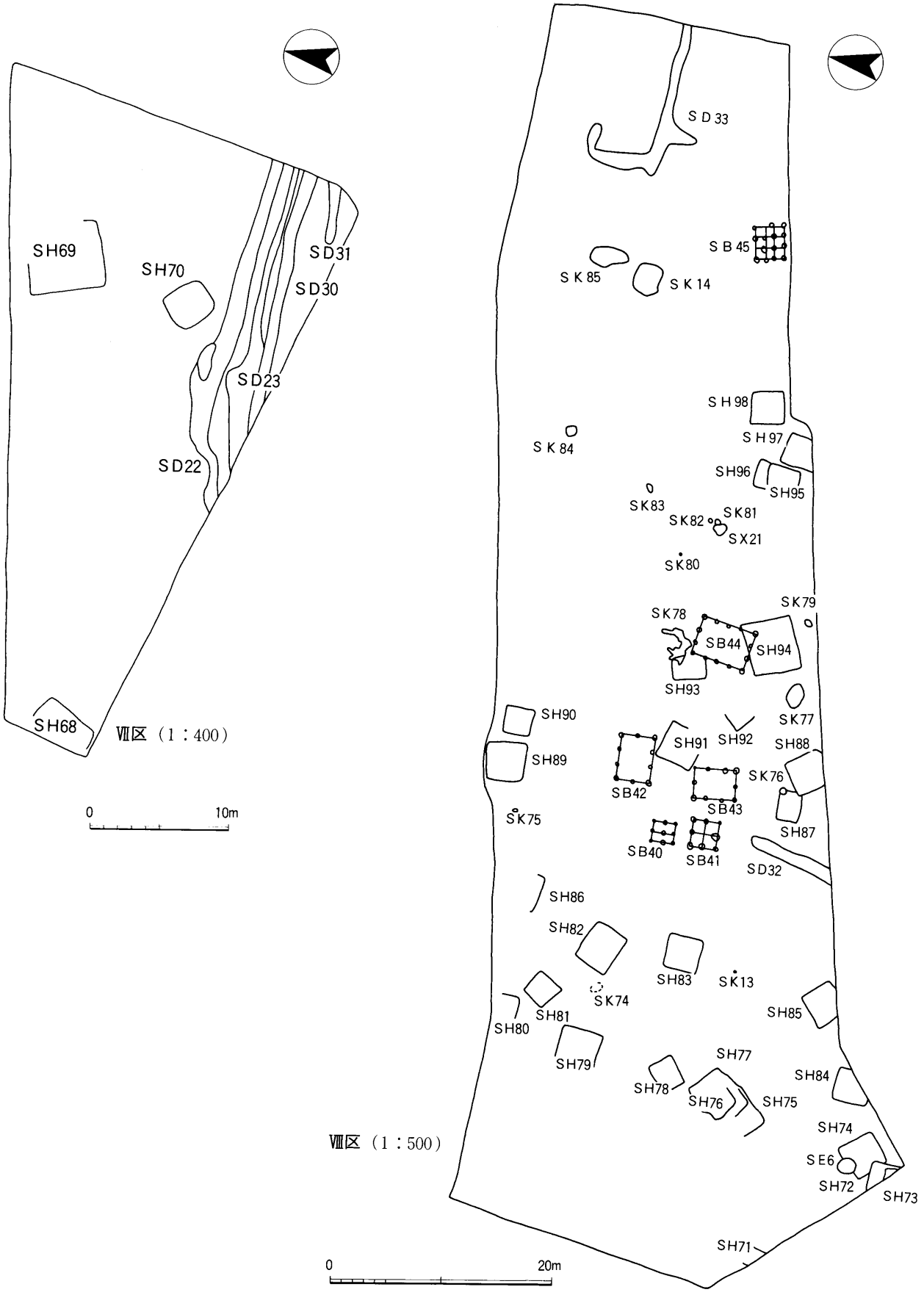
第７図　Ⅳ区主要遺構図（１：500）



第８図　Ⅴ区主要遺構図（１：400）



第９図　Ⅵ区主要遺構図（１：500）



第10図　Ⅶ・Ⅷ区主要遺構図

Ⅲ　縄文時代

1　遺　構

既述のように、大鼻遺跡は鈴鹿川北岸の上位段丘の南縁に立地する。したがって、地形的には同様な条件が東西に広がっており、調査も東西は640ｍに及んだ。ところが縄文時代の遺構は、早期初頭頃の竪穴住居と焼土坑が、Ⅰ・Ⅱ区にかけての東西13ｍ程の範囲で検出されたのみであった。一方、各時期の石鏃は少量ながら全域から出土した。

(1)　竪穴住居

竪穴住居は、径４ｍ前後の不正円形を呈する。壁はやや傾斜し、床はわずかに舟底形となる。柱穴はなく、10㎝内外の垂木穴が壁際に囲繞する。屋内炉や貯蔵穴はない。８棟を検出した。

ＳＨ１（第12図）　径約3.5～4.2ｍの不正円形を呈し、現存最深部は0.26ｍ程である。

床面はわずかに舟底状であり、壁は良く遺存する部分ではやや前傾（over hang）する。柱穴はないが、垂木穴が壁際に10㎝から数十㎝間隔で並んでいる。この垂木穴は、径が数㎝から二十数㎝、深さが10㎝内外であり、内傾気味のものが多い。南西部では、垂木穴としては位置や大きさが相応しくない小穴を除くと、垂木穴が1.1ｍ程の間隔を開けており、出入口かとも考えられる。屋内炉は付設されておらず、周溝や貯蔵穴等の付属施設もない。床面の中央に長径78㎝、短径52㎝の範囲で炭化物が薄く広がっていたが、床面は焼けておらず、炉跡ではない。

当期の竪穴住居としては遺存状態は良いが、東側はＳＨ４と重複し、北側と南側は焼土坑ＳＦ３～６・８～10が重複していた。竪穴住居相互の前後関係は、平面や土層断面で精査したにも拘らず不明確であった。しかし、焼土坑ＳＦ３～６・９・10は当ＳＨ１に切られており、ＳＦ８はＳＨ１の埋没後に営まれていた。

当該期遺物の大部分は、このＳＨ１の埋土からの出土である。出土遺物は土器と石器であり、埋土を中心に床面や垂木穴から出土した。西南部の床面に密着して少量の押型文土器片（39・42・43・92等）が出土した。また、垂木穴からは押型文土器（38・87）や凹石（179）が出土した。このほかにも埋土からは、表裏縄文土器[3]（２～４）や多数の押型文土器、及び石鏃等が出土した。

ＳＨ２（第13図）　南西部の1／4 程の壁を残す。北部は調査区北壁に接し、東部と南部はＳＨ３～５に重複している。このために全形は不明であるが、やはり不正円形を呈していたと考えられる。直径は4.4ｍ程と推測され、現存最深部は0.3ｍ弱である。

垂木穴はあまり確認できなかったが、床面には小穴が散在する。この小穴のいくつかはＳＨ３の垂木穴と推定されるが、やや大きいものは中世に属する可能性が高い。

当ＳＨ２は、南部で焼土坑ＳＦ７を切っているが、ＳＦ７からの出土遺物はない。

ＳＨ２の床面からは、押型文土器片（98）が出土した。また、平面的に見て確実にＳＨ２である西半部の埋土からは、押型文土器片（24・34・35・68）と尖頭器（108）等が出土した。一方、ＳＨ３と重複する部分からは、表裏縄文土器片（１）や押型文土器の底部片等（22・23）、及び石鏃が出土した。

ＳＨ３（第13図）　調査区北壁に接して南東部が残存するのみであり、西部はＳＨ２と、南部はＳＨ５と重複している。直径は4.3ｍ程と推定され、現存最深部は約0.4ｍである。

垂木穴がわずかに残存するが、壁を失っている部分では、その平面形も不確実である。床面の小土坑類は、後世のものの可能性が高い。

既述のように、ＳＨ２との重複部分から、表裏縄文土器片（１）や押型文土器片が出土した。しかし、

ＳＨ２とＳＨ３の前後関係は不明であり、いずれの土器片も床面から遊離していた。

ＳＨ４（第13図）　西半部を残すのみであるが、不正長円形を呈するものと推定される。『概要Ⅲ』段階では、ＳＨ４やＳＨ５とした部分が一体となって１棟の竪穴住居であると推定した。しかし再考の結果、当初案の可能性も残るが、残存する壁の形状や床面に散在する垂木穴らしい小穴の分布状況から、各々別な竪穴住居が重複したものと理解しておく。長径は約3.5ｍ、短径は約2.8ｍと小規模なものが推定され、約0.4ｍの深さを残す。

北東部には壁柱穴と重複して、幅十数㎝、深さ３㎝程の周溝状の小溝が認められた。これは、垂木を据え付けるための掘形を布掘りした結果とも推定される。垂木穴は、やはり径数㎝から十数㎝、深さ20㎝以内の小穴である。近接する所と数十㎝の間隔が置かれている所まであり、不規則である。床面はわずかに舟底状を呈するが、炉等の施設はない。

ＳＨ５とは重複しない西部の埋土から、押型文土器片（21・27）や土偶（107）等が出土した。しかし、これらは床面から浮いており、埋没過程で廃棄されたものと考えられる。

ＳＨ５（第13図）　東部と南東部が残存するのみであるが、やはり不正円形の竪穴住居である。直径は3.4ｍ前後と推定され、現存最深部は0.45ｍである。既述のように、ＳＨ４と単一の竪穴住居を構成していた可能性もあるが、平面形や壁柱穴の配置状況等から、別々な竪穴住居と推定しておく。

垂木穴は径数㎝から十数㎝であり、数十㎝の間隔を保っている。垂木穴の多くは竪穴住居の中央に向かって傾斜している点も他と共通している。床面はわずかに舟底状を呈しており、炉等の施設はない。

ＳＨ６（第13図）　この付近は後世の撹乱が著しく、西部と南部が残存するのみだが、不正長円形の竪穴住居と推定される。長径は4.4ｍ、短径は2.8ｍ程と考えられ、現存する最深部は0.35ｍである。

垂木穴はやはり径10㎝内外で内傾する例が多く、30～80㎝間隔に不規則に並ぶ。これ以外に付属施設はなく、重複する土坑や小穴は後世の可能性が高い。

ＳＨ７（第13図）　西部がＳＨ６と重複し、東部でも後世の小土坑等に破壊されているが、南北径3.2ｍ程の不正円形を呈する竪穴住居と推定され、現存最深部は0.4ｍ弱である。

やはり垂木穴は径10㎝内外のものが不規則に、疎らに並んでおり、内傾するものと直立するものとがある。床面は、中央部が数㎝深い舟底状を呈する。

西に接するＳＨ６との前後関係は不明であり、両者共に上部は後世の撹乱を受けている。埋土からは石鏃（110・114・124・127・130・151）やスクレーパー（154）、磨製石斧（175）が出土した。

ＳＨ８（第12図）　唯一他の竪穴住居と重複することなく、南端に営まれた竪穴住居である。台地の南縁に近いためか流失が激しく、南部は本来の平面形を失っているが、やはり不正円形を呈していたと推定される。現存の東西径は約4.2ｍ、深さは0.2ｍ程である。

垂木穴は、径十数㎝以下のものが疎らに少数遺存したが、北西部では20㎝程の間隔で並んでおり、本来のあり方を残しているものかと考えられる。床面は、中央が10㎝程低い舟底状を呈している。

西半部の床面で焼土が確認されたが、これは、ＳＨ８に破壊された焼土坑（ＳＦ15）の底部の残存したものと推定される。一方、南西部に接する焼土坑（ＳＦ14）との前後関係は不明である。石鏃（128・131・148）が出土した。

(2)　焼土坑

底面や壁面の焼けた土坑群や焼土そのものが、押型文土器等を出土した竪穴住居（ＳＨ１～８）に重複あるいは近接して、合計16基が検出された。

押型文土器を出土した例（ＳＦ２・10）や石鏃を出土した例（ＳＦ３・５）、竪穴住居に切られている例（ＳＦ３～７・９・10・15）以外は、所属期を特定する直接的な根拠を欠く。しかし、竪穴住居の周辺のみに集中することから、焼土類は全て当該期の焼土坑である可能性が高い。

類例から[2]、平面三角形の底辺付近は開口して焚口となり、中央部には天井が張られ、平面三角形の頂点部分がまた開口して煙出しになる「煙道付炉穴[3]」であったと推定される。しかし、当遺跡の例は全般的に残りが悪く、必ずしも全てが同様な形態であっ

たとは断定できない。[4]

ＳＦ１（第11図）　当該期の遺構群中にあっては最も南西に位置し、現状では台地南縁が40cm程に迫っている。南北78cm、東西42cm、深さ16cm程の浅い土坑となって遺存した。この内側のほぼ全面と東部にかけて焼土化しており、焼土坑の底部だけが残存したものと考えられる。

遺構の重複や出土遺物はない。

ＳＦ２（第12図）　ＳＨ１の北西に位置し、長軸を北西方向に向ける。焼土は、長さ110cm、幅65cmの長円形の範囲で残存する。この焼土の北西部は長さ76cm、幅46cm、深さ5.5cmの土坑が南東部を開口するような形で一段深くなっており、炭化物や焼土塊が混入していた。さらに焼土より一回り外側も土坑状を呈している。この部分の長さは南端がＳＦ４と重複するために不明だが、幅は最大部で100cmあり、深さは3.5cm程である。おそらく、この外側の土坑状部分も含めて１基の焼土坑の底部であったものと考えられる。また、ＳＦ４とは一連の遺構であった可能性もある。

埋土からは、炭化物や焼土塊に混じって正格子押型文土器の小片（35）が出土した。ＳＦ４との前後関係は不明である。なお、中世と推定される小穴に一部を破壊されている。

ＳＦ３（第12図）　ＳＨ１に東接し、ＳＦ４の南に位置する。東西に長軸を持つが、長さは97cmを残すのみであり、幅は70cm、深さは10cmである。焼土はこの内の北東部にのみ残り、埋土には東部を中心に炭化物が認められた。

埋土からは遺物は出土しなかったが、東部はＳＨ１に破壊されている。また、北辺では中世らしい小穴にも切られている。

ＳＦ４（第12図）　ＳＨ１に東接し、ＳＦ２・３・５に囲まれたように位置する。三角形の頂部のみが残存し、この中央が焼土化していた。長さ48cm、幅54cm、深さ7.5cmを残していた。

幅72cm、深さ10cm程の土坑状凹みで連結した状況で検出されたが、前後関係は不明である。既述のように、ＳＦ２とは一連の遺構であった可能性もある。ＳＨ１や中世と推定される小穴に破壊されている。

出土遺物はない。

ＳＦ５（第12図）　ＳＨ１の北西部、ＳＦ４の北部に位置する。北部が２段になった長円形を呈し、深い部分のほぼ全面が焼土化していた。現状では長さ116cm、幅72cm、深さ11cmを残していた。

やはりＳＨ１や中世らしい小穴に破壊されているが、石鏃（118）が出土した。

ＳＦ６（第12図）　ＳＨ１の北部に接する位置にある。ほぼ南北方向に長い長円形を呈し、長さ112cm、幅64cm、深さ10cmを残していた。焼土の残存する範囲は、北部では土坑のやや外側にも及ぶが、南部では幅が狭い。

ＳＨ１や中世らしい小穴に破壊されている。出土遺物はない。

ＳＦ７（第13図）　ＳＨ２の南部に切られており、現状では東西48cm、南北38cm、深さ15cmの方形土坑状を呈する。焼土は、土坑状部分よりもやや広い範囲に及んでいる。

ＳＨ２より新しいが、出土遺物はない。

ＳＦ８（第12図）　ＳＨ１の南西部に重複する。現状では、径45cmの範囲に焼土が認められた。

ＳＨ１よりも新しいが、出土遺物はない。

ＳＦ９（第12図）　ＳＨ１に南接し、ＳＦ８の東に並ぶ。北部をＳＨ１に破壊されているが、この種の遺構としては最も遺存状態が良い。南端を頂点とした略二等辺三角形を呈し、長さ101cm、幅78cm、深さ16.5cmを残す。焼土は遺構内の全面と北接するＳＨ１の床面にまで及んでいる。このＳＦ９の床面はほぼ平坦であるが、両側壁の遺存度の良い部分は前傾（over hang）している点が特徴的である。

ＳＨ１や後世の小穴に破壊されている。埋土には炭化物や焼土塊が混入していたが、出土遺物はない。

ＳＦ10（第12図）　ＳＨ１南東部の床面や壁面に認められた焼土である。焼土の範囲は長径72cm、短径45cmの長円形を呈する。

焼土坑がＳＨ１によって破壊され、底部の焼土だけが残存したものと推定される。大鼻式土器片（７）が出土した。

ＳＦ11（第11図）　ＳＨ１の南方に認められたものであり、浅い土坑の一部が焼土化していた。土坑は長径74cm、短径42cm、深さ2.5cmを残していた。焼土はこの中央にあり、範囲は径13cm程に認められた。

他の遺構との重複もなく、出土遺物もないため、厳密にはその所属期は限定できない。

ＳＦ12（第11図）　ＳＦ11とＳＨ８との間に位置する、長円形の焼土坑である。長径75㎝、短径46㎝、深さ６㎝程を残す土坑であり、これよりやや広い範囲に焼土が認められた。

出土遺物はなく、近接する小穴は中世に属するものと推定される。

ＳＦ13（第11図）　ＳＨ８とＳＦ９の間に所在する焼土であり、掘込みは残存しなかった。焼土の範囲は長径34㎝、短径20㎝の長円形を呈する。

近接する小穴は、中世のものと推定される。

ＳＦ14（第12図）　ＳＨ８の南西に接する位置にある。東西60㎝、南北38㎝、深さ５㎝の土坑が東に開口した状況である。焼土は東西100 ㎝、南北50㎝と東西に長い。

元来はＳＨ８と重複していたと考えられるが、両遺構共に削平が著しく、前後関係は不明である。

出土遺物はない。

ＳＦ15（第12図）　ＳＨ８の床面に残存した焼土である。ＳＨ８の中央より南西に片寄っており、当該期の竪穴住居（ＳＨ１～８）に屋内炉はないことから、重複した屋外炉の残欠と推定された。焼土の範囲は東西20㎝、南北10㎝と狭い。おそらく、焼土坑の最も深い部分だけが、ＳＨ８の建設に伴う掘削にも残ったのであろう。

ＳＦ16（第11図）　ＳＨ７の南東に単独で存在する焼土であり、特に土坑状を呈するものではない。長径70㎝、短径50㎝程の長円形を呈する。

焼土のみであり、重複関係もないため、所属期を特定できない。

（３）　その他

火を受けた少数の拳大の礫が、ＳＨ２付近の上層である中世の包含層で認められた。押型文期に類例の多い集石土坑の存在したことを示唆するものかとも思われるが、上層に散在するだけであるために確認には至らなかった。

2　遺　物

(1) 草創・早期

Ⅰ区からⅡ区にかけての13ｍ四方程に集中した、竪穴住居（ＳＨ１～８）や焼土坑（ＳＦ１～16）とその周辺から出土した、土器と土偶及び石器がある。

出土土器は、草創期末の表裏縄文土器の系統に属する一群と、早期初頭の押型文土器、並びに搬入品に大別される。しかし、大多数の遺物は遺構床面から遊離していた。また、各竪穴住居の前後関係も、精査したにも拘らず不明確であった。したがって、出土した位置や状況から新旧・併存関係を判断することは不可能である。そこで、以下では型式分類に従って記述する。

Ａ　表裏縄文土器（第14図の１～４）

外面全体と口縁部内面に、単節斜縄文を横位施文した口縁部片（１～４）である。内面の縄文は、判断できる２例（１・４）共、上部に２～３㎝施すのみである。これらの縄文は、硬くて比較的太い原体をやや強く撚ったものである。ただし、磨耗の激しい２片（２・３）は不詳である。特に３は、縄文ではなくて撚糸文の可能性も否定できない。しかし、回転縄文が磨耗してわずかに残ったものと判断した。

口縁部の形態は、口唇を面取りする例（１）と、丸棒状を呈する例（２～４）とがある。

面取りする１は、直線的な口縁部がやや外傾し、わずかに外反する。これらの特徴は、外面、口唇面、内面の順で施文したこととも関係していよう。口唇から２㎝以下の外面には、斜縄文の上に縄の側面圧痕を２条残す。器壁は１㎝程と厚手である。色調は押型文土器よりも明るく、茶褐色を呈する。焼成は良好だが粘性の乏しい胎土であり、押型文土器よりもやや脆弱である。

口縁部断面が丸棒状を呈する例（２～４）には、口唇施文はない。小片であるためか、回転縄文以外は認められない。２と３は、同一個体である可能性もある。これらは１のように脆くなく、暗褐色を呈

する。4は次第に薄くなり、1と2・3の中間的な色調・胎土である。

B　大鼻式土器（第14～19図の5～24・26～106、付編Ⅰの第6図の 105・106）

101 点を図示したが、このほかにも70点程の文様をわずかに残す細片がある。掲載例には押型文の見られない破片も含むが、報告者の型式分類によって押型文土器に含めた。これらは、当遺跡の『概要Ⅲ』等において提唱・検討した大鼻式に属する[5]。

図示した101点以外の文様を少しでも残す細片70点程も、全て大鼻式と推定される。全体で口頸部片は18点、底部片は1点ある。口頸部片から推定できる個体数は、13～19個体である。口径の推定できる21や24は33cm前後である。21の口・体部片と底部片（23）等から器高を復元すると約48cmになり、大川式以上に大変深く尖った器形になる。なお当型式は、全般的に暗茶褐色を呈し、石英や長石等の角砂粒を多く含むが、素地の粘土は粘性が強い。

口縁部は一般に短く屈折して開く。この屈折は必ずしも強くない例が多いが、中には水平近くまで屈折する例（21）や、強く屈曲する例（6・24）もある。一般に厚手であり、口唇は拡張する。口唇には例外なく回転縄文を施す。口縁部外面には、1点の例外（24）を除いて、縄を回転もしくは押圧施文している。口縁部外面への斜縄文は横位施文を原則としているが、例外（6）もある。これは「密接帯状施文[6]」の一種と考えられる。縄の側面圧痕の例は、横位に2・3条重ねている。斜縄文のみの例（5・6・8～10・16・21）と側面圧痕のみの例（7・12・14・15・17～19）、両者を併用した例（11）とがある。これらの縄文原体は太くて軟らかく、強く撚った単節が一般的である。

一方、24は市松文を横位施文した後、口唇部に複節縄文を回転施文し、次に内面のヨコナデを施している。さらに、頸部には複節の縄の先端刺突列を1条残している。当遺跡出土の押型文土器としては、唯一口縁部外面に押型文を施した例として、特異な存在である。当例は、『概要Ⅲ』で「B_3類」、研究集会[7]では大川a式の「古段階」としたものである。

口縁部内面には、強いヨコナデを施すことも特徴的である。施文順は、口縁部外面、口唇部、口縁部内面の順である。この施文順と内面の強いヨコナデによって、口縁部の外反と口唇部の内外、特に外方に拡張するという特徴が形成されている。

頸部は、一般に口頸部が屈折しているために屈折点としてのみ存在し、一定の幅を待った文様帯は未成立と考えられる。しかし、体部まで残る破片は1例（21）のみである。当例にも頸部文様はない。

体部は、底部まで一体として、原則的に押型文を縦位密接に回転施文する。ただし一部には、頸部直下、すなわち体上部に独自の文様を施す例がある。縄の側面圧痕を鋸歯状に施す例（26）がこれに該当する。側面圧痕を3条残す例（6）や縄の先端刺突列を2条残す例（27）も、これに該当する可能性がある。体部に斜縄文を施す薄手の細片（28）も密接帯状施文の例であろう。体部内面には、一般に指圧痕を残したままである点も特徴的である。全般に薄手であるが、厚手の例も含む。

体底部文様は、いわゆる枝回転文[8]を圧倒的主体とし、原体彫刻をした典型的な押型文である市松文や格子文が少量混じる。

枝回転文は、密接帯状施文例を除いて図示した体底部片81例（21～23・29～106）中の70例（37～106）、約86％を占める。図示しなかった文様を少しでも残す細片70点程も全て枝回転文と判断されることから、実際には90％以上を占めていたと推定される。ただし、この「枝回転文」としたものには、原体彫刻して凹文部を配した市松文との区別が困難な例も含んでいる。枝回転文は、その形状からA～Cの3類に細分した。ただし、この細分は便宜的なものであり、画然とした区分はできない。枝回転文A類（37～77・105・106）は、凹文部が密で深くて斜面を成し、この中央が小さく突起する。枝回転文B類（78～90）は、凹文部が疎らで浅く、やはり中央が小さく突起する。枝回転文C類（91～104）は、凹文部がやや小粒であり、やはり傾斜して中央部が小さく突起する。これらには、凹文部が比較的整然と並ぶC_1類（91～97）と、個性的なC_2類（98～104）とがある。

市松文（21～23・29～34）は、大粒で深く施文されている。原体を比較的整然と彫刻したもの（21～23・29～31・34）がある一方、必ずしも整然とせずに枝回転文に近い例（32・33）も見られる。図示し

た体底部片81例中９例であり、約11％を占める。しかし、図示しなかった70片程の細片も含めると、約６％となる。

格子文（35・36）は、例外的存在である。35は、４㎜程の正格子を細い凸線で表現した小片である。薄手で黄褐色を呈し、胎土や色調が他とはやや異なる印象を受ける。36は格子がやや乱れており、市松文の乱れたものに近似する。掲載例中では約２％を占めるが、実際には１％程度と推定される。

底部は、１例（23）出土したのみである。薄手で鋭角的に立ち上る尖底であり、乳頭状突起は未発達である。体部と同様に市松文を縦位密接施文するが、突起部までは施さない。内面には指圧痕を残す。

C　搬入土器（第16・19図の25）

直立する口縁部片であり、文様構成や胎土・色調が全く異なる例である[9]。直立して角頭形を呈する口唇部は無文らしく、内面も無文である。外面は、口唇部から１cm程下に縄の側面圧痕を横位に１条施している。これより上には右下り、下には左下りに斜縄文を施し、破片全体では矢羽根状を呈している。この回転縄文は条間が広く、半置半転に近い。焼成は良好で灰褐色を呈する。胎土は軽く、多孔質で粘性がない。長石や黒色の角小石を含む。このように特徴的な胎土の破片は、同一固体らしい無文の細片が他に１点確認されたのみである。

D　土偶（第18図の107）

ＳＨ４西部の、床面から20cm程遊離した埋土中、すなわち埋没途中の廃絶した竪穴住居跡に、無造作に廃棄された状況で出土した。

上半身を残しており、頭部や両腕先と下半身を欠損している。特別意図的に毀損したというよりも、欠損し易い箇所で自然に欠損した感が強い。頭部や両腕は緩く突出させるのみであり、特別な表現はないらしい。撫で肩であり、短い両腕を広げている。背面はナデによってやや凹凸がある。胸部や腹部はわずかに内湾し、乳房等の表現はなく、平滑に仕上げられている。腰部は良くしまり、細くなっている。腰部背面に直径 3.5 ～５㎜、深さ２㎜程の穴状部分が２カ所あるが、本来のものではないらしい。ひと握りの粘土塊から両腕や頭部を作り出しており、接合痕はどこにも見られない。

現存する高さは4.5cm、幅は5.8cm、厚さは1.7cmである。胎土には細砂粒を含み、暗茶褐色を呈する。焼成は良好で硬い。大鼻式土器よりも砂粒が目立たずに精良であるが、胎土・焼成・色調は、大鼻式と良く共通する。

造形的には未発達であるが、それなりに人体の特徴を良く表現したものである。他に土偶らしい破片は認められなかった。

E　石器（第20～22図）

尖頭器１点と石鏃類43点、スクレーパー３点、突錐１点、楔形石器[10]19点、磨製石斧２点、敲石２点、凹石１点、不明品１点の計73点を図示した。このほかに、チャートの剝片が少量認められた。しかし、石核は検出されなかった[11]。

尖頭器と石鏃類の大部分はサヌカイト製である。一方、これよりも大型品が多いスクレーパーや突錐はもっぱら青チャート製である。楔形石器には、サヌカイトとチャートの両方がある。磨製石斧は細粒砂岩と堇青石ホルンフェルス、敲石や凹石は砂岩製である。

これらは、縄文時代早期初頭頃の遺構や包含層から出土したか付近で採集されたものであり、所属期は当該期として問題ない。ただし、後述する大型磨製石斧（207）は、この地区だが包含層からの出土であり、やや異質な感を受けるため、その他の遺物として別に扱った。

尖頭器（108）　薄い横長剝片の片面周縁に調整加工を施しただけのものであり、一次剝離面をそのまま残す。先端と基部を欠損する。

ＳＨ２の床面から５cm遊離した状態で出土した。

石鏃（109～151）　すべて打製の無茎式である。平基式と凹基式があり、一次剝離面を残すものが多い。完成品（109～137）と未製品（138～144）、及び製作途中の欠損品（145～151）とがある。

完成品には、五角形鏃（109～118）と片足鏃（119）、正三角形に近いいわゆる三角鏃（120～125）、側縁が内湾して先端が小さく尖る平基式の例（126・127）、二等辺三角形を呈する例（128～131）、凹脚鏃（132・133）、側縁が外湾する例（134～137）がある。

いわゆる五角形鏃（109～118）は、大鼻式期頃に

特徴的である。平基式で幅広い例（109・113・118）から、緩い凹基式で細身の例（111・112・114～117）までがある。一次剝離面を残す例（112・113・117・118）もある。117 を除いてサヌカイト製である。

片足鏃（119）は、先端を欠損するほかは完形である。両面に一次剝離面を残している。両側縁は両面から、基部には片面から、調整を加えている。明らかに意図的に片足に製作された鏃である。

三角鏃とした例（120～125）には、全体形が正三角形に近い平基式の例（120～122）と、緩い凹基式の例（123～125）がある。120 や122 ・123 には、一次剝離面を残す。

側縁が内湾して先端が小さく尖る平基式の例（126・127）は、やや粗製の感も受ける。この側縁を外湾させれば、いわゆる五角形鏃の内の平基式で幅広い例に類似する。

二等辺三角形を呈する例（128～131）は全て平基式であり、正三角形を呈する例よりもやや大型である。128の片面は研磨ではなく、自然の節理面である。130や131には、一次剝離面を残す。

凹脚鏃とした例（132・133）は、やや大型で深い凹基式である。両面あるいは片面に一次剝離面を残している。

側縁が外湾する例（134～137）は、やや凹基気味の例（136）もあるが、平基式が一般的である。134 を除いてチャート製である。

未製品とした例（138～144）には、純粋に未製品と製作途中での欠損品とを含む。1点（144）のチャート製を除いてサヌカイト製である。138や140等は、製作途中で縦に折れたものであろう。141 は、石鏃ではなくて尖頭器の未製品の可能性もある。

製作途中の欠損品とした例（145～151）は、一応石鏃の類として扱ったが、形態分類はできないものである。150や151は、小型のリタッチドフレークの可能性もあろう

スクレーパー（152～154） 長さ23～54㎜のチャート製品である。斜めから剝離し、打撃面の反対側を刃部とするものである。152は小型で、刃部調整はない。153と154の刃部には粗い調整を施しており、153の一部には自然面を残す。

突錐（155） チャートの剝片の片面と背面以外の周縁を調整し、一端を断面三角形に尖らせたものである。立体顕微鏡で観察しても、回転方向あるいは軸方向の使用痕は確認できなかった。しかし、ドリルとするよりもオールの可能性が高いと判断される。

楔形石器（156～174） 一部（159・164～167・170・171）はサヌカイト製だが、そのほかはチャート製である。156は、裁断面を除いた側縁に刃部加工を持つ小型品である。157は、欠損面を除いた側縁に刃部加工を持つ。158や161・162・164・171は、2ケ1対の刃部加工を持つ典型的な例である。159は、1側縁に刃部加工を持つ欠損品である。160や165は、刃部らしくない両極剝離をもつ。163は両側縁に刃部を作り出している。166は両面調整してあり、尖頭器の欠損品の可能性もある。167も側縁に刃部をもち、尖頭器の可能性がある。168や169は、石鏃の未製品の可能性もある。170は、一部に自然面を残す両面調整剝片かとも思われる。172～174は、リタッチドフレークの可能性もある。172の側縁の一部には使用痕がある。173 には光沢がある。174はリタッチさえ不明瞭である。

磨製石斧（175～176） 175は刃部付近の剝離した小片であり、本来の大きさは不明である。凸刃の円刃である。細粒砂岩製である。176も刃部付近の剝片である。平刃の偏刃であったらしい。刃部は使用によって片側の損傷が激しく、縦斧であったことが知られる。幅は三十余㎜と推測され、大型品ではない。菫青石ホルンフェルス製であり、風化した表面は軟質な印象を受ける。

敲石（177～178） 直径47～70㎜の砂岩製円礫であり、周縁の一部に敲打痕が認められる。

凹石（179） 直径91㎜、厚さ20㎜の砂岩製円礫である。片面の中央には、直径二十余㎜、深さ5㎜の使用による凹部がある。

不明品（180） 細長い円礫の欠損品である。残存部の一部に擦痕が認められる。硬砂岩である。

（2） その他（第23～25図）

前述した草創・早期の遺物とは別に、縄文時代に属すると推定される遺物が調査区内に散在していた。しかし、これらに伴う遺構は確認されなかった。

石鏃（181～206） 当遺跡の調査は、東西640 m、

合計27,500㎡程に及び、第二次調査以後の主要遺構の埋土は全て篩掛けした。この結果、調査区内の各地点から26点の石鏃が出土した。しかし、篩掛けした遺構の多くは古墳時代以降の竪穴住居跡であり、石鏃に直接関連する遺構はない。なお、当遺跡は台地縁辺にあることから、遺構埋土に混入したもの以外の包含層にあった石鏃は流失した可能性が高い。

石鏃は全て打製の無茎式であり、重量は2ｇ以下である。ほとんどがサヌカイト製だが、チャート製も4点（189・190・193・198）ある。

形態上は、凸基無茎式（181・182）と平基無茎式（183～185）、凹基無茎式（186～206）に分類される。しかし、この分類の内にも多様な形態を含んでいる。技法的には、一次剝離面を残したままの例（181～184・186・197・200）が目に付く。

大型磨製石斧（207）　早期初頭頃の遺構群が集中していたⅡ区北西端から出土したが、層位的には中世の包含層であり、時期決定はできない。緑色凝灰岩製の両刃の直刃であり、頭部と刃部は激しい使用によって欠損している。特に刃部の欠損は偏っており、縦斧であったと推定される。

耳栓（208）　小型で中実の臼形耳飾りである。両側面と円周面は窪んでいる。無文であり、何も塗布されてない。部分的に欠損するが全形は保っている。直径19㎜、厚さ16㎜である。淡い黄土色を呈し、焼成は良好である。

有溝砥石（209）　平面は長円形、断面はカマボコ形を呈する、風化の著しい砂岩の上面に、数条の溝を持つものである。溝は断面がＶ字状であり、最大幅2.5㎜、最深部２㎜に達している。

剝片刃器（210）　基部に打面を残して縦に剝離し、薄い方の側縁に刃潰しをしたチャート製品である。全体形はナイフ形石器そのものであるが、刃部とするべき側縁に刃潰しを施し、反対縁は急角度で刃部とは考え難い。したがって、一応ナイフ形石器ではなく、剝片刃器としておく。縄文時代としても比較的早い時期の所産であろう。

後期土器（211）　外反する平縁の口縁部片である。外面は横位にヘラミガキが施されている。内面には、非常に細かい縄文が施され、この上に２本のやや太い篦描沈線が残る。暗黄灰色を呈し、黒色の細砂粒を含む。北白川上層式の新しい部分に相当するものであろう。

凸帯文土器（212）　剣先状に薄くなる口縁部のやや下った位置に比較的細い凸帯を貼付し、櫛状具によるＤ字形のキザミを施したものである。キザミの深さは、凸帯の高さの半分程に達している。凸帯より下はナデている。晩期後半の、いわゆる五貫森式に属する。　（山田　猛）

〔註〕

① 「表裏縄文土器」とは、広義には草創期の多縄文土器に含まれ、狭義には多縄文土器の末葉に位置付けられる、押型文土器や撚糸文土器に先行するもの、との立場に立って報告する。
　また当報告にもあるような、内面は口縁部のみに施文された例も、「表裏縄文土器」の終末期のものであり、押型文土器に先行するものとの立場から、特に区別せず「表裏縄文土器」に包括しておく。

②a　奥義次「第二編　原始」（『多気町史　通史』多気町、1992年）。
　b　河瀬信幸ほか「Ⅱ　鴻ノ木遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年）。
　c　小濵学・田村陽一「Ⅵ　鴻ノ木遺跡（第５次）」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1994年）。
　d　堀田隆長「30　三重県安芸郡美里村西出遺跡」〔『日本考古学年報』42（1989年度版）、日本考古学協会、1991年〕。

③ 下記文献のような「煙道付炉穴」と呼ばれるものがほとんどを占めると推定されるが、構造が不明確なものも多いため、一括して「焼土坑」と呼んでおく。
　原田昌幸「遊動と定住－縄文時代の初期定住－」（『季刊　考古学』第44号、雄山閣、1993年）。

④ 鴻ノ木遺跡でも、「煙道付炉穴」とは形態が異なるらしい焼土坑も確認されている。
　小濵学・田村陽一「Ⅳ.鴻ノ木遺跡（第５次）」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1994年）。

⑤a　梅澤裕・山田猛『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』（三重県教育委員会、1987年）。
　b　山田猛「押型文土器群の型式学的再検討－三重県下の前半期を中心として－」（『三重県史研究』第四号、三重県、1988年）。

⑥ 近畿・東海地方の押型文土器は一般に密接施文であるが、一部に異なる文様を帯状に施すものがあり、これを指した報告者の造語である（註⑤ｂの文献の60～62頁）。

⑦ 山田猛「大鼻式・大川式の再検討」（『研究紀要』第２号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）。

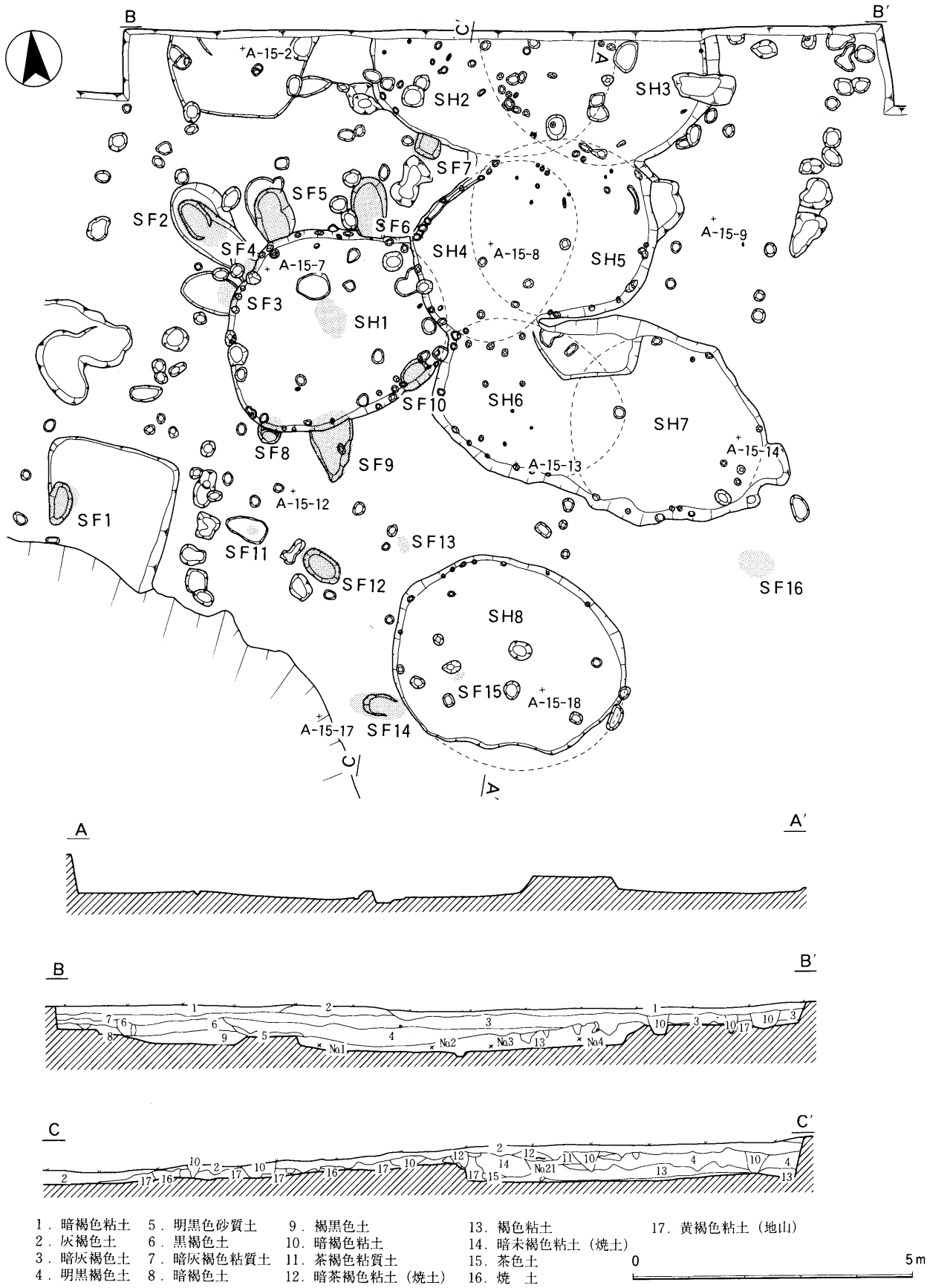
⑧　矢野健一「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」(『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年)の100～103頁。

⑨　富士山麓で出土する、いわゆる「軽捷な胎土」の例と類似する。しかし、「軽捷な胎土」であることをもって特定の土器型式に限定することは危険であり、あくまで産地の推定根拠とするに留めるべきである。事実、当例のような器形や文様構成を持った「軽捷な胎土」の例は、富士山麓においても管見による限り未確認である。

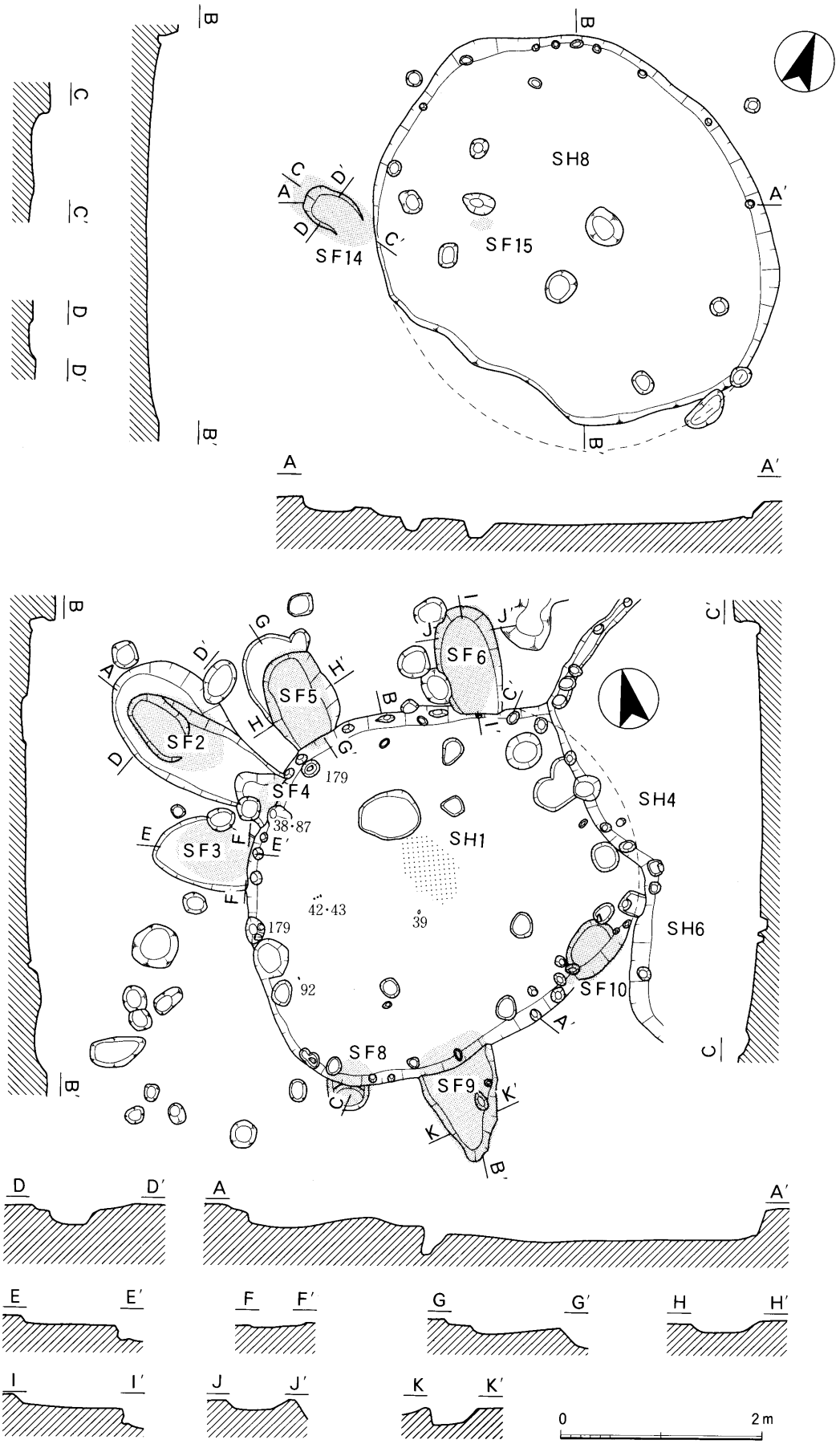
⑩a　岡村道雄「ピエス・エスキーユについて」(『東北考古学の諸問題』1976年)の77～96頁。

b　阿部朝衛「Ⅶ　ピエス・エスキーユ(楔形石器)」(『聖山』東北大学文学部考古学研究会、1979年)の153 ～159 頁。

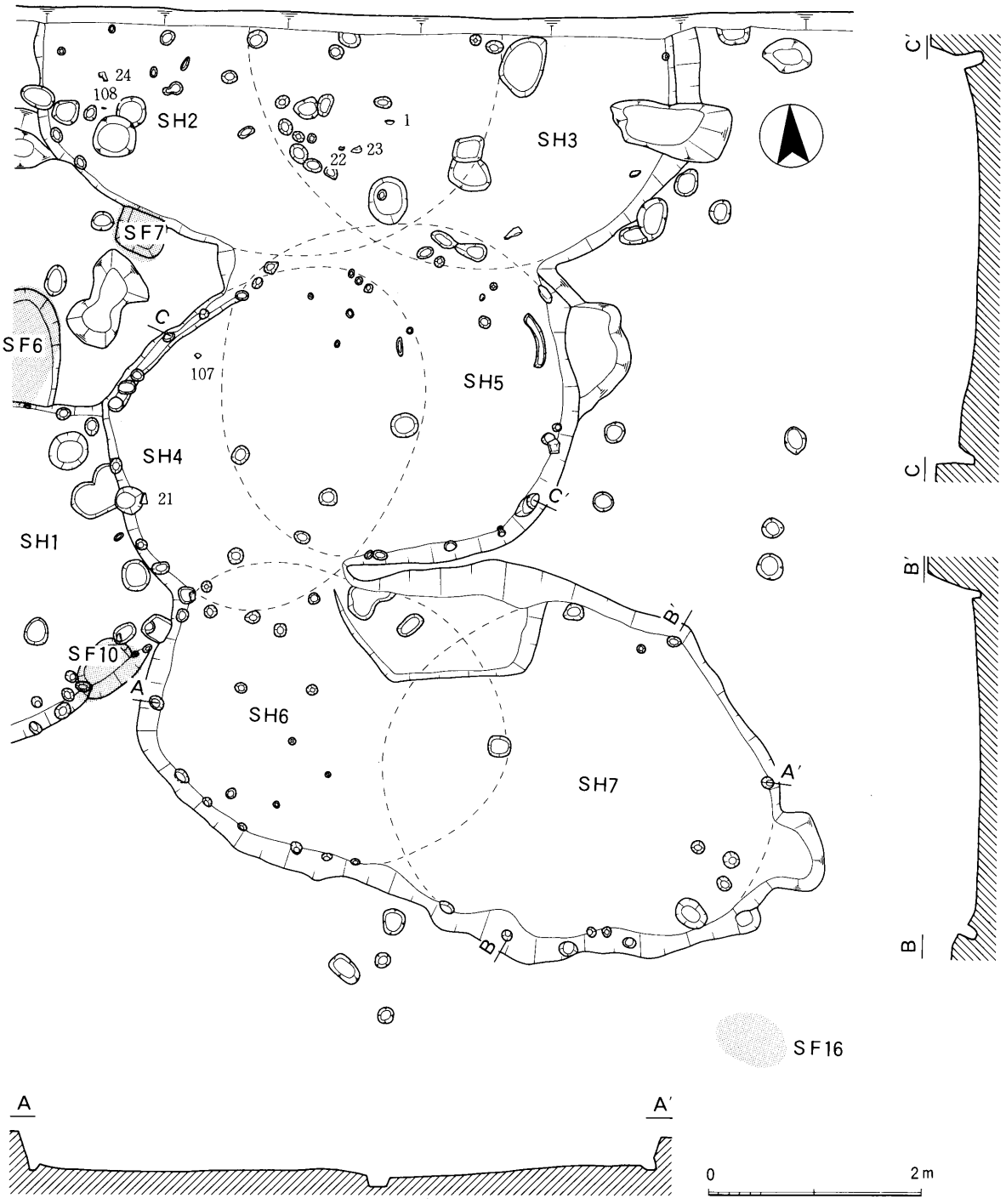
⑪　石器の観察や実測・トレースについても多くの方に御教示いただいたが、特に鈴木忠司・新田智子・新田剛・磯部克の各氏には格別の御指導・御協力をいただいた。ただし、もちろん文責は報告者にある。



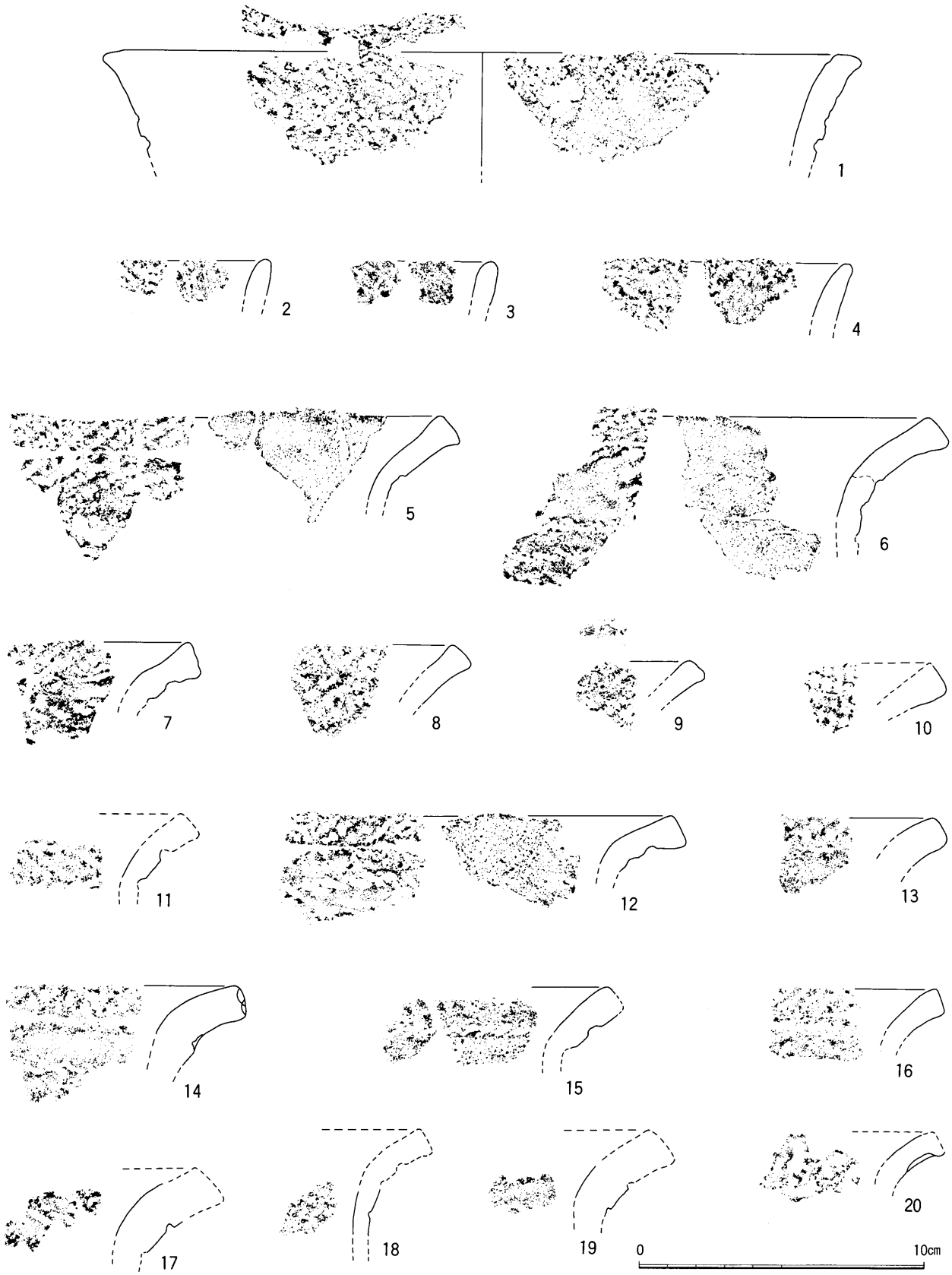
第11図　縄文時代遺構全体図（1：100）　水糸高はAとCが88.400m、Bが89.000m、北壁のNo.1～4は放射線年間線量測定箇所、濃い網目は焼土、薄い網目は炭化物、No.21は土器



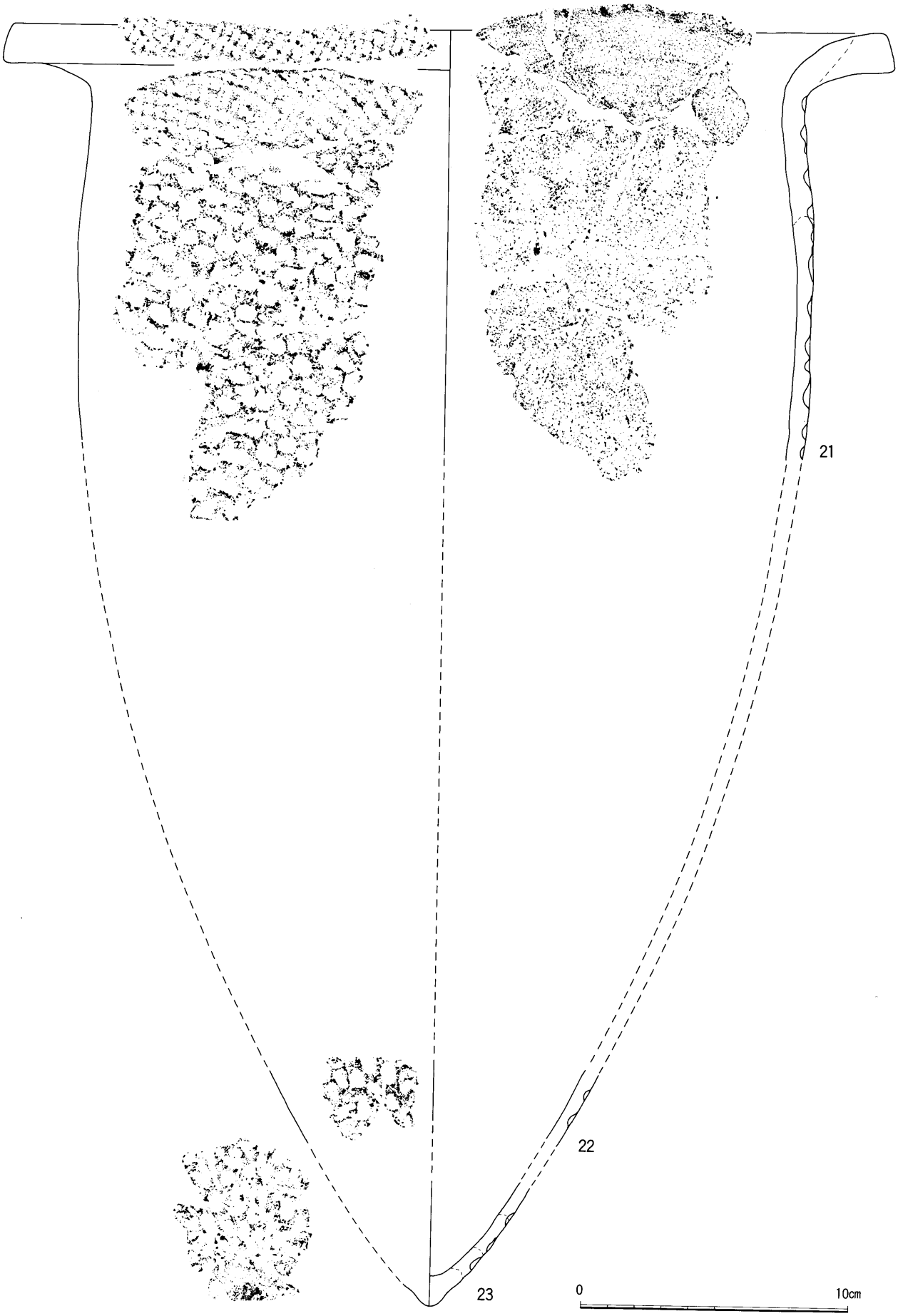
第12図　SH1・8、SF2～6・8～10・13実測図（1：60）　濃い網目は焼土、薄い網目は炭化物、数字は遺物番号、水糸高は87.800m、人工ケバは確実な後世の遺構



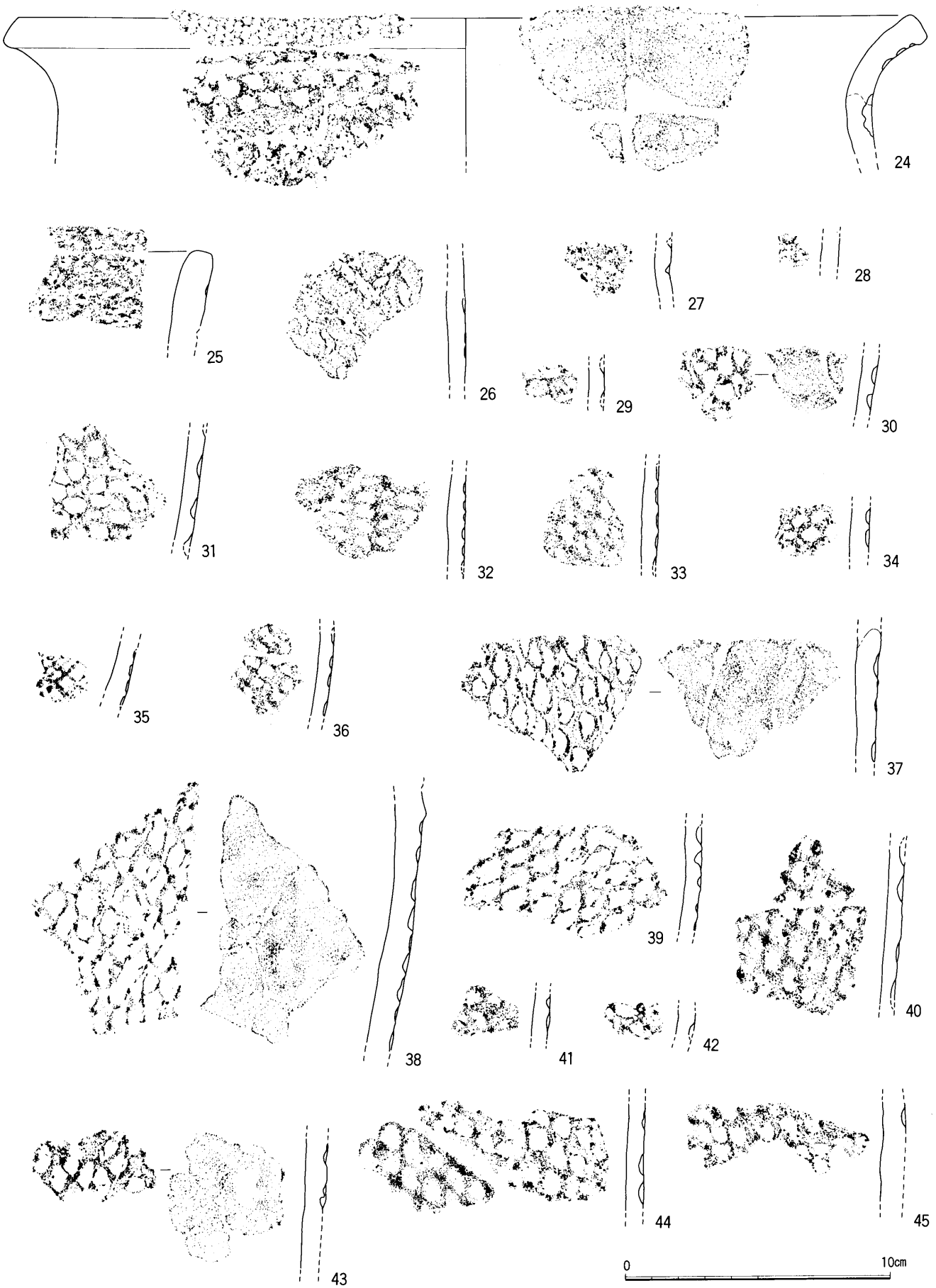
第13図　ＳＨ２～７等実測図（１：60）水糸高は 87.800m、網目は焼土、数字は遺物番号、人工ケバは調査区北壁と確実な後世の遺構



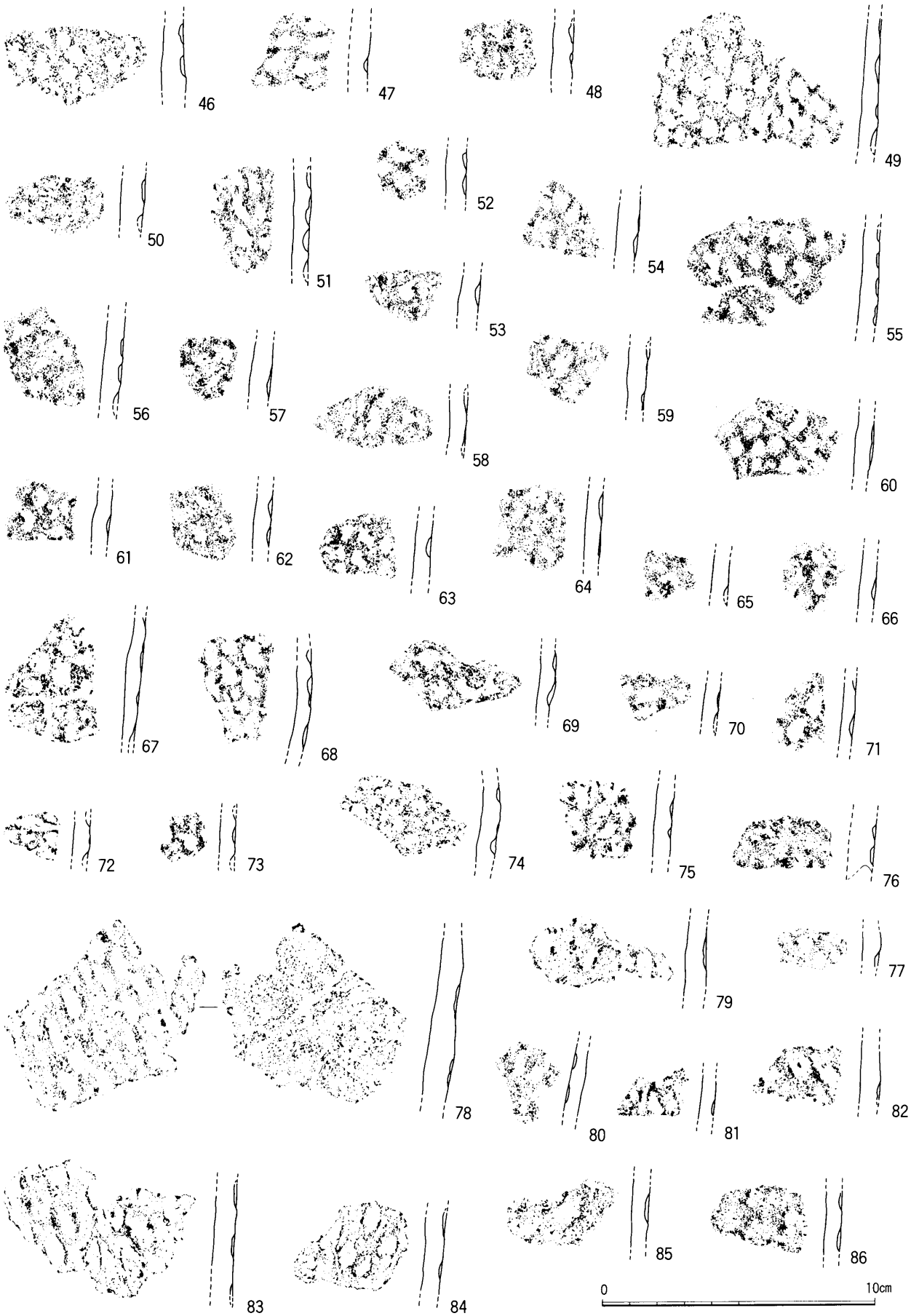
第14図　表裏縄文（1～4）・大鼻式土器拓影図（1：2）



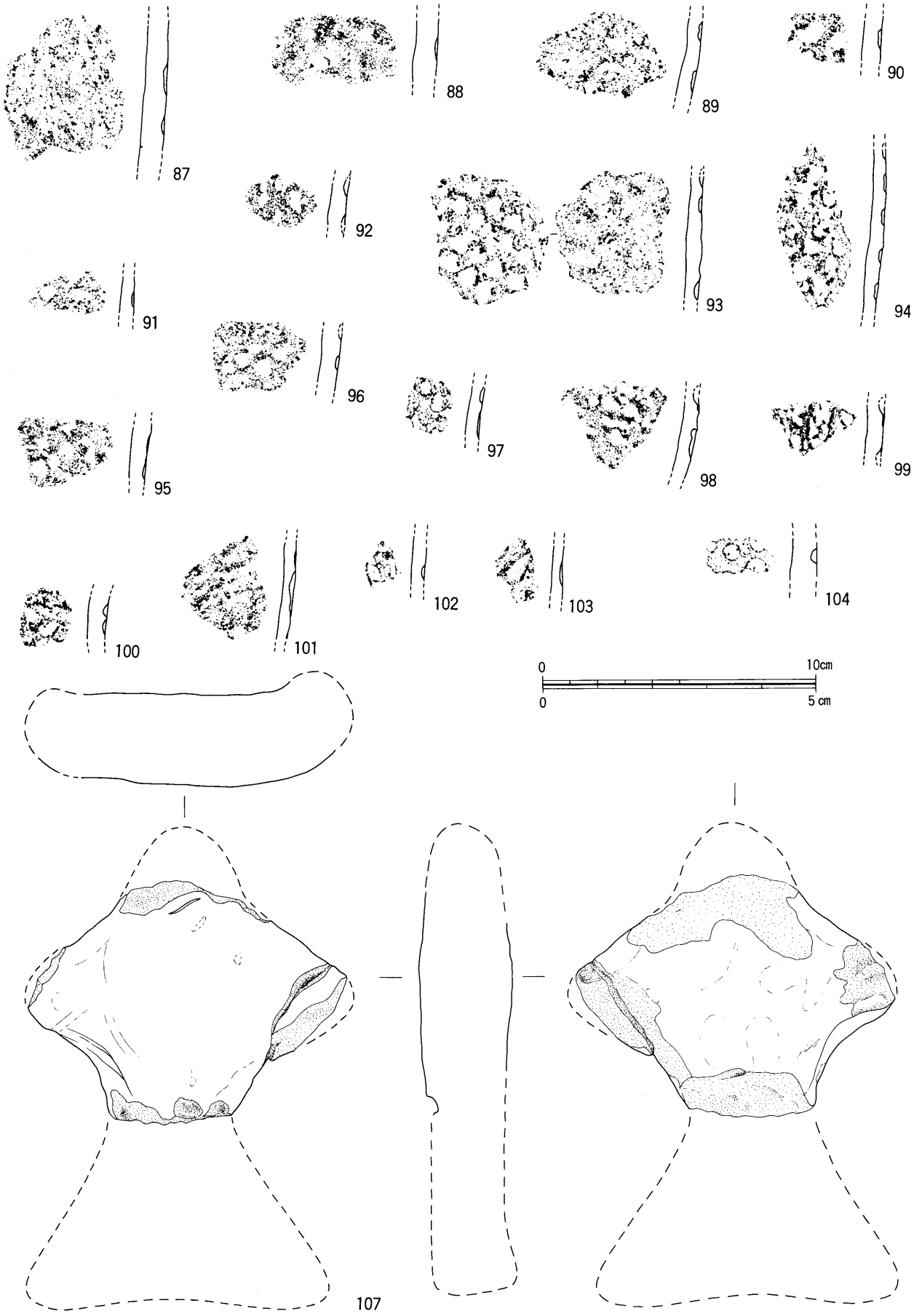
第15図　大鼻式土器拓影図（1：2）



第16図　大鼻式・搬入土器（25）拓影図（1：2）

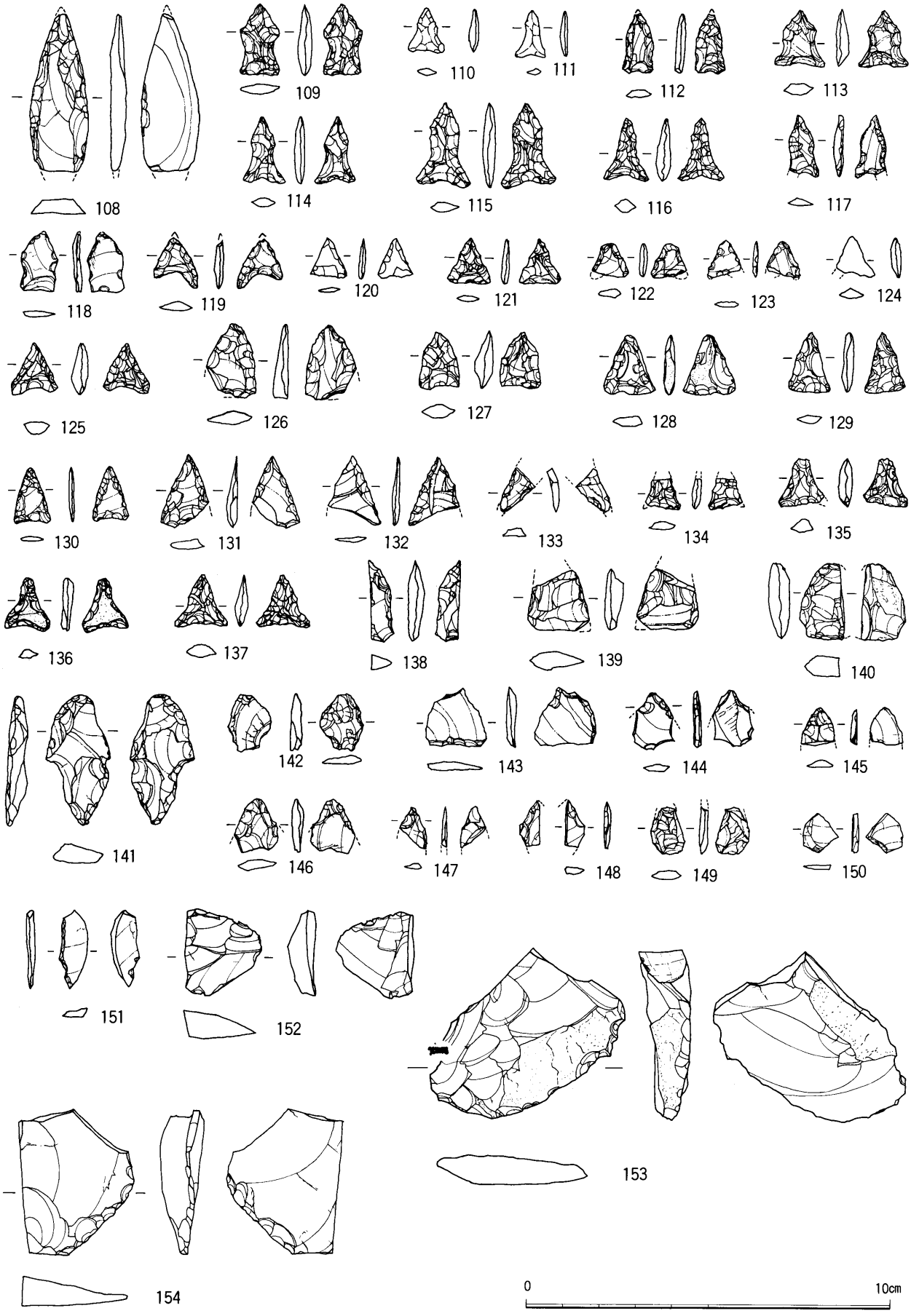


第17図　大鼻式土器拓影図（1：2）

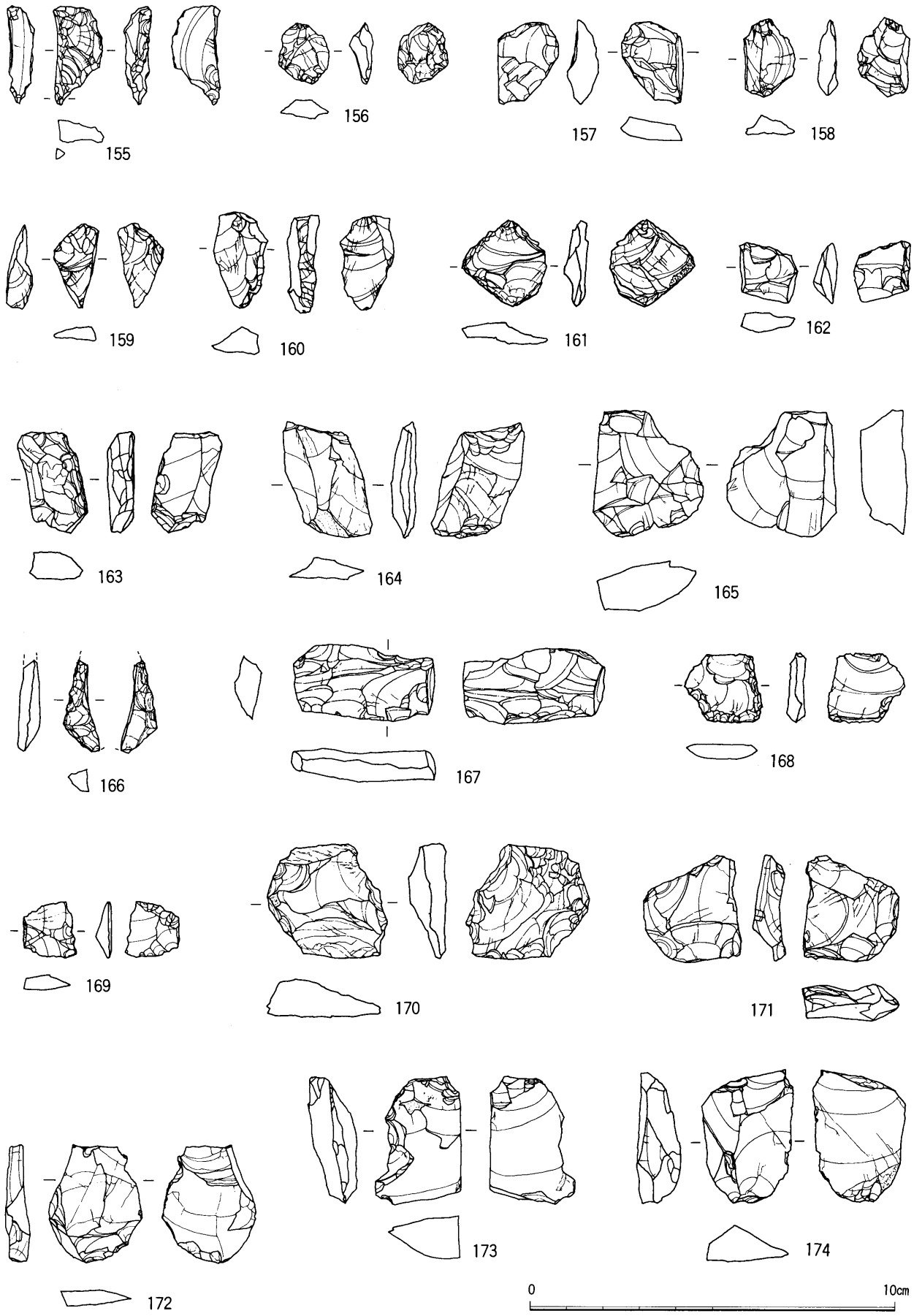


第18図　大鼻式土器拓影・土偶実測図（土器は1：2、土偶は1：1）

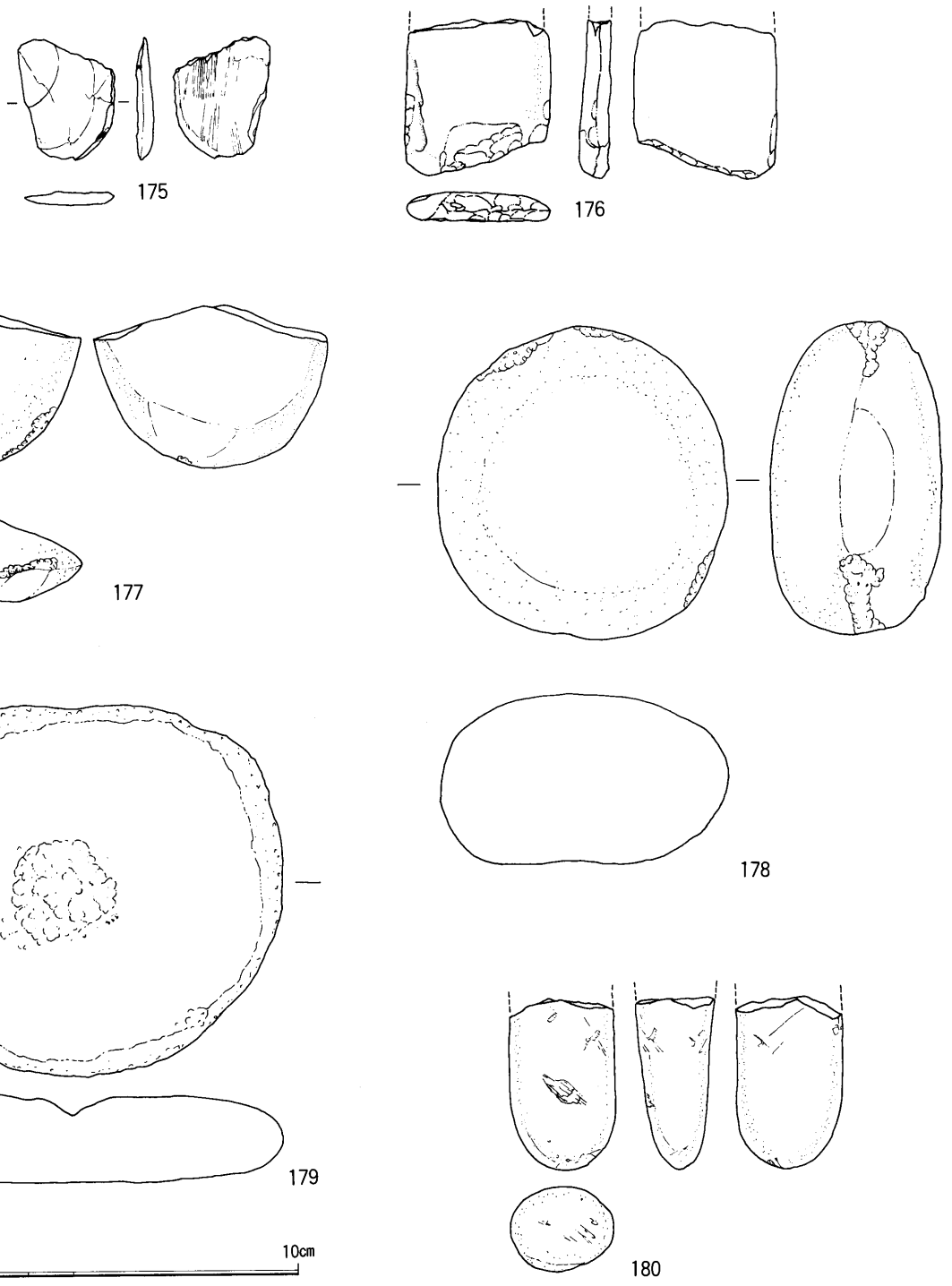
第19図　大鼻式・搬入土器（25）実測図（1：2）



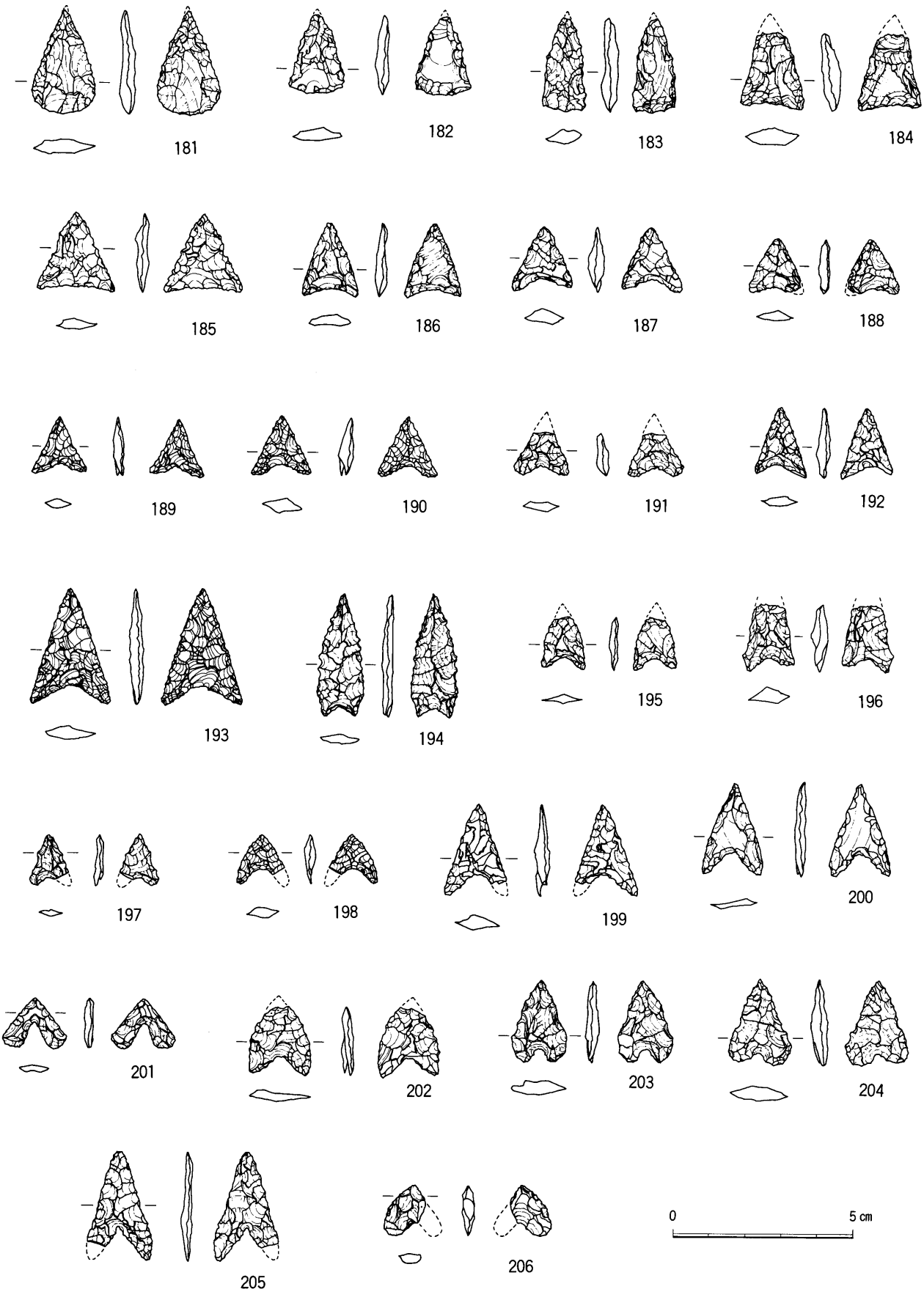
第20図　草創・早期の石器実測図(1)（2：3）



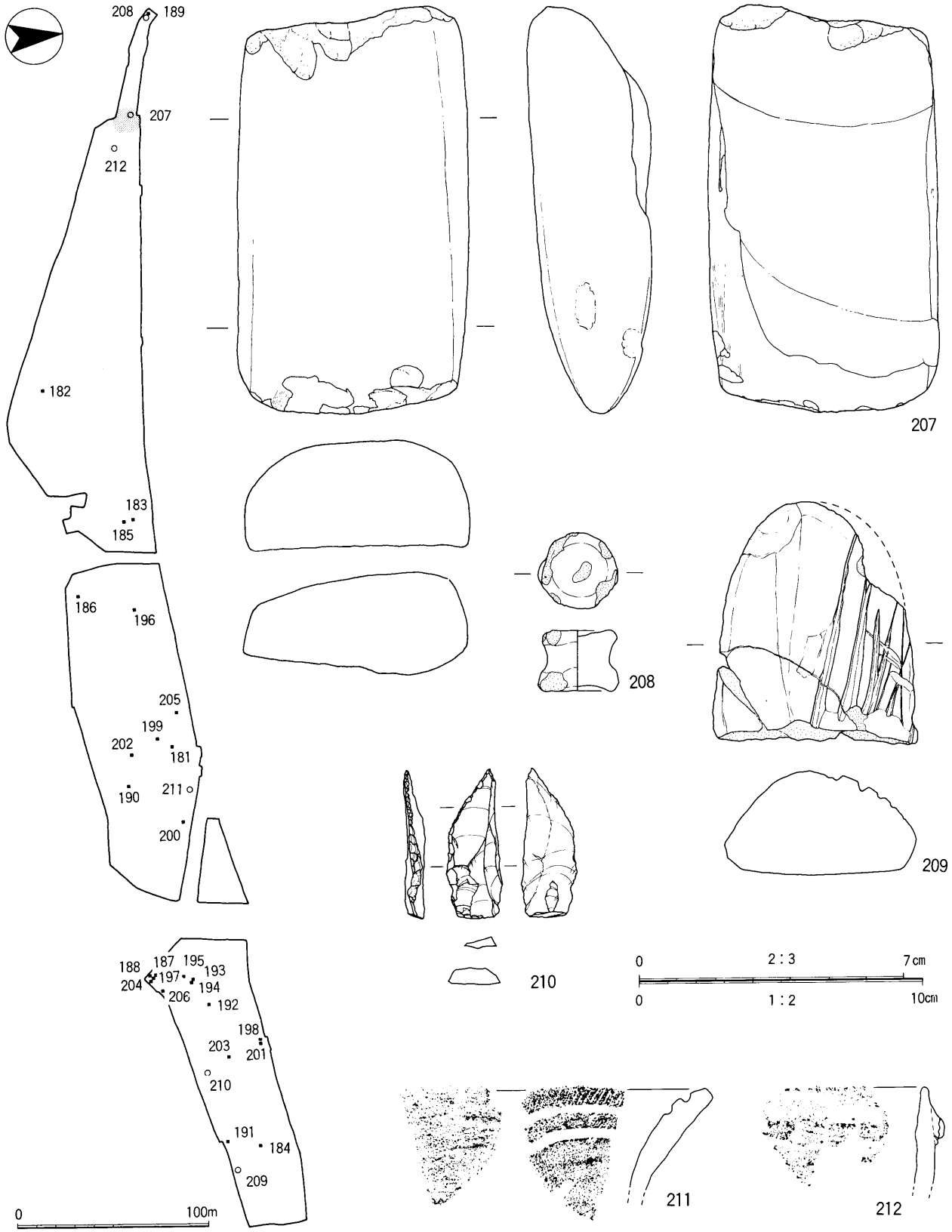
第21図　草創・早期の石器実測図(2)（2：3）



第22図　草創・早期の石器実測図(3)（2：3）



第23図　その他の石鏃実測図（２：３）



第24図　その他の遺物出土位置図（1：3,000）
四角形は石鏃、丸印はその他、
押型文土器関係（網目）は除く

第25図　その他の遺物実測図（207～210は2：3、211・212は1：2）

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
1	427	SH2・3の重複部分	口縁部内面2cm程と外面及び口唇部に斜縄文（単節R、硬く太い原体）。口縁部外面には縄の側面圧痕2条、内面に指圧痕	白色砂粒含	良好	茶褐色	表裏縄文土器、口径26.5cm程、床面から23cm
2	485	SH1埋土下層	口縁部内外に斜縄文（単節Rか）。磨耗により原体不詳。口縁部断面形は丸棒状	砂粒含	良好	暗褐色	表裏縄文土器、No.3と同一個体の可能性も有
3	481	SH1埋土	口縁部内外に斜縄文(撚糸か)。磨耗により原体不詳。口縁部断面形は丸棒状	細砂含	良好	暗褐色	表裏縄文土器、No.2と同一個体の可能性も有
4	359	SH1埋土	口縁部内面2cm余と外面に斜縄文（単節か、硬く太い原体)。口縁部断面は徐々に薄くなり丸棒状	砂粒多含	良好	暗茶褐色	表裏縄文土器
5	345	SH1埋土	外面と口唇部に単節Lの斜縄文を横位施文。頸部に縄の側面圧痕か、不詳。縄はいずれも同一原体（軟らかく太い原体を強く撚る）らしい。その後口縁部内面に強いヨコナデ。以下には指圧痕	砂粒含	良好	外面暗褐色、内面灰褐色	
6	340	A-15-7包含層下層	外面に浅い斜縄文を縦位施文。体上部に縄の側面圧痕（3条残)。次に口唇部にも縄文。いずれも同一原体（軟らかく太い原体を強く撚る単節Lか）らしく、その後口縁部内面に強いヨコナデ。以下には指圧痕	白色砂粒含	良好	茶褐色	密接帯状施文例か
7	347	SF10埋土	外面ヨコナデの上に縄の側面圧痕（2条残)。次に口唇部に斜縄文。いずれも単節で軟らかく太い原体を強く撚る。その後口縁部内面に強いヨコナデ	白色砂粒含	良好	茶褐色	
8	360	SH2・3の重複部分	外面、次に口唇部に斜縄文。いずれも単節で軟らかく太い原体を強く撚る。その後口縁部内面に強いヨコナデ	砂粒含	良好	灰褐色	
9	564	SH1埋土	外面に斜縄文。次に口唇部に斜縄文。いずれも単節で軟らかく太い原体を強く撚る。その後口縁部内面に強いヨコナデ	砂粒含	良好	暗黄橙色	
10	353	A-15-7包含層下層	外面に斜縄文。次に口唇部に斜縄文。いずれも単節Rで軟らかく太い原体を強く撚る	砂粒含	良好	暗褐色	No.21と同一個体か
11	431	SH1	口縁部片。外面に斜縄文と縄の側面圧痕2条を残す。縄は単節か	砂粒多含	やや軟質	黒褐色	磨耗
12	14	SH2・3の重複部分	外面に縄（単節L）の側面圧痕2条を残す。口唇部に斜縄文。縄は軟らかく太い原体を強く撚る（単節)。内面には強いヨコナデ	白色小石多含	良好	暗褐色	磨耗
13	389	SH1	口縁部片。外面は無文部のみ。口唇部に単節斜縄文か	砂粒多含	良好	暗茶褐色	No.14・17・19と同一個体か
14	349	I区包含層	外面に縄（単節Lか）の側面圧痕1条を残す。口唇部に単節Lの斜縄文、縄は軟らかく太い原体を強く撚る。外面施文後に外反させたために側面圧痕が上下に圧縮されている	白色小石多含	良好	茶褐色	口径は17cm程、No.13・17・19と同一個体か
15	368	SH1	外面に縄（単節か）の側面圧痕2条を残す	小石多含	良好	暗茶褐色	口唇部等磨耗
16	342	SH2・3の重複部分の埋土上層	外面に浅く斜縄文。次に口唇部に斜縄文（軟らかく太い原体を強く撚る単節か)。内面には強いヨコナデ	砂粒含	良好	暗黄橙色	
17	374	SH1埋土	口縁部片。外面に縄の側面圧痕2条を残す	砂粒多含	良好	暗茶褐色	No.13・14・19と同一個体か、内面磨耗
18	388	I区	口頸縁部片。外面に縄（単節Rか）の側面圧痕2条を残す	砂粒多含	良好	暗茶褐色	内面磨耗
19	518	SH1	口縁部片。外面に縄の側面圧痕2条を残す	砂粒多含	良好	暗茶褐色	No.13・14・17と同一個体か、内面磨耗

第4表　表裏縄文・押型文土器等観察表

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
20	367	A-15-7包含層下層	口縁部片。大きな縦の凹文部を施すが、口縁部外面の文様や原体は不明	小石含	良好	暗橙色	
21	309	SH4包含層上層(A-15-7)	体部は薄く、最大径は頸部より下位にあり、大粒な市松文（原体長31㎜以上、径7㎜）を縦位に密接施文。体部内面には指や棒状具による調整痕。口縁部は厚く、強く屈折し、斜縄文を横位施文。口縁部の後に口唇部にも斜縄文。縄文は全て単節Rの同一原体らしく、太く軟らかい原体を強く撚る。その後に口縁部内面に強いヨコナデ	砂粒含	良好	茶褐色	口径約32.5cm、床面から40cm遊離。No.10と同一個体か
22	429	SH2・3の重複部分	薄い体部片。縦位に大粒な市松文	細砂粒含	良好	黄褐色	No.23や30と同一個体か、床面から23.5cm遊離
23	428	SH2・3の重複部分	薄い底部片。縦位に大粒な市松文。尖底の立上がりは強く、乳頭状突起の突出はわずか	細砂粒含	良好	黄褐色	No.22や30と同一個体か、床面から23cm遊離
24	461	SH2	やや厚く、強く屈曲する口頸部片。頸部に縄の先端刺突列1条を残す。頸部内面には指圧痕。口縁部外面に市松文（原体長18㎜、径7㎜）を左から右に施文。口縁部の後に口唇部にも斜縄文。縄文は全て同一原体らしく、太く軟らかい原体を強く撚った複節。その後に口縁部内面に強いヨコナデ	砂粒多含	良好	暗褐色	床面から9cm遊離、口径約33.2cm
25	341	SH1	直立する口縁部。口唇部は無文らしい。外面は右下がりの斜縄文、この下に縄の側面圧痕を横位に1条、この下に左下がりの斜縄文を施し、全体で矢羽根状を呈する。縄は単節。斜縄文は半置半転状に条間が広い。内面は縦位指圧痕	長石や黒色角小石多含	良好	灰褐色	他と全く異質であり、軽く多孔質で粘性のない胎土、搬入品
26	347	SF1埋土下層	薄手の体部片。縄（単節Lか）の側面圧痕による鋸歯文。この下位に原体や施文方法が不明の浅い凹文。内面にはナデか	白色砂含	良好	暗茶褐色	体上部（頸部直下）か、密接帯状施文例か
27	496	SH4埋土	縄（単節か）の先端刺突列2条残	砂粒多含	良好	暗褐色	体上部として図示したが、口・頸部の可能性もあり
28	584	SH1埋土	軟らかく太い原体を強く撚った単節らしい斜縄文を施した体部片	砂粒含	良好	暗赤褐色	密接帯状施文例か不詳、炭化物付着
29	495	A-15-7包含層上層	薄い体部片。粗大な市松文。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	小片のため上下や文様等不詳
30	577	SH2・3の重複部分	薄い体部片。縦位に大粒な市松文	細砂粒含	良好	黄褐色	No.22や30と同一個体か
31	344	A-15-7包含層上層	薄い体部片。粗大な市松文。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	明らかに縦位回転施文
32	386 556	SH1埋土	やや薄い体部片。小粒で丸みのある凹文部（ネガ楕円文に似るが、一種の市松文と判断）を縦位に施文（原体長18㎜程）	砂粒含	良好	暗黄橙色	明らかに縦位回転施文、磨耗
33	396	SH1埋土	やや薄い体部片。やや小粒で丸みのある凹文部（ネガ楕円文に似るが、一種の市松文と判断）を縦位に施文	砂粒含	良好	暗褐色	明らかに縦位回転施文、磨耗
34	676	SH2	薄い体部片。市松文を深く縦位施文	砂粒含	やや脆弱	灰白色	
35	479	SF2埋土	薄い体部片。正格子文を浅く縦位施文	砂粒含	やや脆弱	黄褐色	胎土や色調等が他とやや相違
36	358	SH1埋土	薄い体部片。正格子文（縦位施文か）。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗褐色	市松文に近似

第5表　大鼻式・搬入土器等観察表

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
37	330	SH1 埋土 下層	厚手の体部片。刺突文の可能性もあるが、枝回転文とした内のA類（凹文部が密で深く斜め、中央部が小さく突起する）。回転施文なら原体は長さ25㎜、径12㎜の縦位施文か。内面には指圧痕とヨコナデ	長石・金雲母等の微片含	良好	暗茶褐色	上端は擬口縁の可能性も有
38	430	SH1 垂木穴 埋土	厚手の体部片。枝回転文A類。回転施文なら原体は長さ24㎜、径12㎜の縦位施文か。内面には指圧痕とヨコナデ	長石・金雲母等の微片含	良好	黒褐色	遺存状態良好
39	364	SH1 床面	体部片。枝回転文A類。回転施文なら上から下への施文か。内面には指圧痕	砂粒多含	良好	暗黄橙色	床面から約20cm遊離
40	378 381	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒多含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗
41	491	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
42	571	SH1 床面	体下部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	灰褐色
43	337 339 355	SH1 床面	体下部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
44	331 333 385	SH1 埋土 下層	体下部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
45	380	SH1 埋土	体下部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	褐灰色	外面の凹部以外は磨耗
46	397	SH1 埋土	体下部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	褐灰色	外面の凹部以外は磨耗
47	369	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外は磨耗
48	376	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類（やや小粒）	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
49	384 400	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗
50	372	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗
51	375	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	褐灰色	外面の凹部以外と内面が磨耗
52	394	I区	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
53	395	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	
54	373	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
55	401 403	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
56	387	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
57	502	I区	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
58	390	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	内面は磨耗
59	402	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	内面は磨耗
60	383 510	A-15-7 表土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗

第6表　大鼻式土器等観察表

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
61	379	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
62	379	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
63	398	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
64	392	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
65	494	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
66	516	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
67	677 679	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
68	335	SH2 埋土下層	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	灰褐色	内面は磨耗
69	371 534 539	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
70	517	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗褐色	内面は磨耗
71	546	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
72	407	SH1 埋土下層	体部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗橙色	
73	407	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
74	363	SH1 床面	体部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	床面から約20cm遊離
75	354	SH1 床面	体部片。枝回転文A類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	褐色	
76	399	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄橙色	下端は擬口縁
77	528	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗
78	346	A-15-7 包含層 上層	やや厚手の体部片。刺突文の可能性もあるが、枝回転文とした内のB類（凹文部が疎らで浅く、中央が小さく突起）。回転施文なら原体は長さ27㎜、径12㎜の縦位施文か	砂粒含	良好	黒褐色	
79	351	A-15-7 包含層 下層	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	No. 82 や 83·84·97と同一個体か
80	515	SH1 埋土	薄手の体部片。やや小粒な枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	
81	515	A-15-7 包含層 上層	薄手の体部片。やや小粒な枝回転文B類	砂粒含	良好	暗橙色	あるいは上端に焼成後穿孔か
82	370	SH1 埋土	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕とナデ	砂粒含	良好	灰褐色	No. 79 や 83·84·97と同一個体か
83	329 405 572	SH1 床面	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗褐色	床面と床面から遊離した物とが接合。No. 79 や 83·84·97と同一個体か

第7表　大鼻式土器等観察表

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	備考
84	350	SH1 床面	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕とナデ	砂粒多含	良好	暗褐色	No.79や82·83·97と同一個体か
85	393	SH1 埋土上層	薄手の体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	橙褐色	
86	484	SH1 埋土	体部片。枝回転文B類	砂粒含	良好	暗褐色	
87	348	SH1 垂木穴	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕とナデ	砂粒含	良好	暗黄褐色	
88	514	SH1 埋土	体部片。枝回転文B類	砂粒含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
89	332	SH1 埋土下層	薄手の体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	明黄褐色	
90	509	A-15-7 表土	体部片。枝回転文B類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	
91	583	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文C1類（小粒で整然とした凹文部であり、この底が小さく突起する）	小石含	良好	暗黄褐色	外面の凹部以外と内面が磨耗
92	362	SH1 床面	やや薄手の体部片。枝回転文C1類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗褐色	
93	334	A-15-7 包含層下層	薄手の体部片。枝回転文C1類（原体は長さ22㎜、径1.1㎜の縦位施文か）。内面には指圧痕	砂粒含	良好	茶褐色	
94	334	A-15-7 包含層下層	薄手の体部片。枝回転文C1類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗褐色	
95	357	SH1 埋土	体部片。枝回転文C1類	砂粒含	良好	黄褐色	外面の凹部以外は磨耗
96	432	SH1 埋土	体部片。枝回転文C1類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	外面の凹部以外は磨耗
97	570	SH1 埋土	薄手の体部片。枝回転文C1類。内面には指圧痕	砂粒含	良好	暗黄橙色	No.79や82～84と同一個体か
98	336	SH2 床面	体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。内面には指圧痕。凹文部は不定型	砂粒含	良好	暗褐色	
99	338	SH1 埋土下層	体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。内面には指圧痕。凹文部は不定型	砂粒含	良好	灰褐色	
100	545	SH1 埋土下層	体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。内面には指圧痕。凹文部は不定型	砂粒含	良好	暗橙色	外面の凹部以外と内面が磨耗
101	—	SH1 埋土	体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。内面には指圧痕。凹文部は浅く不定型	砂粒含	良好	暗橙色	内面は磨耗
102	566	SH1 埋土	薄手の体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。凹文部はB類に近似。内面には指圧痕	砂粒含	良好	灰褐色	外面に炭化物付着
103	498	A-15-7 包含層下層	薄手の体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。凹文部は円棒状具端で斜に押圧したような形状	砂粒含	良好	暗黄橙色	内面は磨耗
104	366	A-15-7 包含層下層	薄手の体部片。原体が個性的な枝回転文C2類。凹文部は円棒状具端を直角に近い角度で押圧したような形状	砂粒含	良好	暗黄褐色	
105	404	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	茶褐色	熱ルミネッセンス試料
106	391	SH1 埋土	体部片。枝回転文A類	砂粒含	良好	茶褐色	熱ルミネッセンス試料

第8表　大鼻式土器・土偶観察表

報告番号	出土位置遺構等	器種	法量 mm 長さ	幅	厚さ	g 重量	形態・技法等の特徴	石材	備考
108	SH2埋	尖頭器	(43.0)	15.7	4.7	(3.4)	横長剝片の片面側縁調整加工	サヌカイト	床面から5cm遊離
109	A-15-2包	石鏃	19.5	10.8	3.3	0.7	五角形、平基、やや幅広	サヌカイト	完形
110	SH7埋	石鏃	12.2	9.9	2.5	0.2	五角形、平基、小型、側縁の張りがやや弱い	サヌカイト	完形、風化顕著
111	SH1埋	石鏃	12.5	8.3	2.2	0.1	五角形、平基、細身、小型、側縁の張りが弱い	サヌカイト	完形、風化顕著
112	SH1埋下	石鏃	(16.3)	8.3	2.2	(0.4)	五角形、平基、やや細身、片面に一次剝離面残	サヌカイト	先端欠
113	SH1埋	石鏃	15.5	13.6	3.0	0.5	五角形、平基、幅広、両面に一次剝離面残	サヌカイト	完形
114	SH7埋	石鏃	18.5	11.3	2.9	0.4	五角形、少々凹基、やや細身	サヌカイト	完形
115	SH1埋	石鏃	23.3	14.5	2.8	0.6	五角形、少々凹基、やや大型	サヌカイト	完形
116	A-15-2包	石鏃	17.3	12.5	4.0	0.4	五角形、少々凹基、側縁の張りが弱い	サヌカイト	完形
117	SH2埋下	石鏃	(18.0)	(8.0)	2.5	(0.3)	五角形、少々凹基、片面に一次剝離面残	チャート	片足欠
118	SF5埋	石鏃	(15.6)	9.5	2.0	(0.3)	五角形、平基、両面に一次剝離面残、調整少	サヌカイト	先端欠、未製品か
119	SH1埋	石鏃	(14.0)	12.0	2.7	(0.3)	片足、凹基、円脚気味、両面に一次剝離面残	サヌカイト	先端欠
120	SH2埋	石鏃	11.0	10.5	1.5	0.1	三角形、平基、小型、両面に一次剝離面残、調整少	サヌカイト	完形、風化顕著
121	SH1埋	石鏃	12.2	11.7	1.7	0.2	三角形、平基、やや小型	サヌカイト	完形
122	A-15包	石鏃	(9.3)	(10.0)	2.4	(0.2)	三角形、小型、両面に一次剝離面、調整少	サヌカイト	片足欠
123	SH1埋	石鏃	(10.3)	(9.3)	1.2	(0.1)	三角形、小型、両面に一次剝離面、調整少	サヌカイト	片足欠
124	SH7埋	石鏃	(11.0)	(9.8)	2.5	(0.2)	三角形、少々凹基、やや小型、側縁少々外湾	サヌカイト	片足欠、風化顕著
125	A-15-2表	石鏃	14.3	12.6	3.8	0.6	三角形、凹基、側縁の張りが弱い	チャート	完形
126	A-15-7表	石鏃	(20.5)	(14.5)	4.0	(1.1)	平基、側縁内湾、先端は尖る、両面に一次剝離面残	サヌカイト	片足欠、未製品か
127	SH7埋	石鏃	15.6	11.7	5.0	0.8	平基、側縁内湾、先端は尖る、片面に一次剝離面残	チャート	完形、厚手
128	SH8埋	石鏃	16.5	14.5	2.8	0.7	平基、二等辺三角形、片面に自然の節理面残	チャート	完形
129	SH1埋	石鏃	16.5	12.0	2.9	0.4	平基、二等辺三角形、やや細身	サヌカイト	完形
130	SH7埋	石鏃	15.0	10.3	1.5	0.2	平基、二等辺三角形、両面に一次剝離面残	サヌカイト	完形、薄手
131	SH8埋	石鏃	(19.5)	(13.3)	3.2	(0.6)	平基、二等辺三角形、両面に一次剝離面残	サヌカイト	片足欠、受熱
132	B区包	石鏃	(18.2)	(14.5)	2.0	(0.4)	凹脚、両面に一次剝離面残	サヌカイト	片足欠、受熱
133	I区	石鏃	(11.0)	(10.5)	(2.0)	(0.2)	凹脚、片面に一次剝離面残	チャート	片足のみ残
134	SH3埋	石鏃	(8.5)	9.5	2.2	(0.2)	平基、側縁外湾、やや小型	サヌカイト	先端部欠
135	SH1埋	石鏃	(13.0)	(12.8)	3.6	(0.5)	平基、側縁外湾、片面に一次剝離面残	チャート	片足欠
136	SH2埋下	石鏃	14.5	12.3	3.0	0.4	少々凹基気味、側縁外湾、両面に一次剝離面残	チャート	完形
137	SH1埋	石鏃	14.5	14.5	3.5	0.4	平基、側縁外湾	チャート	完形
138	I区包	石鏃	22.2	6.7	4.3	0.6	未製品	サヌカイト	
139	I区包	石鏃	17.0	16.5	4.5	1.3	未製品	サヌカイト	
140	I区包	石鏃	21.5	12.0	5.7	1.6	未製品	サヌカイト	
141	I区包	石鏃	35.2	17.2	5.5	2.7	未製品	サヌカイト	尖頭器の未製品か
142	SH1埋	石鏃	15.5	11.9	2.5	0.5	未製品	サヌカイト	
143	SH3埋	石鏃	17.0	16.2	2.0	0.6	未製品	サヌカイト	
144	I区	石鏃	15.5	11.0	2.3	0.5	未製品	チャート	

第9表　草創・早期の石器観察表（1）〔埋=埋土、包=包含層、表=表面採集、埋下=埋土下層。（）付きの数字は完成品が欠損した現状の値〕

報告番号	出土位置遺構等	器種	法量 mm			g	形態・技法等の特徴	石材	備考
			長さ	幅	厚さ	重量			
145	SH1埋	石鏃	10.5	9.5	2.0	0.2	欠損品	サヌカイト	
146	SH1埋	石鏃	15.0	11.5	2.5	0.4	欠損品	サヌカイト	
147	SH2埋	石鏃	11.0	8.0	1.5	0.1	欠損品	サヌカイト	
148	SH8埋	石鏃	12.5	5.5	1.7	0.1	欠損品	サヌカイト	
149	A-15包	石鏃	13.0	9.5	2.7	0.3	欠損品	サヌカイト	
150	A-15包	石鏃	10.5	10.2	2.0	0.2	欠損品（リッタチドフレークの可能性もある）	サヌカイト	
151	SH7埋	石鏃	21.5	7.7	2.0	0.4	欠損品（リッタチドフレークの可能性もある）	サヌカイト	
152	A-15-7包	スクレーパー	23.0	20.0	7.7	3.1	大きく調整剝離を加えるが周縁加工はない	チャート	完形
153	A-15-2表	スクレーパー	47.3	55.0	8.8	25.4	粗い刃部加工、一部に自然面残	チャート	完形
154	SH7埋	スクレーパー	39.8	29.7	8.5	10.2	両面に主要剝離面残、粗い刃部加工	チャート	完形
155	A-15包	突錐	26.5	12.9	6.8	2.3	片面と片側縁に調整、一端を短く尖らす	チャート	完形、使用痕不明
156	A-15包	楔形石器	17.0	14.0	5.3	1.1	両面に粗く調整加工、3側縁に刃部加工、小型	チャート	完形
157	A-15包	楔形石器	22.5	16.5	6.2	2.7	両面に粗く調整加工、3側縁に刃部加工	チャート	完形
158	A-15包	楔形石器	21.2	13.7	5.5	1.4	両面に粗く調整加工、2ケ1対の刃部加工	チャート	完形
159	A-15包	楔形石器	22.2	11.2	3.8	1.3	両面に粗く調整加工、1側縁に刃部加工、欠損	サヌカイト	完形
160	A-15包	楔形石器	25.3	14.9	7.3	2.8	両面に粗く調整加工、刃部らしくない両極剝離	チャート	完形
161	A-15包	楔形石器	23.3	22.7	5.5	2.0	両面に粗く調整加工、2ケ1対の刃部加工	チャート	完形
162	A-15包	楔形石器	16.3	15.7	5.5	1.5	両面に粗く調整加工、2ケ1対の刃部加工	チャート	完形
163	A-15包	楔形石器	29.0	20.4	7.2	4.1	片面に粗く調整加工、両側縁に刃部加工	チャート	完形
164	A-15包	楔形石器	31.8	26.4	5.9	4.3	2ケ1対の刃部加工、片側縁は裁断面	サヌカイト	完形
165	A-15-2包	楔形石器	34.5	28.2	13.5	13.9	両面に粗く調整加工、刃部らしくない両極剝離	サヌカイト	完形
166	A-15包	楔形石器	24.7	10.0	6.3	1.1	両面調整、2側縁に縁辺加工、欠損	サヌカイト	大きく欠、尖頭器か
167	A-15包	楔形石器	20.3	38.5	7.5	7.8	両面に粗く調整加工、一部に縁辺加工	サヌカイト	両端欠の尖頭器か
168	SH2埋	楔形石器	18.8	20.8	3.8	2.2	薄い剝片の3縁辺を調整	チャート	完形、石鏃未製品か
169	SH2埋	楔形石器	15.0	14.2	4.3	0.9	薄い剝片の2縁辺を調整	チャート	完形、石鏃未製品か
170	A-15包	楔形石器	31.5	30.9	9.8	10.2	両面調整、上縁が自然面、他は縁辺加工	サヌカイト	完形、両面調整剝片か
171	A-15-7表	楔形石器	28.8	26.8	10.2	8.4	両面に粗く調整加工、2ケ1対の刃部加工	サヌカイト	完形
172	A-15包	楔形石器	18.8	25.5	4.8	5.4	両面に粗く調整加工、一部側縁に使用痕	チャート	リタッチドフレークか
173	A-15-2表	楔形石器	35.5	23.8	11.8	9.2	両面に粗く調整加工、一部に縁辺加工	チャート	リタッチドフレークか
174	I区表	楔形石器	36.0	25.5	11.0	9.4	両面に粗く調整加工	チャート	リタッチドフレークか
175	SH7埋	磨製石斧	27.0	23.1	(3.8)	(2.2)	凸刃、円刃	細粒砂岩	刃部小剝片
176	A-15包	磨製石斧	(34.5)	32.6	(6.7)	(10.5)	平刃、使用により磨滅するが偏刃か	暈青色ホルンフェルス	刃部近くの側縁の剝片
177	II区表	敲石	(36.2)	(51.7)	(20.3)	(41.0)	偏平な円礫、側縁の1か所に敲打痕	砂岩	半欠
178	SH1 Pit	敲石	69.8	64.7	38.4	228.4	偏平な円礫、側縁の3か所に敲打痕	砂岩	完形
179	SH1垂	凹石	83.2	90.1	24.2	226.4	偏平な円礫、片面中央に敲打痕による窪み	砂岩	完形
180	A-15包	不明品	(38.2)	(23.2)	(18.4)	(19.5)	円棒状礫、一部に擦痕	硬砂岩	半欠

第10表　草創・早期の石器観察表（2）〔埋=埋土、包=包含層、表=表面採集、埋下=埋土下層。（）付きの数字は完成品が欠損した現状の値〕

報告番号	出土位置・層位等	型　式	特　　徴	法量 mm 全長	幅	厚さ	g 重量	石　材	遺存度
181	E－11－14 包含層上層	凸基無茎式	基部全体に丸み、両面に一次剝離面	28.5	17.5	4	1.7	サヌカイト	完形
182	I－2－1 SH14	凸基無茎式	両面に一次剝離面	(22)	16	4	(1.1)	サヌカイト	先端を欠損
183	C－20－4 SH26·27	平基無茎式	片面に一次剝離面	(26)	12	5	(1.4)	サヌカイト	先端を欠損
184	G－7－2 包含層	平基無茎式	側縁と基部は少し内湾、片面に一次剝離面	(21)	18	5	(1.6)	サヌカイト	先端を欠損
185	C－15－17 SH25	平基無茎式	基部は僅かに内湾気味	22	21.5	3	2.0	サヌカイト	完形
186	F－12－15 SH77	凹基無茎式	基部は緩く内湾、片面に一次剝離面	25.5	16	3.5	1.7	サヌカイト	完形
187	F－17－14 SH74	凹基無茎式	やや厚手	18	17	4.5	0.8	サヌカイト	完形
188	F－17－18 SH72	凹基無茎式	基部は浅く直線的に内湾	15	14.5	3	0.5	サヌカイト	完形
189	A－7－13 SX12	凹基無茎式	基部は浅く直線的に内湾	(19)	14	4.5	0.8	チャート	完形
190	E－11－19 SH55	凹基無茎式	基部は浅く内湾	16.5	17	4	0.6	チャート	完形
191	G－7－21 SH98	凹基無茎式	基部は浅く直線的に内湾、脚端は尖らず	(12)	15	3	(0.4)	サヌカイト	先端を欠損
192	F－13－3 SH83	凹基無茎式	基部は浅く直線的に内湾、左右非対称	19.5	14.5	4	0.6	サヌカイト	完形
193	F－12－15 SH77	凹基無茎式	基部は浅く直線的に内湾、やや大型	32.5	22.5	4	1.8	チャート	完形
194	F－12－15 SH77	凹基無茎式	長身、側縁は外湾、脚部は小型	34	13	3	1.2	サヌカイト	完形
195	F－12－19 SH75	凹基無茎式	側縁はやや外湾	(19.5)	12	2.5	(0.3)	サヌカイト	先端を欠損
196	D－18－6 SH41	凹基無茎式	基部は直線的で浅い	(19)	14	4.5	(0.8)	サヌカイト	先端を欠損
197	F－17－14 SH74	凹基無茎式	基部は深い、両面に一次剝離面、小型	14	11	2.5	0.3	サヌカイト	完形
198	F－4－23 SH89	凹基無茎式	脚はやや長い、小型	(13.5)	(13)	3	(0.3)	チャート	片脚を欠損
199	E－11－13 SH54	凹基無茎式	側縁は直線的、基部は深い	(25.5)	(17)	4.5	(0.9)	サヌカイト	片脚を欠損
200	E－20－7 SH63	凹基無茎式	基部は深い、両面に一次剝離面	25.5	17	2	0.8	サヌカイト	完形
201	F－4－23 SH89	凹基無茎式	基部の抉りは小さい、全体に「ク」字形	14	18	2.5	0.3	サヌカイト	完形
202	E－16－15 SH58	凹基無茎式	側縁は外湾	(19)	17	2.5	(0.8)	サヌカイト	先端を欠損
203	F－9－20 SH91	凹基無茎式	基部の抉りは小さい、円脚	23	15.5	4	0.9	サヌカイト	完形
204	F－17－14 SH74	凹基無茎式	基部の抉りは小さい、やや円脚	14	18	4.5	1.2	サヌカイト	完形
205	D－15－10 包含層	凹基無茎式	基部の抉りは直線的で深い、やや大型	(30.5)	(18)	3.5	(0.9)	サヌカイト	片脚を欠損
206	F－18－6 SH84	凹基無茎式	脚端は丸い、剝離面は大きい、小型	(14)	(12)	3	(0.4)	サヌカイト	片脚を欠損

第11表　その他の石鏃観察表〔( )付きの数字は欠損した現状の値〕

報告番号	出土位置 遺構等	器　種	mm 法　量	製作・調整技法等の特徴	素　材	色　調	残存度	備　　考
207	A-15-2 包含層	大型磨製石斧	長(107) 幅 60 厚 31.5	全面を研磨、刃部と頭部の幅はほぼ同じ、両刃	緑色凝灰岩 表面は風化して軟らか	緑灰色	刃こぼれ、頭部打撃痕、片側面は剥離	位置的には早期初頭頃の遺構群だが包含層出土のため所属期不明、激しい使用による欠損
208	SX12	耳栓	径 19 厚 16	小型の臼形耳飾、両側面と周縁は窪む、中実	土製 砂粒多含	淡黄褐色	一部欠損	何ら塗布せず、整理番号R-408
209	G-7-15	有溝砥石	長(63) 幅 54 厚 27	平面は長円形、断面はカマボコ形の自然円礫の凸面にV字溝が数条	砂岩	暗茶褐色	約1/3残	平坦面もやや平滑、時代不明
210	F-15-7包含層	剝片刃器	長 40 幅 14.5 厚 5.5	横剝ぎ剝片、刃部になるべき側に刃潰し、背部は不調整	チャート	青色	完形	ナイフ形石器の可能性も有、全重量は3.4g
211	E-15-10 SH26	鉢	厚 9	外反する口縁部、外面はヨコヘラミガキ内面には細かい斜縄文と2条の深い篦描沈線	縄文土器	暗黄褐色	口縁部小片	北白川上層式の新しい部分
212	SX1 南周溝	凸帯文土器	厚 6.5	薄く尖る口唇下1cm程に凸帯を貼付、凸帯の厚さの半分程の深さに櫛状具によるやや小さいD字形キザミ、以下はナデ	縄文土器	黒褐色	口縁部小片	五貫森式 整理番号R-45

第12表　その他の遺物観察表〔( )付きの数字は欠損した現状の値〕

Ⅳ　弥生時代

1　遺　　構

遺跡の西半部（Ⅰ～Ⅳ区）で中期中葉から後期初頭の方形周溝墓を３群計11基（ＳＸ１～11）と少数の溝や小土坑、西端で中期の箱式木棺墓らしい土壙１基（ＳＸ12）を検出した（第３～７図）。

これらの遺構と付近の包含層からは土器が出土したが、他の遺物は認められなかった。

(1)　方形周溝墓

いずれも埋葬主体は残存しなかった。周溝の埋土は黒味が強く、他の時代とは明らかに異なっていた。したがって、方形周溝墓と重複する多くの土坑や小穴等は、その大部分が後世のものと判断された。

いわゆる「陸橋」を四隅に持つ例が多いが、東に向かうに従って「陸橋」が四隅にはない例も目立つ。全体的に、一辺には一方に片寄った半分程の長さの周溝、そして他の一辺には中央に短い周溝、さらに２辺には長い周溝が巡る、という傾向が強い。

また、土器は遺跡の西方に古いものが多く、東方に新しいものが多い。

11基を検出したが、調査区よりも北にまだ存在する可能性はある。ともかく、調査区内の11基は３群に分かれており、これを西群、中央群、東群と呼ぶ。

西群はⅡ区に位置する。２基（ＳＸ１・２）から成り、中央の溝は共有されている。

中央群もⅡ区に位置し、６基（ＳＸ３～８）が検出できた。東西に３基が連なり、中央の溝を共有しているものもある。この南には、１基が方向を揃えて隣接するが、周溝を共有することはない。また、北には２基がわずかに重複して存在する。これらは、東西に並ぶ３基と方向を揃えて隣接するが、やはり周溝を共有することはない。

東群は、Ⅲ・Ⅳ区において３基（ＳＸ９～11）が検出できた。他の群とは異なり、各々の方位がやや振れる。

なお、周溝は平坦地に造営されており、中央部分が最深部にほぼ対応している。そこで、以下の方形周溝墓の規模は心々距離の測定値によって表記する。

ＳＸ１（第26図）　西群に属し、ＳＸ２の北側に位置する。削平が著しいためか四辺に周溝を持ち、四隅に「陸橋」を残している。平面規模は、東西・南北共に約8.5ｍである。

西周溝は全体に内湾気味であり、やや南寄りに位置する。北端は隅に至る前で幅広いまま途切れ、南端は外側から幅を減じている。長さは5.6ｍであり、平均的な幅は１ｍ程、最深部は0.3ｍである。

北周溝は北辺の中央部にあり、長さ３ｍ、幅1.1ｍの土坑状を呈し、0.2ｍの深さを残す。内側縁は比較的直線的だが、外側縁は内湾する。

東周溝は、削平が最も著しいため、南半部に浅く短く残る。現状では長さ1.9ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.1ｍである。

南周溝は、ＳＸ２と共有する。しかし、ＳＸ１・２の平面的な位置関係から、当初はＳＸ１の南周溝として掘削されたものと理解した方が自然である。長さ6.6ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.3ｍを残す。

南・北と西の周溝からは、中期後葉を中心とした壺や甕の破片（213～215）が出土した。

ＳＸ２（第26図）　西群に属し、ＳＸ１の南に位置する。４本の独立した周溝があり、四辺に「陸橋」を持っている。規模は東西8.5ｍ、南北８ｍである。

西周溝はやや北寄りに位置し、長さ5.7ｍ、最大幅1.35ｍ、深さ0.3ｍを残す。両端と内側縁は直線的だが、外側縁は張り出し気味である。

北周溝は、既述のようにその平面的な位置関係から、ＳＸ１の南周溝を再利用したものと推定される。

東周溝は削平が著しいために、南寄りに長さ0.95ｍ、幅0.5ｍ弱、深さ0.2ｍ程の小土坑状に残るのみである。

南周溝も削平が激しく、南辺の中央部に長さ1.9ｍ、最大幅0.8ｍ、深さ0.25ｍの土坑状に残る。全体的に内湾気味の平面形を呈している。

ＳＸ１が正方形であるのに対し、ＳＸ２は歪んでおり、ＳＸ２はＳＸ１の南に付加されたものらしい。やはり中期後葉に属すると推定された。西周溝からは、壺や甕の破片（216・267）が出土した。

ＳＸ３（第27・28・30図）　中央群に属し、この南端に位置する。４本の周溝から成り、全体規模は東西8.4ｍ、南北8.5ｍである。各周溝も小さい。

西周溝は西辺の中央にあり、長さ2.3ｍ、最大幅0.9ｍ、深さ0.15ｍである。したがって、細長い土坑状を呈しており、南北に広く「陸橋」を持つ。

北周溝は北辺の中央にあり、長さ5.4ｍ、最大幅1.3ｍ、深さ0.3ｍ余りを残す。幅の狭い西半部の方が0.1ｍ程深い点が特徴的である。平面形は、内側縁が直線的であるのに対し、外側縁は両端で幅を減じている。

東周溝は南半部に片寄っており、長さ3.9ｍ、最大幅0.85ｍ、深さ0.2ｍを残す。外側縁は、全体的にやや内湾傾向である。

南周溝は全体的に直線的であり、長さ5.45ｍ、幅0.8ｍ程、深さ0.35ｍである。

南・北や東の周溝からは、中期中葉から後葉の壺や甕（217～220・268～274）が出土した。

ＳＸ４（第27～29・32図）　中央群に属し、この西端に位置する。やはり四隅に「陸橋」を持ち、全体規模は東西12.2ｍ、南北は12.8ｍ程である。

西周溝はやや南寄りに位置し、長さ6.85ｍ、最大幅1.9ｍ、最深部0.5ｍである。北部は0.25ｍ程浅くなっている。

北周溝は北辺の中央にあり、長さ8.9ｍ、最大幅1.6ｍ、深さ0.35ｍを残す。全体に内湾気味であり、特に東端は内側に曲がる。

東周溝は、ＳＸ５の西周溝と切合関係もなく一体化しており、全体でＬ字形を呈する。わずかに内湾する平面形であり、長さ9.7ｍ、幅1.65ｍ程、深さ0.4ｍを残す。

南周溝は直線的であり、特に東端は東周溝の南延長部分にまで及んでいる点が目を引く。長さ10.05ｍ、最大幅1.7ｍ、深さ0.35ｍである。

周溝からは、壺を中心とした中期後半の土器（221～232・275～280）が出土したが、いずれも周溝底から遊離しており、埋没過程で転落したものと推定される。なお、東周溝からの出土した例（231・232・275・277・278）は、当然ＳＸ５に伴う遺物である可能性もある。

ところで当ＳＸ４の東周溝は、ＳＸ５の西周溝としても共有されており、ＳＸ５の南周溝とも連続している。そこで、ＳＸ４・５の前後関係が問題となるが、ＳＸ５南周溝とは切合関係はなく、掘削はともかくとして、埋没は同時期であったと判断された。

また、ＳＸ４はＳＸ５以上に整った平面形を呈しており、ＳＸ４東周溝らしい湾曲も認められる。したがってこの周溝は、まずＳＸ４の東周溝として掘削され、埋没以前にＳＸ５の西周溝としても利用されたもの、すなわち、ＳＸ４はＳＸ５に先行するものと推定される。

ＳＸ５（第27～30図）　中央群に属し、その中央部に位置する。西と南の周溝は連続してＬ字形を成すが、他はいわゆる「陸橋」を持つ。全体規模は東西9.2ｍ、南北10.4ｍであり、やや東西に狭い。

西周溝に関しては、ＳＸ４の東周溝として記した。

北周溝は北辺の中央にあり、長さ4.05ｍ、最大幅1.6ｍ、深さ0.4ｍを残す。短く掘られ、東西に広い「陸橋」を残している。

北周溝は、長さ４ｍ、最大幅1.6ｍ、深さ0.4ｍ程の短いものであり、北辺の中央部に位置する。

東周溝は、長さ2.2ｍ、幅0.9ｍ、深さ0.3ｍを残すのみの小規模なものである。東辺の中央にあり、内側縁は直線的だが、外側縁は内湾する。中央部で幅が狭くなっているＳＸ６の西周溝を切っている。

南周溝は、西周溝と連続してＬ字形を呈し、長さ8.8ｍ、最大幅1.4ｍ、深さ0.25ｍを残す。西周溝に対してやや鈍角をなし、直線的に延びる。この南周溝の東端は、東周溝内側縁の南延長付近まで延びている。したがって、「陸橋」は南東隅というよりも、東辺の南部にあるとする方が正確である。

東周溝を中心に、中期中葉から後葉の壺片（233～235・281・282）が出土した。最も遺存の良い壺（235）は、東周溝中で正立状態であった。しかし埋没過程にあり、原位置を保つものではない。

当ＳＸ５は、ＳＸ４とＳＸ６の間に造営されている。そして、ＳＸ５の西周溝はＳＸ４の東周溝を再利用している。一方、ＳＸ５の東周溝は、新たに掘削するよりもＳＸ６の西周溝を再利用した方が平面形も整ったはずであるが、あえて別に設けている。その理由は、すでにＳＸ６西周溝は埋没していたため、とも考え得る。しかし、埋没していたならより大きく重複する、すなわち、より全体形が正方形に近づくように、より東に掘削していたはずである。ところが実際には、中央で幅狭くなるＳＸ６西周溝との重複を極力少なくするような位置と長さで掘削されている。したがってＳＸ４と同様に、ＳＸ６の周溝が埋没する前に当ＳＸ５は造営されたのであろう。しかし、西のＳＸ４とは周溝を共有しており、同一中央群に属し、列を同じくして並んでいる。

ＳＸ６（第27～29・33図）　中央群に属し、この東端に位置する。全体規模は東西が9.7ｍ、南北が9.6ｍである。長短４本の周溝から成り、四隅に「陸橋」を持つ。

西周溝は、西辺の中央部に位置するやや細いものであり、長さ５ｍ、最大幅1.05ｍ、深さ0.3ｍを残す。内側縁は総体として直線的だが、外側縁は南周溝と同様に中央で幅狭くなる。一部分がＳＸ５の東周溝に切られている。

北周溝は、北辺の西半部にあり、長さ3.65ｍ、最大幅1.4ｍ、深さ0.25ｍを残す。全体に内湾気味である。西端は次第に幅狭くなるが、東端は幅広いまま終わる。

東周溝は東辺の中央にあり、長さ6.5ｍ、最大幅1.8ｍ、深さ0.4ｍを残す。相対する西周溝の倍程の幅広さである点が特徴的である。また、内側縁は直線的だが、外側縁や両端は内湾する。

南周溝は長さ8.65ｍ、最大幅1.75ｍ、深さ0.4ｍが遺存した。南辺と同じ長さ、すなわち東・西周溝の内側縁の南延長までの長さがある。内側縁は直線的であるが、外側縁は西周溝と同様に中央で幅狭い。

各周溝から、中期後葉の壺や甕（236～238・283～286)が出土した。特に西周溝からは、比較的遺存度の高い凹線文施文の壺（236）が、転落した状況で出土した。

ＳＸ７（第27～29・34図）　中央群に属し、この北部に位置する。やはり長短４本の周溝から成り、四隅に「陸橋」を持っている。全体規模は、東西11.45ｍ、南北10.3ｍである。

西周溝は西辺の南寄りにあり、長さ5.9ｍ、最大幅1.55ｍ、深さ0.45ｍを残す。内側縁は直線的だが、外側縁はわずかに内湾気味である。両端は幅広のまま終わる。

北周溝は北辺の東半部に位置し、長さ4.7ｍ、最大幅1.3ｍ程、深さ0.3ｍを残す。西端は急に途切れたように終わるが、東端は外側から幅を減じて終わる。東端は、東周溝の内側縁の北延長付近まで延びている。

東周溝は、東辺の中央やや南寄りに位置し、長さ３ｍ、幅1.25ｍ、深さ0.3ｍを残す短いものである。内側縁は直線的だが、外側縁は強く内湾する。

南周溝は、東周溝の内側縁の南延長から西周溝より外までと長く、全体的に内湾する。長さは11.35ｍ、最大幅は1.95ｍ、最深部は0.35ｍである。この周溝の東部は、他の部分より0.15ｍ程深い。

北や西の周溝埋土中からは、中期後葉の壺や甕の破片（239・240・287）が出土したが、やはり転落品と推定される。

なお、当ＳＸ７は北西部でＳＸ８と重複している。しかし、周溝が直接に切り合ってはおらず、前後関係は断定できない。

ＳＸ８（第27・28・34図）　中央群に属し、調査区の北端で半分ほどが検出された。東と南の周溝と、南西と南東の「陸橋」の存在が確認された。規模は不明であるが、検出された周溝は小規模である。

東周溝は、北端が調査区外のために全長は不明だが、長さ4.9ｍ、幅１ｍ程、深さ0.2ｍが検出された。内側縁は直線的だが、外側縁は内湾している。南端は次第に細くなりながら、南周溝の内側縁の延長付近まで延びている。

南周溝も内側縁は直線的であり、外側縁は内湾している。長さは4.3ｍ、最大幅は0.95ｍ、深さは0.2ｍを残していた。

西周溝は不明だが、もし満足な長さのものなら、調査区内でその南端部は検出されたはずである。しかし検出されておらず、西辺の中央部に短くか、西辺の北半部にだけ掘削されたものと推定される。

出土遺物はない。

ＳＸ９（第29・31・32図）　３基検出された東群に属し、この西端に位置する。調査区の北端にあるため、南半部を検出したのみである。東・西周溝の南部と南周溝、及び南西と南東の「陸橋」を確認した。東西規模は、10.5ｍ程である。全体的に削平が比較的少なく、周溝の幅が大きく残る。

西周溝は全体的に内湾している。次第に幅狭くなる南端は、南周溝の内側縁の西延長付近まで延びている。検出部分の長さは7.2ｍ、最大幅は2.1ｍ、最深部は0.45ｍである。

東周溝は、丸味を持った南端が検出されたのみである。南端は、やはり南周溝の内側縁の東延長付近まで延びている。検出部分の幅は1.7ｍと比較的広く、深さは0.28ｍである。

南周溝は南辺の中央にあり、長さは4.7ｍ、最大幅は2.05ｍ、深さは0.65ｍを残す。内側縁は直線的だが、外側縁は内湾する。

西と南の周溝からは、中期後葉の、口頸部以外は完形の壺（241～243）が出土した。しかし、いずれも原位置を保つものではなく、墳丘からの転落品と推定される。

ＳＸ10（第31・35図）　東群に属し、この南東端に位置する。２本のＬ字形の周溝によって形成されており、北西と南東の隅に「陸橋」を持つ。全体規模は東西が12ｍ程、南北が11.8ｍ程である。

なお、南と北の周溝は幅広く直線的であり、良く並行している。これに対して、東・西の周溝は内湾しており、幅も狭く、浅い部分がある。当ＳＸ10の周溝は比較的深く遺存したが、もう少し削平が進んでいれば、２本の長い周溝と半分程の長さと中央部にだけに短い周溝を持ち、四隅に「陸橋」を持つ例と同形態になった可能性がある。これは反対に、四隅に「陸橋」を持った例も、本来は当ＳＸ10と同様な形態であった可能性もあることを意味する。

南西周溝は、わずかに鋭角を成しており、西辺の中央部から東周溝の内側縁の南延長付近まで連続している。内側縁は直線的であるのに対して、外側縁は内湾している。このため、南西隅では周溝幅が狭くなっている。連続しているが、西周溝部分は長さ約6.5ｍ、最大幅1.9ｍ、深さ0.37ｍを残す。一方、南周溝部分は長さ約9.5ｍ、最大幅2.1ｍ、深さ0.73ｍである。

北東周溝も、全体としては鋭角をなしている。北周溝部分は直線的であり、西端は、西周溝の内側縁の北延長付近にまで延びているが、内側から幅を減じている点は通例と異なる。北東隅付近では幅も狭くなり、浅くなる。東周溝部分は全体が内湾しており、南周溝の内側縁の東延長位置より1.5ｍ程北で終わる。この東周溝部分は、長さ9.2ｍ程、最大幅1.8ｍ、最深部0.65ｍである。しかしこの北半部は南半部に比べて明らかに幅狭く浅い。

出土遺物はないが、北周溝がＳＸ11と重複しており、当ＳＸ10の方が新しいことが確認された。

ＳＸ11（第31・33図）　東群に属し、この北東部に位置する。南部を検出したのみであるが、南周溝は東の周溝と連結しており、「陸橋」は見られない。西周溝とも連結していた可能性があるが、断定できない。東西の規模は14.5ｍ程と推定される。

南周溝は、内側縁が直線的であるのに対し、外側縁は内湾する。最大幅は2.5ｍ、最深部は0.8ｍ近くを残す。

南周溝からは、後期初頭頃の擬凹線や脚台を持つ壺の破片（244・245）が出土した。なお、重複するＳＸ10は、当ＳＸ11よりも新しい。

(2)　その他

ＳＸ12（第41図）　調査区の最西端で検出された、箱式木棺墓と推定される土壙である。

東西に延びる台地縁に長軸を並行させており、上端での長さは2.52ｍ、最大幅は0.93ｍ、深さは0.3ｍである。平面形は上端がやや乱れているが、下端は相当に直線的である。底部は平坦であり、長さは2.02ｍ、東部幅は0.5ｍ、西部幅は0.44ｍである。埋土の土層からは判断できなかったが、頭は東側にあったものと推定される。

墓壙内には自然石が少量見られたが、特に配置した様子はない。この付近の地山は礫層であることから、墓壙掘削時の排土が埋葬に使われ、棺の腐朽後に転落したものと考えられる。

墓壙内からは、篩掛けしたにもかかわらず、縄文

時代の耳栓（210）と石鏃（190）が混入していたのみであった。しかし、墓壙外の東側の地山面から、弥生時代中期後半の壺の破片（246）が出土した。

ＳＤ１　中央群に属する方形周溝墓ＳＸ４の南西方に所在する、長さ2.65ｍ、幅0.95ｍ、深さ0.2ｍの直線的な溝である。方形周溝墓を想定して精査したが、単独の溝であった。

中期後葉の受口甕（247）が出土した。

ＳＤ２　中央群の方形周溝墓より約９ｍ東に位置する溝である。長さ3.65ｍ、幅1.25ｍ、深さ0.3ｍの細長い三角形状の溝である。埋土は、方形周溝墓に近い黒褐色土である。底から浮いた状態で、中期末～後期初頭の小型壺（248）が出土した。

ＳＫ１（第26図）　西群に属する方形周溝墓ＳＸ１と重複する、径0.28ｍ、深さ0.15ｍの小穴である。

埋土は、方形周溝墓に似て黒味の強いものであった。中期の壺底部片（249）が出土したが、ＳＸ１とは直接関係ないと考えられる

ＳＫ２（第26図）　やはり西群に属する方形周溝墓ＳＸ１と重複する、長径0.75ｍ、深さ0.22ｍの小穴である。

方形周溝墓に近似する黒味の強い埋土であり、中期後葉と前葉の土器片（289・290）が出土した。ＳＸ１とは直接関係ないと考えられる。

ＳＫ３（第27・30図）　中央群の方形周溝墓ＳＸ５と重複する、径0.35ｍ、深さ0.25ｍの小穴である。

埋土は方形周溝墓のように黒くなく、暗褐色であった。流水文を施した壺の小片（288）が出土したが、後世の流入の可能性が高い。

2　遺物（第36～40図）

調査区西部に所在する、３群計11基の方形周溝墓（ＳＸ１～11）や箱式木棺墓らしい土壙（ＳＸ12）等とその周辺から、土器のみが出土した。土器は中期を中心としている。掲載した土器は95点であり、出土品のほとんどを占める。

ＳＸ１出土土器（213～215・263～266）　南周溝からは中期後半の壺や甕（231・264）、西周溝からは中期後半の壺（265）と中期前半の壺（215・263）等が出土した。また北周溝からも、中期前半の壺破片（266）が出土している。

南周溝出土の213は受口壺Ｄ類（受口壺の形式分類は第13表参照、以下も同じ。）であるが、受口部の装飾については遺存状態が悪く、不詳である。264は内外に横位のハケを施し、口唇部の上下にキザミを配した、いわゆる「大和甕」の系統のものである。これら南周溝出土品（213・264）は、ＳＸ２に伴う遺物の可能性もある。

西周溝出土の 214は、底部が厚く、内傾して立ち上がる。小型壺であろうか。215は立ち上りが強く、外面にはヘラミガキを施す。263は、大きく外反する壺の口縁部片であり、口唇部に櫛描波文を施す。265は、壺の体部片である。荒いタテハケの上に、幅広く浅い櫛描横線文を施す。

北周溝出土の 266は、太頸壺の頸部片である。８本１単位の櫛描横線文を、密に何単位か施している。

ＳＸ２出土土器（216・267）　西周溝から、中期後半の壺（216）と甕（267）が出土した。

216は、受口壺Ｂ類である。受口部には篦描斜格子文を全周させ、この上に３本１組の棒状浮文を何対か貼付している。頸部にはタテハケを残す。267は、「大和甕」の系統に属する口縁部片である。粗いハケを外面には縦位、内面には横位に施し、口唇部の上下端にキザミを入れる。

ＳＸ３出土土器（217～220・268～274）　北周溝からは中期後葉の壺（217）と前半の壺（268～273）が、南周溝からは中期後葉の壺の大型破片（218～220）が、東周溝からは「大和甕」系の口縁部片（274）が出土した。

北周溝出土の217は、凹線文を持たない受口壺Ｅ$_{2}$類である。268～273は、櫛描横線文を持つ壺の破片である。口縁部は外反し、拡張した上端に円棒状具による押圧列を配している。口唇部には太い目の櫛描横線文を持つ。体部片には、櫛描の横線文や波文を密に施した例（272）と、太い目の櫛描横線文を施した例（270）とがある。後者は文様帯よりも無文帯の方が低く、すなわち薄く仕上げられている。

273は体部最大径付近の破片であるが、文様帯の下端は櫛描横線文で終わっている。

南周溝出土の218は、頸部が短く直立し、口縁部が広がる壺である。体部には、目の不揃いな櫛描横線文帯を重ねている。219は、小さく直立する受口壺D類である。受口部には、複線鋸歯文を箆描し、頸部にはタテハケの上に櫛描横線文を施す。丸味のある体部の上半部には、粗い箆描斜格子文を描き、この下に1帯の櫛描横線文を配している。これらの体部文様帯は、最大径部分よりも上位に限定されている。220は、袋状口縁とも呼ばれる受口壺F類であり、ソロバン形の体部を持つ。口縁部には、1段の櫛目斜線列と2段の簾状文を持つ。体部最大径付近には、振幅がやや大きくてスピード感のある櫛描波文を残す。

ＳＸ４出土土器（221～232・234・275～280）

西周溝からは、中期中～後葉の壺や甕（221～228・234・280）が比較的多量に出土した。このほかに、北周溝からも中期後半の壺（229・230・279）が出土した。また、中期の前葉から中葉の壺が東周溝（231～233・275・277・278）や南周溝（276）から出土した。

西周溝出土土器は、比較的良好な一括資料である。壺の口縁部は、図示できた6例全てが受口である。受口壺は、受口部の下端が張り出し気味のＡ類（221・222）と、下端に稜を作って小さく内斜するＢ類（223・224）、下端に丸味を残して小さく内斜するＣ類（225）とがある。226も受口になる可能性が高い。受口部には、櫛目による幾何学文様が一般的だが、224は櫛描波文である。頸部には、目の太い例も含めた櫛描の横線文（221・223～226）を施す。体部文様には、櫛状具の横線文（221）や波文（223・224）の例と、櫛状具と箆状具による横線文・波文・斜格子文とを併用する例（226）とがある。この内、斜格子文を持つ226では、頸・体部境に低い三角凸帯を貼付し、これに櫛描斜線列を配している。これらに伴出した甕（228）は、口縁部の内外に粗いハケを施して口唇下端を刻む、いわゆる「大和甕」系のものである。肩部は比較的良く張り、櫛描横線文を持つ。

このほかに、東や北、西の周溝からは、櫛描横線文を密に施した破片（275・279・280）が出土している。

また、南や東の周溝からは、太い目の櫛描文を施した破片（276～278）が出土した。この内の277や278は、無文部が薄手になっており、ヘラミガキされている。東周溝出土の広口の受口壺A_2類（231）は、箆描斜格子文の上に箆刻みを施した棒状浮文3本4対を受口部に貼付し、頸部には刺突文と簾状文を施す。

ＳＸ５出土土器（233～235・281・282）　東周溝出土品（233～235・281）は中期後葉を中心とした資料であり、周溝の重複関係からＳＸ６西周溝出土例より新しいと考えられる。

233は、太頸の広口壺である。口唇部下端は拡張し、上下端にキザミを入れる。又、口縁部内面には、山形の浮文を等間隔に配している。234は、壺の頸部から体上部にかけての破片であり、ＳＸ５東周溝とＳＸ４西周溝出土の破片が接合した。タテハケの上に、櫛描横線文とスピード感のない独特な櫛描波文が施されている。235は、頸部に小さくスピード感のない櫛描波文、体上部に二股箆状具による横線文、体下部の上半部にヘラミガキを施す。281は、体部最大径付近の破片であり、櫛描の横線文と波文を残す。

ＳＸ６出土土器（236～238・283～286）　量的には多くはないが、東・南周溝を中心に、中期後葉の壺や甕が出土した。

236は、凹線文を持つ受口壺E_1類である。内外にハケ、体下部にはヘラミガキを施す。その埋没は周溝の重複関係から、ＳＸ５東周溝出土例（234・235）よりも時間的には古いと考えられる。238は、頸部に櫛描横線文と櫛目斜線文、体部に箆描斜格子文を施す。285は、口縁部が強く折れて広がる甕である。口唇部には下に拡張してキザミを、口縁部内外にはヨコナデを施す。

ＳＸ７出土土器（239・240・287）　北と西の周溝から、壺や甕の破片が出土した。このほかに、北周溝付近の風倒木による攪乱部分から出土した250も、元来は一括であった可能性がある。いずれも中期後葉に属する。

239は受口壺E_3類であり、櫛目斜線列を羽状に残

す。240は受口壺である。受口部は直立しており、口唇部にキザミ、体上部に櫛目刺突列と櫛描横線文を配する。287は、細頸の受口壺A_2類である。受口部には複線鋸歯文を配し、下端を刻む。

ＳＸ９出土土器（241～243）　南と西の周溝から、中期後葉の壺が出土した。

241と242は、南周溝から一括出土した中小の壺であり、全く同巧である点が注目される。共に頸部には、振幅の小さい櫛描波文を残す。また体上半部には、複合鋸歯文に近い幾何学文と、振幅の小さい櫛描波文を配する。体下半部にはタテハケを施す。共に乳褐色を呈し、口頸部を欠く。

243は西周溝出土であり、無文の小型壺である。口縁部にはナデによる外斜面を持っており、受口壺Ｂ類に類似する。

ＳＸ11出土土器（244・245）　南周溝から出土した、中期末から後期初頭の壺である。

244は壺の底・脚台部片であり、底部には円板充填技法を用いている。脚台部には、擬凹線を上端に４本と下端に１本施し、この間に７孔の円孔を配している。脚台端は、拡張せずに肥厚する。脚台部の内面にはヘラケズリを施している。

245は、ソロバン形に近い体部に低い脚台が付く、無文の小型壺である。

ＳＸ12出土土器（246）　細頸の受口壺Ｃ類であり、中期後半に属する。口唇部にはキザミを配し、頸部下半には二股篦状具による横線と波文、体上部には篦描斜格子文を施す。

ＳＤ１出土土器（247）　中期後葉の受口甕であり、外面全体に粗いハケを施す。体部上半に、櫛状具による斜刺突文と横線文及び波文を配する。

ＳＤ２出土土器（248）　中期後葉と推定される、無文の小型壺である。口縁部外面をヨコナデし、軽く面を成しているが、受口とする程の屈曲はない。

ＳＫ１出土土器（249）　厚手で立上りのある壺の底部片である。中期前半と推定される。

ＳＫ２出土土器（289・290）　289は中期後半の受口壺であり、Ａ類に属すると推定される。受口部には、目の乱れた縦位の櫛描波文を残す。290は、中期前葉に属する無頸壺の口縁部片である。口縁部外面に櫛描横線文を施し、これを断続的にナデ消している。このような文様は、水神平式の同器種における、粗い櫛目の押引文に一脈通じるものである。

ＳＫ３出土土器（288）　中期前半に属する、壺の体部片である。櫛描流水文を持つ、当遺跡唯一の例である。

包含層出土土器（250～262・291～307）　時期別に見ると、中期前葉から出現して中期後半を中心とし、後期初頭まで続くが、例外的には欠山式の例（257）も含む。

器種別では、壺が中期前半では全て受口でないのに対し、後半ではほとんど受口である。甕も、中期前半は一部（304）を除いて「大和甕」系であるが、中期後半は受口である。やや珍しい例としては、鉢（296）がある。

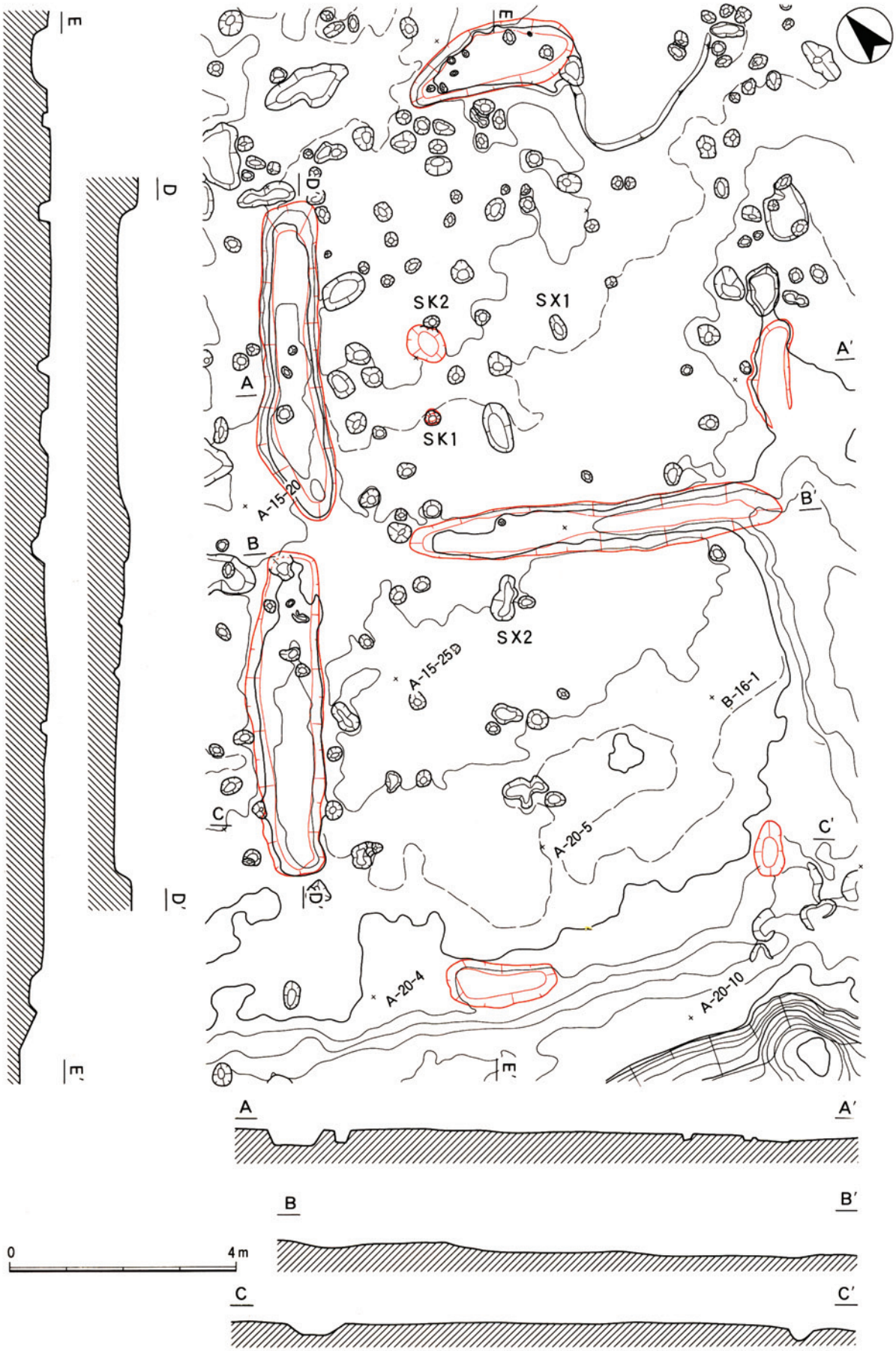
出土地点の傾向は、当然３群の方形周溝墓の周溝及びその周辺を中心とする。

西群の方形周溝墓（ＳＸ１・２）は中期後葉に属するが、ＳＸ１周辺の包含層からは中期前葉から中葉の土器も目立った。

中央群の方形周溝墓（ＳＸ３～８）は中期後半に属するが、やはり周辺の包含層からは中期前葉から中葉の土器片も出土した。

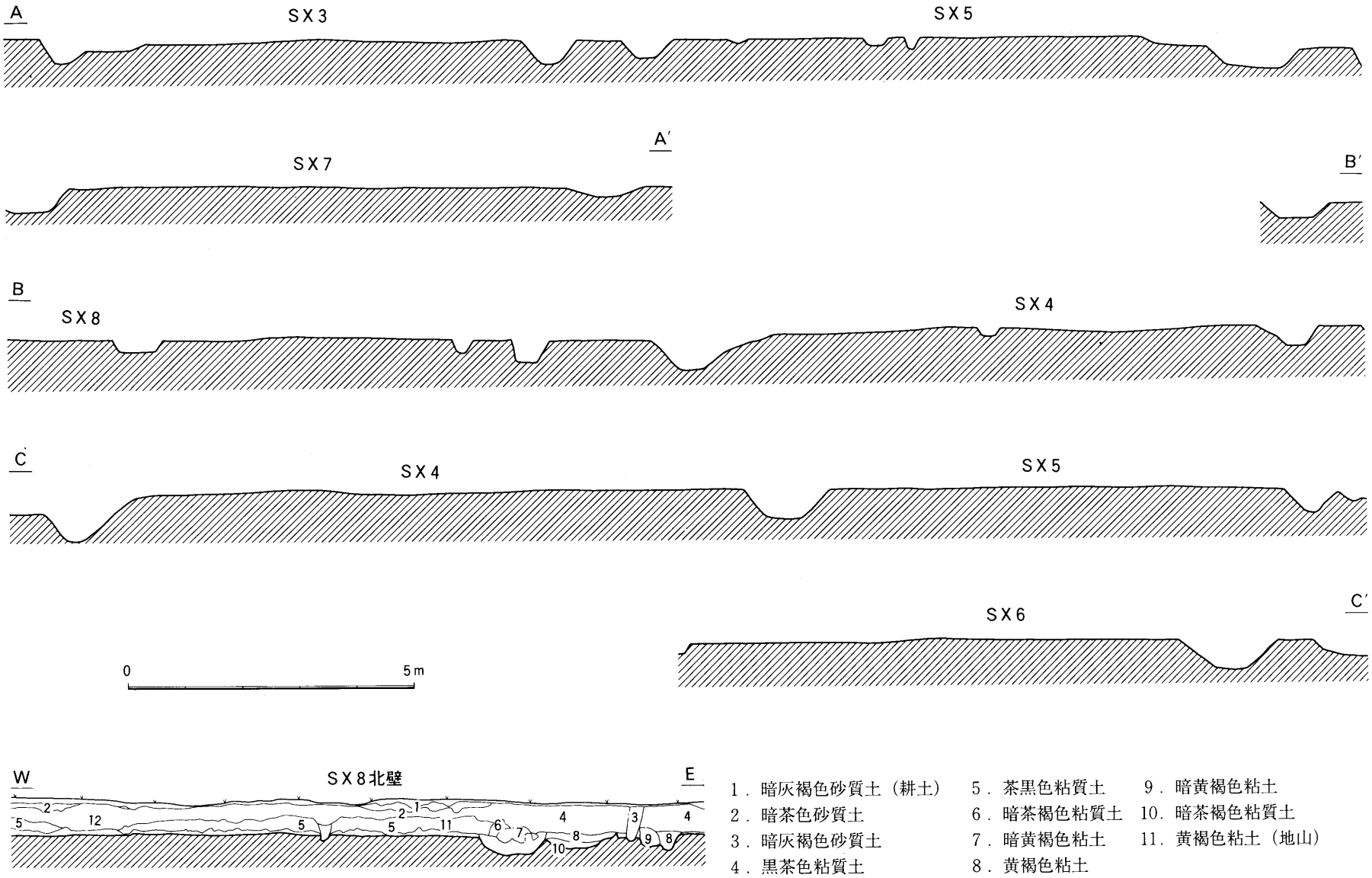
東群の方形周溝墓（ＳＸ９～11）は、中期後葉から後期初頭に属する。この周辺の包含層からは、弥生土器の出土は少ない。256は、ＳＸ10周辺出土の受口壺E_3類である。受口部の下端がＡ類のようには張り出さず、曲線的に続く。又、より南東の包含層から出土した受口壺258は、A_3類に属する。両者は、受口部に櫛目刺突や刻目棒状浮文を配する点も共通する。256はその出土位置から、ＳＸ10に伴った遺物である可能性が高い。そしてこのＳＸ10に切られたＳＸ11からは、擬凹線を施した244等が出土している。したがって256や258は、後期初頭頃まで降る可能性も否定できない。

なお、出土土器は「大和甕」系や受口甕が目立つが、胎土・色調や型式的特徴から、地元産と推定される。特に、中期後葉に粗い刷毛調整を伴う受口壺の多い点は、当地域の特色である。ただし、中央群北端の方形周溝墓ＳＸ８周辺の包含層から出土した307は尾張地方の貝田町式であり、搬入品の可能性もある。　（山田　猛）

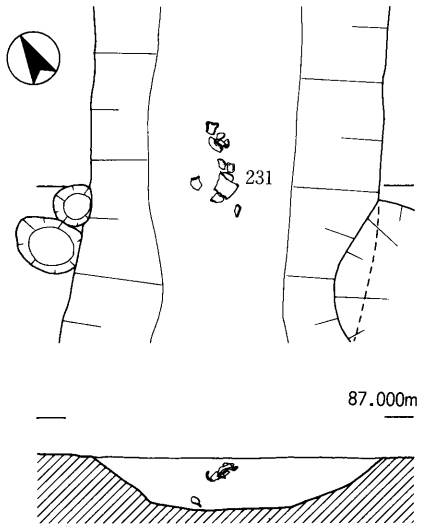


第26図　西群（ＳＸ１・２等）実測図（1：100）　水糸高は88.200m

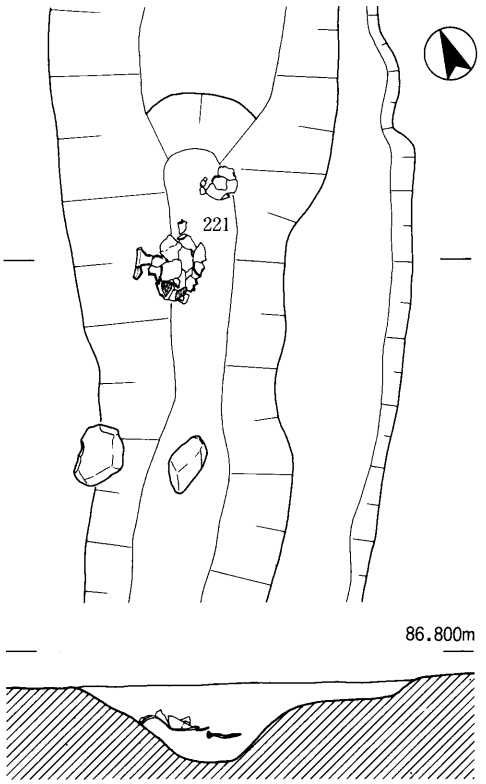
第27図　中央群（ＳＸ３～８等）実測図（１：200）



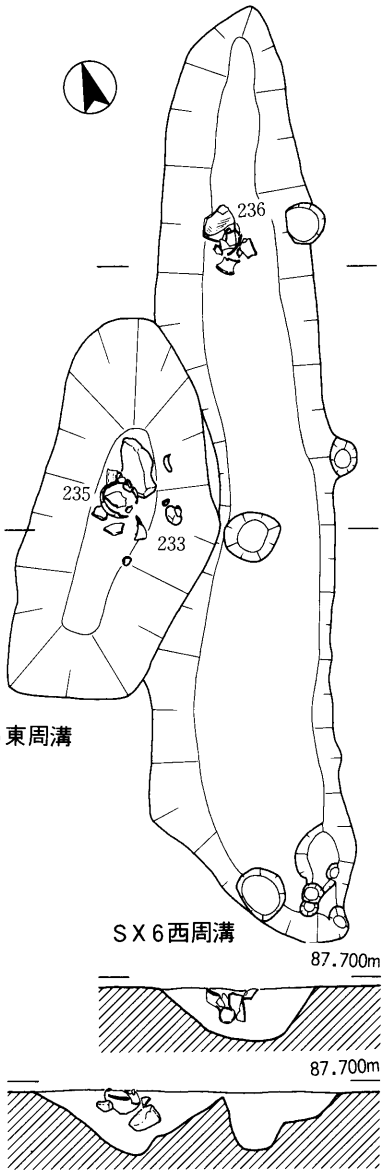
第28図　ＳＸ３～８断面図（１：100）　水糸高は断面図が88.000m、土層図が88.400m



ＳＸ４東周溝

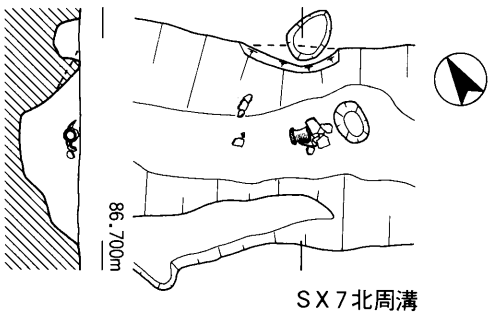


ＳＸ４西周溝

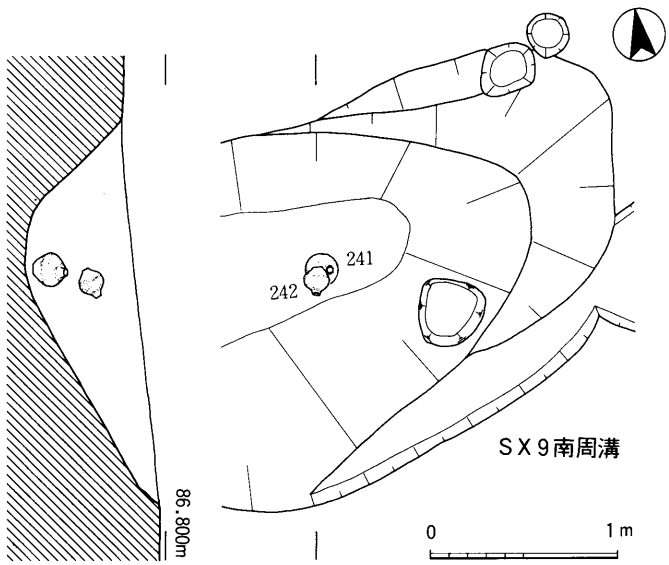


ＳＸ５東周溝

ＳＸ６西周溝

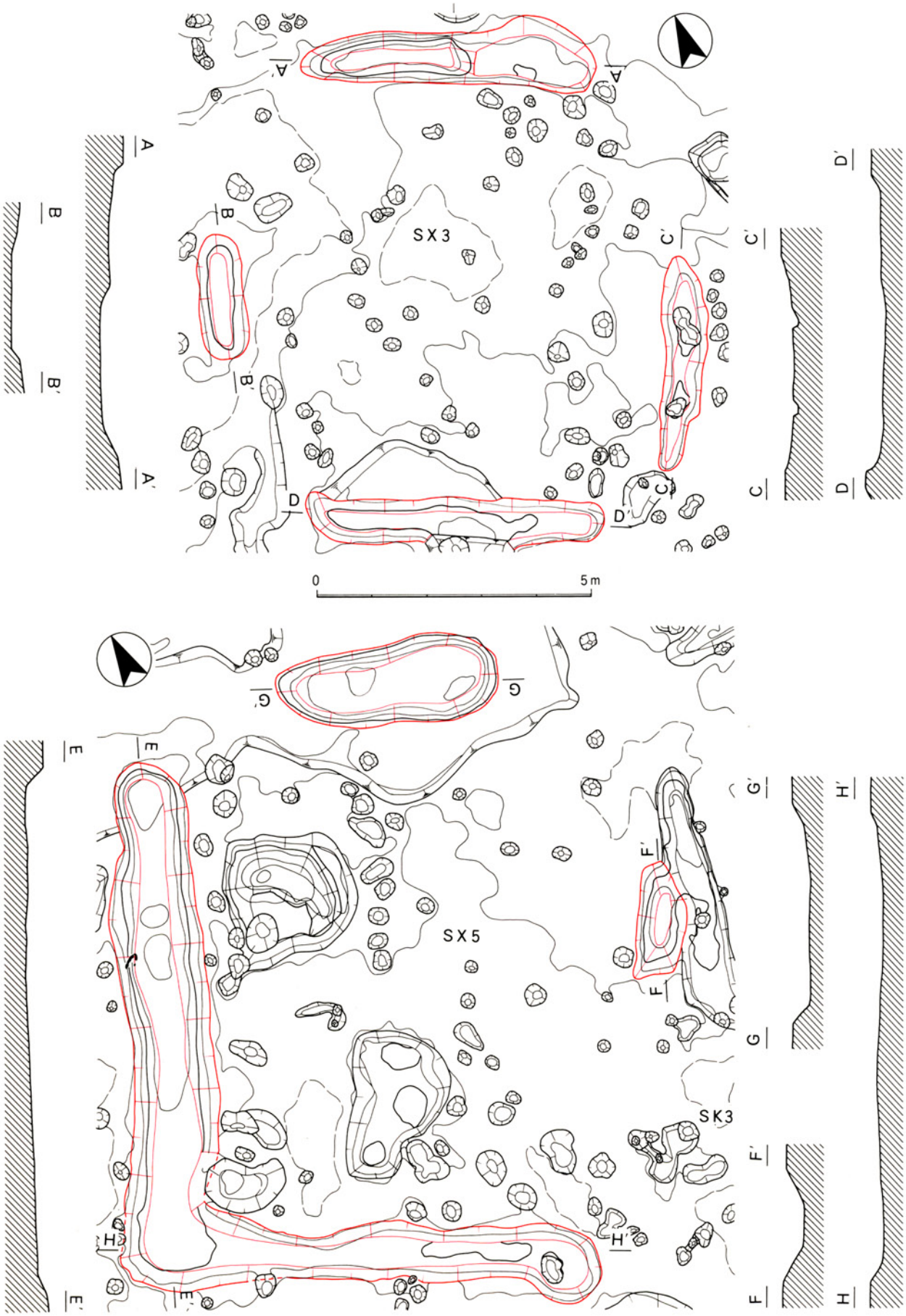


ＳＸ７北周溝

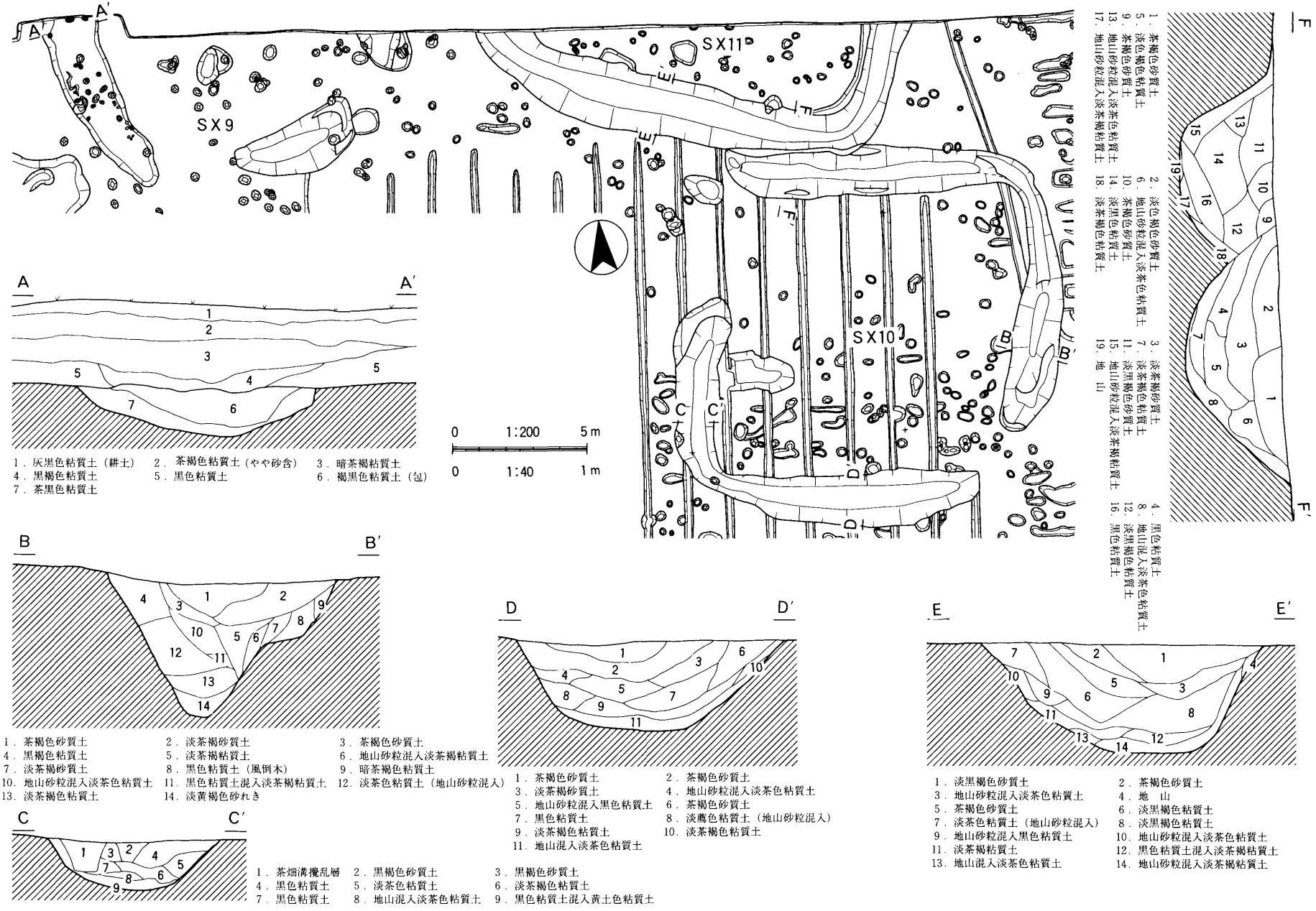


ＳＸ９南周溝

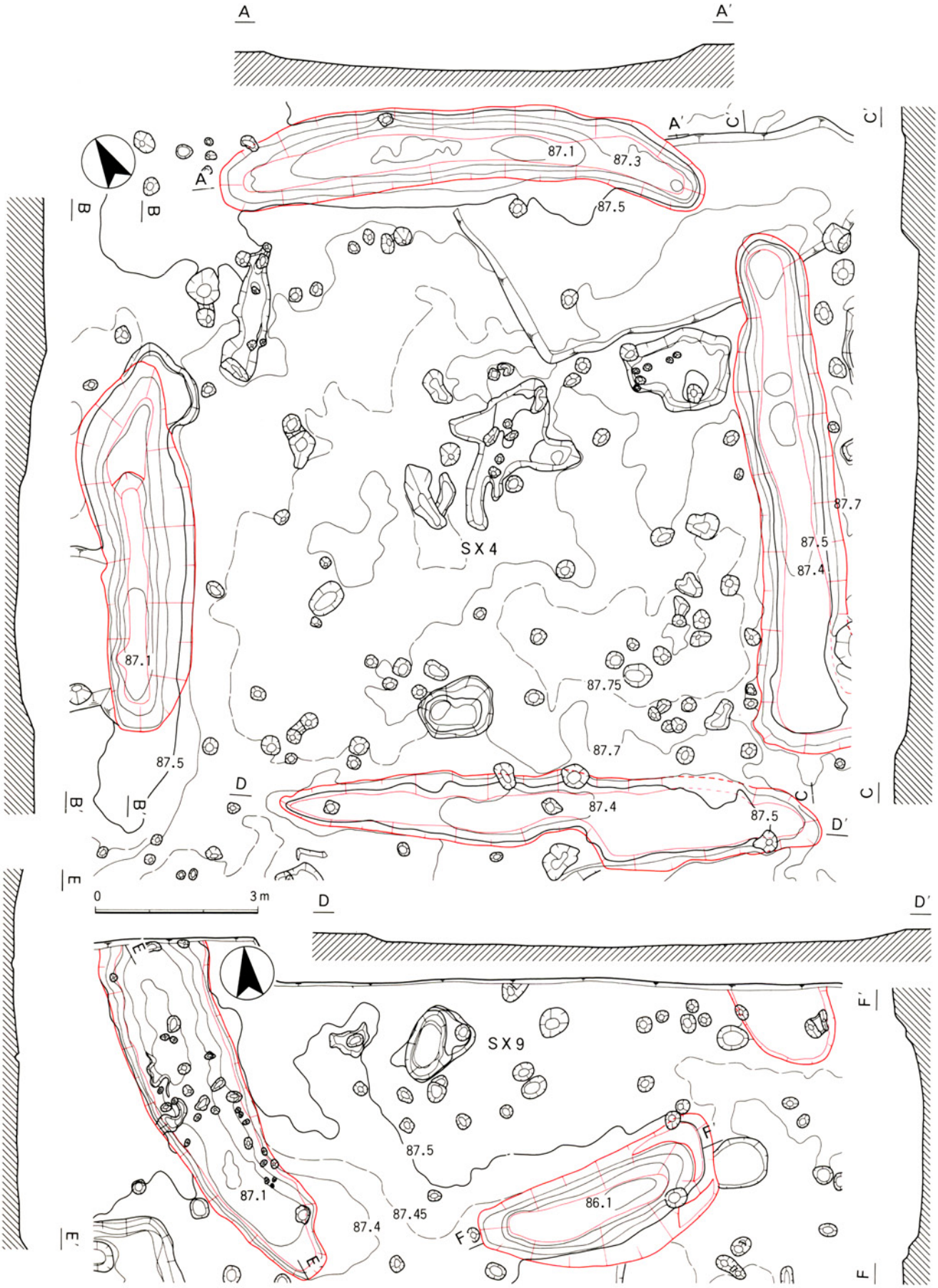
第29図　ＳＸ４～７・９遺物出土状況図（１：40）



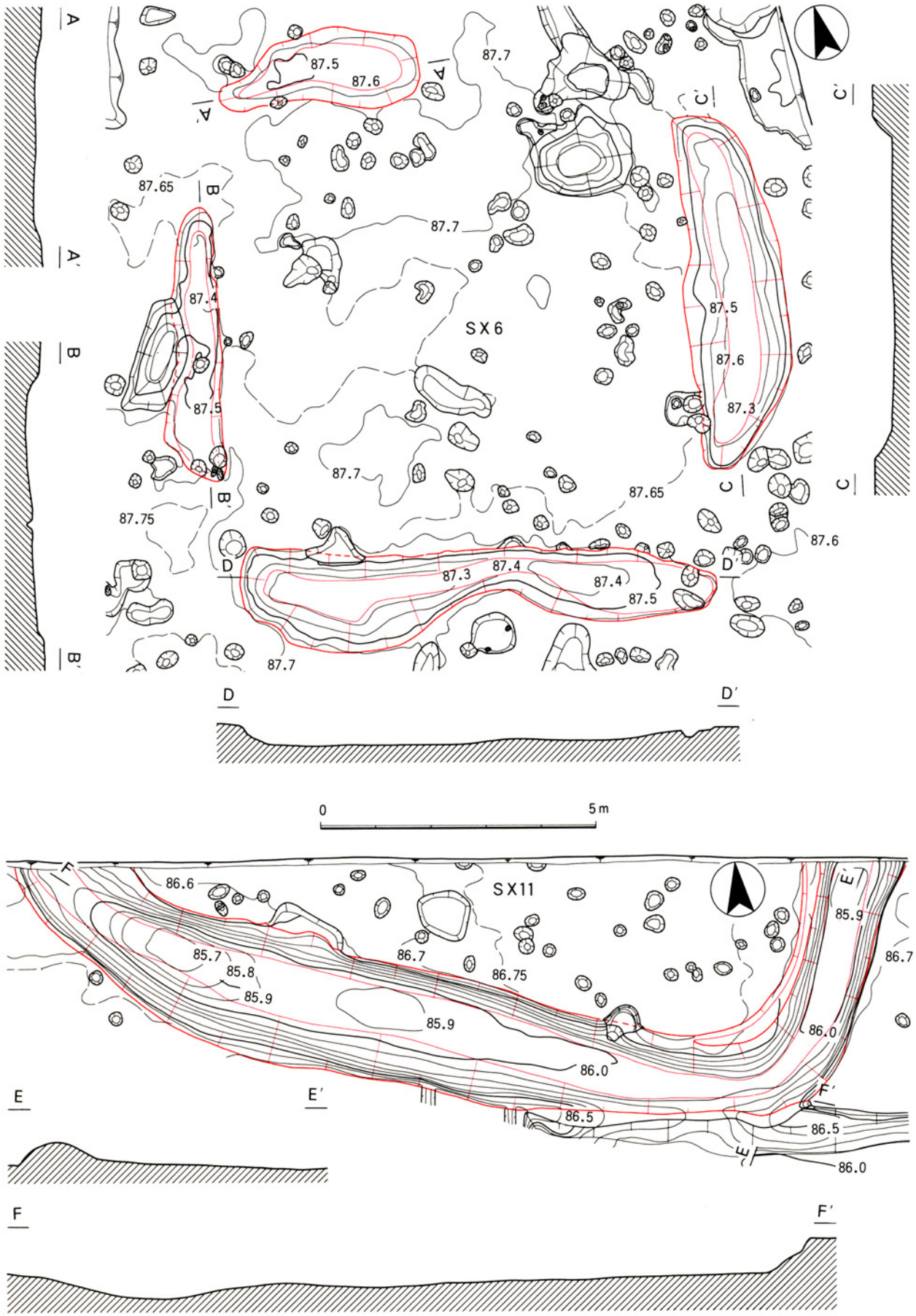
第30図　ＳＸ３・５、ＳＫ３実測図（１：100）　水糸高は88.000m



第31図　東群（ＳＸ９～11）実測図（平面図は１：200、土層図は１：40）　断面図の水糸高はＡが88.400m、他は87.800m

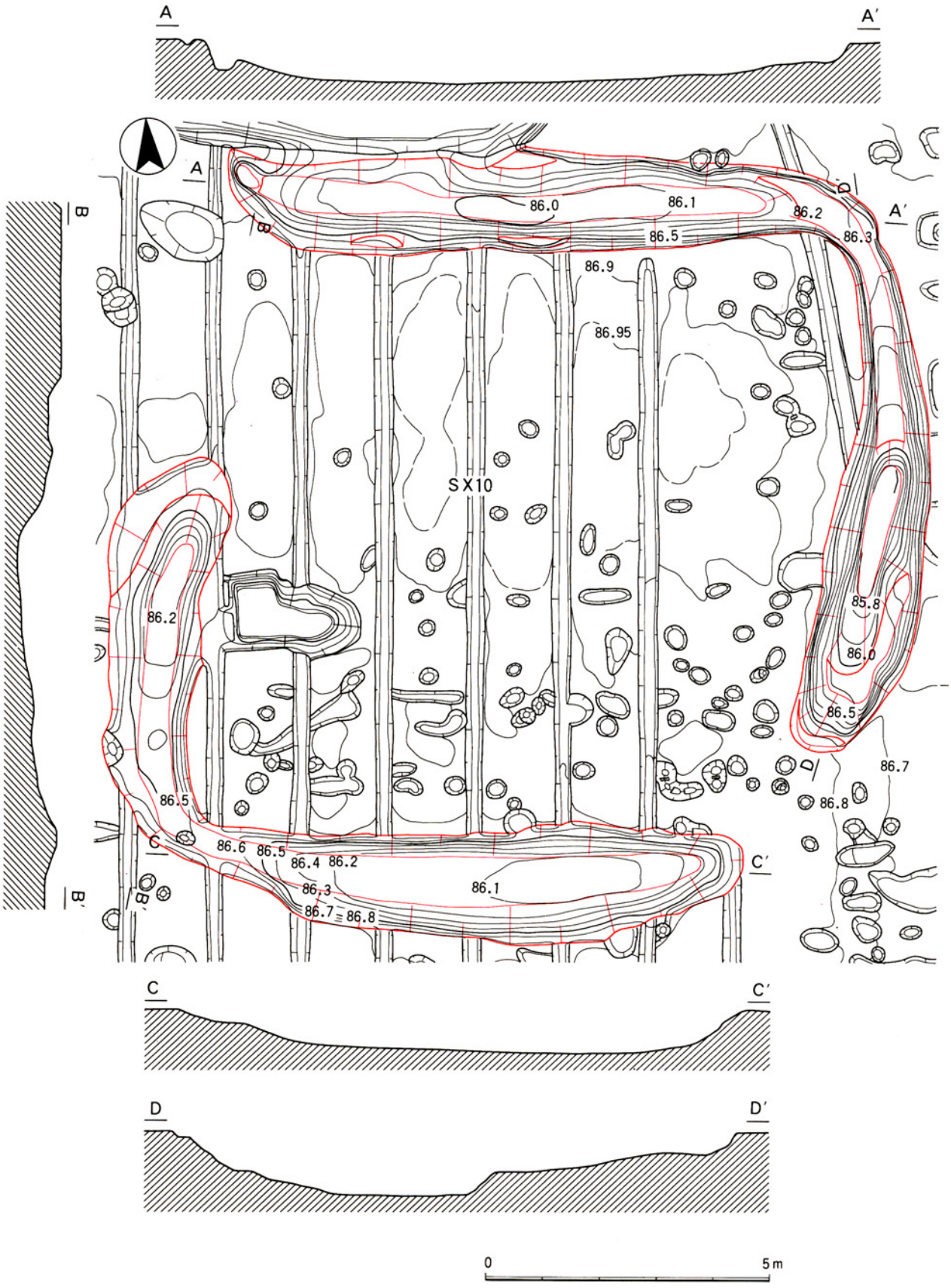


第32図　ＳＸ４・９実測図（１：100）　水糸高は88.000m

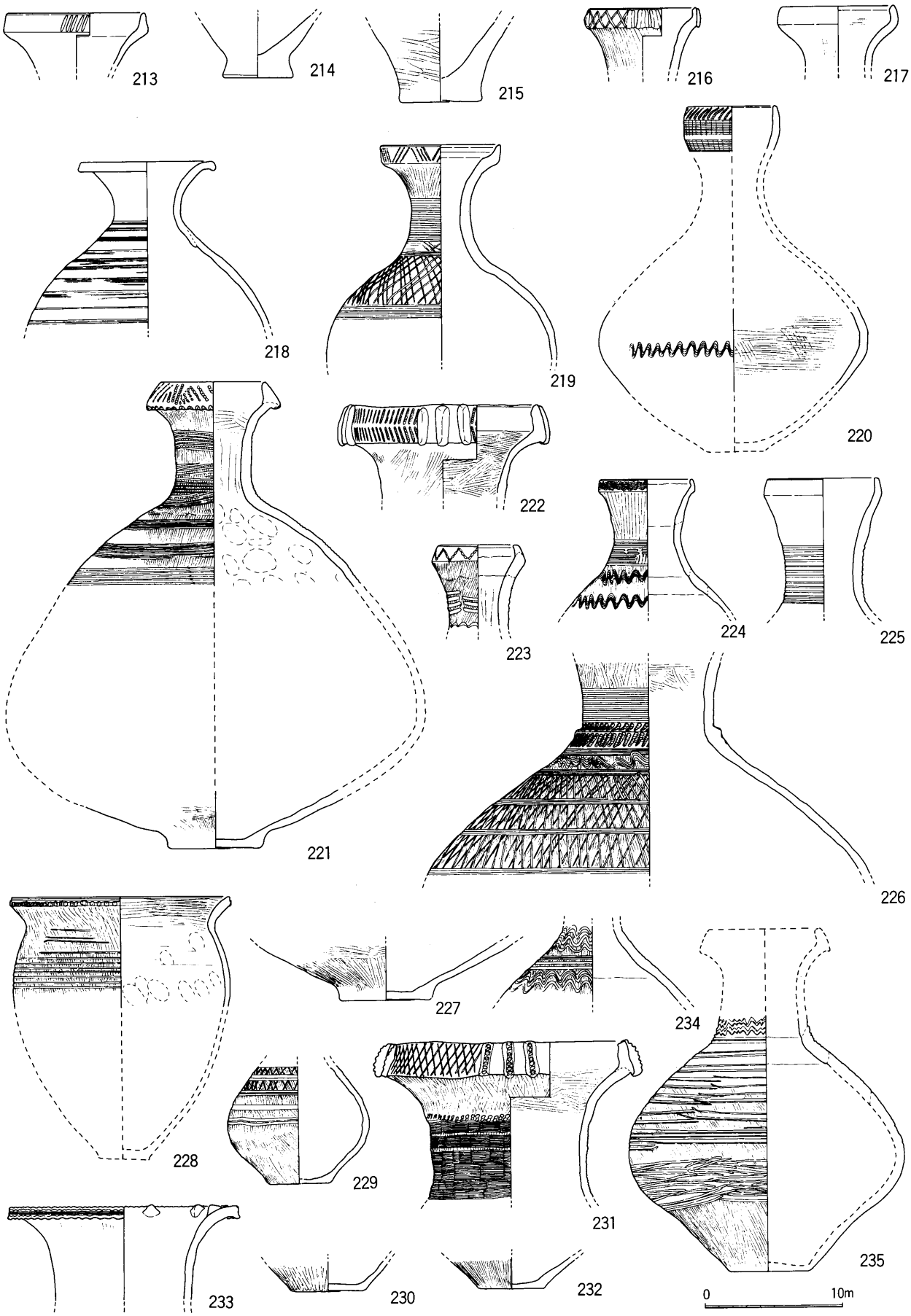


第33図　ＳＸ６・11実測図（１：100）　水糸高はＳＸ６が88.000m、ＳＸ11が87.000m

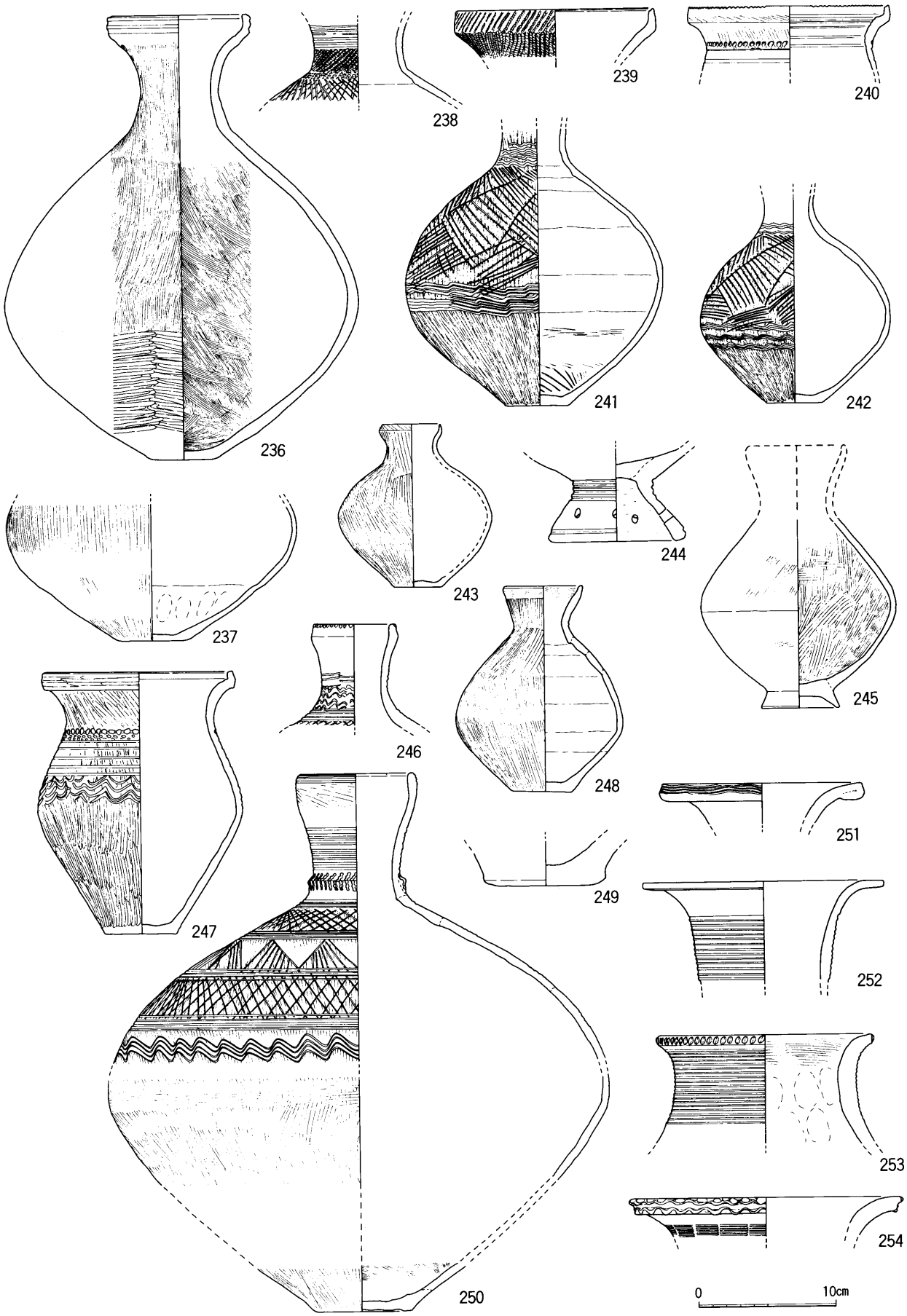
第34図　ＳＸ７・８実測図（１：100）　水糸高は88.000m



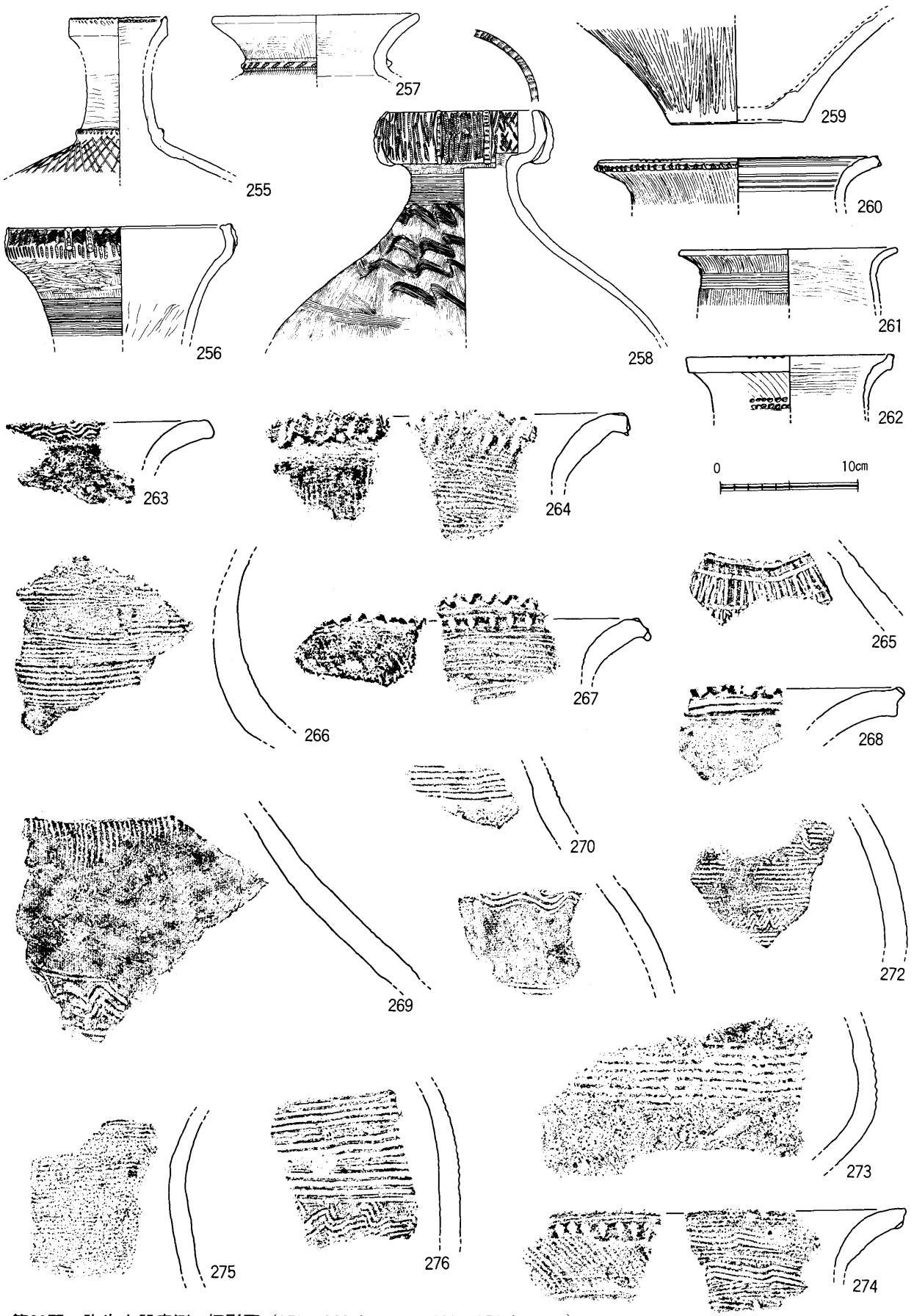
第35図　ＳＸ10実測図（1：100）　水糸高は87.000m



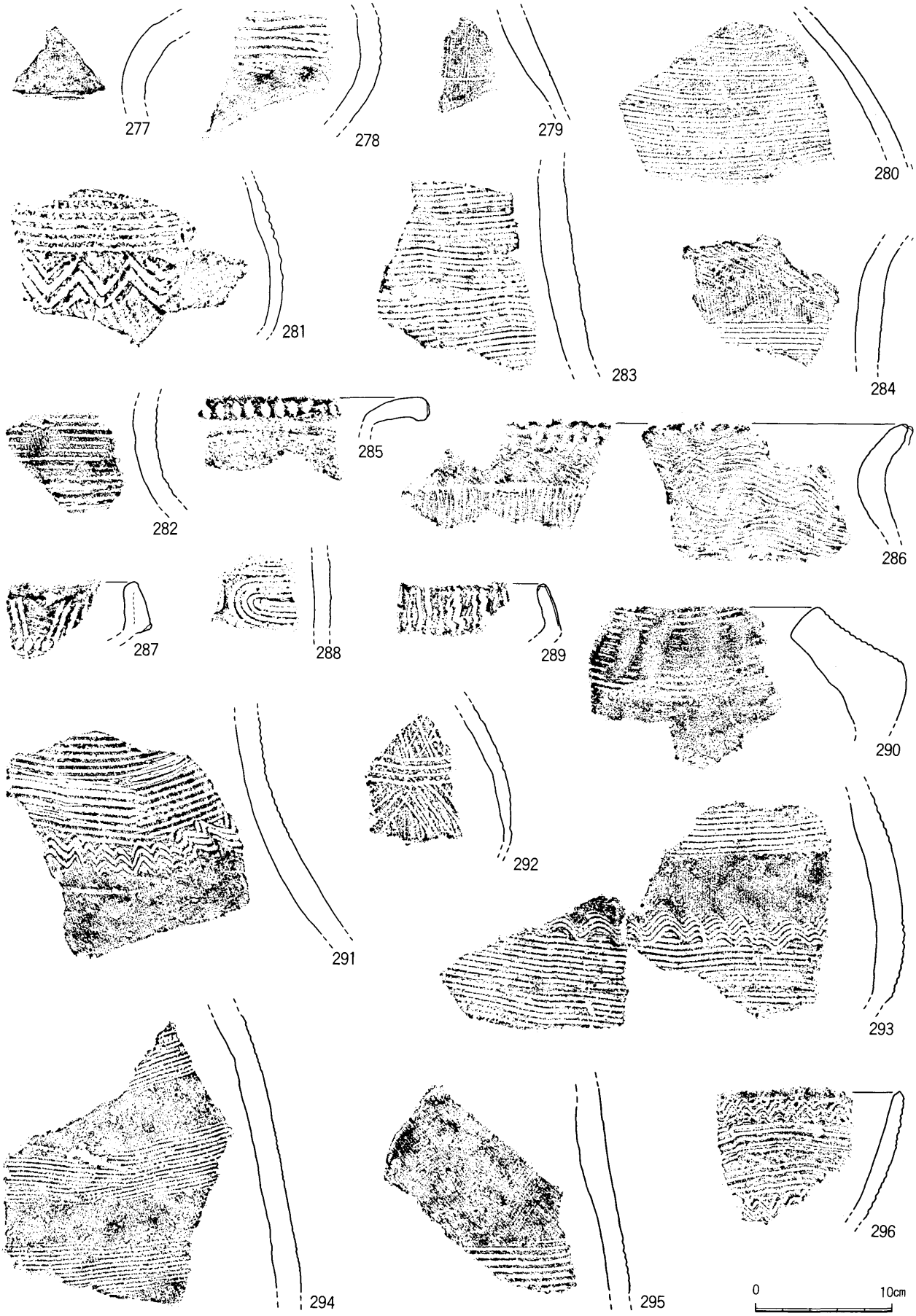
第36図　弥生土器実測図（1：4）　213～215＝ＳＸ1、216＝ＳＸ2、217～220＝ＳＸ3、221～232＝ＳＸ4、233～235＝ＳＸ5出土



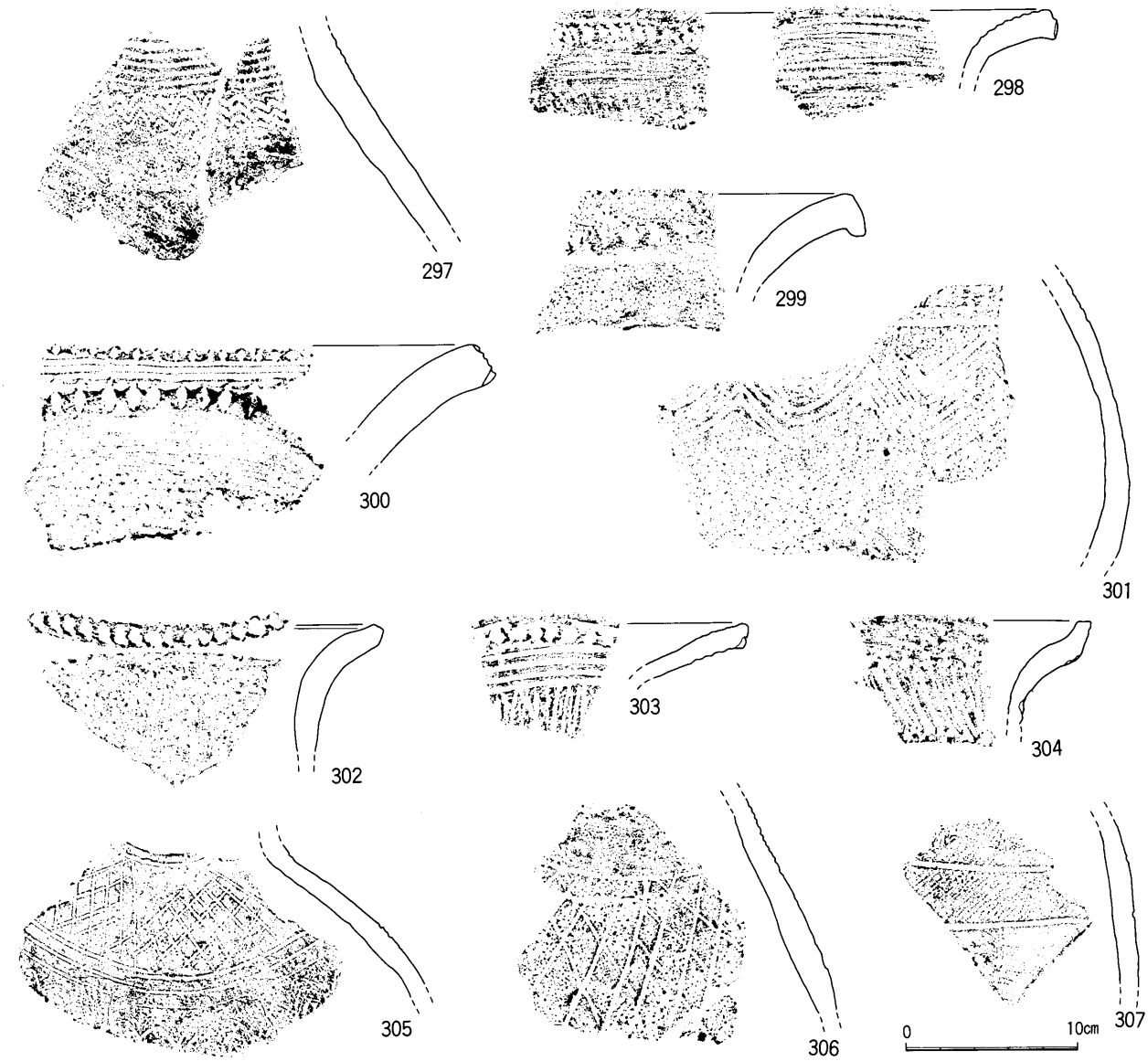
第37図　弥生土器実測図（1：4）　236～238＝ＳＸ６、239・240＝ＳＸ７、241～243＝ＳＸ９、244・245＝ＳＸ11、246＝ＳＸ12、247＝ＳＤ１、248＝ＳＤ２、249＝ＳＫ１、250～254＝包含層出土



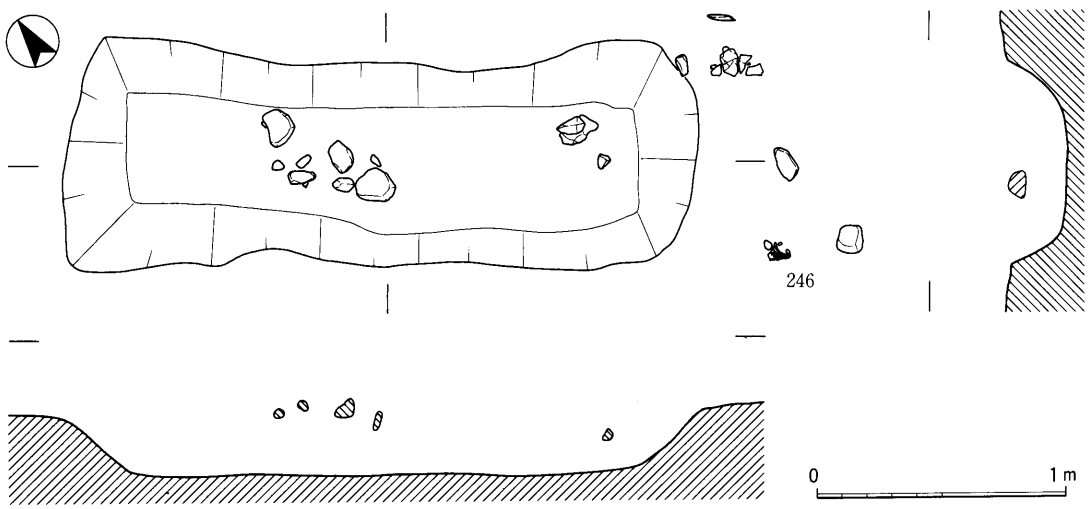
第38図　弥生土器実測・拓影図（255～262は１：４、263～276は１：２）
255～262＝包含層、263～266＝ＳＸ１、267＝ＳＸ２、268～274＝ＳＸ３、
275・276＝ＳＸ４出土



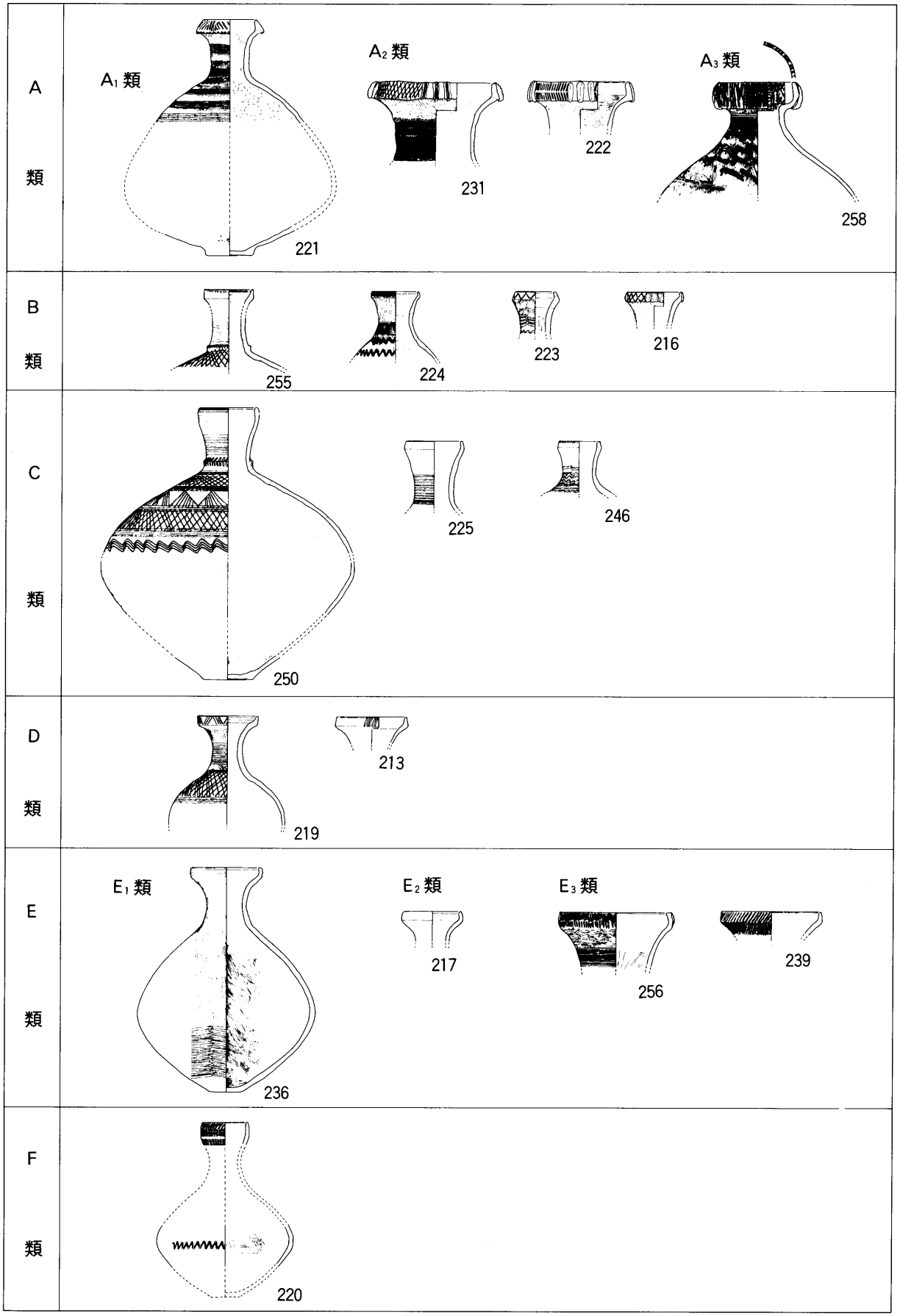
第39図　弥生土器拓影図（1：2）　277～280＝ＳＸ４、281・282＝ＳＸ５、283～286＝ＳＸ６、287＝ＳＸ７、288＝ＳＫ３、289・290＝ＳＫ２、291～296＝包含層出土



第40図　弥生土器拓影図（1：2）包含層出土



第41図　ＳＸ12実測図（1：30）　水糸高は88.000m



第13表　受口壺形式分類表

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	器種	cm 法量	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
213	122	ＳＸ１南周溝	細頸の受口壺Ｄ類	口縁部径9.8	受口部の５本の縦位沈線は、今は剝離痕も確認不能だが本来は４本の棒状浮文があり、その間のナデか	砂粒多含	良好	淡黄橙色	口縁部1/6残	磨耗
214	173	ＳＸ１西周溝	小型壺	底径約5.8	外面ヨコナデ。底部不調整。内面タテナデ	灰色砂粒多含	良好	暗褐色	底部約1/3残	歪み大
215	83	ＳＸ１西周溝	小型壺	底径約6.1	外面ヨコヘラミガキ。底部ナデ。内面タテナデ	小石含	良好	明黄褐色	底部約1/3残	
216	88	ＳＸ２西周溝	細頸の受口壺Ｂ類	口縁部径7.8	受口部は篦描斜格子文と棒状浮文。頸部はタテハケ（５本/１cm）	砂粒含	良好	灰白色	小片	
217	95	ＳＸ３北周溝	細頸の受口壺E_2類	口縁部径8.2	受口部内面にヨコハケ、頸部外面にタテハケ	砂粒含	良好	淡黄橙色	口縁部1/3残	磨耗顕著
218	560	ＳＸ３南周溝	広口壺	口縁部径9.4	口頸部内外はヨコナデ。体上部には目の太さの不統一な櫛による横線文	砂粒含	良好	淡橙色	上半分の1/2余残	
219	92	ＳＸ３南周溝	細頸の受口壺Ｄ類	口縁部径8.5	受口部に櫛目による複線鋸歯文。頸部はタテハケ後、下半部に櫛描横線文。体上部には篦描斜格子文の上下に櫛描横線文	砂粒多含	良好	橙色	上半分の1/4残	図上復元
220	93	ＳＸ３南周溝	受口壺Ｆ類	口縁部径5.3	口縁部に櫛目斜線列と櫛描簾状文。体部最大径付近に櫛描波文、内面にはハケ	砂粒多含	良好	灰白色	口縁部と体部の1/4	いわゆる袋状口縁壺
221	133	ＳＸ４西周溝	細頸の受口壺Ａ類	口縁部径7.5 底部径6.2	受口部に櫛目による複合鋸歯文。頸部以下はタテハケ後に櫛描横線文。体部内面には指圧痕	砂粒含	良好	淡黄褐色	口頸部完形	
222	41	ＳＸ４西周溝	太頸の受口壺Ａ類	口縁部径13.6	受口部に櫛目羽状文と３本の棒状浮文。頸部の内外にハケ	砂粒多含	良好	淡黄褐色	口縁部1/5残	磨耗
223	43	ＳＸ４西周溝	細頸の受口壺Ｂ類	口縁部径5.2	受口部に櫛目鋸歯文。頸部にはタテハケ後に櫛描の横線文と波文	砂粒多含	良好	淡乳褐色	口縁部1/5残	
224	103	ＳＸ４西周溝	細頸の受口壺Ｂ類	口縁部径6.3	受口部に櫛描波文。頸部はタテハケの後、下半部に櫛描横線文。体上部はタテハケの後に櫛描波文	砂粒多含	良好	明褐色	口頸部完形	文様は全体的に雑、一部に黒斑
225	123	ＳＸ４西周溝	細頸の受口壺Ｃ類	口縁部径7.6	頸部に櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗褐色	口頸部完形	歪み
226	134	ＳＸ４西周溝	太頸壺	頸部径9.6	頸部はタテハケの後、下半部に櫛描横線文。頸体部境の低い断面三角形の突帯に櫛目羽状文。体上部にはタテハケの上に、櫛描の横線文とその間の波文、さらに下に篦描斜格子文と櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗橙褐色	頸部・体上部一部残	
227	208	ＳＸ４西周溝	壺	底径約6.8	外面ハケ。内面タテナデ	灰色砂粒多含	良好	淡黄橙色	底部約1/3残	
228	42	ＳＸ４西周溝	甕	口縁部径15.8	口唇部には篦状具によるＶ字キザミ。外面には粗いタテハケ。体上部には櫛描横線文。内面には粗いヨコハケ	砂粒多含	良好	暗褐色	口頸部4/5残	「大和甕」系
229	112	ＳＸ４北周溝	小型壺	底部径5.4	体部外面に粗いタテハケ。体上部には篦描斜格子文と櫛描横線文	砂粒含	良好	淡黄色	底部約1/3残	図上復元

第14表　弥生土器観察表（１）

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	器種	cm 法量	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
230	110	ＳＸ４北周溝	壺	底部径5.5	外面に粗いタテハケ。底部外面や内面にはナデ	砂粒多含	良好	橙色	底部は4/5残	
231	44	ＳＸ４東周溝	太頸の受口壺Ａ２類	口縁部径17	受口部に篦描斜格子文と篦刻棒状浮文を３本４対。頸上部の内外にハケ。頸部外面に二股篦状具による刺突列と、櫛描簾状文	砂粒多含	良好	淡黄褐色	口頸部1/2残	
232	110	ＳＸ４東周溝	壺	底径約4.8	外面に細かいタテハケ。底部外面はナデ	砂粒含	良好	灰褐色	底部は4/5残	あるいは甕か
233	30	ＳＸ５東周溝	太頸壺	口縁部径16.4	口唇下端は少し拡張し、上下にヘラキザミ。口縁内面に山形の浮文を等間隔に１０貼付。外面はタテハケにヨコナデ	砂粒含	良好	淡黄褐色	口頸部1/4残	
234	105 113	ＳＸ４西周溝 ＳＸ５東周溝	壺		体上部は粗いハケの上に、目の太い櫛状具で波文・横線文・波文	砂粒多含	良好	淡黄橙色	体上部1/2残	黒斑
235	29	ＳＸ５東周溝	壺	底部径11.6	頸部に櫛描波文。体部には粗いハケ。体上部に二股篦状具にる横線文。最大径より下に横位のヘラミガキ	精良	良好	淡褐色	体底部1/4残	やや磨耗
236	28	ＳＸ６西周溝	受口壺Ｅ１類	口縁部径5 器高32.4	受口部に浅い凹線文。内外にハケ。体下部に横位のヘラミガキ	砂粒多含	良好	淡黄褐色	口縁部2/5、体部約1/3残	歪み少。体部穿孔は見られず
237	117	ＳＸ６南周溝	壺	底部径9.8	体部外面にタテハケ	砂粒少含	良好	淡赤褐色	体部約1/2、底部完残	磨耗
238	115	ＳＸ６東周溝	広口壺	頸部径6.4	頸部に櫛描横線文。頸部から体部にかけて櫛目斜線列。体部に篦描斜格子文	砂粒少含	良好	淡黄橙色	頸体部1/4残	図上復元
239	76	ＳＸ７北周溝	受口壺Ｅ３類	口縁部径14.2	受口部外面に櫛目羽状文	砂粒含	良好	暗橙色	口縁部1/6残	
240	206	ＳＸ７西周溝	受口甕	口縁部径14.6	口唇上端面に一部を残してキザミ。頸部に１条の櫛目刺突列。以下に櫛描横線文。口頸部内外に粗いハケ	砂粒含	良好	赤褐色	口縁部1/8残	
241	1066	ＳＸ９南周溝	中型壺	底部径4.5	外面全体にタテハケ。頸部に櫛描波文。体上部に篦描複合鋸歯状の幾何学文と櫛描波文	砂粒多含	良好	乳褐色	口頸部以外は完形	口頸部は意図的に欠くか。242と同巧異大
242	1067	ＳＸ９南周溝	小型壺	底部径3.9	外面全体にタテハケ。頸部に櫛描波文。体上部に篦描複合鋸歯状の幾何学文と櫛描波文	砂粒多含	良好	乳褐色	口頸部以外は完形	口頸部は意図的に欠くか。241と同巧異大
243	304	ＳＸ９西周溝	小型壺	口縁部径4.1 器高11.8	受口状に口縁端を屈曲させて面を作る。外面全体にハケ	砂粒含	良好	暗黄褐色	完形	歪み。体部に黒斑
244	1069	ＳＸ11南周溝	台付壺	脚台径8.6	脚台部に４本と１本の擬似凹線文及び透孔７孔。脚台内面はヘラケズリ	砂粒含	良好	淡黄褐色	脚台部完形	
245	1068	ＳＸ11南周溝	台付壺	脚台径5.4	口唇部は小さく内傾気味。内外にタテハケ。外面はハケをナデ消すか。底部は脚台部と一体で接合	砂粒多含	良好	淡黄褐色	3/4残	図上復元

第15表　弥生土器観察表（２）

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	器種	cm 法量	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
246	587	SX12	細頸の受口壺C類	口縁部径5.9	口唇部キザミ。受口状に口唇部外面に面を作る。頸部下半に二股篦状具にる横線文と波文、横線文。続けて体上部に篦描斜格子文	砂粒多含	良好	黄白色	口縁部半欠、頸部完形	小黒斑
247	27	SD1	受口甕	口縁部径13.5 器高19	受口部外面にヘラミガキ。外面に粗いタテハケ。体上部に櫛状具による斜刺突文と横線文、波文	砂粒含	良好	茶黄色	体下部1/4残	図上復元、体部穿孔は見られず
248	308	SD2	小型壺	口縁部径5.6 器高14.8	口縁端をヨコナデして面をなし、やや受口状に作る。以下の外面全体はタテナデ	砂粒含	良好	黄褐色	完形	歪み、風化顕著
249	58	SK1	壺	底部径8.3	内外にナデ	砂粒多含	良好	橙褐色	底部約3/4残	風化顕著
250	82	B-13-8包含層	細頸壺	口縁部径8	口唇部外面と頸部下半に櫛描横線文。頸部下の低い断面三角形の突帯に櫛目羽状文。体部にはタテハケ。体上部には櫛描横線文と篦描の複線鋸歯文や斜格子文、さらに櫛描波文	砂粒多含	良好	淡黄褐色	口頸部はほぼ完形	全体は図上復元だが、口縁部と体上部は確実に接合
251	147	B-18-18包含層	広口壺	口縁部径14.4	折返して肥厚した口唇部に櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗褐色	口頸部1/6残	歪みで外反し過ぎか
252	11	A-15-20包含層	太頸壺	口縁部径17.6	頸部に目の太い櫛描横線文	砂粒多含	良好	淡橙褐色	口縁部1/5残	
253	48	B-18-13包含層	太頸壺	口縁部径15.3	口唇部にキザミ。この直下に目の太い櫛描横線文	砂粒含	良好	黄褐色	口縁部1/5残	図は内斜し過ぎか
254	142	B-17-1包含層	広口壺	口縁部径19.5	口唇上下端を指圧。口縁部外面に目が太くて断続的な櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗褐色	口縁部1/8残	図は歪みで外反し過ぎか
255	136	B-18-22包含層	細頸の受口壺B類	口縁部径6.9	口唇部上端と内側にキザミ。頸部はヨコハケ。頸部下端に断面三角形の刻目突帯。体上部に篦描斜格子文	砂粒多含	良好	橙色	口縁部1/8残	磨耗
256	1034	C-12-21包含層	受口壺E3類	口縁部径16	口唇部外面に櫛描横線文と櫛目刺突列、この上にキザミ入り棒状浮文が2本何対か。頸部はタテハケ後にヨコヘラミガキや櫛描横線文	砂粒多含	良好	黄橙色	口縁部1/8残	古墳時代初頭だが便宜的に掲載
257	192	B-17-15包含層	広口壺	口縁部径15.1	口縁部は無文。頸部に櫛目刺突文を持つ三角突帯	砂粒多含	良好	橙色	口縁部1/5残	後期
258	1026	C-23-16包含層	受口壺A3類	口縁部径11.1	口唇部上面に櫛目押引文。口唇部外面に櫛目刺突を羽状や斜格子状に、この上に1本と2本の棒状浮文を共に2対。頸部はタテハケ後に櫛描横線文。体部はタテハケ後に乱れた櫛描の波文と横線文	砂粒多含	良好	淡茶褐色	口縁部完形、頸部一部欠	
259	201	B-16-4包含層	壺	底部径10	外面に縦位のハケとヘラミガキ	砂粒多含	良好	淡茶褐色	底部約1/4残	
260	155	B-13-23包含層	甕	口縁部径20.2	口唇上面の一部と下端にキザミ。粗いハケを外面は縦、内面は横に施す	砂粒含	良好	淡黄褐色	口縁部1/8残	歪み。「大和甕」系
261	139	B-13-23包含層	甕	口縁部径15.8	外面にタテハケ。頸部に櫛描横線文	砂粒多含	良好	淡黄褐色	口縁部4cm残	磨耗
262	135	B-18-13包含層	受口甕	口縁部径14.5	口唇上面の一部にキザミ。口縁部は粗いハケを外面には斜め、内面には横に施す。頸部に櫛目刺突文	砂粒含	良好	茶黄色	口縁部1/8残	

第16表　弥生土器観察表（3）

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	器種	法量 cm	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
263	84	ＳＸ１西周溝	広口壺	――	口唇部に櫛描波文。口縁部内外はヨコナデ	砂粒多含	良好	橙色	口縁部片	
264	86	ＳＸ１南周溝	甕	――	口唇部の上下端にキザミ。粗いハケを外面は縦、内面は横に施す	砂粒多含	良好	灰褐色	口縁部片	「大和甕」系
265	85	ＳＸ１西周溝	壺	――	タテハケ後、篦描横線	砂粒含	良好	明灰褐色	体上部片	
266	87	ＳＸ１北周溝	壺	――	８本１単位の櫛描横線文	砂粒多含	良好	橙色	頸部片	
267	88	ＳＸ２西周溝	甕	――	口唇部の上下端にキザミ。粗いハケを外面は縦、内面は横に施す	砂粒多含	良好	暗黄橙色	口縁部片	「大和甕」系
268	96	ＳＸ３北周溝	壺	――	口唇部の上端に円形押圧文、端面に２本の櫛描横線文	砂粒含	良好	橙色	口縁部片	
269	97	ＳＸ３北周溝	壺	――	無文部にタテハケとヘラミガキ。櫛描波文	砂粒少含	良好	橙色	体上部片	
270	98	ＳＸ３北周溝	壺	――	ヘラミガキ後、太い目の櫛描横線文	砂粒少含	良好	橙色	体上部片	271と同一個体か
271	98	ＳＸ３北周溝	壺	――	ヘラミガキ後、太い櫛目の波文と横線文	砂粒少含	良好	橙色	体部片	270と同一個体か
272	99	ＳＸ３北周溝	壺	――	櫛描の横線文と波文	砂粒含	良好	暗橙色	体部片	
273	94	ＳＸ３北周溝	壺	――	太い目の櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗黄橙色	体部片	
274	90	ＳＸ３東周溝	甕	――	口唇部下端にキザミ。粗いハケを口縁端面に横、口縁部外面に斜、内面に横に施す	砂粒多含	良好	暗橙色	口縁部片	「大和甕」系か
275	101	ＳＸ４東周溝	壺	――	断続的な回転による櫛描の横線文	細砂粒含	良好	淡黄土色	頸部片	
276	108	ＳＸ４南周溝	壺	――	太い目の櫛描横線文	砂粒含	良好	暗褐色	体部片	
277	102	ＳＸ４東周溝	壺	――	ヨコナデ後、櫛描横線文	砂粒少含	良好	暗橙色	頸部片	278と同一個体か
278	102	ＳＸ４東周溝	壺	――	ヘラミガキ後、櫛描横線文	砂粒少含	良好	暗橙色	体部片	277と同一個体か
279	111	ＳＸ４北周溝	壺	――	タテハケ後、篦描横線文	砂粒多含	良好	暗黄橙色	体部片	
280	109	ＳＸ４西周溝	壺	――	櫛描横線文	砂粒多含	良好	橙色	体部片	
281	207	ＳＸ５東周溝	甕	――	櫛描の横線文と波文	砂粒少含	良好	黒褐色	体部片	
282	114	ＳＸ５北周溝	壺	――	櫛描横線文	砂粒多含	良好	暗橙色	体部片	
283	118	ＳＸ６南周溝	壺	――	目の太い櫛描横線文	砂粒多含	良好	橙色	頸部片	
284	119	ＳＸ６北周溝	壺	――	ナナメ及びヨコハケ後、櫛描横線文	砂粒多含	良好	橙色	頸部片	
285	116	ＳＸ６東周溝	壺	――	口縁端面にキザミ。口縁部内外にヨコナデ	砂粒多含	良好	暗黄橙色	口縁部片	
286	120	ＳＸ６南周溝	甕	――	口縁端部にキザミ。口縁部の外面はタテナデ、内面はヨコナデ	砂粒含	良好	淡黄橙色	口縁部片	

第17表　弥生土器観察表（４）

報告番号	整理番号	出土位置遺構等	器種	法量 cm	製作・調整技法等の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
287	121	SX7 北周溝	受口壺 A2類	———	受口部に複線鋸歯文と下端に刺突文	砂粒少含	良好	橙色	口縁部片	
288	132	SK3	壺	———	櫛描流水文	砂粒多含	良好	橙色	体部片	
289	17	SK2	受口壺 A類	———	受口部に目の乱れた櫛状具による縦位波文	砂粒多含	良好	黒褐色	口縁部片	口唇上端に刻みの可能性もある
290	12	SK2	無頸壺	———	口縁部外面の櫛描横線文上を断続的にナデ消す。内面はヘラケズリ	砂粒多含	良好	淡黄色	口縁部片	
291	13	A-15-20 包含層	壺	———	ヨコナデ後、櫛描の横線文と波文	砂粒含	良好	淡赤褐色	体上部片	
292	24	A-15-20 包含層	壺	———	篦描斜格子文の上に櫛描横線文	砂粒含	良好	明褐色	体部片	
293	19	A-15-20 包含層	壺	———	櫛描の横線文と波文	砂粒含	良好	茶灰色	体部片	
294	20	A-15-20 包含層	壺	———	ヨコナデ後、櫛描横線文	砂粒含	良好	黒茶色	体部片	
295	22	A-15-20 包含層	壺	———	ナナメハケ後にヨコナデ、櫛描横線文	砂粒含	良好	明褐色	体部片	
296	15	A-15-20 包含層	鉢	———	櫛描の横線文と波文	砂粒多含	良好	暗褐色	口縁部片	
297	21	A-15-20 包含層	壺	———	ハケ後にヨコヘラミガキ、さらに櫛描の横線文と波文	砂粒含	良好	暗褐色	体部片	
298	16	A-15-20 包含層	甕	———	口唇部下端にキザミ。粗いハケを口縁端面に横、口縁部外面に斜、内面に横に施す	砂粒少含	良好	灰褐色	口縁部片	「大和甕」系
299	18	A-15-20 包含層	甕	———	口唇部を下に拡張。内外面にヨコナデ	細砂粒含	良好	淡黄橙色	口縁部片	大型甕か
300	162	B-12-23 包含層	広口壺	———	口唇部に櫛描横線文と、この上下に刷毛状具によるヘラキザミ	細砂粒含	良好	橙褐色	口縁部片	
301	26	B-11-17 包含層	壺	———	ハケ後にヨコヘラミガキ、さらに櫛描の横線文と波文	精良	良好	淡黄橙色	体部片	
302	559	C-21-21 包含層	広口壺	———	口唇部に円形押圧列。外面にヨコナデ	砂粒多含	脆弱	淡黄褐色	口縁部片	もう少し外反か
303	156	B-11-11 包含層	甕	———	口唇部下端にキザミ。口縁部外面に粗いタテ・ヨコハケ	砂粒含	良好	淡黄橙色	口縁部片	
304	137	B-18-13 包含層	受口甕	———	受口部下端にキザミ。口縁部外面に粗いハケ	砂粒多含	良好	暗橙色	口縁部片	
305	138	B-17-13 包含層	壺	———	櫛描の横線文と斜格子文、横線文、波文	砂粒多含	良好	淡橙色	体部片	
306	23	B-11-17 包含層	壺	———	櫛描横線文の下に篦描斜格子文	砂粒多含	良好	茶黄色	体部片	
307	141	B-13-6 包含層	壺	———	篦描沈線間に単節斜縄文	砂粒含	良好	暗橙色	体部片	貝田町式

第18表　弥生土器観察表（5）

V　古墳時代

竪穴住居66棟と土坑等を検出した。時期的には、5世紀中葉前後に遡る可能性をもつ遺物もみられるが、確実な集落の形成時期としては5世紀末葉である。遺構の時期比定については須恵器の杯身・蓋を基準に行い、補足的に土師器のS字状口縁台付甕（以下、S字甕と略記）を参考とした。

須恵器蓋杯では陶邑中村編年[①]を参考とした。中村編年のⅠ－4並行以降の蓋杯が認められる。蓋杯の口径が比較的小さく、杯蓋では天井部と口縁部の境の稜が比較的明瞭なもの（中村編年のⅠ－4～Ⅰ－5に並行か）を5世紀末葉から6世紀初頭に比定する。口径が比較的大きくなり、杯蓋では天井部と口縁部の境の稜があまくなるもの（中村編年のⅡ－1に並行か）を6世紀前葉に比定する。杯蓋の天井部と口縁部の境の稜が不明瞭になり代わりに沈線が巡り、杯身ではたちあがり端部の段の消失がみられるもの（中村編年のⅡ－2に並行か）を6世紀中葉に比定する。杯蓋の天井部と口縁部の境の稜が消失して全体に丸味をおび、杯身のたちあがりも短くなるもの（中村編年のⅡ－3～Ⅱ－4に並行か）を6世紀後半に比定する。

S字甕では口縁部外面のヨコナデが2単位のものは認められず、山田編年[②]のE類に相当する5世紀後葉以降に比定されるものがある。

(1)　竪穴住居

SH14（第43・52・68図）　Ⅳ区南西部で検出した。古墳時代の竪穴住居としては、調査区全体のなかで最も西に位置する。平面形は東西4.1m×南北4.0mのほぼ正方形で、床面積は16.4m²である。検出面からの深さは約10cmと浅い。南北軸方向はN－41°－Wである。4主柱穴で、柱間は東西2.5m、南北2.0mを測る。主柱穴の規模は径15～30cm、深さ12～30cm程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面のほぼ中央に支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸70cm、短軸60cmの楕円形で、深さは45cmである。

S字甕(309）が焼土上面から出土した。他に土師器甕(310）が出土している。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉3点(757～759)が確認された。

SH19（第43・52・68図）　Ⅳ区中央やや南寄りの位置で検出した。平面形は東西5.0m×南北4.9mのほぼ正方形で、床面積は24.5m²である。検出面からの深さは10cm前後と浅い。南北軸方向はN－24°－Eである。4主柱穴を推定したが、柱間は北面が4.0m、南面が3.1m、東面が3.5m、西面が3.2mと不揃いで、壁までの距離も近く疑問が残る。主柱穴の規模は径40cm前後で、深さ7～27cm程である。北壁中央やや西寄りの位置で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南東隅の土坑が貯蔵穴の可能性があるが、主柱穴との位置関係において疑問があり、断定はできない。平面形は長軸75cm、短軸65cmの隅丸方形で、深さは50cmである。このほか、周溝の痕跡の可能性がある小溝が東壁で僅かに確認された。

竈の支石周辺からS字甕(313）が出土した。ほかに土師器甕(311)・S字甕(312）、須恵器杯蓋(314～316)・杯身(317）が出土している。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。311は布留式の系譜の甕で住居の推定時期より古い可能性がある。混入品か。玉類は、滑石製臼玉19点(760～778)が確認された。

SH20～22（第43・52・68・71図）　Ⅳ区東部北寄りの位置で3棟を検出した。SH21を中心に西側でSH20と重複し、東側でSH22と重複する。SH21は重複する2棟より古い。

SH20の平面形は東西4.1m×南北4.0mのほぼ正方形で、床面積は16.4m²である。検出面からの深さは10～20cm程と浅い。南北軸方向はN－31°－Eである。主柱穴は4本であり、柱間は東西1.9m、南北2.2mを測る。主柱穴の規模は径30～40cmで、深さは6～54cmである。北壁中央で竈の痕跡と考えら

れる焼土の広がりを確認した。

ＳＨ21の平面形は東西 3.7 ｍ×南北3.9ｍのほぼ正方形で、床面積は14.5㎡である。検出面からの深さは 3～15㎝程と浅い。南北軸方向はＮ－10°－Ｗである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は東西2.0ｍ、南北1.7ｍを推定する。主柱穴の規模は径30㎝程で、深さは12～32㎝である。周溝は東辺を除く３辺で確認された。

ＳＨ20もしくはＳＨ21の出土遺物には、土師器椀(318)・小型甕(319)・甕(320・321)・Ｓ字甕(322～328)、須恵器杯蓋(329～332)・杯身(333・334) がある。５世紀末葉から６世紀前葉に比定される。これらのなかで、出土位置からＳＨ20に伴うと推定できるものは318・320・322・327・334 である。これらは６世紀前葉に比定される。切り合い関係も考慮すると、ＳＨ21は５世紀末葉から６世紀初頭、ＳＨ20は６世紀前葉の竪穴住居と推定される。なお、ＳＨ20では滑石製臼玉２点(779・780) が確認された。

ＳＨ22の平面形は東西5.1ｍ×南北4.8ｍのほぼ正方形で、床面積は24.5㎡である。検出面からの深さは10㎝程と浅い。南北軸方向はＮ－24°－Ｅである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は東西2.5ｍ、南北2.2ｍを推定する。主柱穴の規模は径20～35㎝で、深さは28～50㎝である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は一辺80～85㎝程の隅丸方形で、深さは57㎝である。周溝は全周しないが、４辺で確認された。

竈付近で土師器甕(336)・甑(337) が出土した。他にＳ字甕(335) がある。ＳＨ21より新しく、６世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉１点(781)・ガラス小玉１点(1175)が確認された。

ＳＨ23（第44・68図）　Ⅳ区東部北端で検出した。住居の北半分は調査区外である。東西3.4ｍを測る。検出面からの深さは約10㎝前後と浅い。南北軸方向はＮ－30°－Ｅである。東壁に竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は径80㎝程の円形で、深さは51㎝である。

出土遺物は少なく、滑石製臼玉１点(782) を図示したのみである。重複するＳＫ６（６世紀中葉）より古く、６世紀前半から中葉の竪穴住居か。

ＳＨ25～27（第43・52・53・68・71図）　Ⅳ区東部北寄りの位置で検出した。竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを４か所（焼土Ａ～Ｄ）検出しており、奈良時代の竪穴住居ＳＨ24（焼土Ｄが伴う）を含めて、４棟が重複するものと推定される。新旧関係は、焼土の残存状況からＳＨ25→26→27と推定される。遺物の分離は困難だが、Ｓ字甕(338・339) は、出土位置からみてＳＨ25に伴う可能性が高い。

ＳＨ25の平面形は東西6.0ｍ×南北6.1ｍのほぼ正方形で、床面積は36.6㎡である。検出面からの深さは20～40㎝程である。南北軸方向はＮ－２°－Ｗである。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土（焼土Ａ）の広がりを確認した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。

ＳＨ26は推定される竈（焼土Ｂ）位置から、４主柱穴を想定した。柱間は東西3.7ｍ、南北3.1ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50㎝で、深さは4 ～17㎝である。平面プランは検出されなかったが、竈は北壁の中央やや東寄りの位置であったと推定する。主柱穴から推定される南北軸方向はＮ－６°－Ｗである。最深部の深さは約50㎝である。

ＳＨ27は推定される竈（焼土Ｃ）位置から、４主柱穴を想定した。柱間は東西2.8ｍ、南北2.0ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50㎝で、深さは14～26㎝である。平面プランは検出されなかったが、竈は北壁中央であったと推定する。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。主柱穴から推定される南北軸方向はＮ－６°－Ｅである。最深部の深さは約50㎝である。

ＳＨ25～ＳＨ27の出土遺物には、土師器椀(340)・高杯(341)・小型壺(342)・甕(343～350)・Ｓ字甕(338・339・351～353)、須恵器杯蓋(354～358)・杯身(359～364)・有蓋高杯蓋(365)・瑞(366・367)・横瓶(368) がある。６世紀代のほぼ全時期の遺物がみられる。ＳＨ25は、新旧関係や当翌穴住居と限定される遺物(338・339) から、６世紀前葉の竪穴住居と推定される。他は、新旧関係からＳＨ26が６世紀中葉、ＳＨ27が６世紀後半の竪穴住居と考えられる。玉類は、滑石製臼玉44点(783～826)、土製臼玉１点(1155)が確認された。

ＳＨ28（第43図）　Ⅳ区東部北端で検出した。住居の北端は調査区外である。東西3.9ｍを測る。検出面からの深さは10～20cm程である。南北軸方向は真北を向く。４主柱穴で、柱間は2.0ｍを測る。主柱穴の規模は径20～40cm程で、深さ24～27cmである。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸75cm、短軸60cmの隅丸方形で、深さは36cmを測る。周溝は西辺と南辺で確認された。

出土遺物は少なく、図示したものはない。小片資料からではあるが６世紀後半の竪穴住居か。

ＳＨ29（第44・54図）　Ⅳ区東部やや北寄りの位置で検出した。平面形は東西3.5ｍ×南北3.8ｍの長方形で、床面積は13.3㎡である。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－８°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西1.3ｍ、南北1.7ｍを測る。主柱穴の規模は径20～45cm程で、深さは5～18cm程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面のほぼ中央に支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は径40cm程の円形で、深さは42cmを測る。周溝は南壁を除く３辺で確認された。

焼土上面から土師器甕(370)、貯蔵穴内から須恵器杯身(372）が出土した。５世紀末葉から６世紀初頭の竪穴住居と推定する。他に、土師器複合口縁壺(369）や須恵器杯蓋(371）が出土している。369は住居の推定時期より古い所産の可能性がある。出土位置も床面から浮いており、混入品か。

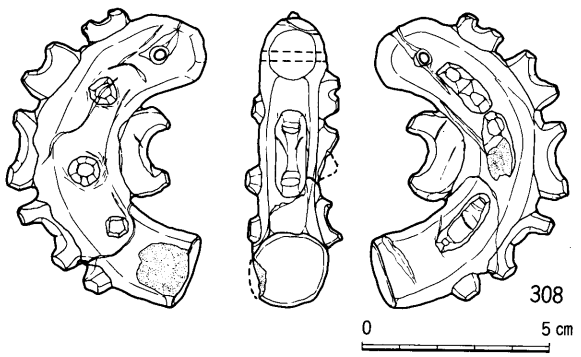
ＳＨ30（第44・54・68・69図）　Ⅳ区南東部に検出した。平面形は東西3.4ｍ×南北3.1ｍのほぼ正方形で、床面積は10.6㎡である。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－10°－Ｅである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は東西1.8ｍ、南北1.6ｍを推定する。主柱穴の規模は径30～50cm程で、深さ13～23cm程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。竈の右脇、住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸65cm程の隅丸方形で、深さは32cmを測る。周溝は北壁と東壁で確認された。

遺物の出土は少なく、土師器甕(373)、滑石製臼玉４点(827～830)を図示したのみである。373は６世紀代の甕と推定するが、７世紀に降る可能性も有る。６世紀後半の竪穴住居か。

ＳＨ31（第42・44・54・69図）　Ⅳ区北東部に検出した。住居の西側は後世のピット群が集中する。平面形は東西4.5ｍ×南北4.7ｍのほぼ正方形で、床面積は21.2㎡である。検出面からの深さは10cm前後と浅い。南北軸方向はＮ－６°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西2.3ｍ、南北1.9ｍである。主柱穴の規模は径20～45cm程で、深さは3～31cm程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面のほぼ中央に支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸85cm、短軸50cm程の隅丸方形で、深さは37cmを測る。

遺物は貯蔵穴内からＳ字甕(374）が出土し、他にＳ字甕(375・376）、須恵器杯蓋(377）がある。また、特筆すべき遺物として子持勾玉(308）がある。住居の北西部の埋土から、２片に割れた状態で出土した。全長８cmの半円形をなし、最大幅５cm、厚さ2.5cmで、尾部は筒状に切断されている。背部に４個の小勾玉と１個の小玉があり、腹部には１個の小勾玉がある。一方の側面には３個の小勾玉があり、その裏面には３個の小玉がある。頭部には径2.5mmの穿孔部があり、穿孔部付近には、僅かであるが朱彩が確認される。玉類は、他に滑石製臼玉１点(831)が確認された。６世紀前半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ32（第44・54・69図）　Ⅳ区北東部で検出した。住居の北東部分は不明瞭であるが、平面形は東西3.3ｍ×南北4.0ｍの長方形で、床面積は13.2㎡である。検出面からの深さは16cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－20°－Ｅである。北壁中央やや東寄りの位置で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。



第42図　ＳＨ31出土子持勾玉実測図（１：２）

焼土面の中央で支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴の可能性がある土坑が2基ある。平面形は共に一辺60cm程の隅丸方形で、深さは40cm前後を測る。

遺物の出土は少なく、S字甕(378)、滑石製臼玉1点(832)を図示したのみである。小片資料なども考慮すると、6世紀中葉から後半の竪穴住居か。

SH34（第44・69図）　Ⅳ区東部北端で検出した。住居の北半分は調査区外である。東西 4.5mを測る。検出面からの深さは15～20cm程である。南北軸方向はN－1°－Wである。

遺物の出土は少なく、滑石製臼玉8点(833～840)を図示したのみである。小片資料からではあるが6世紀後半の竪穴住居か。

SH35（第44・54・69図）　Ⅳ区北東部で検出した。平面形は一辺4.5mのほぼ正方形で、床面積は20.3㎡である。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はN－13°－Eである。4主柱穴で、柱間は東西2.0m、南北2.2mを測る。主柱穴の規模は径25～35cm程で、深さ4～28cm程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面のほぼ中央に支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸100cm、短軸70cm程の隅丸長方形で、深さは37cmを測る。東壁を除く3辺で周溝が確認された。

遺物は貯蔵穴内から須恵器杯蓋(382)・有蓋高杯蓋(383)が出土し、貯蔵穴付近から土師器甕(380)が出土している。他に、土師器甕(379)、須恵器杯蓋(381)が埋土から出土している。5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉3点(841～843)が確認された。

SH36（第44・54図）　Ⅴ区北西部で検出した。住居の南西部は不明瞭であるが、平面形は東西6.3m×南北7.0mの長方形と推定され、床面積は44.1㎡を推定する。検出面からの深さは22cm以内である。南北軸方向はN－7°－Eである。4主柱穴を推定したが、柱間は北面が3.9m、南面が3.6m、東・西両面は4.3mと不揃いである。主柱穴の規模は径20～35cm程で、深さ9～20cmを測る。北壁中央から1m程南の位置で弱い焼土が検出された。竈の痕跡の可能性があるが断定はできない。住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の規模は長軸110cm、短軸80cm程の隅丸方形で、深さは33cmを測る。

遺物の出土は少なく、土師器壺(384)を図示したのみである。384は残りも悪く、住居の時期決定資料としては充分ではないが、一応5世紀代の竪穴住居と考えておく。焼土を竈の痕跡とみた場合、やはり5世紀後葉の竪穴住居か。

SH37・38（第45・54・69図）　Ⅴ区北西部で検出した。SH38はSH37に取り込まれる形で重複する。SH38はSH37より古い。検出面からの深さはSH38が30cm前後、SH37が20cm前後である。南北軸方向は共にN－13°－Eである。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土は最終掘削後の床面に検出されたもので、SH38に伴うものと推定される。SH37の床面であったと推定されるレベルには焼土は確認されておらず、SH37の竈を想定するものはない。焼土の右脇にある土坑は検出面で確認されたもので、SH37に伴う貯蔵穴と考えられる。

SH37の平面形は東西8.3m×南北8.1mのほぼ正方形で、床面積は67.3㎡である。調査区全体のなかで最も大きな竪穴住居である。4主柱穴で、柱間は5.2mを測る。主柱穴の規模は径35～55cm程で、深さは30cm程である。

SH38の平面形は東西6.9m×南北7.1mの略正方形で、床面積は49.0㎡である。主柱穴は3基を検出したが、内1基はSH37の主柱穴と重なる。4主柱穴であったと推定され、柱間は東西4.9m、南北4.5mを推定する。主柱穴の規模は径40～55cm程で、深さは30cm程である。住居の南東隅に径85cm程の隅丸方形に近い土坑がある。深さは50cm程である。想定される主柱穴の位置と重なるが、この土坑がSH38の貯蔵穴であった可能性もある。

土師器手捏土器(385・386)・椀(387)・甕(388)・S字甕(389・390)・甑(391)、須恵器杯身(392・393)・高杯(394)・把手付片口鉢(395)が出土した。これらは、出土位置からみてSH37に伴う可能性が高く、概ね6世紀中葉に比定される。SH37はこの時期に、SH38はこれよりやや先行する時期と推定され、この2棟は、拡張する建て替えが行われたものと考えられる。玉類は、SH37から滑石製臼玉8点(844～

851)が、ＳＨ38から滑石製臼玉７点(852～858)が出土した。

ＳＨ39（第45・54図）　Ⅴ区南西部で検出した。東側で６世紀前葉のＳＫ７と重複する。新旧関係はＳＫ７→ＳＨ39である。東壁が不明瞭ではあるが、平面形は一辺2.8ｍ程の隅丸方形を呈するようである。調査区全体のなかで最も小さな竪穴住居である。検出面からの深さは、西壁で26㎝を測る。南北軸方向はＮ－１°－Ｗである。

土師器甕(396)・高杯(397)、滑石製臼玉５点(859～863)が出土した。土坑内にみられる土師器甕(1185)はＳＫ７出土としたが、ＳＨ39に伴う可能性もある。出土遺物やＳＫ７との新旧関係から、６世紀中葉から後半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ40（第45・69図）　Ⅴ区南西部、ＳＨ39の南で検出した。北側でＳＫ７と重複する。新旧関係はＳＫ７→ＳＨ40である。平面形は東西3.5ｍ×南北3.2ｍのほぼ正方形で、床面積は11.2㎡である。検出面からの深さは9～20㎝程である。南北軸方向はＮ－34°－Ｅである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は1.4ｍを推定する。主柱穴の規模は径30㎝程で、深さ6～16㎝程である。

土器の出土は少ないが、滑石製臼玉66点（864～929)が確認された。滑石製臼玉の出土数としては、当遺跡の竪穴住居のなかで最多である。ＳＫ７（６世紀前葉）との新旧関係や小片資料から、６世紀前半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ41（第45・54・69図）　Ⅴ区北西部で検出した。平面形は一辺4.5ｍのほぼ正方形で、床面積は20.3㎡である。検出面からの深さは10㎝以内と浅い。南北軸方向はＮ－４°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は2.3ｍを測る。主柱穴の規模は径20～40㎝程で、深さ10～17㎝程である。住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は一辺70㎝程の隅丸方形で、深さは38㎝である。

須恵器杯身(398)、滑石製臼玉６点(930～935)が出土した。５世紀末葉から６世紀初頭の竪穴住居と推定する。

ＳＨ45（第45・55・69図）　Ⅴ区北西部で検出した。平面形は東西5.0ｍ×南北4.9ｍのほぼ正方形で、床面積は24.5㎡である。検出面からの深さは5～20㎝程である。南北軸方向はＮ－18°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西2.4ｍ、南北2.1ｍを測る。主柱穴の規模は径15～35㎝程で、深さ10～30㎝程である。西壁中央で竈の両袖の痕跡を検出した。両袖の間隔は50㎝程である。竈の対面、住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸110㎝、短軸95㎝程の隅丸方形で、深さは53㎝である。

竈の右脇からは土師器甑(403)や須恵器杯蓋(405)が、貯蔵穴付近からは土師器甕(400)や須恵器甕(406・407)が出土した。他に、土師器高杯(399)・甕(401・402)、須恵器杯蓋(404)、石製紡錘車(408)が出土している。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉３点(936～938)を確認した。

ＳＨ47（第45・55・69図）　Ⅴ区北東寄りの位置で検出した。平面形は一辺5.9ｍのほぼ正方形で、床面積は34.9㎡である。検出面からの深さは８～28㎝である。南北軸方向はＮ－16°－Ｗである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は3.1ｍを推定する。主柱穴の規模は径20～40㎝程で、深さは33㎝程である。東壁中央で弱い焼土の広がりを検出した。竈の痕跡と推定する。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸85㎝、短軸65㎝程の隅丸方形で、深さ54㎝である。

土師器高杯(409)・甕(410～416)・Ｓ字甕(417・418)、須恵器壺(419)・杯蓋(420)・杯身(421～423)が出土した。６世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉21点(939～959)が確認された。

ＳＨ48（第46・56・69図）　Ⅵ区北西部で検出した。後世の土坑等と重複し、プランの検出が困難な状況であった。２棟の竪穴住居が重複している可能性もある。平面形は東西5.4ｍ×南北4.9ｍの長方形と推定され、床面積は26.5㎡である。検出面からの深さは８～18㎝である。南北軸方向はＮ－５°－Ｗである。北壁中央から１ｍ程南の位置で弱い焼土の広がりを２か所検出した。竈の痕跡の可能性がある。住居の北東隅及び南西隅に土坑がみられるが、共に深さは10㎝以内と浅く、貯蔵穴を推定するにはいたらない。

Ｓ字甕(424・425)、須恵器杯蓋(427)・杯身(428)等が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。428は６世紀前葉に比定されるが、小片であり、混

入品か。須恵器片(426)は3条の同心円状の沈線帯と波状文による文様構成がみられるもので、特殊扁壺の可能性を指摘しておく。玉類は、滑石製臼玉21点(960～980)が確認された。

ＳＨ50・51（第46・56・69図）　Ⅵ区北西部で検出した。2棟が重複する。新旧関係はＳＨ50→ＳＨ51である。

ＳＨ50の平面形は東西4.0ｍ×南北4.6ｍの長方形で、床面積は18.4㎡である。検出面からの深さは10㎝前後である。南北軸方向はＮ－15°－Ｅである。4主柱穴で、柱間は東西1.7ｍ、南北2.3ｍを測る。主柱穴の規模は径25～40㎝程で、深さ9～24㎝程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面では、支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の北東隅に径50㎝程の土坑がある。貯蔵穴の可能性がある。

土師器高杯(429)・複合口縁壺(430)・鉢(431)・甕(432～434)、須恵器杯蓋(435)・杯身(436)が出土した。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。430はＳＨ57出土の破片と接合したもので、住居の推定時期より古いものであり、混入品と考える。

ＳＨ51の平面形は東西3.3ｍ×南北4.2ｍの長方形で、床面積は13.9㎡である。検出面からの深さは17㎝前後とＳＨ51より深い。南北軸方向は真北を向く。4主柱穴で、柱間は東西1.6ｍ、南北2.0ｍを測る。主柱穴の規模は径20～25㎝程で、深さ6～41㎝程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。

土師器椀(437)・小型甕(438)・甕(439～442)・甑(443・444)、須恵器杯蓋(445)・杯身(446)・器台(447)が出土した。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉5点(981～985)が確認された。

ＳＨ52（第46・57・69図）　Ⅵ区西部北寄りの位置で検出した。平面形は東西4.6ｍ×南北5.1ｍの長方形で、床面積は23.5㎡である。検出面からの深さは3～20㎝である。南北軸方向はＮ－17°－Ｅである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は東西3.1ｍ、南北2.9ｍを推定する。主柱穴の規模は径30㎝程で、深さ9～16㎝程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸95㎝程の楕円形で、深さは39㎝である。周溝は東壁を除く3辺で確認された。

貯蔵穴から須恵器杯蓋(451)・杯身(452)が出土した。他に土師器壺(448)・甕(449)、須恵器杯蓋(450)・杯身(453)が出土している。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉6点(986～991)を確認した。

ＳＨ53（第46・53・69・70図）　Ⅵ区西部北端で検出した。住居の北西部は調査区外である。平面形は東西4.9ｍ×南北4.1ｍの長方形と思われ、床面積は20.1㎡と推定する。検出面からの深さは5～20㎝である。南北軸方向はＮ－23°－Ｅある。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。貯蔵穴の平面形は長軸85㎝程の楕円形で、深さは51㎝を測る。

土師器椀もしくは高杯(454)・鉢(455)・小型甕(456)・甕(457)・壺(458)が出土した。454は5世紀後葉以降に比定される。小片ではあるが、貯蔵穴内からの出土である。458はＳ字甕に類似する文様をもつ壺で、454より古い可能性がある。埋土からの出土である。住居の時期については、竈を付設していることも考慮すると、やはり5世紀後葉以降と考えるのが妥当であろう。玉類は、滑石製臼玉5点(992～996)を確認した。

ＳＨ54（第46・57・70・71図）　Ⅵ区北西寄りの位置で検出した。平面形は東西5.7ｍ×南北6.1ｍのほぼ正方形で、床面積は34.8㎡である。検出面からの深さは12～20㎝である。南北軸方向はＮ－4°－Ｗである。4主柱穴で、柱間は3.5ｍを測る。主柱穴の規模は径30～45㎝程で、深さ50㎝前後である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面には支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸85㎝、短軸75㎝程の隅丸方形で、深さ35㎝を測る。周溝は東壁を除く3辺で確認された。

土師器甕(459～463)・Ｓ字甕(464)、須恵器杯蓋(465・466)・杯身(467・468)が出土した。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉23

点(997～1019)、土製臼玉1点(1156)を確認した。

ＳＨ55（第46・57・70・71図）　Ⅵ区北西部で検出した。平面形は東西4.0ｍ×南北3.4ｍの長方形で、床面積は13.6㎡である。検出面からの深さは6～29㎝である。南北軸方向はＮ－6°－Ｅである。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は一辺90㎝程の隅丸方形で、深さ57㎝を測る。

土師器椀（469～471）・鉢（472）・甕（473～475）・Ｓ字甕（476）、須恵器杯蓋(477)・有蓋高杯蓋（478）・壺(479）が出土した。5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉3点(1020～1022)、土製臼玉1点(1157)を確認した。

ＳＨ56（第47・57・58・70・71図）　Ⅵ区西部北端で検出した。北壁は検出できなかったが、一辺6.0ｍ程の方形プランであったと推定される。検出面からの深さは4～19㎝である。南北軸方向はＮ－5°－Ｗである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は東西3.4ｍ、南北3.1ｍを推定する。主柱穴の規模は径30～45㎝程で、深さは9～15㎝程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸80㎝程の楕円形で、深さ76㎝を測る。周溝は西壁と南壁に確認された。

土師器の手捏土器(480)・椀(481)・無頸壺(482)・甕(483・484)・Ｓ字甕(485)・甑（486)、須恵器の短頸壺（487)・杯蓋(488)・杯身（489)・把手付鉢(490）が出土した。良好な一括資料と考えられ、5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定する。玉類も、滑石製臼玉10点(1023～1032)とガラス小玉3点(1176～1178）が出土した。

ＳＨ57・58（第47・58・70・71図）　Ⅵ区中央西寄りの位置で検出した。2棟が重複する。新旧関係はＳＨ57→ＳＨ58である。

ＳＨ57の平面形は東西6.3ｍ×南北6.6ｍのほぼ正方形と推定され、床面積は41.6㎡である。検出面からの深さは10㎝以内と浅い。南北軸方向はＮ－5°－Ｅである。4主柱穴で柱間は東西4.5ｍ、南北4.1ｍである。主柱穴の規模は径25～50㎝程で、深さ5～27㎝程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。ＳＨ58の中心部分、ＳＨ57の南東隅部分にあたる位置にみられる土坑が貯蔵穴と考えられる。平面形は不整形ながら、長軸60㎝程の隅丸方形に近く、ＳＨ57の床面からの深さは25㎝程である。周溝は東壁を除く3辺で確認された。

須恵器杯蓋（491)・高杯（492)、滑石製臼玉14点(1033～1046）が出土した。5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定する。

ＳＨ58の平面形は東西4.6ｍ×南北5.0ｍのほぼ正方形で、床面積は23.0㎡である。検出面からの深さは10～30㎝程である。南北軸方向はＮ－4°－Ｅである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は東西2.4ｍ、南北2.7ｍを推定する。主柱穴の規模は径30～50㎝程で、深さ5～43㎝程である。北壁中央で焼土を検出した。この焼土はＳＨ58に伴うものか、ＳＨ57の焼土が混入したものかどうか明確ではない。しかし、焼土はこの南にも検出されており、北壁中央に竈を想定することはできる。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸90㎝程の隅丸方形で、深さ39㎝を測る。周溝は全周しないが4辺で確認された。

土師器の無頸壺（493)・甕（494)・Ｓ字甕（495・496)、須恵器杯蓋（497～499)・杯身（500～503)が出土した。498・501等はＳＨ57に伴う遺物が混入した可能性が高い。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉6点(1047～1052)、土製臼玉1点(1158)が確認された。

ＳＨ59（第47・58・70図）　Ⅵ区中央西寄りの位置で検出した。平面形は東西3.2ｍ×南北3.7ｍの長方形で、床面積は11.8㎡である。検出面からの深さは2～15㎝である。南北軸方向はＮ－14°－Ｅである。4主柱穴で柱間は東西1.5ｍ、南北2.0ｍである。主柱穴の規模は径25～40㎝程で、深さ8～35㎝程である。東壁中央やや南寄りの位置で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面には支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に長軸80㎝、短軸45㎝の楕円形の土坑がある。貯蔵穴の可能性があるが、深さは17㎝と浅い。周溝は南壁と西壁で確認された。

土師器甑（504)、須恵器杯蓋(505）・杯身(506)・甕（507）が出土した。5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定される。玉類は、滑石製臼玉2点

(1053・1054)を確認した。

ＳＨ60（第47・58図）　Ⅵ区中央北端で検出した。平面形は東西4.7ｍ×南北5.0ｍのほぼ正方形で、床面積は23.5㎡である。検出面からの深さは5～19cmである。南北軸方向はＮ－10°－Ｅである。４主柱穴を想定したが、柱間は北面が2.0ｍ・南面が1.8ｍ、東・西面は2.3ｍと不揃いである。主柱穴の規模は径20～30cm程で、深さ12～21cm程である。東壁中央やや南寄りの位置で弱い焼土の広がりを確認した。竈の痕跡と考えておく。竈の右脇、住居の南東隅に不整形ではあるが深さ33cm程の土坑がある。貯蔵穴があったものと考えたい。周溝は西壁と南壁で確認された。

土師器甕(508)・Ｓ字甕(509・510)が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ61・62（第48・58・59・70・71図）　Ⅵ区中央北寄りの位置で検出した。２棟が重複する。新旧関係はＳＨ61→ＳＨ62である。

ＳＨ61は、住居の北東部をＳＨ62に切られる。平面形は東西5.4ｍ×南北4.7ｍの長方形と推定され、床面積は25.4㎡である。検出面からの深さは4～21cmである。南北軸方向はＮ－14°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西3.3ｍ、南北3.0ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50cm程で、深さ4～21cmである。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は一辺110cm程の隅丸方形で、深さは37cmを測る。

土師器椀(511)・高杯(516)・小型壺(514・515)・鉢(512)・甕(513・517)・Ｓ字甕(518・519)・甑(520・521)、須恵器杯蓋(522・523)・杯身(524・525)が出土した。５世紀末葉から６世紀初頭の竪穴住居と推定する。518・519・523は６世紀前葉～中葉に比定されるが、ＳＨ62に伴う遺物等の混入の可能性がある。玉類は、滑石製臼玉20点(1055～1074)・管玉１点(1180)を確認した。

ＳＨ62の平面形は東西4.5ｍ×南北4.4ｍのほぼ正方形で、床面積は19.8㎡である。検出面からの深さは10～18cm程である。南北軸方向はＮ－24°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西2.5ｍ、南北2.3ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50cm程で、深さ11～30cm程である。西壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。住居の南東隅に不整形ではあるが、深さ37cm程の土坑がある。貯蔵穴の可能性がある。周溝は南壁と東壁で確認された。

土師器甕(526)・Ｓ字甕(527)、須恵器杯身(528)が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。527はＳＨ61に伴う遺物の混入か。玉類は、滑石製臼玉７点(1075～1081)、土製臼玉１点(1159)を確認した。

ＳＨ64（第47・59・70図）　Ⅵ区北東部で検出した。平面形は東西5.3ｍ×南北4.6ｍの長方形で、床面積は24.4㎡である。検出面からの深さは5～15cmである。南北軸方向はＮ－６°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は東西2.9ｍ、南北3.1ｍを測る。主柱穴の規模は径25～35cm程で、深さは18～25cm程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面には支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸90cm、短軸65cm程の楕円形で、深さ33cmを測る。周溝は西壁で僅かに確認された。

貯蔵穴内から土師器甕(529・530)・甑(531)が出土した。他に、須恵器杯蓋(532)・杯身(533)・瓶(534)が出土している。６世紀後半の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉１点(1082)を確認した。

ＳＨ65（第48・59・70図）　Ⅵ区東部北端で検出した。住居の北側部分は調査区外である。東西4.3mを測る。検出面からの深さは約6～15cm程と浅い。南北軸方向はＮ－42°－Ｅである。西壁に竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面には３個の自然石が検出されたがいずれも支石とは断定できず、竈の袖等の芯材に使われたものであろうか。

土師器椀(535)、須恵器杯蓋(536～538)・杯身(540～542)・有蓋高杯蓋(543)・甕(544)・壺(545)が出土した。６世紀後半の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉２点(1083・1084)を確認した。

ＳＨ66（第48・60・70・71図）　Ⅵ区北東隅で検出した。東壁の北側部分には周溝状の小溝があるが、これはＳＨ66と方向を異にするもので、焼土Ｂ（竈）や土坑Ｂ（貯蔵穴）を伴う別の竪穴住居が重複している可能性も考えられる。また、ＳＨ66の東側、調査区の北東隅で一部が確認されている深さ10cm弱の土坑も竪穴住居の可能性がある。

ＳＨ66の平面形は東西6.0ｍ×南北5.1ｍの長方形で、床面積は30.6㎡と推定される。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－３°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は東西3.4ｍ、南北3.1ｍを測る。主柱穴の規模は径20～50cm程で、深さは15～34cm程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土（焼土Ａ）の広がりを確認した。竈の対面、住居の南東隅に不整形ではあるが深さ40cm程の貯蔵穴（土坑Ａ）をもつ。周溝は東壁を除く３辺で確認された。

土師器高杯(546)・甕(547・548)、須恵器杯蓋(549・550)・杯身(551)が出土した。須恵器には型式差が認められるが、551が床面出土であり(549は直上包含層・550は埋土出土)、６世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉２点（1085・1086）、土製ナツメ玉１点(1160)を確認した。

ＳＨ67（第48・60図）　Ⅵ区北東隅で検出した。住居の南東部は後世の溝などに壊される。平面形は東西5.4ｍ×南北6.2ｍの長方形で、床面積は33.5㎡である。検出面からの深さは４～15cmと浅い。南北軸方向はＮ－11°－Ｗである。主柱穴は３基を検出した。４主柱穴と推定され、柱間は3.1ｍを推定する。主柱穴の規模は径25～50cm程で、深さは20～29cm程である。東壁中央及び、住居の中央やや東寄りの位置で弱い焼土を確認した。東壁に竈が付設されていたものと推定する。住居の南東隅に不整形な土坑が３基あるが、いずれも深さが10cm前後と浅く、貯蔵穴を推定するにはいたらない。周溝は４辺で確認された。

遺物の出土は少なく、土師器甕(552・553)を図示したのみである。７世紀以降に比定できるものかもしれないが、共に小片資料で住居の時期決定の根拠には乏しい。当遺跡では７世紀以降の竪穴住居は小型化する傾向があるが、ＳＨ67は大型のものであり、６世紀代の住居と考えたい。他の小片資料も考慮すると、６世紀後半の竪穴住居か。

ＳＨ68（第48・60図）　Ⅶ区西端で検出した。住居の西半分は調査区外である。南北4.5ｍを測る。南北軸方向はＮ－26°－Ｅである。住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸90cm程の不整楕円形で、深さは40cmを測る。周溝は検出された３辺すべてで確認された。

住居直上の包含層から、須恵器杯蓋(554～558)・杯身(559～561)・有蓋高杯(562)が出土した。先行する型式のもの(554・555)も認められるが、６世紀前葉に比定されるものが主体を占める。６世紀前葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ69（第48・60図）　Ⅶ区北東部で検出した。東壁は一部しか検出できなかった。平面形は東西4.9ｍ×南北5.5ｍの長方形と推定され、床面積は27.0㎡である。検出面からの深さは、深い所で24cmである。南北軸方向はＮ－18°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は2.8mを測る。主柱穴の規模は径20～35cm程で、深さは40cm前後である。南壁中央で竈の一方の袖の痕跡を検出した。竈の左脇、住居の南東隅に不整形ではあるが深さ60cm程の土坑があり、貯蔵穴の可能性がある。

土師器椀(563)・鉢(564)・甕(565)・Ｓ字甕(566・567)・ミニチュア横瓶(568)、須恵器杯蓋(569)が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ70（第49・60図）　Ⅶ区中央東寄りの位置で検出した。平面形は東西2.9ｍ×南北3.1ｍのほぼ正方形で、床面積は 9.0㎡である。検出面からの深さは10cm前後と浅い。南北軸方向はＮ－40°－Ｗである。４主柱穴で柱間は東西1.2ｍ、南北1.4ｍを測る。主柱穴の規模は径20～30cm程で、深さは15～26cm程である。

土師器高杯(570)・Ｓ字甕(571)が出土した。６世紀後半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ72～74（第49・60・61・70・71図）　Ⅷ区南西隅で検出した。３棟が重複する。新旧関係はＳＨ74→73→72である。

ＳＨ72・73は、住居の北東部分のみの検出である。ＳＨ73はＳＨ72の床面で検出された。検出面からの深さはＳＨ72が５～15cmで、ＳＨ73が19～28cmである。共に北壁で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。南北軸方向はＮ－２°－Ｗと共通する。遺物はＳＨ72から土師器甑(572)、滑石製臼玉５点(1087～1091)・管玉１点(1181)が、ＳＨ73から須恵器杯蓋(573)が出土した。この２棟は、６世紀前葉に建て替えが行われた竪穴住居と推定する。

ＳＨ74の平面形は東西4.8ｍ×南北5.0ｍのほぼ正

方形で、床面積は24.0㎡である。検出面からの深さは5～20cmである。南北軸方向はN－44°－Wである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は2.4mを推定する。主柱穴の規模は径25～70cm程で、深さは26～42cm程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がり確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸95cm、短軸55cm程の不整楕円形で、深さは40cmを測る。土師器手捏土器(574)・椀(575・576)・壺(577)・小型壺(578)・甕(579～584)・S字甕(585)・甑(586)、須恵器杯蓋(587・588)・杯身(589・590)・有蓋高杯蓋(591)・高杯(592・593)が出土した。5世紀末葉から6世紀初頭の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉31点(1092～1122)を確認した。

ＳＨ75～77（第49・61・70図）　Ⅷ区西部、粘土採掘坑の東側で検出した。3棟が重複する。新旧関係はＳＨ75→77→76である。

ＳＨ75は、ＳＨ76・77及び粘土採掘坑に壊され、全容は明らかでない。南北 5.5mを測る。検出面からの深さは10cm程と浅い。南北軸方向はN－39°－Eである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は東西 2.7m、南北 3.2mを推定する。主柱穴の規模は径30～50cm程で、深さは35～55cm程である。東壁に周溝が確認された。土師器の椀(594・595)・S字甕(596・597)、須恵器杯身(598)が出土した。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。他に、砥石(599)、滑石製臼玉1点(1123)を確認した。

ＳＨ76はＳＨ77に取り込まれる形で重複する。全容は明らかでない。東西3.9mを測る。検出面からの深さは30cm程である。南北軸方向はN－31°－Eである。4主柱穴で、柱間は東西1.7m、南北2.0mを測る。主柱穴の規模は径25～45cm程で、深さは5～34cm程である。西壁中央と推定される位置で、竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。土師器甕(600～602)・S字甕(603)、須恵器杯身(604)が出土した。

ＳＨ77は西壁が明確でない。南北6.5mを測る。検出面からの深さは20cm程である。南北軸方向はN－34°－Eである。北壁で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面には支石が直立した状態で遺存した。竈の右脇、住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸125cm、短軸70cm程の楕円形で、深さは43cmを測る。土師器甕(605・606)・S字甕(607)・壺(608)、滑石製臼玉9点（1124～1132）、土製ナツメ玉1点(1161)が出土した。

切り合い関係から、ＳＨ76・77はＳＨ75より新しく位置付けられるが、出土遺物をみると時期的に大きく降るものとは思われず、これらは6世紀中葉頃に建て替えが行われた竪穴住居と推定する。

ＳＨ78（第49・61・62・70・71図）　Ⅷ区西部、粘土採掘坑の東側で検出した。住居の北西隅は検出されなかった。平面形は東西4.0m×南北3.2mの長方形と推定され、床面積は12.8㎡である。検出面からの深さは10～16cmである。南北軸方向はN－40°－Wである。4主柱穴で柱間は東西2.1 m、南北1.5 mを測る。主柱穴の規模は径45～70cm程で、深さ24～35cm程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に不整形ではあるが深さ31cmを測る土坑がある。貯蔵穴があった可能性がある。周溝は南壁と東壁で確認された。竈は周溝を掘った後に付設されたようである。

土師器甕（612）・S字甕（609）、須恵器杯蓋(610・611)が出土した。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉1点(1133)、土製臼玉1点（1162）土製丸玉2点(1163・1164）を確認した。

ＳＨ79（第49・62・70・71図）　Ⅷ区西部、粘土採掘坑の東側で検出した。住居の西側は粘土採掘坑に壊される。南北5.3mを測る。検出面からの深さは15～18cmである。南北軸方向はN－5°－Eである。4主柱穴で、柱間は2.9mを測る。主柱穴の規模は径30～40cm程で、深さ28～41cm程である。北壁中央と推定される位置で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸115cm、短軸65cmの楕円形で、深さは38cmを測る。

土師器壺(613)・甕(614・615)・S字甕(616)、須恵器杯蓋（617)・杯身（618・619）が出土した。613・617は貯蔵穴からの出土である。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉2点（1134・1135）、土製臼玉1点(1165)を確認した。

ＳＨ80（第50・62図）　Ⅷ区西部北端で住居の一部を検出した。深さは６cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－３°－Ｅである。住居の南東隅部で周溝を確認した。

須恵器杯身(620・621）が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ81（第50・62図）　Ⅷ区北西部で検出した。平面形は一辺3.7ｍのほぼ正方形で、床面積は13.7㎡である。検出面からの深さは４～15cmである。南北軸方向はＮ－36°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は北面が1.9ｍ、南面が2.0ｍ、南北1.8ｍとやや不揃いである。主柱穴の規模は径30～35cm程、深さ7～33cm程である。北壁中央付近で竈の支石と考えられる自然石が直立した状態で出土した。支石の南側にはよく焼けた焼土を確認した。竈の対面、住居の南西隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸90cm、短軸70cmの隅丸方形で、深さは41cmを測る。周溝は４辺で確認された。

土師器の甕(623）やＳ字甕(622）と、須恵器杯身(624）が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。624は時期的に降るものであるが、小片であり混入品と考える。

ＳＨ82（第50・62・63・70図）　Ⅷ区北西部で検出した。平面形は東西5.5ｍ×南北4.6ｍの長方形で、床面積は25.3㎡である。検出面からの深さは13～20cmである。南北軸方向はＮ－23°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西3.1 ｍ、南北2.6ｍである。主柱穴の規模は径40～65cm程で、深さ4～39cm程である。北壁中央で竈の両袖の痕跡を検出した。両袖間は60cm程で、一面に焼土が確認された。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南西隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸80cm、短軸50cmの楕円形で、深さは40cmを測る。竈の右脇にも周溝が広がる形で土坑が確認されたが、深さは５cm以内と周溝とかわらず、貯蔵穴を推定するにはいたらない。周溝は４辺で確認された。

土師器高杯(625）・壺(626）・甕(627・628）・Ｓ字甕(629・630）、須恵器杯蓋(631～633）・杯身(634～639）・有蓋高杯蓋(640～643）・壺(644～648）が出土した。６世紀後半の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉２点(1136・1137）を確認した。

ＳＨ83（第50・63・71図）　Ⅷ区北西部で検出した。平面形は一辺4.4ｍの正方形で、床面積は19.4㎡である。検出面からの深さは14～23cmである。南北軸方向はＮ－２°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西2.1ｍ、南北2.3ｍを測る。主柱穴の規模は径50cm前後で、深さ39～52cm程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面の中央に支石が立った状態で出土した。竈の右脇、住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸90cm、短軸75cm程の楕円形で、深さは31cmを測る。

土師器椀(649）・高杯(650）・壺(651）・甕(652～655）、須恵器杯蓋(656・657）・杯身(658・659）・有蓋高杯(660・ 661)が出土した。須恵器類には型式差が認められるが、６世紀中葉の竪穴住居と考えておく。土製臼玉１点(1166)を確認した。

ＳＨ85（第50・63・64・70図）　Ⅷ区南西部で検出した。住居の南東部分は調査区外である。平面形は東西4.5ｍ×南北4.6ｍのほぼ正方形で、床面積は20.7㎡と推定する。検出面からの深さは5～20cmである。南北軸方向はＮ－44°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西 2.1ｍ、南北2.6ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50cm程で、深さ7～42cm程である。北壁中央で竈の両袖の痕跡と直交する支石を検出した。両袖間は25cm前後と狭い。竈の右脇、住居の北東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸75cm、短軸55cmの楕円形で、深さは55cmを測る。周溝は４辺で確認された。

土師器椀(662～665）・甕(666）・Ｓ字甕(667)、須恵器杯蓋(668・669）・杯身(670～673)が出土した。６世紀前葉の遺物が主体を占める。668・669は型式的に後出するものである。床面出土ではなく、残存度も低い。混入品かと思われる。６世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉１点（1138）を確認した。

ＳＨ86（第50・64・71図）　Ⅷ区北西部で住居の南側部分を僅かに検出した。東西は4.7ｍを測る。検出面からの深さは10～19cmである。南北軸方向はＮ－８°－Ｅである。住居の南西隅に土坑をもつ。平面形は長軸75cm、短軸55cmの楕円形で、深さ60cmを測る。貯蔵穴の可能性が指摘できる。

須恵器杯身(674）・有蓋高杯(675）、土製臼玉１

点(1167)が出土した。6世紀前葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ88（第50・64図）　Ⅷ区南端の中央やや西寄りの位置で検出した。住居の南西部分は調査区外であり、南東部分は後世の溝状遺構に壊され、不明瞭である。住居の北西隅でＳＨ87と僅かに重複するが、切り合いは必ずしも明確ではない。東西4.8ｍを測る。検出面からの深さは２～９㎝と浅い。南北軸方向はＮ－39°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は東西2.8ｍ、南北2.2ｍである。主柱穴の規模は径20～50㎝程で、深さ35～47㎝程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。住居の北東隅に土坑をもつが、深さ６㎝と浅く貯蔵穴を推定するにはいたらない。周溝は、検出された３辺全てで確認された。

須恵器杯蓋(676)・高杯(677)が出土した。５世紀末葉から６世紀初頭の竪穴住居と推定する。

ＳＨ89（第51・64・65・70図）　Ⅷ区北端の中央やや西寄りの位置で検出した。平面形は一辺 5.0ｍのほぼ正方形で、床面積は25.0㎡である。検出面からの深さは12～23㎝である。南北軸方向はＮ－９°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は東西2.5ｍ、南北2.4ｍを測る。主柱穴の規模は径30～50㎝程で、深さ22～52㎝程である。北壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。竈の対面、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸100㎝、短軸80㎝の隅丸方形で深さ56㎝を測る。周溝は４辺で確認された。

土師器甕（678～686）・Ｓ字甕（687～690）、須恵器杯蓋（691～693）・杯身（694～702）・高杯（703・704）・瑞(705)・横瓶(706)、砥石(707)、鎌状石製品(708)が出土した。須恵器類には型式差が認められ、５世紀末葉から６世紀中葉のものがみられる。これらのうち、703と704は貯蔵穴内からの出土である。したがって、住居の時期は５世紀末葉から６世紀初頭と考えたい。他は、主柱穴で区画される内側部分からの出土が多く、住居廃絶後の埋没過程の時期を反映したものと考える。玉類は、滑石製臼玉４点（1139～1142）を確認した。

ＳＨ90（第51・65・66・70図）　Ⅷ区中央北寄り、ＳＨ89の東側に検出した。平面形は東西3.5ｍ×南北3.7ｍのほぼ正方形で、床面積は13.0㎡である。検出面からの深さは６～17㎝である。南北軸方向は真北を向く。４主柱穴で、柱間は東西1.5ｍ、南北1.7ｍを測る。主柱穴の規模は径25～40㎝程で、深さ44～52㎝程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面の中央に支石が直立した状態で出土した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝の隅丸長方形で、深さ62㎝を測る。

土師器鉢(713)・甕(709)・Ｓ字甕(710～712・714・715)、須恵器杯蓋(716～718)・杯身(719・720)が出土した。５世紀末葉から６世紀初頭の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉８点(1143～1150)を確認した。

ＳＨ91（第51・66・70図）　Ⅷ区中央西寄りの位置で検出した。住居の南東隅を撹乱土坑に壊される。平面形は一辺5.0ｍの正方形と推定され、床面積は25.0㎡である。検出面からの深さは13～28㎝である。南北軸方向はＮ－16°－Ｅである。４主柱穴で、柱間は東西2.8ｍ、南北2.6ｍを測る。主柱穴の規模は径20～40㎝程で、深さ５～36㎝程である。東壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面は撹乱土坑に南側を壊される。周溝は４辺に確認された。

土師器甕(721～723)・Ｓ字甕(724・725)、須恵器杯蓋(726)、石製紡錘車２点(727・728)が出土した。６世紀前葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉３点(1151～1153)を確認した。

ＳＨ92（第66・67図）　Ⅷ区中央で住居の南西部のみを検出した。検出面からの深さは南西隅で８㎝である。南北軸方向はＮ－39°－Ｅである。

土師器手捏土器(729)・Ｓ字甕（730・731）・甕(732)、須恵器杯蓋(733～736)・杯身(737)・有蓋高杯蓋(738)・高杯(739)が出土した。６世紀中葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ94（第51・67・70・71図）　Ⅷ区中央南寄りの位置で検出した。平面形は東西6.9ｍ×南北6.4ｍの長方形で、床面積は44.2㎡である。検出面からの深さは10～21㎝である。南北軸方向はＮ－23°－Ｗである。４主柱穴で、柱間は3.9ｍを測る。主柱穴の規模は径20～60㎝程で、深さ8～46㎝程である。東

壁中央で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。焼土面中央に支石が直立した状態で出土した。住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸85cm、短軸60cmの楕円形で、深さは19cmとやや浅い。

南壁際の土坑Aの底近くから、正立の状態で完形の須恵器杯身(748)が出土した。土坑Aは長軸64cm、短軸44cm程の楕円形で、深さ10cm程である。他に、土師器高杯(740)・甕(741・742)、須恵器杯蓋(743～747)が出土している。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉1点(1154)、土製臼玉4点(1168～1171)、ガラス小玉1点(1179)を確認した。

SH98（第51・67・71図）　Ⅷ区中央南端で検出した。全調査区のなかで最も東に位置する竪穴住居である。平面形は一辺4.2mの正方形で、17.7㎡の床面積である。検出面からの深さは6～14cmである。南北軸方向はN－10°－Wである。東壁中央付近で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを検出した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸75cm、短軸60cmの隅丸方形で、深さ37cmを測る。

土師器甕(749)・S字甕(750)、須恵器高杯(751)・杯蓋(752・753)・杯身(754～756)が出土した。6世紀中葉の竪穴住居と推定する。玉類は、土製丸玉3点(1172～1174)を確認した。

（2）その他

SK4（第72図）　Ⅱ区中央部で検出した。平面形は長軸110cm、短軸90cm程の不整楕円形で、深さ16cmを測る。須恵器杯身(1182)が出土した。6世紀後半の土坑と推定する。

SK6（第72図）　Ⅳ区北東部、SH23の南東部を切り込む形で検出した。平面形は径50cm程の円形で、深さは10cm程である。土師器甕（1183）・S字甕(1184)が出土した。6世紀中葉の土坑と推定する。

SK7（第45・72図）　Ⅴ区南西部で検出した。SH39及びSH40と重複しており、全容は不明である。新旧関係はSK7→SH39、SK7→SH40である。平面形は東西5.5m×南北5.0m程の隅丸方形を呈すると思われ、深さ14～29cmを測る。竪穴住居の可能性もあるが確定はできない。

土師器甕(1185)・手捏土器(1186)、須恵器高杯(1187)・杯蓋(1188)・杯身(1189)が出土した。6世紀前葉の土坑と推定する。1185は出土位置からみて、SH39に伴う可能性がある。1188は型式的に後出するものであるが、SH39に伴う遺物の混入の可能性もある。図示していないが、滑石製臼玉8点が確認されている。

SK8（第72図）　Ⅴ区中央やや北寄りの位置で検出した。平面形は長軸90cm、短軸55cm程の楕円形で、深さ50cmを測る。S字甕(1190)が出土した。6世紀前半の土坑と推定する。

SK9（第72図）　Ⅴ区北東部で検出した。平面形は長軸3.4m、短軸2.8mの楕円形で、皿状に窪む土坑である。最深部では深さ50cmを測る。土師器の椀(1192)、須恵器の杯身(1191)が出土した。6世紀中葉の土坑と推定する。

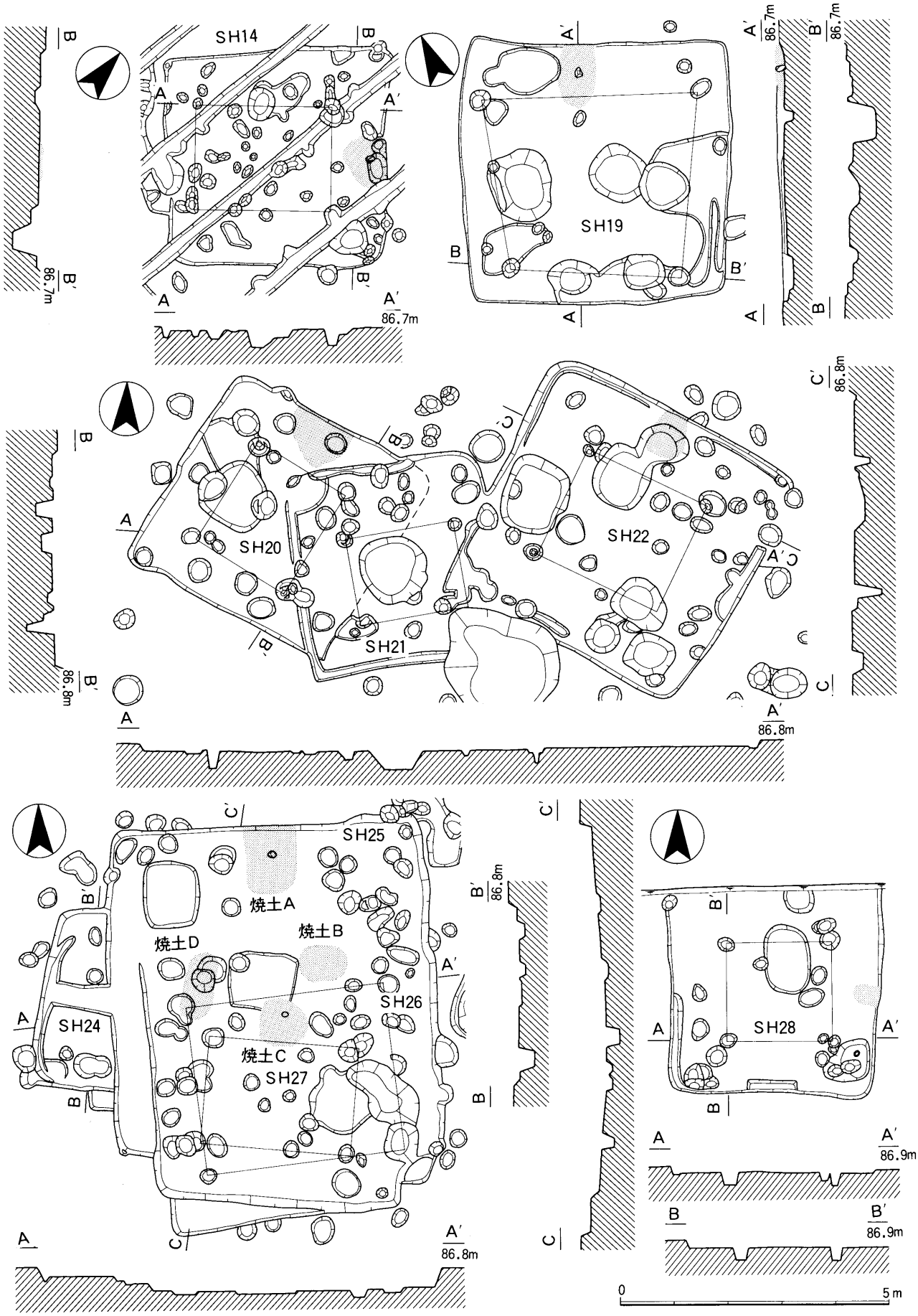
SK10（第72図）　Ⅴ区東部中央で検出した。平面形は一辺65cm程の隅丸方形に近く、深さは34cmである。ほぼ完形の土師器高杯(1193)が出土した。6世紀代の土坑と推定する。

SK13（第72図）　Ⅷ区南西部で検出した。平面形は径30cm程の楕円形で、深さは23cm程である。須恵器杯蓋(1194・1195)・杯身(1196)・高杯(1197～1200)・短頸壺蓋(1201)・短頸壺(1202)等がまとまって出土した。6世紀後半の土坑と推定する。

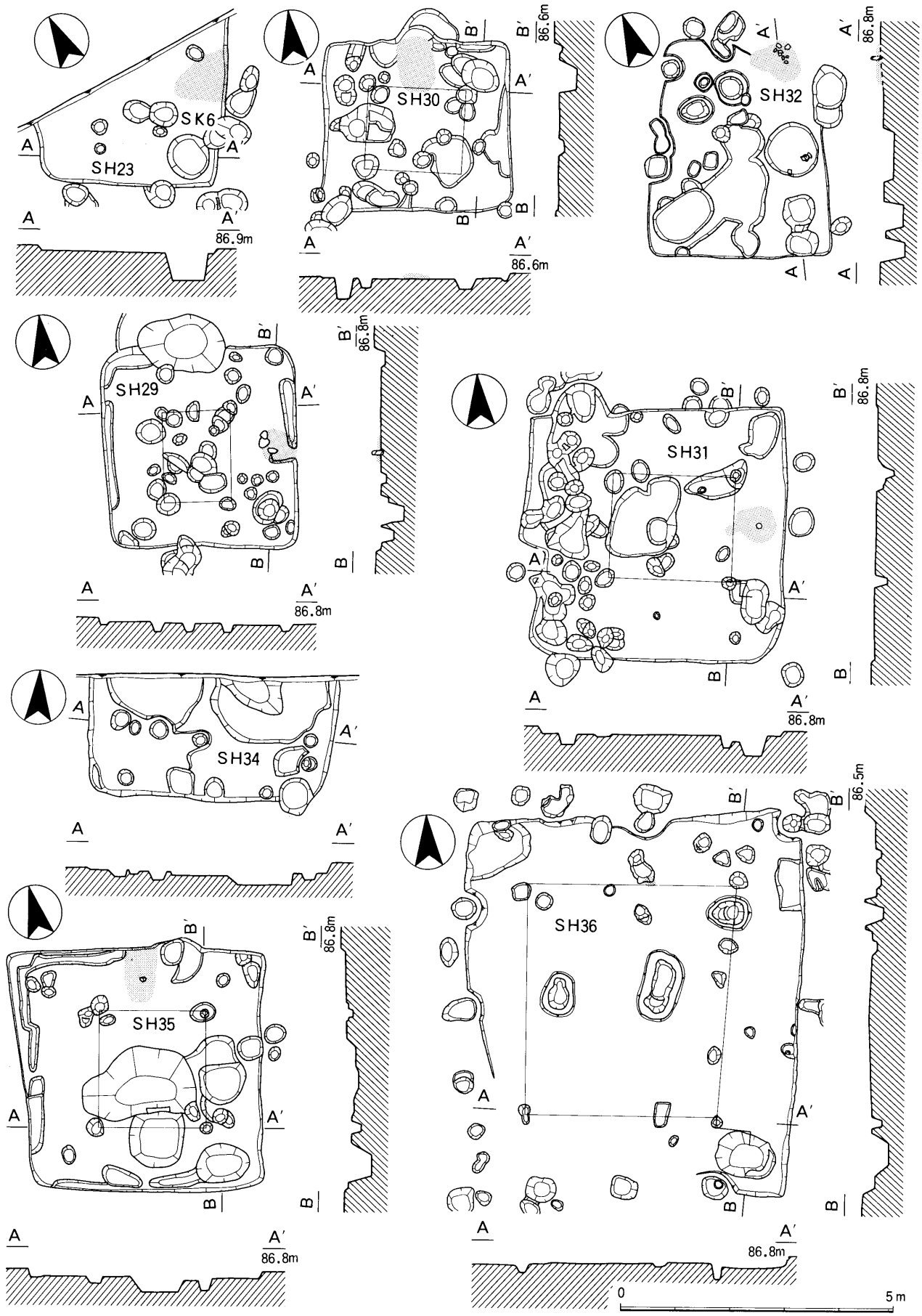
包含層出土遺物（第72図）　石製紡錘車(1203)、須恵器杯身(1204)・有蓋高杯蓋(1205)・甕(1206)を図示した。1204は底部外面に×状のヘラ記号をもつ。1205は天井部外面に列点文をもつ。1206は土師器長胴甕を思わせる器形である。一応須恵器としたが、内外にハケを施す一方、外面にはタタキも見られる。

（森川幸雄）

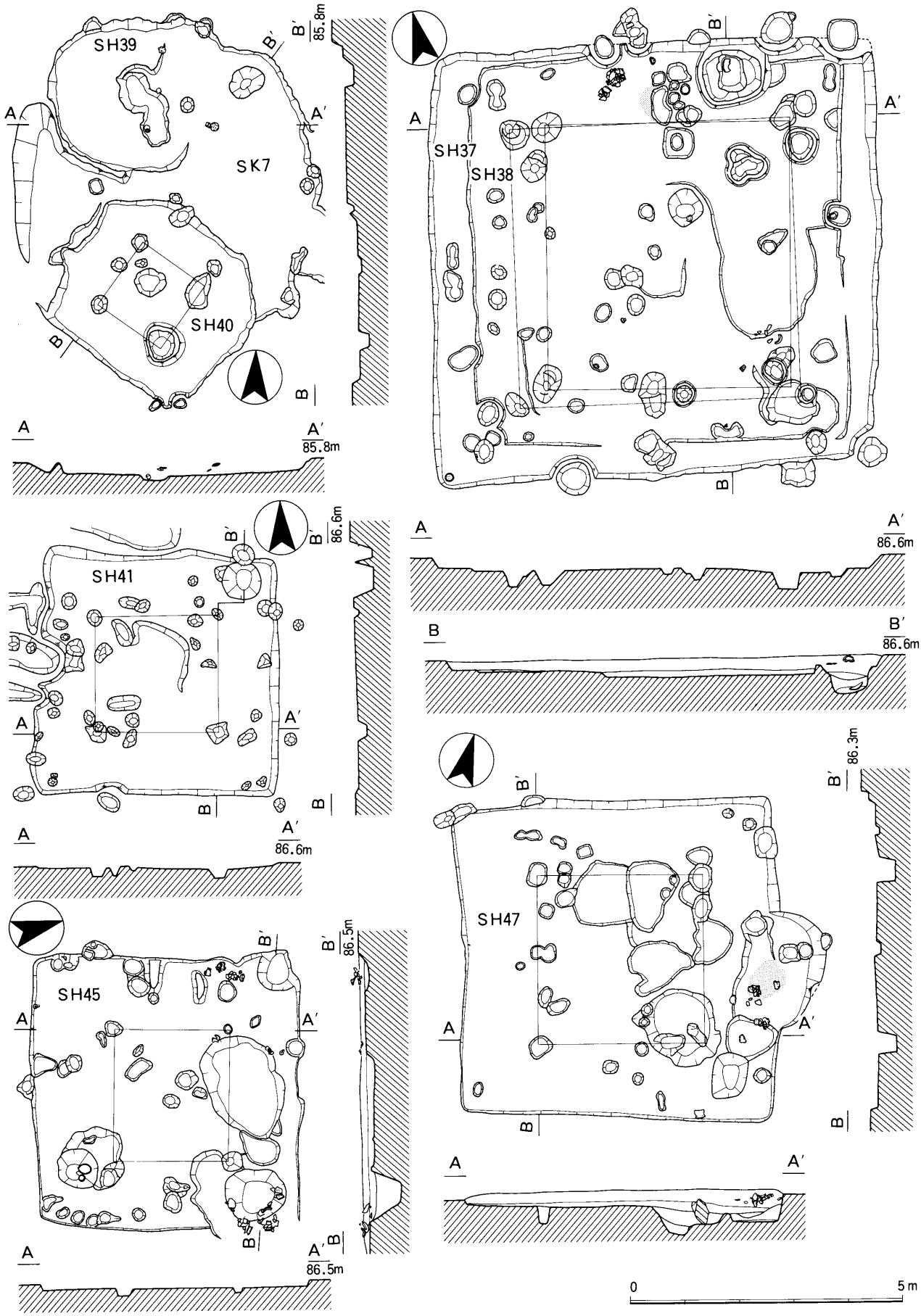
〔註〕
① 中村浩ほか『陶邑Ⅲ』（大阪府教育委員会、1978年）。
② 山田猛・岸田早苗「山城遺跡」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年）。



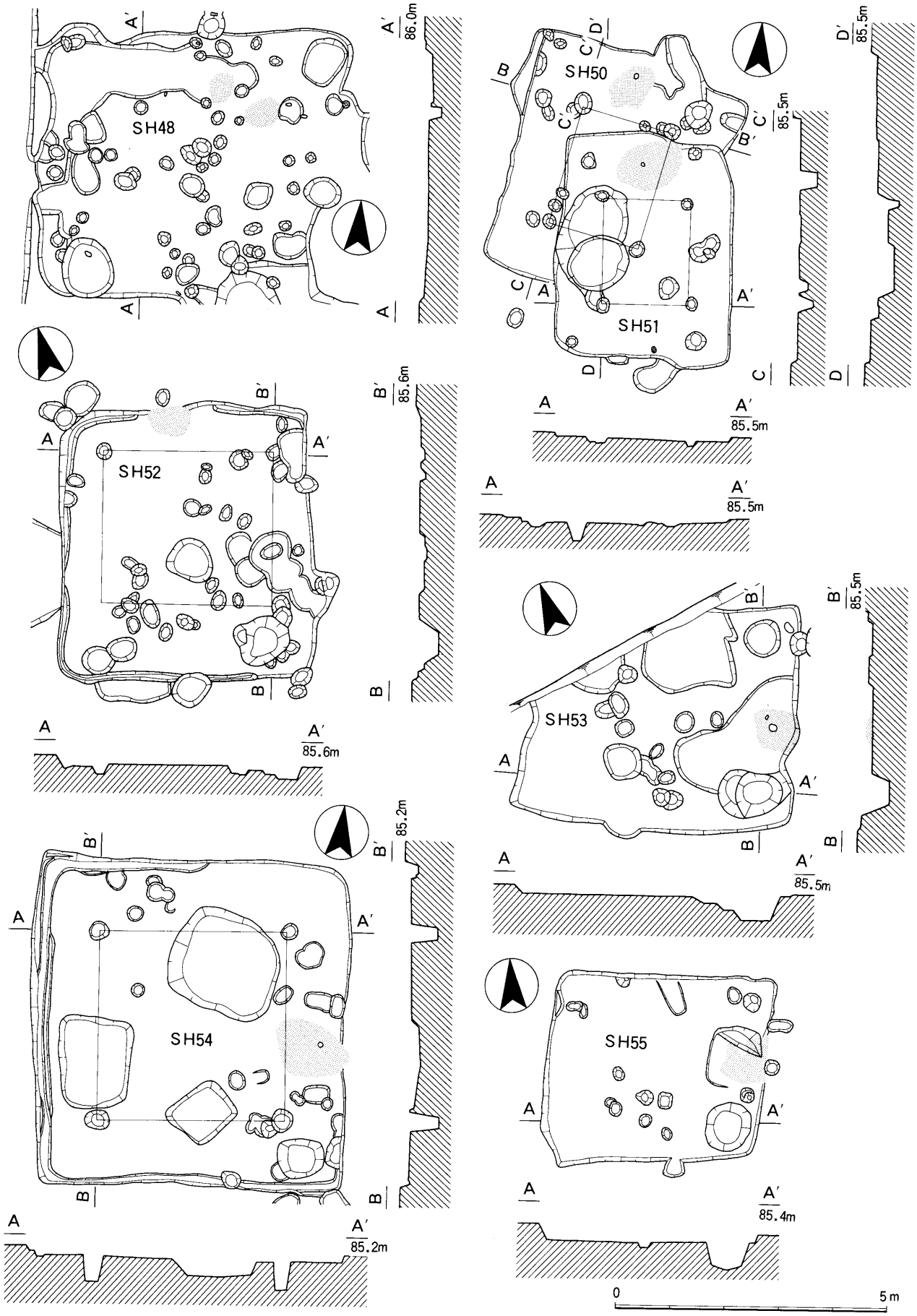
第43図　SH14・19～22・24～28実測図（1：100）



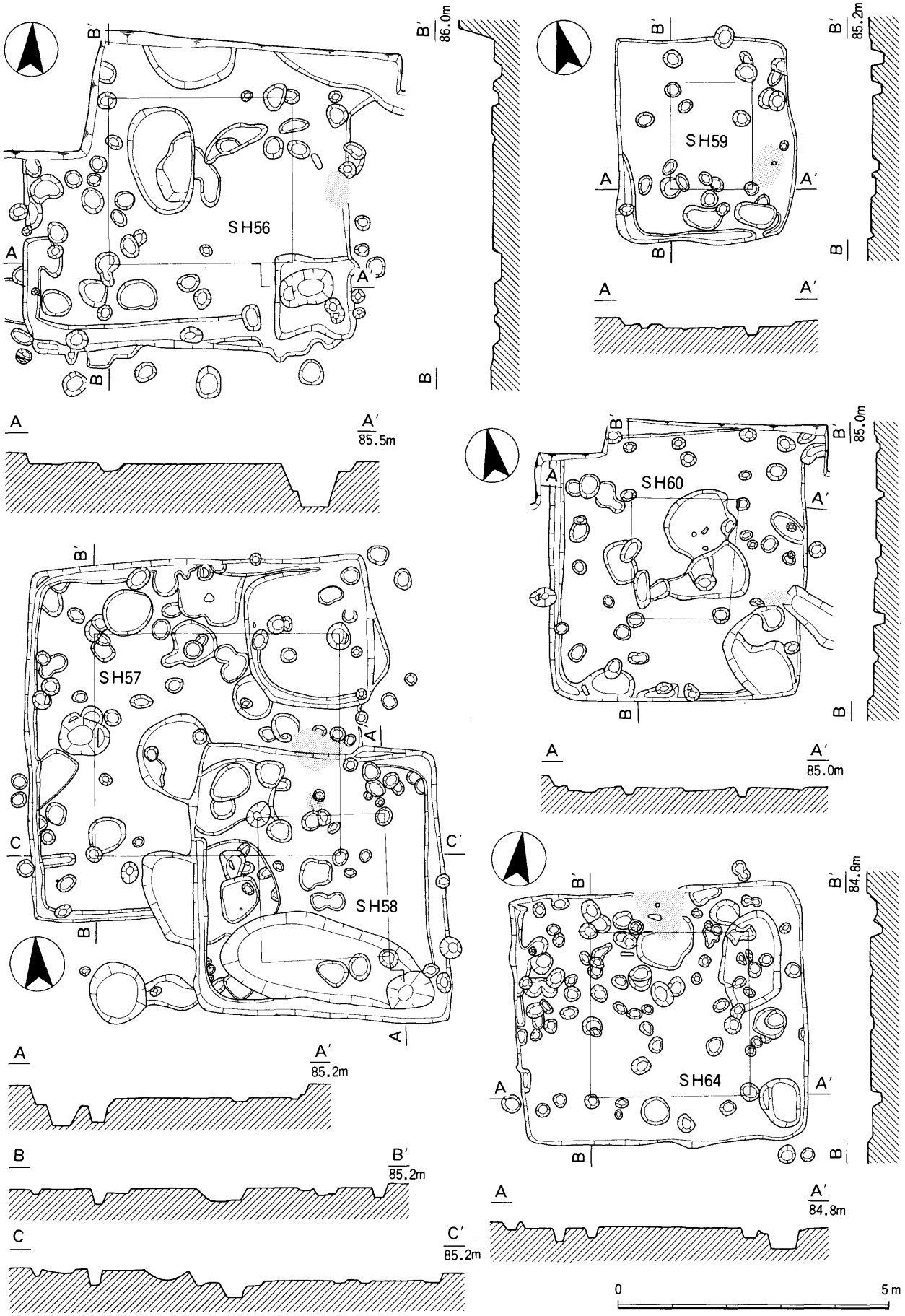
第44図　ＳＨ23・29～32・34～36、ＳＫ６実測図（１：100）



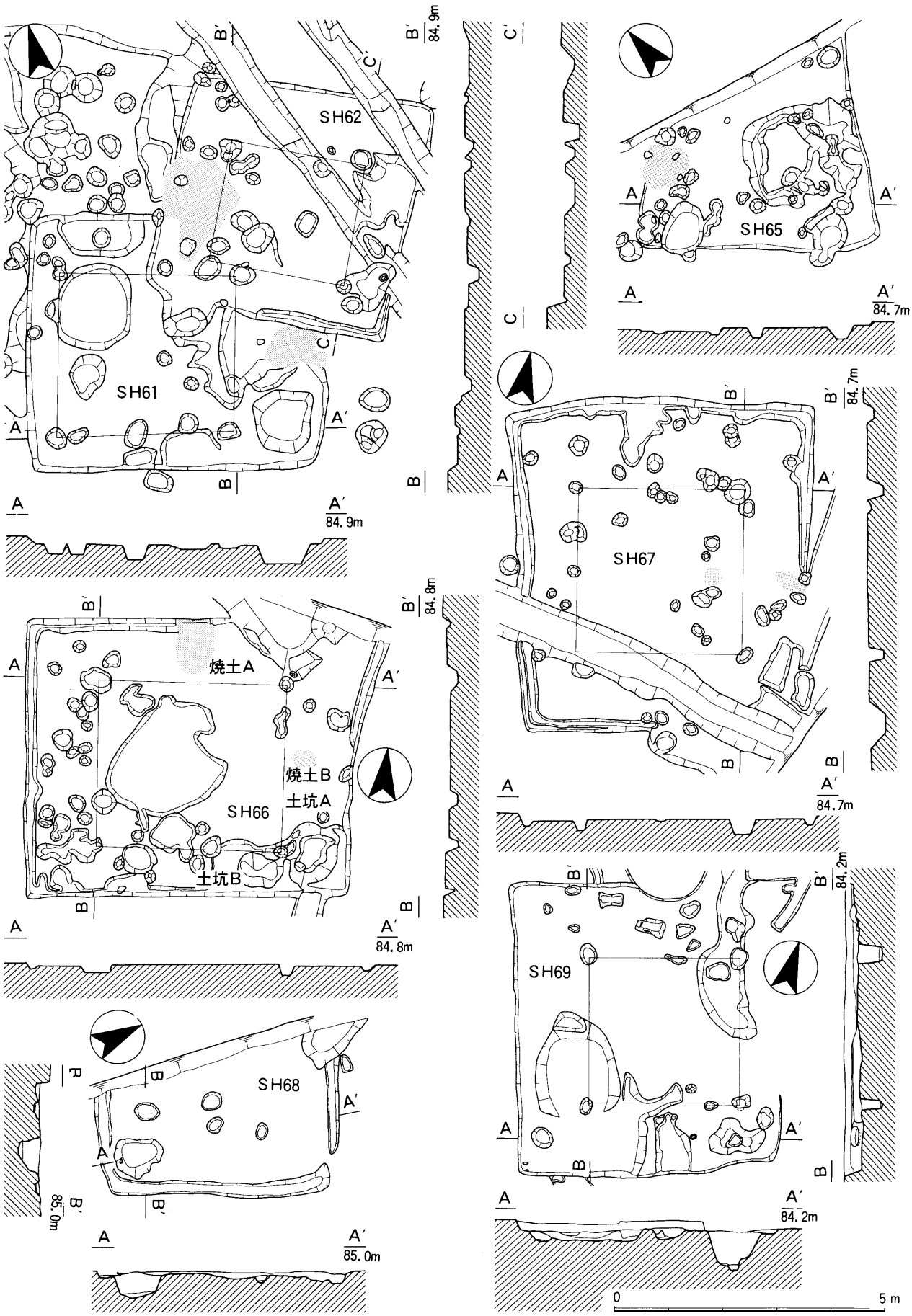
第45図　ＳＨ37～41・45・47、ＳＫ７実測図（１：100）



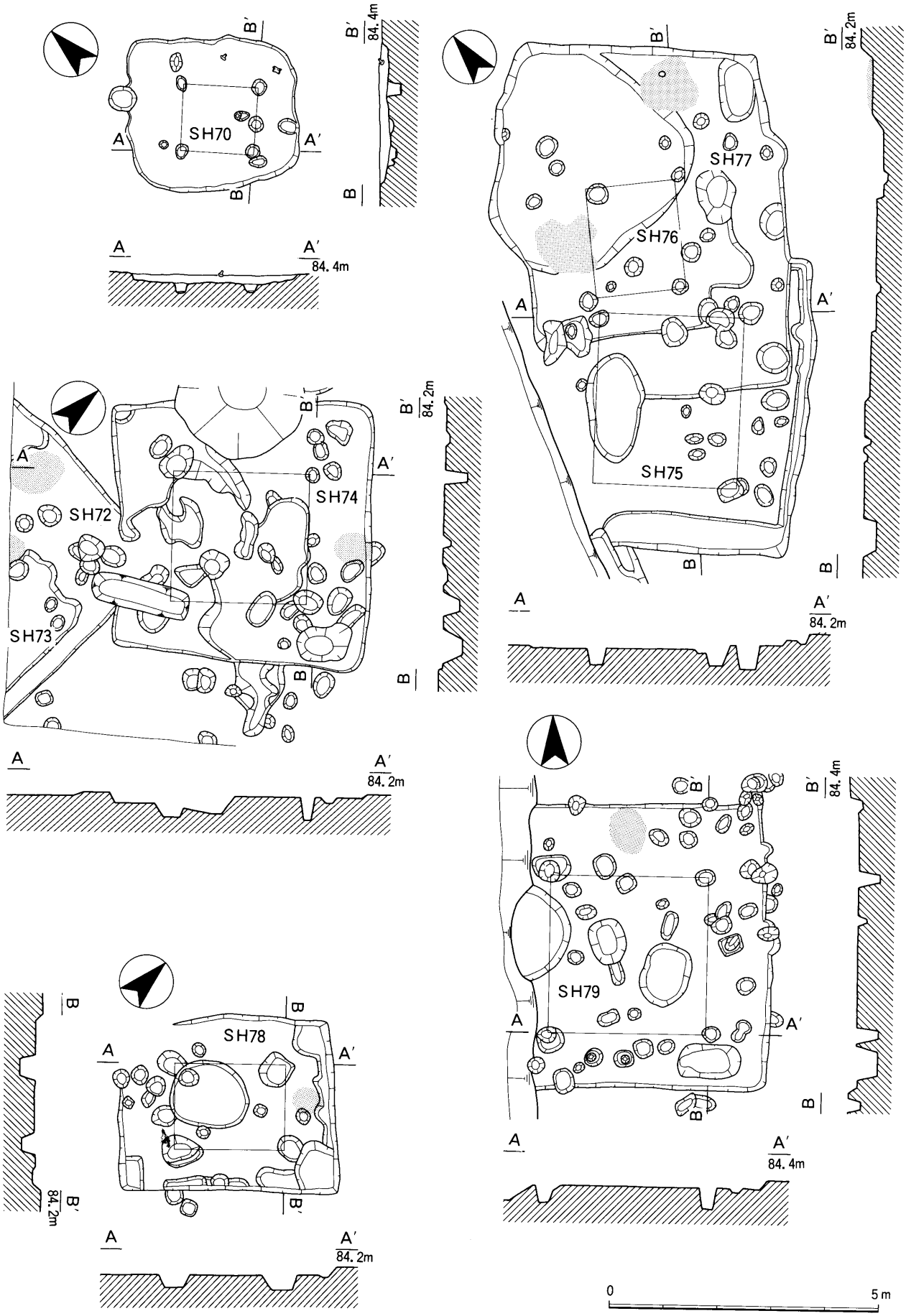
第46図　ＳＨ48・50～55実測図（1：100）



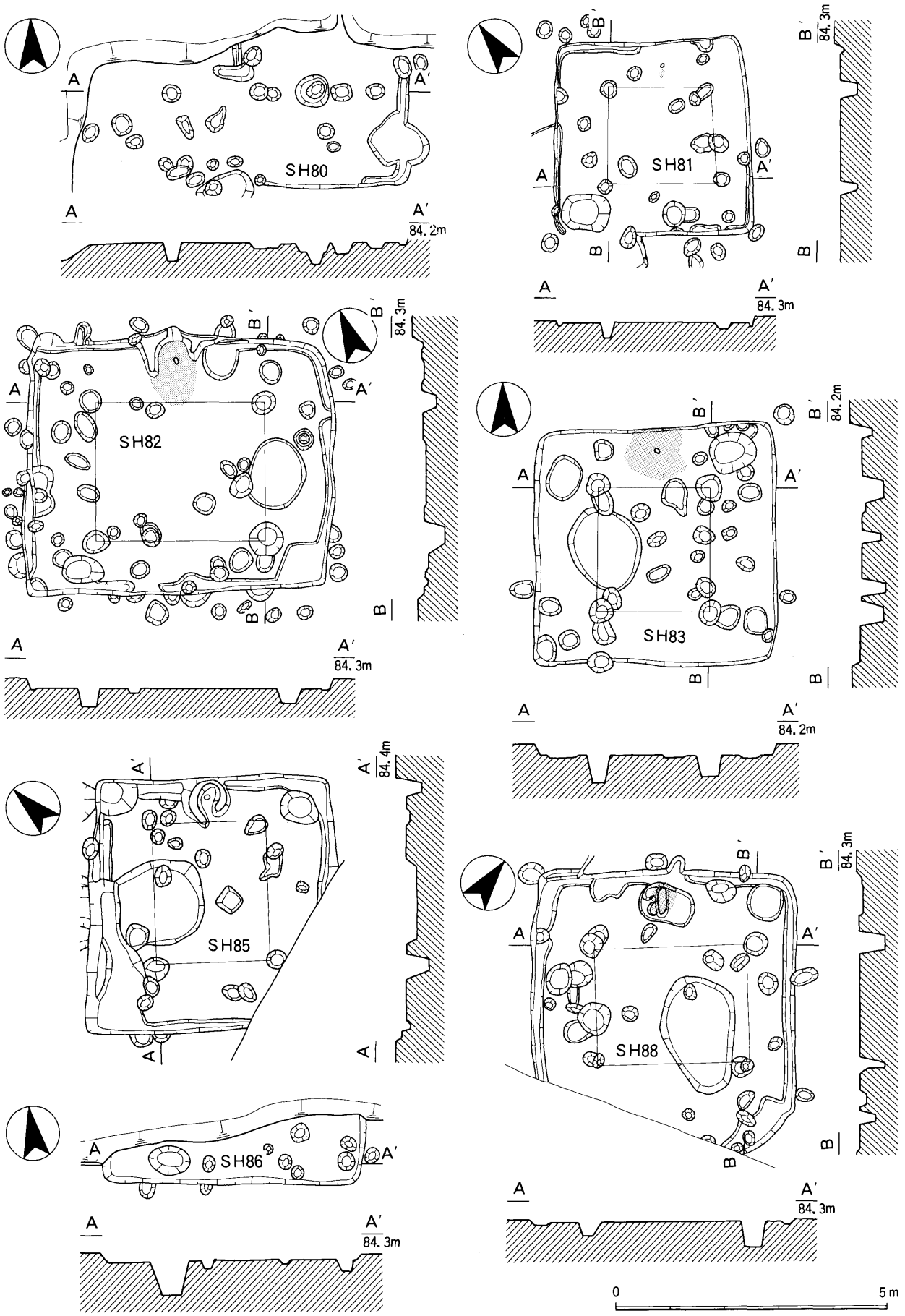
第47図　ＳＨ56～60・64実測図（１：100）



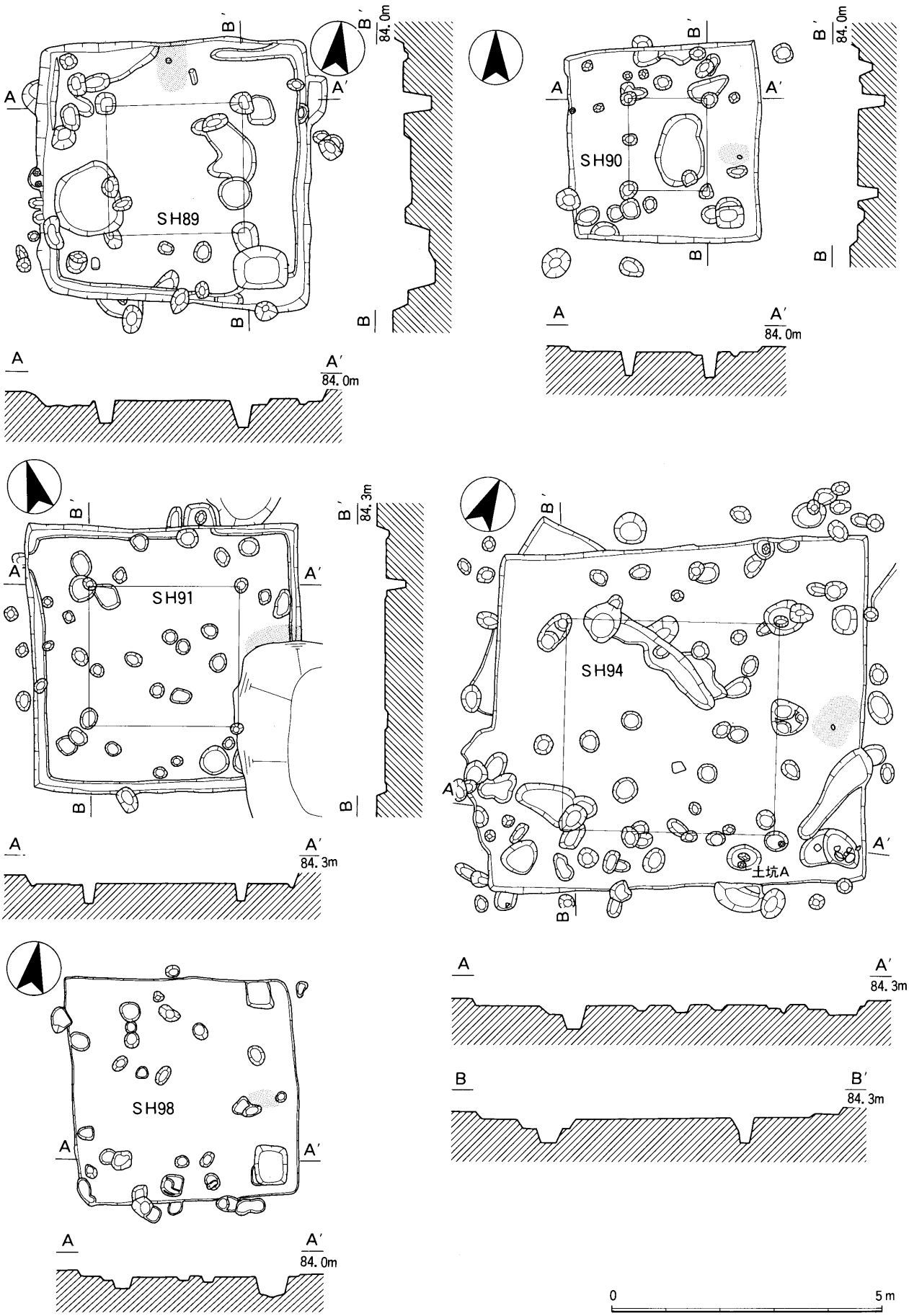
第48図　ＳＨ61・62・65～69実測図（１：100）



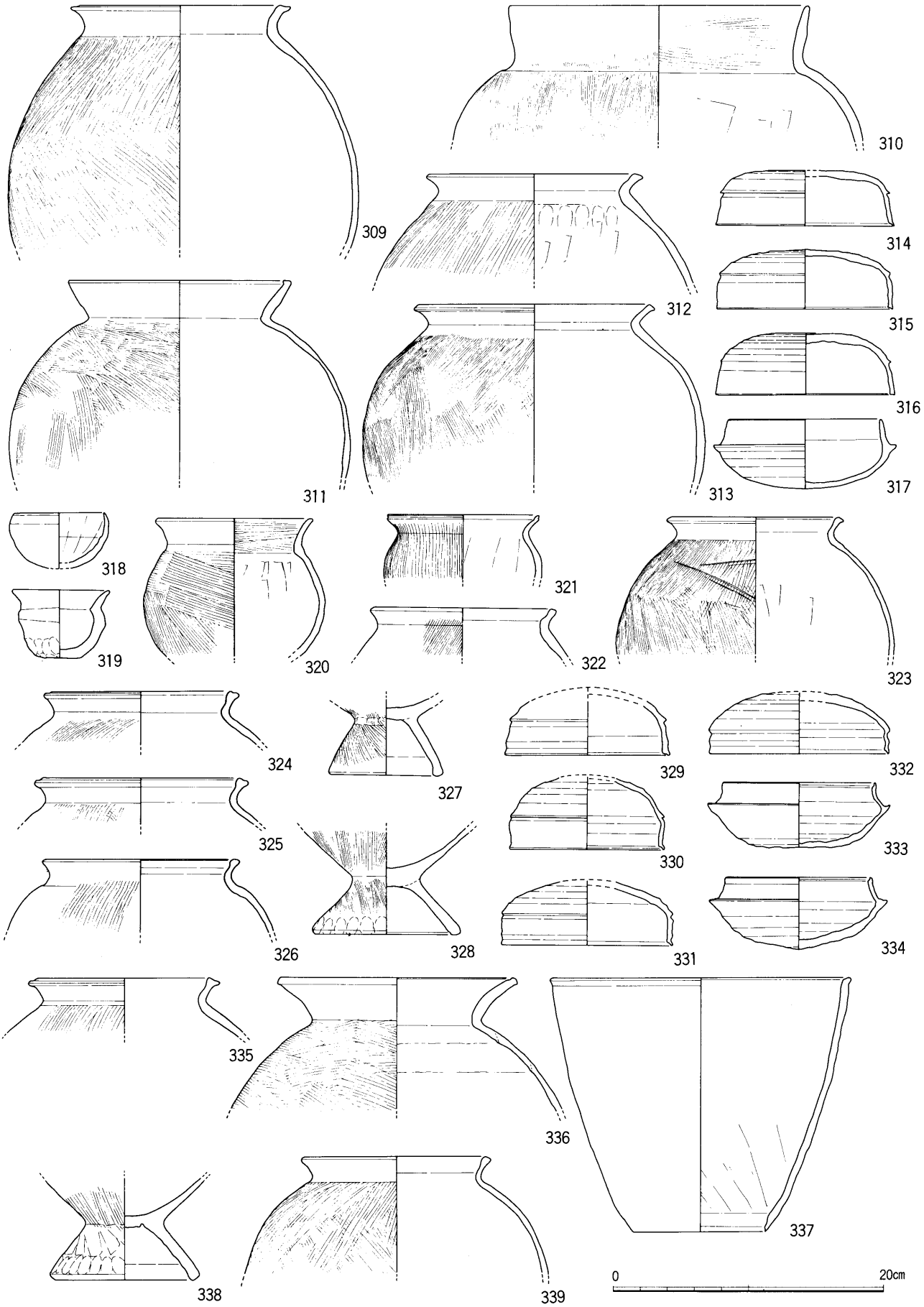
第49図　ＳＨ70・72～79実測図（１：100）



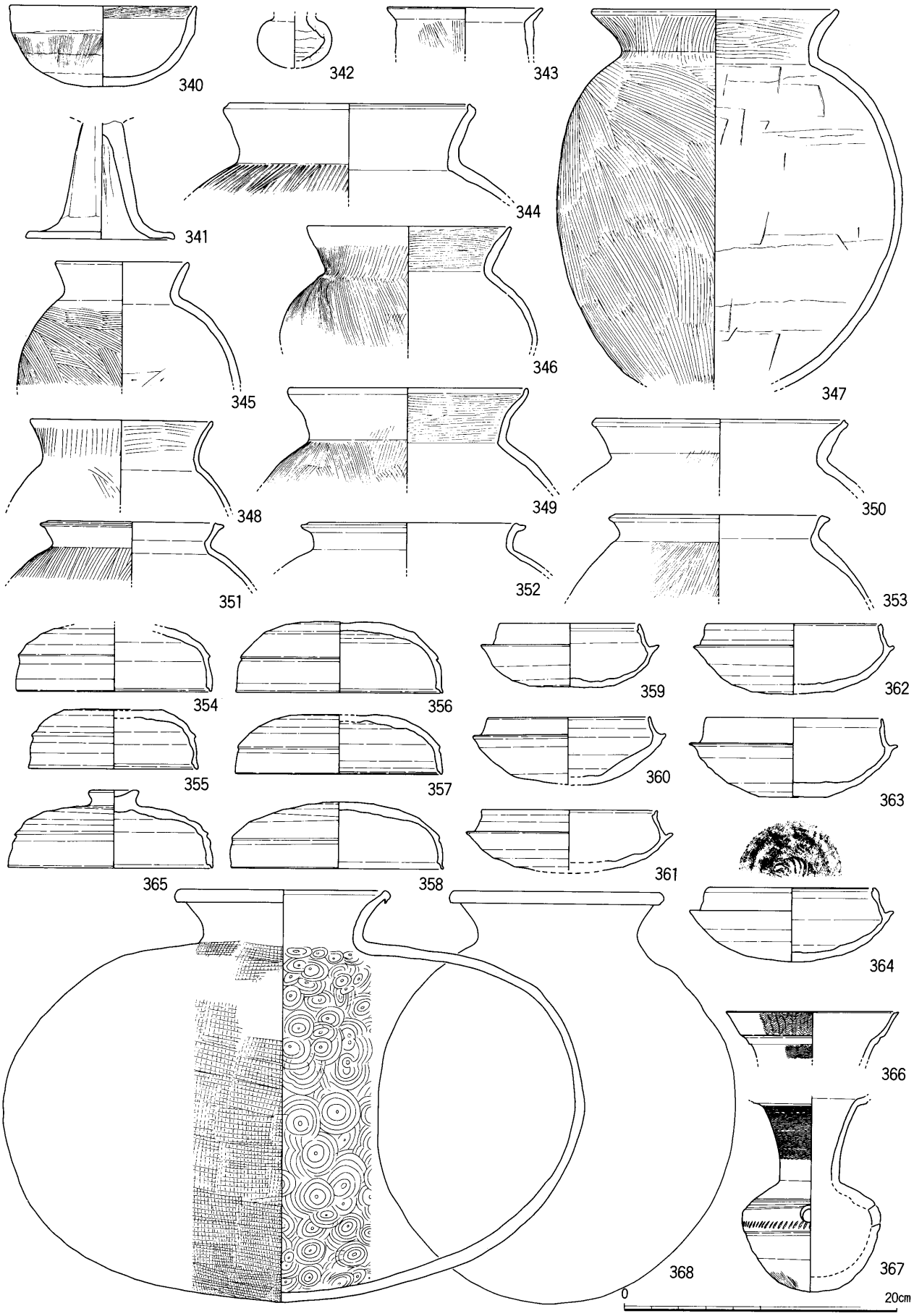
第50図　ＳＨ80～83・85・86・88実測図（1：100）



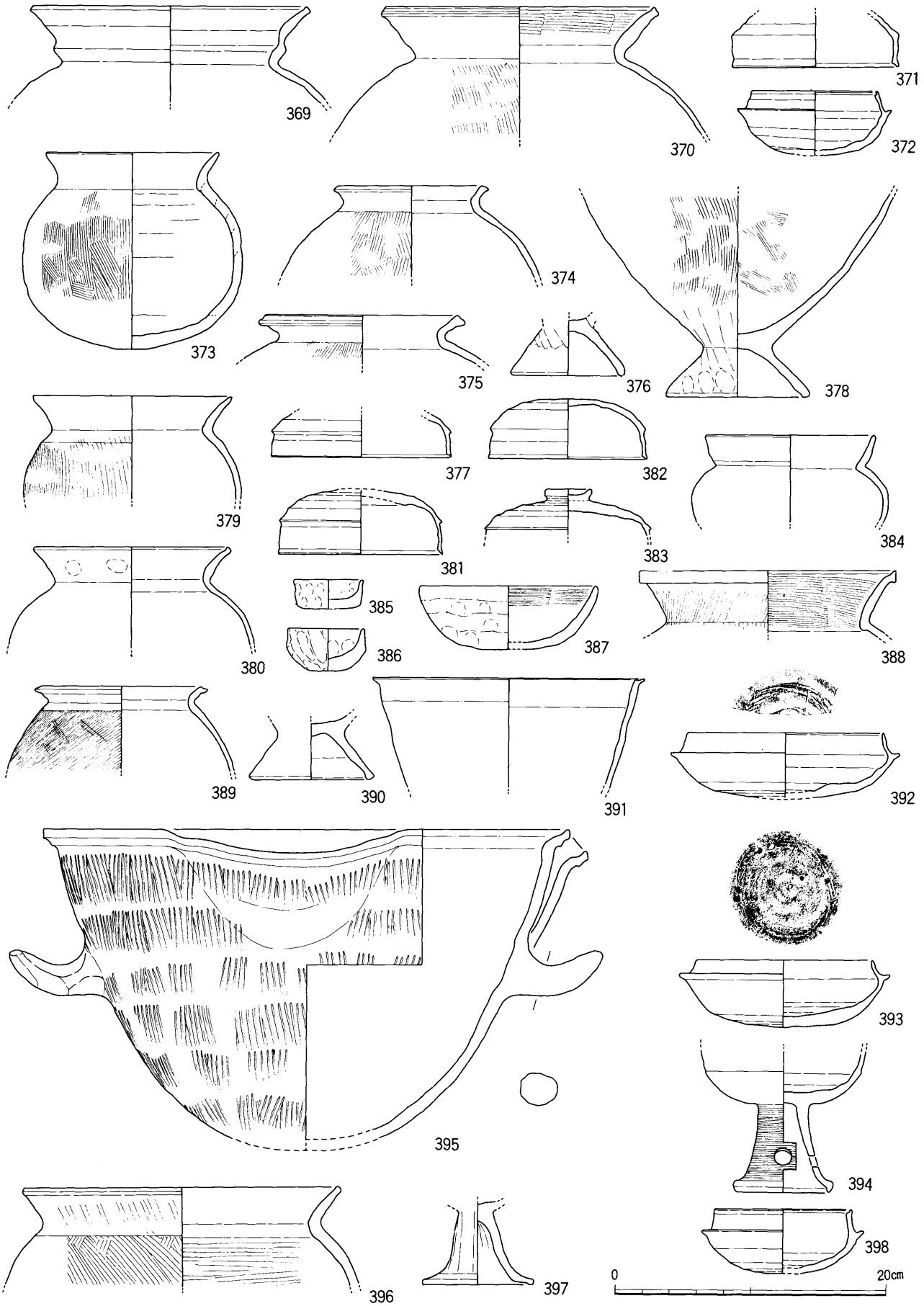
第51図　ＳＨ89～91・94・98実測図（1：100）



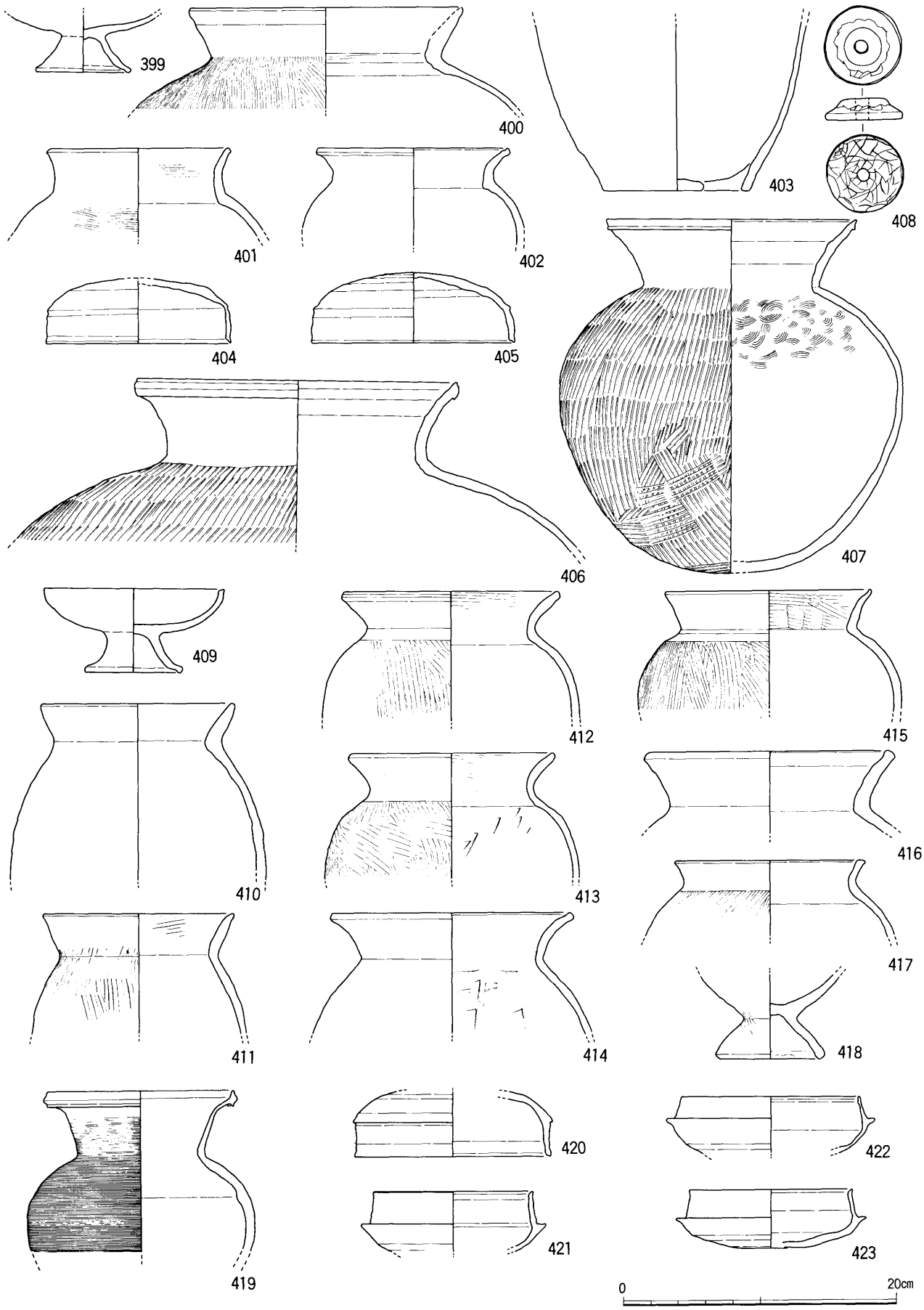
第52図　ＳＨ14・19～22・25出土遺物実測図（１：４）　309・310＝ＳＨ14、311～317＝ＳＨ19、318～334＝ＳＨ20・21、335～337＝ＳＨ22、338・339＝ＳＨ25



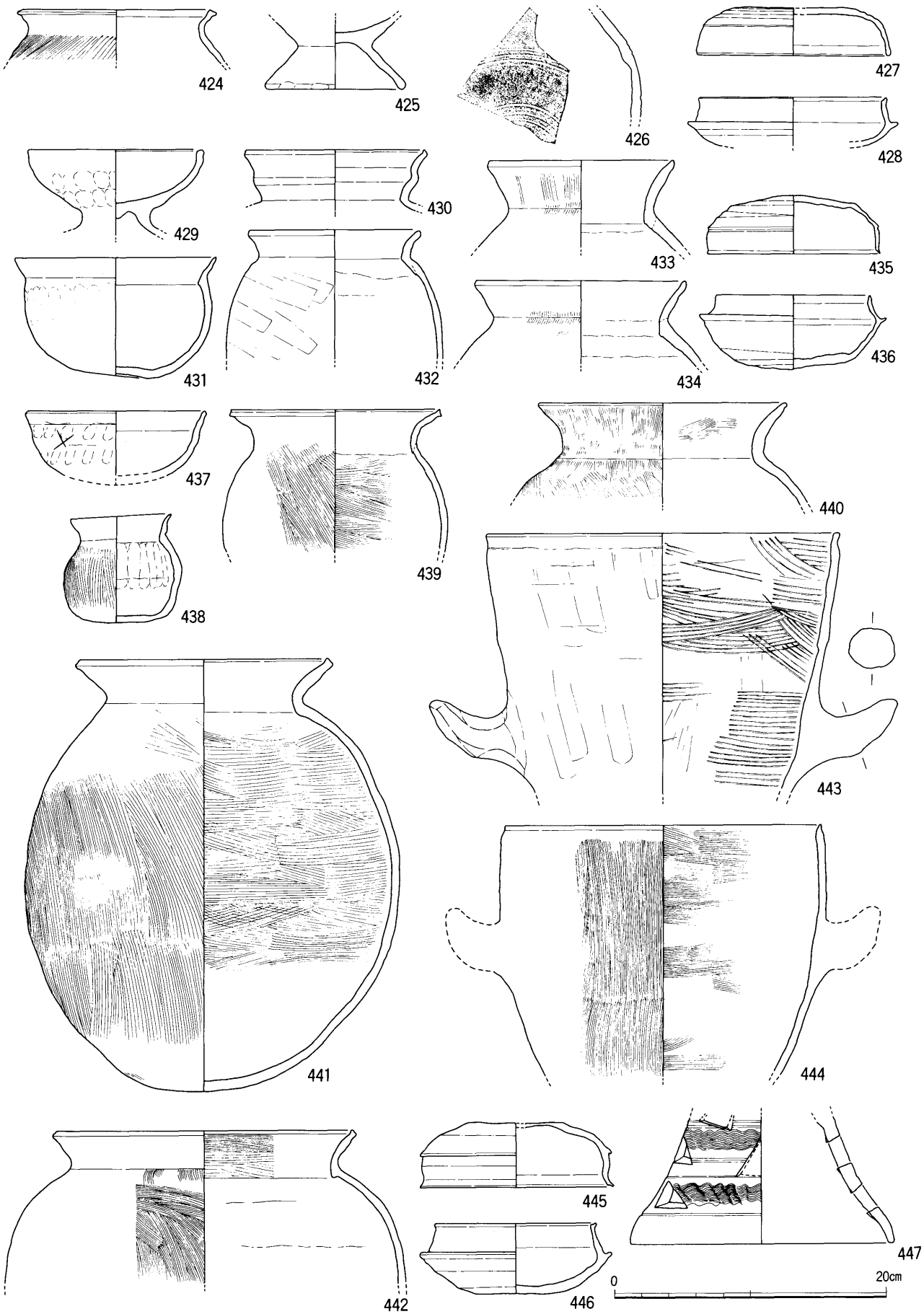
第53図　ＳＨ25～27出土遺物実測図（１：４）　340～368＝ＳＨ25～27



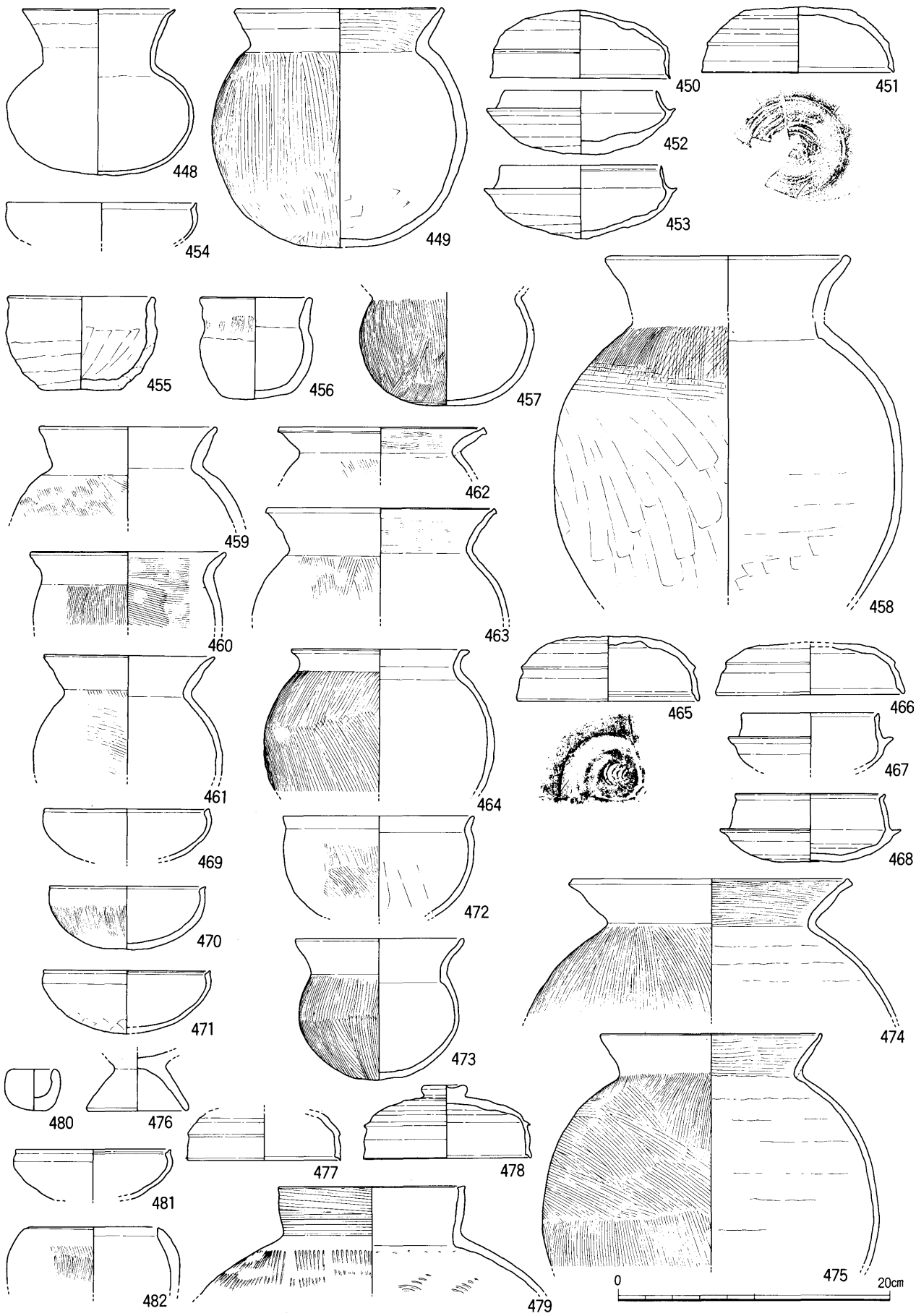
第54図　ＳＨ29～32・35～39・41出土遺物実測図（１：４）　369～372＝ＳＨ29、373＝ＳＨ30、374～377＝ＳＨ31、378＝ＳＨ32、379～383＝ＳＨ35、384＝ＳＨ36、385～395＝ＳＨ37・38、396・397＝ＳＨ39、398＝ＳＨ41



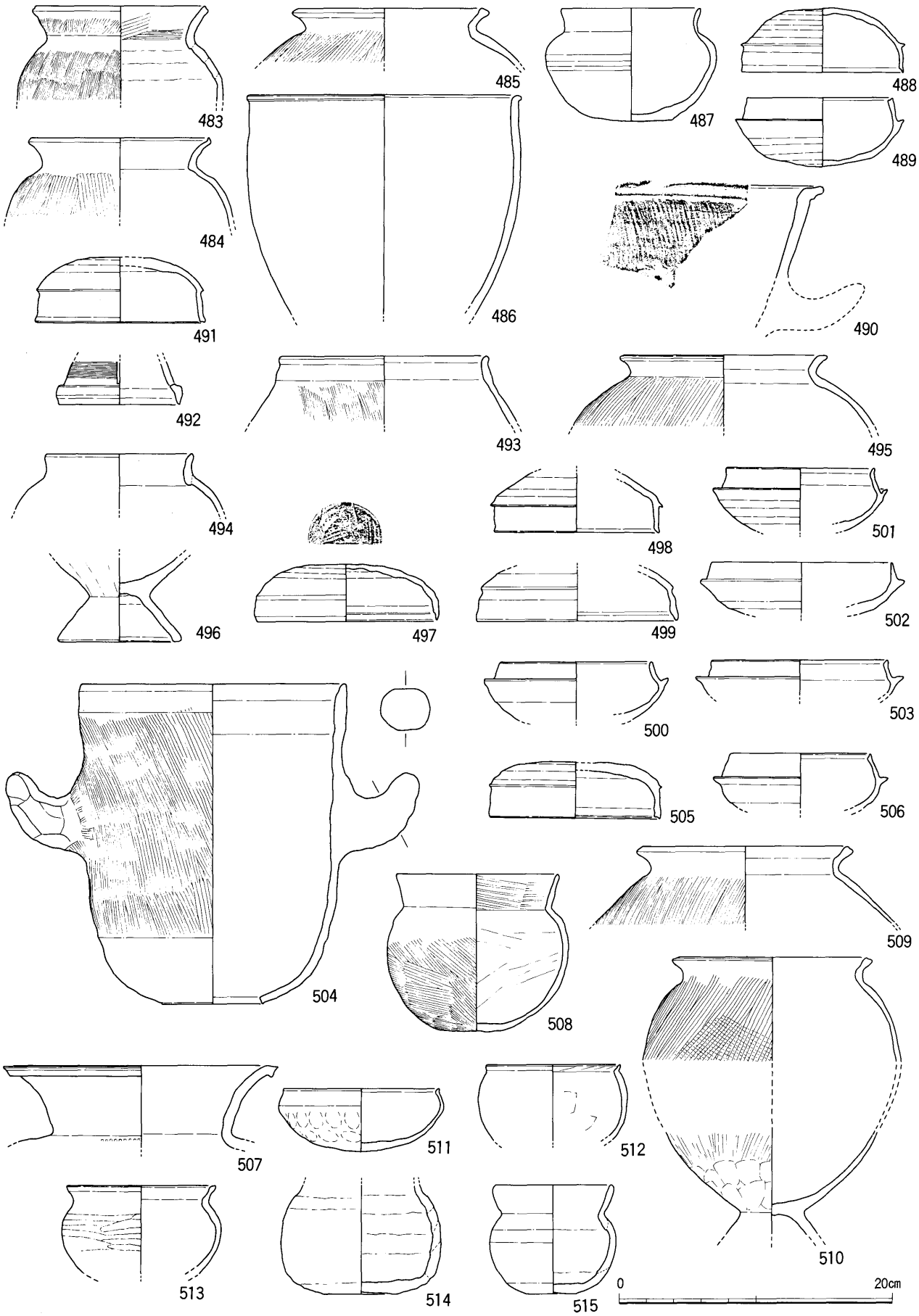
第55図　ＳＨ45・47出土遺物実測図（408は１：３、他は１：４）　399～408＝ＳＨ45、409～423＝ＳＨ47



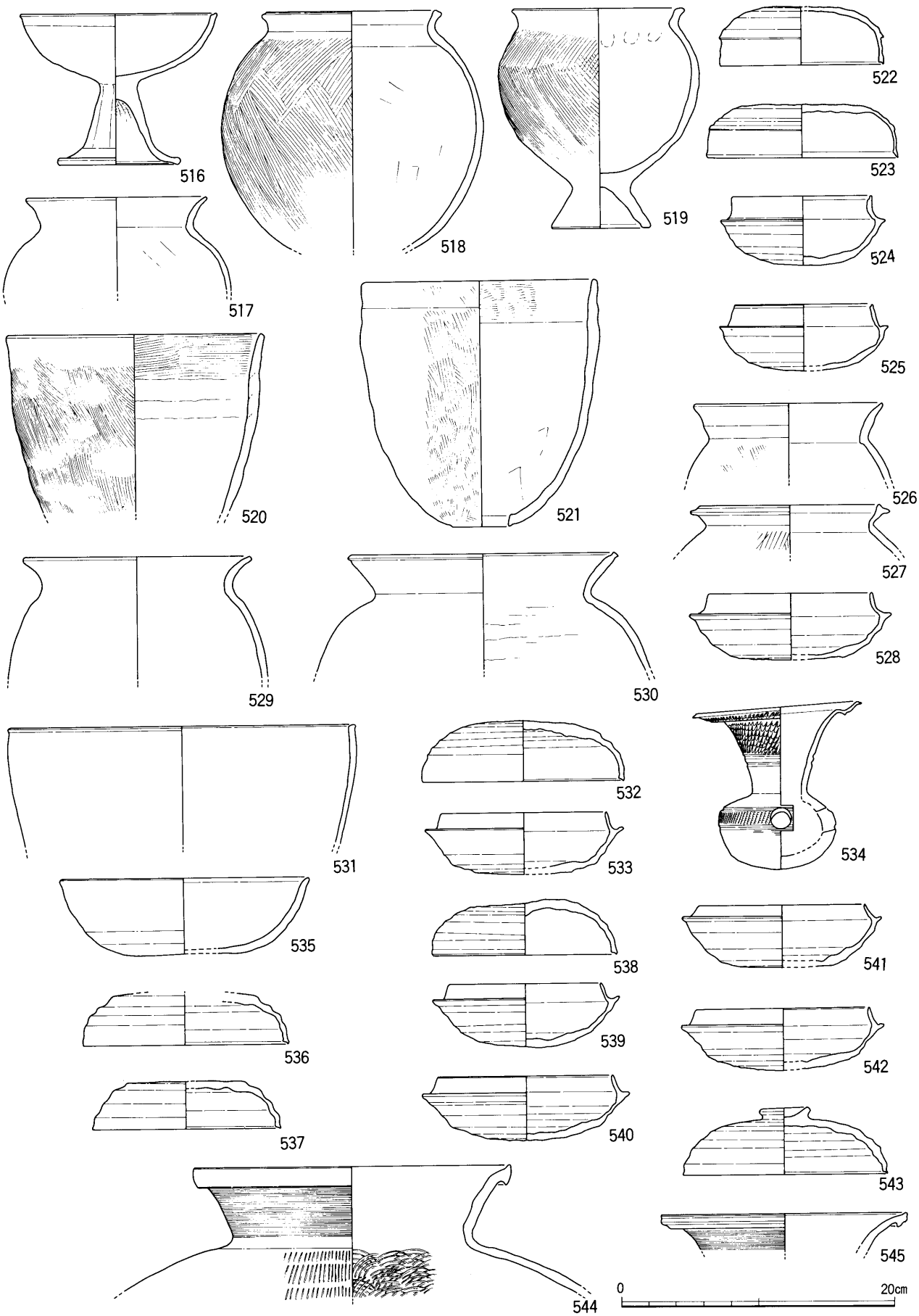
第56図　ＳＨ48・50・51出土遺物実測図（１：４）　424～428＝ＳＨ48、429～436＝ＳＨ50、437～447＝ＳＨ51



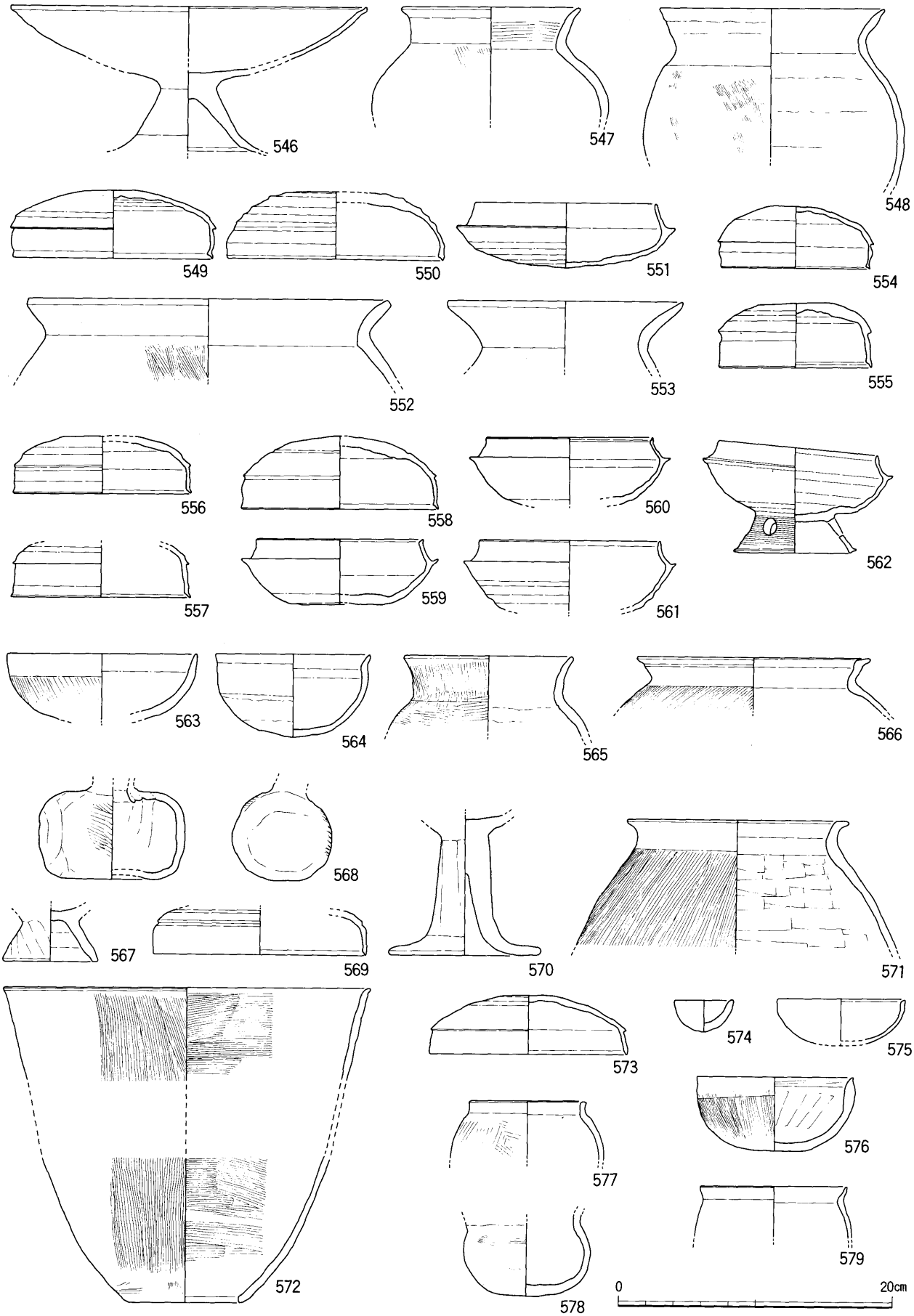
第57図　ＳＨ52～56出土遺物実測図（１：４）　448～453＝ＳＨ52、454～458＝ＳＨ53、459～468＝ＳＨ54、469～479＝ＳＨ55、480～482＝ＳＨ56



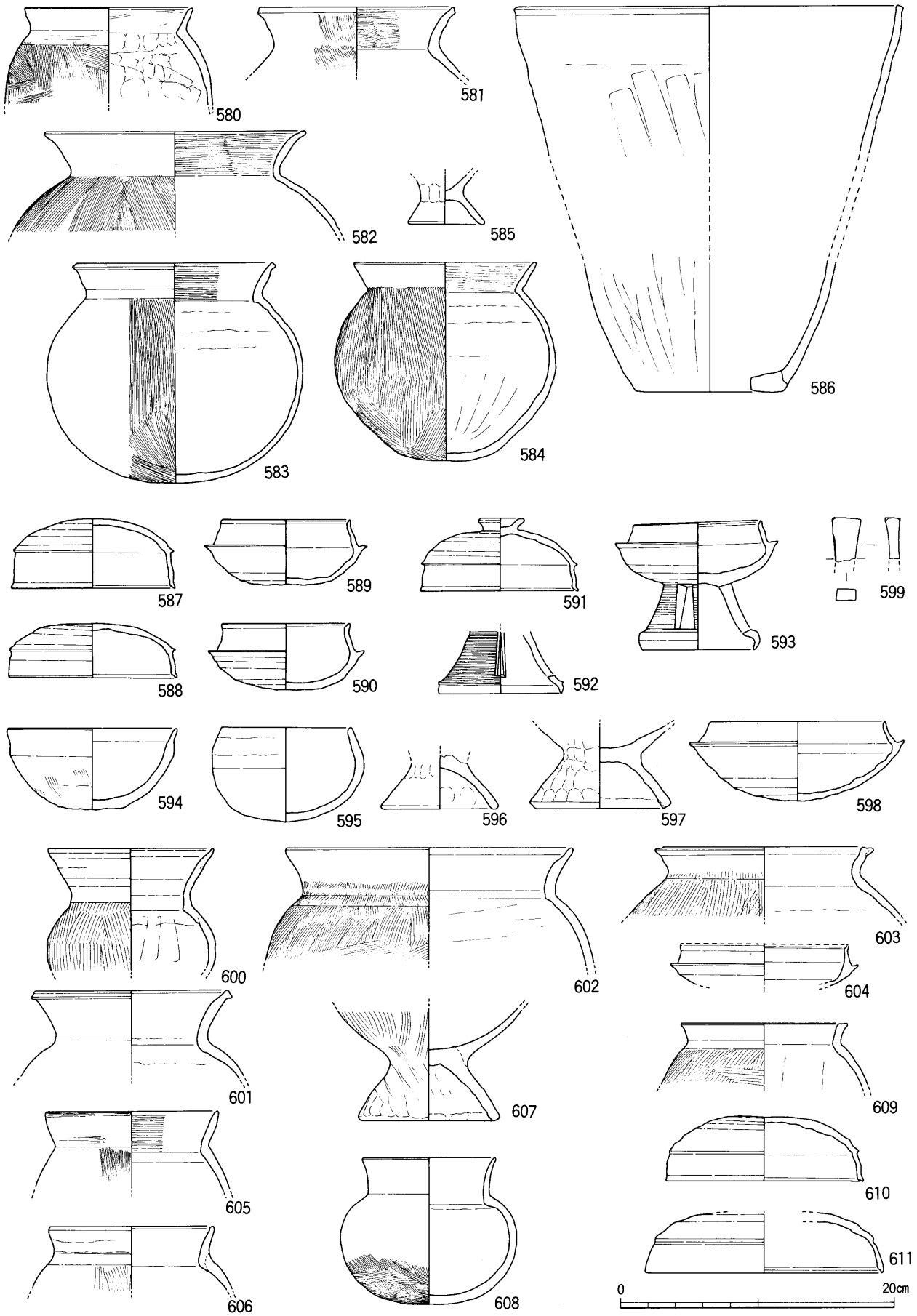
第58図　ＳＨ56～61出土遺物実測図（１：４）　483～490＝ＳＨ56、491・492＝ＳＨ57、493～503＝ＳＨ58、504～507＝ＳＨ59、508～510＝ＳＨ60、511～515＝ＳＨ61



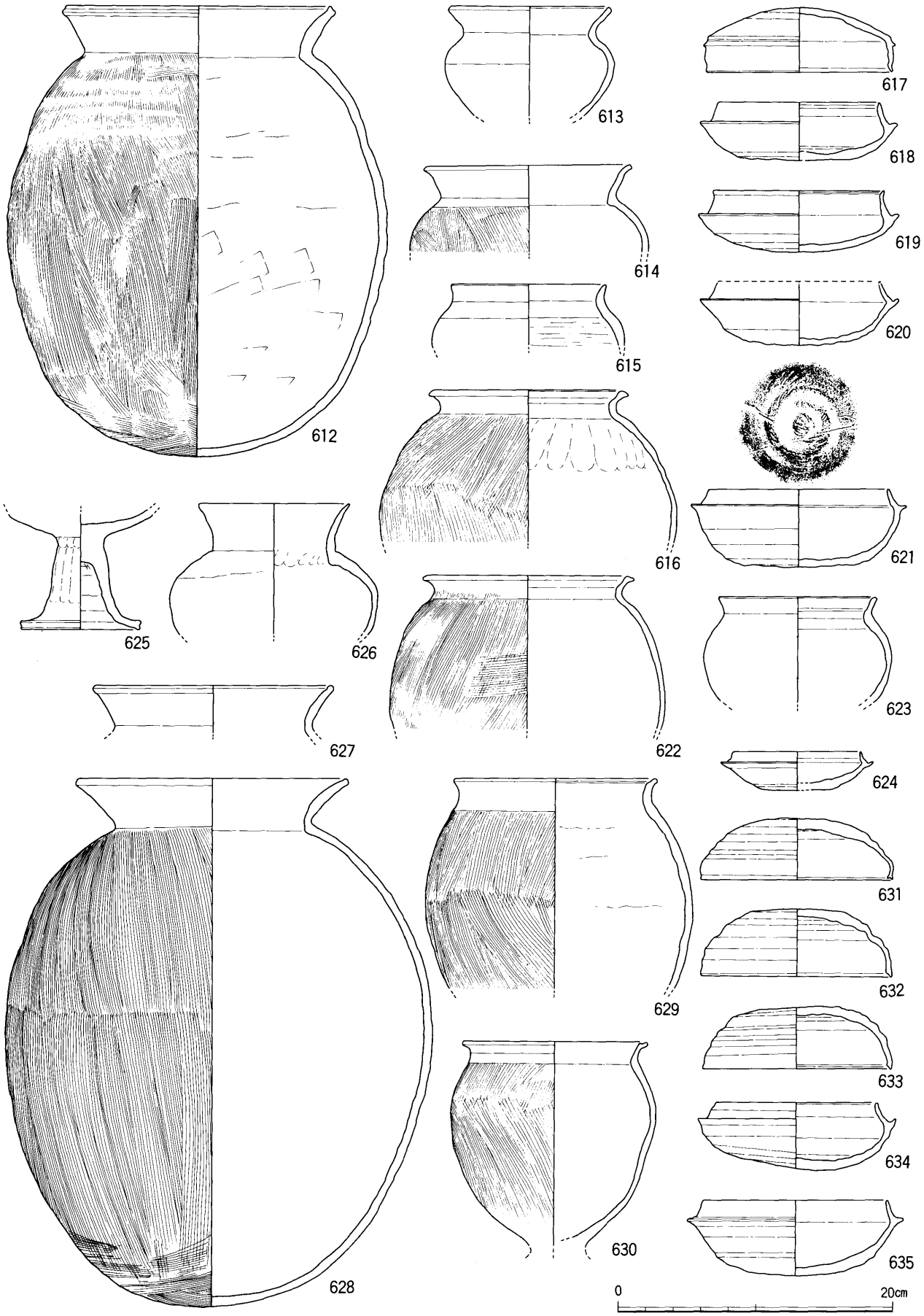
第59図　ＳＨ61・62・64・65出土遺物実測図（１：４）　516～525＝ＳＨ61、526～528＝ＳＨ62、529～534＝ＳＨ64、535～545＝ＳＨ65



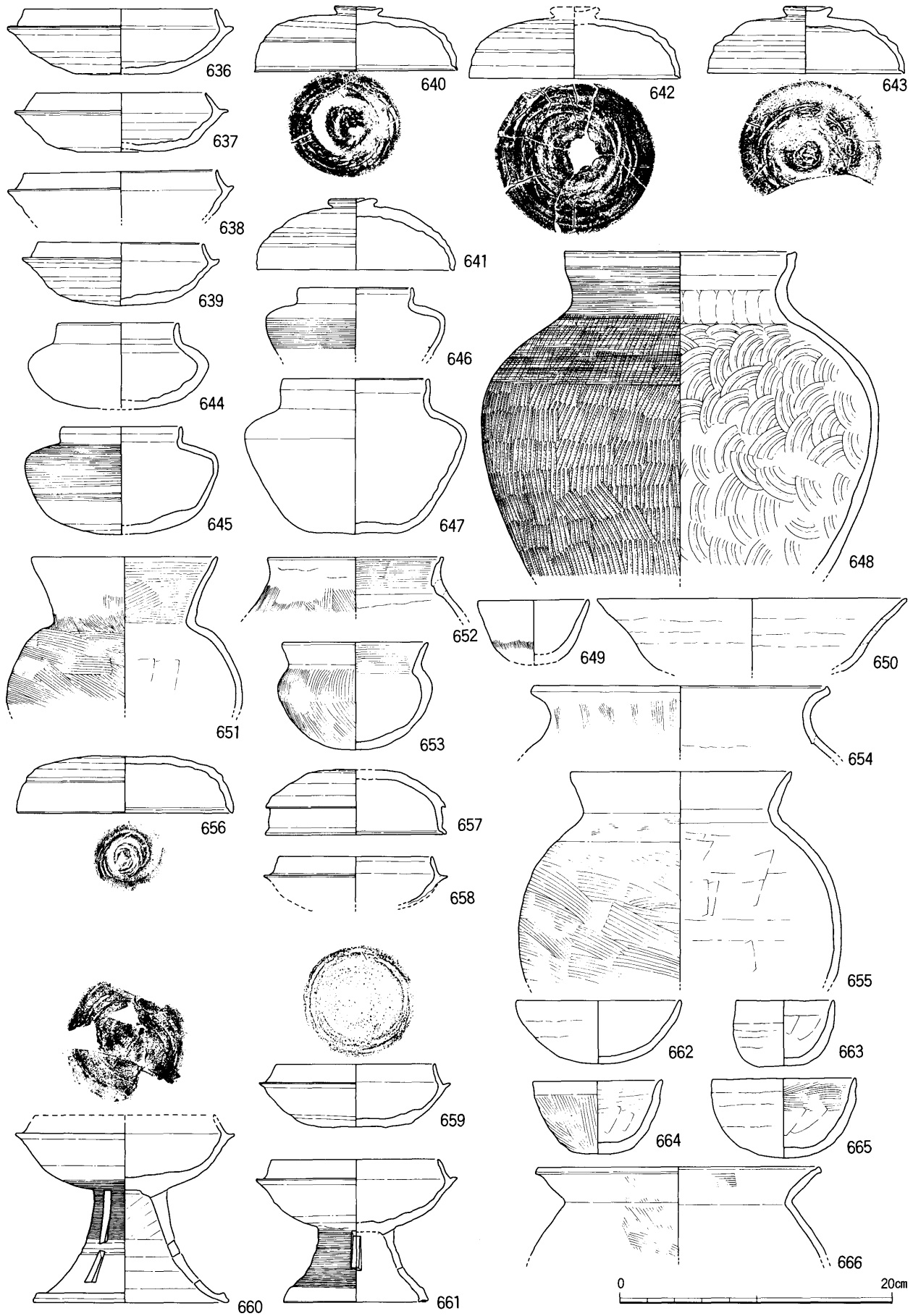
第60図　ＳＨ66～70・72～74出土遺物実測図（１：４）　546～551＝ＳＨ66、552・553＝ＳＨ67、554～562＝ＳＨ68、563～569＝ＳＨ69、570・571＝ＳＨ70、572＝ＳＨ72、573＝ＳＨ73、574～579＝ＳＨ74



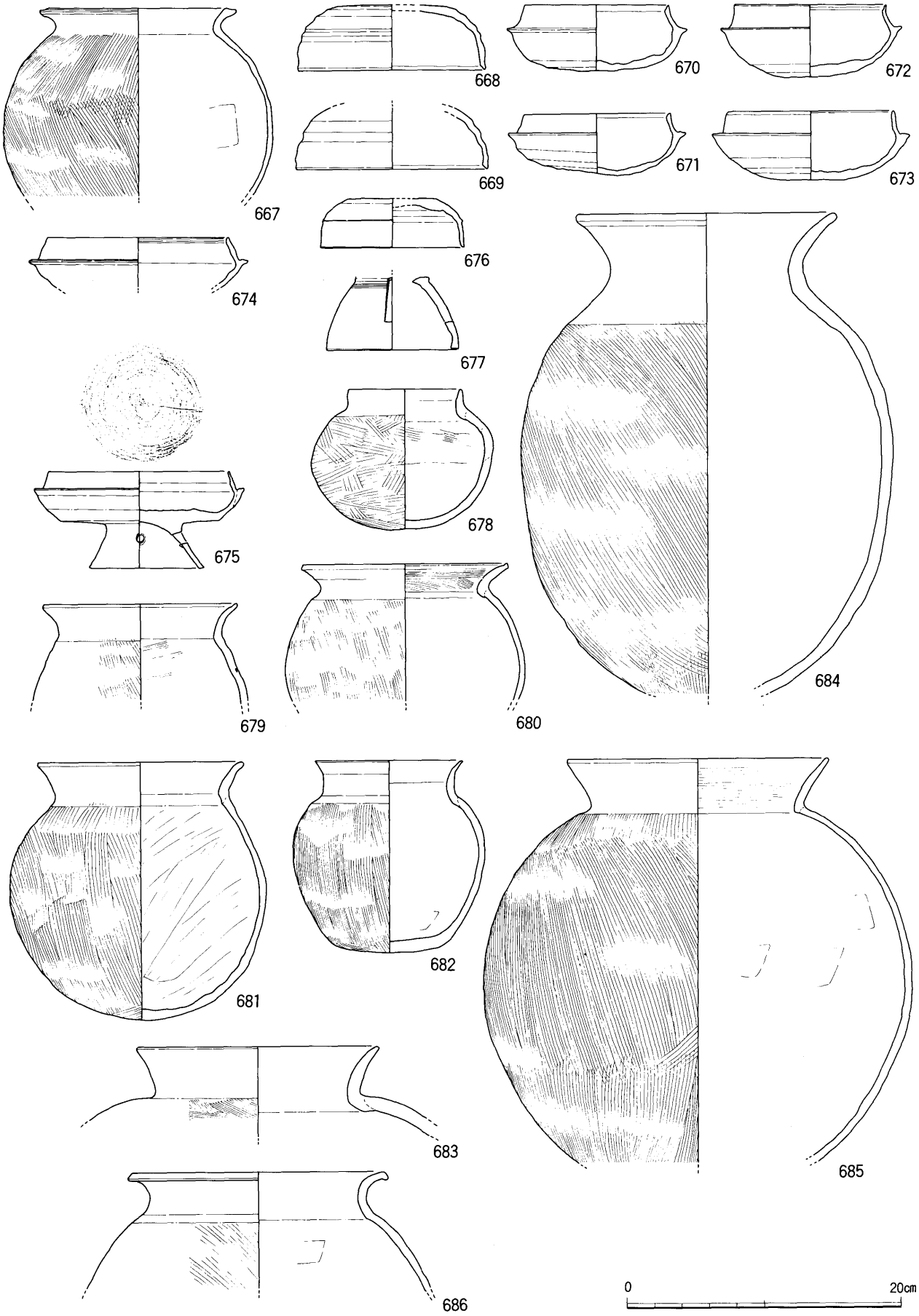
第61図　ＳＨ74～78出土遺物実測図（１：４）　580～593＝ＳＨ74、594～599＝ＳＨ75、600～604＝ＳＨ76、605～608＝ＳＨ77、609～611＝ＳＨ78



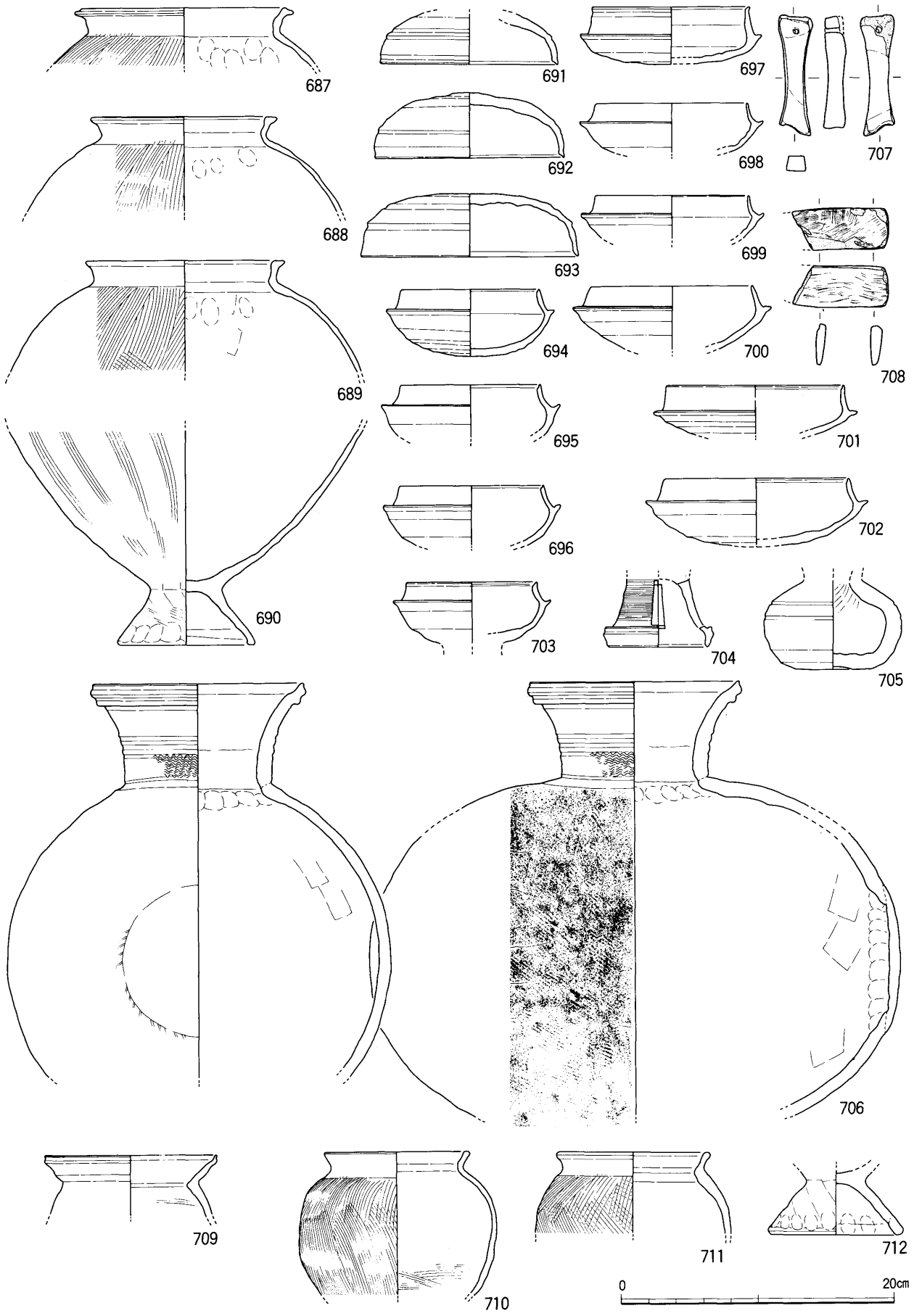
第62図　ＳＨ78～82出土遺物実測図（１：４）　612＝ＳＨ78、613～619＝ＳＨ79、620・621＝ＳＨ80、622～624＝ＳＨ81、625～635＝ＳＨ82



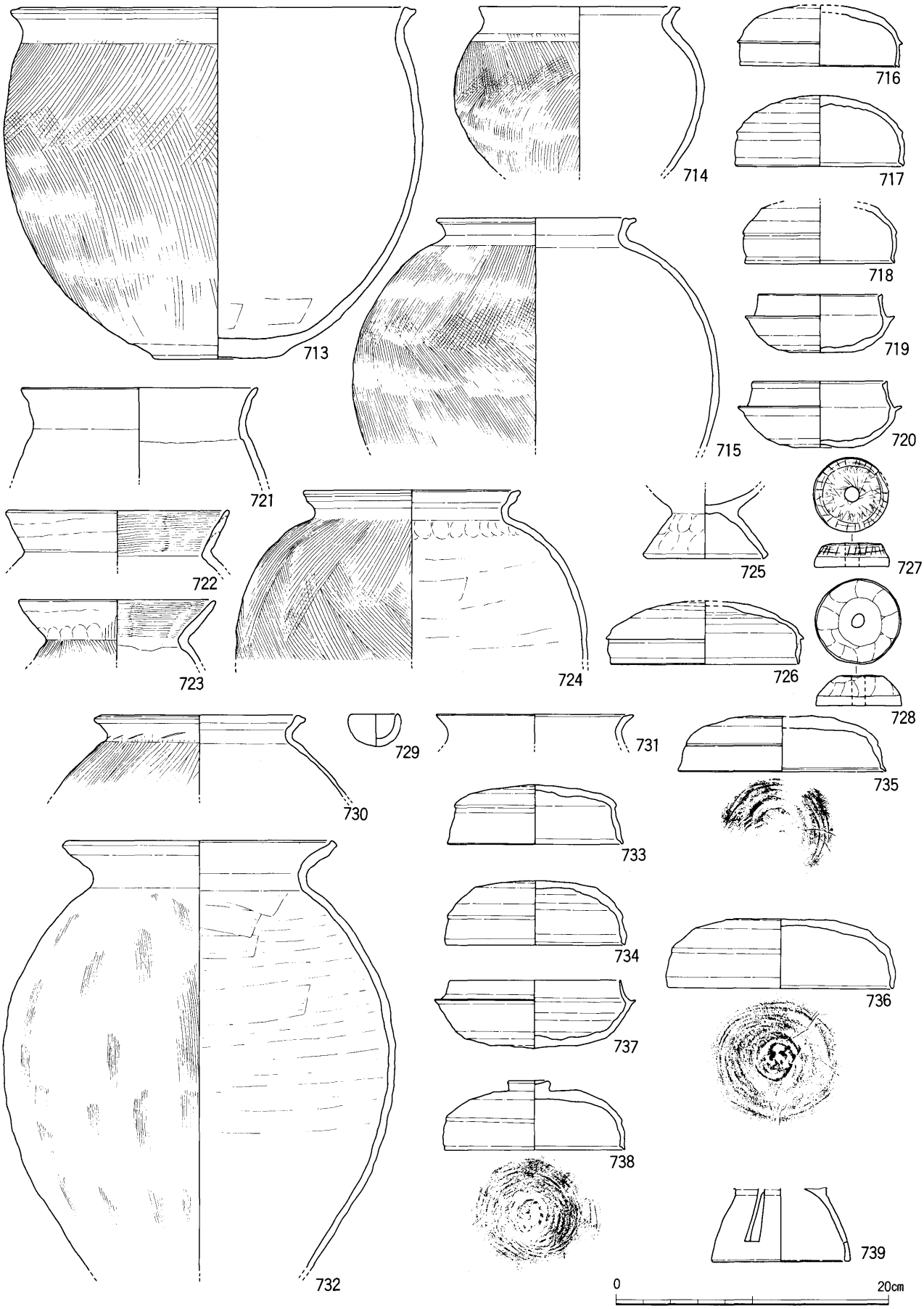
第63図　ＳＨ82・83・85出土遺物実測図（１：４）　636～648＝ＳＨ82、649～661＝ＳＨ83、662～666＝ＳＨ85



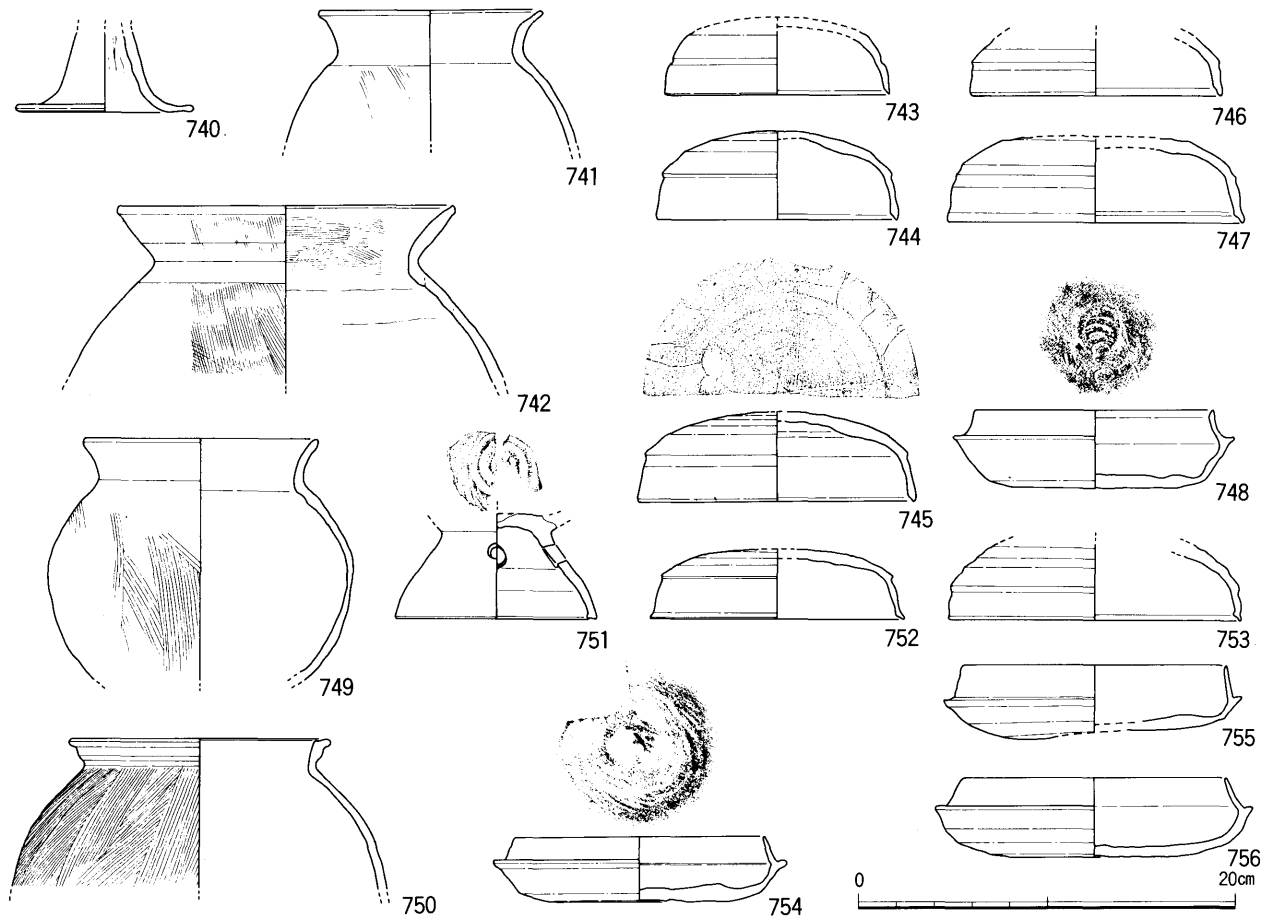
第64図　ＳＨ85・86・88・89出土遺物実測図（１：４）667～673＝ＳＨ85、674・675＝ＳＨ86、676・677＝ＳＨ88、678～686＝ＳＨ89



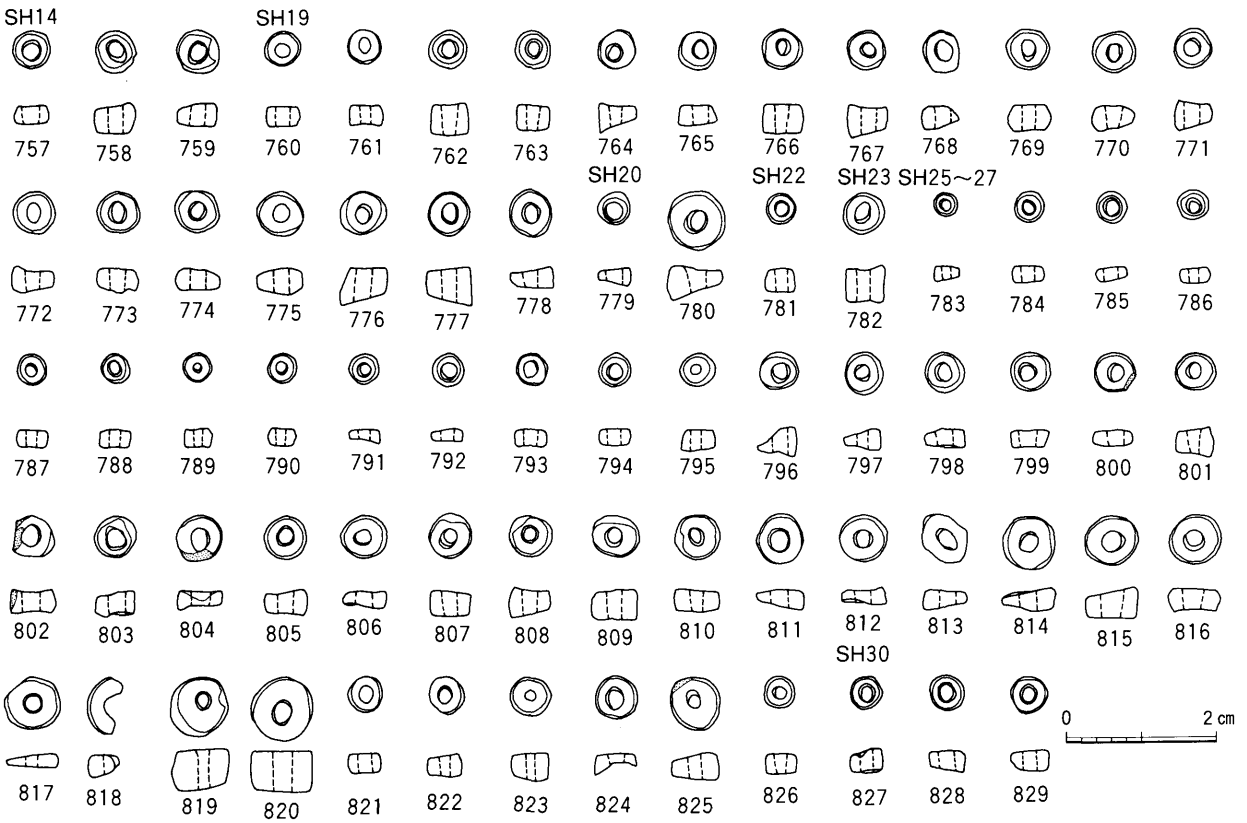
第65図　ＳＨ89・90出土遺物実測図（Ｉ：４）　687～708＝ＳＨ89、709～712＝ＳＨ90



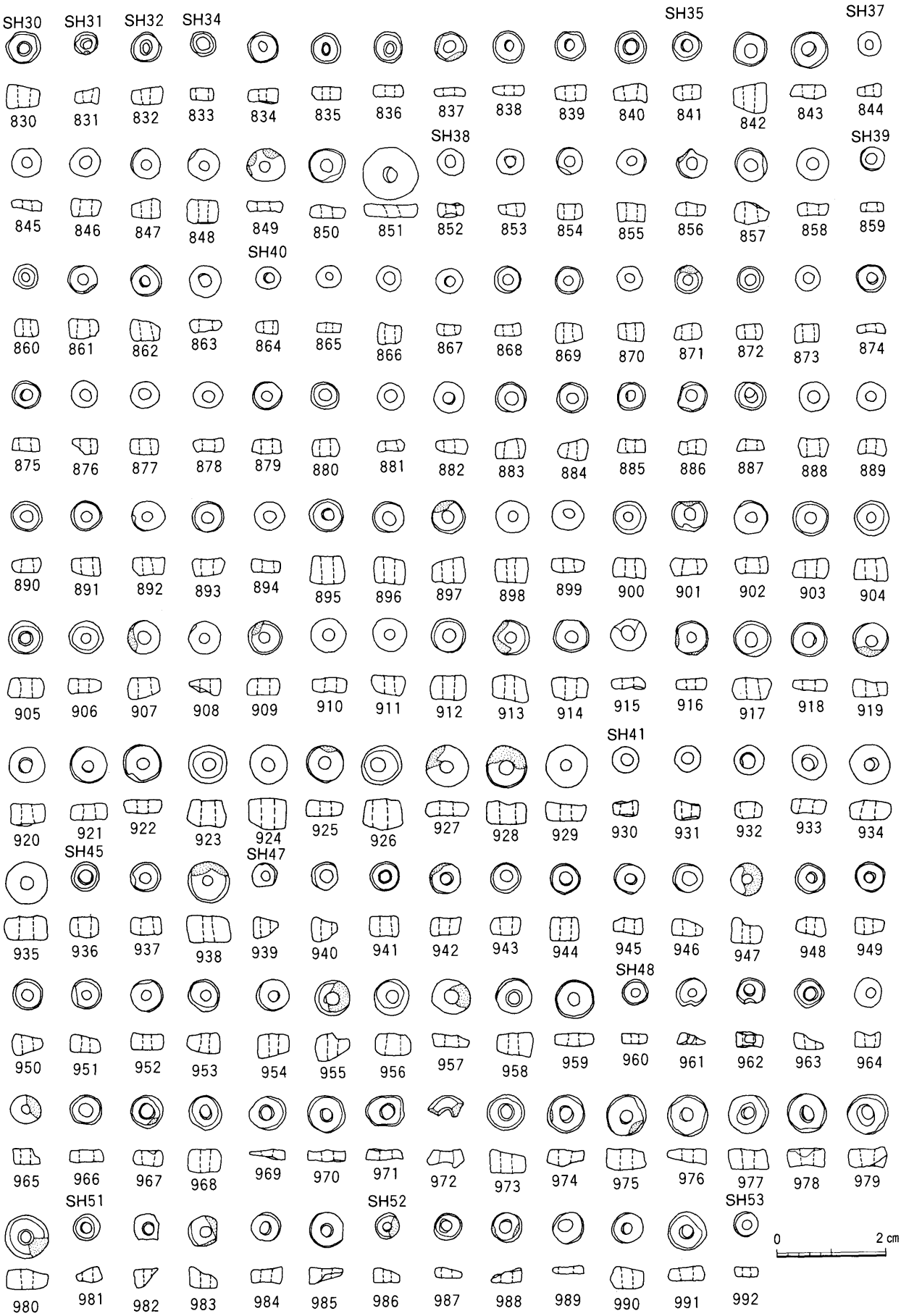
第66図　ＳＨ90～92出土遺物実測図　（727・728は１：３、他は１：４）　713～720＝ＳＨ90、721～728＝ＳＨ91、729～739＝ＳＨ92



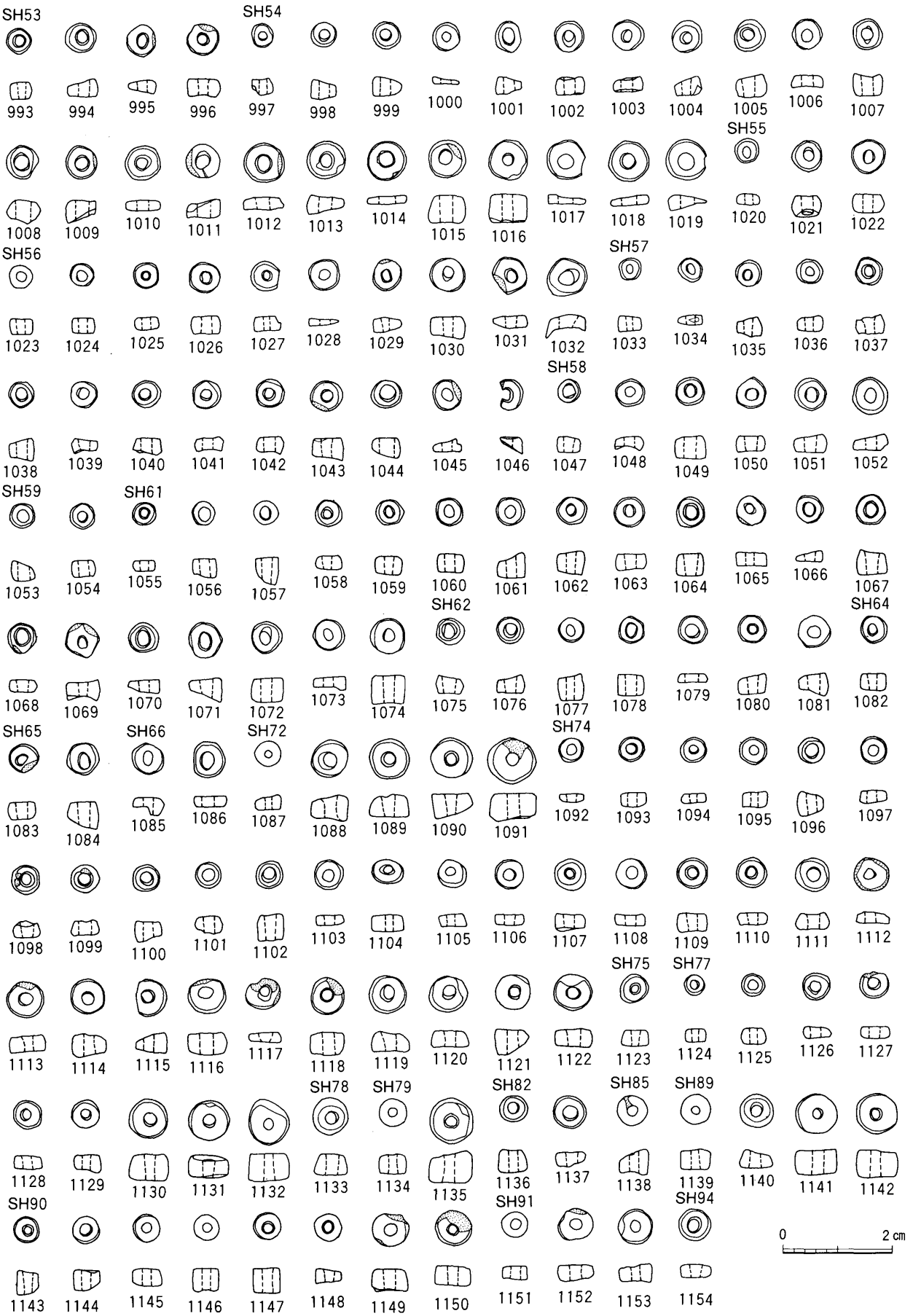
第67図　ＳＨ94・98出土遺物実測図（１：４）　740～748＝ＳＨ94、749～756＝ＳＨ98



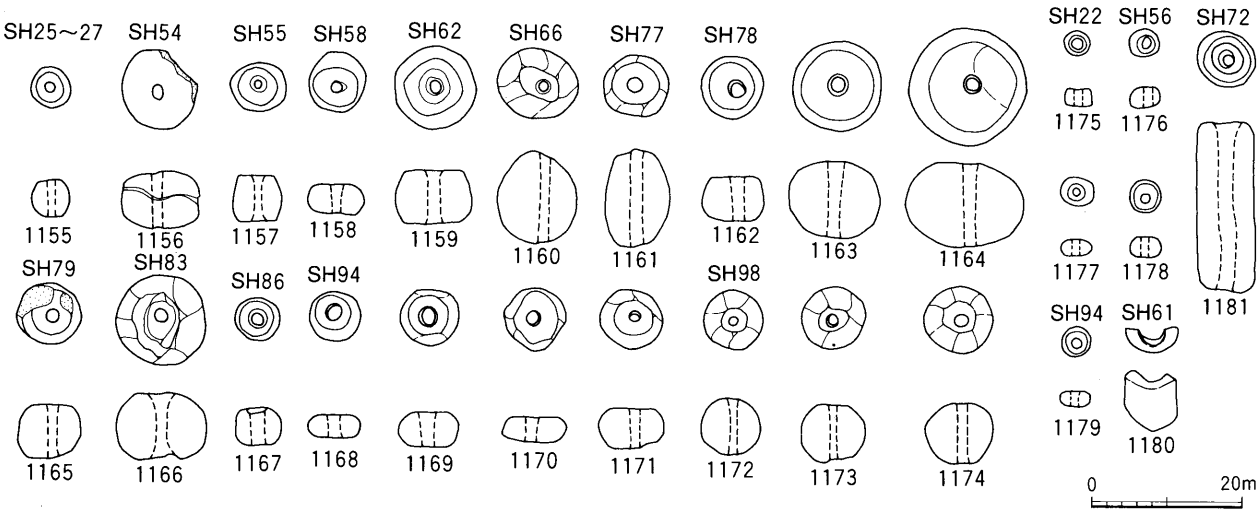
第68図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図（１：１）



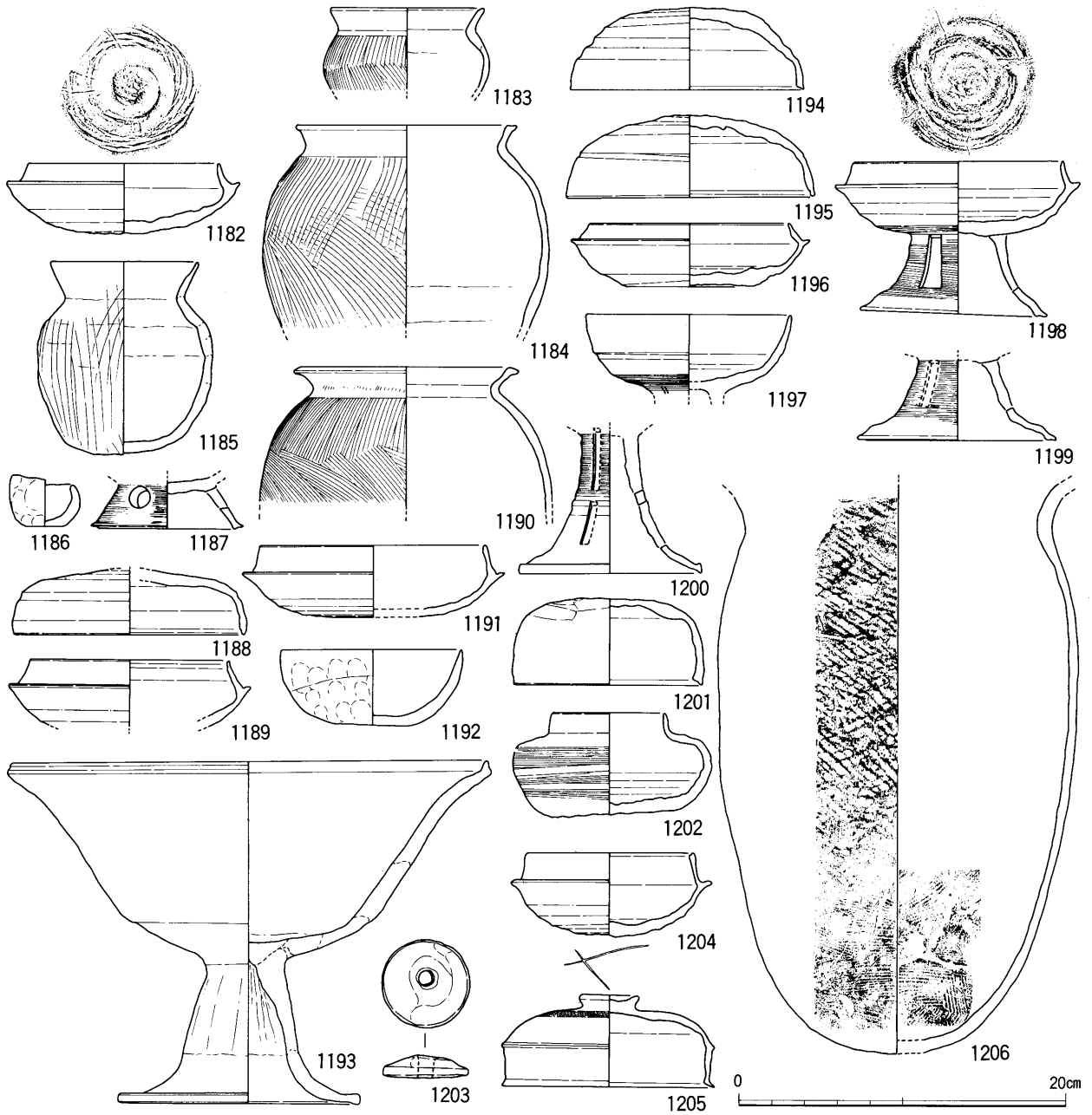
第69図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図（1：1）



第70図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図(1：1)



第71図　竪穴住居出土玉類実測図（1：1）　1155～1174は土製、1175～1179はガラス製、1180～1181は滑石製



第72図　ＳＫ４・６～10・13、包含層出土遺物実測図（1203は１：３、他は１：４）　1182＝ＳＫ４、1183・1184＝ＳＫ６、1185～1189＝ＳＫ７、1190＝ＳＫ８、1191・1192＝ＳＫ９、1193＝ＳＫ10、1194～1202＝ＳＫ13、1203～1206＝包含層

竪穴番号	規模			主柱穴柱間		南北軸方向	竈	貯蔵穴	周溝	出土玉類		時期	備考
	東西m	南北m	面積m²	東西m	南北m					滑臼	その他		
14	4.1	4.0	16.4	2.5	2.0	N-41°-W	東	南東隅	−	3	−	6C中葉	支石
19	5.0	4.9	24.5	4.0 3.1	3.5 3.2	N-24°-E	北	南東隅?	東?	19	−	6C前葉	支石
20	4.1	4.0	16.4	1.9	2.2	N-31°-E	北	−	−	2	−	6C前葉	
21	3.7	3.9	14.5	(2.0)	(1.7)	N-10°-W	−	−	西·南·北	−	−	5C末~6C初	SH20·22より古
22	5.1	4.8	24.5	(2.5)	(2.2)	N-24°-E	北	南東隅	4辺	1	ガ小1	6C前葉	
23	3.4	−	−	−	−	N-30°-E	東	南東隅	−	1	−	6C前半~中葉	SK6より古
25	6.0	6.1	36.6	−	−	N-2°-W	北	−	−			6C前葉	SH26·27より古、支石
26	−	−	−	3.7	3.1	N-6°-W	北	−	−	44	土臼1	6C中葉	SH27より古
27	−	−	−	2.8	2.0	N-6°-E	北	−	−			6C後半	支石
28	3.9	−	−	2.0	2.0	N-0°	東	南東隅	西·南	−	−	6C後半	
29	3.5	3.8	13.3	1.3	1.7	N-8°-E	東	南東隅	東·西·北	−	−	5C末~6C初	支石
30	3.4	3.1	10.6	(1.8)	(1.6)	N-10°-E	北	北東隅	東·北	4	−	6C後半	
31	4.5	4.7	21.2	2.3	1.9	N-6°-E	東	南東隅	−	1	子持1	6C前半	支石
32	3.3	4.0	13.2	−	−	N-20°-E	北	南東隅	−	1	−	6C中葉~後半	支石
34	4.5	−	−	−	−	N-1°-W	−	−	−	8	−	6C後半	
35	4.5	4.5	20.3	2.0	2.2	N-13°-E	北	南東隅	北·西·南	3	−	5C末~6C初	支石
36	6.3	7.0	44.1	3.9 3.6	4.3	N-7°-E	北?	南東隅	−	−	−	5C代	
37	8.3	8.1	67.3	5.2	5.2	N-13°-E	−	北東隅	−	8	−	6C中葉	
38	6.9	7.1	49.0	(4.9)	(4.5)	N-13°-E	北	南東隅?	−	7	−	6C中葉	SH37より古
39	(2.8)	2.8	(7.8)	−	−	N-1°-W	−	−	−	5	−	6C中葉~後半	
40	3.5	3.2	11.2	(1.4)	(1.4)	N-34°-E	−	−	−	66	−	6C前半	
41	4.5	4.5	20.3	2.3	2.3	N-4°-E	−	北東隅	−	6	−	5C末~6C初	
45	5.0	4.9	24.5	2.4	2.1	N-18°-E	西	北東隅	−	3	−	6C中葉	
47	5.9	5.9	34.9	(3.1)	(3.1)	N-16°-W	東	南東隅	−	21	−	6C前葉	
48	5.4	4.9	26.5	−	−	N-5°-W	北	−	−	21	−	6C中葉	
50	4.0	4.6	18.4	1.7	2.3	N-15°-E	北	北東隅	−	−	−	6C前葉	SH51より古、支石
51	3.3	4.2	13.9	1.6	2.0	N-0°	北	−	−	5	−	6C前葉	支石
52	4.6	5.12	23.5	(3.1)	(2.9)	N-17°-E	北	南東隅	西·南·北	6	−	6C中葉	
53	4.9	4.1	20.1	−	−	N-23°-E	東	南東隅	−	5	−	5C後葉以降	支石
54	5.7	6.1	34.8	3.5	3.5	N-4°-W	東	南東隅	西·南·北	23	土臼1	6C前葉	支石
55	4.0	3.4	13.6	−	−	N-6°-E	東	南東隅	−	3	土臼1	5C末~6C初	
56	6.0	−	−	(3.4)	(3.1)	N-5°-W	東	南東隅	西·南	10	ガ小3	5C末~6C初	
57	6.3	6.6	41.6	4.5	4.1	N-5°-E	東	南東隅	西·南·北	14	−	5C末~6C初	SH58より古

註=出土玉類の「滑臼」は滑石製臼玉、「ガ小」はガラス製小玉、「土臼」は土製臼玉、「子持」は子持勾玉

第19表　古墳時代竪穴住居一覧表（1）

竪穴番号	規模			主柱穴柱間		南北軸方向	竈	貯蔵穴	周溝	出土玉類		時期	備考
	東西m	南北m	面積m²	東西m	南北m					滑臼	その他		
58	4.6	5.0	23.0	(2.4)	(2.7)	N-4°-E	北	南東隅	4辺	6	土臼1	6C中葉	
59	3.2	3.7	11.8	1.5	2.0	N-14°-E	東	南東隅	西南	2	−	5C末～6C	支石
60	4.7	5.0	23.5	2.0 1.8	2.3	N-10°-E	東	南東隅	西南	−	−	6C中葉	
61	5.4	4.7	25.4	3.3	3.0	N-14°-E	東	南東隅	−	20	滑管1	5C末～6C初	SH62より古
62	4.5	4.4	19.8	2.5	2.3	N-24°-E	西	南東隅	東南	7	土臼1	6C中葉	
64	5.3	4.6	24.4	2.9	3.1	N-6°-W	北	南東隅	西	1	−	6C後半	支石
65	4.3	−	−	−	−	N-42°-E	西	−	−	2	−	6C後半	
66	6.0	5.1	30.6	3.4	3.1	N-3°-W	北	南東隅	西南北	2	土ナ1	6C中葉	
67	5.4	6.2	33.5	(3.1)	(3.1)	N-11°-W	東	−	4辺	−	−	6C後半	
68	−	4.5	−	−	−	N-26°-E	−	南東隅	東南北	−	−	6C前葉	
69	4.9	5.5	27.0	2.8	2.8	N-18°-W	南	南東隅	−	−	−	6C中葉	
70	2.9	3.1	9.0	1.2	1.4	N-40°-W	−	−	−	−	−	6C後半	
72	−	−	−	−	−	N-2°-W	北	−	−	5	滑管1	6C前葉	
73	−	−	−	−	−	N-2°-W	北	−	−	−	−	6C前葉	SH72より古
74	4.8	5.0	24.0	(2.4)	(2.4)	N-44°-W	東	南東隅	−	31	−	5C末～6C初	SH72·73より古
75	−	5.5	−	(2.7)	(3.2)	N-39°-E	−	−	東	1	−	6C中葉	SH76·77より古
76	3.9	−	−	1.7	2.0	N-31°-E	西	−	−	−	−	6C中葉	
77	−	6.5	−	−	−	N-34°-E	北	北東隅	−	9	土ナ1	6C中葉	SH76より古、支石
78	4.0	3.2	12.8	2.1	1.5	N-40°-W	東	南東隅	東南	1	土臼1、土丸2	6C中葉	
79	−	5.3	−	2.9	2.9	N-5°-E	北	南東隅	−	2	土臼1	6C前葉	
80	−	−	−	−	−	N-3°-E	−	−	東南	−	−	6C中葉	
81	3.7	3.7	13.7	1.9 2.0	1.8	N-36°-E	北	南西隅	4辺	−	−	6C中葉	支石
82	5.5	4.6	25.3	3.1	2.6	N-23°-E	北	南西隅	4辺	2	−	6C後半	支石
83	4.4	4.4	19.4	2.1	2.3	N-2°-E	北	北東隅	−	−	土臼1	6C中葉	支石
85	4.5	4.6	20.7	2.1	2.6	N-44°-E	北	北東隅	4辺	1	−	6C前葉	
86	4.7	−	−	−	−	N-8°-E	−	南西隅?	−	−	土臼1	6C前葉	
88	4.8	−	−	2.8	2.2	N-39°-W	北	−	東·西·北	−	−	5C末～6C初	
89	5.0	5.0	25.0	2.5	2.4	N-9°-W	北	南東隅	4辺	4	−	5C末～6C初	支石
90	3.5	3.7	13.0	1.5	1.7	N-0°	東	南東隅	−	8	−	5C末～6C初	支石
91	5.0	5.0	25.0	2.8	2.6	N-16°-E	東	−	4辺	3	−	6C前葉	
92	−	−	−	−	−	N-39°-E	−	−	−	−	−	6C中葉	
94	6.9	6.4	44.2	3.9	3.9	N-23°-W	東	南東隅	−	1	土臼4ガ小1	6C中葉	支石
98	4.2	4.2	17.7	−	−	N-10°-W	東	南東隅	−	−	土丸3	6C中葉	

第20表　古墳時代竪穴住居一覧表（2）

註=出土玉類の「滑臼」は滑石製臼玉、「土臼」は土製臼玉、「滑管」は滑石製管玉、「土ナ」は土製ナツメ玉、「土丸」は土製丸玉、「ガ小」はガラス製小玉

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm)			調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
					口径	底径	器高						
308	1063	石製品	子持勾玉	SH31	長さ8.0、幅5.0 厚さ2.5			背部に4・片面に3・腹部に1の小勾玉、片面に3小玉、一面から穿孔	——	_	淡黒色	完存	滑石製、一部朱彩有り、2片に割れて出土
309	2010	土師器	S字甕	SH14	16.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	粗、〜5㎜の小石含	良	赤褐色	口縁部5/6残	
310	2009	土師器	甕	SH14	22.2	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	粗、〜3㎜の砂粒含	良	橙色	口縁部1/4残	
311	1042	土師器	甕	SH19	(16.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、〜3㎜砂粒多含	並	暗褐色	口縁部1/4残	体部外面スス
312	1041	土師器	S字甕	SH19	14.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+工具ナデ+ナデ	並、1㎜石英含	不良	黄褐色	口縁部1/8残	
313	1008	土師器	S字甕	SH19	(17.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、雲母多含	並	褐色	口縁部1/4残	
314	1007	須恵器	杯蓋	SH19	13.2	−	4.1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	粗、〜2㎜砂含	良	灰色	1/2残	
315	1035	須恵器	杯蓋	SH19	13.0	−	4.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、〜4㎜小石含	不良	暗灰色	1/2残	風化著しい
316	1038	須恵器	杯蓋	SH19	13.2	−	4.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	やや粗、〜6㎜小石含	良	暗灰色	1/3残	
317	1006	須恵器	杯身	SH19	11.2	−	5.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	灰〜淡黒色	ほぼ完存	風化著しい
318	1065	土師器	椀	SH20	6.4	−	4.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・内面工具ナデ+ナデ	並、〜3㎜砂粒含	並	淡黄橙色	1/2残	
319	1528	土師器	小型甕	SH20·21	7.0	3.0	5.0	口縁部ヨコナデ、体部外面指圧+ナデ・内面ナデ	密、〜1㎜砂粒含	良	褐色	体部完存 口縁部一部残	体部外面スス
320	1529	土師器	甕	SH20	11.5	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	良	良	褐色	底部欠	体部外面スス
321	1536	土師器	甕	SH20·21	(11.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	良	良	橙色	口縁部1/6残	体部外面スス
322	1531	土師器	S字甕	SH20	(13.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、〜3㎜砂粒含	良	薄肌色	口縁部1/5残	風化著しい
323	1053	土師器	S字甕	SH20·21	12.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+工具ナデ+ナデ	並、〜3㎜砂粒多含	並	暗肌褐色	口縁部1/4残	体部内面炭化物・外面スス
324	1170	土師器	S字甕	SH20·21	(13.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良	並	黄褐色	口縁部1/5残	
325	1171	土師器	S字甕	SH20·21	(14.4)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、〜4㎜砂粒少含	並	淡褐色	口縁部1/6残	風化
326	1172	土師器	S字甕	SH20·21	(13.6)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、5㎜程小石含	並	淡褐色	口縁部1/10残	
327	1064	土師器	S字甕	SH20	−	8.4	−	外面指圧+ハケ、内面ナデ、脚台端部ヨコナデ	並、〜2㎜砂粒含	並	暗褐灰色	脚台部1/2残	外面スス
328	1535	土師器	S字甕	SH20·21	−	10.2	−	外面ハケ、内面ナデ、脚台端部指圧+ヨコナデ	並、〜1㎜砂粒含	良	黒褐色	脚台部1/3残	外面スス
329	1532	須恵器	杯蓋	SH20·21	(12.0)	−	−	ロクロナデ	並、〜1㎜砂粒少含	良	黒灰〜灰色	1/4残	
330	1059	須恵器	杯蓋	SH20·21	(11.2)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、〜2㎜砂粒含	並	淡灰色	1/5残	
331	1533	須恵器	杯蓋	SH20·21	(12.4)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、〜2㎜砂多少含	並	青灰色	1/10残	
332	1534	須恵器	杯蓋	SH20·21	(13.2)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、〜1㎜砂粒含	良	黒灰〜灰色	1/3残	
333	1168	須恵器	杯身	SH20·21	(11.2)	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、〜1㎜砂粒含	良	暗灰色	1/5残	
334	1169	須恵器	杯身	SH20	10.6	−	5.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並	良	灰色	口縁部1/3残	
335	1173	土師器	S字甕	SH22	(14.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良	良	淡褐色	口縁部1/10残	
336	1537	土師器	甕	SH22	17.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、〜5㎜小石多含	並	淡褐色	口縁部1/6残	接合痕跡
337	1538	土師器	甑	SH22	(22.0)	9.6	18.7	体部下半内面ケズリ?、底端部内面ケズリ、他は風化のため不明	並、〜2㎜砂粒少含	良	乳白色	1/5残	風化著しい
338	1543	土師器	S字甕	SH25	−	9.6	−	体部外面ハケ・内面ナデ、脚台部外面指圧+ケズリ・内面ナデ 端部内外面ヨコナデ	並、〜2㎜砂粒含	並	褐色	脚台部2/3残	外面スス
339	1185	土師器	S字甕	SH25	13.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面風化のため不明	並、〜3㎜砂粒少含	並	淡橙色	口縁部1/3残	風化
340	1541	土師器	椀	SH25〜27	13.6	−	5.9	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂・金雲母含	並	淡橙色	4/5残	接合痕跡
341	1190	土師器	高杯	SH25〜27	−	10.9	−	脚柱部外面ケズリ・内面シボリ痕跡+ナデ、脚端部ヨコナデ	並	並	橙色	脚部2/3残	風化
342	1166	土師器	小型壺	SH25〜27	−	−	−	外面ナデ、内面オサエ+ナデ	並、〜2㎜砂粒含	並	淡橙色	1/2残	接合痕跡
343	1200	土師器	甕	SH25〜27	11.3	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、〜2㎜砂粒含	良	橙色	口縁部1/8残	
344	1545	土師器	甕	SH25〜27	17.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、5㎜小石含	良	褐色	口縁部1/2残	
345	1542	土師器	甕	SH25〜27	9.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面上半ナデ下半ケズリ?	並、〜2㎜砂粒多含	良	褐色	口縁部1/3残	風化

第21表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（1）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
346	1163	土師器	甕	SH25~27	14.8	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～2㎜砂粒含	軟	淡橙色	口縁部1/2残	風化
347	1540	土師器	甕	SH25~27	17.8	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、～1㎜石英含	並	黄褐色	1/3残、ススケ	体部外面黒斑、接合痕跡
348	1194	土師器	甕	SH25~27	13.2	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ?・内面ナデ	並、～5㎜砂粒含	並	褐色	口縁部1/4残	風化
349	1546	土師器	甕	SH25~27	17.4	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂金雲母多含	良	褐色	口縁部1/2残	
350	1175	土師器	甕	SH25~27	(18.1)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ?・内面ナデ?	並、～3㎜砂粒含	並	淡橙色	口縁部1/5残	風化
351	1181	土師器	S字甕	SH25~27	(12.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～3㎜砂粒含	並	暗褐色	口縁部1/5残	
352	1544	土師器	S字甕	SH25~27	(15.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部風化のため不明	並、細砂粒多含	並	黄白色	口縁部1/8残	風化著しい
353	1174	土師器	S字甕	SH25~27	(15.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～5㎜砂粒多含	並	淡橙色	口縁部1/5残	風化
354	1182	須恵器	杯蓋	SH25~27	(14.4)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、砂粒多含	良	灰色	1/10残	
355	1176	須恵器	杯蓋	SH25~27	11.6	−	4.5	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	並	暗灰色	1/4残	
356	1177	須恵器	杯蓋	SH25~27	15.2	−	(5.2)	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、砂粒多含	良	灰色	1/4残	
357	1195	須恵器	杯蓋	SH25~27	15.2	−	4.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、砂粒多含	良	灰白色	1/5残	
358	1164	須恵器	杯蓋	SH25~27	15.5	−	4.9	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～4㎜小石粒含	並	灰色	1/2残	
359	1056	須恵器	杯身	SH25~27	10.2	−	4.6	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	良	薄灰色	ほぼ完存	
360	1179	須恵器	杯身	SH25~27	12.0	−	5.0	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	並、～1㎜砂粒少含	並	暗青灰色	1/2残	
361	1178	須恵器	杯身	SH25~27	12.8	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～5㎜砂粒含	良	淡灰色	1/5残	
362	1167	須恵器	杯身	SH25~27	12.8	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒含	良	灰色	1/3残	
363	1189	須恵器	杯身	SH25~27	15.4	−	5.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒含	良	灰色	1/3残	
364	1186	須恵器	杯身	SH25~27	14.0	−	5.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、底部内面同心円文タタキ痕	並、～4㎜砂粒多含	良	暗灰色	体部1/2欠	
365	1058	須恵器	有蓋高杯蓋	SH25~27	14.9	−	5.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付	並、～4㎜砂粒含	良	淡青灰色	4/5残	
366	1193	須恵器	甕	SH25~27	(12.6)	−	−	ロクロナデ、口縁部外面と頸部外面に波状文	並、～2㎜砂粒含	良	暗灰色	小片	
367	1184	須恵器	甕	SH25~27	−	−	−	ロクロナデ、頸部外面波状文、肩部外面カキメ、体部外面2条沈線+列点文、底部外面ハケ状工具によるナデアゲ	並、～2㎜砂粒含	良	暗灰色	口縁部欠	自然釉
368	1062	須恵器	横瓶	SH25~27	14.8	−	30.2	ロクロナデ、体部タタキ	並、～2㎜砂粒若干含	良	赤褐色	ほぼ完存	体部外面黒斑
369	1397	土師器	複合口縁壺	SH29	17.8	−	−	風化のため調整不明	並、～3㎜砂粒若干含	良	黄褐色	口縁部3/4残	風化著しい
370	1394	土師器	甕	SH29	20.4	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂金雲母含	良	淡橙褐色	口縁部1/2残	
371	1381	須恵器	杯蓋	SH29	12.2	−	−	ロクロナデ	良	良	灰黒色	口縁部1/6残	
372	1157	須恵器	杯身	SH29	9.4	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒多含	良	灰色	2/3残	
373	1451	土師器	甕	SH30	12.4	−	14.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～1㎜砂粒少含	良	淡橙褐色	口縁部1/6残	接合痕跡、外面ススス
374	1380	土師器	S字甕	SH31	(10.8)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂金雲母含	良	黄褐色	口縁部1/12残	内外面ススス
375	1354	土師器	S字甕	SH31	(14.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～3㎜砂粒含	良	淡黄褐色	口縁部1/6残	
376	1353	土師器	S字甕	SH31	−	8.0	−	ナデ、脚台端部ヨコナデ、外面上半ケズリ	良	良	暗黄褐色	脚台部完存	
377	1051	須恵器	杯蓋	SH31	(13.2)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒多含	並	暗青灰色	1/9残	
378	1347	土師器	S字甕	SH32	−	10.4	−	体部外面ハケ+ケズリ・内面ハケ+ナデ 脚台部外面上半ケズリ下半指圧+ナデ・内面ナデ	良、～3㎜砂粒含	良	明黄褐色	脚台部完存	
379	1428	土師器	甕	SH35	14.5	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～5㎜砂粒含	良	淡褐色	口縁部1/2残	
380	1426	土師器	甕	SH35	14.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部風化のため不明	良、細砂粒多含	良	黄褐色	口縁部完存	風化
381	1422	須恵器	杯蓋	SH35	12.0	−	(4.8)	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良	良	黒灰色	口縁部1/3残	
382	1424	須恵器	杯蓋	SH35	11.6	−	4.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、雲母含	良	灰色	1/4残	
383	1425	須恵器	有蓋高杯蓋	SH35	−	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、ツマミ貼付	良	良	暗青灰色	天井部完存	

第22表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（2）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
384	841	土師器	壺	SH36	(12.6)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良、細砂粒多含	良	橙色	1/8 残	体部外面スス
385	818	土師器	手捏土器	SH37･38	(5.0)	−	2.2	手捏ね	並、微砂粒少含	良	橙色	1/8 残	
386	733	土師器	手捏土器	SH37･38	5.6	−	3.2	手捏ね	良、金雲母含	並	淡赤褐色	ほぼ完存	
387	820	土師器	椀	SH37･38	13.2	−	4.7	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面指圧+ナデ・内面ナデ	並、砂粒含	良	橙色	口縁部1/4残	接合痕跡
388	816	土師器	甕	SH37･38	19.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ	良、細砂粒含	良	橙色	口縁部1/3残	風化
389	817	土師器	S字甕	SH37･38	(12.7)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面ナデ	良、細砂粒含	良	淡黄色	口縁部1/6残	
390	821	土師器	S字甕	SH37･38	−	9.2	−	風化のため調整不明	並、砂粒多含	良	浅黄色	3/7 残	風化著しい
391	819	土師器	甑	SH37･38	(20.1)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	良、細砂粒含	良	暗橙色	小片	
392	823	須恵器	杯身	SH37･38	14.0	−	4.4	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、底部内面同心円文タタキ痕	並、～3㎜砂粒含	良	灰色	口縁部1/3残	
393	822	須恵器	杯身	SH37･38	13.1	−	−	ロクロナデ、底部外面1/2ロクロケズリ、底部内面同心円文タタキ痕	並、微砂粒含	良	灰色	完存	焼脹れ
394	825	須恵器	高杯	SH37･38	−	6.8	−	ロクロナデ、脚部外面カキメと円形3方透孔	並、微砂粒含	良	黒灰色	口縁部欠	透孔は大1と小2 焼脹れ 自然釉
395	846	須恵器	把手付片口鉢	SH37･38	39.0	−	−	口縁部ナデ、体部外面タタキ・内面ナデ	並	不良	灰～黄白色	1/2残、底部欠	
396	808	土師器	甕	SH39	(23.4)	−	−	口縁部外面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ヨコハケ+ナデ	並、細砂粒多含	良	暗橙色	口縁部1/2残	風化
397	815	土師器	高杯	SH39	−	8.2	−	ナデ、外面面取りケズリ内面シボリ痕、脚端部ヨコナデ	並、微砂粒少含	良	橙色	脚部3/4残	
398	844	須恵器	杯身	SH41	10.2	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒多含	良	灰色	1/2 残	
399	814	土師器	高杯	SH45	−	7.0	−	風化のため調整不明	並、微砂粒多含	良	橙色	口縁部欠	風化著しい
400	807	土師器	甕	SH45	(20.0)	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒多含	良	橙色	1/5 残	
401	810	土師器	甕	SH45	13.4	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、砂粒少含	良	橙色	口縁部1/4残	
402	809	土師器	甕	SH45	14.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部風化及び剝離のため調整不明	並、細砂粒多含	良	明赤色	口縁部1/4残	風化・剝離著しい
403	669	土師器	甑	SH45	−	10.4	−	風化のため調整不明	並、～2㎜砂粒含	良	肌色・	底部2/3残	風化、半月形の蒸気孔
404	717	須恵器	杯蓋	SH45	13.5	−	4.8	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒含	並	暗灰色	4/5 残	
405	720	須恵器	杯蓋	SH45	14.8	−	5.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒含	良	暗灰色	4/5 残	
406	667	須恵器	甕	SH45	23.2	−	−	ロクロナデ、体部外面タタキ・内面充て具痕ナデ消し	良、細砂粒含	良	黒灰色	口縁部1/2残	
407	668	須恵器	壺	SH45	18.2	−	26.2	ロクロナデ、体部外面タタキ・内面充て具痕ナデ消し	良	良	灰色	1/2 残	
408	847	石製	紡錘車	SH45	頂径2.2、底径4.25 高さ1.2、重量27.5g			線刻	−	−	暗灰色	ほぼ完存	滑石製
409	849	土師器	高杯	SH47	−	7.2	−	ナデ、脚端部ヨコナデ	良、～1㎜砂粒含	良	橙色	ほぼ完存	風化
410	826	土師器	甕	SH47	14.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面風化及び剝離のため調整不明・内面ナデ	並、～5㎜砂粒含	軟	橙色	口縁部1/3残	風化・剝離
411	833	土師器	甕	SH47	14.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～4㎜砂粒含	良	暗橙色	口縁部1/2残	
412	828	土師器	甕	SH47	16.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～1㎜砂粒含	良	灰黄褐色	口縁部1/6残	
413	827	土師器	甕	SH47	15.2	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ?+ナデ	並、～4㎜砂粒含	良	暗橙色	口縁部1/4残	体部外面黒斑
414	830	土師器	甕	SH47	(17.8)	−	−	体部外面風化のため調整不明、体部内面工具ナデ?+ナデ	並、～2㎜砂粒含	良	淡黄橙色	口縁部1/8残	風化
415	728	土師器	甕	SH47	15.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～3㎜砂粒多含	良	淡赤褐色	口縁部1/4残	
416	831	土師器	甕	SH47	18.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ?	並、～3㎜砂粒含	良	淡黄橙色	口縁部1/6残	風化
417	832	土師器	S字甕	SH47	14.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～4㎜砂粒含	良	淡黄橙	口縁部1/2残	
418	829	土師器	S字甕	SH47	−	8.0	−	風化のため調整不明	並、～2㎜砂粒含	良	橙色	脚台部1/2残	風化
419	666	須恵器	壺	SH47	13.4	−	−	ロクロナデ、体部上半一部ロクロケズリ?、頸部外面カキメ+ロクロナデ、体部外面カキメ	並、微砂粒多含	良	灰色	2/3 残	
420	836	須恵器	杯蓋	SH47	14.4	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	良	灰色	口縁部1/6残	
421	835	須恵器	杯身	SH47	14.4	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	良	灰色	口縁部1/6残	

第23表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（3）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
422	824	須恵器	杯身	SH47	13.0	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒含	良	灰色	1/6残	
423	837	須恵器	杯身	SH47	12.0	－	4.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒含	良	灰色	1/10残	
424	1208	土師器	S字甕	SH48	14.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微砂粒含	並	黄褐色	口縁部1/4残	風化
425	1209	土師器	S字甕	SH48	－	10.0	－	ナデ、外面指圧残る	並、微砂粒含	並	赤褐色	脚台部2/3残	風化
426	1204	須恵器	特殊扁壺?	SH48	－	－	－	外面ロクロナデ、3条の同心円状沈線帯と2段の波状文が2単位、内面指圧+ロクロナデ	並、微砂粒少含	良	淡黒～暗灰色	体部小片	
427	1201	須恵器	杯蓋	SH48	14.0	－	3.5	ロクロナデ、天井部外面ヘラケズリ	並、～2㎜砂粒少含	良	灰色	1/3残	
428	1203	須恵器	杯身	SH48	13.8	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	良、細砂粒含	不良	暗灰色	小片	
429	1383	土師器	高杯	SH50	12.6	－	－	ナデ、口縁部ヨコナデ、外面指圧	並、微砂粒金雲母含	並	茶褐色	口縁部1/3残	
430	1382	土師器	複合口縁壺	SH50	13.0	－	－	口縁部ヨコナデ	良、金雲母含	良	淡黄褐色	口縁部1/2残	風化
431	1386	土師器	鉢	SH50	14.7	－	9.0	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部外面一方向ケズリ	並、細砂粒多含	並	暗褐色	口縁部1/3残	接合痕跡、内面炭化物
432	1387	土師器	甕	SH50	12.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	暗褐色	1/2残、底部欠	
433	1385	土師器	甕	SH50	13.4	－	－	口縁部外面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ?・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	黄褐色	口縁部1/4残	接合痕跡
434	1384	土師器	甕	SH50	15.2	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ?・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	褐色	口縁部1/4残	接合痕跡
435	1138	須恵器	杯蓋	SH50	12.8	－	4.3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、砂粒多含	良	青灰色	1/3残	
436	1139	須恵器	杯身	SH50	11.2	－	5.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	良	青灰色	ほぼ完存	
437	1338	土師器	椀	SH51	12.8	－	－	口縁部ヨコナデ、体部ナデ+外面指圧	並、細砂金雲母含	並	暗褐色	1/4残、底部欠	体部外面×状ヘラ描
438	1339	土師器	小型甕	SH51	7.4	6.0	7.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+ナデ、底部ナデ	並、～3㎜砂金雲母含	並	暗褐色	1/2残	
439	1342	土師器	甕	SH51	15.2	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ	並、微細砂粒含	並	暗茶色	1/3残	
440	2008	土師器	甕	SH51	18.2	－	－	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	粗、6㎜の小石含	良	橙色	口縁部一部欠	
441	1097	土師器	甕	SH51	18.0	－	31.8	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	並、石英金雲母含	並	淡黄褐色	体部一部欠	
442	1340	土師器	甕	SH51	22.0	－	－	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、石英金雲母含	並	黄褐色	口縁部1/8残	接合痕跡
443	1341	土師器	甑	SH51	(26.0)	－	－	口縁端部ヨコナデ、体部外面ケズリ・内面ハケ	並、細砂金雲母含	並	褐色	1/3残	
444	1343	土師器	甑	SH51	23.0	－	－	口縁端部ヨコナデ、体部ハケ	並、細砂金雲母含	並	黄褐色	1/2残	
445	1136	須恵器	杯蓋	SH51	14.0	－	4.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、細砂粒少含	良	暗灰色	1/3残	
446	1134	須恵器	杯身	SH51	11.5	－	5.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒多含	並	灰色	口縁一部欠	
447	1344	須恵器	器台	SH51	－	19.4	－	ロクロナデ、外面沈線・波状文・三角形透孔	精良	不良	乳灰色	1/6残	風化
448	1871	土師器	壺	SH52	11.2	－	12.2	口縁部ヨコナデ、他は風化のため調整不明	並、細砂粒多含	良	浅黄橙色	3/4残	風化著しい
449	2011	土師器	甕	SH52	15.4	－	17.6	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	良、～3㎜砂粒含	良	橙色	1/2残	
450	1140	須恵器	杯蓋	SH52	13.2	－	－	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒多含	不良	淡灰色	4/5残	
451	1869	須恵器	杯蓋	SH52	14.0	－	4.7	ロクロナデ、天井部外面ヘラ切り後ナデ、内面同心円文タタキ痕	並、細砂粒多含	良	灰色	2/3残	
452	2012	須恵器	杯身	SH52	11.2	－	4.7	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ	並、～3㎜砂粒含	良	灰色	ほぼ完存	
453	1141	須恵器	杯身	SH52	11.8	－	5.4	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～4㎜砂粒多含	不良	淡灰色	ほぼ完存	
454	1390	土師器	椀（高杯）	SH53	(13.8)	－	－	口縁部ヨコナデ	並、細砂粒金雲母含	並	褐色	口縁部1/8残	
455	1389	土師器	鉢	SH53	10.5	5.8	6.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ、内面工具ナデ	並、細砂粒金雲母含	並	暗褐色	1/2残	接合痕跡
456	1388	土師器	小型甕	SH53	8.3	－	7.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ+ナデ・内面ナデ	並、細砂粒多含	並	暗褐色	ほぼ完存	外面黒斑
457	1392	土師器	甕	SH53	－	－	－	体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒金雲母含	並	暗褐色	口縁部欠	内面炭化物
458	1391	土師器	壺	SH53	18.0	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面肩部ハケ+下半ケズリ・内面ケズリ+ナデ	並、細砂粒金雲母含	並	黄茶色	口縁部1/4残	
459	1096	土師器	甕	SH54	12.8	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂雲母若干含	良	黄褐色	口縁部1/2残	
460	1289	土師器	甕	SH54	(14.0)	－	－	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部ハケ	良、細砂雲母若干含	良	暗黄褐色	口縁部1/7残	

第24表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（4）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
461	1288	土師器	甕	SH54	(12.4)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、微砂雲母若干含	良	淡褐色	口縁部1/6残	風化
462	1292	土師器	甕	SH54	15.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～2㎜砂雲母含	良	黄褐色	口縁部1/6残	
463	1297	土師器	甕	SH54	16.6	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～3㎜砂粒多含	良	橙褐色	口縁部1/4残	
464	1299	土師器	S字甕	SH54	12.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密	良	黄褐色	口縁完存	
465	1294	須恵器	杯蓋	SH54	13.2	−	4.8	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、天井部内面同心円文タタキ痕	密、～2㎜砂粒若干含	良	淡灰色	口縁部1/4残	
466	1296	須恵器	杯蓋	SH54	13.8	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～1㎜砂粒若干含	良	淡灰色	1/4残	
467	1287	須恵器	杯身	SH54	10.0	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～1㎜砂粒若干含	良	灰色	口縁部1/6残	
468	1293	須恵器	杯身	SH54	10.9	−	5.0	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～1㎜砂粒若干含	良	暗青灰色	1/2残	
469	1483	土師器	椀	SH55	11.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ+ナデ・内面ナデ	並、微砂粒金雲母含	並	褐色	1/3残	
470	1485	土師器	椀	SH55	11.4	−	4.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微砂粒金雲母含	並	暗茶色	ほぼ完存	底部外面磨滅
471	1484	土師器	椀	SH55	12.2	−	4.6	口縁部ヨコナデ、体部ナデ、底部外面ケズリ・内面ナデ	並、微砂粒金雲母含	並	褐色	1/2残	外面黒斑
472	1486	土師器	鉢	SH55	14.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微細砂粒含	並	淡褐色	1/4残	
473	1489	土師器	甕	SH55	12.2	−	10.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂粒含	並	黄褐色	口縁部1/8残、体部ほぼ完存	
474	1488	土師器	甕	SH55	22.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	淡黄褐色	口縁部完存	接合痕跡
475	1490	土師器	甕	SH55	16.2	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	暗褐色	2/3残	接合痕跡
476	1487	土師器	甕	SH55	−	−	7.4	ナデ、端部ヨコナデ	並、微細砂白雲母含	並	褐色	脚部完存	底部内面赤色顔料
477	1480	須恵器	杯蓋	SH55	(11.2)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良	良	白灰色	口縁部1/8残	外面自然釉
478	1481	須恵器	有蓋高杯蓋	SH55	12.1	−	5.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付	精良	不良	暗灰色	1/4残	外面自然釉、重焼痕跡
479	1482	須恵器	壺	SH55	13.8	−	−	ロクロナデ、口縁部外面カキメ、体部外面タタキ・内面同心円タタキナデ消し	良、微細砂若干含	並	暗青灰色	口縁部3/4残	
480	1402	土師器	手捏土器	SH56	2.7	−	3.0	手捏ね	並、細砂含	並	褐色	完形	
481	1401	土師器	椀	SH56	11.3	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面オサエ+ナデ・内面ナデ	精良	並	明褐色	1/4残、底部欠	
482	1407	土師器	無頸壺	SH56	9.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂多含	並	褐色	口縁部1/4残	
483	1404	土師器	甕	SH56	12.2	−	−	口縁部内外面ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	暗赤褐色	口縁部1/4残	接合痕跡、外面スス
484	1403	土師器	甕	SH56	12.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～2㎜砂粒多含	並	暗褐色	口縁部1/2残	
485	1405	土師器	S字甕	SH56	(13.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂白雲母含	並	淡黄褐色	口縁部1/5残	
486	1406	土師器	甑	SH56	(19.8)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並、細砂白雲母含	並	褐色	1/10残、底部欠	外面黒斑
487	1398	須恵器	短頸壺	SH56	10.2	−	8.3	ロクロナデ、口縁部ヨコナデ、底部外面未調整	並、細砂少含	並	灰色	1/2残	全体に自然釉
488	1399	須恵器	杯蓋	SH56	11.9	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、細砂少含	並	黒灰色	3/4残	
489	1400	須恵器	杯身	SH56	10.6	−	5.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂少含	並	暗灰色	口縁部一部欠	
490	1408	須恵器	把手付鉢	SH56	−	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ・内面ナデ消し	良、微砂少含	不良	灰色	小片	
491	1281	須恵器	杯蓋	SH57	12.4	−	4.8	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、1㎜程砂粒若干含	良	暗灰色	口縁部1/5残	
492	1273	須恵器	高杯	SH57	−	8.7	−	ロクロナデ、外面カキメ、方形透孔	良	良	灰色	脚部1/6残	透孔個数・大きさ不明
493	1279	土師器	無頸壺	SH58	15.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面ナデ	良	良	乳黄褐色	口縁部1/6残	
494	1275	土師器	甕	SH58	10.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部オサエ+ナデ	良、雲母若干含	並	明黄褐色	口縁部1/10残	風化著しい
495	1276	土師器	S字甕	SH58	15.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良	良	淡黄褐色	口縁部1/6残	
496	1274	土師器	S字甕	SH58	−	8.5	−	ナデ、体部外面ケズリ	良	並	淡橙褐色	脚台部1/3残	
497	1267	須恵器	杯蓋	SH58	13.1	−	4.2	ロクロナデ、天井部外面タタキ+ケズリ	良	並	淡橙褐色	口縁部1/2残	自然釉付着
498	1270	須恵器	杯蓋	SH58	13.4	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良	良	灰色	口縁部1/10残	自然釉付着、焼脹れ
499	1272	須恵器	杯蓋	SH58	14.5	−	−	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	良	良	灰色	口縁部1/5残	

第25表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（5）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
500	1268	須恵器	杯身	SH58	10.9	−	−	ロクロナデ	良、～2㎜砂粒含	良	灰黒色	口縁部1/3残	
501	1269	須恵器	杯身	SH58	11.8	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	良	良	灰黒色	口縁部1/12残	
502	1278	須恵器	杯身	SH58	13.2	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	良	不良	乳灰色	口縁部1/5残	風化著しい
503	1271	須恵器	杯身	SH58	12.8	−	−	ロクロナデ	良	良	青灰色	口縁部1/3残	
504	1283	土師器	甑	SH59	19.0	−	23.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～1㎜砂粒若干含	良	暗黄褐色	1/2残	外面黒斑
505	1291	須恵器	杯蓋	SH59	12.4	−	4.1	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒若干含	良	淡黒灰色	口縁部1/3残	
506	1284	須恵器	杯身	SH59	10.2	−	−	ロクロナデ、底部ロクロケズリ	良	良	淡青灰色	口縁部1/11残	
507	1290	須恵器	甕	SH59	20.0	−	−	ロクロナデ、体部外面タタキ	並、～5㎜砂粒含	良	淡灰色	口縁部完存	
508	1076	土師器	甕	SH60	11.8	−	12.3	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、～1㎜砂粒少含	良	橙色	2/3残	内外面炭化物
509	1211	土師器	S字甕	SH60	15.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～1㎜砂粒多含	並	肌色	口縁部1/2残	
510	1074	土師器	S字甕	SH60	13.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ+下部ケズリ・内面ナデ	並	並	淡肌色	口縁部3/4残	外面スス
511	1148	土師器	椀	SH61	11.2	−	4.6	口縁部ヨコナデ、体部外面指圧+ナデ・内面ナデ	良	良	淡橙色	1/3残	
512	1094	土師器	鉢	SH61	9.7	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ナデ・内面工具ナデ+ナデ	良、微砂粒若干含	良	淡黄褐色	口縁部1/4残	
513	1155	土師器	甕	SH61	10.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ+ミガキ・内面ナデ	やや良	良	橙色	1/3残、底部欠	
514	1153	土師器	小型壺	SH61	−	5.2	−	ナデ、体部外面下半ケズリ+ナデ	並、～3㎜砂粒多含	良	褐色	底部完存	接合痕跡、外面黒斑
515	1154	土師器	小型壺	SH61	8.4	3.3	8.0	ナデ、口縁部ヨコナデ	やや粗	良	肌色	体部4/5残	接合痕跡、外面黒斑
516	1150	土師器	高杯	SH61	14.2	9.0	11.0	杯部 口縁部ヨコナデ、体部外面指圧+ナデ 脚部 脚柱部外面面取りケズリ・内面シボリ痕、端部ヨコナデ	精良	良	褐色	1/2残	
517	1092	土師器	甕	SH61	13.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・内面工具ナデ+ナデ	良、微砂粒金雲母含	良	淡褐色	口縁部1/2残	黒斑
518	1149	土師器	S字甕	SH61	12.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	良	良	黒茶色	1/5残、底部欠	
519	1073	土師器	S字甕	SH61	12.2	7.0	16.1	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ、脚台部ケズリ+ナデ	並	並	褐色	1/2残	外面スス
520	1093	土師器	甑	SH61	18.3	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～1㎜砂雲母少含	良	黄褐色	口縁部1/3残	接合痕跡、外面黒斑
521	1199	土師器	甑	SH61	16.6	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、～2㎜砂粒少含	良	肌色	口縁部1/6残	写真では把手も復元
522	1212	須恵器	杯蓋	SH61	12.0	−	4.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密	良	灰色	1/5残	
523	1077	須恵器	杯蓋	SH61	13.8	−	3.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒含	並	灰色	1/2残	外面自然釉
524	1152	須恵器	杯身	SH61	10.0	−	5.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒多含	並	灰色	ほぼ完存	
525	1151	須恵器	杯身	SH61	10.0	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	良、～1㎜砂粒含	良	淡青灰色	1/3残	重ね焼痕
526	1215	土師器	甕	SH62	13.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂粒含	良	肌色	口縁部1/5残	風化
527	1216	土師器	S字甕	SH62	(13.0)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂粒少含	良	肌色	口縁部1/10残	
528	1213	須恵器	杯身	SH62	11.8	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒含	良	黒灰色	1/6残	
529	1221	土師器	甕	SH64	16.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部調整風化著しく不明	並、細砂粒含	良	濃褐色	口縁部1/4残	風化著しい
530	1222	土師器	甕	SH64	19.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ?・内面ナデ	並、細砂粒含	良	肌色	口縁部1/3残	接合痕跡、風化
531	1223	土師器	甑	SH64	(24.6)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部調整風化著しく不明	良	良	淡肌色	口縁部小片	風化
532	1198	須恵器	杯蓋	SH64	14.4	−	4.5	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、1㎜程砂粒含	良	淡青灰色	口縁部4/5残	
533	1070	須恵器	杯身	SH64	12.0	−	−	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後粗い調整	並、2㎜程砂粒少含	良	青灰色	1/3残	
534	1197	須恵器	甕	SH64	11.6	−	12.0	ロクロナデ、底部外面ケズリ、口縁部波状文、頸部波状文+沈線 体部沈線+沈線間に列点文+カキメ	並、2㎜程砂粒多含	良	淡灰色	ほぼ完存	片面自然釉
535	1145	土師器	杯	SH65	17.7	−	5.6	ナデ、体部外面下半ヘラケズリ・内面ナデ	粗、～2㎜砂粒含	良	淡赤褐色	1/5残、底部欠	
536	1512	須恵器	杯蓋	SH65	14.8	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒少含	良	灰色	口縁部1/3残	
537	1511	須恵器	杯蓋	SH65	13.6	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒少含	良	暗灰色	口縁部1/3残	
538	1142	須恵器	杯蓋	SH65	13.4	−	4.3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒少含	良	淡灰色	3/4残	

第26表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（6）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
539	1510	須恵器	杯身	SH65	11.2	−	4.7	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後粗い調整	並、～1㎜砂粒少含	良	濃灰色	2/3残	
540	1143	須恵器	杯身	SH65	12.6	−	4.7	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒少含	並	灰色	3/4残	
541	1513	須恵器	杯身	SH65	12.2	−	(4.6)	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒少含	良	灰色	1/4残	
542	1146	須恵器	杯身	SH65	12.6	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～5㎜砂粒含	良	灰色	1/3残	重焼痕、外面自然釉
543	1071	須恵器	有蓋高杯蓋	SH65	14.9	−	4.9	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付	並、～1㎜砂粒少含	良	青灰色	1/3残	
544	1144	須恵器	甕	SH65	22.8	−	−	ロクロナデ、頸部外面カキメ、体部タタキ	良、微砂粒若干含	良	灰白色	口縁部1/6残	自然釉
545	1515	須恵器	壺	SH65	18.0	−	−	ロクロナデ、頸部外面カキメ	精緻	良	茶灰色	口縁部小片	
546	1321	土師器	高杯	SH66	26.0	−	−	風化のため調整不明	やや粗、1㎜程砂多含	良	肌色	2/3残	風化著しい
547	1326	土師器	甕	SH66	12.8	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～2㎜砂粒少含	良	赤肌色	下半部欠	風化
548	1095	土師器	甕	SH66	16.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～6㎜砂雲母少含	良	褐色	口縁部1/5残	接合痕跡
549	1072	須恵器	杯蓋	SH66	14.4	−	5.0	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒少含	良	暗青灰色	2/3残	
550	1319	須恵器	杯蓋	SH66	15.6	−	4.9	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒少含	良	薄灰色	1/5残	
551	1320	須恵器	杯身	SH66	13.0	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面一方向ナデ	並、微砂粒少含	良	薄灰色	1/3残	
552	1519	土師器	甕	SH67	26.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面オサエ+ナデ	やや粗、～2㎜砂多含	良	肌色	口縁部1/6残	風化
553	1520	土師器	甕	SH67	(17.4)	−	−	口縁部ヨコナデ	並、～1㎜砂粒少含	良	肌色	口縁部1/10残	風化著しい
554	310	須恵器	杯蓋	SH68	10.8	−	4.5	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、微砂粒含	良	暗灰色	1/2残	
555	312	須恵器	杯蓋	SH68	11.0	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂石英含	良	淡青灰色	4/5残	
556	311	須恵器	杯蓋	SH68	12.8	−	4.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒多含	良	暗灰色	1/4残	重焼痕
557	545	須恵器	杯蓋	SH68	13.0	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、微砂粒含	良	灰色	1/8残	
558	324	須恵器	杯蓋	SH68	14.2	−	5.3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒少含	良	黒灰色	1/3残	
559	547	須恵器	杯身	SH68	12.0	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、微砂粒含	不良	灰色	1/10残	焼脹れ、重焼痕、自然釉
560	327	須恵器	杯身	SH68	11.8	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～1㎜砂粒含	並	暗灰色	1/5残	自然釉
561	544	須恵器	杯身	SH68	13.0	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、微砂粒含	良	灰色	1/4残	
562	321	須恵器	有蓋高杯	SH68	11.5	8.1	7.7	ロクロナデ、杯部底部ロクロケズリ、脚部外面カキメ、円形3方透孔	並、～1㎜砂粒含	良	灰青色	1/2残、底部欠	
563	549	土師器	椀	SH69	13.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面ナデ	良、細砂少含	良	橙色	口縁一部欠	
564	700	土師器	鉢	SH69	11.2	−	6.1	ナデ、口縁部ヨコナデ	良、微砂粒少含	良	橙色	口縁部1/3残	
565	554	土師器	甕	SH69	12.1	−	−	口縁部外面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、細砂少含	良	橙色	口縁部3/5残	接合痕跡
566	712	土師器	S字甕	SH69	17.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良	良	浅黄橙色	口縁部1/8残	
567	551	土師器	S字甕	SH69	−	7.2	−	外面ケズリ+ナデ、内面ナデ	並、細砂粒多含	良	淡赤橙色	脚部完存	
568	556	土師器	ミニュチュア椀	SH69	−	−	−	ナデ、外面ハケ	並、～1㎜砂粒多含	良	橙色	2/5残	接合痕跡
569	713	須恵器	杯蓋	SH69	15.5	−	−	ロクロナデ	良	良	灰色	1/4残	
570	552	土師器	高杯	SH70	−	−	11.2	脚端部ヨコナデ、脚柱部外面面取りケズリ・内面指圧+ナデ	並、～1㎜砂粒少含	良	橙色	脚部1/2残	
571	548	土師器	S字甕	SH70	13.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ	並、細砂粒多含	良	暗橙色	口縁部1/4残	
572	165	土師器	甑	SH72	26.4	8.0	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ、端部ナデ	並、微細砂雲母含	並	暗橙色	口縁部1/9残	
573	166	須恵器	杯蓋	SH73	14.2	−	4.3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良	不良	灰色	1/2残	風化
574	205	土師器	手捏土器	SH74	4.3	−	2.3	指圧+ナデ	並、細砂雲母含	並	淡黄橙色	ほぼ完存	
575	207	土師器	椀	SH74	9.4	−	−	風化のため調整不明	良、細砂多少含	並	橙色	1/8残、底部欠	風化著しい
576	196	土師器	椀	SH74	11.3	−	5.4	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、細砂雲母多含	並	明褐色	ほぼ完存	
577	203	土師器	壺	SH74	8.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微砂雲母含	並	暗黄褐色	口縁部1/4残	風化

第27表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（7）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
578	195	土師器	小型壺	SH74	−	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微砂雲母含	並	淡肌色	口縁部欠	体部外面黒斑
579	197	土師器	甕	SH74	10.6	−	−	風化のため調整不明	並、微砂雲母含	並	赤褐色	口縁部1/4残	風化著しい
580	201	土師器	甕	SH74	12.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+ケズリ	良、金雲母含	並	赤褐色	口縁部2/3残	
581	202	土師器	甕	SH74	14.0	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微砂粒含	並	橙色	口縁部1/8残	
582	199	土師器	甕	SH74	18.8	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒金雲母含	並	橙色	口縁部1/4残	
583	200	土師器	甕	SH74	14.0	−	16.2	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微砂粒金雲母多含	並	褐色	1/2残	接合痕跡
584	198	土師器	甕	SH74	13.2	−	14.5	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微砂粒金雲母多含	並	明褐色	1/2残	接合痕跡
585	204	土師器	甕	SH74	−	−	5.6	指圧+ナデ	並、微砂粒雲母含	並	淡黄橙色	脚台部4/5残	風化
586	206	土師器	甑	SH74	28.4	−	10.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ・内面ナデ	やや良、金雲母含	良	淡黄橙色	口縁部1/3残	蒸気孔は円形で複数
587	189	須恵器	杯蓋	SH74	11.8	−	5.1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良	並	黒灰色	ほぼ完存	
588	188	須恵器	杯蓋	SH74	12.2	−	3.9	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良	並	灰色	完存	
589	192	須恵器	杯身	SH74	9.2	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒多含	並	暗灰色	1/4残	
590	191	須恵器	杯身	SH74	9.2	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～3㎜砂粒少含	並	灰色	完存	
591	190	須恵器	有蓋高杯蓋	SH74	11.4	−	5.3	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付	並、細砂粒含	並	灰色	完存	
592	194	須恵器	高杯	SH74	−	8.8	−	ロクロナデ、脚部外面カキメ、方形透孔	並、細砂粒含	並	黒色	脚部1/4残	透孔は4方か？
593	193	須恵器	有蓋高杯	SH74	9.4	8.0	9.2	ロクロナデ、杯部底部ロクロケズリ、脚部外面カキメ、方形3方透孔	並、微細砂粒含	並	灰色	完存	歪み
594	144	土師器	椀	SH75	12.2	−	6.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ+ナデ・内面ナデ	精良、微細砂若干含	並	暗橙色	4/5残	
595	143	土師器	椀	SH75	9.4	−	6.8	ナデ、口縁部ヨコナデ	並、微細砂雲母含	並	赤褐色	ほぼ完存	接合痕跡、風化
596	146	土師器	S字甕	SH75	−	8.2	−	指圧+ナデ	並、微砂雲母多含	並	赤褐色	脚台部1/2残	
597	145	土師器	S字甕	SH75	−	9.2	−	指圧+ナデ	並、微砂雲母多含	並	橙色	脚台部完存	外面スス
598	142	須恵器	杯身	SH75	12.6	−	5.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	並	灰色	口縁部一部欠	重焼痕
599	147	石製品	砥石	SH75	現存長3.2cm、幅1.4～2.1cm、厚0.7～1.1cm			――	――	−	白灰色	破片	使用痕跡有
600	327	土師器	甕	SH76	12.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	暗橙色	口縁部1/4残	
601	325	土師器	甕	SH76	14.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並、細砂多含	並	暗橙色	口縁部1/8残	接合痕跡
602	332	土師器	甕	SH76	20.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微細砂金雲母含	並	橙色	口縁部1/2残	内外面炭化物
603	326	土師器	S字甕	SH76	14.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂金雲母含	並	暗黄橙色	口縁部1/4残	
604	324	須恵器	杯身	SH76	12.0	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、微細砂含	並	暗青灰色	小片	
605	330	土師器	甕	SH77	12.5	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂金雲母多含	並	暗褐色	口縁部1/4残	
606	328	土師器	壺	SH77	11.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒金雲母含	並	肌色	口縁部2/3残	風化
607	329	土師器	S字甕	SH77	−	9.6	−	体部外面ハケ・内面ナデ、脚部外面指圧+ナデ+上半ハケ・内面ナデ	並、微細砂金雲母含	並	橙色	脚台部完存	
608	331	土師器	壺	SH77	9.6	−	10.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、2㎜程石英多含	並	淡黄橙色	1/2残	接合痕跡、風化
609	137	土師器	S字甕	SH78	12.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微細砂雲母多含	並	橙色	口縁部1/2残	
610	135	須恵器	杯蓋	SH78	14.2	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精、砂僅かに含	並	暗青灰色	4/5残	
611	136	須恵器	杯蓋	SH78	17.0	−	(4.5)	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良	並	暗灰色	1/4残	
612	138	土師器	甕	SH78	19.0	−	32.6	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ	並、細砂金雲母多少含	並	浅黄橙色	1/2残	
613	130	土師器	壺	SH79	11.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並、微細砂雲母含	並	赤褐色	1/3残、底部欠	黒斑
614	132	土師器	甕	SH79	14.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	並、微細砂雲母含	並	橙色	口縁部1/6残	
615	131	土師器	甕	SH79	11.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・内面工具ナデ	並、～2㎜砂雲母含	並	暗肌色	口縁部1/4残	内外面炭化物
616	133	土師器	S字甕	SH79	13.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	明橙色	口縁部1/5残	外面スス

第28表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（8）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
617	127	須恵器	杯蓋	SH79	13.6	－	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、細砂粒多含	並	暗緑色	4/5残	外面自然釉
618	128	須恵器	杯身	SH79	11.6	－	4.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面一方向ナデ	並、細砂粒含	並	灰青色	1/2残	
619	129	須恵器	杯身	SH79	12.4	－	4.4	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～5㎜砂小石含	並	青灰色	1/3残	
620	67	須恵器	杯身	SH80	11.8	－	4.8	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り未調整	並、微砂含	並	暗青灰色	1/2残	
621	68	須恵器	杯身	SH80	12.9	－	5.6	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、底部内面同心円文タタキ痕	並、微砂金雲母含	並	灰オリーブ色	4/5残	外面自然釉
622	169	土師器	S字甕	SH81	14.9	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂雲母含	並	鈍い黄褐色	口縁部1/8残	外面スス
623	123	土師器	甕	SH81	11.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ケズリ?・内面ナデ	精良、砂多少含	並	褐色	1/3残、底部欠	風化
624	168	須恵器	杯身	SH81	9.0	－	2.9	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り未調整	良、細砂含	並	暗灰	小片	
625	29	土師器	高杯	SH82	－	8.6	－	杯部指圧+ナデ　脚柱部外面面取りケズリ+ナデ・内面シボリ痕+ナデ 脚端部ヨコナデ	良、金雲母含	並	褐色	脚部完存	接合痕跡
626	30	土師器	壺	SH82	10.8	－	－	オサエ+ナデ、口縁部ヨコナデ	並、微細砂金雲母含	並	褐色	下半部欠	
627	64	土師器	甕	SH82	17.2	－	－	風化のため調整不明	並、～2㎜砂雲母含	並	明黄褐色	口縁部1/3残	風化著しい
628	33	土師器	甕	SH82	19.4	－	38.5	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂金雲母含	並	鈍い赤褐色	ほぼ完存	
629	31	土師器	S字甕	SH82	14.8	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、～2㎜砂金雲母含	並	明黄褐色	下半部欠	
630	32	土師器	S字甕	SH82	13.2	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面工具ナデ	並、微細砂金雲母含	並	鈍い橙色	脚台部欠	外面スス
631	11	須恵器	杯蓋	SH82	13.8	－	4.5	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒多含	並	灰茶色	口縁部1/3残	
632	9	須恵器	杯蓋	SH82	13.8	－	4.9	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒多少含	不良	灰白色	口縁部1/2残	
633	10	須恵器	杯蓋	SH82	13.7	－	4.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	不良	灰色	口縁部4/5残	
634	16	須恵器	杯身	SH82	11.7	－	4.9	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒多少含	並	暗灰色	完存	
635	18	須恵器	杯身	SH82	13.4	－	5.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂金雲母含	不良	暗灰色	口縁部1/2残	
636	17	須恵器	杯身	SH82	12.0	－	4.6	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面一方向ナデ	並、～3㎜砂金雲母含	不良	暗灰色	口縁部1/2残	
637	21	須恵器	杯身	SH82	12.2	－	4.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂多少含	良	灰青色	1/4残	
638	23	須恵器	杯身	SH82	14.0	－	－	ロクロナデ	並、金雲母含	不良	灰白色	口縁部1/3残	
639	22	須恵器	杯身	SH82	14.0	－	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒若干含	良	青灰色	1/6残	
640	12	須恵器	有蓋高杯	SH82	14.6	－	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付 天井部内面同心円文タタキ痕	並、～3㎜砂粒若干含	並	灰色	口縁部一部欠	
641	14	須恵器	有蓋高杯蓋	SH82	14.4	－	5.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕貼付	並、～2㎜砂金雲母含	不良	暗黄橙色	ほぼ完存	風化
642	15	須恵器	有蓋高杯蓋	SH82	15.2	－	－	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、天井部内面同心円文タタキ痕	並、～2㎜砂金雲母含	不良	暗灰色	つまみ部欠	
643	13	須恵器	有蓋高杯蓋	SH82	14.4	－	4.9	ロクロナデ、天井部ロクロケズリ、天井部内面同心円文タタキ痕	並、～2㎜砂粒含	並	灰色	1/2残	
644	26	須恵器	短頸壺	SH82	8.8	－	6.4	ロクロナデ、底部外面粗いナデ	並、砂粒多少含	良	黒灰色	1/2残	重焼痕
645	25	須恵器	短頸壺	SH82	8.6	－	7.9	ロクロナデ、底部ヘラケズリ、体部外面カキメ	並、金雲母含	並	黒灰色	1/2残	
646	24	須恵器	短頸壺	SH82	8.2	－	－	ロクロナデ、体部外面カキメ	良、細砂僅かに含	良	黒灰色	1/3残、底部欠	
647	27	須恵器	短頸壺	SH82	10.6	－	11.4	ロクロナデ、底部ケズリ	並、細砂多少含	並	黒灰色	1/2残	内面～外面肩部自然釉 外面に杯身融着
648	28	須恵器	壺	SH82	18.0	－	－	ロクロナデ、体部タタキ+外面カキメ	並、微細砂含	不良	灰色	口縁部一部欠	
649	267	土師器	椀	SH83	8.0	－	－	ナデ、体部外面ハケ	並、細砂僅かに含	並	暗黄橙色	口縁部1/4残	
650	264	土師器	高杯	SH83	(22.6)	－	－	風化のため調整不明	並、砂かなり含	並	淡黄色	口縁部1/8残	接合痕跡、風化著しい
651	269	土師器	壺	SH83	13.4	－	－	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	精良、微砂粒僅か	並	暗橙色	口縁部1/3残	
652	270	土師器	甕	SH83	12.6	－	－	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	橙色	口縁部1/6残	接合痕跡
653	266	土師器	甕	SH83	10.6	－	8.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	褐色	1/3残	剝離、風化
654	268	土師器	甕	SH83	21.4	－	－	口縁部外面ハケ+内外面ヨコナデ	並、細砂多含	並	灰白色	口縁部1/6残	接合痕跡

第29表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（9）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
655	265	土師器	甕	SH83	16.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面工具ナデ	並、細砂雲母多少含	並	淡黄色	2/3残	
656	259	須恵器	杯蓋	SH83	15.6	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、天井部内面同心円文タタキ痕	並、～2㎜砂粒含	並	灰色	口縁部1/4残	
657	257	須恵器	杯蓋	SH83	13.0	−	4.8	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良、微砂粒少含	不良	青灰色	1/3残	
658	261	須恵器	杯身	SH83	11.2	−	−	ロクロナデ	並、3㎜程の砂含	不良	浅黄橙色	口縁部4/5残	剝離
659	260	須恵器	杯身	SH83	11.4	−	4.7	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り後ナデ、底部内面同心円文タタキ痕	並、細砂粒含	並	灰色	完存	
660	263	須恵器	有蓋高杯	SH83	(13.2)	14.2	−	ロクロナデ、杯部底部外面ロクロケズリ+カキメ・内面同心円文タタキ痕 脚柱部外面カキメ・内面シボリ痕、脚部3方方形透孔2段	並、微砂粒少含	並	青灰色	杯部～脚部2/3残、口縁端部欠	融着物
661	262	須恵器	有蓋高杯	SH83	12.0	(10.6)	10.5	ロクロナデ、杯部底部外面ロクロケズリ、脚部カキメ+方形透孔	並、～3㎜砂多少含	不良	灰黄色	杯部ほぼ完存 脚部1/6	透孔個数は不明
662	40	土師器	椀	SH85	12.0	−	4.6	風化のため調整不明	並、～3㎜小石多含	良	暗橙色	ほぼ完存	風化、接合痕跡
663	38	土師器	椀	SH85	7.0	−	4.8	口縁部ヨコナデ、体部外面指圧+ナデ・内面工具ナデ	密、～2㎜砂粒少含	良	明黄橙色	完存	接合痕跡
664	39	土師器	椀	SH85	9.2	−	5.3	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ハケ+工具ナデ	密、微砂粒金雲母少含	良	暗橙色	ほぼ完存	
665	41	土師器	椀	SH85	10.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・内面ハケ+工具ナデ	密、微砂粒金雲母少含	良	暗橙色	ほぼ完存	接合痕跡
666	44	土師器	甕	SH85	20.4	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、微砂粒少含	良	暗橙色	口縁部1/7残	磨滅
667	43	土師器	S字甕	SH85	12.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	粗、～3㎜小石多含	軟	明黄橙色	口縁部2/3残	
668	37	須恵器	杯蓋	SH85	13.4	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～5㎜小石少含	不良	暗赤褐色	1/3残	
669	45	須恵器	杯蓋	SH85	13.8	−	−	ロクロナデ	密、～4㎜砂粒少含	良	オリーブ黒色	1/10残	
670	35	須恵器	杯身	SH85	10.4	−	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒含	良	灰黒色	4/5残	焼脹れ
671	36	須恵器	杯身	SH85	10.5	−	4.3	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面一方向ナデ	密、～4㎜砂粒少含	良	黒灰色	完存	
672	34	須恵器	杯身	SH85	11.0	−	5.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒含	良	黒灰色	完存	
673	42	須恵器	杯身	SH85	12.0	−	5.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～2㎜砂粒含	良	灰色	完存	
674	65	須恵器	杯身	SH86	13.0	−	−	ロクロナデ	並、～2㎜砂粒多少含	良	灰色	1/4残	
675	66	須恵器	有蓋高杯	SH86	13.0	8.4	7.0	ロクロナデ、杯部底部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕 脚部円形4方透孔	精良	良	暗灰色	口縁部1/4残	
676	70	須恵器	杯蓋	SH88	10.2	−	3.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒含	並	灰白色	1/2残	
677	69	須恵器	高杯	SH88	−	9.6	−	ロクロナデ、外面カキメ、方形透孔	精良	並	黒灰色	小片	透孔の個数は不明
678	74	土師器	甕	SH89	8.1	−	10.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ハケ+ナデ	密、微砂粒雲母少含	良	暗橙色	ほぼ完存	接合痕跡、外面スス
679	102	土師器	甕	SH89	14.0	−	−	口縁部外面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、～2㎜砂粒少含	良	暗橙色	口縁部1/8残	
680	94	土師器	甕	SH89	14.6	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、～2㎜砂粒含	良	赤橙色	口縁部4/5残	内面炭化物
681	77	土師器	甕	SH89	14.6	−	18.8	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ケズリ	並、～2㎜砂粒多含	良	灰黄色	口縁部1/2残	外面黒斑、内外面炭化物
682	242	土師器	甕	SH89	10.6	−	14.0	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	密、微砂粒少含	良	暗黄橙色	1/2残	外面スス
683	240	土師器	甕	SH89	17.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、2㎜程の小石多含	良	暗黄橙色	口縁部1/2残	剝離
684	150	土師器	甕	SH89	18.6	−	−	口縁部～頸部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、～5㎜小石少含	良	橙色	1/2残、底部欠	
685	151	土師器	甕	SH89	18.8	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	密、微砂粒雲母少含	良	明黄褐色	6/7残、底部欠	
686	243	土師器	甕	SH89	18.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	密、～3㎜小石少含	良	明黄褐色	口縁部1/5残	
687	96	土師器	S字甕	SH89	14.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+ナデ	良、～1㎜砂粒少含	良	明黄褐色	口縁部4/5残	
688	95	土師器	S字甕	SH89	12.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+ナデ	並、～3㎜砂粒多含	良	暗黄褐色	口縁部1/6残	
689	71	土師器	S字甕	SH89	14.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+ナデ	密、～3㎜砂粒含	良	明黄褐色	口縁部1/7残	691と同一個体か
690	72	土師器	S字甕	SH89	−	9.8	−	体部下半外面ケズリ+ハケ・内面ナデ、脚台部オサエ+ナデ+外面ハケ	密、～3㎜砂粒含	良	明黄褐色	脚台部完存	690と同一個体か
691	107	須恵器	杯蓋	SH89	12.8	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	灰色	1/6残	
692	99	須恵器	杯蓋	SH89	13.8	−	4.8	ロクロナデ、天井部ヘラキリ未調整	密、～1㎜砂粒少含	良	青灰色	2/3残	

第30表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（10）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
693	98	須恵器	杯蓋	SH89	15.6	－	4.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～7㎜砂粒少含	良	灰白色	1/4残	
694	100	須恵器	杯身	SH89	10.0	－	4.9	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	灰白色	2/3残	
695	110	須恵器	杯身	SH89	10.2	－	－	ロクロナデ	密、微砂粒多含	良	青灰色	1/5残	
696	97	須恵器	杯身	SH89	10.2	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～1㎜砂粒少含	良	灰色	1/6残	
697	109	須恵器	杯身	SH89	11.5	－	(4.2)	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～2㎜砂粒少含	良	灰色	1/5残	
698	76	須恵器	杯身	SH89	11.0	－	－	ロクロナデ	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	1/8残	自然釉
699	73	須恵器	杯身	SH89	11.2	－	－	ロクロナデ	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	1/6残	
700	111	須恵器	杯身	SH89	11.8	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	灰色	1/4残	
701	46	須恵器	杯身	SH89	12.8	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	口縁部1/6残	
702	75	須恵器	杯身	SH89	13.4	－	－	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～3㎜砂粒少含	良	暗青灰色	1/4残	
703	91	須恵器	有蓋高杯	SH89	11.4	－	－	ロクロナデ	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	1/5残、脚部欠	
704	92	須恵器	高杯	SH89	－	7.1	－	ロクロナデ、外面カキメ、方形透孔	密、微砂粒極少含	良	灰色	脚部1/4残	透孔は4方か？
705	101	須恵器	壺	SH89	－			ロクロナデ、頸部内面シボリ痕、底部外面ロクロケズリ・内面工具のアタリ痕	密、～2㎜砂粒少含	良	暗灰色	体部1/2残	
706	134	須恵器	横瓶	SH89	15.2	－	－	ロクロナデ、頸部波状文+沈線、体部外面タタキ・内面工具ナデ+ナデ円盤充填	密、微砂粒多含	良	灰色	1/4残	
707	89	石製品	砥石	SH89	長さ8.8、幅1.4～2.5 厚さ1.1～1.6			――	――	－	灰褐色	一部欠	穿孔有
708	90	石製品	鎌形？	SH89	残存長7.1、幅3.0 厚さ0.3～0.9			磨製	――	－	暗灰色	破片	
709	280	土師器	甕	SH90	12.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ナデ・内面ハケ+ナデ	並、～5㎜小石多含	良	明黄褐色	口縁部1/6残	
710	140	土師器	S字甕	SH90	10.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ハケ+ナデ	密、微砂粒雲母少含	良	褐色	1/2残、底部欠	内外面に炭化物
711	139	土師器	S字甕	SH90	11.0	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、～1㎜砂粒雲母含	良	暗黄褐色	口縁部2/3残	内外面に炭化物
712	148	土師器	S字甕	SH90	－	9.6	－	オサエ+ナデ、外面ケズリ	密、～1㎜砂粒少含	良	浅黄橙色	脚台部1/3残	
713	149	土師器	鉢	SH90	27.2	－	25.7	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面工具ナデ+ナデ	密、3㎜程砂雲母少含	良	暗橙色	1/3残	炭化物
714	126	土師器	S字甕	SH90	14.6	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	やや良、金雲母含	並	暗褐色	口縁部完存	外面スス
715	239	土師器	S字甕	SH90	14.4	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、～2㎜砂粒含	良	暗黄橙色	口縁部完存	内外面炭化物
716	113	須恵器	杯蓋	SH90	11.6	－	4.5	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	青黒色	1/3残	
717	112	須恵器	杯蓋	SH90	12.2	－	5.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～2㎜砂粒含	良	灰白色	口縁部1/5残	
718	141	須恵器	杯蓋	SH90	10.8	－	－	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、1㎜程砂雲母少含	良	暗青灰色	1/8残	外面自然釉
719	124	須恵器	杯身	SH90	8.9	－	4.3	ロクロナデ、天井部2/5ロクロケズリ、天井部内面同心円文タタキ痕	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	1/3残	
720	125	須恵器	杯身	SH90	9.6	－	4.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、～1㎜砂粒少含	良	灰色	口縁部1/4残	
721	116	土師器	甕	SH91	17.0	－	－	口縁部ヨコナデ、体部ナデ	並、細砂雲母多含	良	暗褐色	口縁部1/6残	
722	121	土師器	甕	SH91	15.8	－	－	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ	並、細砂雲母多含	良	暗赤褐色	口縁部1/8残	接合痕跡
723	122	土師器	甕	SH91	14.2	－	－	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母多含	良	褐色	口縁部1/8残	接合痕跡
724	115	土師器	S字甕	SH91	15.8	－	－	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面指圧+工具ナデ+ナデ	並、微細砂雲母含	良	暗青灰色	口縁部2/3残	
725	117	土師器	S字甕	SH91	－	8.1	－	指圧+ナデ	並、細砂雲母多含	良	褐色	口縁部1/2残	
726	114	須恵器	杯蓋	SH91	13.6	－	4.6	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	精良	良	暗青灰色	1/2残	
727	119	石製品	紡錘車	SH91	頂径3.2、底径4.1 高さ1.3、重さ39.0g			線刻、全体に低平だが円筒形+裁頭円錐形	――	－	緑青灰色	ほぼ完存	滑石製？、受熱
728	118	石製品	紡錘車	SH91	頂径2.4～2.7、底径4.6～4.7 高さ1.65cm、重さ54.5g			無文、全体はやや高い円筒形+裁頭円錐形	――	－	黒灰色	完存	滑石製、穿孔内に炭化物有
729	86	土師器	手捏土器	SH92	3.6	－	2.4	指圧+ナデ	並、～2㎜砂粒雲母含	並	橙色	ほぼ完存	

第31表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（11）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
730	308	土師器	S字甕	SH92	15.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂金雲母含	良	黄橙色	口縁部完存	
731	87	土師器	S字甕	SH92	14.4	−	−	口縁部ヨコナデ	並、微細砂金雲母含	良	暗黄褐色	口縁部1/6残	
732	88	土師器	甕	SH92	19.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ナナメハケ・内面工具ナデ	並、微細砂含	良	明赤褐色	底部欠	黒斑
733	80	土師器	杯蓋	SH92	12.8	−	4.4	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、微細砂含	良	暗青灰色	1/2残	焼脹れ
734	81	須恵器	杯蓋	SH92	13.0	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、微細砂含	良	黒青灰色	1/2残	
735	78	須恵器	杯蓋	SH92	15.2	−	4.1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕	並、微細砂含	並	白灰色	1/3残	
736	82	須恵器	杯蓋	SH92	16.4	−	5.1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕	精良、金雲母含	不良	明褐灰色	口縁部1/3残	
737	83	須恵器	杯身	SH92	12.4	−	5.0	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	良、微細砂含	良	黒灰色	1/3残	焼脹れ
738	79	須恵器	有蓋高杯蓋	SH92	13.2	−	5.1	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕、鈕貼付	良、微細砂若干含	良	暗青灰色	ほぼ完存	
739	85	須恵器	高杯	SH92	−	11.6	−	ロクロナデ、方形透孔	精良	並	黒灰色	脚部1/4残	透孔は3方向に復元
740	170	土師器	高杯	SH94	−	8.8	−	風化のため調整不明、内面シボリ痕	密、微砂粒少含	良	明赤褐色	脚部1/4残	風化著しい
741	160	土師器	甕	SH94	(11.8)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	粗、～2㎜砂粒多含	良	明赤褐色	口縁部1/5残	風化
742	161	土師器	甕	SH94	17.4	−	−	口縁部ハケ+ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	粗、～3㎜小石多含	良	黄褐色	口縁部1/8残	接合痕跡
743	154	須恵器	杯蓋	SH94	(11.8)	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	暗青灰色	口縁部1/10残	
744	156	須恵器	杯蓋	SH94	12.6	−	4.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～2㎜小石少含	良	青灰色	口縁部僅かに残	
745	281	須恵器	杯蓋	SH94	13.4		5.0	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～2㎜小石少含	良	灰色	1/4残	天井部外面ヘラ描
746	154	須恵器	杯蓋	SH94	13.2	−	−	ロクロナデ	密、微砂粒少含	良	青黒色	1/4残	
747	153	須恵器	杯蓋	SH94	15.6	−	(4.5)	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、～3㎜小石多含	良	灰色	1/3残	
748	159	須恵器	杯身	SH94	12.4	−	4.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕	密、～6㎜小石少含	良	灰色	ほぼ完形	
749	7	土師器	甕	SH98	12.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母含	並	黄褐色	1/3残、底部欠	
750	8	土師器	S字甕	SH98	13.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、微細砂雲母多含	並	暗褐色	下半部欠	
751	5	須恵器	高杯	SH98	−	10.6	−	ロクロナデ、脚部外面カキメ、円形透孔4方、杯部内面同心円文タタキ痕	並、～5㎜砂含	並	灰褐色	脚部5/6残	
752	3	須恵器	杯蓋	SH98	13.4	−	3.7	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、～2㎜砂粒多少含	並	暗青色	1/8残	
753	4	須恵器	杯蓋	SH98	15.4	−	−	ロクロナデ	並、～1㎜砂粒少含	不良	暗灰色	1/4残	
754	6	須恵器	杯身	SH98	13.2	−	3.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面同心円文タタキ痕	並、～2㎜砂金雲母含	不良	灰黄色	1/2残	
755	1	須恵器	杯身	SH98	14.0	−	−	風化のため調整不明	密、雲母若干含	不良	灰白色	底部中央欠	風化著しい
756	2	須恵器	杯身	SH98	13.8	−	4.2	風化のため調整不明	密	不良	灰白色	1/2	

第32表　古墳時代竪穴住居出土遺物観察表（12）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量（mm）	
				長さ	径
757	1568	SH14	暗青灰色	2.5	4.5
758	1571	SH14	暗緑灰色	4.0	5.5
759	1570	SH14	緑黒色	3.0	5.5
760	1630	SH19	暗緑灰色	3.0	5.0
761	1632	SH19	暗緑灰色	3.0	4.5
762	1631	SH19	オリーブ黒色	4.0	5.0
763	1626	SH19	褐灰色	4.0	5.0
764	1617	SH19	暗灰色	4.0	5.0
765	1629	SH19	暗灰色	3.0	5.0
766	1613	SH19	暗灰色	4.0	5.5
767	1616	SH19	暗緑灰色	5.0	6.0
768	1625	SH19	白灰色	3.0	5.5
769	1619	SH19	白灰色	4.0	6.0
770	1621	SH19	白灰色	3.0	6.0
771	1615	SH19	暗緑灰色	4.0	5.0
772	1618	SH19	白灰色	4.0	5.5
773	1624	SH19	黒褐色	3.0	6.5
774	1623	SH19	明緑灰色	3.5	6.0
775	1620	SH19	白灰色	4.0	6.0
776	1614	SH19	暗緑灰色	5.0	5.5
777	1622	SH19	暗緑灰色	5.5	6.5
778	1627	SH19	暗緑灰色	3.0	6.0
779	1628	SH20	淡黄色	2.0	4.0
780	1612	SH20	暗緑灰色	4.5	7.5
781	1605	SH22	暗緑灰色	3.5	4.0
782	1558	SH23	明褐灰色	5.5	5.0
783	1590	SH25～27	暗緑灰色	2.0	3.0
784	1584	SH25～27	明褐灰色	2.0	4.0
785	1589	SH25～27	灰色	2.0	4.0
786	1585	SH25～27	明褐灰色	2.0	4.0
787	1581	SH25～27	暗褐灰色	2.0	4.0
788	1583	SH25～27	明褐灰色	2.0	4.0
789	1764	SH25～27	暗青灰色	2.5	3.5
790	1759	SH25～27	暗緑灰色	2.0	4.0
791	1587	SH25～27	褐灰色	2.0	4.0
792	1586	SH25～27	明オリーブ灰色	2.0	4.0
793	1604	SH25～27	黒褐色	2.0	4.5
794	1588	SH25～27	オリーブ灰色	2.0	4.0
795	1758	SH25～27	灰色	2.5	4.0
796	1763	SH25～27	暗緑灰色	4.0	5.0
797	1582	SH25～27	白灰色	1.5	5.0
798	1756	SH25～27	緑灰色	2.5	5.5
799	1580	SH25～27	明褐灰色	2.0	5.5
800	1578	SH25～27	緑灰色	2.5	5.5
801	1598	SH25～27	緑灰色	4.0	5.0
802	1603	SH25～27	黒色	3.0	55
803	1762	SH25～27	暗青灰色	3.5	5.5
804	1601	SH25～27	緑灰色	2.8	6.0
805	1579	SH25～27	暗緑灰色	3.0	6.0
806	1754	SH25～27	明オリーブ灰色	2.5	5.5
807	1760	SH25～27	暗青灰色	3.5	6.0
808	1595	SH25～27	褐灰色	3.5	6.0
809	1757	SH25～27	白灰色	4.0	6.0
810	1594	SH25～27	暗緑灰色	2.5	6.0
811	1602	SH25～27	緑灰色	2.5	6.0
812	1761	SH25～27	緑灰色	2.0	6.5
813	1600	SH25～27	黒色	2.0	6.0
814	1597	SH25～27	黒色	3.0	7.0
815	1596	SH25～27	オリーブ黒色	4.0	7.0
816	1755	SH25～27	暗灰色	3.0	6.5
817	1573	SH25～27	暗青灰色	2.0	7.0
818	1745	SH25～27	灰白色	3.0	(7.0)
819	1741	SH25～27	暗褐灰色	5.5	7.0
820	1599	SH25～27	黄灰色	5.0	8.0
821	1677	SH25～27	緑灰色	3.0	4.5
822	1676	SH25～27	黒色	3.0	4.5
823	1674	SH25～27	灰色	4.0	5.5
824	1575	SH25～27	灰色	3.0	5.5
825	1572	SH25～27	褐灰色	3.5	6.5
826	1561	SH25～27	灰色	3.0	4.0
827	1557	SH30	灰緑色	3.0	4.0
828	1724	SH30	灰緑色	3.0	4.5
829	1554	SH30	明オリーブ灰色	3.0	4.5
830	1555	SH30	褐灰色	4.0	6.0
831	1556	SH31	暗緑灰色	3.0	4.0
832	1564	SH32	緑灰色	3.5	5.5

第33表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（1）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量（mm）	
				長さ	径
833	1553	SH34	緑灰色	2.5	4.0
834	1552	SH34	明褐灰色	2.5	5.5
835	1548	SH34	暗褐灰色	2.5	5.0
836	1551	SH34	暗緑灰色	2.5	5.0
837	1560	SH34	暗緑灰色	2.5	5.5
838	1550	SH34	暗褐色	2.0	6.0
839	1549	SH34	暗褐色	3.0	5.5
840	1563	SH34	暗緑灰色	3.5	6.0
841	1726	SH35	暗褐灰色	3.0	5.0
842	1725	SH35	黒褐色	5.5	6.0
843	1727	SH35	褐灰色	3.0	7.0
844	882	SH37	灰色	2.5	4.0
845	880	SH37	灰褐色	2.0	5.5
846	884	SH37	緑灰色	4.0	6.0
847	883	SH37	緑灰色	4.0	5.0
848	998	SH37	緑灰色	4.0	6.0
849	879	SH37	暗青灰色	2.0	7.0
850	881	SH37	暗緑灰色	2.5	6.0
851	999	SH37	暗灰色	2.5	10.0
852	890	SH38	緑灰色	3.0	5.0
853	887	SH38	灰緑色	2.5	5.0
854	889	SH38	灰緑色	3.0	5.0
855	888	SH38	灰緑色	4.5	5.0
856	891	SH38	灰緑色	2.5	5.5
857	886	SH38	灰緑色	4.0	6.0
858	885	SH38	暗青灰色	2.5	5.5
859	987	SH39	オリーブ灰色	1.8	4.5
860	988	SH39	青灰色	3.5	4.5
861	989	SH39	暗緑灰色	3.5	5.5
862	991	SH39	緑灰色	4.0	5.5
863	990	SH39	暗青灰色	2.0	6.0
864	904	SH40	緑灰色	2.5	4.0
865	972	SH40	明オリーブ灰色	2.0	5.0
866	906	SH40	暗緑灰色	4.0	5.0
867	976	SH40	暗緑灰色	2.0	5.0
868	986	SH40	暗緑灰色	2.5	5.5
869	938	SH40	暗緑灰色	4.5	5.0
870	936	SH40	暗緑灰色	3.5	4.5
871	937	SH40	緑灰色	3.0	5.5
872	908	SH40	暗灰色	3.0	4.5
873	960	SH40	暗緑灰色	3.5	5.5
874	902	SH40	暗緑灰色	2.0	5.5
875	911	SH40	灰白色	2.5	5.0
876	985	SH40	緑灰色	3.0	5.5
877	961	SH40	暗緑灰色	3.0	5.5
878	966	SH40	暗緑灰色	2.5	6.0
879	956	SH40	暗緑灰色	2.5	5.5
880	901	SH40	暗オリーブ灰色	3.5	5.0
881	973	SH40	暗緑灰色	2.0	5.0
882	974	SH40	暗緑灰色	3.0	5.5
883	975	SH40	暗緑灰色	3.5	5.5
884	939	SH40	灰緑色	4.0	6.0
885	955	SH40	暗緑灰色	2.5	5.0
886	952	SH40	暗緑灰色	3.0	5.5
887	912	SH40	暗緑灰色	2.0	5.5
888	980	SH40	暗緑灰色	3.0	5.5
889	900	SH40	暗緑灰色	3.0	5.5
890	909	SH40	暗緑灰色	2.5	6.0
891	978	SH40	暗緑灰色	3.5	5.5
892	959	SH40	緑灰色	3.0	6.0
893	957	SH40	暗緑灰色	3.0	7.0
894	967	SH40	緑灰色	2.5	5.5
895	953	SH40	灰白色	5.0	7.0
896	982	SH40	緑灰色	5.0	5.5
897	946	SH40	暗青灰色	5.0	6.5
898	963	SH40	明オリーブ灰色	4.5	5.5
899	965	SH40	緑灰色	2.5	6.0
900	941	SH40	暗緑灰色	3.5	6.0
901	954	SH40	暗緑灰色	3.0	7.0
902	944	SH40	暗緑灰色	3.0	6.0
903	945	SH40	灰白色	3.5	6.5
904	935	SH40	黒色	4.0	6.5
905	947	SH40	灰白色	4.0	6.0
906	940	SH40	緑灰色	3.0	6.0
907	969	SH40	灰白色	4.0	6.0
908	948	SH40	暗青灰色	3.0	6.0

第34表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（2）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量（mm）	
				長さ	径
909	977	SH40	暗緑灰色	(3.0)	6.0
910	979	SH40	灰白色	3.0	6.5
911	981	SH40	暗緑灰色	4.0	6.5
912	907	SH40	灰白色	4.5	6.5
913	951	SH40	黒褐色	5.0	7.0
914	942	SH40	暗緑灰色	4.0	6.5
915	913	SH40	灰白色	2.0	6.5
916	905	SH40	暗緑灰色	2.0	6.5
917	958	SH40	暗灰緑色	4.0	7.0
918	910	SH40	暗緑灰色	2.0	6.5
919	970	SH40	暗緑灰色	3.0	7.0
920	949	SH40	暗灰色	4.0	7.0
921	950	SH40	暗灰色	3.0	7.0
922	984	SH40	暗緑灰色	2.5	7.0
923	971	SH40	暗灰色	5.5	7.5
924	903	SH40	灰黄色	6.0	7.0
925	968	SH40	黒色	3.0	7.0
926	983	SH40	灰白色	5.5	7.5
927	943	SH40	明オリーブ灰色	3.0	8.0
928	962	SH40	灰色	4.5	8.5
929	964	SH40	緑灰色	3.5	8.5
930	875	SH41	緑灰色	3.0	5.0
931	873	SH41	暗緑灰色	4.0	5.0
932	876	SH41	暗緑灰色	3.0	5.5
933	877	SH41	灰色	2.5	7.0
934	874	SH41	明緑灰色	3.5	8.0
935	878	SH41	灰色	4.5	8.0
936	993	SH45	暗緑灰色	4.0	5.5
937	992	SH45	明灰緑色	3.5	5.5
938	994	SH45	黒褐色	5.0	8.0
939	933	SH47	緑灰色	4.0	4.5
940	934	SH47	乳黄橙色	4.5	5.0
941	915	SH47	暗青灰色	4.0	5.5
942	929	SH47	暗緑灰色	3.0	6.0
943	924	SH47	明オリーブ灰色	3.0	6.0
944	931	SH47	暗緑灰色	4.5	6.0
945	919	SH47	暗緑灰色	3.0	6.0
946	922	SH47	緑灰色	3.0	5.5
947	925	SH47	暗緑灰色	4.5	6.0
948	916	SH47	緑灰色	3.5	5.5
949	932	SH47	暗オリーブ灰色	3.0	5.5
950	926	SH47	緑灰色	4.0	5.5
951	918	SH47	暗緑灰色	3.5	6.0
952	923	SH47	灰黄橙色	3.0	6.0
953	917	SH47	暗緑灰色	3.5	6.0
954	920	SH47	暗緑灰色	4.5	6.0
955	930	SH47	灰白色	5.0	6.5
956	921	SH47	灰色	4.0	7.0
957	928	SH47	灰白色	2.5	7.0
958	914	SH47	暗緑黒色	4.5	7.0
959	927	SH47	緑灰色	2.5	7.0
960	1847	SH48	灰緑色	2.0	5.0
961	1801	SH48	明緑灰色	2.0	5.0
962	1814	SH48	オリーブ灰色	3.0	5.0
963	1834	SH48	緑灰色	3.0	5.5
964	1848	SH48	白灰色	3.0	5.0
965	1839	SH48	暗緑灰色	3.0	6.0
966	1746	SH48	暗緑灰色	3.0	5.5
967	1753	SH48	暗緑灰色	3.0	5.5
968	1735	SH48	乳灰黄色	2.0	6.0
969	1792	SH48	灰黄色	2.0	6.5
970	1791	SH48	灰黄色	2.0	7.0
971	1793	SH48	灰黄色	2.0	7.0
972	1815	SH48	緑灰色	3.5	(6.5)
973	1833	SH48	緑灰色	4.5	6.5
974	1789	SH48	灰黄色	3.0	7.0
975	1787	SH48	灰黄色	4.0	7.0
976	1790	SH48	灰黄色	2.5	7.5
977	1785	SH48	灰黄色	4.0	6.0
978	1788	SH48	灰黄色	3.5	7.5
979	1786	SH48	灰黄色	4.0	7.0
980	1832	SH48	白灰色	4.0	8.0
981	1784	SH51	オリーブ灰色	3.0	5.0
982	1850	SH51	暗オリーブ灰色	4.0	(4.5)
983	1849	SH51	暗緑灰色	4.0	6.0
984	1799	SH51	暗緑灰色	3.5	5.5

第35表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（3）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量(mm)	
				長さ	径
985	1802	SH51	暗緑灰色	3.0	6.5
986	1842	SH52	灰色	3.0	4.5
987	1837	SH52	緑灰色	2.0	5.0
988	1797	SH52	暗緑灰色	3.0	6.0
989	1747	SH52	暗緑灰色	2.0	6.0
990	1841	SH52	暗灰色	4.0	6.0
991	1774	SH52	灰白色	3.0	7.0
992	1846	SH53	明灰橙色	2.0	4.5
993	1673	SH53	明褐灰色	3.5	4.5
994	1668	SH53	明灰色	3.5	5.0
995	1670	SH53	暗オリーブ灰色	3.0	6.0
996	2102	SH53	暗緑灰色	3.5	6.5
997	1803	SH54	暗緑灰色	3.0	4.0
998	1798	SH54	暗緑灰色	3.5	4.5
999	1843	SH54	緑灰色	3.5	5.0
1000	1836	SH54	緑灰色	1.5	5.0
1001	1731	SH54	緑灰色	3.0	4.5
1002	1796	SH54	オリーブ灰色	3.0	5.5
1003	1752	SH54	暗緑灰色	3.0	5.5
1004	1800	SH54	緑灰色	4.0	5.5
1005	1766	SH54	暗緑灰色	4.0	6.0
1006	1730	SH54	灰白色	2.5	5.5
1007	1845	SH54	暗緑灰色	4.5	5.0
1008	1728	SH54	緑灰色	4.0	6.0
1009	1782	SH54	緑灰色	4.0	5.5
1010	1835	SH54	明緑灰色	2.0	6.5
1011	1783	SH54	オリーブ灰色	3.5	6.0
1012	1697	SH54	灰白色	2.5	7.0
1013	1794	SH54	オリーブ灰色	3.5	7.0
1014	1795	SH54	明緑灰色	3.0	7.0
1015	1765	SH54	灰色	5.0	8.0
1016	1767	SH54	灰黄褐色	5.0	7.8
1017	1844	SH54	灰白色	2.0	7.0
1018	1748	SH54	灰白色	2.0	8.5
1019	1729	SH54	灰白色	3.0	7.5
1020	1672	SH55	オリーブ灰色	2.0	4.5
1021	1736	SH55	オリーブ黒色	4.0	5.5
1022	1665	SH55	緑灰色	3.5	6.5
1023	1660	SH56	暗オリーブ灰色	3.0	4.0
1024	1661	SH56	暗灰色	3.0	4.5
1025	1667	SH56	明褐灰色	2.5	4.5
1026	1662	SH56	黒褐色	4.0	5.5
1027	1840	SH56	明緑灰色	2.5	5.0
1028	1666	SH56	灰色	1.5	6.0
1029	1671	SH56	緑灰色	2.0	5.0
1030	1659	SH56	緑灰色	4.0	6.0
1031	1663	SH56	緑灰色	2.0	6.0
1032	1669	SH56	暗オリーブ灰色	3.0	7.0
1033	1690	SH57	暗灰緑色	3.0	4.0
1034	1691	SH57	暗灰緑色	2.0	4.0
1035	1751	SH57	灰緑色	3.5	5.0
1036	1693	SH57	黒褐色	3.0	4.5
1037	1750	SH57	灰緑色	4.5	5.0
1038	1689	SH57	灰緑色	4.5	4.5
1039	1771	SH57	灰緑色	2.5	4.5
1040	1772	SH57	暗緑灰色	3.0	4.5
1041	1769	SH57	灰緑色	3.0	5.0
1042	1770	SH57	灰緑色	3.5	5.0
1043	1768	SH57	暗オリーブ灰色	4.0	6.0
1044	1683	SH57	暗灰色	4.0	5.0
1045	1692	SH57	灰緑色	2.5	5.0
1046	1807	SH57	暗灰色	(3.0)	(5.5)
1047	1705	SH58	暗灰緑色	3.0	4.0
1048	1680	SH58	灰白色	3.0	5.0
1049	1722	SH58	暗灰色	4.0	6.0
1050	1703	SH58	暗オリーブ灰色	3.0	5.0
1051	1704	SH58	灰緑色	3.0	6.5
1052	1702	SH58	灰白色	3.0	7.0
1053	1838	SH59	暗灰緑色	4.0	5.5
1054	1696	SH59	暗灰緑色	3.0	5.0
1055	1695	SH61	浅黄橙色	2.0	4.0
1056	1118	SH61	暗灰緑色	3.5	4.5
1057	1113	SH61	暗灰緑色	5.0	4.0
1058	1679	SH61	明緑灰色	2.5	4.5
1059	1108	SH61	暗緑灰色	4.0	4.5
1060	1109	SH61	暗緑灰色	3.5	5.0

第36表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（4）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量（mm）	
				長さ	径
1061	1688	SH61	暗灰色	5.0	6.0
1062	1675	SH61	灰黄橙色	4.5	6.0
1063	1116	SH61	暗灰緑色	3.0	5.5
1064	1112	SH61	暗緑灰色	4.0	6.0
1065	1117	SH61	淡黄色	3.0	5.5
1066	1119	SH61	暗緑灰色	2.0	6.0
1067	1115	SH61	暗緑灰色	5.0	6.0
1068	1694	SH61	浅黄橙色	2.0	5.0
1069	1111	SH61	暗灰緑色	4.0	6.5
1070	1114	SH61	灰色	2.0	6.0
1071	1107	SH61	灰白色	5.0	6.5
1072	1110	SH61	灰褐色	4.5	6.0
1073	1105	SH61	明褐灰色	2.5	5.5
1074	1106	SH61	褐灰色	5.5	6.5
1075	1804	SH62	暗緑灰色	3.5	5.0
1076	1805	SH62	暗緑灰色	3.5	4.5
1077	1710	SH62	緑黒色	4.5	4.5
1078	1720	SH62	暗緑灰色	4.0	5.5
1079	1721	SH62	暗灰緑色	2.0	6.0
1080	1687	SH62	黒褐色	4.0	5.0
1081	1685	SH62	明褐灰色	4.0	6.0
1082	1718	SH64	黒色	3.0	5.5
1083	1678	SH65	黒色	3.0	5.5
1084	1716	SH65	暗緑灰色	5.5	6.0
1085	1715	SH66	暗緑灰色	3.0	5.5
1086	1714	SH66	暗緑灰色	2.5	6.0
1087	633	SH72	明灰橙	2.5	5.0
1088	634	SH72	明褐灰	4.5	7.0
1089	673	SH72	緑灰色	4.0	7.5
1090	674	SH72	灰色	4.5	8.0
1091	635	SH72	明褐灰色	5.0	8.5
1092	690	SH74	明緑灰色	1.5	4.5
1093	681	SH74	明オリーブ灰色	2.5	5.0
1094	683	SH74	明灰緑色	2.0	4.5
1095	687	SH74	明オリーブ灰色	3.0	4.5
1096	688	SH74	緑灰色	4.5	5.0
1097	689	SH74	灰緑色	2.5	5.0
1098	694	SH74	暗緑灰色	3.0	5.0
1099	692	SH74	灰緑色	3.0	5.0
1100	698	SH74	灰緑色	4.0	5.0
1101	701	SH74	灰緑色	3.5	5.0
1102	699	SH74	灰緑色	5.0	5.0
1103	700	SH74	明緑灰色	2.0	5.0
1104	691	SH74	緑灰色	3.0	6.0
1105	696	SH74	緑灰色	2.3	5.0
1106	697	SH74	暗橙色	2.0	5.5
1107	705	SH74	緑灰色	3.0	6.0
1108	682	SH74	灰緑色	2.0	5.5
1109	703	SH74	暗灰緑色	3.5	5.5
1110	693	SH74	灰緑色	4.0	5.0
1111	702	SH74	灰緑色	3.0	6.0
1112	686	SH74	暗緑灰色	3.0	6.0
1113	704	SH74	暗緑灰色	3.0	7.0
1114	678	SH74	明オリーブ灰色	4.0	6.5
1115	706	SH74	暗青灰色	4.0	6.5
1116	695	SH74	緑灰色	4.0	7.0
1117	676	SH74	暗緑灰色	2.3	5.0
1118	684	SH74	暗灰オリーブ色	4.5	6.5
1119	685	SH74	明緑灰色	3.5	7.0
1120	677	SH74	緑灰色	3.0	7.0
1121	680	SH74	明緑灰色	5.0	6.0
1122	679	SH74	暗青灰色	3.5	7.0
1123	672	SH75	黒褐色	3.0	5.0
1124	669	SH77	灰色	2.5	4.0
1125	663	SH77	灰色	3.0	4.0
1126	670	SH77	灰色	2.0	5.0
1127	666	SH77	明オリーブ灰色	2.0	5.5
1128	612	SH77	オリーブ灰色	2.5	5.0
1129	668	SH77	黒褐色	3.0	5.0
1130	665	SH77	暗緑灰色	5.0	7.0
1131	667	SH77	暗緑灰色	4.0	8.0
1132	664	SH77	緑灰色	5.0	7.5
1133	662	SH78	褐灰色	4.0	6.5
1134	613	SH79	オリーブ灰色	3.5	5.5
1135	614	SH79	灰黄色	6.0	8.5
1136	658	SH82	オリーブ灰色	4.0	5.0

第37表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（5）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	色調	法量（mm）	
				長さ	径
1137	657	SH82	オリーブ灰色	2.5	6.0
1138	617	SH85	緑灰色	4.5	5.5
1139	606	SH89	淡灰黄色	3.5	6.0
1140	605	SH89	暗緑灰色	3.0	6.5
1141	603	SH89	緑灰色	4.5	8.0
1142	604	SH89	暗緑灰色	5.0	8.0
1143	650	SH90	暗青灰色	4.5	5.0
1144	651	SH90	暗青灰色	4.0	5.0
1145	652	SH90	暗青灰色	3.0	5.0
1146	611	SH90	暗青灰色	4.0	5.0
1147	653	SH90	暗青灰色	4.5	5.0
1148	655	SH90	暗灰色	3.0	5.0
1149	649	SH90	暗緑灰色	4.0	7.0
1150	648	SH90	暗緑灰色	4.5	7.0
1151	610	SH91	緑灰色	2.5	5.5
1152	609	SH91	緑灰色	3.0	6.5
1153	608	SH91	緑灰色	3.5	6.0
1154	646	SH94	黒色	2.5	6.0

第38表　古墳時代竪穴住居出土滑石製臼玉観察表（6）

報告番号	整理番号	出土竪穴住居	名称	材質	色調	法量（mm）	
						長さ	径
1155	1574	SH25～SH27	臼玉	土	黒色	4.5	5.0
1156	1806	SH54	臼玉	土	黒褐色	7.5	11.0
1157	1664	SH55	臼玉	土	黒褐色	6.0	6.5
1158	1686	SH58	臼玉	土	灰黄橙色	4.5	8.0
1159	1684	SH62	臼玉	土	黒褐色	8.0	10.0
1160	2100	SH66	ナツメ玉	土	灰黄橙色	12.0	11.0
1161	671	SH77	ナツメ玉	土	灰黄褐色	13.0	8.5
1162	661	SH78	臼玉	土	灰黄橙色	6.0	8.0
1163	660	SH78	丸玉	土	灰黄色	10.0	12.0
1164	659	SH78	丸玉	土	灰黄褐色	11.0	16.0
1165	615	SH79	臼玉	土	黒褐色	7.0	8.0
1166	616	SH83	臼玉	土	褐灰色	9.0	12.0
1167	656	SH86	臼玉	土	灰黄橙色	5.0	6.0
1168	645	SH94	臼玉	土	灰黄橙色	3.0	7.0
1169	639	SH94	臼玉	土	黄橙色	4.5	8.0
1170	644	SH94	臼玉	土	褐灰色	2.5	8.5
1171	643	SH94	臼玉	土	黒褐色	5.5	8.5
1172	601	SH98	丸玉	土	黒褐色	7.5	8.0
1173	600	SH98	丸玉	土	黒褐色	8.5	9.0
1174	602	SH98	丸玉	土	黒褐色	8.0	9.0
1175	1606	SH22	小玉	ガラス	緑青色	2.5	4.0
1176	1733	SH56	小玉	ガラス	緑色	3.0	4.0
1177	1732	SH56	小玉	ガラス	緑色	3.0	4.5
1178	1734	SH56	小玉	ガラス	緑色	3.0	4.0
1179	647	SH94	小玉	ガラス	緑青色	2.0	4.0
1180	2103	SH61	管玉	滑石	暗緑灰色	(7.5)	(7.0)
1181	675	SH72	管玉	滑石	暗オリーブ灰色	27.5	8.0

第39表　古墳時代竪穴住居出土玉類観察表

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1182	553	須恵器	杯身	SK4	11.6	−	4.4	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り未調整・内面同心円文タタキ痕	並、1㎜程の砂粒多含	良	暗灰色	口縁部1/4残	
1183	1852	土師器	甕	SK6	9.3	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	やや密、細砂粒含	良	暗橙色	口縁部1/4残	
1184	1870	土師器	S字甕	SK6	13.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒多含	良	浅黄橙色	1/3残	
1185	729	土師器	甕	SK7	9.0	−	11.8	口縁部ヨコナデ、体部外面粗いハケ・内面ナデ	並、～3㎜小石多含	良	赤褐色	ほぼ完存	接合痕跡、風化
1186	845	土師器	手捏土器	SK7	3.8	−	3.2	指圧+ナデ	並、微砂粒含	良	橙色	口縁部1/2残	
1187	813	須恵器	高杯	SK7	−	4.9	−	ロクロナデ、脚部外面カキメ、円形3方透孔	並、微砂粒少含	良	灰色	脚部1/2残	
1188	811	須恵器	杯蓋	SK7	14.4	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、細砂粒少含	良	灰色	1/4残	
1189	812	須恵器	杯身	SK7	12.3	−	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、微砂粒少含	良	灰色	1/5残	
1190	839	土師器	S字甕	SK8	13.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並、細砂粒少含	良	橙色	口縁部1/4残	
1191	842	須恵器	杯身	SK9	14.0	−	4.4	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒少含	良	灰色	口縁部1/9残	
1192	843	土師器	椀	SK9	11.2	−	4.2	指圧+ナデ、口縁部ヨコナデ	並、微砂粒含	良	暗黄橙色	口縁部一部残 底部完存	接合痕跡
1193	849	土師器	高杯	SK10	28.8	14.4	2.1	口縁部ヨコナデ、杯部風化のため調整不明 脚柱部外面面取り・内面シボリ痕	並、～5㎜小石多含	良	赤褐色	ほぼ完存	風化
1194	399	須恵器	杯蓋	SK13	14.2	−	5.0	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、2㎜程砂粒若干含	良	茶色	口縁部一部残 天井上3/4残	
1195	395	須恵器	杯蓋	SK13	15.0	−	5.0	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良、2㎜程砂粒若干含	良	青灰色	口縁部3/4残	
1196	397	須恵器	杯身	SK13	12.0	−	3.8	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り未調整	やや粗、4㎜程小石含	良	青灰色	口縁部3/4残	
1197	389	須恵器	無蓋高杯	SK13	12.4	−	−	ロクロナデ、杯部外面カキメ	やや粗、2㎜程砂多含	良	暗青灰色	口縁部1/2残	
1198	398	須恵器	有蓋高杯	SK13	12.7	11.5	9.3	ロクロナデ、杯部底部外面カキメ・内面同心円文タタキ痕、脚部外面カキメ、方形3方透孔	やや粗、3㎜程砂粒含	良	青灰色	脚部3/4欠	
1199	392	須恵器	高杯	SK13	−	11.0	−	ロクロナデ、脚部外面カキメ、方形3方透孔	良、微砂若干含	良	暗青灰色	脚部1/4残	
1200	394	須恵器	高杯	SK13	−	11.0	−	ロクロナデ、脚部外面カキメ、方形3方透孔2段	良、1㎜の微砂含	良	暗青灰色	脚部1/4残	
1201	400	須恵器	蓋	SK13	11.3	−	5.3	ロクロナデ、天井部外面ケズリ	良、1㎜程の砂粒少含	良	暗青灰色	口縁部1/6残	融着、自然釉
1202	396	須恵器	短頸壺	SK13	6.9	−	6.2	ロクロナデ、体部外面カキメ、底部外面ヘラ切り未調整	並、2㎜程砂粒含	不良	暗青灰色	口縁部3/4残、底部完存	重焼痕跡 底部外面自然釉
1203	378	石製品	紡錘車	Ⅷ区包 F15-6	頂径1.8㎝、底径4.0㎝ 高さ1.0㎝、重さ24.0g			無文、全体は低平で円筒形+頂部径の小さい裁頭円錐形	—	並	褐色	完存	頂径不明瞭
1204	1517	須恵器	杯身	Ⅵ区包 E20-3	10.0	−	5.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	精良	良	青灰色	完存	底部外面×状ヘラ描、内面炭化物
1205	2023	須恵器	杯蓋	Ⅳ区包 C15-14	13.0	8.1	5.6	ロクロナデ、天井部外面列点文、鈕貼付	並、～3㎜長石含	良	青灰色	3/4残	外面自然釉・融着
1206	441	須恵器	甕	Ⅷ区包 F13-8	−	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面タタキ+下半ハケ・内面ハケ+ナデ	並、～2㎜長石多含	良	白灰色	口縁部欠	斜縄、下半部外面ス ス

第40表　古墳時代土坑・包含層出土遺物観察表

Ⅵ　飛鳥・奈良時代

竪穴住居21棟と土坑等を検出した。竪穴住居では7世紀代に推定されるものが4棟、8世紀代に推定されるものが17棟ある。なお、時期不明の竪穴住居3棟についてもこの章で記述する。

(1)　竪穴住居

ＳＨ９（第74・76図）　Ⅱ区中央北端で検出した。飛鳥・奈良時代の竪穴住居としては、調査区全体のなかで最も西に位置する。北壁の東部分は調査区外である。平面形は東西3.1ｍ×南北3.4ｍの長方形と推定され、床面積は10.6㎡である。検出面からの深さは12～20㎝である。南北軸方向はＮ－4°－Ｗである。4主柱穴で、柱間は東西1.7ｍ、南北2.2ｍである。主柱穴の規模は径30～45㎝、深さ7～40㎝程である。東壁中央で竈の両袖の痕跡を検出した。両袖の間は50㎝前後であり、焚口方向に焼土の広がりを確認した。竈の右脇、すなわち住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は一辺50㎝程の隅丸方形で、深さは21㎝である。

遺物の出土は少なく、土師器杯1点(1207)を図示したのみである。8世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ10（第74・76図）　Ⅱ区南東部で検出した。住居の南東部分は後世の遺構に壊される。平面形は東西2.6ｍ×南北2.3ｍの長方形と推定され、床面積は6.0㎡である。検出面からの深さは6～14㎝と浅い。南北軸方向はＮ－7°－Ｅである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は1.5ｍと推定する。主柱穴の規模は径15～35㎝程で、深さ9～15㎝程である。

遺物の出土は少なく、土師器甕1点(1208)を図示したのみである。8世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ11（第74・76図）　Ⅱ区南東部で検出した。平面形は東西2.4ｍ×南北3.3ｍの長方形で、床面積は8.3㎡である。検出面からの深さは8～19㎝と浅い。南北軸方向はＮ－1°－Ｅである。主柱穴は3基を検出したが、内1基は東壁に接するもので、主柱穴とするには疑問も残る。柱間は東西1.4ｍ、南北1.7ｍと推定される。主柱穴の規模は径20～30㎝程で、深さ8～19㎝である。東壁で僅かに焼土の広がりを確認したが、主柱穴と接する位置にあり、竈の痕跡とは考えにくい。

土師器甕(1209)、須恵器杯身(1210)が出土した。7世紀後半の竪穴住居と推定するが、8世紀に降る可能性もある。

ＳＨ12（第74図）　Ⅲ区中央で検出した。平面形は東西3.3ｍ×南北3.4ｍのほぼ正方形で、床面積は11.3㎡である。検出面からの深さは10～13㎝と浅い。南北軸方向はＮ－6°－Ｅである。4主柱穴で、柱間は東西1.7ｍ、南北2.1ｍを測る。主柱穴の規模は径15～30㎝程で、深さ5～14㎝である。

図示できる遺物の出土はなく、小片資料からではあるが、8世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ13（第74・76図）　Ⅳ区西部中央で検出した。茶畑の耕作溝が住居を縦断する。平面形は東西3.5ｍ×南北2.9ｍの長方形で、床面積は10.2㎡である。検出面からの深さは6～14㎝と浅い。南北軸方向はＮ－19°－Ｅである。北壁中央やや東寄りの位置で、竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。

土師器甕(1211～1214)や須恵器杯蓋(1215)が出土した。8世紀前半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ15・16（第74・76・79図）　Ⅳ区中央で検出した。ＳＨ15の東壁には、竈の痕跡と考えられる焼土の広がりが確認されたが、この焼土は住居の外側にも不自然な形で広がるもので、土器の出土状況等からも2基の竈が重複するものと考えられる。

ＳＨ15の平面形は東西4.1ｍ×南北4.1ｍ以上の方形を呈すると思われるが、南壁は不明瞭であり、東側で南に大きくひらく形で検出された。検出面からの深さは10㎝以内と浅い。南北軸方向はＮ－15°－Ｗである。主柱穴は3基を検出した。4主柱穴と推定され、柱間は東西2.2ｍ、南北2.5ｍを推定する。主柱穴の規模は径30～40㎝程で、深さ6～8㎝程である。東壁中央南寄りの位置で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。前述したように、この

焼土は住居の外側にも大きくはみ出している。住居内の焼土面中央に支石が直立した状態で出土した。また、住居の東壁に接する外側の位置で、検出面から40cm程浮いたレベルに、土師器長胴甕(1217)が横たわった状態で出土した。竈の煙道の可能性が考えられる。さらに、この長胴甕の南東部では、完形の土師器甕(1221)が倒立状態で出土した。支石の代用の可能性があり、焼土の広がりの状況も併せて考えると、別の竈の存在が想定される。この竈をＳＨ16とするが、竈のみの検出でプランや主柱穴、周溝等は確認されなかった。ＳＨ15の建て替え以前の住居の竈の可能性がある。焼土の右脇、住居の南東隅に不整形ではあるが深さ35cm程の土坑がある。この土坑は、ＳＨ15・16の貯蔵穴である可能性がある。

遺物は他に、住居内の焼土から土師器杯(1216)が、住居直上の包含層から須恵器杯蓋(1218・1219)が、住居外の焼土から須恵器杯身(1220)が出土している。ＳＨ15は８世紀中葉の竪穴住居と推定され、ＳＨ16はこれより古い８世紀代の竪穴住居と推定する。ＳＨ15は滑石製臼玉５点(1276 ～1280)が確認された。なお、1221は体部上半にロクロ使用と思われるナデがみられ、下半部はケズリがみられる。

ＳＨ17（第74・76図）　Ⅳ区中央部で検出した。住居の北半分近くは、耕作溝に壊され不明である。東西4.2ｍを測る。検出面からの深さは10cm程と浅い。南北軸方向はＮ－10°－Ｅである。東壁の中央と推定される位置で、竈の両袖の痕跡を確認した。両袖間は50cm程で、一面に焼土が広がる。

土師器杯(1222)・甕(1223・1224)、須恵器杯蓋(1225～1227)・杯身(1228・1229)が出土した。８世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ24（第43・76・79図）　Ⅳ区東部で検出した。住居の東側は古墳時代のＳＨ25～27と重複し、重複部分のプランは検出できなかった。南北3.4ｍを測る。焼土Ｄは検出されたレベルからＳＨ24に伴うと推定され、ＳＨ24は東壁に竈を有したと考えられる。検出面からの深さは12～21cmである。南北軸方向はＮ－5 °－Ｅである。周溝は西壁に確認された。

遺物の出土は少なく、須恵器杯身(1230)、滑石製臼玉４点(1281 ～1284)を図示したのみである。８世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ33（第74・76・79図）　Ⅳ区東部で検出した。平面形は東西4.2ｍ×南北3.9ｍのほぼ正方形で、床面積は16.4㎡である。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－13°－Ｗである。東壁の北寄りの位置で、竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。焼土面から平瓦片が出土したが、竈の袖の補強用等に使われていたものであろうか。住居の南西部に長軸100cm、短軸85cm、深さ37cm程の土坑があり、貯蔵穴の可能性がある。周溝は全周しないが４辺で確認された。

土師器甕(1231・1232)、平瓦(1233)が出土した。８世紀代の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉５点(1285 ～1289)を確認した。

ＳＨ42・43（第76図）　Ⅴ区西部北端で検出した。２棟が重複する。共に住居の東側部分の大半は、撹乱土坑に壊され失われている。また、ＳＨ42の北側部分は調査区外である。新旧関係は、切り合い関係からはＳＨ42→ＳＨ43である。ＳＨ42の検出面からの深さは28～33cmで、南北軸方向はＮ－ 3°－Ｗである。ＳＨ43は南北 4.9ｍを測る。検出面からの深さは11～31cmで、南北軸方向はＮ－13° －Ｗである。

ＳＨ42では８世紀代の須恵器杯蓋(1234)を、ＳＨ43では７世紀代と推定される土師器甕(1235)、須恵器鉢(1236)を図示した。これらは完形、もしくは残存度の高い出土遺物であるが、切り合い関係からみた住居の新旧関係とは時期が逆転しており、住居の時期比定については、なお慎重を要する。ＳＨ42出土の他の小片遺物には６世紀代のものがみられ、ＳＨ42が古墳時代の住居である可能性もあり、逆にＳＨ43が８世紀代に降る可能性もある。

ＳＨ44（第75・77・79図）　Ⅴ区北西部で検出した。平面形は一辺3.5ｍのほぼ正方形を呈すると推定され、床面積は12.3㎡となる。検出面からの深さは９～23 cm程である。南北軸方向はＮ－13°－Ｅである。主柱穴は３基を検出したが、内１基は東壁にかかるもので、主柱穴とするには疑問もある。４主柱穴と推定され、柱間は東西2.7ｍ、南北1.9 ｍを推定する。主柱穴の規模は径20～50cm程で、深さ11～19cmである。住居の中央部で焼土の広がりを検出したが、この焼土は床面から浮いており、本来的にＳＨ44に伴うものとは考えられない。

須恵器杯身(1237)、平瓦(1238)が出土した。8世紀代の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉3点(1290 ～1292)を確認した。

ＳＨ63（第75図） Ⅵ区中央北寄りの位置で検出した。北壁は後世の土坑等に壊され、不明瞭である。平面形は東西3.4ｍ×南北2.7ｍ程の長方形と推定され、床面積は9.2㎡である。検出面からの深さは10～16㎝程である。南北軸方向はＮ－36°－Ｅである。焼土の広がりを2か所検出した。北壁に竈を有したと考えられる。

遺物の出土は少なく、滑石製臼玉1点(1293)を図示したのみである。土器の小片資料からではあるが、7世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ71（第75・77図） Ⅷ区西端で検出した。住居の北側部分は粘土採掘坑に壊され、南側部分は調査区外である。東西2.6ｍを測る。南北軸方向はＮ－14°－Ｅである。深さは10㎝前後と浅い。焼土の広がりを1か所検出しており、北壁もしくは東壁に竈を付設していた可能性がある。

土師器甕(1239・1240)が出土した。7世紀代の竪穴住居と推定する。

ＳＨ84（第75・77・79図） Ⅷ区西部南端で検出した。住居の南東部分は調査区外である。平面形は一辺4.4ｍのほぼ正方形を呈すると推定され、床面積は19.4㎡となる。検出面からの深さは11～30㎝程である。南北軸方向はＮ－1°－Ｅである。北壁中央、やや東寄りの位置で竈の両袖の痕跡を検出した。両袖間は40㎝程で、一面に焼土が確認された。焼土面では、支石が直立した状態で出土した。

土師器甕(1241・1242)・甑(1243・1244)、須恵器杯身(1245 ～1247)・高杯(1248・1249)が出土した。1243と1244は接合しないが、同一個体と思われる。8世紀前半の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉15点(1294 ～1308)を確認した。

ＳＨ87（第75・77・79図） Ⅷ区中央南端で検出した。住居の南東隅が古墳時代のＳＨ88と重複するが、新旧関係は明確でない。平面形は東西3.9ｍ×南北2.9ｍの長方形で、床面積は11.4㎡である。検出面からの深さは5 ～13㎝と浅い。南北軸方向はＮ－4°－Ｗである。北壁中央やや東寄りの位置で、竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の北東隅に一辺75㎝、深さ20㎝程の隅丸方形の土坑があるが、この土坑は後世のもので貯蔵穴ではない。

遺物の出土は少なく、土師器杯(1250)、滑石製臼玉1点(1309)を図示したのみである。1250は小片ではあるが、焼土内で確認されたものである。8世紀前半の竪穴住居と推定する。

ＳＨ93（第75・77・79図） Ⅷ区中央部で検出した。東壁は後世の土坑等に壊されて不明瞭である。平面形は東西3.5ｍ×南北4.1ｍの長方形で、14.4㎡の床面積である。検出面からの深さは10㎝以内と浅い。南北軸方向はＮ－15°－Ｗである。東壁に竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。竈の右脇、住居の南東隅に貯蔵穴をもつ。平面形は長軸50㎝、短軸40㎝程の隅丸方形で、深さは26㎝を測る。

土師器杯(1251)・甕(1252)・甑(1253)が出土した。8世紀代の竪穴住居と推定する。玉類は、滑石製臼玉1点(1310)を確認した。

ＳＨ95・96（第75・77・78図） Ⅷ区東部南端で検出した。2棟が重複する。新旧関係はＳＨ96→ＳＨ95である。

ＳＨ95の平面形は東西2.9ｍ×南北4.3ｍの長方形を呈すると推定され、床面積は12.5㎡となる。検出面からの深さは10㎝以内と浅く、西壁は試掘坑内では確認されていない。南北軸方向はＮ－5°－Ｅである。東壁中央で竈の両袖の痕跡を確認した。両袖間は50㎝程で、中央には支石が直立した状態で出土した。土師器皿(1254・1255)・甕(1256 ～1258)、須恵器杯蓋(1259・1260)・杯身(1261)・甕(1262)、平瓦(1263 ～1265)が出土した。8世紀中葉の竪穴住居と推定する。

ＳＨ96は住居の南側がＳＨ95と重複する。東西は3.5ｍを測る。南北軸方向はＮ－5°－Ｅである。検出面からの深さは10㎝以内と浅い。ＳＨ96・95の床面のレベル差は殆どなく、ＳＨ95の竈の南側で検出された僅かな段差が、ＳＨ96の南壁の痕跡と考えることもできる。また、ＳＨ95の北東隅で検出された焼土は、位置的にＳＨ96の東壁中央付近と推定され、ＳＨ96の竈の痕跡の可能性もある。土師器杯(1266)・甕(1267 ～1270)が出土した。新旧関係からＳＨ95より古く位置付けられるが、この2棟は8世

紀中葉頃に建て替えが行われた竪穴住居と推定する。

ＳＨ97（第75・78図）　Ⅷ区中央南端、ＳＨ95・96の東側で検出した。飛鳥・奈良時代の竪穴住居としては、調査区全体のなかで最も東に位置する。住居の南側部分は調査区外である。東西4.1ｍを測る。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－13°－Ｅである。東壁で竈の痕跡と考えられる焼土の広がりを確認した。

土師器甕(1272・1273)、須恵器杯身(1274・1275)が出土した。８世紀代の竪穴住居と推定する。なお、1275は９世紀に降る可能性もある。

(2)　時期不明の竪穴住居

ＳＨ18（第７図）　Ⅳ区中央部で検出した。竈の痕跡の可能性がある焼土の広がりと、支石の可能性がある自然石を確認した。プランや主柱穴、周溝等は検出されなかった。

ＳＨ46（第８図）　Ⅴ区東部北端で検出した。住居の南側部分の一部を確認したのみである。東西5.4ｍを測る。検出面からの深さは3 ～13cmと浅い。南北軸方向はＮ－15°－Ｗである。

ＳＨ49（第74図）　Ⅵ区西部北端で検出した。住居の南側部分の一部を確認したのみである。東西3.9ｍを測る。検出面からの深さは10cm以内と浅い。南北軸方向はＮ－８°－Ｗである。

(3)　その他

ＳＺ１（第75・80図）　Ⅲ区東部西寄りの位置で、径50～60cm程の範囲で焼土の広がりを検出した。焼土の南側には、残存度の比較的高い須恵器杯蓋(1311・1312)・杯身(1313 ～1315)が確認された。８世紀前半の竪穴住居があった可能性がある。

ＳＸ13（第73・80図）　Ⅴ区南西部で検出した。平面形は長軸2.0ｍ、短軸1.0ｍの楕円形で、深さ25～35cmを測る。底は２段になっており、東部で深い。深い部分の底近くから、須恵器台付細頸瓶(1316)と長さ25cm程の自然石が２個出土した。1316は頸部から上を欠損しており、故意に打ち欠かれた可能性がある。骨片等は確認されていないが、８世紀末葉から９世紀初頭の土壙墓の可能性がある。

ＳＫ５（第80図）　Ⅱ区南東部で検出した。平面形は長軸2.8ｍ、短軸1.2ｍの楕円形で、深さ30cm程を測る。弥生時代の方形周溝墓群に近接してみられ、形態も似るが、奈良時代の土坑である。土師器椀(1317)、須恵器杯蓋(1318)が出土した。

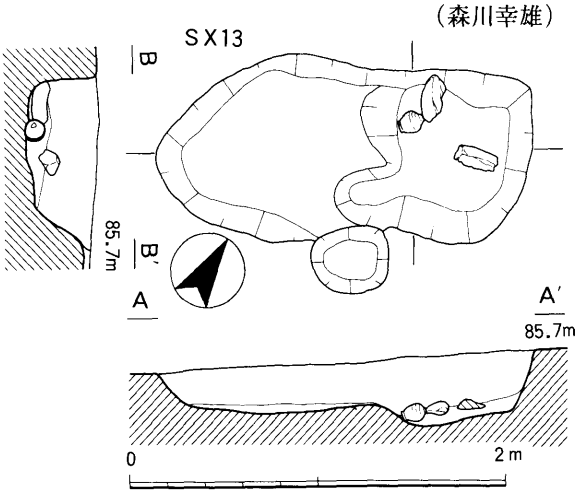
ＳＫ11（第80図）　Ⅵ区西部中央で検出した。平面形は長軸が3.0ｍ、短軸が2.2ｍ程の不定形な土坑で、深さ60cmを測る。土師器皿(1319)・甕（1320）・甑(1321)、須恵器杯身(1322)・薬壷蓋(1323)が出土した。８世紀後半の土坑と推定する。骨片等は確認されていないが、土壙墓の可能性もある。

ＳＫ12（第80図）　Ⅵ区西部中央、ＳＫ11の東側に近接して検出された。平面形は長軸2.0ｍ、短軸1.5ｍの不定形な土坑で、深さ30cmを測る。須恵器杯蓋(1324)が出土した。８世紀後半の土坑と推定する。ＳＫ11と同様に土壙墓の可能性もある。

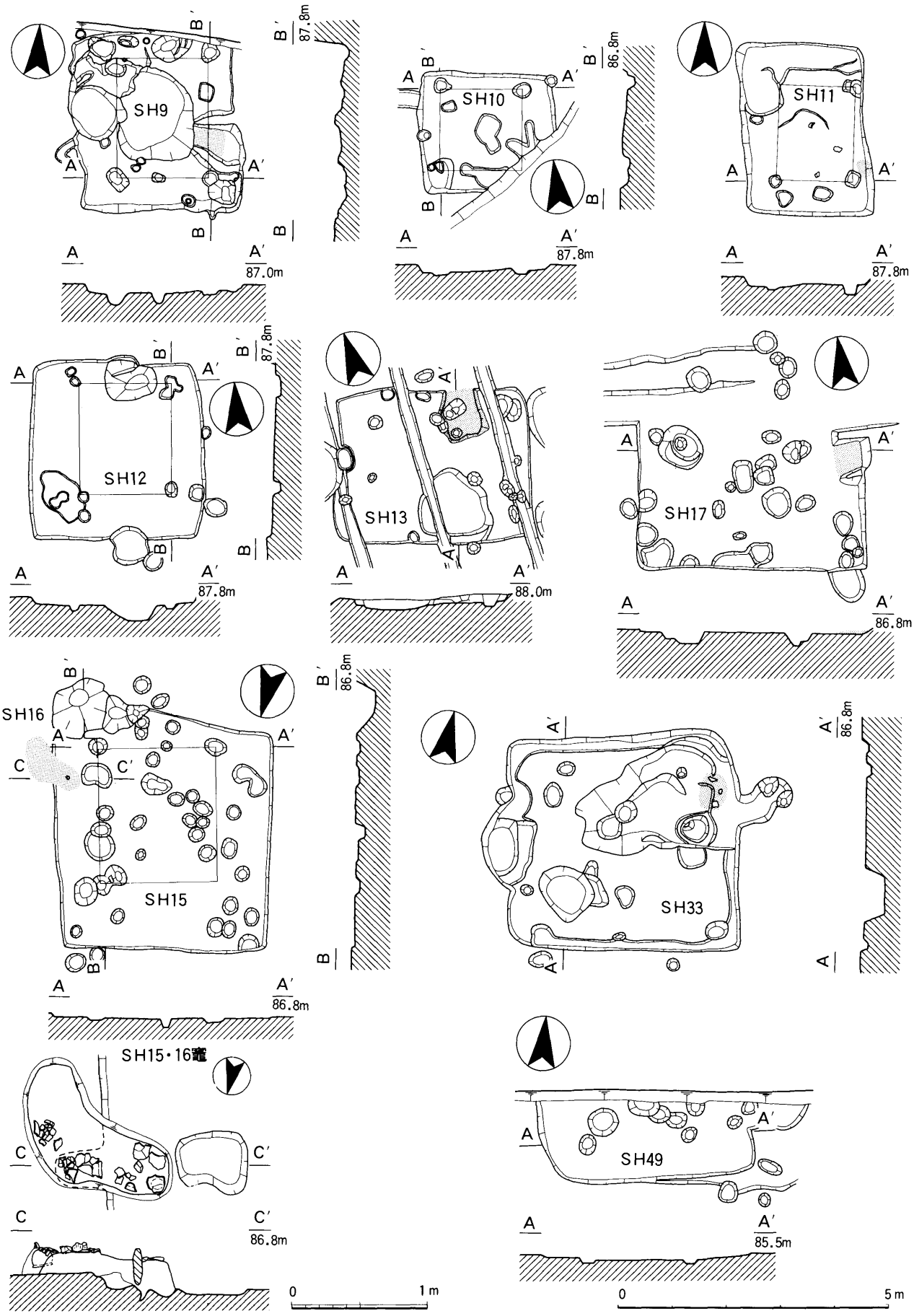
ＳＫ14（第80図）　Ⅷ区東部中央で検出した。平面形は東西4.1m×南北3.5mの隅丸方形で、深さは最深部で15cm程を測るが、底は必ずしも平坦ではなく、埋土の状況からも複数の土坑が重複している可能性がある。土坑の南東部分に焼土が確認された。土師器皿(1325)・甕(1326 ～1328)・甑(1329)、須恵器杯蓋(1330・1331)・杯身(1332・1333)、丸瓦(1334・1335）等、８世紀代の遺物が出土している。

包含層出土遺物（第80図）　須恵器横瓶(1336)・長頸壷(1337)・把手付薬壷(1338)、鉄製紡錘車(1339)を図示した。1338は奈良時代の古墓の存在を推定させる。1339は僅かに紡茎が確認される。残存する紡茎の断面は方形であるが、上下は断定できない。

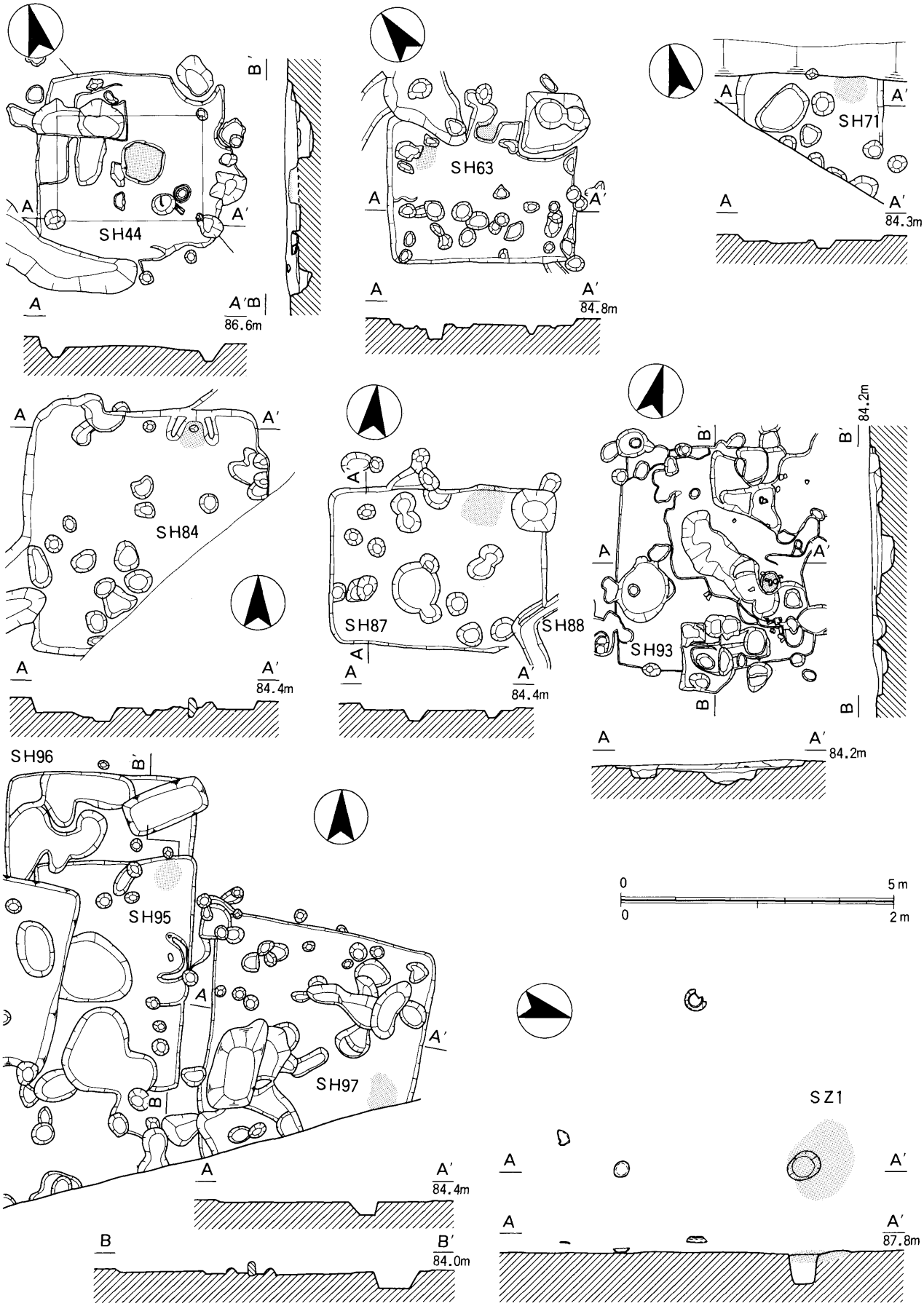
（森川幸雄）



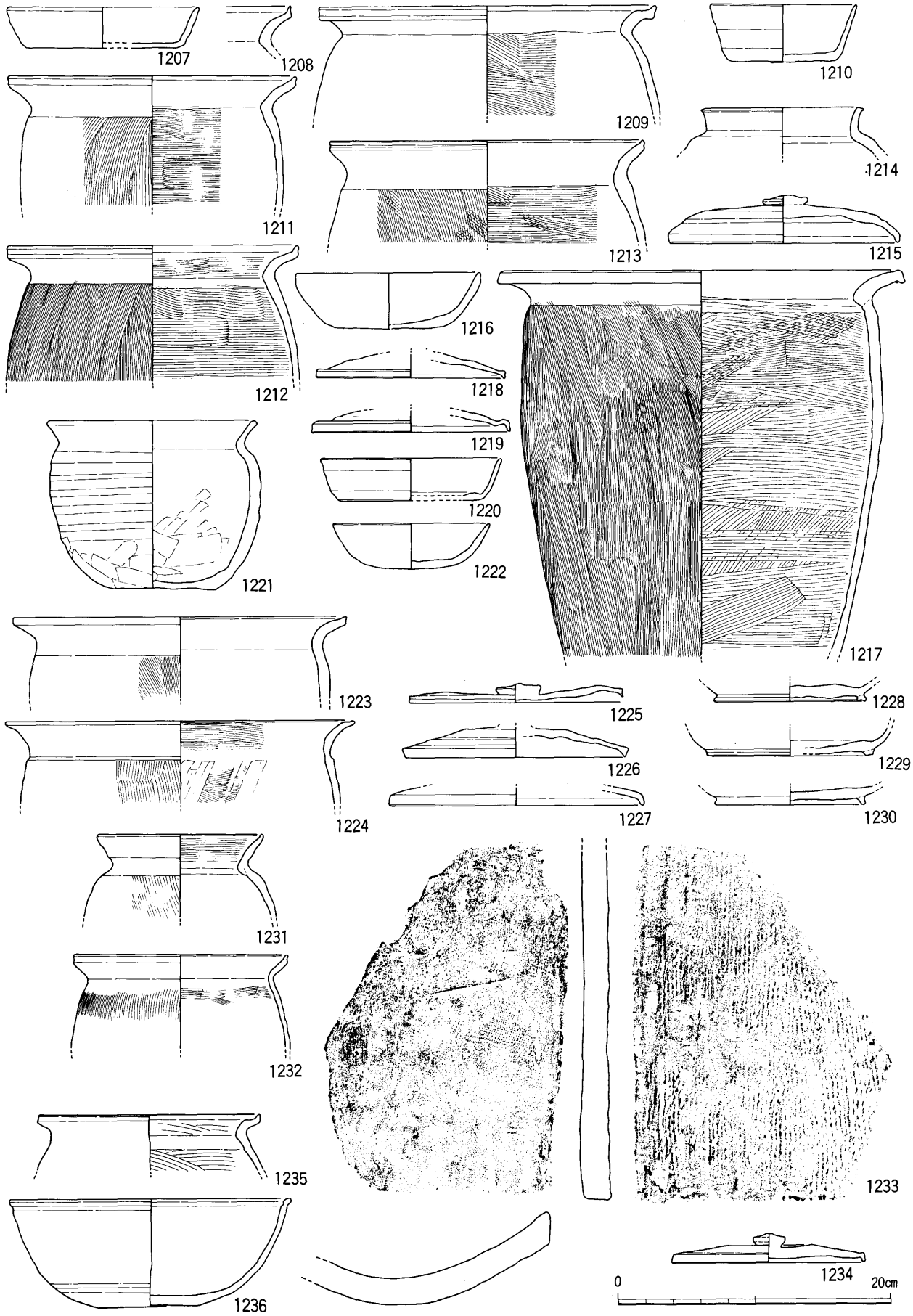
第73図　ＳＸ13実測図（１：40）



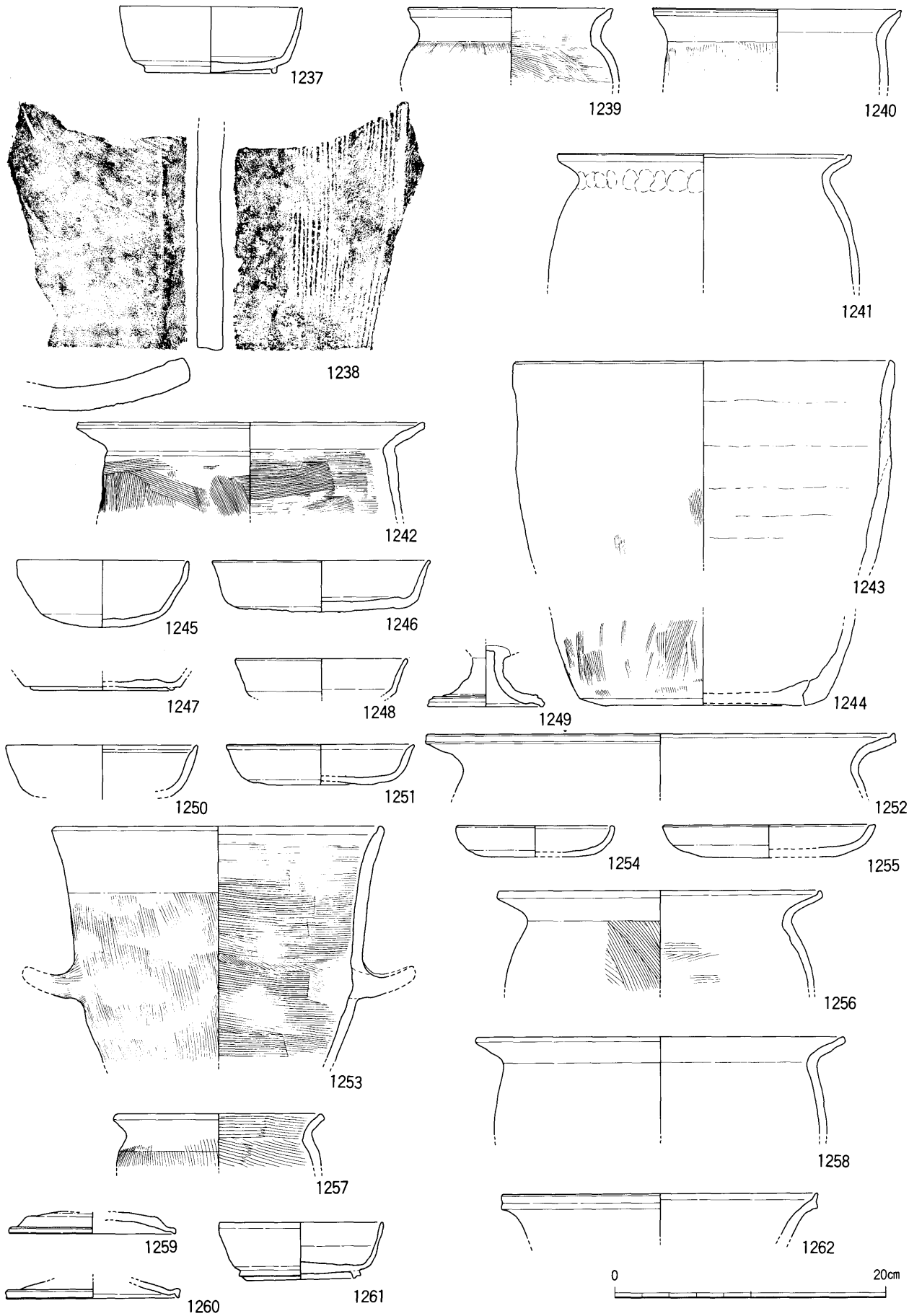
第74図　ＳＨ９～13・15～17・33・49実測図（ＳＨ15・16竈は１：40、他は１：100）



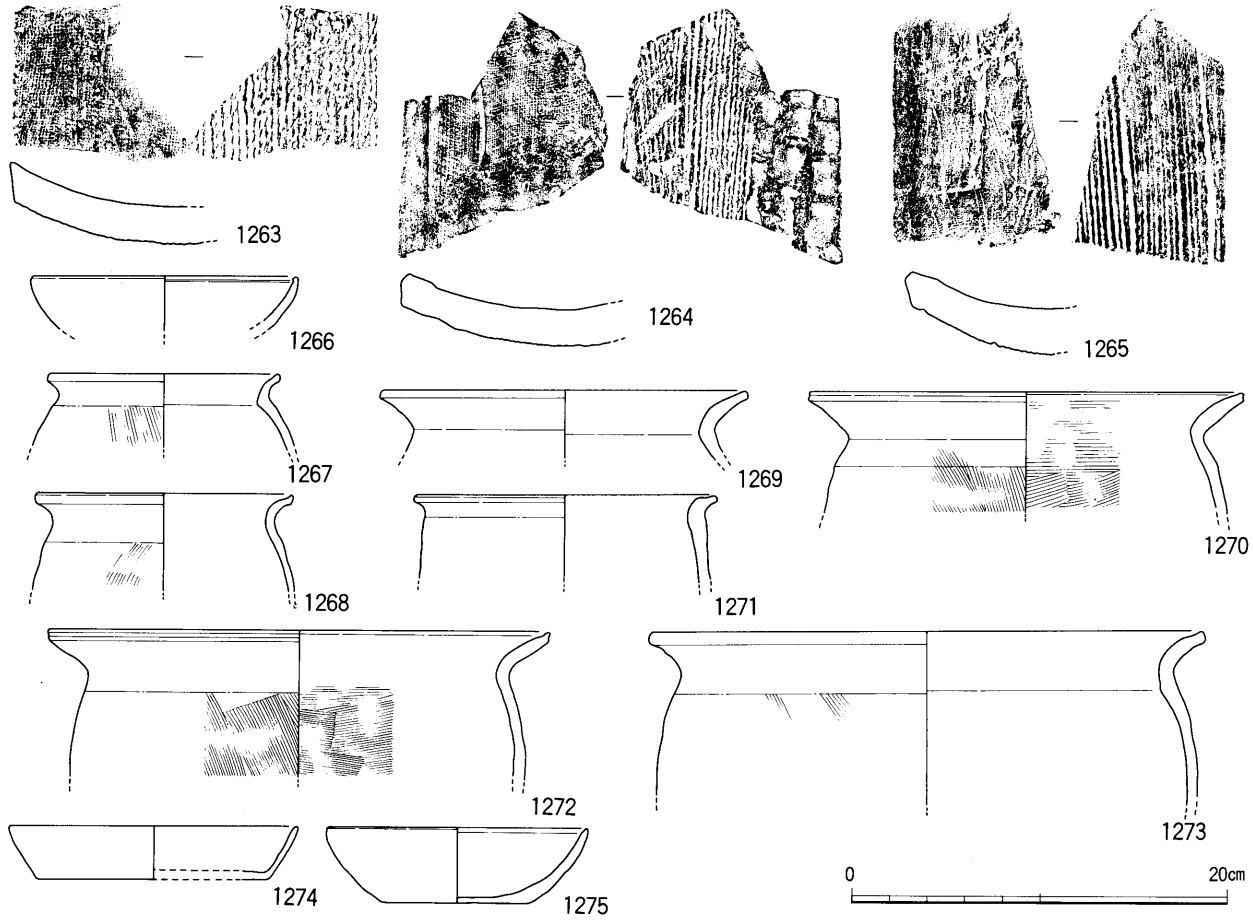
第75図　ＳＨ44・63・71・84・87・93・95～97、ＳＺ１実測図（ＳＺ１は１：40、他は１：100）



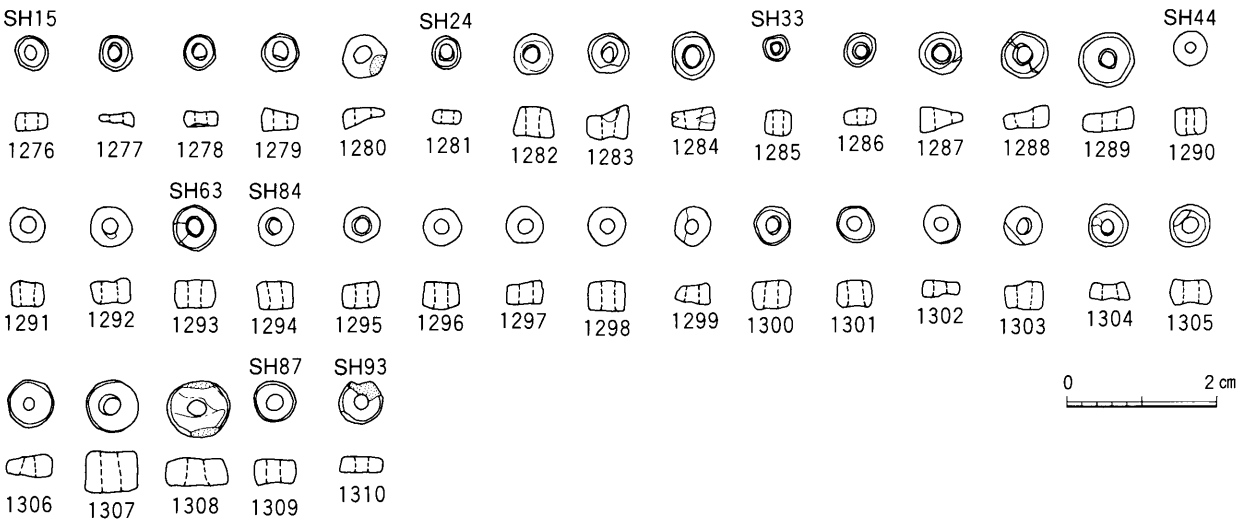
第76図　SH9～11・13・15～17・24・33・42・43出土遺物実測図（1：4）　1207＝SH9、1208＝SH10、1209・1210＝SH11、1211～1215＝SH13、1216～1220＝SH15、1221＝SH16、1222～1229＝SH17、1230＝SH24、1231～1233＝SH33、1234＝SH42、1235・1236＝SH43



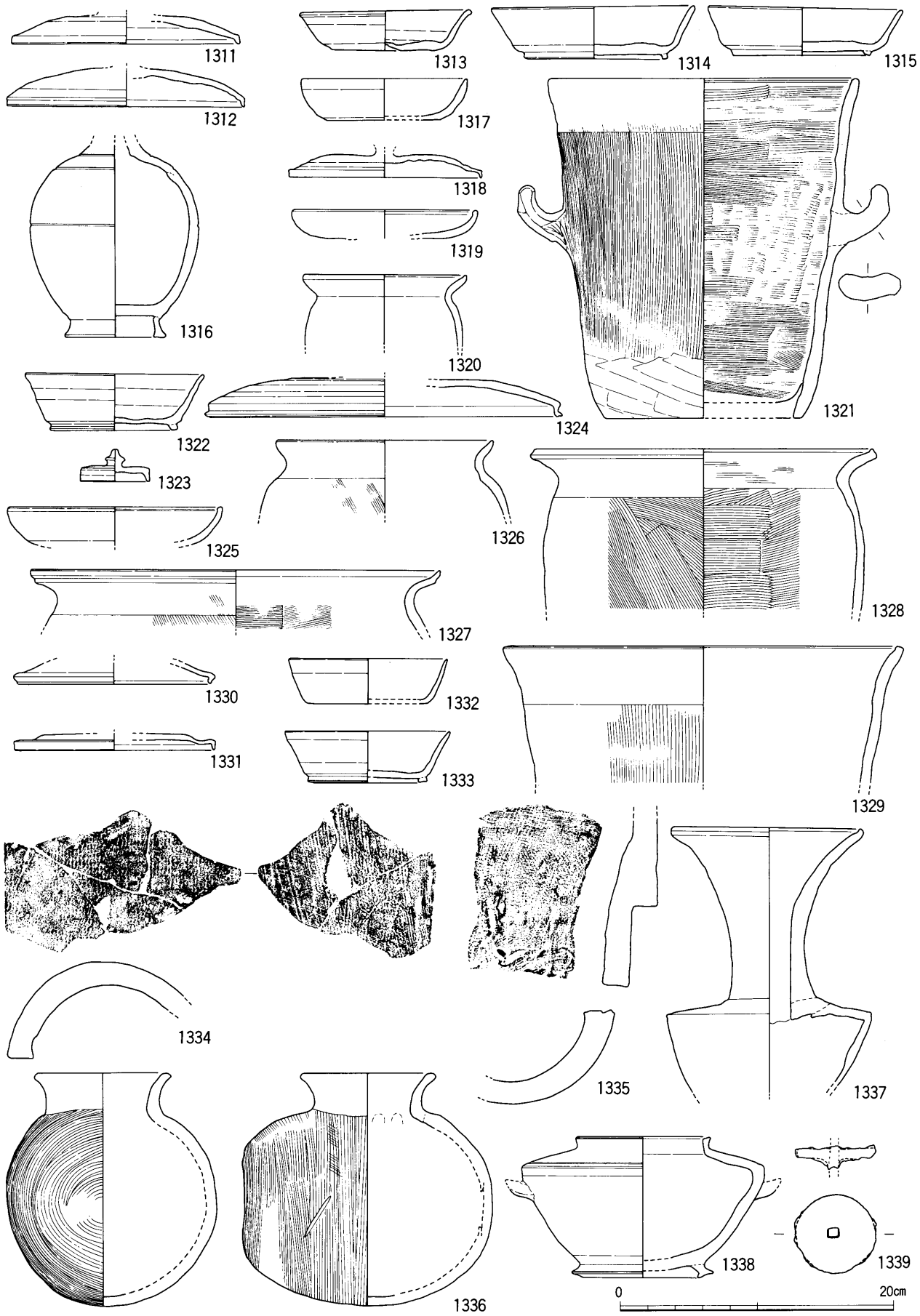
第77図　SH44・71・84・87・93・95出土遺物実測図（1：4）　1237・1238＝SH44、1239・1240＝SH71、1241～1249＝SH84、1250＝SH87、1251～1253＝SH93、1254～1262＝SH95



第78図　ＳＨ95～97出土遺物実測図（１：４）　1263～1265＝ＳＨ95、1266～1270＝ＳＨ96、1271～1275＝ＳＨ97



第79図　竪穴住居出土滑石製臼玉実測図（１：１）



第80図　ＳＺ１、ＳＸ13、ＳＫ５・11・12・14、包含層出土遺物実測図（1339は１：３、他は１：４）
1311～1315＝ＳＺ１、1316＝ＳＸ13、1317・1318＝ＳＫ５、1319～1323＝ＳＫ11、1324＝ＳＫ12、1325～1335＝ＳＫ14、1336～1339＝包含層

竪穴番号	規模			主柱穴柱間		南北軸方向	竈	貯蔵穴	周溝	出土滑臼	時期	備考
	東西m	南北m	面積m²	東西m	南北m							
9	3.1	3.4	10.6	1.7	2.2	N-4°-W	東	南東隅	−	−	8C	
10	2.6	2.3	6.0	(1.5)	(1.5)	N-7°-E	−	−	−	−	8C	
11	2.4	3.3	8.3	(1.4)	(1.7)	N-1°-E	−	−	−	−	7C後半	
12	3.3	3.4	11.3	1.7	2.1	N-6°-E	−	−	−	−	8C	
13	3.5	2.9	10.2	−	−	N-19°-E	北	−	−	−	8C前半	
15	4.1	4.1以上	−	(2.2)	(2.5)	N-15°-W	東	南東隅?	−	5	8C中葉	支石
16	−	−	−	−	−	−	有	南東隅?	−	−	8C前半～中葉	SH15より古い
17	4.2	−	−	−	−	N-10°-E	東	−	−	−	8C	
24	−	3.4	−	−	−	N-5°-E	東	−	西	4	8C	SH25～27より新しい
33	4.2	3.9	16.4	−	−	N-13°-W	東	南西隅	4辺	5	8C	
42	−	−	−	−	−	N-3°-W	−	−	−	−	8C?	切り合い状況からはSH42の方が古く、時期については問題が残る
43	−	4.9	−	−	−	N-13°-W	−	−	−	−	7C?	
44	3.5	3.5	(12.3)	(2.7)	(1.9)	N-13°-E	−	−	−	3	8C	
63	3.4	2.7	9.2	−	−	N-36°-E	北	−	−	1	7C	
71	2.6	−	−	−	−	N-14°-E	北	−	−	−	7C	竈は東壁の可能性も有
84	4.4	4.4	(19.4)	−	−	N-1°-E	北	−	−	15	8C前半	支石
87	3.9	2.9	11.4	−	−	N-4°-W	北	南東隅	−	1	8C前半	
93	3.5	4.1	14.4	−	−	N-15°-W	東	−	−	1	8C	
95	2.9	4.3	(12.5)	−	−	N-5°-S	東	−	−	−	8C中葉	支石
96	3.5	−	−	−	−	N-5°-E	東	−	−	−	8C前半～中葉	SH95より古い
97	4.1	−	−	−	−	N-13°-E	東	−	−	−	8C	

第41表　飛鳥・奈良時代竪穴住居一覧表

註＝表中の「滑臼」は滑石製臼玉

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1207	40	土師器	杯	SH9	13.8	−	3.0	風化のため調整不明	良、微砂粒含	良	赤褐色	1/4残	風化
1208	212	土師器	甕	SH10	−	−	−	口縁部ヨコナデ	良、微砂粒含	良	橙色	小片	
1209	34	土師器	甕	SH11	23.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面風化のため調整不明・内面ハケ	並、～6㎜小石多含	並	暗橙色	口縁部1/5残	風化
1210	32	須恵器	杯身	SH11	10.6	−	4.2	ロクロナデ	精良	並	灰色	1/2残	
1211	1467	土師器	甕	SH13	20.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	良、金雲母含	良	明黄褐色	口縁部1/10残	
1212	1462	土師器	甕	SH13	21.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部ハケ	良、4㎜程砂粒若干含	良	淡黄褐色	口縁部1/2残	
1213	1470	土師器	甕	SH13	(22.8)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	良、雲母若干含	良	明黄褐色	口縁部1/6残	
1214	1457	土師器	甕	SH13	11.2	−	−	口縁部ヨコナデ	良、～2㎜砂粒含	不良	灰白色	口縁部1/6残	二次焼成で変色か?
1215	1454	須恵器	杯蓋	SH13	16.6	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・鈕貼付	良、5㎜程小石含	良	乳灰色	1/2残	天井部内面磨滅
1216	1039	土師器	椀	SH15	13.7	−	4.1	風化のため調整不明	並、～3㎜砂粒含	並	淡黄褐色	9/10残	風化
1217	1049	土師器	甕	SH15	28.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	緻密	並	暗肌色	1/3残	
1218	1526	須恵器	杯蓋	SH15	13.6	−	−	ロクロナデ	並、～1㎜砂粒若干含	良	薄灰色	1/5残	焼膨れ、外面自然釉

第42表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表（1）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1219	1527	須恵器	杯蓋	SH15	14.4	−	−	ロクロナデ	並、~1mm砂粒若干含	良	暗灰色	1/10残	
1220	1525	須恵器	杯身	SH15	13.0	10.2	3.1	ロクロナデ	並、~1mm砂粒若干含	良	灰色	口縁部1/10残	
1221	1624	土師器	甕	SH16	15.0	8.0	12.0	口縁部ヨコナデ、体部上半ロクロナデ・下半ケズリ、底部ケズリ	やや粗、~2mm砂粒含	良	暗橙色	完存	
1222	1011	土師器	椀	SH17	11.4	−	3.3	風化のため調整不明	並、~3mm砂粒含	並	淡褐色	1/4残	風化著しい
1223	1012	土師器	甕	SH17	24.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ?	並、~3mm砂雲母多含	並	褐色	口縁部1/8残	風化
1224	1013	土師器	甕	SH17	25.2	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ハケ+ケズリ	精良	並	淡褐色	口縁部1/8残	
1225	1009	須恵器	杯蓋	SH17	15.7	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・鈕貼付	並、~3mm砂粒含	不良	暗青灰色	4/5残	歪み大、融着
1226	1015	須恵器	杯蓋	SH17	16.0	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	良	並	灰色	1/8残	
1227	1522	須恵器	杯蓋	SH17	18.4	−	−	ロクロナデ?	並、細砂粒少含	不良	肌色	1/5残	風化
1228	1521	須恵器	杯身	SH17	−	11.0	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・内面一方向ナデ、貼付高台	並、細砂粒少含	良	暗青灰色	底部4/5残	焼膨れ
1229	1010	須恵器	杯身	SH17	−	11.2	−	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	並、細砂粒多含	不良	暗灰色	底部1/4残	
1230	1191	須恵器	杯身	SH24	−	11.0	−	風化のため調整不明、貼付高台	並	不良	淡橙色	底部4/5残	風化著しい
1231	1348	土師器	甕	SH33	12.0	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	良、2mm程砂粒含	良	淡赤褐色	口縁部1/7残	
1232	1349	土師器	甕	SH33	14.5	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	良、微砂粒多含	良	暗茶褐色	口縁部1/3残	外面スス
1233	1350	瓦	平瓦	SH33	−	−	−	端面ケズリ、凹面布目痕、凸面タタキ痕	良、微砂粒多含	並	灰黒色	2/3残	
1234	848	須恵器	杯蓋	SH42	14.2	−	2.2	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ・鈕貼付	良、~2mm砂粒含	良	灰色	ほぼ完存	
1235	840	土師器	甕	SH43	16.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面風化のため調整不明・内面ハケ	並、細砂粒含	良	暗橙色	口縁部1/4残	内面炭化物、風化
1236	838	須恵器	鉢	SH43	20.7	7.6	7.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	並、細砂粒少含	不良	暗黄橙色	1/7残	
1237	732	須恵器	杯身	SH44	13.2	9.8	4.9	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・貼付高台	並、砂粒多含	不良	淡黄灰色	口縁部僅かに残	
1238	734	瓦	平瓦	SH44	−	−	−	端面ケズリ、凹面布目痕、凸面タタキ痕	並、砂粒多含	良	橙色	1/4残	
1239	162	土師器	甕	SH71	15.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	並　細砂雲母含	並	褐色	口縁部1/3残	
1240	163	土師器	甕	SH71	(18.2)	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	並　~2mm砂雲母多含	並	暗橙色	小片	風化
1241	234	土師器	甕	SH84	21.4	−	−	口縁部指圧+ヨコナデ、体部風化のため調整不明	並、細砂粒多含	並	淡黄褐色	口縁部1/4残	風化
1242	233	土師器	甕	SH84	25.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	並、細砂雲母多含	並	橙色	口縁部2/3残	
1243	236	土師器	甑	SH84	28.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ+ナデ・内面ナデ	並、微砂粒雲母多含	並	橙色	口縁部1/5残	接合痕跡、1244と同一個体か
1244	236	土師器	甑	SH84	−	−	18.8	外面ハケ・内面ナデ	並、微砂粒雲母多含	並	橙色	底部1/3残	1243と同一個体か
1245	227	須恵器	杯身	SH84	12.4	−	4.9	ロクロナデ、底部外面ケズリ	並、微砂粒多含	並	灰白色	口縁部1/4残	
1246	228	須恵器	杯身	SH84	16.0	−	3.8	ロクロナデ、底部ヘラ切り未調整	並、微砂粒雲母含	不良	淡黄色	1/2残	
1247	230	須恵器	杯身	SH84	−	(10.0)	−	ロクロナデ、底部外面ケズリ・貼付高台	並、微砂多含	不良	灰色	小片	
1248	229	須恵器	高杯	SH84	12.6	−	−	ロクロナデ	並、微細砂粒含	良	青灰~黒色	口縁部1/4残	
1249	231	須恵器	高杯	SH84	−	8.4	−	ロクロナデ	良、微砂粒若干含	並	灰色	脚部4/5残	
1250	106	土師器	杯	SH87	(14.0)	−	−	ナデ、口縁部ヨコナデ	良、細砂金雲母含	並	橙色	1/9残	
1251	217	土師器	皿	SH93	13.6	−	3.0	ナデ、口縁部ヨコナデ	密、~1mm砂粒少含	良	明赤褐色	1/4残	
1252	238	土師器	甕	SH93	(34.2)	−	−	口縁部ヨコナデ	粗、1~2mm小石多含	良	黄褐色	口縁部1/10残	風化
1253	237	土師器	甑	SH93	23.8	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	粗、2~5mm小石多含	良	暗黄橙色	2/3残	
1254	184	土師器	皿	SH95	(11.2)	−	2.3	ナデ、口縁部ヨコナデ	密、微砂粒少含	良	黄橙色	1/8残	
1255	185	土師器	皿	SH95	15.4	−	2.4	ナデ、口縁部ヨコナデ	密、微砂粒少含	良	橙色	1/7残	風化
1256	56	土師器	甕	SH95	23.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	並、~2mm砂金雲母含	並	浅黄橙色	口縁部1/5残	
1257	186	土師器	甕	SH95	14.8	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部ハケ	密、~2mm小石少含	良	明黄褐色	口縁部1/4残	

第43表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表（2）

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1258	55	土師器	甕	SH95	27.0	−	3.0	風化のため調整不明	並、～2㎜砂金雲母含	並	浅黄色	口縁部1/8残	風化著しい
1259	213	須恵器	杯蓋	SH95	12.1	−	−	ロクロナデ、天井部外面に一部ロクロケズリが認められる	密、微砂粒少含	良	灰黄色	1/4残	
1260	54	須恵器	杯蓋	SH95	12.6	−	−	ロクロナデ	良	良	灰色	1/9残	
1261	52	須恵器	杯身	SH95	11.9	−	4.2	ロクロナデ、外面ロクロケズリ、貼付高台	並、1㎜程長石若干含	良	暗黄黒色	口縁部1/5残	
1262	212	須恵器	甕	SH95	23.0	−	−	ロクロナデ	密、～3㎜小石少含	良	灰色	小片	
1263	58	瓦	平瓦	SH95	−	−	−	端面ケズリ、凹面布目痕、凸面縄叩痕	並、微砂粒含	並	浅黄橙色	小片	
1264	187	瓦	平瓦	SH95	−	−	−	端面ケズリ、凹面布目痕、凸面縄叩痕	並	良	黒灰色	小片	
1265	57	瓦	平瓦	SH95	−	−	−	端面ケズリ、凹面布目痕、凸面縄叩痕	並、微砂粒雲母含	並	橙色	小片	
1266	175	土師器	杯	SH96	14.0	−	−	風化のため調整不明	密、～1㎜砂雲母含	良	明黄褐色	1/8残	風化
1267	173	土師器	甕	SH96	12.0	−	4.2	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面風化のため調整不明	やや粗、2㎜程砂多含	良	暗褐色	口縁部1/5残	風化
1268	174	土師器	甕	SH96	12.5	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面風化のため調整不明	並、微砂粒多含	良	暗黄褐色	口縁部1/4残	
1269	176	土師器	甕	SH96	(19.0)	−	−	風化のため調整不明	やや粗、～3㎜砂多含	良	淡黄色	小片	風化
1270	172	土師器	甕	SH96	22.8	−	−	口縁部内面ハケ+内外面ヨコナデ、体部ハケ	密、～3㎜砂粒多含	良	黄褐色	口縁部1/10残	
1271	183	土師器	甕	SH97	(16.0)	−	−	剝離・ヨコナデ、風化のため調整不明	並、～2㎜砂粒多含	良	暗橙色	頸部1/8残	剝離・風化
1272	180	土師器	甕	SH97	26.3	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	密、～2㎜砂粒少含	良	淡黄色	口縁部1/8残	
1273	181	土師器	甕	SH97	29.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	やや粗、～3㎜砂多含	良	黄橙色	口縁部1/8残	風化
1274	177	須恵器	杯身	SH97	(15.0)	−	2.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	密、微砂粒少含	良	黄灰色	小片	
1275	179	須恵器	杯身	SH97	13.6	−	4.0	風化のため調整不明	密、微砂粒少含	不良	灰白色	1/2残	磨滅

第44表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土遺物観察表（3）

報告番号	整理番号	出土竪穴	色調	法量(㎜) 長さ	径
1276	1608	SH15	灰白色	2.0	4.0
1277	1607	SH15	灰白色	2.0	4.5
1278	1609	SH15	灰白色	2.0	4.5
1279	1610	SH15	暗緑灰色	3.5	5.0
1280	1611	SH15	暗緑灰色	3.0	6.0
1281	1593	SH24	淡褐灰色	2.0	4.0
1282	2105	SH24	暗青色	4.0	5.5
1283	1591	SH24	灰色	4.5	5.5
1284	1592	SH24	暗緑灰色	3.0	5.5
1285	1562	SH33	明黄灰色	3.0	3.5
1286	1566	SH33	黒色	2.0	4.0
1287	1565	SH33	暗緑灰色	4.0	6.0
1288	1559	SH33	黒色	2.5	6.0
1289	1569	SH33	黒色	3.5	7.5
1290	995	SH44	暗青灰色	3.5	5.0
1291	996	SH44	暗緑灰色	3.5	4.5
1292	997	SH44	緑灰色	3.5	5.5
1293	1719	SH63	暗緑灰色	4.0	6.0

報告番号	整理番号	出土竪穴	色調	法量(㎜) 長さ	径
1294	631	SH84	緑灰色	2.0	5.0
1295	619	SH84	灰緑色	3.5	5.0
1296	620	SH84	暗灰色	4.0	5.0
1297	618	SH84	灰緑色	3.0	5.0
1298	621	SH84	灰緑色	4.0	5.0
1299	622	SH84	緑灰色	3.0	5.5
1300	627	SH84	灰緑色	4.0	5.0
1301	630	SH84	暗緑灰色	3.5	5.0
1302	628	SH84	緑灰色	2.0	5.0
1303	629	SH84	暗緑灰色	4.0	5.5
1304	626	SH84	緑灰色	2.5	5.5
1305	625	SH84	緑灰色	3.5	5.5
1306	632	SH84	明黄灰色	2.6	6.0
1307	624	SH84	明黄灰色	5.5	7.0
1308	623	SH84	暗灰色	3.5	8.5
1309	607	SH87	灰緑色	3.0	5.5
1310	654	SH93	暗緑灰色	2.0	6.0

第45表　飛鳥・奈良時代竪穴住居出土滑石製臼玉一覧表

報告番号	整理番号	種類	器種	出土遺構	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1311	711	須恵器	杯蓋	SZ1	16.6	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、細砂粒多含	不良	灰白色	口縁部1/4残	風化
1312	303	須恵器	杯蓋	SZ1	17.2	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、~2mm砂粒少含	並	灰色	口縁部1/4残	
1313	714	須恵器	杯身	SZ1	11.6~13	−	2.6~3.6	ロクロナデ、底部外面ヘラ切り調整	並、細砂粒多含	良	灰白色	完存	歪み大
1314	696	須恵器	杯身	SZ1	14.6	10.5	3.7	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・貼付高台	並、細砂粒多含	良	灰白色	3/4残	
1315	698	須恵器	杯身	SZ1	14.2	10.2	3.5	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・貼付高台	並、細砂粒含	良	灰色	口縁部1/2残	
1316	730	須恵器	台付細頸瓶	SX13	−	7.2	−	ロクロナデ、体部外面下半部ロクロケズリ、底部外面ロクロケズリ・貼付高台	並、微砂粒多含	並	灰色	口縁部欠	自然釉、焼脹れ
1317	73	土師器	杯	SK5	12.0	8.0	3.1	ナデ	並、細砂粒多含	並	橙色	口縁部1/5残	
1318	72	須恵器	杯蓋	SK5	13.8	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ、鈕剝離	並、~4mm砂粒含	並	灰色	口縁部1/2残	
1319	1086	土師器	皿	SK11	13.6	−	2.2	風化のため調整不明	並、細砂粒含	並	橙色	口縁部1/3残	風化
1320	1087	土師器	甕	SK11	12.8	−	−	口縁部ヨコナデ、他は風化により調整不明	並、~2mm砂粒含	不良	淡褐色	口縁部1/5残	風化
1321	1090	土師器	甑	SK11	22.4	14.2	25.0	口縁部ヨコナデ、体部外面上半ハケ下半ケズリ・内面ハケ	並、~2mm砂粒含	良	淡肌色	1/2残	
1322	1088	須恵器	杯身	SK11	12.8	8.4	4.2	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ・貼付高台	並、~3mm砂粒少含	良	暗黄黒色	口縁部1/2残	
1323	1085	須恵器	薬壺蓋	SK11	4.9	−	2.4	ロクロナデ	やや粗、細砂粒多含	良	暗灰色	ほぼ完存	
1324	1089	須恵器	杯蓋	SK12	25.0	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	並、~3mm砂粒含	良	茶灰色	口縁部1/2残	
1325	255	土師器	皿	SK14	(15.3)	−	−	口縁部ヨコナデ	密、微砂粒少含	良	暗褐色	小片	
1326	252	土師器	甕	SK14	15.6	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ?	密、微砂粒多含	良	灰褐色	頸部1/6残	風化
1327	272	土師器	甕	SK14	29.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	密、微砂粒雲母含	良	淡黄色	口縁部1/10残	
1328	273	土師器	甕	SK14	24.4	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケ	密、~4mm砂粒含	良	明黄褐色	口縁部1/6残	
1329	254	土師器	甑	SK14	28.2	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケ・内面ナデ	密、微砂粒雲母含	良	明黄褐色	口縁部1/12残	
1330	251	須恵器	杯蓋	SK14	14.0	−	−	ロクロナデ	密、微砂粒少含	良	灰色	口縁部1/4残	
1331	245	須恵器	杯蓋	SK14	14.4	−	−	ロクロナデ、天井部外面ロクロケズリ	密、~2mm砂粒少含	良	灰色	口縁部1/2残	
1332	250	須恵器	杯身	SK14	11.4	−	3.3	ロクロナデ	密、~2mm砂粒少含	良	灰色	口縁部1/7残	
1333	249	須恵器	杯身	SK14	11.9	7.8	3.8	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ、貼付高台	密、~2mm砂粒少含	良	灰オリーブ色	高台1/3残	
1334	276	瓦	丸瓦	SK14	−	−	−	端部ヘラ切り未調整、凹面布目、凸面縄目後ナデ	密、~3mm砂粒少含	不良	暗黄橙色	小片	
1335	275	瓦	丸瓦	SK14	−	−	−	端部ヘラ切り未調整、凹面布目、凸面ナデ	密、~3mm砂粒少含	不良	暗黄橙色	小片	玉縁
1336	442	須恵器	横瓶	包Ⅷ区 F14-6	9.8	−	17.0	口縁部ヨコナデ、体部外面カキメ・内面ロクロナデ、円盤充填	密、~2mm砂粒少含	並	白灰色	口縁部2/3欠	
1337	301	須恵器	長頸壺	包Ⅲ区 B14-15	14.2	−	−	ロクロナデ	並、~5mm砂粒含	並	灰色	底部欠	
1338	429	須恵器	把手付薬壺	包Ⅷ区 F9-10	19.5	8.3	10.3	ロクロナデ、貼付高台	密、微砂粒含	良	灰色	1/3残	
1339	565	鉄製品	紡錘車	包Ⅷ区 F12-21	紡輪径4.3			残存する紡茎の断面は方形	—	—	—	紡輪残 紡茎僅かに残	上下不明

第46表　飛鳥・奈良時代土坑等出土遺物観察表

Ⅶ　平安時代～室町時代

掘立柱建物は45棟、柱列は４列を検出している。

時期的には、平安時代後期に属するものが３棟、残りの大半は、明確に時期決定できる出土遺物を伴うものが少ないが鎌倉時代以降のものであろう。

棟方向は東西棟が大半を占め、柱穴の大きさは大半が0.3ｍ前後である。柱並びや柱穴の深さは一定でないが、概ね柱間は1.5～2.0ｍ・深さは0.3ｍ前後である。平面規模は大半が４間×３間程度の規模であるが、中には土坑を伴う大規模な建物も存在する。それらの性格は不確定であるが、やはり当該期の中心的な存在であったことは想像に難くない。

柱列は、建物としてまとまらなかった小規模なものがⅡ区から３条、明らかに区画する意識を持っている規模の大きなものがⅥ区から１条検出されているが、いずれもその性格は不明である。

中世墓は８基を検出した。大半の７基がⅣ区に位置し、１基のみⅧ区にある。人骨が検出されたのはＳＸ18のみであるが、形態や遺物の出土状況から、いずれも中世墓と考えられる。

井戸は６基検出しているが、大半の５基がＦ区からで、１基のみがＨ区からの検出である。いずれも12世紀後半以降の時期のものである。

土坑は71基を数える。その内、建物に付属すると思われる土坑は12基あり、またⅥ区東側には大土坑群が広がる。

この時期にあたる溝は、大小含めて33条を数える。土坑に付属する排水溝（ＳＤ４・５・７・８・16）や、地域を区画すると思われる溝（ＳＤ６・９～15・20～27・30～33）などがある。区画溝的なものは南北もしくは東西に走っており、南北溝は概ね東西60ｍ等間に走る。当該期の大鼻集落を考える上で、興味深い点であろう。

(1)　掘立柱建物と柱列

ＳＢ１（第82・108 図）　Ⅰ区東端に位置する、桁行４間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は東で南に20度振れる東西棟である。

柱掘形は0.2～0.3ｍの不整円形を呈し、深さは0.1～0.2ｍと北へ行くほど浅くなっている。建物規模は桁行7.8ｍ・梁行5.4ｍで、柱間寸法は桁間1.95ｍ・梁間1.8ｍと等間である。

柱穴からは13世紀前葉の山茶椀の破片(1340)が出土している。

ＳＢ２（第81・108図）　Ⅱ区南東に位置し、桁行４間・梁行４間の総柱建物である。棟方向は東で南に13度振れる東西棟である。

柱掘形は概ね0.25ｍ前後の不整円形で、深さは0.15～0.25ｍとばらつく。建物規模は桁行8.6ｍ・梁行7.4 ｍ、柱間寸法は桁間2.15ｍ・梁間1.85ｍと等間である。

柱穴から、判読はできないが墨跡のある13世紀前半の山茶椀系の小皿（1341）や土師器小片等が出土している。

ＳＢ３（第81図）　ＳＢ２・４と重複する桁行５間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は東で南に11度振れる東西棟である。

柱掘形は0.2～0.4ｍの不整円形で、深さも0.15～0.25ｍとばらつく。建物規模は桁行11.3ｍ・梁行6.7ｍ、柱間寸法は桁間が西から2.35＋2.7＋2.1＋2.0＋2.15ｍ、梁間が北から2.35＋2.1＋2.25ｍである。

柱穴からは山茶椀片や土師器片が出土している。

ＳＢ４（第81図）　ＳＢ３と西端が重複する桁行２間・梁行２間の側柱建物である。棟方向はＳＢ２・３とは大きく異なり、東で南に45度振れる東西棟建物である。

柱掘形の大きさは、0.3ｍほどの不整円形で、深さは0.15～0.25ｍとばらつく。建物規模は桁行3.4ｍ・梁行2.8ｍ、柱間寸法は各々桁間1.7ｍ・梁間1.4ｍである。

出土遺物はないが、時期は概ねＳＢ２・３と同様であろう。これらの先後関係は不明である。

ＳＢ５（第82図）　Ⅱ区南東端に位置し、調査区外にのびる桁行２間の建物である。棟方向は東で南に23度振れる東西棟であろうか。

柱掘形は0.3～0.5ｍの不整円形で、深さは0.2ｍ前後である。建物規模は桁行5.2ｍ、梁行は不明である。柱間寸法は2.6ｍの等間である。

柱穴から山茶椀片や土師器片が出土している。

ＳＢ６（第82図）　Ⅲ区北西に位置する、桁行４間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で北に11度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.4ｍの不整円形で、深さは0.1～0.3ｍとばらつく。建物規模は桁行8.0ｍ・梁行3.9ｍで、柱間寸法は桁間が西から2.1＋2.1＋2.1＋1.7ｍ、梁間が北から2.5＋1.4ｍである。

柱穴から灰釉陶器片や土師器片が出土している。

ＳＢ７（第82図）　ＳＢ６の南側に位置する、桁行３間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で南に６度振れる東西棟である。

柱掘形は0.4ｍ前後の不整円形で、深さは0.15～0.35ｍとばらつく。建物規模は桁行5.7ｍ・梁行4.6ｍ、柱間寸法は桁間1.9ｍ・梁間2.3ｍである。

柱穴から灰釉陶器片や土師器片が出土している。

ＳＢ８（第83・84・108 図）　Ⅲ区の南側に位置する、桁行８間・梁行６間の最大級の大きさをもつ総柱建物である。棟方向は東で南に９度振れる東西棟である。排水溝と思われる２条の溝（ＳＤ４・５）をもつ東西２間×南北３間分の土坑ＳＫ25を建物東端に伴う。

柱掘形は0.3～0.4ｍの不整円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行18.2ｍ・梁行14.4ｍである。柱間寸法は桁間が西から2.2＋2.2＋2.2＋2.2＋2.2＋2.4＋2.4＋2.4ｍ、梁間が2.4ｍの等間である。

柱穴及びＳＫ25からは、12世紀後葉から13世紀にかけての土師器皿・鍋、山茶椀、黒色土器椀（1342～1346、1432～1457）等が出土している。

ＳＢ９（第90図）　Ⅳ区の北西に位置する、桁行３間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で南に７度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.5ｍの不整円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行4.8ｍ・梁行4.2ｍである。柱間寸法は桁間1.6ｍ・梁間2.1ｍの等間である。

柱穴からはロクロ土師器の小片が出土しており、平安時代後期頃の建物であろうと推定される。

ＳＢ10（第85・86図）　Ⅳ区の西側に位置する、桁行10間・梁行６間の大鼻遺跡では最大の大きさを持つ総柱建物である。棟方向は東で南に５度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.4ｍの不整円形で、深さは0.3～0.5ｍとばらつく。建物規模は桁行23.7ｍ・梁行15.3ｍである。柱間寸法は桁間が西から2.5＋2.5＋2.6＋2.6＋2.6＋2.5＋2.6＋2.6＋1.6＋1.6ｍ、梁間が2.4＋2.6＋2.6＋2.7＋2.4＋2.6ｍで、東側の梁間が狭い。

柱穴からは土師器や灰釉陶器・山茶椀の小片が出土し、12世紀末頃の建物であろうと思われる。

なお、ＳＢ10内から13世紀前半と考えられる中世墓ＳＸ14・15が検出されていることから、この建物はその時期にはすでになかったと推定される。

ＳＢ11（第90・108 図）　Ⅳ区の南西に位置する、桁行３間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は北で東に５度振れる南北棟で、中央に2.1×2.6ｍの楕円形土坑ＳＫ27があるが、建物に付属するかどうかは不明である。

柱掘形は概ね0.3ｍの円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物全体の規模は、桁行7.6ｍ・梁行7.0ｍである。柱間寸法は、桁間が北から2.5＋2.3＋2.6ｍ、梁間が西から2.6＋2.2＋2.2ｍであり、西側の梁間がやや広い。

柱穴からは土師器皿・鍋片(1347～1349）が出土し、12世紀末頃の建物であろうと思われる。

ＳＢ12（第88・108 図）　Ⅳ区の中央南寄りに位置する、桁行４間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は北で西に９度振れる南北棟で、南東隅に東西１間×南北２間分の土坑ＳＫ31を伴う。建物としてまとまったのは東西２間分ではあるが、土坑の位置や付近の状況を考慮すれば、もう少し西側に拡大するのではないかとも想像される。

柱掘形は概ね0.25ｍ前後の円形で、深さは0.15～0.3ｍである。建物規模は桁行9.3ｍ・梁行4.8ｍである。柱間寸法は桁間が北から2.2＋2.5＋2.6＋2.0ｍ、梁間が2.4ｍの等間である。

柱穴からは灰釉陶器や山茶椀類(1350～1352）が出土し、12世紀末頃の建物であろうと思われる。

ＳＢ13（第88・108 図）　Ⅳ区の中央南寄りに位置し、ＳＢ12と重複する桁行５間・梁行４間の総柱建物である。棟方向は東で北に２度振れる東西棟で、

南東隅に東西１間×南北２間分の土坑ＳＫ32を伴う。

柱掘形は概ね0.3ｍ前後の円形で、深さは0.15～0.25ｍである。建物規模は桁行12.2ｍ・梁行9.0ｍである。柱間寸法は桁間が西から2.3＋2.5＋2.5＋2.4＋2.5ｍ、梁間2.3＋2.3＋2.3＋2.1ｍである。

柱穴からは山茶椀(1353)が出土し、13世紀前葉の建物であろうと思われる。出土遺物から、ＳＢ12よりは新しいと思われる。

ＳＢ14（第88・108図）　Ⅳ区の中央南寄りでＳＢ13の南側に位置する、桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で北に２度振れる東西棟で、東側に東西１間×南北２間分の土坑ＳＫ33を伴う。ＳＢ12同様、建物規模は北西方向にもう少し拡大することも想定出来よう。あるいはＳＢ13の建て替え、もしくは付属施設であるかもしれない。またＳＫ33は排水溝ＳＤ８を伴う。

柱掘形は0.2～0.3ｍの円形で、深さは0.15ｍ前後である。建物規模は桁行5.5ｍ・梁行4.4ｍ、柱間寸法は桁間が西から2.65＋2.85ｍ・梁間が北から2.25＋2.15ｍである。

柱穴からは山茶椀(1354)が出土し、13世紀頃の建物であろうと思われる。

ＳＢ15（第89・108 図）　Ⅳ区の中央やや南寄りでＳＢ12～14の東側に位置する、桁行５間・梁行４間の総柱建物である。棟方向は北で西に２度振れる南北棟で、東側に東西１間×南北２間分の土坑ＳＫ38を伴う。

柱掘形は0.2～0.3ｍの円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行9.2ｍ・梁行8.6ｍである。柱間寸法は桁間が北から1.8＋1.9＋1.6＋1.9＋2.0m、梁間が西から1.9＋2.3＋2.3＋2.1ｍで、桁行の中央間は特に狭い。梁行の北から４列目の柱列には根石を持つが、根石上面高は一定ではない。

柱穴からは土師器鍋(1355)が出土し、13世紀頃の建物であろうと思われる。

ＳＢ16（第89図）　Ⅳ区の中央南寄りでＳＢ15と重複する、桁行４間・梁行４間の総柱建物である。棟方向は東で北に１度振れる東西棟で、南東隅に東西２間半×南北２間分を占める土坑ＳＫ39を伴う。

柱掘形は概ね0.3ｍの円形で、深さは0.15～0.3ｍである。建物規模は桁行8.6ｍ・梁行7.7ｍである。

柱間寸法は桁間が西から2.0＋2.4＋2.2＋2.0ｍ、梁間が北から2.1＋1.9＋1.9＋1.8ｍである。

柱穴からは土師器や山茶椀の小片が出土し、13世紀頃の建物であろうと思われるが、ＳＢ15との先後関係は不明である。

ＳＢ17（第90図）　Ⅳ区の中央北側にある、桁行３間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で南に24度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.4ｍの円形で、深さは概ね0.3ｍである。建物規模は桁行5.7ｍ・梁行3.8ｍで、柱間寸法は桁間・梁間ともに1.9ｍの等間である。

柱穴からは土師器の小片が出土している。

ＳＢ18（第90図）　Ⅳ区の中央やや北西寄りにある、桁行３間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は北で東に14度振れる南北棟である。

柱掘形は0.4～0.5ｍの円形とやや大きく、深さは概ね0.3ｍである。建物規模は桁行4.5ｍ・梁行3.09ｍ、柱間寸法は桁間1.5ｍ・梁間1.03ｍの等間である。

出土遺物はない。

ＳＢ19（第90図）　Ⅳ区の北西寄りにある、桁行４間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で南に39度振れる東西棟である。

柱掘形は0.45～0.5ｍの円形とやや大きく、深さは概ね0.3ｍである。建物規模は桁行5.4ｍ・梁行2.7ｍで北側隅部分は調査区外にのびる。柱間寸法は桁間・梁間とも1.35ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ20（第90図）　Ⅳ区の北西寄りにある、ＳＢ21と重複する桁行２間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は北で西に１度振れる南北棟である。

柱掘形は0.45～0.5 ｍの円形と大きめで、深さは0.25～0.3ｍである。建物規模は桁行3.2ｍ・梁行2.9ｍで、柱間寸法は桁間1.6ｍ・梁間1.45ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ21（第90図）　Ⅳ区の北西寄りにある、ＳＢ20と重複する桁行２間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は北で西に１度振れる南北棟である。切り合い関係から、ＳＢ21の方が新しい。

柱掘形は0.3～0.4ｍの円形で、深さは0.15～0.2ｍ

である。ＳＢ20よりも柱掘形は小さく、深さも浅い。建物規模は桁行3.4ｍ・梁行2.8ｍで、柱間寸法は桁間1.7ｍ・梁間1.4ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ22（第91図）　Ⅳ区の東端に位置し、調査区外にのびる桁行２間以上・梁行１間以上の側柱建物である。棟方向は真南北をとる。

柱掘形は0.5ｍ前後の円形で大きく、深さは概ね0.3ｍ前後である。建物規模は桁行5.3ｍ以上・梁行1.8ｍ以上で、柱間寸法は桁間が北から2.8＋2.5ｍ・梁間1.8ｍの等間である。

柱穴からの出土遺物はない。

ＳＢ23（第91図）　Ⅴ区の北西端に位置し、溝ＳＤ９・10を切る桁行５間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で北に７度振れる東西棟である。

柱掘形は0.4～0.6ｍのやや大きい円形で、深さは概ね0.3ｍ前後である。建物規模は桁行11.1ｍ・梁行6.0ｍと比較的大きく、柱間寸法は桁間が西から2.5＋2.5＋2.3＋1.9＋1.9ｍ・梁間は2.0ｍの等間である。桁間の東側２間分が狭い。

柱穴からの出土遺物はない。

ＳＢ24（第91図）　Ⅴ区北西にあるＳＢ23の南側に位置する、桁行５間・梁行４間の側柱建物である。棟方向は東で北に１度振れる東西棟である。

柱掘形は0.4～0.6ｍの円形で、深さは概ね0.25ｍ前後である。建物規模は桁行7.8ｍ・梁行5.2ｍ、柱間寸法は桁間1.56ｍ・梁間2.6ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ25（第92図）　Ⅴ区中央北寄りに位置する、桁行４間・梁行３間の総柱建物であるが、中央から北西部分は撹乱のため柱穴は検出できなかった。棟方向は東で北に12度振れる東西棟である。

柱掘形は0.4～0.8ｍと大きい円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行6.8ｍ・梁行5.1ｍ、柱間寸法は桁間・梁間共に1.7ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ26（第92図）　Ⅴ区北東寄りＳＢ25の東側に位置する、桁行４間・梁行４間の側柱建物である。棟方向は東で北に９度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.4ｍの円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行7.8ｍ・梁行6.0ｍ、柱間寸法は桁間が西から2.1＋1.8＋1.8＋2.1ｍ・梁間が1.5ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ27（第92図）　Ⅴ区北東隅、ＳＢ26の東側に位置する、桁行４間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で北に13度振れる東西棟である。

柱掘形は概ね0.5ｍの不整方形で、深さは0.3ｍ前後である。建物規模は桁行5.6ｍ・梁行4.2ｍ、柱間寸法は桁間・梁間共に1.4ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ28（第92図）　Ⅴ区中央やや東寄りに位置する、桁行４間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で北に20度振れる東西棟である。溝ＳＤ13を切る。

柱掘形は0.4～0.6ｍの円形で、深さは0.1～0.3ｍと北側が浅い。建物規模は桁行6.4ｍ・梁行4.8ｍ、柱間寸法は桁間・梁間共に1.6ｍの等間である。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ29（第92図）　Ⅴ区南東隅に位置する、桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で南に41度振れる東西棟である。南東部分はＧ区にかかるが、検出されなかった。

柱掘形は0.4～0.7ｍの不整円形で、深さは0.2ｍ前後である。建物規模は桁行5.2ｍ・梁行5.0ｍ、柱間寸法は桁間2.6ｍ・梁間2.5ｍの等間である。

出土遺物はない。

ＳＢ30（第93図）　Ⅵ区北西隅に位置する、桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で北に５度振れる東西棟である。

柱掘形は0.4～0.7ｍの円形で大きく、深さは0.2ｍ前後である。建物規模は桁行3.0ｍ・梁行2.8ｍ、柱間寸法は桁間1.5ｍ・梁間1.4ｍの等間である。

土師器の小片が出土したのみである。

ＳＢ31（第93図）　Ⅵ区北西に位置する、桁行２間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で北に２度振れる東西棟である。中央から北東部分の柱穴は、撹乱によって検出されていない。

柱掘形は0.4～0.5ｍの円形で、深さは0.15～0.2ｍである。建物規模は桁行3.4ｍ・梁行3.0ｍ、柱間寸法は桁間1.7ｍ・梁間1.5ｍの等間である。

土師器の小片が出土したのみである。

ＳＢ32（第93図）　Ⅵ区の北西、ＳＢ31の東側に位

置する、桁行３間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は北で西に１度振れる南北棟である。

柱掘形は0.3～0.4ｍの円形で、深さは0.1～0.3ｍとばらつく。建物規模は桁行4.9ｍ・梁行4.5ｍ、柱間寸法は桁間が北から1.4＋1.9＋1.6ｍ、梁間が1.5ｍの等間で、桁行中央間がやや広い。

土師器の小片が出土したのみである。

ＳＢ33（第93図）　Ⅵ区の中央、ＳＢ32の東側に位置する、桁行３間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で南に２度振れる東西棟である。

柱掘形は概ね0.2ｍとやや小さい円形で、深さは0.1～0.2ｍである。建物規模は桁行6.8ｍ・梁行3.6ｍ、柱間寸法は桁間が西から2.1＋2.2＋2.5ｍ、梁間が1.8ｍの等間で、桁行東隅間がやや広い。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ34（第93図）　Ⅵ区の中央、ＳＢ33の東側に位置する、桁行３間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で南に２度振れる東西棟である。

柱掘形は0.3～0.6ｍと不整円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行5.2ｍ・梁行4.2ｍ、柱間寸法は桁間が西から2.0＋1.4＋1.8ｍ、梁間が北から1.6＋1.3＋1.3ｍで、梁行北隅間が少し広い。

出土遺物は土師器の小片のみである。

ＳＢ35（第94図）　Ⅵ区西側、ＳＤ15の東側に位置する、桁行３間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で南に２度振れる東西棟で、南東隅に土坑ＳＫ56・57を伴う。

柱掘形は0.3～0.5ｍの円形で、深さは0.1～0.35ｍとばらつく。建物規模は桁行7.8ｍ・梁行5.9ｍ、柱間寸法は桁間が西から1.9＋3.0＋2.9ｍ・梁間が北から1.8＋2.3＋1.8ｍで、梁行中央間が少し広い。

出土遺物は土師器の羽釜や鍋片が出土し、13世紀から14世紀にかけての建物であると思われる。

ＳＢ36（第94・108 図）　Ⅵ区中央、ＳＫ61の北側に位置する、桁行４間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は東で北に23度振れる東西棟である。

柱掘形は0.2～0.4ｍの円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行9.2ｍ・梁行4.6ｍで、柱間寸法は桁間が2.3ｍ等間、梁間が北から1.5＋1.2＋1.9ｍで、梁行中央間が少し狭い。北面柱穴には0.2～0.3ｍ大の根石を持つが、高さは一定ではない。

出土遺物は山茶椀(1356)や常滑産の鉢(1357)等が出土し、13世紀から14世紀にかけての建物であると思われる。

ＳＢ37（第93図）　Ⅵ区中央東寄り、ＳＤ26の東側に位置する、桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は北で東に２度振れる南北棟である。

柱掘形は0.2～0.5ｍの不揃いな円形で、深さは0.1～0.25ｍである。建物規模は桁行4.4ｍ・梁行4.0ｍで、柱間寸法は桁間2.2ｍ・梁間2.0ｍの等間である。

出土遺物は山茶椀系の小皿片があり、13世紀から14世紀にかけての建物であると思われる。

ＳＢ38（第94・108 図）　Ⅵ区中央東寄り、ＳＤ27の東側に位置する、桁行４間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で北に３度振れる東西棟である。ＳＢ39と重複しているが先後関係は不明である。

柱掘形は0.4～0.6ｍのやや大きめの円形で、深さは0.3～0.4ｍである。建物規模は桁行7.2ｍ・梁行3.4ｍで、柱間寸法は桁間1.8ｍ・梁間1.7ｍの等間である。

出土遺物は山茶椀(1358)があり、13世紀から14世紀にかけての建物であると思われる。

ＳＢ39（第94図）　Ⅵ区ＳＢ38と重複する桁行４間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で南に８度振れる東西棟である。

柱掘形は0.2～0.5ｍと不揃いな円形で、深さは0.15～0.3ｍである。建物規模は桁行8.0ｍ・梁行3.4ｍ、柱間寸法は桁間2.0ｍ・梁間1.7ｍの等間である。桁間南側は0.15ｍほどの根石をもつものが多い。

出土遺物は土師器の小片のみであるが、13世紀から14世紀にかけての建物であると思われる。

ＳＢ40（第95図）　Ⅷ区やや西寄りに位置する桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で北に５度振れる東西棟である。

柱掘形は0.35～0.6ｍの不揃いの円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行2.8ｍ・梁行2.6ｍで、柱間寸法は桁間1.4ｍ・梁間1.3ｍの等間である。

出土遺物はない。

ＳＢ41（第95図）　Ⅷ区ＳＢ40のすぐ南側に位置する桁行２間・梁行２間の総柱建物である。棟方向は東で北に４度振れる東西棟である。

柱掘形は0.25～0.6ｍと不揃いな円形で、深さは概ね0.3ｍ前後である。建物規模は桁行・梁行とも3.4ｍで、柱間寸法は桁間・梁間ともに1.7ｍの等間である。

出土遺物はない。

ＳＢ42（第95図）　Ⅷ区ＳＢ40の北東に位置する桁行３間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は東で北に６度振れる東西棟である。

柱掘形は0.45～0.6ｍとやや大きめの不整円形で、深さは0.2～0.4ｍと北側が浅い。建物規模は桁行6.0ｍ・梁行4.2ｍで、柱間寸法は桁間2.0ｍ・梁間2.1ｍの等間である。

出土遺物は、土師器の小片のみである。

ＳＢ43（第95図）　Ⅷ区ＳＢ41のすぐ東側に位置する桁行３間・梁行２間の側柱建物である。棟方向は北で西に９度振れる南北棟である。

柱掘形は0.5～0.7ｍと大きめの不整円形で、深さは0.25～0.35ｍである。建物規模は桁行5.4ｍ・梁行4.0ｍで、柱間寸法は桁間1.8ｍ・梁間2.0ｍの等間である。

出土遺物は、土師器の小片のみである。

ＳＢ44（第95・108 図）　Ⅷ区中央やや南側に位置する桁行４間・梁行３間の側柱建物である。棟方向は北で東に７度振れる南北棟である。

柱掘形は0.45～0.6ｍとやや大きめの不整円形で、深さは0.2～0.3ｍである。建物規模は桁行6.8ｍ・梁行5.1ｍで、柱間寸法は桁間、梁間とも1.7ｍの等間である。

土師器小片や山茶椀(1359)が出土し、それらから平安時代の建物であると思われる。

ＳＢ45（第95図）　Ⅷ区東南に位置する桁行３間・梁行３間の総柱建物である。棟方向は東で南に16度振れる東西棟である。

柱掘形は0.5～0.7ｍと大きめの不整円形で、深さは概ね0.25ｍ前後である。建物規模は桁行4.3ｍ・梁行3.6ｍで、柱間寸法は桁間が西1.4＋1.5＋1.4ｍ、梁間は1.2ｍの等間である。桁行中央間がやや広い。

出土遺物はない。

ＳＡ１（第81図）　ＳＢ２・３の北側に位置する柱列で、３間(6.0ｍ）以上の規模をもつが建物としてはまとまらない。柱列方向は東で北に１度振れる。

柱掘形は0.25～0.5ｍの不整円形で、深さは概ね0.15ｍである。柱間寸法は2.0ｍの等間であるが、ＳＢ２・３との関係は不明である。

出土遺物はない。

ＳＡ２（第81図）　ＳＢ２・３内の南側に位置する柱列で、３間(6.9ｍ）以上の規模をもつが建物としてはまとまらない。柱列方向は東で南に１度振れる。

柱掘形は0.2～0.3ｍの不整円形で、深さも0.1～0.25ｍとばらつく。柱間寸法は2.3ｍの等間である。ＳＢ２・３との関係は不明である。

柱穴からは山茶椀片が出土している。

ＳＡ３（第81図）　ＳＢ２・３の南側に位置する柱列で、２間(4.6ｍ）以上の規模をもつが、建物としてはまとまらない。あるいは、調査区外南側に存在する南北棟建物の北面側柱列かとも考えられる。柱列方向は東で南に１度振れる。

柱掘形は0.5～0.75ｍと不整円形で、深さも0.15～0.25ｍとばらつく。柱間寸法は2.3ｍの等間である。

柱穴からは灰釉陶器片が出土している。

ＳＡ４（第87図）　Ⅵ区の中央には南北に走る溝群（ＳＤ20～27）が集中する。溝群中央部分の掘削後に検出された柱列である。北で西に２度の方向に４間分2.6ｍ、その南側に北で西に９度の方向に19間分12.2ｍの柱列を検出した。

柱掘形は0.3～0.6ｍと不整円形で、深さは0.1～0.2ｍである。柱間寸法は心々で0.4～0.7ｍである。

出土遺物はなく、その時期および柱列の性格等については不明であるが、柱列が切れる最南の位置の西側には神社の跡があり、あるいは神社の境内の垣的なものであった可能性も想定できよう。

(2)　中世墓

ＳＸ14（第96・108 図）　Ⅳ区最西端に位置する。長さ1.3ｍ・幅0.75ｍ・深さ0.45ｍの規模をもち、0.15ｍ前後の石が敷き詰められた、楕円形状の集石遺構である。すぐ東側にＳＸ15がある。

出土遺物は山茶椀(1360)と陶器壺(1361)があり、これらから13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＸ15（第96・108図）　ＳＸ14の東側に位置する。長さ1.25ｍ・幅0.5ｍ・深さ0.5ｍの規模をもち、Ｓ

X14同様に0.15m前後の石が敷き詰められた、楕円形状の集石遺構である。

出土遺物は山茶椀や山茶椀系の小皿(1362～1366)があり、中には判読は難しいが墨書を持つもの(1364)もある。これらから13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＸ16（第96・108 図）　Ⅳ区中央南端に位置する。長さ1.0m・幅0.6m・深さはやや浅い0.05mで、楕円形を呈する。

山茶椀(1368)１点が正位の状態で出土し、中に刀子(1367)が置かれていた。これらから、13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＸ17（第96・108 図）　Ⅳ区中央南端のＳＸ16の東側に位置する。長さ1.05m・幅0.65m・深さはやや浅い0.08mで、楕円形を呈する。

山茶椀系の小皿１点(1369)や山茶椀３点（1370～1372）が正位の状態に置かれていた。供献用の土器であろうか。山茶椀の時期から、13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＸ18（第96・108 図）　Ⅳ区中央やや南東寄りに位置する。長さ0.3m・幅0.3m・深さ0.1mの円形を呈する。

渥美産の壺(1373)が口縁部を欠いた状態で出土し、中には少量の骨片が埋納されていた。これらから、13世紀前半の遺構と考えられる。

ＳＸ19（第96図）　Ⅳ区の東側に位置する。長さ1.15m・幅1.0m・深さ0.2mの楕円形を呈する。

出土遺物は無いが、0.3～0.45mの細長い石が敷き詰められ、人為的なものであると思われる。時期は不明である。

ＳＸ20（第96・108 図）　Ⅳ区の東側ＳＸ19の北東に位置する。長さ0.95m・幅0.65m・深さ0.16mの楕円形を呈する。0.2m前後の石が積み上げられた様な状態で検出されている。

出土遺物はほぼ完形の山茶椀(1374)があり、それらから13世紀前半のものであると思われる。

ＳＸ21（第96・108 図）　Ⅷ区の中央やや南寄りに位置する。長さ1.65m・幅1.2m・深さ0.4mの楕円形を呈する。拳大の石が数個散在している。

山茶椀(1376)や土師器小皿(1375)が出土し、12世紀後半の遺構であると考えられる。

(3)　井戸

ＳＥ１（第97・109 図）　Ⅵ区西北側、溝ＳＤ14のすぐ西側に位置する。径1.1m・深さ3.5mの素掘りの井戸である。

土師器小皿（1377)や皿（1378)・灰釉陶器平椀(1379)等が出土しており、15世紀後半に属するものであると思われる。

ＳＥ２（第97・109 図）　Ⅵ区中央の大溝群の西側、神社跡を区画する溝に取り囲まれるように位置する。径1.15m・深さ3.3mの素掘りの井戸である。

遺物は大量(1380～1404）に出土し、その時期は12世紀後半から16世紀にかけてのものである。13世紀後半頃の遺物が中心となっている。また、山茶椀の底部外側に「大」と書かれた墨書土器が5点(1395～1399）も出土しており興味深い。

ＳＥ３（第97・110 図）　Ⅵ区東側、ＳＢ38・39のすぐ東側に位置する。径2.5m・深さ3.5mで、深さ2mあたりから底にかけては、不定形の河原石による石組が小口積みで数段組まれている。

出土遺物には、土師器皿や鍋・常滑産鉢等(1405～1412）があり、14～16世紀頃に使用されていたものと思われる。

ＳＥ４（第97図）　Ⅵ区南東、大土坑群の中に位置する。径1.15m・深さ3.0mの規模をもち、壁面に人頭大の石が多数見られる。

出土遺物はほとんど無く、時期は不明である。

ＳＥ５（第98・110 図）　Ⅵ区南東の大土坑群中に位置し、径1.3m・深さ3.2mの規模をもつ。

出土遺物は少ないが、常滑産の甕(1413)があり、これらから室町時代の井戸であると思われる。

ＳＥ６（第98・110 図）　唯一Ⅷ区から検出された井戸である。Ⅷ区最西南側に位置し、径0.85m・深さ4.45m以上の規模をもつ。上面での径は2.3mあるが、漏斗状に狭くなり1.3m下がったところから径0.85mで深さ3.15m以上の素堀りの井戸となる。

出土遺物は、山茶椀や常滑甕等(1414～1420）があり、14世紀前半頃の井戸であると思われる。

（4） 土坑

ＳＫ15（第99図） Ⅰ区西北に位置する、幅4.1m・長さ3.1 m以上・深さ0.45mの方形土坑である。中央から北西にかけて人頭大の石が集中していた。

練鉢や土師器小皿等が出土している。

ＳＫ23（第99・110 図） Ⅲ区西側、ＳＢ８の西に位置する土坑で、遺構の輪郭は検出できなかった。

幅0.6m・長さ0.75mの範囲で12世紀頃の山茶椀(1430)や白磁椀(1431)と0.15m前後の石が集中していた。

ＳＫ25（第100・110 図） Ⅲ区南側にあるＳＢ８に付属するとみられる土坑である。幅4.0m・長さ7.0m・深さ0.6mで、建物南東隅の東西２間×南北３間分の規模をもつ。この内の南東隅の東西１間×南北２間分の床には、砂礫と粘土が硬く互層に張られており、他の床面はゆるく傾斜していた。なお、南面には排水用とみられる幅0.75m・深さ0.65m前後の２条の溝ＳＤ４・５をもつ。

貼床や床面直上及び埋土中からは、12世紀後半から13世紀初頭にかけての土師器皿や山茶椀（1432～1457）が多く出土しており、あるいはＳＢ８内の厨房的施設であったかもしれない。

ＳＫ26（第99・111 図） Ⅲ区南東隅からⅣ区にまたがる、幅3.2m・長さ4.0m・深さ0.3mの長方形を呈した土坑である。

12世紀中頃の山茶椀(1458 ～1460）が出土し、この頃の土坑であると思われる。

ＳＫ28（第101・111図） Ⅳ区南東ＳＢ11の真東に位置する、幅3.5m・長さ3.9m・深さ0.23mの方形に近い形を呈した土坑である。底面はほぼ平らで、北西隅からは焼土が検出された。

出土遺物の量は少なく、13世紀前半の山茶椀系の小皿(1461)や土師器の小片があったのみである。北東部からは人頭大の河原石がややまとまって出土し、これらの中には磨耗痕が認められるものもある。

ＳＫ31（第99・111 図） Ⅳ区やや南東寄りに位置し、幅2.5m・長さ4.3m・深さ0.25mの長方形を呈する。ＳＢ12に付属すると考えられるもので、東南隅の東西１間×南北２間分を占める。

出土遺物には、13世紀前葉から中葉にかけての山茶椀（1465・1466）や土師器の皿（1463・1464）、羽釜(1467)などがあり、ＳＫ28と同様に人頭大の石も少数認められる。

ＳＫ33（第101・111図） Ⅳ区中央やや南寄りに位置し、幅2.4m・長さ4.2m・深さ0.3mの長方形を呈する。ＳＢ14に付属すると考えられるもので、南東の東西１間×南北２間分を占める。東西の壁にテラス状の段差をもつ。南東隅には排水溝と考えられる調査区南端に向かって延びる幅0.3m・深さ0.2mの溝ＳＤ８がある。

出土遺物には、13世紀前葉から中葉にかけての山茶椀(1473～1476）や土師器の皿(1468～1472）、陶器の壺(1477)などがある。また、ＳＫ28や31同様に人頭大の石も少量認められ、興味深い。

ＳＫ35（第101・111図） Ⅳ区中央やや南東に位置し、幅1.05m・長さ2.85m・深さ0.1mの不整形な楕円形を呈する。

13世紀中頃の山茶椀(1479～1481）が３個体完形で出土している。

ＳＫ38（第101・112図） Ⅳ区中央やや南東寄りに位置し、幅2.2m・長さ3.3m・深さ0.15mの長方形を呈する。ＳＢ15に付属すると考えられるもので、南東の東西１間×南北２間分を占める。

13世紀中期頃の山茶椀(1485・1486）が出土した。

ＳＫ39（第102・111図） Ⅳ区中央やや南東寄りＳＫ38のすぐ東側に位置し、幅3.6m・長さ5.6m・深さ0.28mの長方形を呈する。ＳＢ16付属のものと考えられ、南東の東西３間×南北２間分を占める。

13世紀中期頃の山茶椀系の小皿（1487）や山茶椀(1488・1489）が出土した。

ＳＫ43（第102・111図） Ⅴ区南西に位置し、幅2.6m・長さ5.0m・深さ0.2mの不整楕円形を呈する。

13世紀後葉頃の山茶椀系の小皿(1492)が少量出土した。

ＳＫ45 Ⅴ区中央やや東寄り、ＳＤ13に取り囲まれるように位置し、幅1.0m・長さ2.0m・深さ0.47mの不整楕円形を呈する。

出土遺物は少ないが、「祥符元寶」・「皇宋通寶」などの宋銭を含む９枚の銅銭（第117図）が出土しており、13世紀後半以降の土坑であると思われる。

ＳＫ46（第102 図） Ⅴ区中央やや東寄り、ＳＤ13

のすぐ南側に位置する、幅1.25ｍ・長さ1.8ｍ・深さ0.25ｍの不整楕円形を呈する。

土師器の小片や山茶椀片が少々出土した。

ＳＫ49（第102 ・111 図） Ｖ区東端に位置する。遺構の輪郭はほとんど検出できなかったが、幅0.5ｍ・長さ0.7ｍ・深さ0.1ｍの範囲で12世紀末から13世紀初頭にかけての土師器や山茶椀（1496～1522）が大量に出土した。

ＳＫ52（第103・112図） Ⅵ区西端を南北に走る溝ＳＤ15の下層から検出された、幅3.1ｍ・長さ4.2ｍ・深さ0.6ｍの楕円形土坑で、人頭大の石を西肩に敷く。水溜め的な性格をもつ遺構であろう。

14世紀頃の土師器羽釜（1528・1529）・山茶椀(1530)や常滑産の甕（1531）等が出土している。

ＳＫ62（第104・112図） Ⅵ区中央に位置し、幅7.0ｍ・長さ8.0ｍ・深さ最大1.0ｍの楕円形土坑で、南に向かって走る溝ＳＤ16を伴う。西から北側にかけての壁面には人頭大の貼石がみられる。

出土遺物には13世紀から16世紀のものがあるが、中心となるのは15世紀頃であろう。土師器羽釜（1540～1545・1548・1549）・鍋(1546・1547)、山茶椀(1550・1551)、信楽産の擂鉢(1552)、常滑産の甕（1533）等が出土している。

ＳＫ63～66（第105図） Ⅵ区の南東隅には幾重にも土坑が重複して存在し、最大幅で東西13ｍ・南北20ｍの大土坑群を形成している。これらの切り合い関係は不明である。しかし、ＳＫ64の北側から東側にかけては拳大から人頭大の石が集中的にみられ、何らかの人為的な意図を感じさせる。

概ね15～17世紀頃に属する遺物が少量出土した。

ＳＫ70（第103・113図） Ⅵ区東側にある大土坑群の一連のものであると思われるが、幅2.9ｍ・長さ3.0ｍ・深さ0.3ｍの楕円形土坑である。南側には人頭大の石が多数みられ、集石遺構であろう。

土師器の羽釜(1562～1564）や鍋（1561）・鉄釉皿(1565)・青磁椀(1566)等の出土遺物がある。

ＳＫ74（第106・113図） Ⅷ区北西に位置する土坑であるが、遺構の残存状況は非常に悪く、規模・深さともに不明瞭である。

東西1.2ｍ・南北2.2ｍの範囲から12世紀後半に属する土器(1568～1582）が一括して出土した。それらの中にはロクロ成形による土師器の皿もある。

ＳＫ84（第106・114図） Ⅷ区中央やや北寄りに位置する、一辺1.5ｍの方形土坑で深さは0.1ｍと浅い。

土師器の鍋（1592）や山茶椀２点（1593・1594）および拳大の石が数個散在していた。12世紀後半に属する遺構であろう。

ＳＫ85（第106・114図） Ⅷ区東部に位置する、幅2.7ｍ・長さ4.8ｍ・深さ0.1ｍの規模をもつ瓠状の不定形土坑である。北側部分には人頭大の河原石が方形に並べられ、火を受けた跡がみられる。

出土遺物には、土師器鍋(1595)や山茶椀系の小皿(1596)・山茶椀(1597～1599）があり、12世紀中頃に属する遺構であろう。

(5) 溝

ＳＤ９～12（第107図） Ｖ区西端を南北に走る溝で、ＳＤ９はＳＤ10と、ＳＤ11はＳＤ12と並行する。各々幅0.7～1.3ｍ・長さ13.5ｍ以上・深さ0.2ｍ前後の例が多い。ＳＤ９とＳＤ11およびＳＤ10とＳＤ12の間は10ｍ前後の間隔がある。

出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＤ13（第107図） Ｖ区東側に位置する東西溝で、幅0.6～0.9ｍ・長さ22ｍ以上・深さ0.1～0.3ｍほどで西側部分は鉤の手状に南へ曲がる。

出土遺物はなく、時期は不明である。

ＳＤ15（第103・114図） Ⅵ区東側に位置する南北溝で、幅0.6ｍ・長さ16ｍ以上・深さ0.15ｍの規模を持つ。溝の北部には河原石による約20ｍの石列があり、下層には水溜めと思われる土坑ＳＫ52がある。

土師器皿や山茶椀等(1618～1627）、13世紀～16世紀の遺物が多数出土している。

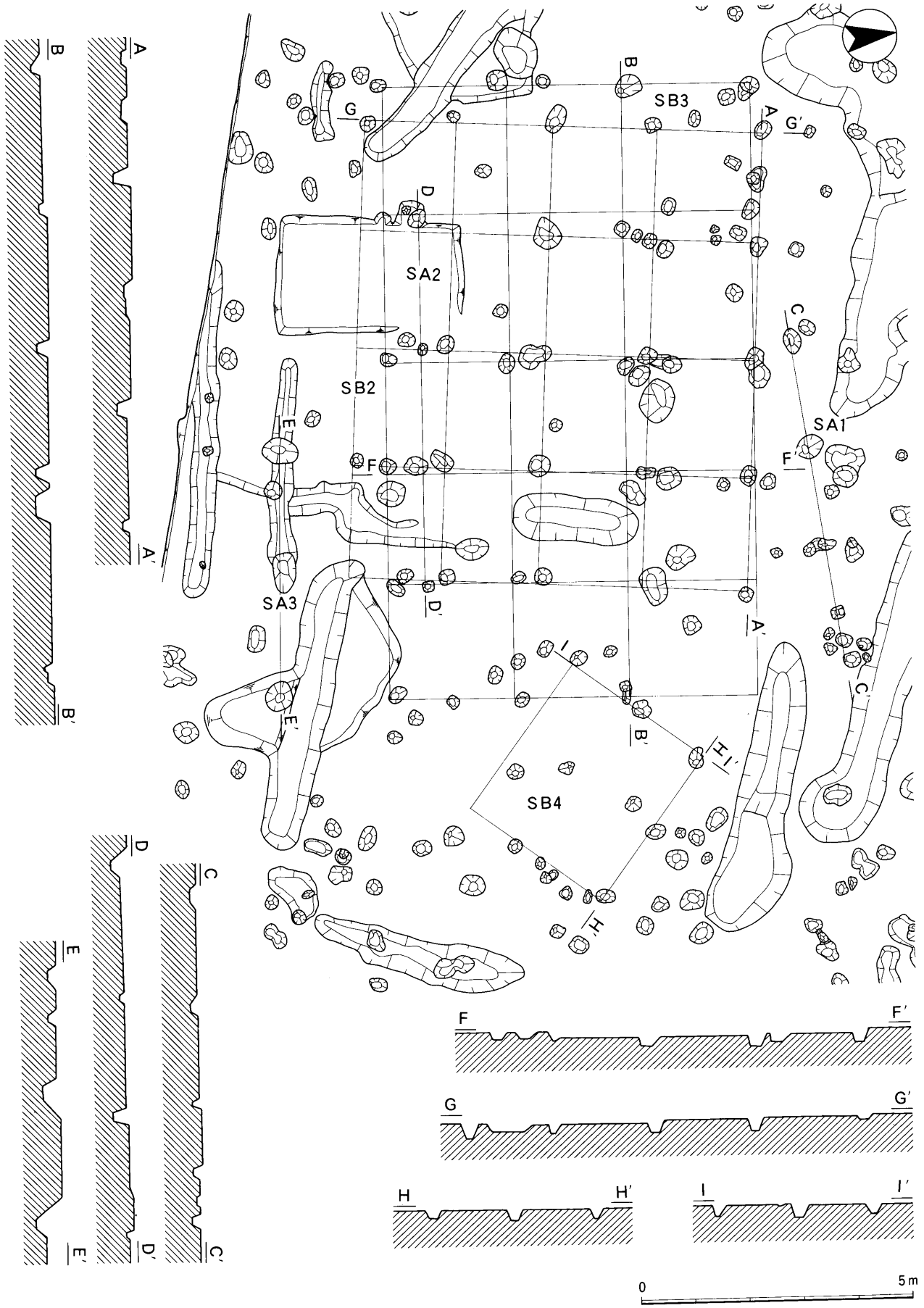
ＳＤ33（第107図） Ⅷ区東端に位置するＳＤ13と同様の東西溝である。幅1.2～1.8ｍ・長さ30ｍ以上・深さ0.2ｍの規模をもつ西側で、鉤の手状に曲る。あるいは東西を区画する一連の溝であるかもしれない。

（岸田早苗）

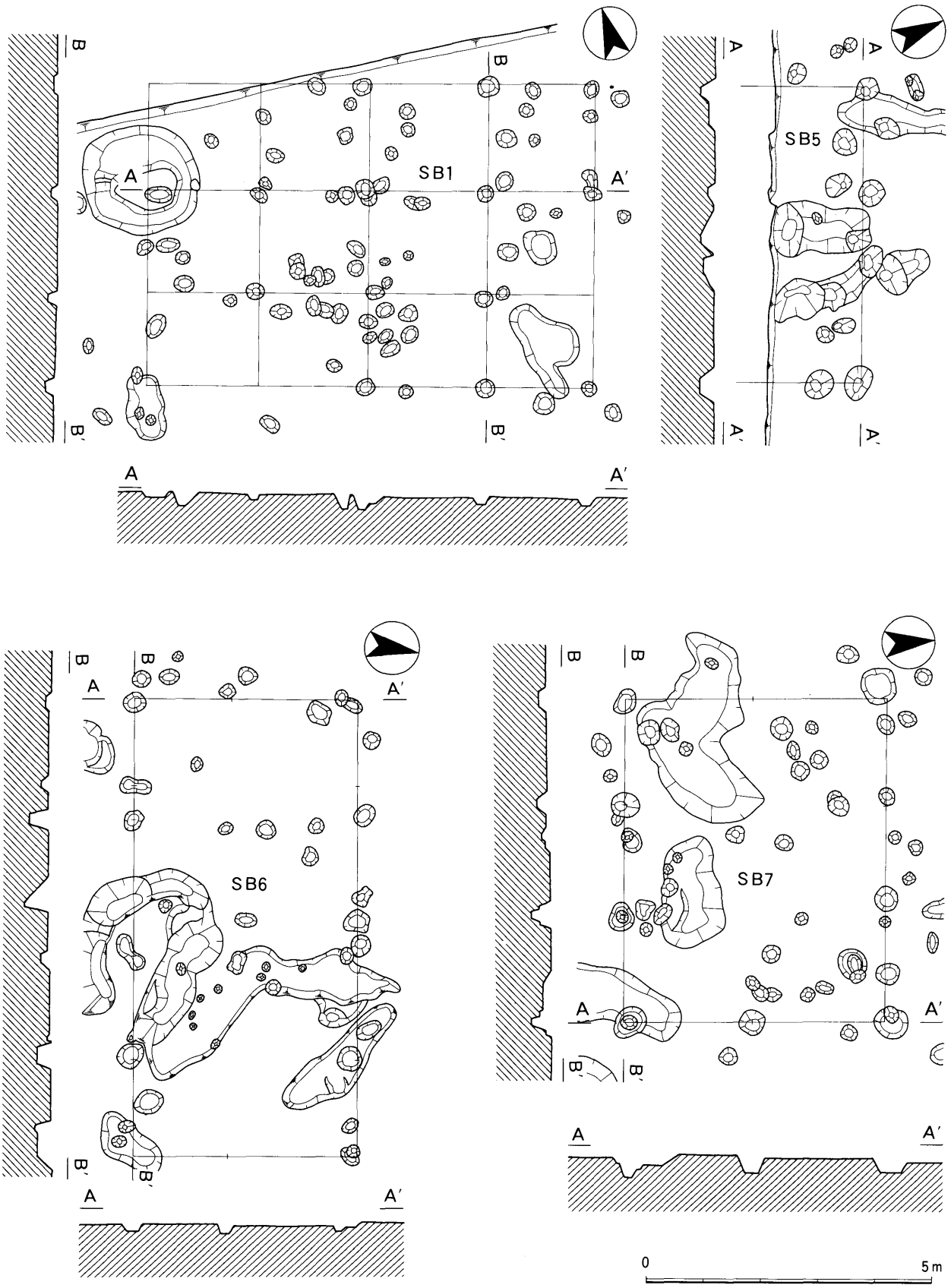
〔参考文献〕
山茶椀の編年については、下記の文献に拠った。
・藤澤良祐「瀬戸古窯址群Ⅰ」（『瀬戸市歴史民俗資料館研究紀要Ⅰ』瀬戸市歴史民俗資料館、1991年）。
・藤澤良祐「山茶椀と中世集落」（『尾呂』瀬戸市教育委員会、1990年）。

なお、小皿については混同を避けるため、「山茶椀系小皿」と表記した。

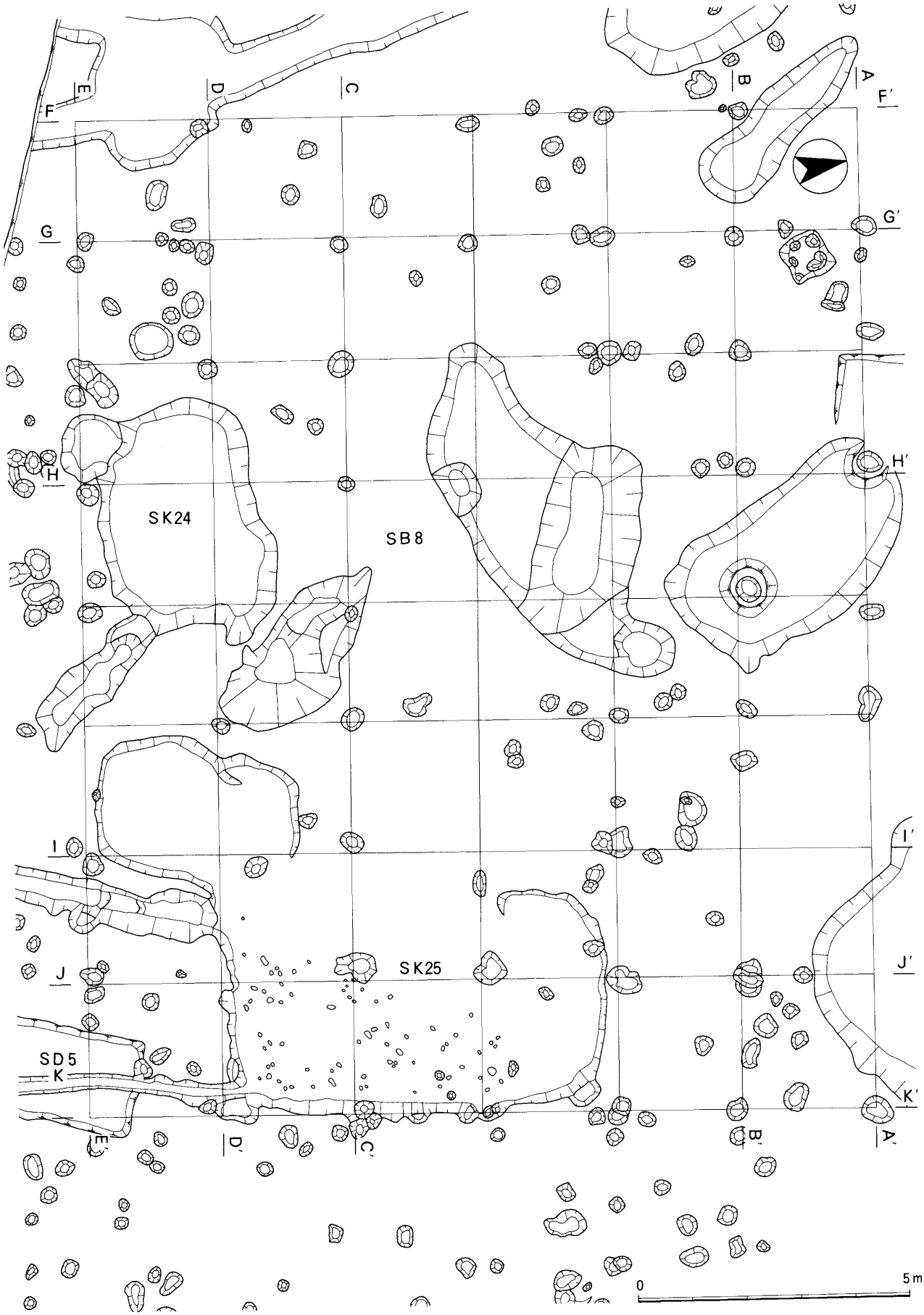
土師器鍋の編年については、下記の文献に拠った。
・伊藤裕偉「南伊勢系土師器の展開と中世土器工人」（『研究紀要』第１号、三重県埋蔵文化財センター、1992年）。



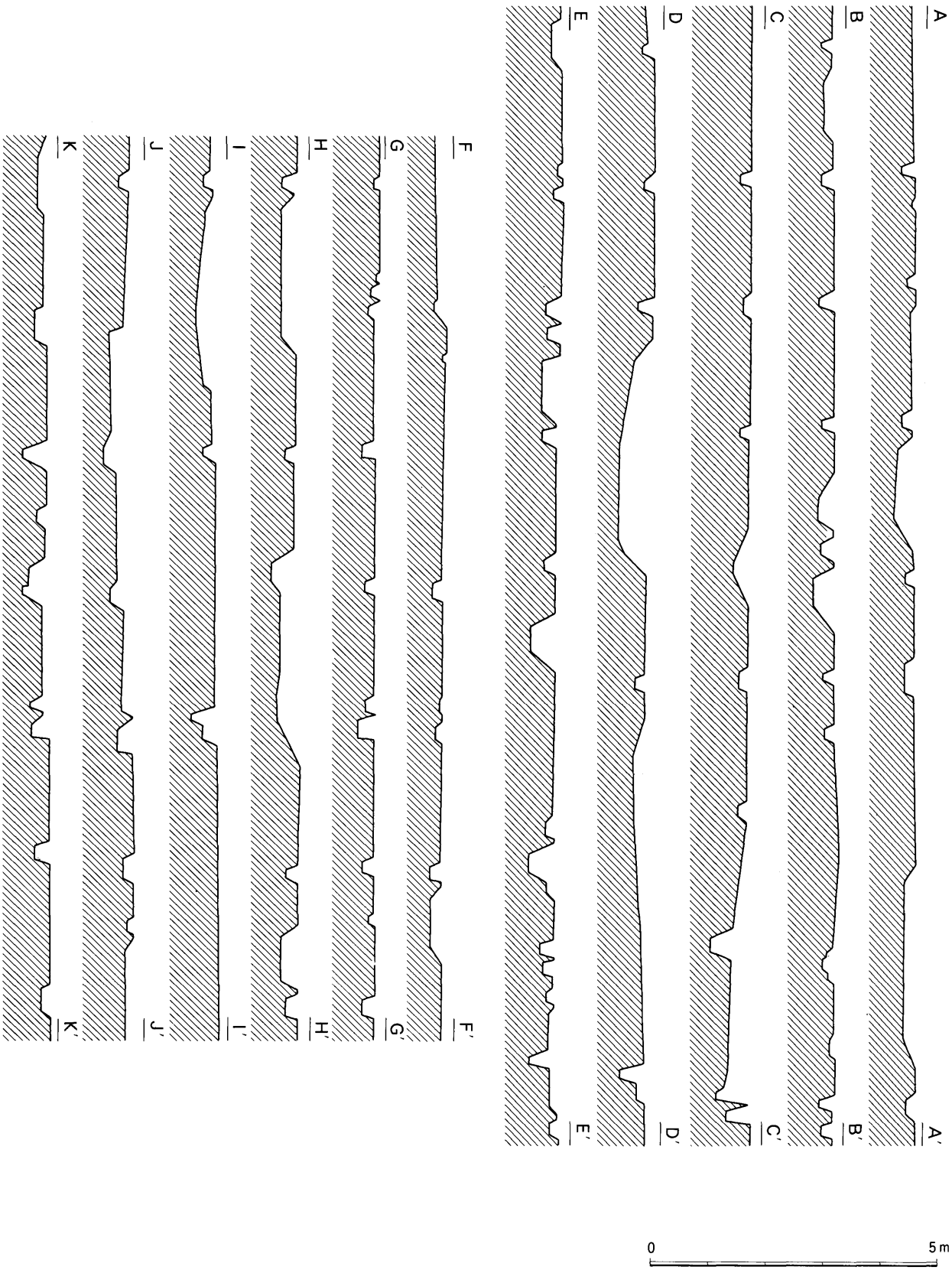
第81図　SB2～4、SA1～3実測図（1：100）　水糸高は87.800m



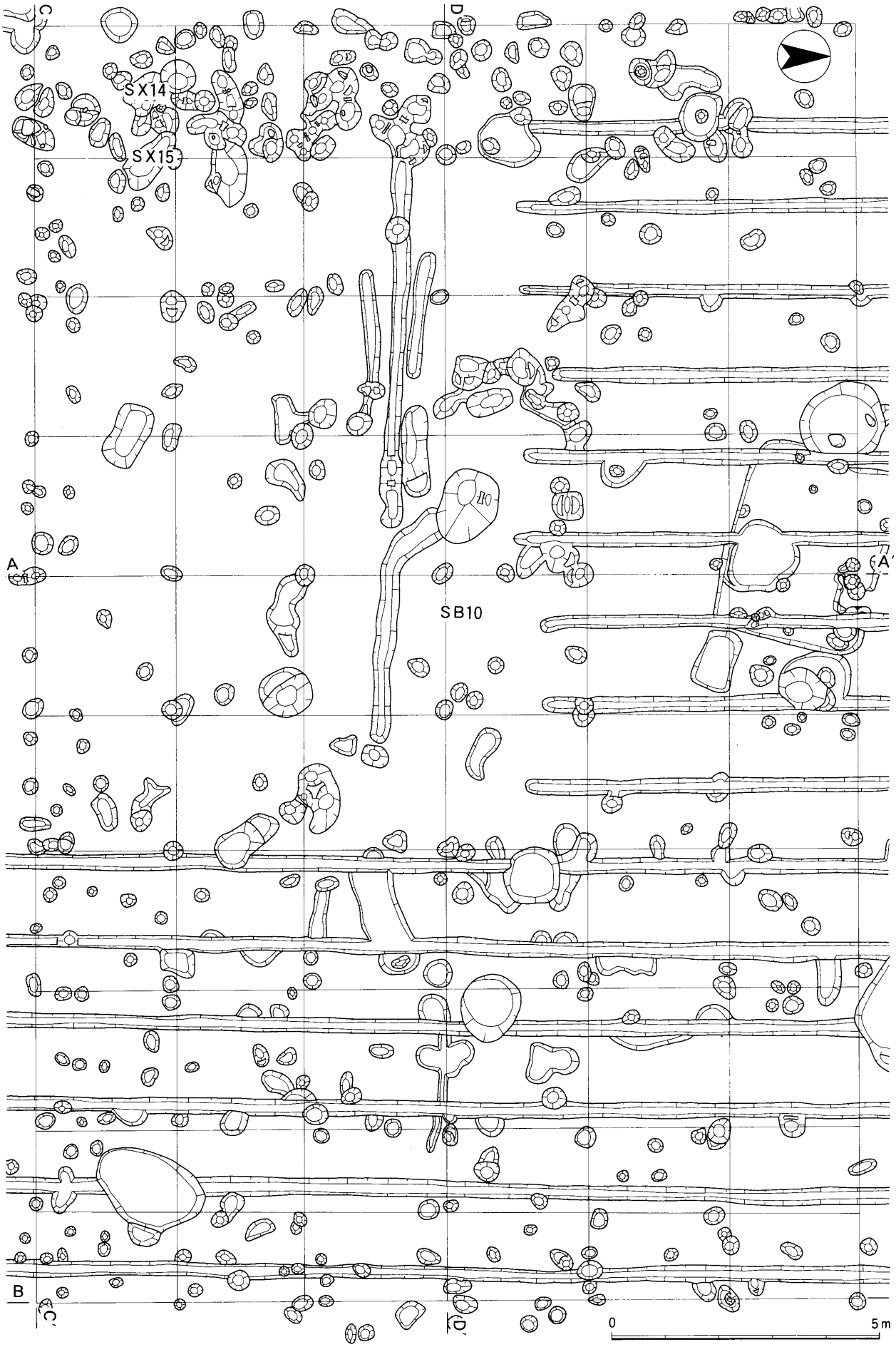
第82図　SB1・5～7実測図（1：100）　水糸高はSB1＝88.200m、SB5～7＝87.800m



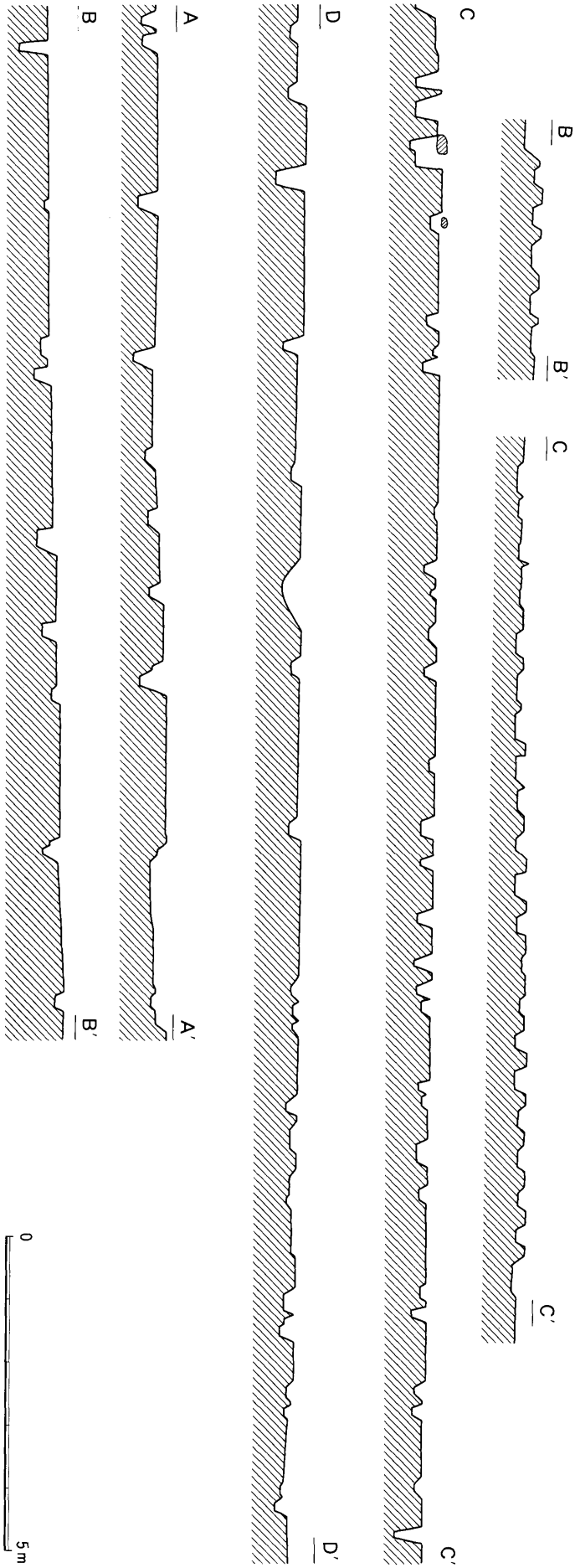
第83図　ＳＢ８実測図（1：100）

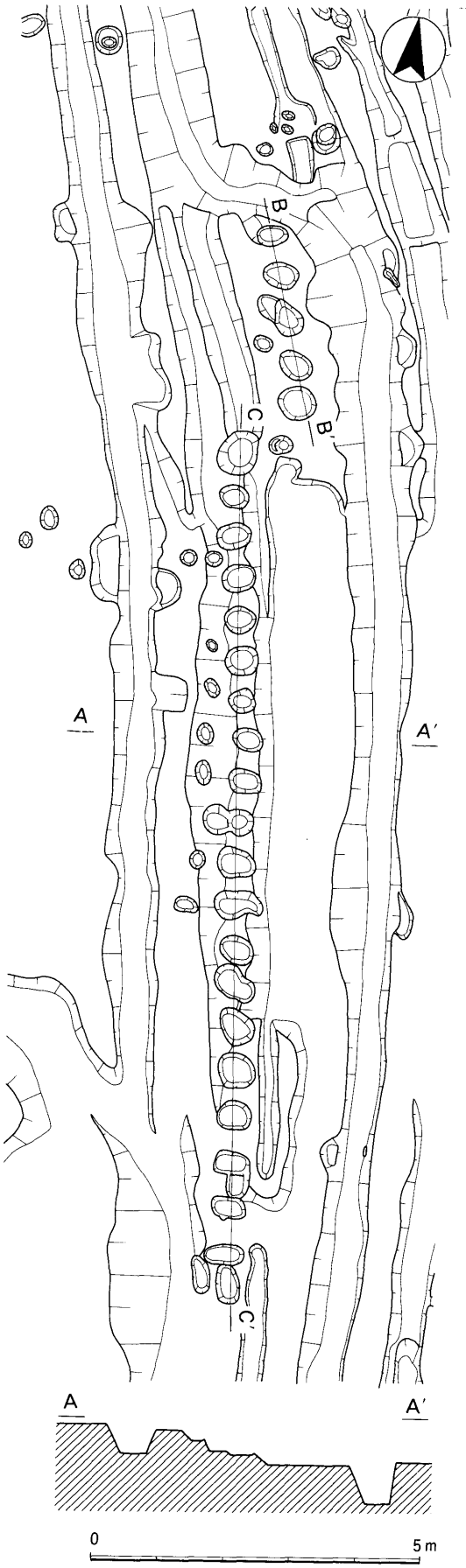


第84図　ＳＢ８断面図（１：100）　水糸高は87.800m

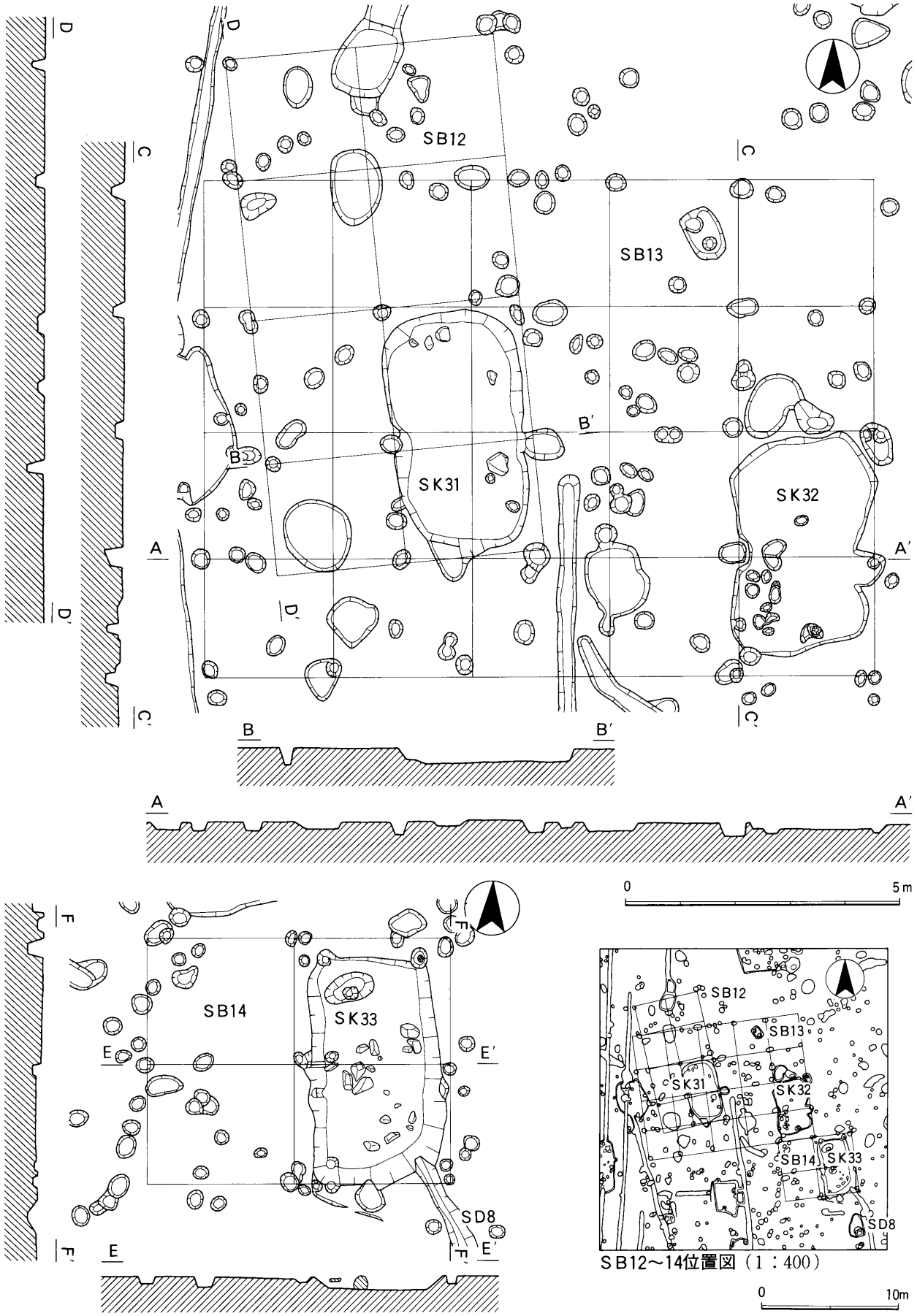


第85図　ＳＢ10実測図（1：100）



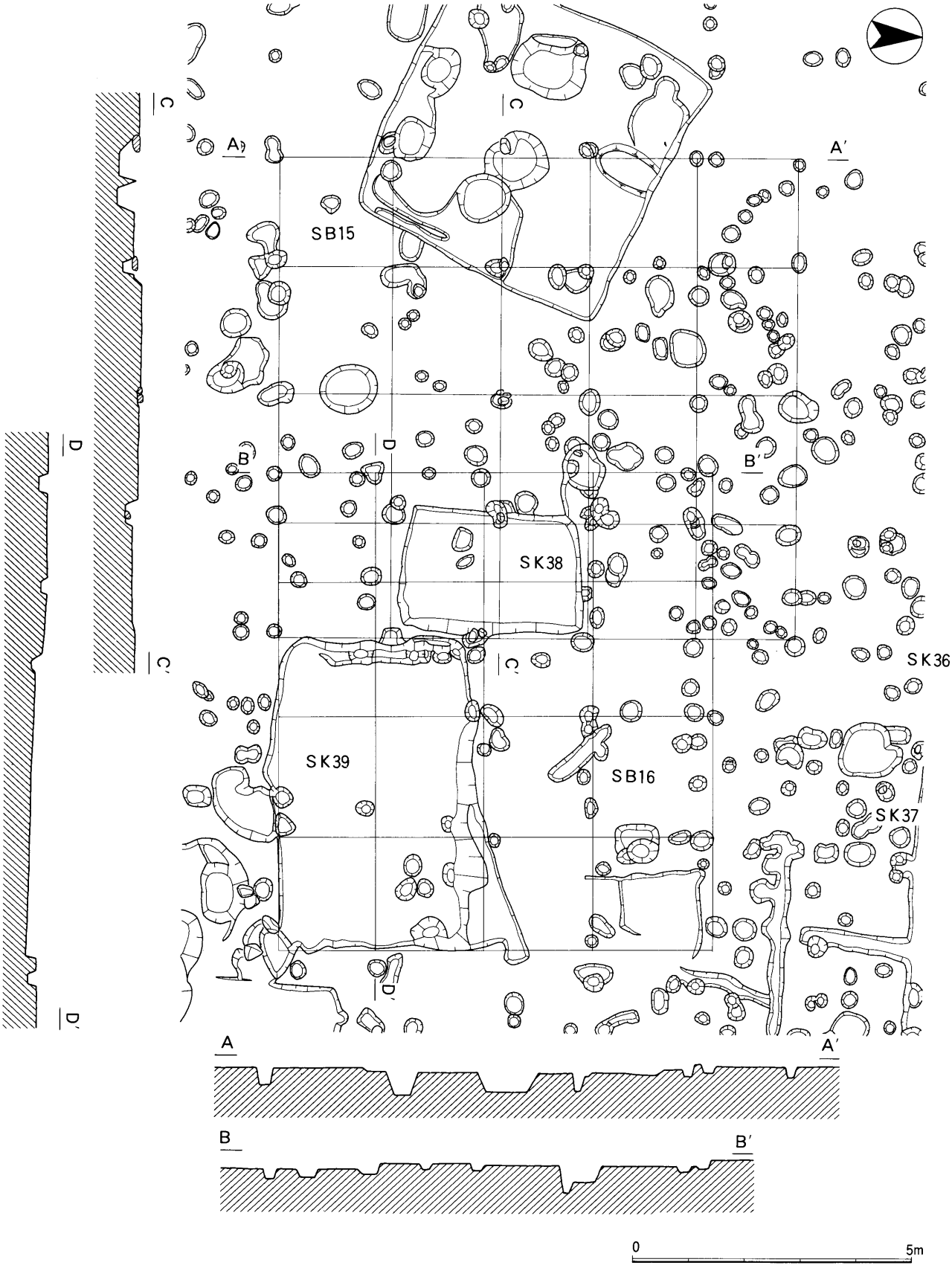


第86図　ＳＢ10断面図（１：100）　水糸高は87.000m　第87図　ＳＡ４実測図（１：100）　水糸高は84.200m

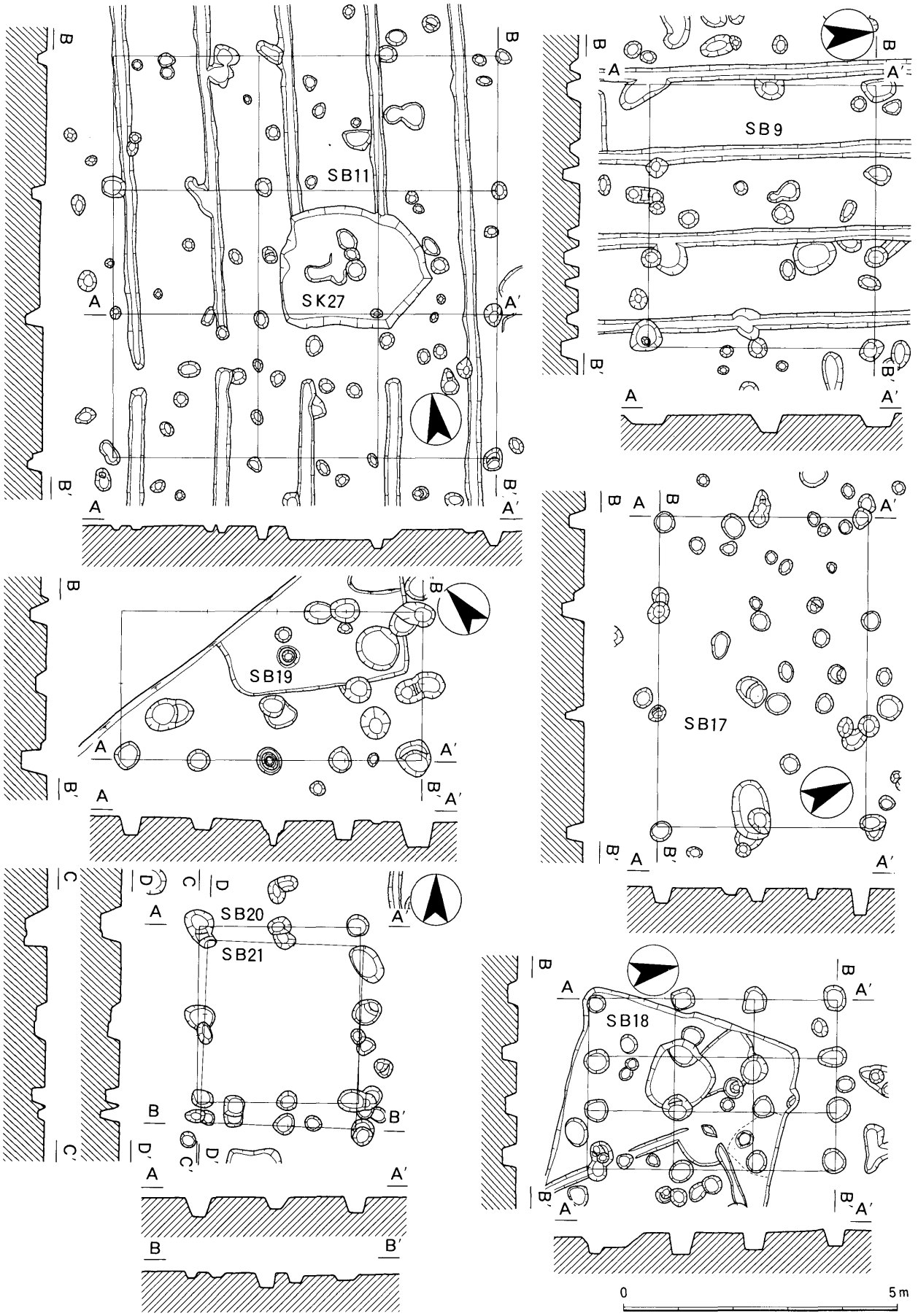


SB12～14位置図（1：400）

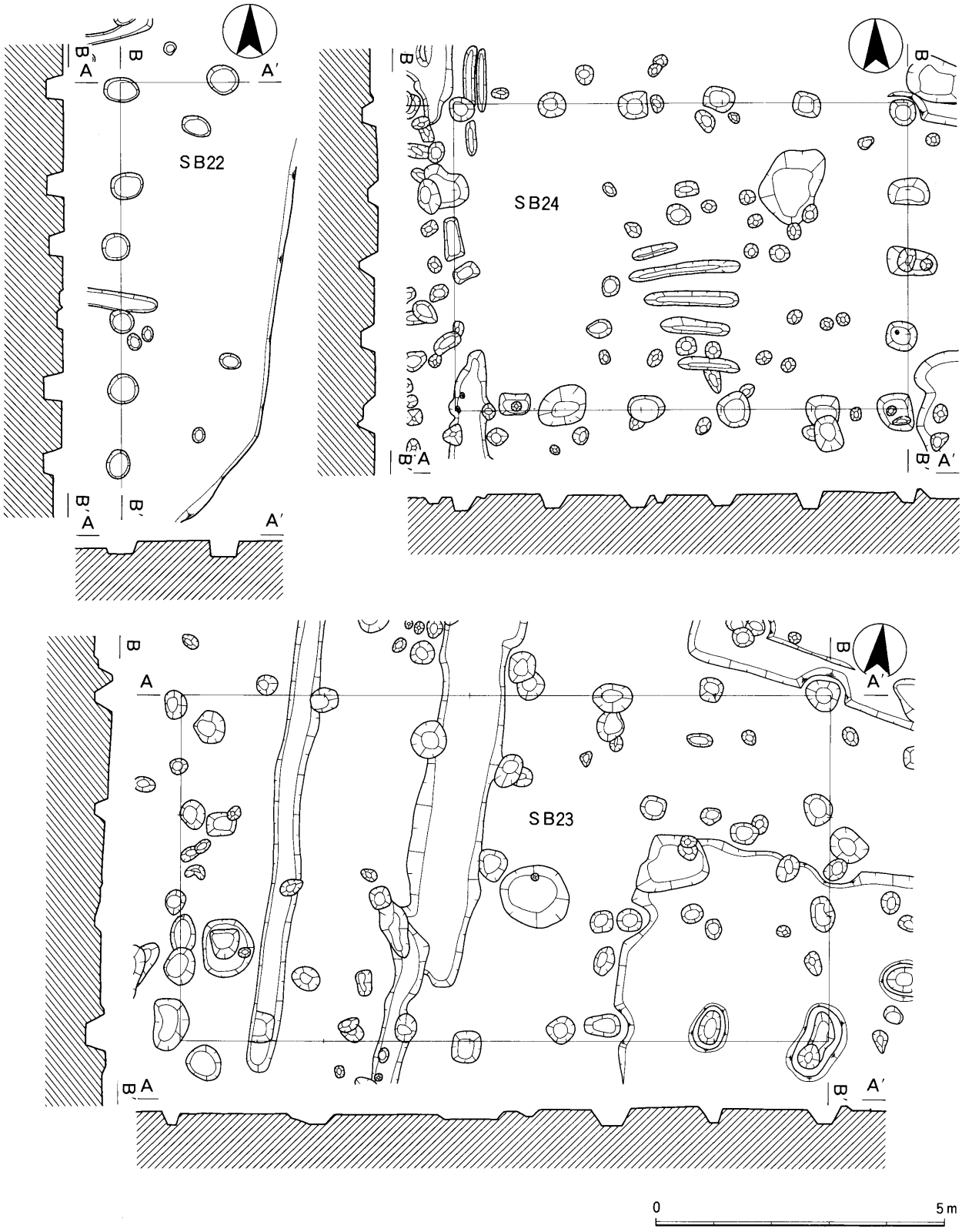
第88図　SB12～14実測図（1：100）　水糸高は86.600m



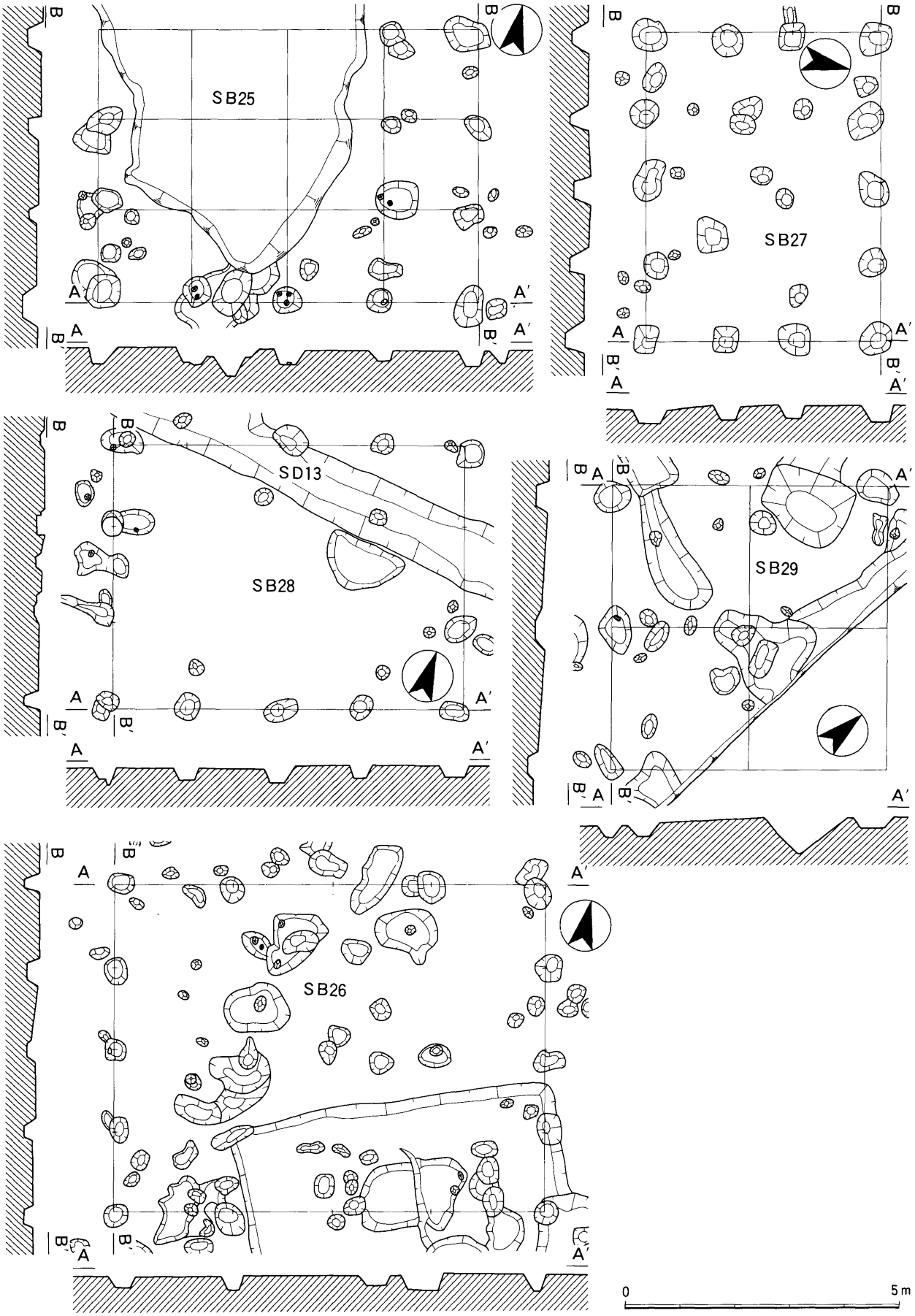
第89図　SB15・16実測図（1：100）　水糸高は86.600m



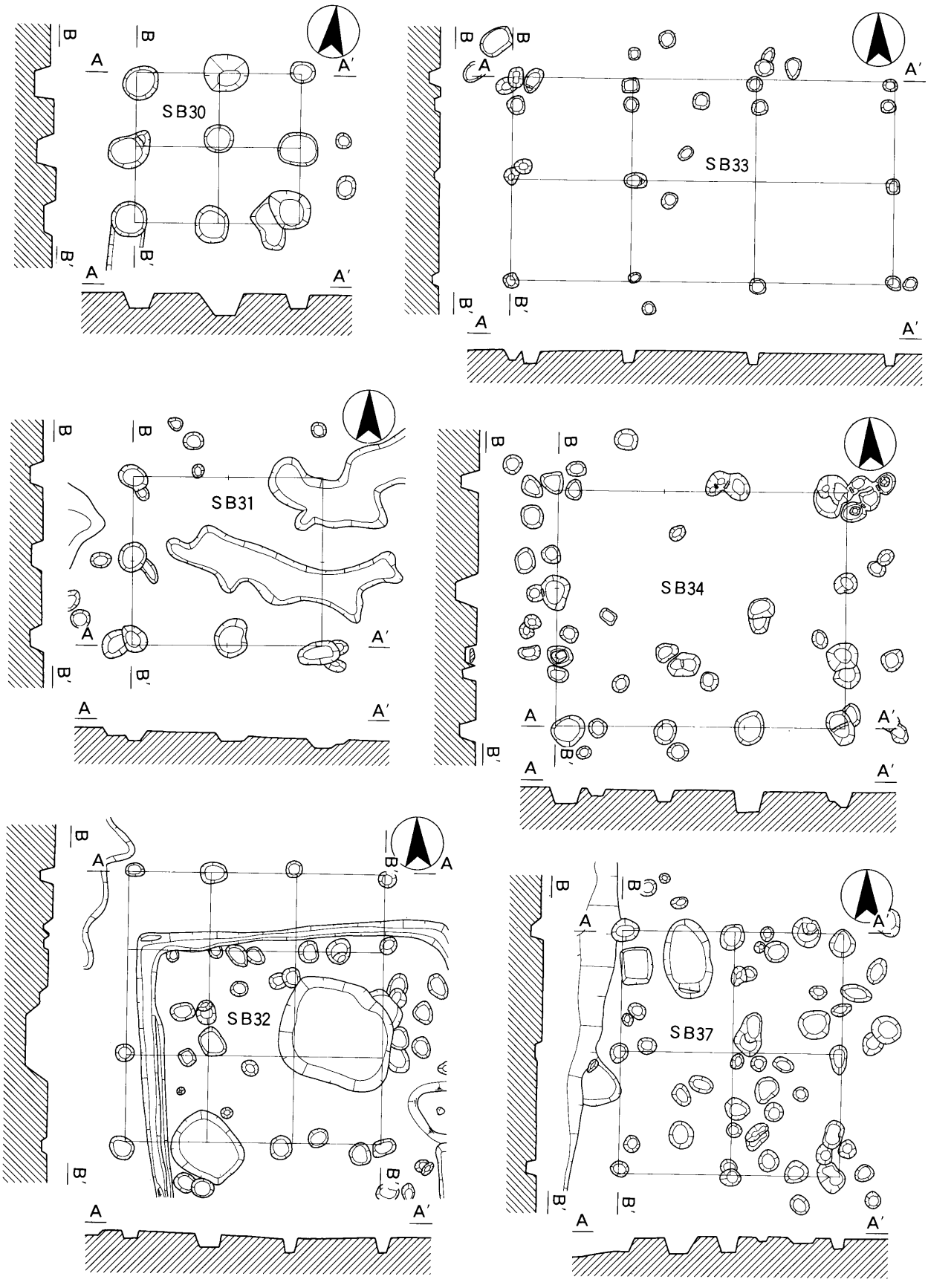
第90図　SB9・11・17～21実測図（1：100）　水糸高はSB9・17＝87.000m、SB11＝86.600m、SB18～21＝86.800m



第91図　ＳＢ22～24実測図（１：100）　水糸高は86.400m

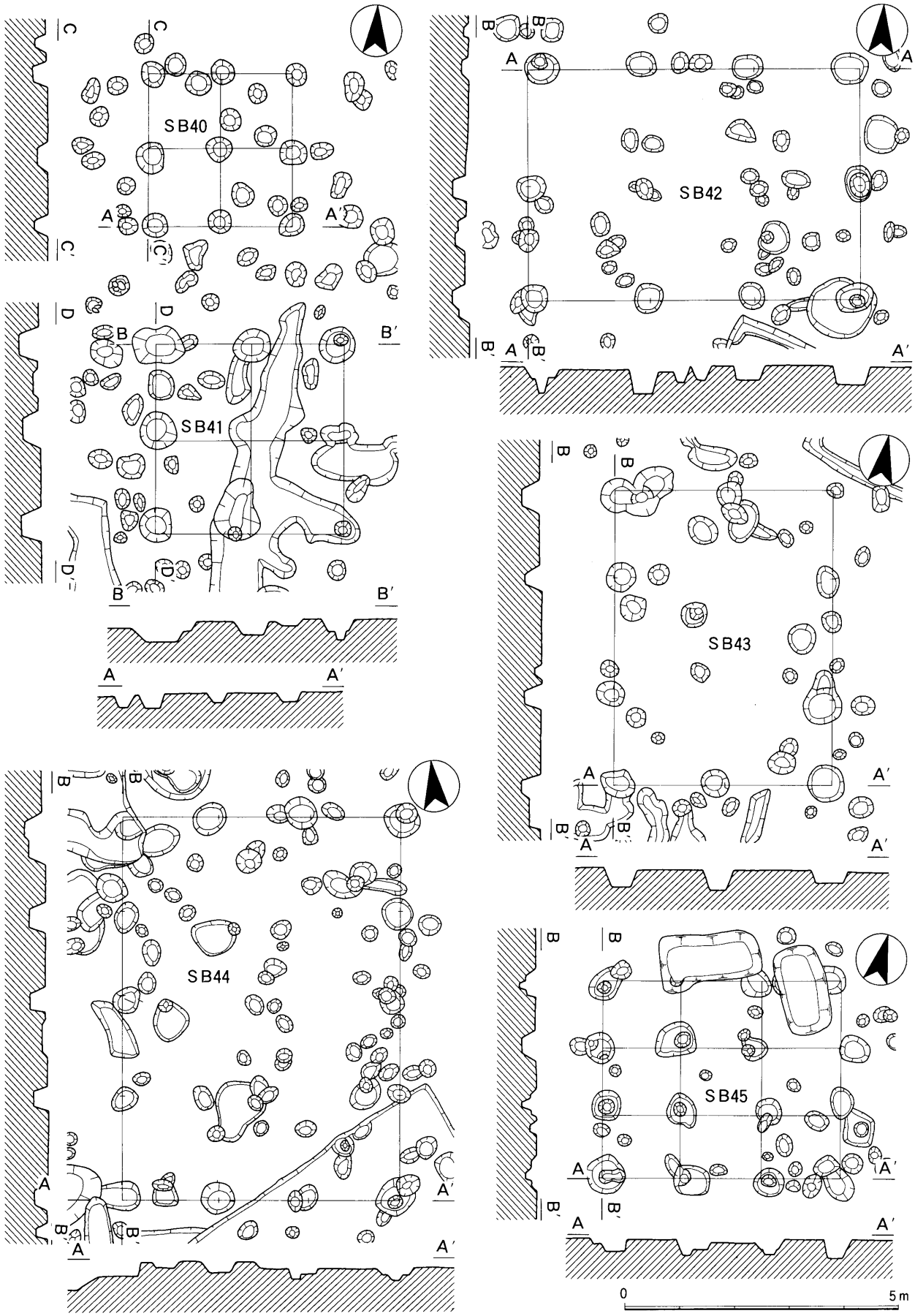


第92図　SB25～29実測図（1：100）　水糸高はSB25～27＝86.200m、SB28＝86.000m、SB29＝85.800m

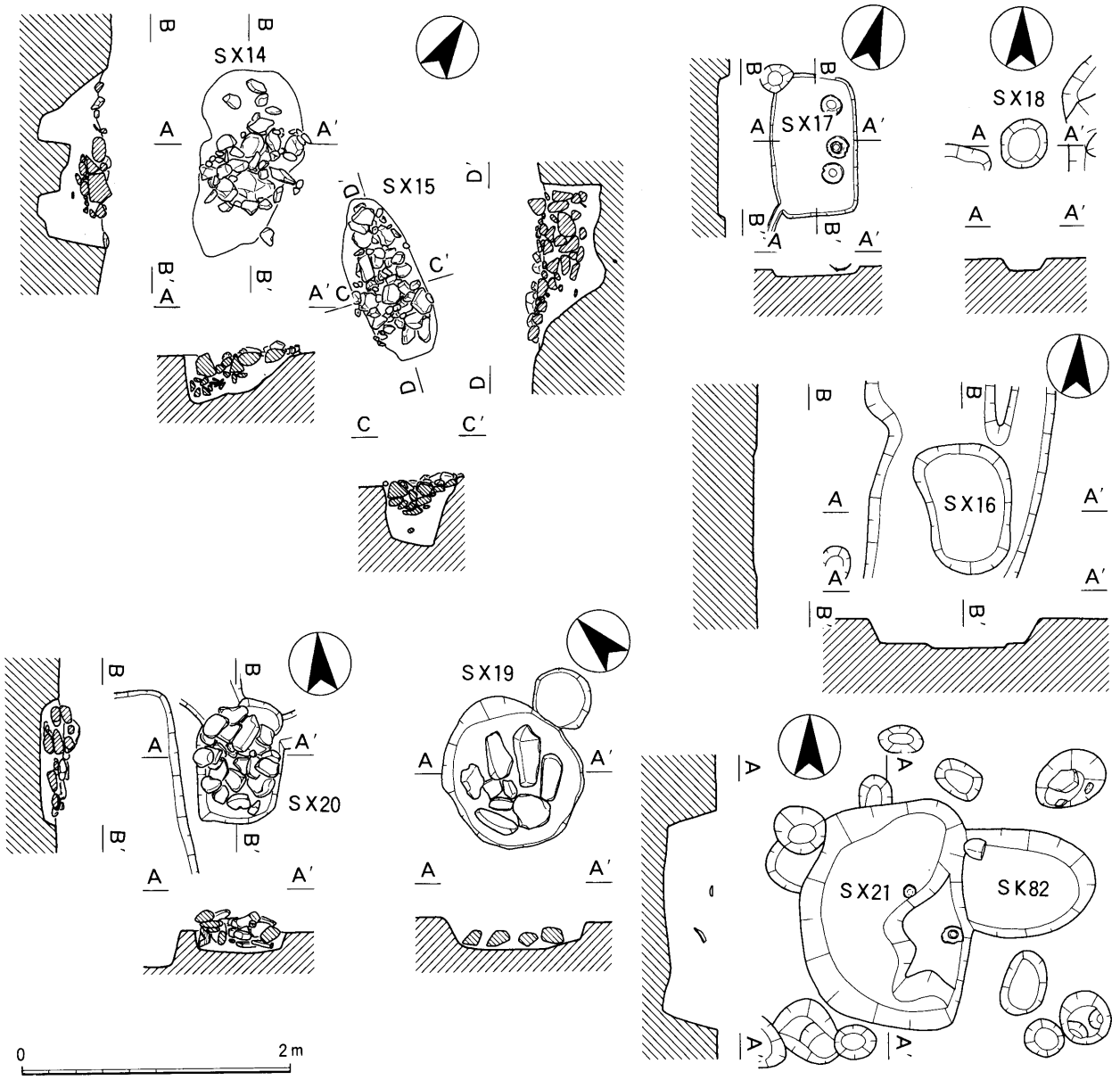


第93図　SB30～34・37実測図（1：100）　水糸高はSB30・31＝85.600m、SB32＝86.200m、SB33＝84.800m、SB34・37＝84.800m

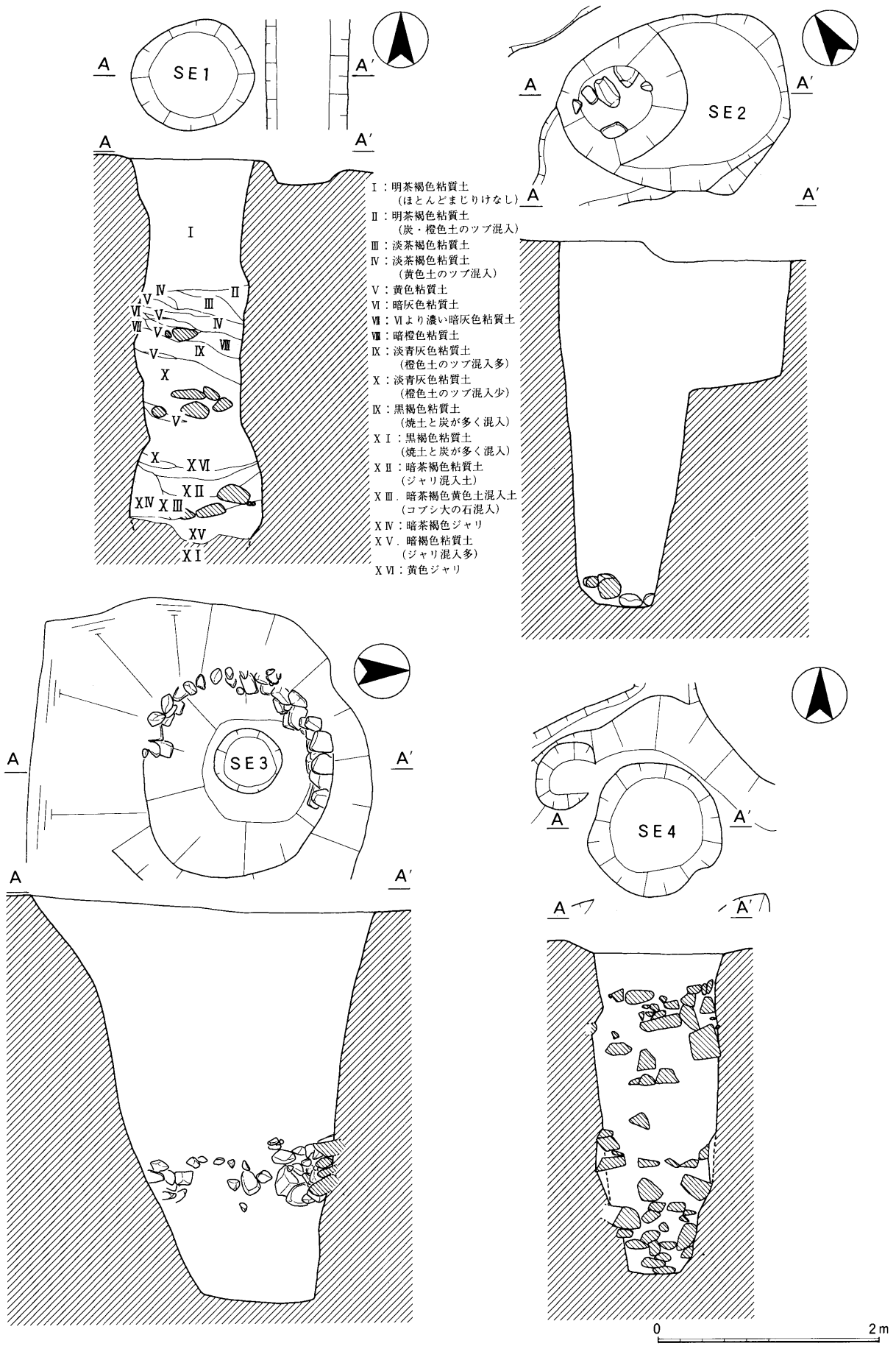
第94図　SB35・36・38・39実測図（1：100）　水糸高は、SB35＝85.200m、SB36＝84.800m、SB38・39＝84.600m



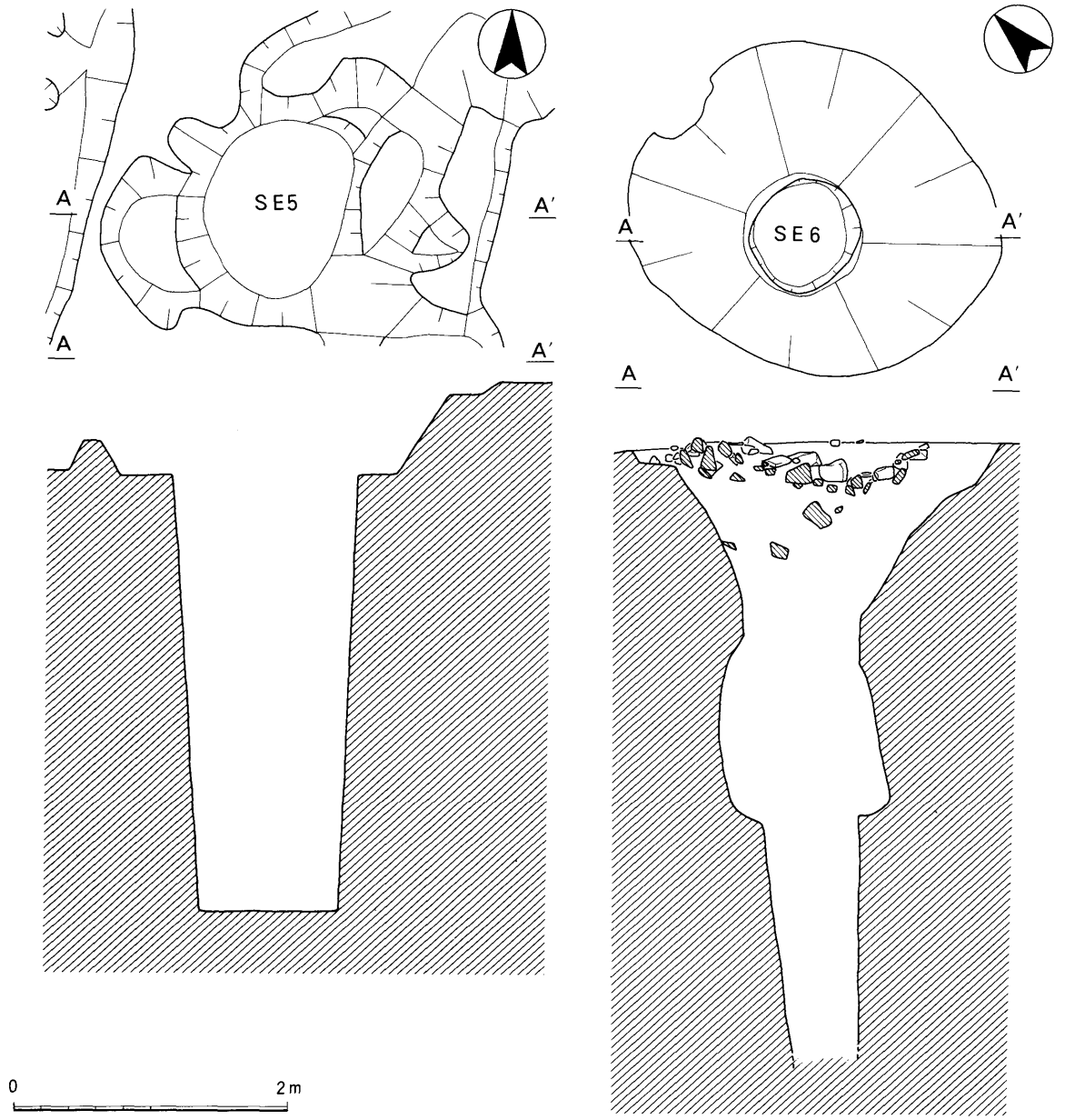
第95図　SB40～45実測図（1：100）　水糸高はSB40・42・44＝84.000m、SB41・43＝84.200m、SB45＝83.600m



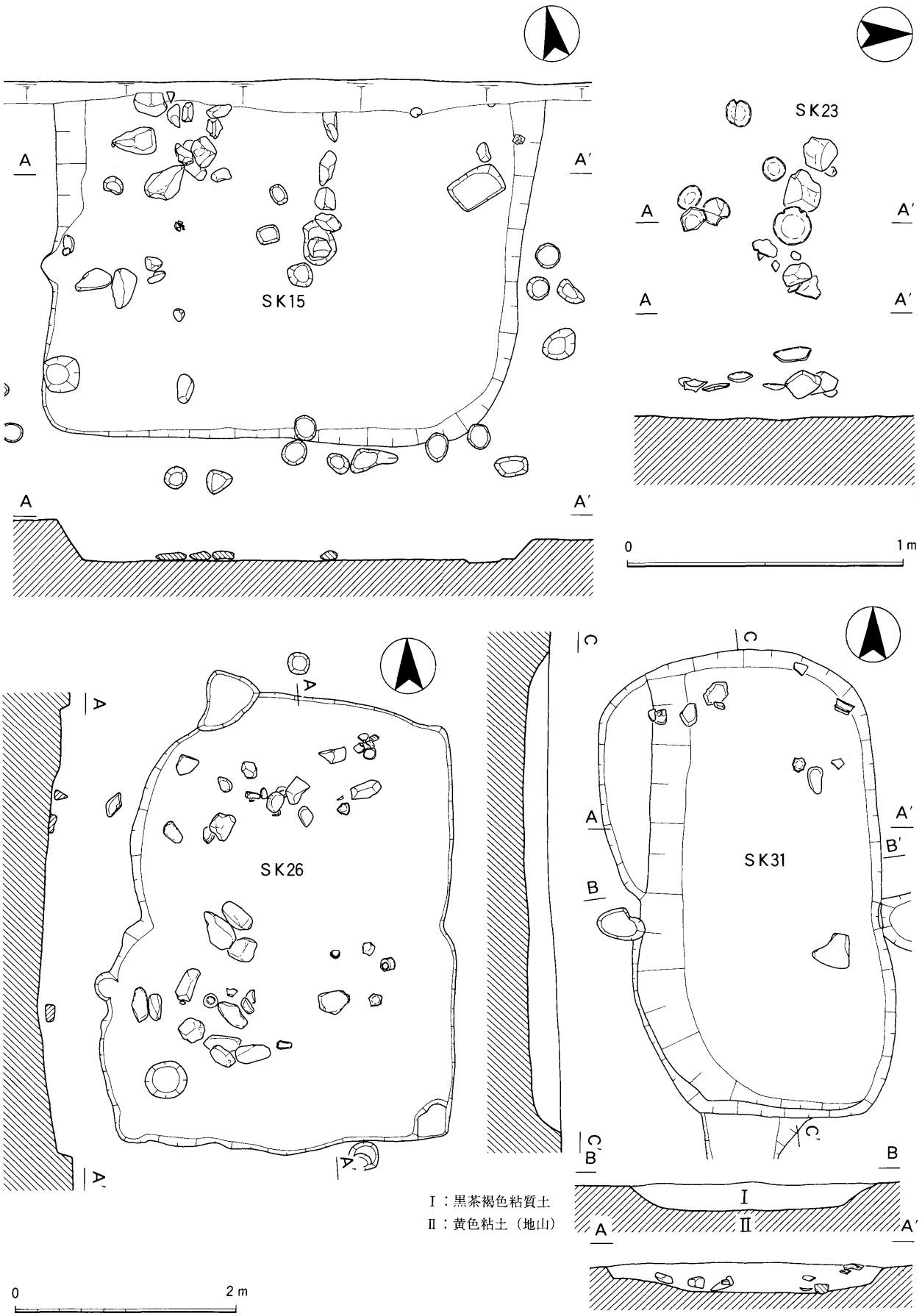
第96図　ＳＸ14～21実測図（１：50）　水糸高はＳＸ14・15＝88.000m、ＳＸ17＝84.200m、ＳＸ19・20＝87.600m、ＳＸ21＝84.000m



第97図　ＳＥ１～４実測図（１：50）　水糸高はＳＥ１＝86.600m、ＳＥ２＝85.400m、ＳＥ３＝85.300m、ＳＥ４＝85.000m

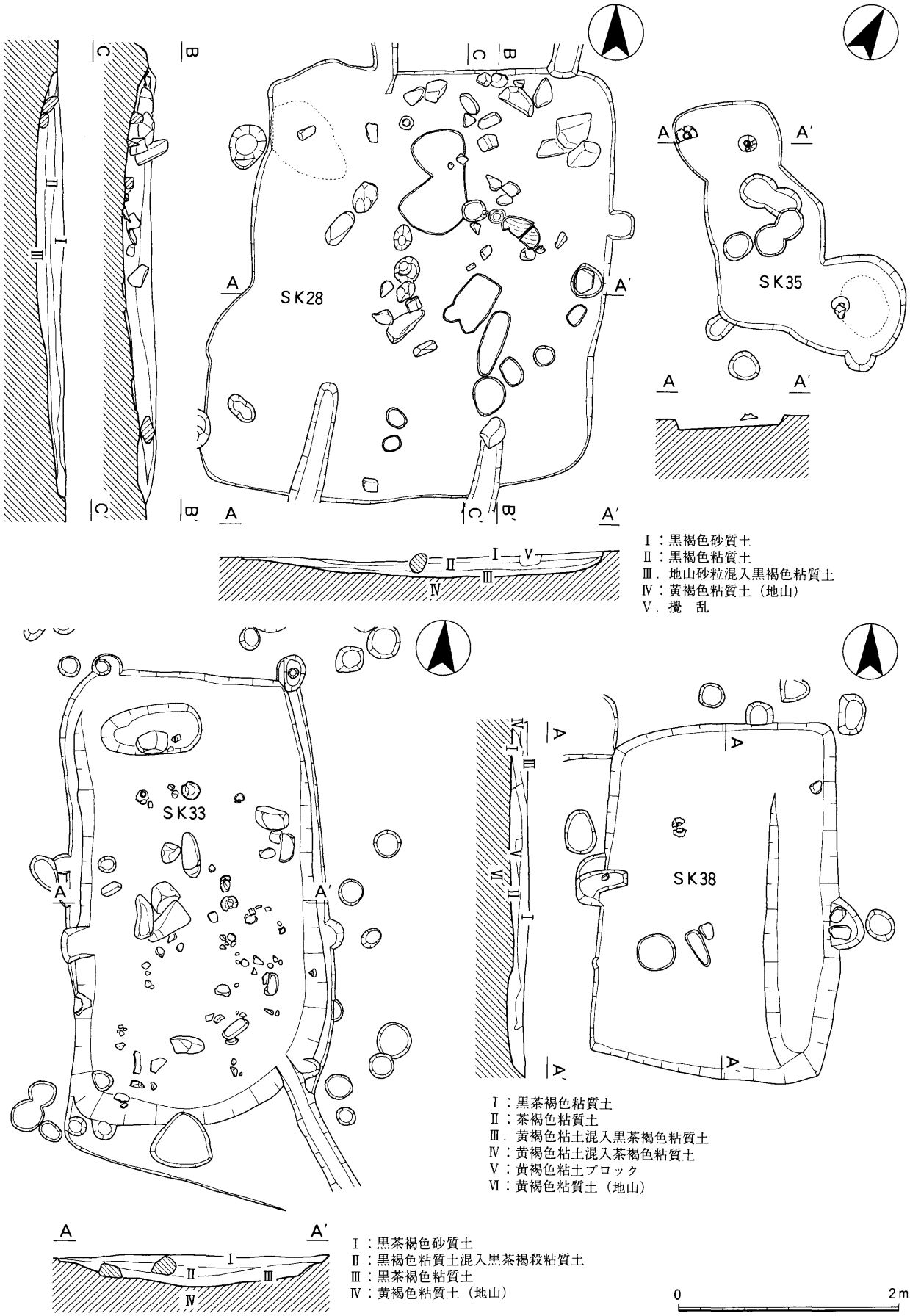


第98図　ＳＥ５・６実測図（１：50）　水糸高はＳＥ５＝84.400m、ＳＥ６＝84.200m

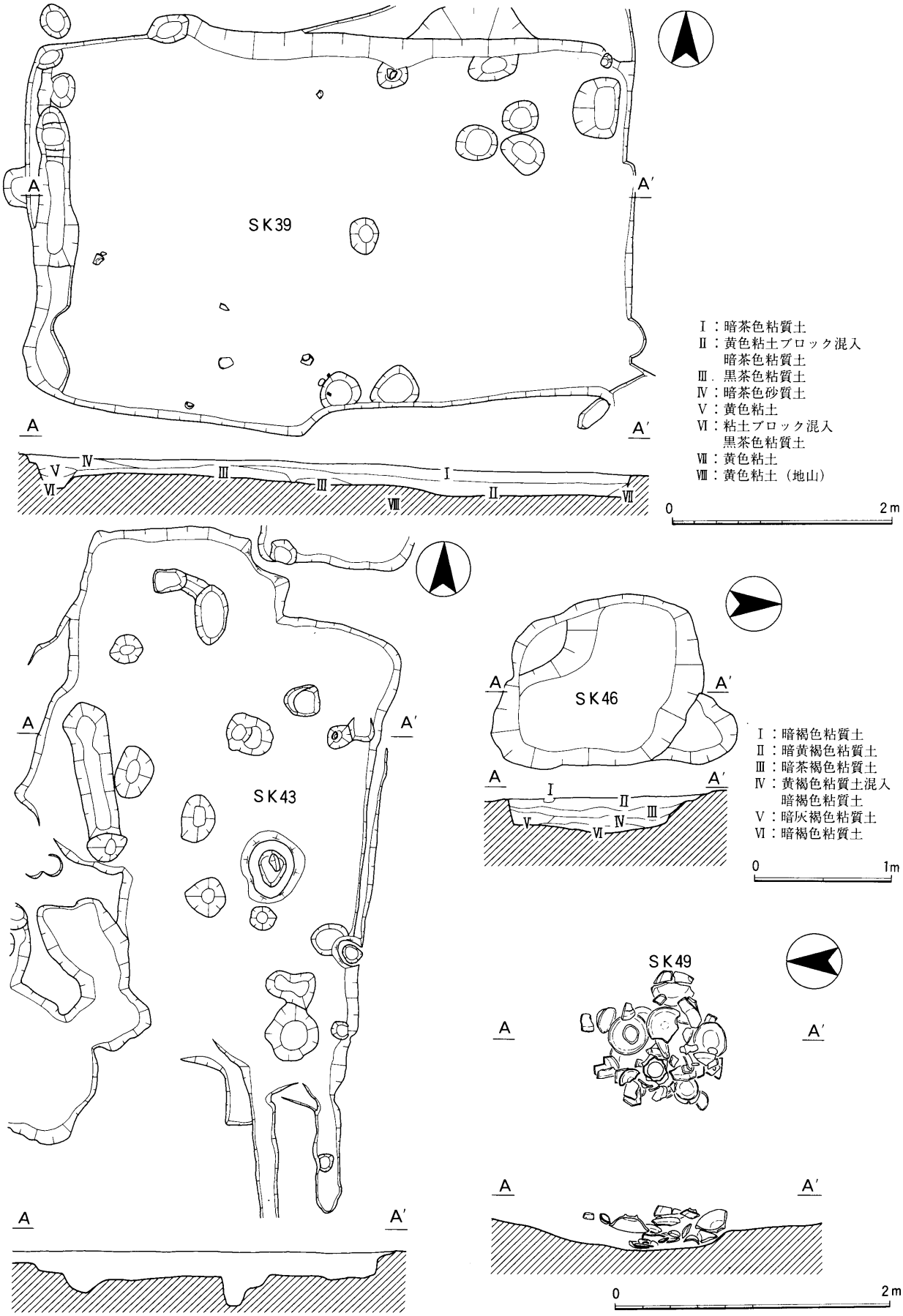


第99図　SK15・23・26・31実測図（1：50ただしSK23＝1：20）　水糸高はSK15＝88.200m、SK20＝88.000m、SK26・31＝87.600m

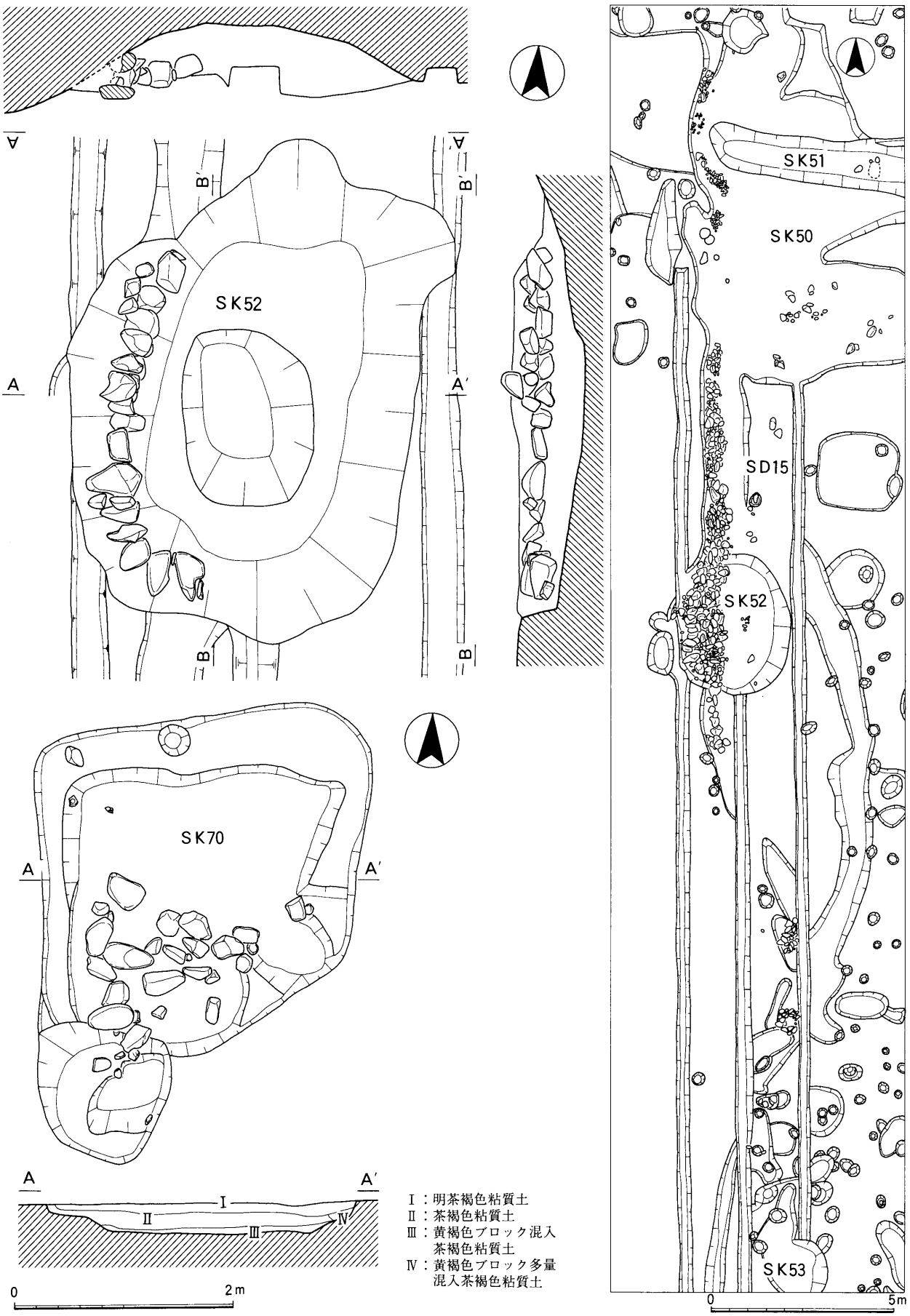
第100図　ＳＫ25実測図（１：60）　水糸高は88.600m



第101図　SK28・33・35・38実測図（1：50）　水糸高はSK28・35＝87.600m、SK33＝87.400m、SK38＝87.500m

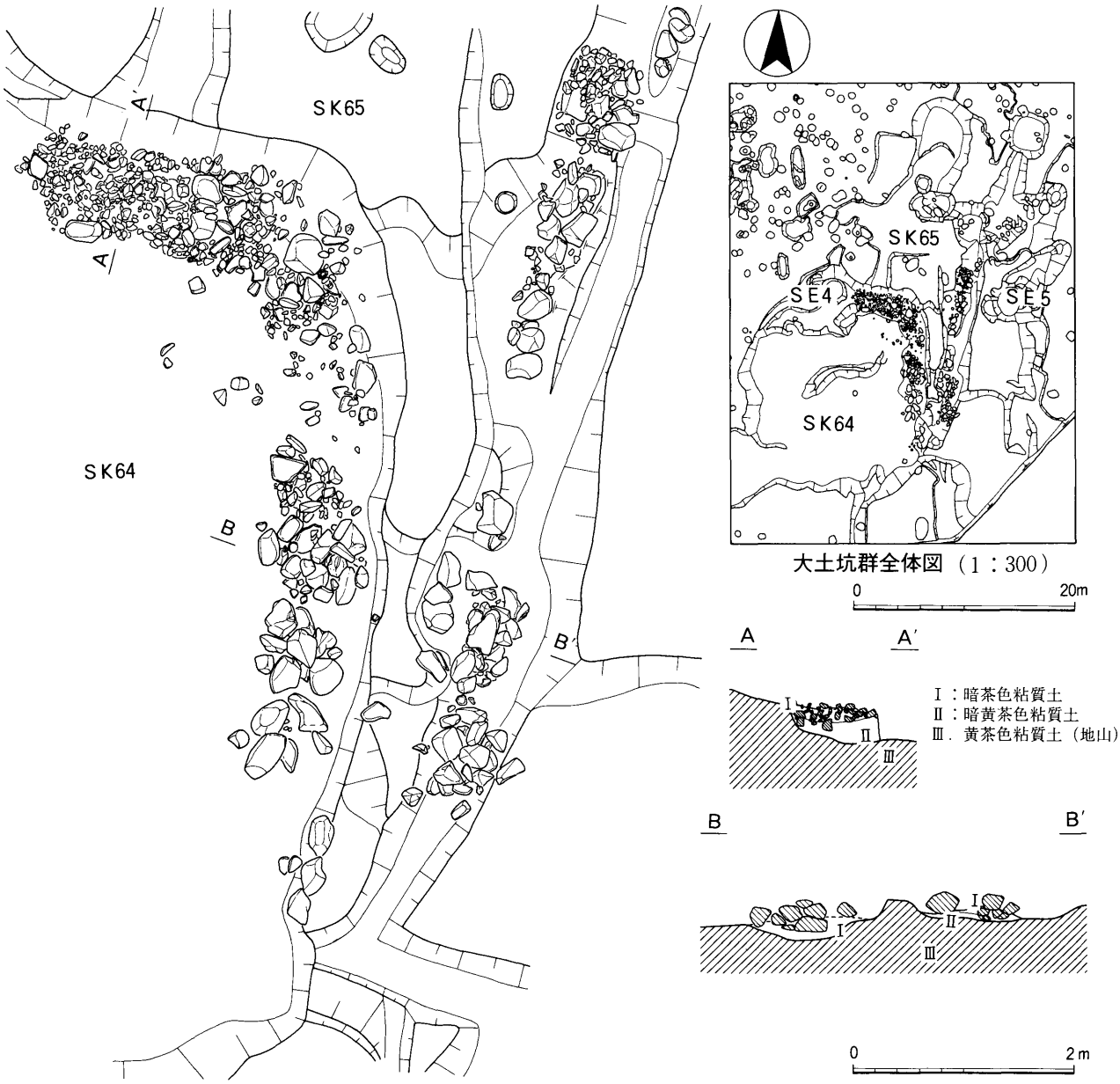


第102図　SK39・43・46・49実測図（SK39・43＝1：50、SK46＝1：40、SK49＝1：20）
水糸高はSK39＝87.400mSK43・49＝85.000m、SK46＝86.600m　800m、

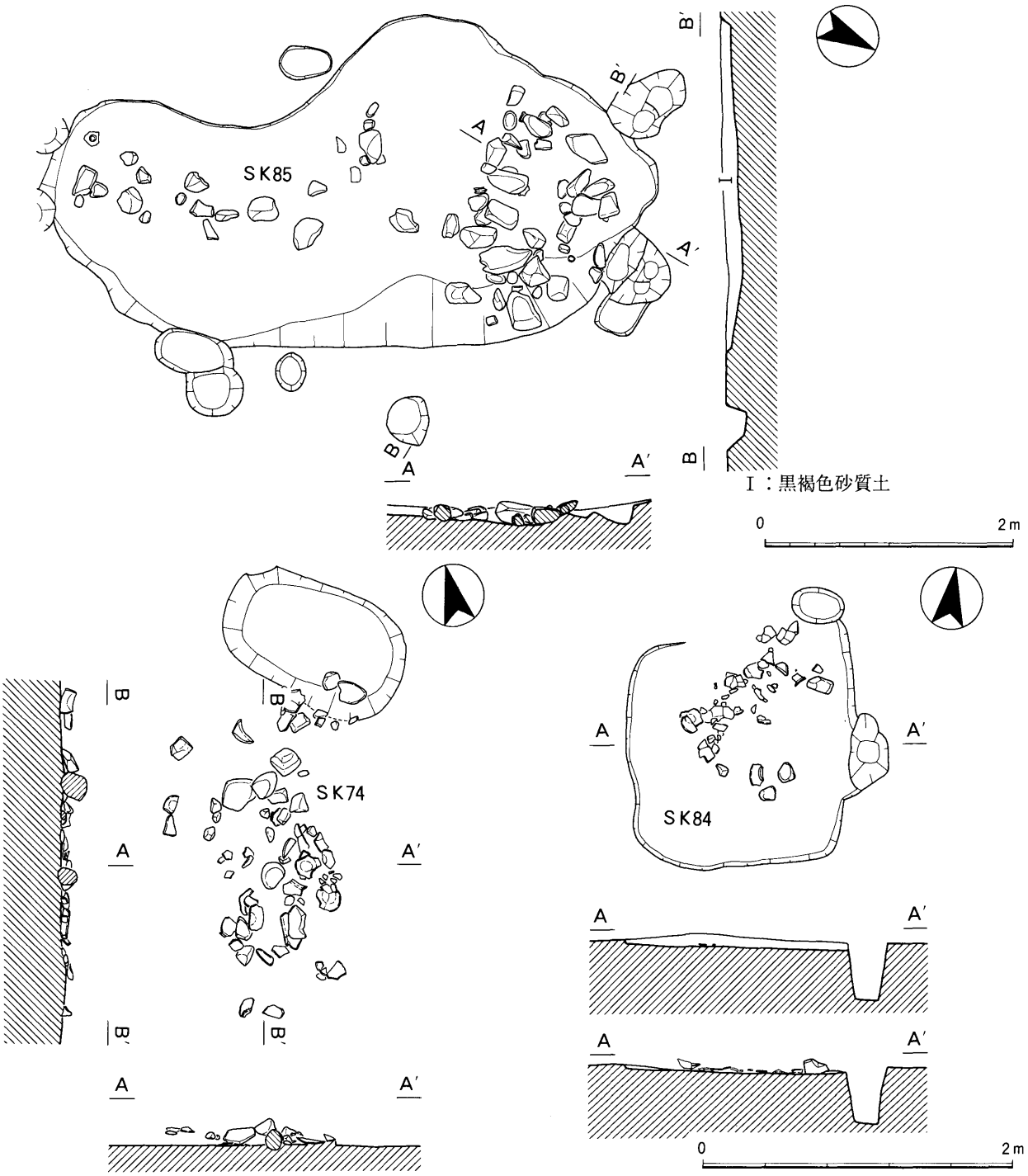


第103図　ＳＫ52・70実測図（１：50）**及びＳＫ52周辺図**（１：300）水糸高はＳＫ52＝86.300m、ＳＫ70＝84.000m

第104図　ＳＫ62実測図（１：60）　水糸高は85.800m



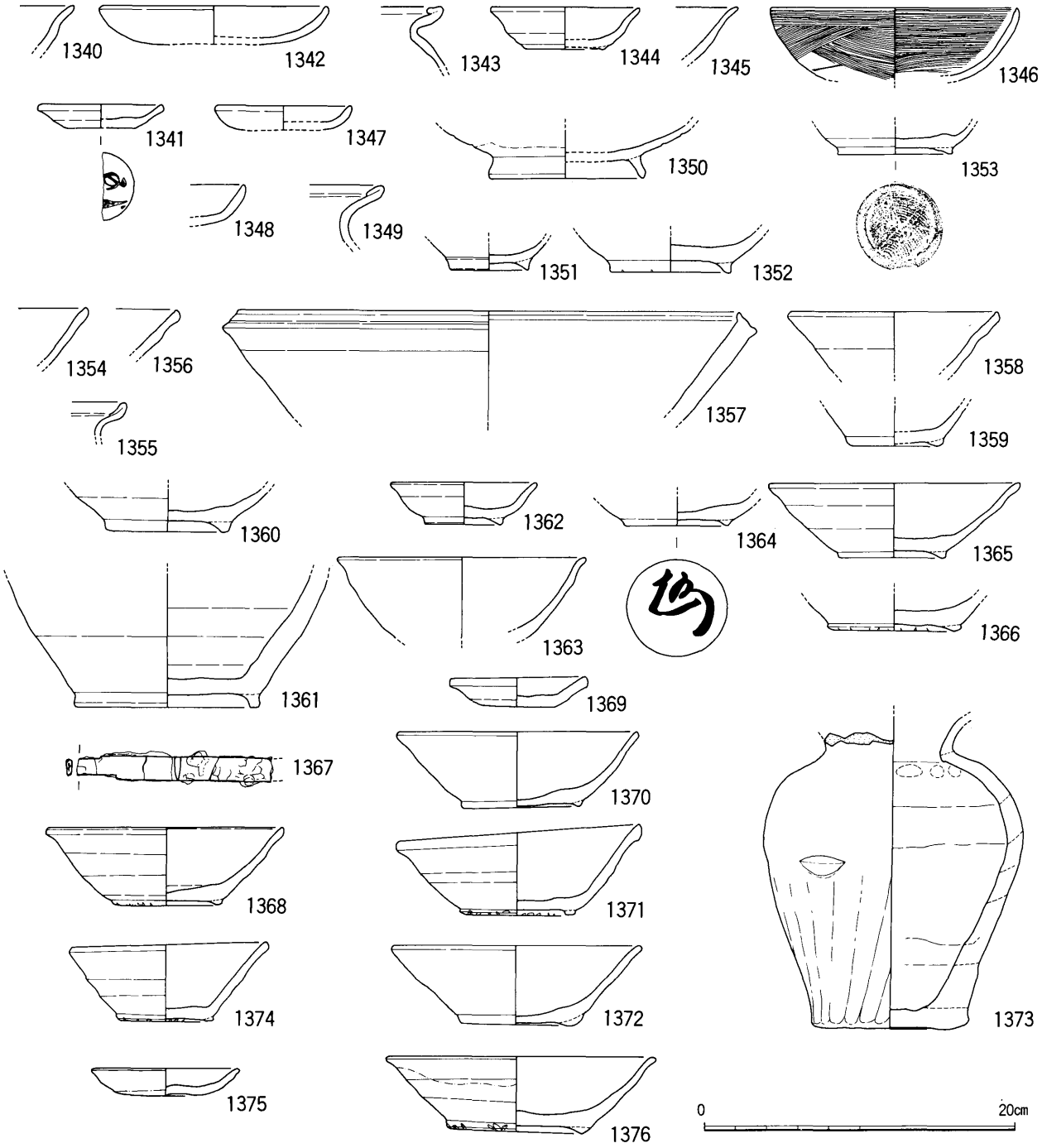
第105図　ＳＫ64付近実測図（1：60）　水糸高は85.300m



第106図　SK74・84・85実測図（SK85＝1：50、SK74・84＝1：40）水糸高はSK74＝84.200m、SK84・85＝83.800m

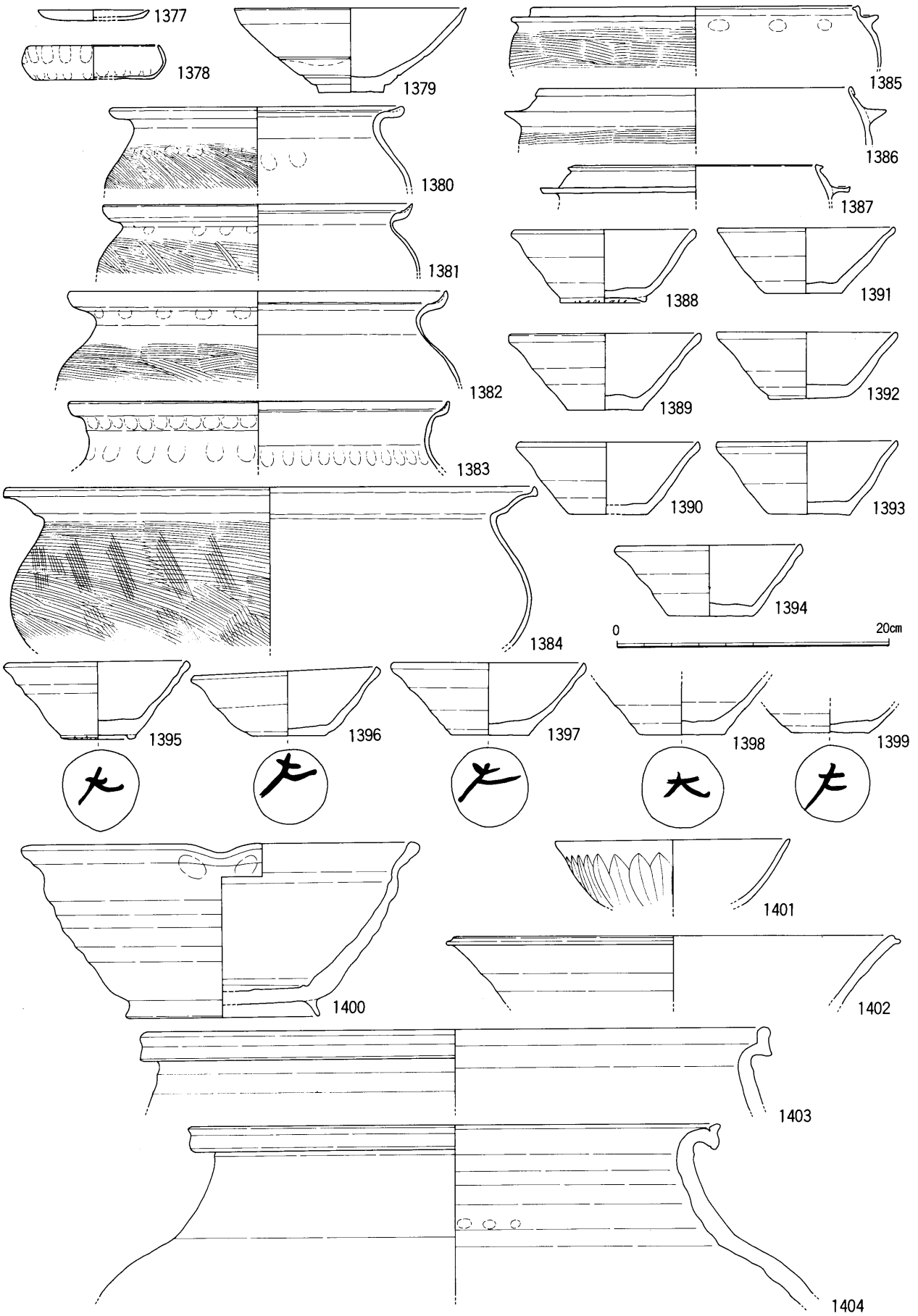
第107図　ＳＤ９～13・33実測図（ＳＤ９～13断面図＝１：50、ＳＤ33断面図＝１：60）
（平面図は１：200）

水糸高はＡ＝86.400m、Ｂ・Ｃ＝86.200m、Ｄ・Ｆ＝85.500m、Ｅ・Ｇ＝86.000m、Ｈ＝83.600m、Ｉ＝83.400m

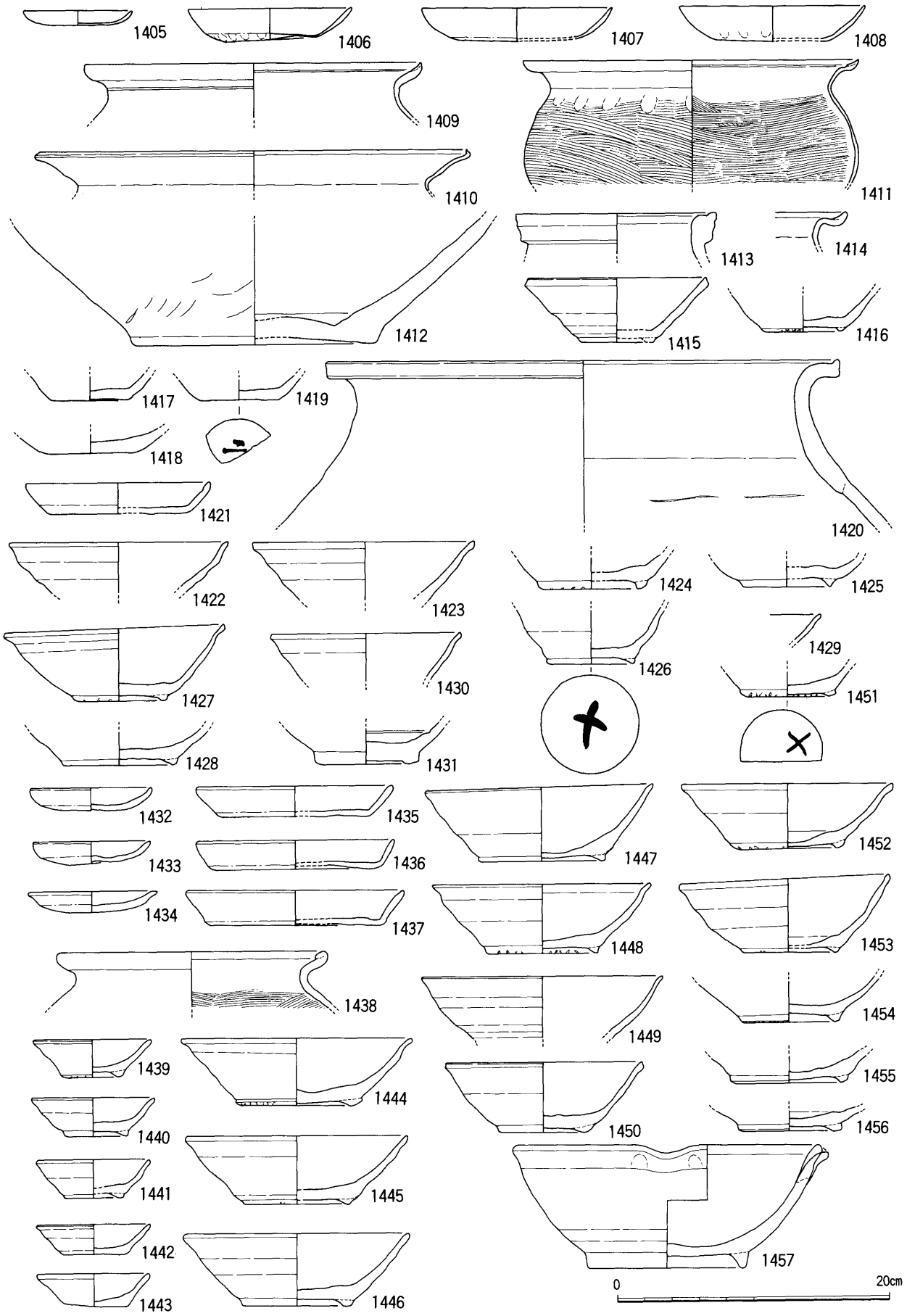


第108図　ＳＢ１・２・８・11～15・36・38・44、ＳＸ14～18・20・21 出土遺物実測図（１：４）

1340＝ＳＢ１、1341＝ＳＢ２、1342～1346＝ＳＢ８、1347～1349＝ＳＢ11、1350～1352＝ＳＢ12、1353＝ＳＢ13
1354＝ＳＢ14、1355＝ＳＢ15、1356・1357＝ＳＢ36、1358＝ＳＢ38、1359＝ＳＢ44、1360・1361＝ＳＸ14、1362～1366
＝ＳＸ15、1367・1368＝ＳＸ16、1369～1372＝ＳＸ17、1373＝ＳＸ18、1374＝ＳＸ20、1375・1376＝ＳＸ21

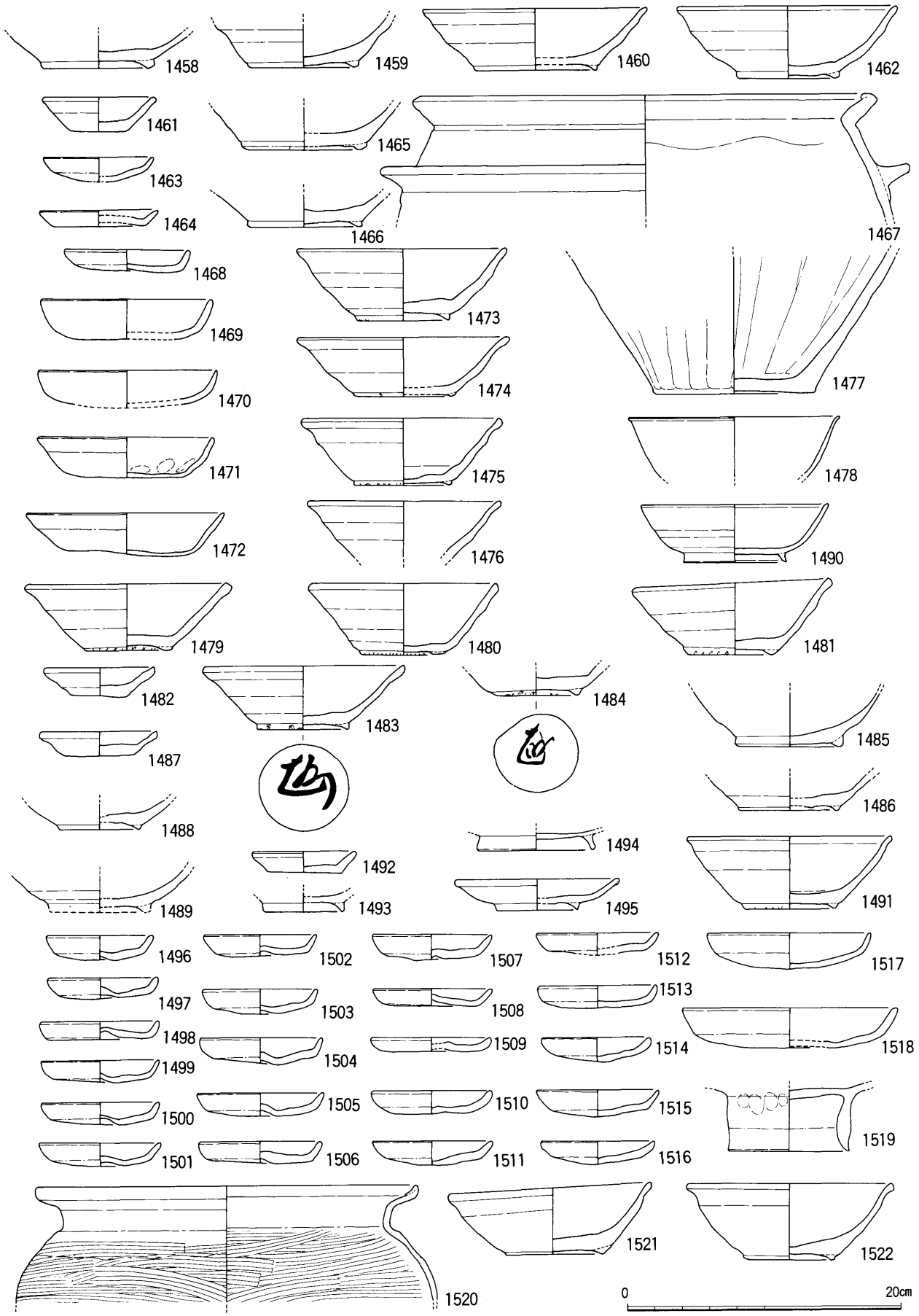


第109図　ＳＥ１・２出土遺物実測図（１：４）　1377～1379＝ＳＥ１、1380～1404＝ＳＥ２



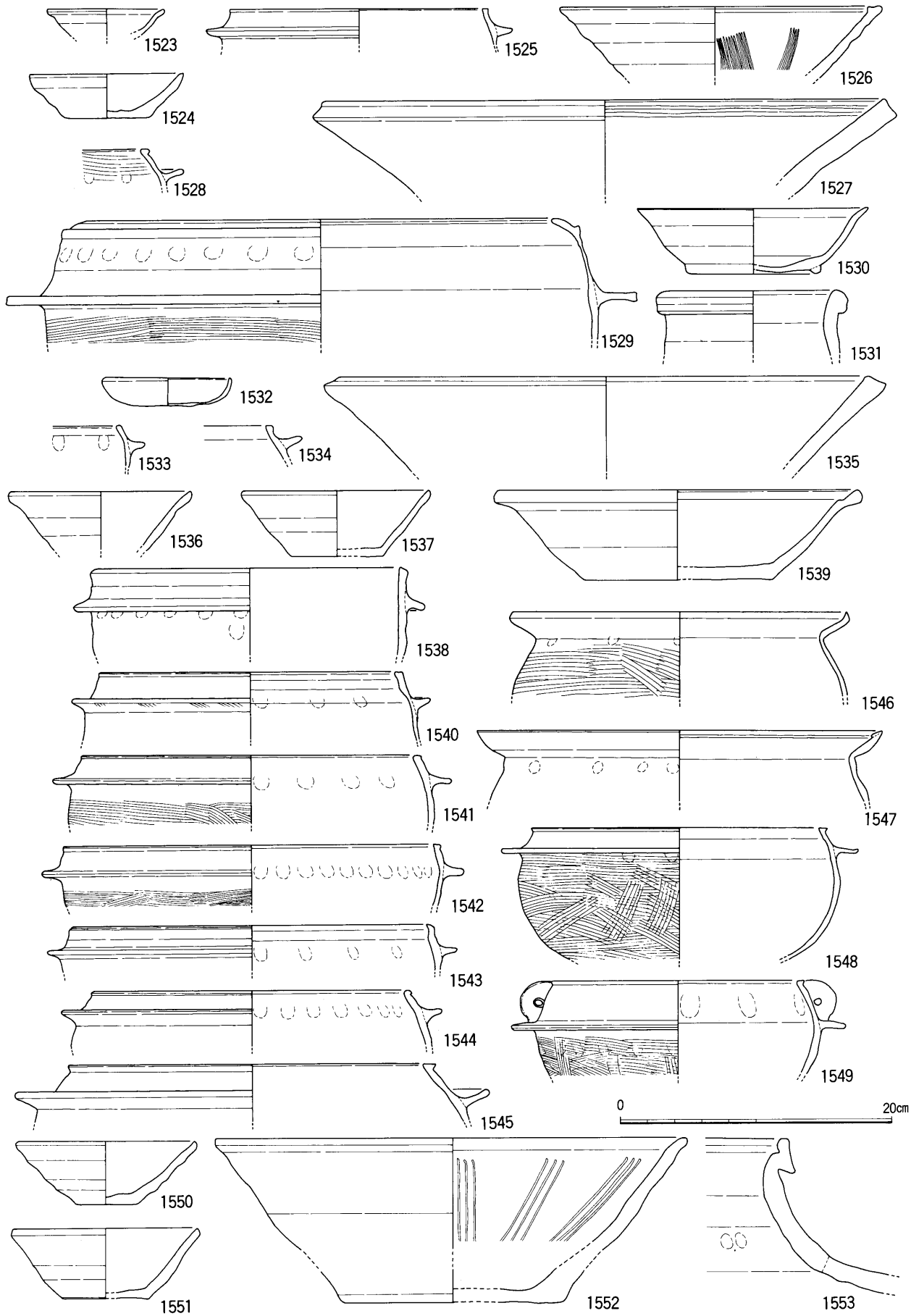
第110図　ＳＥ３・５・６、ＳＫ16～19・22・23・25出土遺物実測図（１：４）

1405～1412＝ＳＥ３、1413＝ＳＥ５、1414～1420＝ＳＥ６、1421～1425＝ＳＫ16、1426＝ＳＫ17、1427＝ＳＫ18、1428＝ＳＫ19、1429＝ＳＫ22、1430・1431＝ＳＫ23、1432～1457＝ＳＫ25



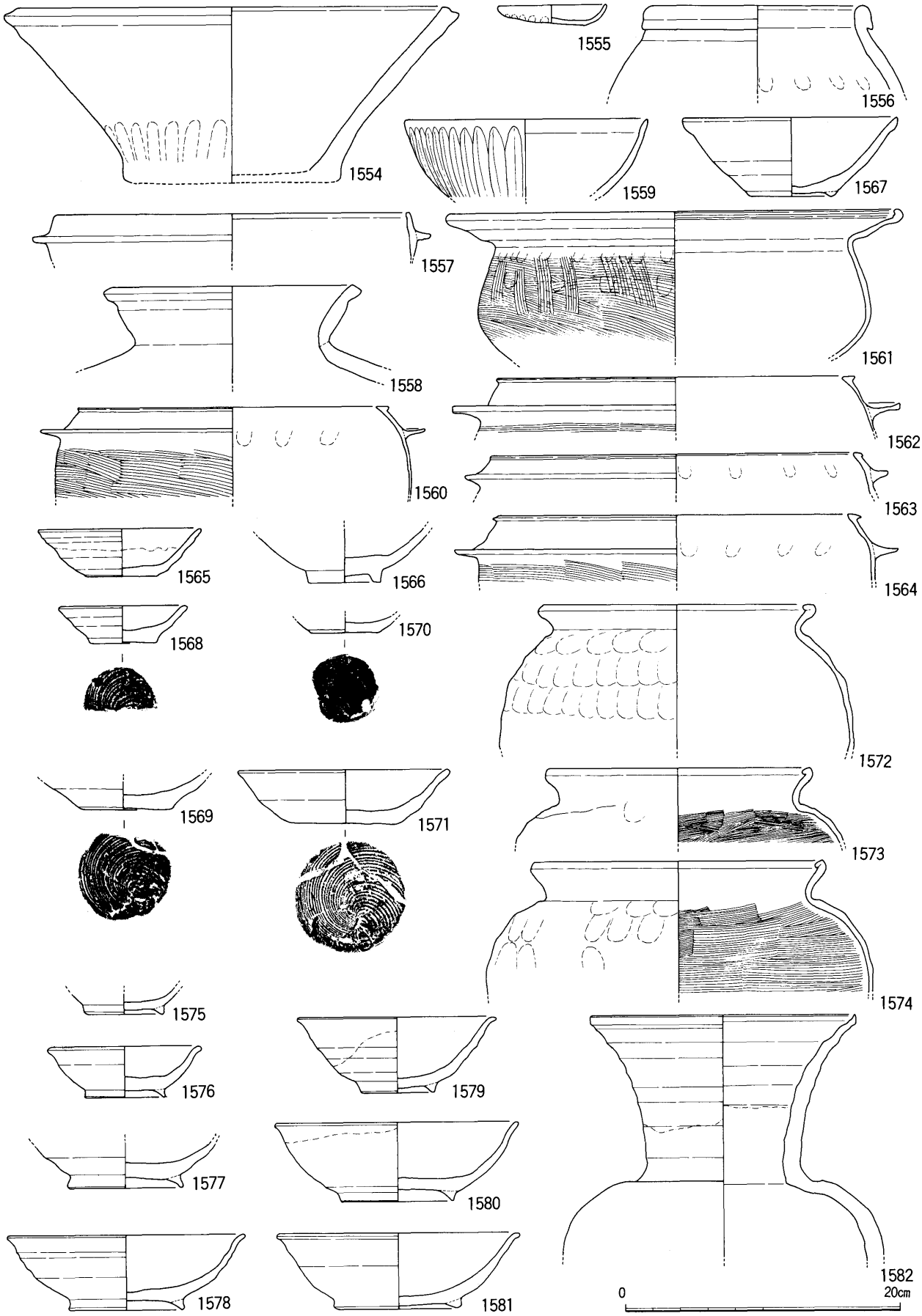
第111図　SK26・28・29・31・33・34～39・41～44・47～49出土遺物実測図（1：4）

1458～1460＝SK26、1461＝SK28、1462＝SK29、1463～1467＝SK31、1468～1477＝SK33、1478＝SK34、1479～1481＝SK35、1482＝SK36、1483・1484＝SK37、1485・1486＝SK38、1487～1489＝SK39、1490＝SK41、1491＝SK42、1492＝SK43、1493＝SK44、1494＝SK47、1495＝SK48、1496～1522＝SK49



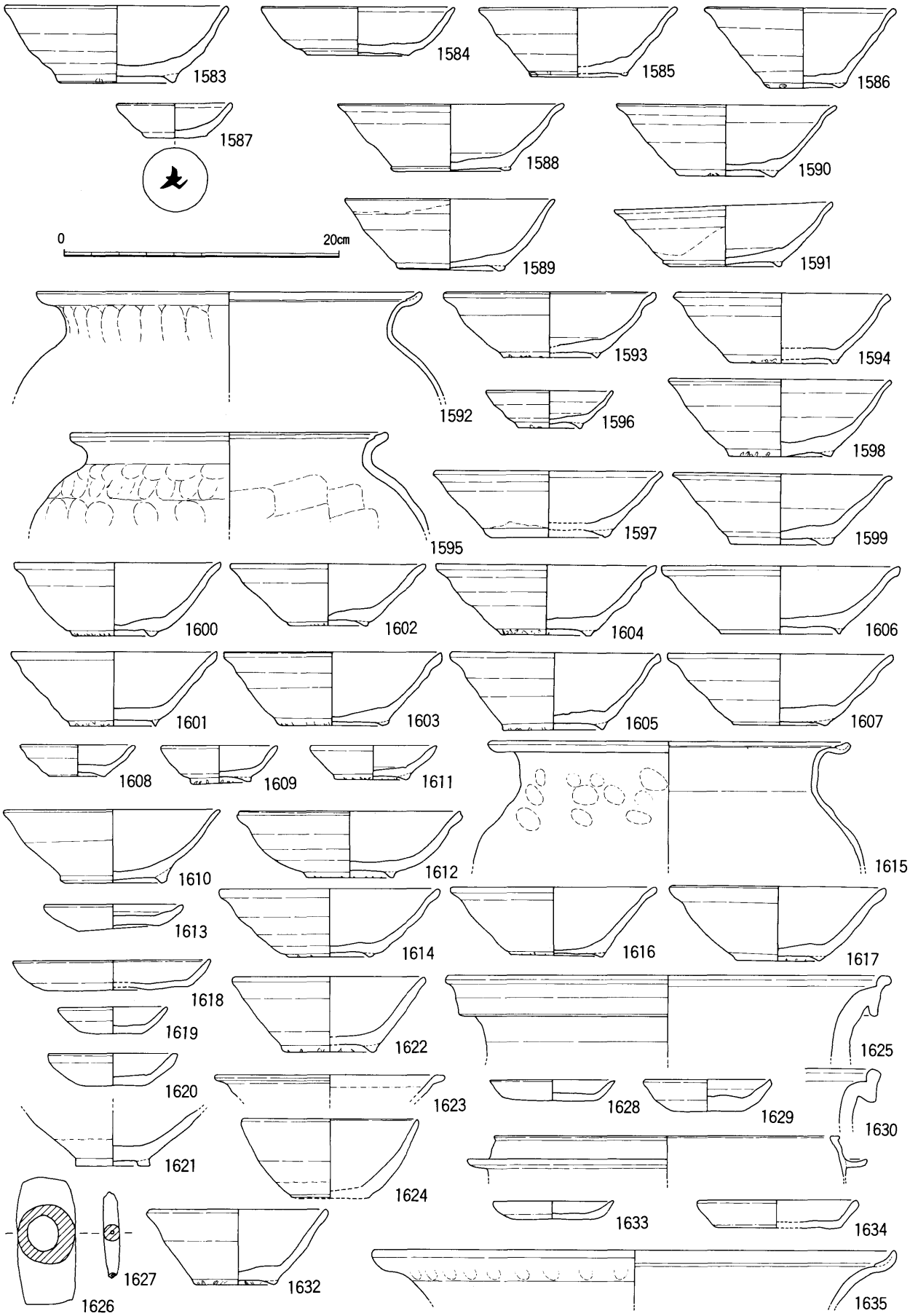
第112図　ＳＫ51～56・61・62出土遺物実測図（１：４）

1523～1527＝ＳＫ51、1528～1531＝ＳＫ52、1532～1535＝ＳＫ53、1536＝ＳＫ54、1537＝ＳＫ55、1538＝ＳＫ56、1539＝ＳＫ61、1540～1553＝ＳＫ62



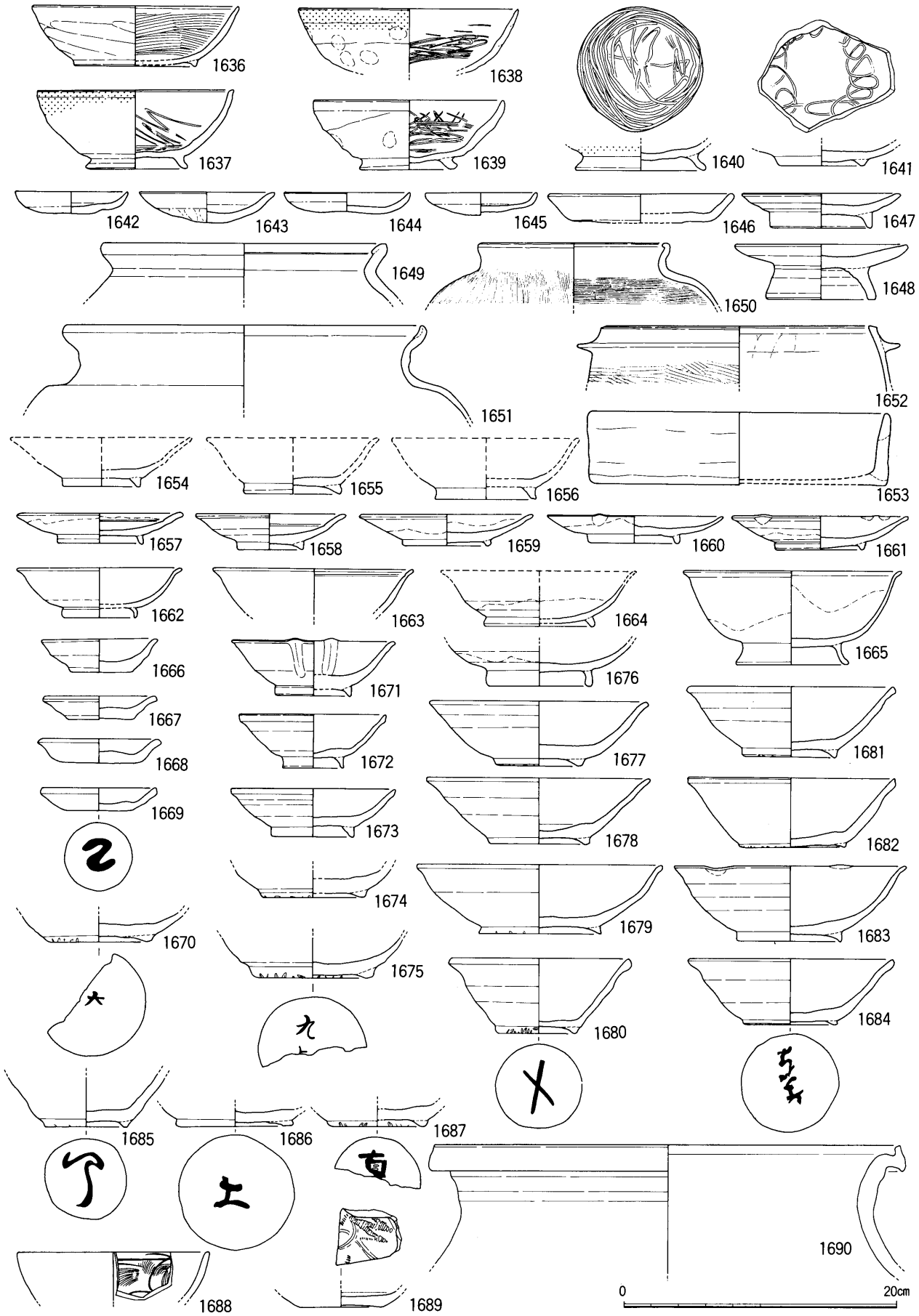
第113図　ＳＫ64～66・68～70・72・74出土遺物実測図（１：４）

1554＝ＳＫ64、1555・1556＝ＳＫ65、1557・1558＝ＳＫ66、1559＝ＳＫ68、1560＝ＳＫ69、1561～1566＝ＳＫ70、1567＝ＳＫ72、1568～1582＝ＳＫ74

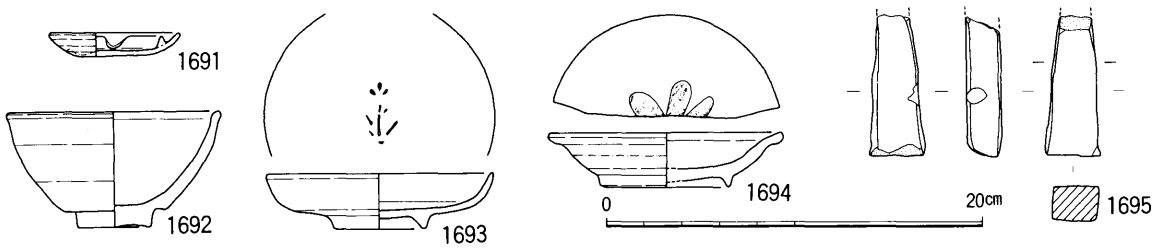


第114図　ＳＫ75～78・80・81・84～86、ＳＤ３～６・８・15・18・19・23・29出土遺物実測図（１：４）

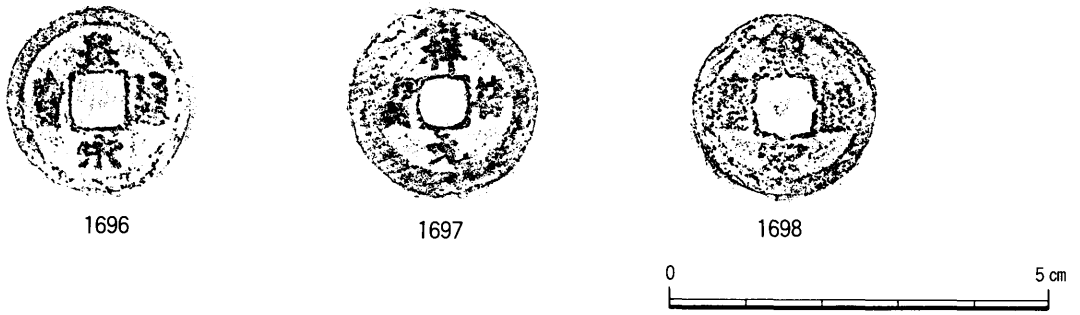
1583＝ＳＫ75、1584＝ＳＫ76、1585＝ＳＫ77、1586＝ＳＫ79、1587＝ＳＫ80、1588～1591＝ＳＫ83、1592～1594＝ＳＫ84、1595～1599＝ＳＫ85、1600～1607＝ＳＤ３、1608～1610＝ＳＤ４、1611・1612＝ＳＤ５、1613・1614＝ＳＤ６、1615～1617＝ＳＤ８、1618～1627＝ＳＤ15、1628・1629＝ＳＤ18、1630・1631＝ＳＤ19、1632＝ＳＤ23、1633～1635＝ＳＤ29



第115図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第116図　包含層出土遺物実測図（1：4）



第117図　ＳＫ45出土銭貨拓影図（1：1）

遺構番号 ＳＸ	図番号	規　模　（m）			備　　考
		幅	長　さ	深　さ	
14	96	0.8	1.3	0.45	楕円形、13世紀前半
15	96	0.5	1.25	0.5	楕円形、13世紀前半
16	96	0.6	1.0	0.05	楕円形、13世紀前半
17	96	0.65	1.05	0.08	楕円形、13世紀前半
18	96	0.3	0.3	0.1	円形、13世紀前半
19	96	1.15	1.0	0.2	円形、時期不明
20	96	0.65	0.95	0.16	楕円形、13世紀前半
21	96	1.2	1.65	0.4	楕円形、12世紀後半

第47表　中世墓一覧表

遺構番号 ＳＥ	図番号	規　模（m）		備　　考
		径	深　さ	
1	97	1.1	3.5	15世紀後半
2	97	1.15	3.3	12世紀後半に掘削、16世紀に廃絶
3	97	2.5	3.5	深さ２ｍのあたりから底にかけて不定型の川原石による石組みが小口積みで数段組まれている、14～16世紀
4	97	1.15	3.0	時期不明
5	98	1.3	3.2	室町時代
6	98	0.85	4.45以上	上面は径2.3m、1.3m下がったところから径0.85mで深さ3.15m以上の素掘りの井戸、14世紀前半

第48表　井戸一覧表

遺構番号 SB	図番号	建物方向	規模（m）	柱	間	形式	柱掘形		備考
			桁行×梁行	桁　間（m）	梁　間（m）		大きさ(cm)	形	
1	82	E20°S	4(7.8)×3(5.4)	1.95×4	1.8×3	総柱	20～30	円	東西棟
2	81	E13°S	4(8.6)×4(7.4)	2.15×4	1.85×4	総柱	～25～	円	東西棟
3	81	E11°S	5(11.3)×3(6.7)	西から2.35+2.7+2.1+2.0+2.15	北から 2.35 +2.1+2.25	総柱	20～40	円	東西棟
4	81	E45°S	2(3.4)×2(2.8)	1.7×2	1.4×2	側柱	～30～	円	東西棟
5	82	E23°S	2(5.2)×――	2.6×2	――	側柱	30～50	円	東西棟
6	82	E11°N	4(8.0)×2(3.9)	西から2.1+2.1+2.1+1.7	北から2.5 +1.4	側柱	30～40	円	東西棟
7	82	E 6°S	3(5.7)×2(4.6)	1.9×3	2.3×2	側柱	～40～	円	東西棟
8	83·84	E 9°S	8(18.2)×6(14.4)	西から2.2+2.2+2.2+2.2+2.2+2.4+2.4+2.4	2.4×6	側柱	30～40	円	東西棟、東側に溝２条SD4・5を伴うSK25
9	90	E 7°S	3(4.8)×2(4.2)	1.6×3	2.1×2	側柱	30～50	円	東西棟
10	85·86	E 5°S	10(23.7)×6(15.3)	西から2.5+2.5+2.6+2.6+2.6+2.5+2.6+2.6+1.6+1.6	北から2.4 +2.6+2.6+2.7+2.4+2.6	総柱	30～40	円	東西棟
11	90	N 5°E	3(7.4)×3(7.0)	北から2.5+2.3+2.6	西から2.6 +2.2+2.2	総柱	～30～	円	南北棟、中央にSK13を伴う
12	88	N9°W	4(9.3)×2(4.8)	北から2.2+2.5+2.6+2.0	2.4×2	総柱	～25～	円	南北棟、南東隅にSK31を伴う
13	88	E 2°N	5(12.2)×4(9.0)	西から2.3+2.5+2.5+2.4+2.5	北から2.3 +2.3+2.3+2.1	総柱	～30～	円	東西棟、南東隅にSK32を伴う
14	88	E 2°N	2(5.5)×2(4.4)	西から2.25+2.15	北から2.65 +2.85	総柱	20～30	円	東西棟、東側にSK33を伴う
15	89	N 2°W	5(9.2)×4(8.6)	北から1.8+1.9+1.6+1.9+2.0	西から1.9 +2.3+2.3+2.1	総柱	20～30	円	南北棟、東側にSK38を伴う
16	89	E 1°N	4(8.6)×4(7.7)	西から2.0+2.4+2.2+2.0	北から2.1 +1.9+1.9+1.8	総柱	～30～	円	東西棟、南東隅にSK39を伴う
17	90	E24°S	3(5.7)×2(3.8)	1.9×3	1.9×2	側柱	30～40	円	東西棟
18	90	N14°E	3(4.5)×3(3.09)	1.5×3	1.03×3	総柱	40～50	円	南北棟
19	90	E39°S	4(5.4)×2(2.7)	1.35×4	1.35×2	側柱	45～50	円	東西棟、北隅は調査区外
20	90	N 1°W	2(3.2)×2(2.9)	1.6×2	1.45×2	側柱	45～50	円	南北棟
21	90	N 1°W	2(3.4)×2(2.8)	1.7×2	1.4×2	側柱	30～40	円	南北棟
22	91	N 0°W	2(5.3)以上×1(1.8)以上	北から2.8+2.5以上	1.8×1以上	側柱	～50～	円	南北棟、東南部分は調査区外
23	91	E 7°N	5(11.1)×3(6.0)	西から2.5+2.5+2.3+1.9+1.9	2.0×3	側柱	40～60	円	東西棟
24	91	E 1°N	5(7.8)×4(5.2)	1.56×5	1.3×4	側柱	40～60	楕円	東西棟
25	92	E12°N	4(6.8)×3(5.1)	1.7×4	1.7×3	総柱	40～80	円	東西棟
26	92	E 9°N	4(7.8)×4(6.0)	西から2.1+1.8+1.8+2.1	1.5×4	側柱	30～40	楕円	東西棟
27	92	E13°N	4(5.6)×3(4.2)	1.4×4	1.4×3	側柱	～50～	方	東西棟
28	92	E20°N	4(6.4)×3(4.8)	1.6×4	1.6×3	側柱	40～60	円	東西棟、SD11を切る
29	92	E41°S	2(5.2)×2(5.0)	2.6×2	2.5×2	総柱	40～70	円	東西棟
30	93	E 5°N	2(3.0)×2(2.8)	1.5×2	1.4×2	総柱	40～70	円	東西棟
31	93	E 2°N	2(3.4)×2(3.0)	1.7×2	1.5×2	側柱	40～50	円	東西棟
32	93	N 1°W	3(4.9)×3(4.5)	北から1.4+1.9+1.6	1.5×3	総柱	30～40	円	南北棟
33	93	E 2°S	3(6.8)×2(3.6)	西から2.1+2.2+2.5	1.8×2	総柱	～20～	円	東西棟
34	93	E 2°S	3(5.2)×3(4.2)	西から2.0+1.4+1.8	北から1.6 +1.3+1.3	側柱	30～60	円	東西棟
35	94	E 2°S	3(7.8)×3(5.9)	西から1.9+3.0+2.9	北から1.8 +2.3+1.8	側柱	30～50	円	東西棟、南東隅にSK56·57を伴う
36	94	E23°N	4(9.2)×3(4.6)	2.3×4	北から1.5 +1.2+1.9	側柱	20～40	円	東西棟、北面柱穴には20～30cm大の根石をもつ
37	93	N 2°E	2(4.4)×2(4.0)	2.2×2	2.0×2	総柱	20～50	円	南北棟
38	94	E 3°N	4(7.2)×2(3.4)	1.8×4	1.7×2	側柱	40～60	円	東西棟
39	94	E 8°S	4(8.0)×2(3.4)	2.0×4	1.7×2	側柱	20～50	円	東西棟、南側柱列には15cm大の根石をもつ
40	95	E 5°N	2(2.8)×2(2.6)	1.4×2	1.3×2	総柱	35～60	円	東西棟
41	95	E 4°N	2(3.4)×2(3.4)	1.7×2	1.7×2	総柱	25～60	円	東西棟
42	95	E 6°N	3(6.0)×2(4.2)	2.0×3	2.1×2	側柱	45～60	円	東西棟
43	95	N 9°W	3(5.4)×2(4.0)	1.8×3	2.0×2	側柱	50～70	円	南北棟
44	95	N 7°E	4(6.8)×3(5.1)	1.7×4	1.7×3	側柱	45～60	円	南北棟
45	95	E16°S	3(4.3)×3(3.6)	西から1.4+1.5+1.4	1.2×3	総柱	50～70	円	東西棟

第49表　掘立柱建物一覧表

遺構番号 SA	図番号	柱列方向	規模(m) 柱間全長	柱間(m) 心々距離	柱掘形(cm) 大きさ	柱掘形(cm) 形	備考
1	81	E1°N	3(6.0)以上	2.0等間	25~50	円	東西方向
2	81	E1°S	3(6.9)以上	2.3等間	20~30	円	東西方向
3	81	E1°S	2(4.6)以上	2.3等間	50~75	円	東西方向
4	87	N4°W N9°W	4(2.6)以上 19(12.2)以上	0.4~0.7	0.3~0.6	円	東西方向、2列に分れる

第50表　柱列一覧表

遺構番号 SD	図番号	方向	規模(m) 幅	規模(m) 長さ	規模(m) 深さ	備考
3	—		0.7	3.3	0.68	
4	—	南北	0.7	6以上	0.65	SK25付属
5	—	南北	0.35	8以上	0.55	SK25付属
6	—	南北	0.4	31以上	0.1	
7	—	南北	0.3	15.3	0.11	SK29付属か
8	—	南北	0.3	13.0	0.2	SK33付属か
9	107	南北	0.7	14.0	0.2	
10	107	南北	1.3	13.5以上	0.09	
11	107	南北	0.7	19.0	0.3	
12	107	南北	1.3	25.0	0.45	中央が深く、南へいくほど浅くなる
13	107	東西	0.9	22以上	0.3	
14	—	南北	0.8	21.0	0.1	
15	—	南北	0.6	16以上	0.15	SK52に伴う不整形溝
16	—	南北	0.6	8.5以上	0.24	SK62に伴う溝・排水溝か
17	—		1.3		0.3	神社跡を巡る溝
18	—		0.4	4.0	0.1	神社跡を巡る溝
19	—		0.5		0.2	神社跡を巡る溝
20	—	南北	7.5	50以上	0.4	
21	—	南北	1.0	50以上	0.3	
22	—	東西	1.0	60以上	0.2	
23	—	東西	1.5	12以上	0.3	
24	—	東西	0.7	34以上	0.15	
25	—	南北	2.0	13以上	0.2	不整形溝
26	—	南北	2.0		0.6	
27	—	南北	2.0	20以上	0.4	
28	—	南北	0.5	1.5以上	0.31	
29	—	東西	0.5	7.0	0.15	
30	—	東西	0.8	18以上	0.2	
31	—	東西	0.8		0.15	
32	—	南北	1.5	11以上	0.63	中央部が深い
33	107	東西	1.8	30以上	0.2	北側では浅くなる

第51表　溝一覧表

遺構番号 SK	図番号	規模 (m)			備考
		幅	長さ	深さ	
15	99	4.1	0.31以上	0.45	中央から北東にかけて人頭大の石が集中
16	−	0.3	0.4	0.18	
17	−	1.2	1.2	0.09	円形
18	−	0.4	0.4	0.33	円形
19	−	0.3	0.5	0.1	不整円形
20	−	1.5	1.0	0.03	不整楕円形
21	−	2.0	1.5	0.14	不整楕円形
22	−	0.6	0.4	0.27	楕円形小穴
23	99	0.6	0.75	−	
24	−	4.0	3.0	0.25	
25	100	4.0	7.0	0.6	SB8に付属、SD4·5の溝2条付く
26	99	3.2	4.0	0.3	長方形
27	−	2.1	2.6	0.17	SB11に付属、楕円形
28	101	3.5	3.9	0.23	
29	−	1.9	2.5	0.12	SD7に付属、楕円形
30	−	1.2	1.2	0.13	円形
31	99	2.5	4.3	0.25	SB12に付属
32	−	2.5	4.0	0.09	SB13に付属
33	101	2.4	4.2	0.3	SB14に付属、SD 8 は排水溝か
34	−	0.3	0.3	0.13～0.42	円形小穴
35	101	1.05	2.85	0.1	不整楕円形
36	−	0.3	0.3	0.13	円形小穴
37	−	0.4	0.4	0.27	円形小穴
38	101	2.2	3.3	0.15	SB15に付属
39	102	3.6	5.6	0.28	SB16に付属
40	−	3.7	3.7	2.0～	D区南側に続く不整形土坑
41	−	0.4	0.4	0.1	円形小穴
42	−	1.7	2.5	0.07	
43	102	2.6	5.0	0.2	不整楕円形
44	−	0.25	0.25	0.18	円形小穴
45	−	1.0	2.0	0.47	
46	102	1.25	1.8	0.25	
47	−	0.4	0.4	0.26	円形小穴
48	−	0.3	0.3	0.11	円形小穴
49	102	0.5	0.7	0.1	
50	−	7.0	10.0	0.07	SD15の北側

第52表　土坑一覧表（1）

遺構番号 SK	図番号	規模 (m)			備考
		幅	長さ	深さ	
51	−	1.5	9.5	0.56	SK50の上層
52	103	3.1	4.2	0.6	SD15下層、人頭大の石が西肩に敷かれる
53	−	1.5	3.0	0.41	不整形土坑
54	−	0.3	0.3	0.17	円形小穴
55	−	0.3	0.3	0.11	円形小穴
56	−	1.0	1.0	0.3	円形土坑
57	−	3.0	3.5	0.27	SB35に付属か、SK56～58は一連のものか
58	−	1.3	2.5	0.49	SB35に付属か、SK56～58は一連のものか
59	−	3.0	3.0	0.12	SB35に付属か、SK56～58は一連のものか
60	−	2.0	2.8	0.19	
61	−	0.8	0.8	0.54	円形土坑
62	104	7.0	8.0	1.0	西～北に壁沿いに川原石が貼りつけられる、南側にSD16を伴う
63	−	不明確	不明確	0.25	調査区南東隅には、幾重にも土坑が重複し、大土坑群を形成しているが、切り合い関係は不明
64	105	不明確	不明確	0.4	
65	105	不明確	不明確	0.2	
66	−	不明確	不明確	0.2	
67	−	1.5	3.0	0.09	
68	−	2.5	5.8	0.26	
69	−	2.0	3.3	0.15	
70	103	2.9	3.0	0.3	
71	−	3.5	6.0	0.17	
72	−	0.2	0.2	0.14	円形小穴
73	−	2.0	3.0	0.05	
74	106	(1.2)	(2.2)	−	遺構の遺存状況は悪い
75	−	0.5	0.7	0.4	楕円形小穴
76	−	0.8	0.8	0.28	
77	−	2.0	3.5	0.06	
78	−	1.0	4.0	0.28	不整形土坑
79	−	0.9	0.9	0.2	円形土坑
80	−	0.2	0.2	0.28	円形小穴
81	−	0.65	0.75	0.16	
82	−	0.35	0.5	0.2	
83	−	0.5	1.0	−	暗茶褐色粘質土を埋土とする
84	106	1.5	1.5	0.1	方形
85	106	2.7	4.8	0.1	不定形、北部で人頭大の川原石が方形に配置された状態をなす、火をうけている

第53表　土坑一覧表（2）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1340	2-704	無釉陶器	山茶椀	SB1	−	−	−	ロクロナデ	～2㎜の石混	灰色	口縁一部残	内面薄く自然釉、13C前半
1341	56	無釉陶器	小皿	SB2	8.0	5.0	1.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕	1～2㎜の白石多混	白灰色	1/3残	山茶椀系、13C前半、墨書
1342	1960	土師器	皿	SB8	14.5	−	−	口縁部ヨコナデ・ナデ	細砂混	浅黄橙色	1/8残	
1343	1958	土師器	鍋	SB8	−	−	−	ヨコナデ	～1㎜の石混	浅黄橙色	口縁一部残	12C前半
1344	1957	無釉陶器	小椀	SB8	9.5	5.0	2.7	ロクロナデ、貼付高台	微砂混	灰白色	1/6残	山茶椀系、12C末～13C前半
1345	1959	無釉陶器	山茶椀	SB8	−	−	−	ロクロナデ	微砂混	灰白色	口縁一部残	内面に薄く自然釉、12C末～13C前半?
1346	2-710	瓦質	瓦器椀	SB8	16.0	−	−	ロクロナデ後ヘラミガキ	密	灰色	口縁部1/4残	11C中葉
1347	1963	土師器	皿	SB11	9.0	−	−	ヨコナデ	～1㎜の石混	暗橙色	1/6残	
1348	1964	土師器	皿	SB11	−	−	−	ヨコナデ	微砂混	浅黄橙色	口縁一部残	
1349	1965	土師器	鍋	SB11	−	−	−	口縁部ナデ	微砂混	暗黄橙色	口縁一部残	12C前半
1350	74	灰釉陶器	椀	SB12	−	9.6	−	ロクロナデ、灰釉漬け掛け	精	白灰色	底部1/4残	内面重焼痕、10C前半
1351	1951	無釉陶器	小椀	SB12	−	5.0	−	底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	底部1/2残	山茶椀系、内面自然釉・重焼痕、12C中葉
1352	1950	無釉陶器	山茶椀	SB12	−	7.8	−	底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	底部3/5残	12C中葉
1353	1956	無釉陶器	山茶椀	SB13	−	7.4	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	白灰色	底部2/3残	底部外面にヘラ記号
1354	1953	無釉陶器	山茶椀	SB14	−	−	−	ロクロナデ	5㎜程の白石混	灰白色	口縁一部残	
1355	1954	土師器	鍋	SB15	−	−	−	ヨコナデ	細砂混	淡黄色	口縁一部残	13C中葉
1356	1955	無釉陶器	山茶椀	SB36	−	−	−	ロクロナデ	1㎜程の石混	灰白色	口縁一部残	13C前半
1357	1351	陶器	練鉢	SB36	32.0	−	−	口縁部ロクロナデ、体部外面指圧・ナデ	～0.5㎜の白石混	明褐色	口縁部1/6残	常滑産、口縁部上面と外面に自然釉、13C中葉
1358	1967	無釉陶器	山茶椀	SB38	−	−	−	ロクロナデ	～3㎜の石混	灰白色	口縁一部残	尾張産、13C前半
1359	564	無釉陶器	山茶椀	SB44	−	5.6	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	底部1/4残	重焼痕・12C末～13C前半
1360	1962	無釉陶器	山茶椀	SX14	−	7.0	−	底部外面糸切痕	6㎜程の白石混	灰白色	底部1/2残	13C前半
1361	1968	陶器	壺	SX14	−	12.0	−	ロクロナデ	1～2㎜の白石混	白灰色	底部2/3残	底部内面に自然釉
1362	1976	無釉陶器	小皿	SX15	9.5	5.1	2.7	底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	灰色	口縁部1/6と底部残	山茶椀系、12C末～13C前半
1363	1988	無釉陶器	山茶椀	SX15	−	−	−	ロクロナデ	～1㎜の白石混	灰白色	口縁一部残	12C末～13C前半
1364	1990	無釉陶器	山茶椀	SX15	−	6.7	−	底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	微砂混	暗黄橙色	底部残	底部外面墨書、13C前半
1365	1986	無釉陶器	山茶椀	SX15	16.0	7.0	4.1	底部外面糸切痕・貼付高台	1㎜程の黒石混	灰白色	2/3残	歪大、13C前半
1366	1987	無釉陶器	山茶椀	SX15	−	8.5	−	底部外面糸切痕・貼付高台	1～3㎜の白石混	灰白色	底部残	歪大、13C前半
1367	1936	鉄器	刀子	SX16	長さ12.6cm 残、幅1.6cm・厚さ0.3cm、両関							両側欠損
1368	1851	無釉陶器	山茶椀	SX16	15.0	6.5	5.0	底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	1～2㎜の白石混	白灰色	口縁部1/3欠	13C前半
1369	1028	無釉陶器	小皿	SX17	8.8	4.5	1.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕	1～2㎜の白石混	白灰色	完形	13C後半
1370	1020	無釉陶器	山茶椀	SX17	15.1	7.2	5.0	底部外面糸切痕・貼付高台	2～5㎜の白石混	灰白色	完形	13C後半
1371	1027	無釉陶器	山茶椀	SX17	15.4	6.1	5.3	底部外面糸切痕・貼付高台	2～5㎜の白石混	灰白色	口縁一部欠	尾張産、13C前半
1372	1017	無釉陶器	山茶椀	SX17	15.6	7.2	5.0	底部外面糸切痕・貼付高台	1～2㎜の白石混	灰白色	口縁一部欠	13C前半
1373	1021	陶器	壺	SX18	−	10.2	−	体部下半ヘラケズリ、上半ロクロナデ	1㎜程の石混	暗灰色	口縁部欠	渥美産、体部にキザミ、13C初
1374	1040	無釉陶器	山茶椀	SX20	12.8	5.2	4.9	底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	1㎜程の白石混	白灰色	ほぼ完形	尾張産、13C後半
1375	303	土師器	小皿	SX21	9.5	4.0	1.3	ヨコナデ、底部外面ナデ・指圧・内面ナデ	微砂混	暗い黄橙	口縁1/2と底部残	
1376	302	土師器	山茶椀	SX21	16.9	8.3	4.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～2㎜の石混	灰白色	体部約1/2と底部残	12C末～13C前半
1377	1446	灰釉陶器	小皿	SE1	8.1	7.2	0.8	剥離激しく不明	密	橙色	1/4残	
1378	1445	土師器	皿	SE1	9.4	8.6	2.5	指圧後口縁部内面ヨコナデ	微砂混	浅黄色	1/3残	
1379	1444	灰釉陶器	平椀	SE1	17.0	4.7	6.2	底部外面糸切痕・削出高台	微砂混	浅黄色	口縁一部と底部残	15C後半
1380	1439	土師器	鍋	SE2	21.2	−	−	口縁部ヨコナデ、頸部指圧、体部ハケメ	微砂混	褐色	口縁部1/6残	外面に煤、13C中葉
1381	1375	土師器	鍋	SE2	22.8	−	−	口縁部ヨコナデ、頸部指圧、体部ハケメ	～0.5㎜の白石混	白灰色	口縁部1/9残	外面に煤、14C
1382	1441	土師器	鍋	SE2	27.6	−	−	口縁部ヨコナデ、頸部指圧、体部ハケメ	～0.5㎜の白石混	白灰色	口縁一部残	外面に煤、14C
1383	1442	土師器	鍋	SE2	27.8	−	−	口縁部ヨコナデ、頸部指圧、体部ハケメ	～0.5㎜の白石混	白灰色	口縁部1/6残	14C
1384	1364	土師器	鍋	SE2	38.5	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ	微砂混	褐色	口縁部1/6残	
1385	1365	土師器	羽釜	SE2	23.0	−	−	口縁部ヨコナデ、体部外面ハケメ	～0.5㎜の白石混	浅黄橙色	口縁一部残	
1386	1361	土師器	羽釜	SE2	24.0	−	−	口縁部ヨコナデ・段状沈線	金雲母混	浅黄橙色	口縁部1/8残	
1387	1366	土師器	羽釜	SE2	18.0	−	−	ヨコナデ	～0.5㎜の白石混	浅黄橙色	口縁一部残	
1388	1372	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.2	6.1	5.4	底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～4㎜の白石混	白灰色	1/2残	尾張産、13C後半
1389	1369	無釉陶器	山茶椀	SE2	14.0	5.6	5.6	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～8㎜の白石混	白灰色	口縁1/6・底部1/2残	尾張産、14C前半
1390	1373	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.4	5.8	5.3	ロクロナデ、底部内面一方向ナデ	～4㎜の白石混	白灰色	1/5残	尾張産、14C前半

第54表　出土遺物観察表（1）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1391	1368	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.0	5.5	4.8	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～2㎜の石混	白灰色	2/3残	尾張産、14C前半
1392	1374	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.2	5.8	4.8	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～3㎜の白石混	淡灰色	3/5残	尾張産、14C前半
1393	1367	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.2	6.0	5.4	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～4㎜の白石混	白灰色	口縁部1/4と底部残	尾張産、14C前半
1394	1371	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.2	6.2	5.2	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～4㎜の白石混	白灰色	3/5残	尾張産、14C前半
1395	1357	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.0	5.4	5.7	底部外面糸切痕、貼付高台・籾殻痕	～3㎜の白石混	白灰色	口縁部1/8と底部残	尾張産、底部外面に墨書、13C後半
1396	1358	無釉陶器	山茶椀	SE2	13.4	5.4	4.8	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～4㎜の白石混	白灰色	4/5残	尾張産、底部外面に墨書、13C後半
1397	1359	無釉陶器	山茶椀	SE2	－	6.0	－	底部外面糸切痕	～5㎜の白石混	白灰色	底部のみ残	尾張産、底部外面に墨書、14C前半
1398	1360	無釉陶器	山茶椀	SE2	14.0	5.7	5.4	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～5㎜の白石混	白灰色	3/5残	尾張産、底部外面に墨書、14C前半
1399	1356	無釉陶器	山茶椀	SE2	－	6.6	－	底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～5㎜の白石混	白灰色	底部のみ残	尾張産、底部外面に墨書、14C前半
1400	1362	陶器	片口鉢	SE2	27.8	14.0	12.7	底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の石混	白灰色	1/4残	知多産、14C前半
1401	1081	磁器	青磁椀	SE2	17.1	－	－	体部外面に蓮弁文	精	白灰色	口縁一部残	竜泉窯系、淡緑青色の釉、14C後半
1402	1379	陶器	擂鉢	SE2	32.0	－	－	底部外面糸切痕・貼付高台	～3㎜の石・黒斑混	灰色	口縁一部残	信楽産、16C後半
1403	1377	陶器	甕	SE2	45.8	－	－	ヨコナデ、口縁受口状	～1㎜の石混	褐灰色	口縁一部残	常滑産、暗緑から褐色の釉、13C
1404	1363	陶器	甕	SE2	38.4	－	－	ヨコナデ、口縁T字状	細砂混	灰褐色	口縁一部残	常滑産、体部外面に自然釉、13C中～後半
1405	1254	土師器	小皿	SE3	8.0	5.2	1.2	ヨコナデ、底部指圧	密	淡黄灰色	1/4残	
1406	1249	土師器	皿	SE3	12.0	6.6	2.2	ヨコナデ、底部指圧	密	淡黄灰色	3/5残	
1407	1251	土師器	皿	SE3	14.0	－	－	ヨコナデ	密	淡黄灰色	口縁部1/3残	
1408	1252	土師器	皿	SE3	13.6	－	－	ヨコナデ、底部指圧	密　金雲母混	淡黄灰色	口縁部1/3残	
1409	1253	土師器	鍋	SE3	24.6	－	－	ヨコナデ	細砂混	淡黄灰色	口縁部1/8残	15C
1410	1258	土師器	鍋	SE3	31.0	－	－	ヨコナデ	密	淡黄橙色	口縁部1/6残	煤付着、16C
1411	1250	土師器	鍋	SE3	24.6	－	－	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ、外部上部指圧	密	淡黄灰色	口縁部1/8残	15C
1412	1257	陶器	鉢	SE3	－	17.4	－	ヨコナデ、底部外面ヘラケズリ	～5㎜の石混	橙褐色	底部1/3残	常滑産
1413	1227	陶器	甕	SE5	19.6	－	－	ロクロナデ	～2㎜の石混	橙褐色	口縁部1/3残	常滑産、薄く自然釉がかかる
1414	50	土師器	鍋	SE6	－	－	－	ヨコナデ	微砂混・金雲母多混	暗黄褐色	口縁一部残	煤付着、13C後半
1415	277	無釉陶器	山茶椀	SE6	12.9	5.2	4.5	ロクロナデ	3～12㎜の石多混	灰色	1/6残	尾張産、13C後半
1416	49	無釉陶器	山茶椀	SE6	－	5.6	－	底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～5㎜の石多混	白灰色	底部1/2残	尾張産、13C後半
1417	48	無釉陶器	山茶椀	SE6	－	5.6	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～3㎜の石混	灰色	底部のみ残	灰色の自然釉、14C前半
1418	278	無釉陶器	山茶椀	SE6	－	5.7	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～1㎜の石混	灰色	底部1/4残	14C前半
1419	51	無釉陶器	山茶椀	SE6	－	5.7	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕	2～3㎜の石混	白灰色	底部1/3残	底部外面に墨書、14C 前半
1420	47	陶器	甕	SE6	37.0	－	－	ヨコナデ、体部内面指圧・ナデ	～2㎜の石混	褐灰色	1/6残	常滑産、灰色の自然釉、13C後半
1421	185	土師器	皿	SK16	13.2	9.8	2.3	ヨコナデ、底部外面指圧	密	浅黄橙色	1/8残	13C前半
1422	66	無釉陶器	山茶椀	SK16	16.0	－	－	ロクロナデ	～2㎜の黒石多混	灰白色	口縁部1/8残	12C末～13C前半
1423	69	無釉陶器	山茶椀	SK16	16.0	－	－	ロクロナデ	～2㎜の石混	白灰色	口縁部1/8残	淡緑の自然釉、13C前半
1424	68	無釉陶器	山茶椀	SK16	－	7.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～4㎜の白石多混	灰色	底部1/4残	13C前半
1425	67	無釉陶器	山茶椀	SK16	－	6.4	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～2㎜の石多混	灰白色	底部1/3残	自然釉・煤付着、12C末～13C前半
1426	64	無釉陶器	山茶椀	SK17	－	6.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の石混	淡緑灰色	底部のみ残	底部外面に墨書、13C前半
1427	35	無釉陶器	山茶椀	SK18	16.0	6.8	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～3㎜の石混	灰白色	口縁部一部欠	尾張産、13C前半
1428	178	無釉陶器	山茶椀	SK19	－	7.8	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	白灰色	底部2/3残	12C末～13C前半
1429	2-703	灰釉陶器	椀	SK22	－	－	－	ロクロナデ	密	黄灰色	口縁一部残	無釉、折戸53?
1430	1982	無釉陶器	山茶椀	SK23	－	－	－	ロクロナデ	～1㎜の石混	黄灰色	口縁一部残	内面に自然釉、12C末～13C前半
1431	690	磁器	白磁椀	SK23	－	6.2	－	底部ヘラケズリ、高台ロクロケズリ	密	黄灰色	底部のみ残	乳白色の釉、12C
1432	671	土師器	小皿	SK25	8.5	－	1.6	ヨコナデ、底部外面指圧・弱いナデ、内面ナデ	～2㎜白石混	明褐色	口縁部4/5残	
1433	672	土師器	小皿	SK25	8.5	－	1.7	口縁部ヨコナデ、底部指圧・粗いナデ	～2㎜灰色砂粒微混	明褐色	1/2残	
1434	670	土師器	小皿	SK25	9.2	－	1.5	口縁部ヨコナデ、底部指圧・ナデ	金雲母混	明茶褐色	1/4残	
1435	669	土師器	皿	SK25	14.3	10.6	2.2	ヨコナデ、底部外面指圧・弱いナデ	～2㎜白・灰色石混	淡褐色	口縁部1/3残	
1436	650	土師器	皿	SK25	14.3	10.8	2.2	ヨコナデ、底部外面指圧・弱いナデ	金雲母混	淡褐色	1/3残	
1437	668	土師器	皿	SK25	15.8	12.4	2.6	ヨコナデ、底部外面指圧	金雲母混	暗褐色	口縁部1/6残	
1438	648	土師器	鍋	SK25	19.0	－	－	口縁部ヨコナデ、体部内面ハケメ	～3㎜白石混	淡黄色	1/3残	12C前半山
1439	614	無釉陶器	小皿	SK25	8.4	3.8	2.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜石混	灰色	完形	山茶椀系、12C中葉
1440	642	無釉陶器	小皿	SK25	8.9	24.3	2.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～5㎜白石混	灰色	ほぼ完形	山茶椀系、内面淡緑色の自然釉、12C中葉
1441	665	無釉陶器	小皿	SK25	8.2	3.6	2.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜石混	明灰色	1/3残	山茶椀系、12C中葉

第55表　出土遺物観察表（2）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1442	633	無釉陶器	小皿	SK25	8.2	4.3	2.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜石混	灰色	3/4残	口縁部～内面に自然釉、13C前半
1443	664	無釉陶器	小皿	SK25	8.0	4.5	2.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～5㎜石混	灰褐色	口縁部1/4欠	13C前半
1444	651	無釉陶器	山茶椀	SK25	16.8	7.9	4.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	黒斑粒多混	灰色	口縁部1/2残	13C前半
1445	635	無釉陶器	山茶椀	SK25	16.0	7.3	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～3㎜白石混	灰色	口縁部1/3残	13C前半
1446	2-707	無釉陶器	山茶椀	SK25	16.3	7.0	5.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	黒斑粒混	灰白色	口縁部1/10と底部残	13C前半
1447	637	無釉陶器	山茶椀	SK25	16.4	7.7	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～5㎜の石微混	灰色	口縁部3/4残	13C前半
1448	2-706	無釉陶器	山茶椀	SK25	8.3	6.0	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰白色	口縁部一部欠	尾張産、12C末～13C前半
1449	643	無釉陶器	山茶椀	SK25	17.6	－	－	ロクロナデ	精良・～2㎜石混	灰白色	口縁一部残	12C末～13C前半
1450	603	無釉陶器	山茶椀	SK25	14.3	6.2	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～2㎜白石やや多混	灰色	口縁部1/2残	13C前半
1451	2-705	無釉陶器	山茶椀	SK25	－	6.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～2㎜白石混	灰白色	底部1/2残	底部外面に墨書、13C前半
1452	666	無釉陶器	山茶椀	SK25	15.3	7.0	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～2㎜白色石微混	灰褐色	3/5残	尾張産、自然釉、13C前半
1453	667	無釉陶器	山茶椀	SK25	15.3	－	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～8㎜灰・白石混	灰褐色	口縁部1/10と底部残	13C前半
1454	632	無釉陶器	山茶椀	SK25	－	6.6	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～3㎜石混	灰色	底部のみ残	内面に自然釉付着、13C前半
1455	646	無釉陶器	山茶椀	SK25	－	7.8	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～4㎜白石混	灰色	底部のみ残	13C前半
1456	634	無釉陶器	山茶椀	SK25	－	6.5	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～4㎜白石混	灰色	底部1/2残	13C前半?
1457	673	陶器	片口鉢	SK25	22.0	11.0	9.1	ロクロナデ、底部外面ロクロケズリ	～1㎜白色石混	灰色	1/2残	淡緑色の自然釉付着、12C後半
1458	1981	無釉陶器	山茶椀	SK26	－	8.5	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	底部のみ残	13C前半
1459	1978	無釉陶器	山茶椀	SK26	－	8.1	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰白色	底部のみ残	13C前半
1460	1979	無釉陶器	山茶椀	SK26	16.1	8.6	4.4	ロクロナデ	～3㎜の石混	白灰色	1/4残	薄い明緑灰色自然釉、13C前半
1461	1973	無釉陶器	小皿	SK28	8.0	4.0	2.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	橙灰色	3/5残	山茶椀系、13C前半
1462	1970	無釉陶器	山茶椀	SK29	16.0	7.0	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の石混	緑灰色	1/2残	知多産、12C末～13C前半
1463	1923	土師器	皿	SK31	8.2	2.3	－	ヨコナデ、底部外面指圧・ナデ	密	暗黄橙色	1/3残	
1464	1922	土師器	皿	SK31	8.5	1.2	6.2	ヨコナデ	密	暗黄橙色	口縁部1/4残	
1465	1924	無釉陶器	山茶椀	SK31	－	8.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・籾殻痕	～2㎜の石混	褐灰色	底部1/3残	13C前半
1466	1926	無釉陶器	山茶椀	SK31	－	8.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・籾殻痕	～2㎜の石混	灰色	底部のみ残	自然釉、13C前半
1467	1921	土師器	羽釜	SK31	32.2	－	－	ヨコナデ	金雲母混	淡橙色	口縁部1/4残	13C中葉
1468	1022	土師器	小皿	SK33	8.7	－	1.4	ヨコナデ、底部指圧・ナデ	微砂混	淡橙色	3/4残	歪み大
1469	1043	土師器	皿	SK33	12.4	－	－	ヨコナデ	微砂混	淡黄橙色	1/6残	
1470	1044	土師器	皿	SK33	12.8	－	－	ヨコナデ	～1㎜の石混	淡黄橙色	1/3残	
1471	1025	土師器	皿	SK33	12.5	2.9	7.2	ヨコナデ、底部指圧・ナデ	微砂混	淡黄橙色	3/4残	
1472	1933	土師器	皿	SK33	14.2	9.0	3.0	ヨコナデ	密	淡黄橙色	2/3残	
1473	1932	無釉陶器	山茶椀	SK33	15.3	6.6	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～3㎜の石混	淡褐灰色	口縁一部欠	13C前半
1474	1036	無釉陶器	山茶椀	SK33	15.2	6.8	4.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～6㎜の石混	淡緑灰色	1/4残	13C前半
1475	1023	無釉陶器	山茶椀	SK33	14.0	4.8	6.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～2㎜の白石混	淡褐灰色	1/2残	口縁部に自然釉、13C後半
1476	1942	無釉陶器	山茶椀	SK33	13.8	－	－	ロクロナデ	～1㎜の石混	淡褐灰色	口縁部1/5残	尾張産、13C
1477	1993	陶器	壺	SK33				内面ヘラかき上げ	～2㎜の石混	淡灰色色	底部1/2残	13C
1478	1104	緑釉陶器	椀	SK34	15.0	－	－	ヨコナデ	密	暗灰色	口縁一部残	篠産か、11C
1479	1029	無釉陶器	山茶椀	SK35	14.3	6.0	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～4㎜の白石混	白灰色	4/5残	13C後半
1480	1001	無釉陶器	山茶椀	SK35	13.6	6.1	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	黒斑粒混	灰色	完形	13C後半
1481	1003	無釉陶器	山茶椀	SK35	14.0	6.0	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰色	4/5残	13C後半
1482	1912	無釉陶器	山茶椀	SK36	7.7	3.8	2.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	褐灰色	4/5残	12C末～13C前半
1483	1989	無釉陶器	山茶椀	SK37	14.4	6.7	4.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	白灰色	口縁1/6と底部残	底部外面に墨書、13C前半
1484	1991	無釉陶器	小皿	SK37	－	6.0	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～3㎜の石混	灰白色	底部のみ残	山茶椀系、底部外面に墨書、13C前半?
1485	1046	無釉陶器	山茶椀	SK38	－	7.2	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	灰色	底部のみ残	内面自然釉付着、重焼痕、13C前半
1486	1045	無釉陶器	山茶椀	SK38	－	7.1	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～2㎜の白石混	白灰色	底部1/2残	尾張産、13C後半
1487	1024	無釉陶器	小皿	SK39	8.2	5.2	1.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	淡黄灰色	口縁部1/4欠	山茶椀系、13C
1488	1048	無釉陶器	山茶椀	SK39	－	5.8	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	淡緑灰色	底部一部残	13C
1489	1047	無釉陶器	山茶椀	SK39	－	－	－	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	淡緑灰色	底部一部残	13C
1490	1974	陶器	碗	SK41	13.5	7.5	4.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	密	黄灰色	2/5残	無釉、緑釉陶器の素地か、10C初頭
1491	1985	無釉陶器	山茶椀	SK42	14.5	6.4	5.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の白石混	橙灰色	1/4残	内面自然釉付着、重焼痕、13C後半
1492	804	無釉陶器	小皿	SK43	7.3	5.4	1.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	灰白色	完形	山茶椀系、14C後半

第56表　出土遺物観察表（3）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1493	806	緑釉陶器	椀	SK44	−	5.6	−	底部内面ヘラ状工具によるナデ	微砂混	浅黄橙色	底部1/4残	近江産、軟質、10C
1494	802	緑釉陶器	椀	SK47	−	8.3	−	ロクロナデ、底部ロクロケズリ・貼付高台	細砂混	灰白色	底部のみ残	猿投産、硬質、オリーブ色釉、9C
1495	731	緑釉陶器	皿	SK48	11.7	5.7	2.3	ロクロナデ、口縁部玉縁状、底部ロクロケズリ・貼付高台	密	淡白橙色	1/3残	京都産、軟質、全面に濃緑色に施釉
1496	727	土師器	小皿	SK49	7.6	−	−	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/4残	12C末～13C初
1497	714	土師器	小皿	SK49	8.0	−	1.6	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1498	716	土師器	小皿	SK49	8.4	−	1.3	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1499	710	土師器	小皿	SK49	8.6	−	−	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1500	722	土師器	小皿	SK49	8.4	−	1.6	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/2残	12C末～13C初
1501	715	土師器	小皿	SK49	8.7	−	1.7	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/2残	12C末～13C初
1502	703	土師器	小皿	SK49	8.4	−	1.6	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	完形	12C末～13C初
1503	735	土師器	小皿	SK49	8.1	−	−	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/3残	12C末～13C初
1504	705	土師器	小皿	SK49	8.6	−	2.0	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	完形	12C末～13C初
1505	721	土師器	小皿	SK49	9.0	−	1.7	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1506	711	土師器	小皿	SK49	8.7	−	−	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1507	704	土師器	小皿	SK49	8.5	−	1.8	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	明橙色	完形	12C末～13C初
1508	713	土師器	小皿	SK49	8.5	−	1.3	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	淡橙色	7/8残	12C末～13C初
1509	737	土師器	小皿	SK49	8.6	−	−	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/5残	12C末～13C初
1510	726	土師器	小皿	SK49	8.7	−	1.7	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	暗橙色	1/2残	12C末～13C初
1511	709	土師器	皿	SK49	8.5	−	1.6	口縁部ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	微砂混	浅黄橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1512	723	土師器	小皿	SK49	8.8	−	−	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/4残	12C末～13C初
1513	725	土師器	小皿	SK49	8.6	−	−	剥離著しく不明	微砂混	淡橙色	1/4残	12C末～13C初
1514	712	土師器	小皿	SK49	7.8	−	−	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1515	706	土師器	小皿	SK49	8.7	−	−	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1516	708	土師器	小皿	SK49	8.1	−	−	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	口縁一部欠	12C末～13C初
1517	736	土師器	皿	SK49	11.8	−	2.6	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/6残	12C末～13C初
1518	724	土師器	皿	SK49	15.4	−	2.7	口縁部ヨコナデ、底部内面ナデ	微砂混	淡橙色	1/5残	12C末～13C初
1519	801	土師器	台付皿	SK49	−	8.6	−	脚内部ナデ・外面指圧（剥離著しい）	～3㎜程の石混	浅黄橙色	脚部3/5のみ残	12C末～13C初
1520	707	土師器	鍋	SK49	27.3	−	−	口縁部ヨコナデ、体部ハケメ	微砂混	淡橙色	口縁一部残	11C前半
1521	702	無釉陶器	山茶椀	SK49	14.6	7.1	4.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～3㎜の石混	白灰色	口縁一部欠	13C前半
1522	701	無釉陶器	山茶椀	SK49	14.8	5.9	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～3㎜の石混	淡褐灰色	完形	13C前半
1523	1453	無釉陶器	小椀	SK51	8.4	−	−	ロクロナデ	細砂混	淡白橙色	口縁一部残	山茶椀系、自然釉付着、12C中葉
1524	1503	土師器	皿	SK51	11.0	5.8	3.2	剥離著しく不明	～2㎜の石混	淡橙色	2/3残	12C末
1525	1450	土師器	羽釜	SK51	18.8	−	−	ヨコナデ	細砂混	淡白橙色	口縁部1/6残	煤付着、12C後半
1526	1447	陶器	擂鉢	SK51	23.4	−	−	ロクロナデ、擂目１２本/2.2cm	細砂混	淡黄橙色	口縁部1/7残	瀬戸産、14C後半
1527	1449	陶器	鉢	SK51	41.0	−	−	剥離著しく不明	細砂混	淡橙色	口縁部1/4残	瀬戸産、14C
1528	1474	土師器	羽釜	SK52	−	−	−	ヨコナデ	～0.5㎜の石混	橙色	口縁一部残	室町
1529	1468	土師器	羽釜	SK52	34.0	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	金雲母混	淡橙色	1/10残	室町
1530	1471	無釉陶器	山茶椀	SK52	11.8	9.2	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	白灰色	口縁1/6底部1/2残	12C末～13C前半、混入か
1531	1469	陶器	甕	SK52	12.3	−	−	ヨコナデ	細砂混	淡灰色	口縁部1/2 残	常滑産、口縁外面に乳緑色の釉、14C後半?
1532	1491	土師器	皿	SK53	9.5	−	2.0	ヨコナデ、底部外面指圧	微砂混	暗白橙色	一部欠	室町?
1533	1476	土師器	羽釜	SK53	−	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡黄橙色	口縁一部残	煤付着、室町?
1534	1477	土師器	羽釜	SK53	−	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡黄橙色	口縁一部残	煤付着
1535	1475	陶器	鉢	SK53	40.0	−	−	ヨコナデ、体部外面ナデ・指圧	細砂混	橙色	口縁一部残	瀬戸産、13C後半
1536	1502	無釉陶器	山茶椀	SK54	13.4	−	−	ロクロナデ	～2㎜の石混	灰白色	口縁一部残	尾張産、13C後半
1537	1499	無釉陶器	山茶椀	SK55	13.5	6.8	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～4㎜の石混	灰白色	1/4残	尾張産、14C前半
1538	1500	土師器	羽釜	SK56	22.0	−	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	黄橙色	口縁部1/6残	
1539	1496	陶器	折縁深皿	SK61	26.7	13.8	6.6	ロクロナデ、体部下半ヘラケズリ、底部外面ナデ、高台剥離	細砂混	浅黄橙色	口縁一部残	内面に浅緑灰色の釉
1540	1346	土師器	羽釜	SK62	22.0	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡黄橙色	1/6残	
1541	1355	土師器	羽釜	SK62	25.0	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	～0.5㎜の石混	淡黄橙色	口縁一部残	煤付着
1542	1335	土師器	羽釜	SK62	27.6	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	褐灰色	口縁一部残	
1543	1410	土師器	羽釜	SK62	25.4	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	密	淡黄橙色	口縁一部残	

第57表　出土遺物観察表（4）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1544	1345	土師器	羽釜	SK62	23.2	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	細砂混	淡黄橙色	口縁部1/4 残	
1545	1414	土師器	羽釜	SK62	27.0	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	密	淡黄橙色	口縁一部残	
1547	1415	土師器	鍋	SK62	24.6	—	—	ヨコナデ、顎部指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡橙色	口縁一部残	煤付着、15～16C
1547	1416	土師器	鍋	SK62	29.8	—	—	ヨコナデ、顎部指圧、体部外面ハケメ	細砂混	褐灰色	口縁一部残	煤付着、13C中葉～14C
1548	1393	土師器	羽釜	SK62	21.8	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	密	淡橙色	口縁一部残	煤付着
1549	1385	土師器	羽釜	SK62	18.4	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	細砂混	淡黄橙色	上半部1/2 残	煤付着
1550	1413	無釉陶器	山茶椀	SK62	13.0	4.4	4.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～3㎜の石混	白灰色	1/5 残	尾張産、14C前半
1551	1417	無釉陶器	山茶椀	SK62	13.6	6.3	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	白灰色	1/5 残	尾張産、14C前半
1552	1396	陶器	擂鉢	SK62	34.4	16.1	12.0	ヨコナデ、擂目は3本/1.3m	～2㎜の石混	淡黄橙色	口縁と底部一部残	信楽産、14C前半
1553	1133	陶器	甕	SK62	—	—	—	ヨコナデ、顎部内面指圧	～0.5㎜の石混	淡緑灰色	口縁一部残	常滑産、自然釉付着、13C
1554	1214	陶器	鉢	SK64	30.6	—	—	ロクロナデ	～0.5㎜の石混	明橙色	口縁一部残	常滑産、外面自然釉付着、15C
1555	1219	土師器	皿	SK65	7.5	—	1.3	ヨコナデ、底部外面指圧	微砂混	淡橙色	2/5 残	
1556	1317	陶器	甕	SK65	15.3	—	—	ヨコナデ	～1㎜の石多混	淡橙色	口縁部1/4 残	常滑産、口縁部自然釉付着、15C後半
1557	1229	土師器	羽釜	SK66	25.5	—	—	剥離著しく不明	微砂混	淡乳橙色	口縁一部残	
1558	1242	陶器	壺	SK66	17.2	—	—	口縁部ロクロナデ、体部ヨコナデ	～1㎜の石混	淡橙灰色	口縁一部残	信楽産、口縁部薄く自然釉付着、16～17C
1559	1230	磁器	青磁椀	SK68	17.4	—	—	ロクロナデ、連弁文	精	淡灰色	口縁一部残	竜泉窯系、14C後半
1560	1231	土師器	羽釜	SK69	22.4	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	金雲母混	淡橙色	口縁部1/4 残	16C?
1561	1430	土師器	鍋	SK70	32.4	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡橙色	口縁～肩部一部残	煤付着、16～17C
1562	1243	土師器	羽釜	SK70	26.0	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	淡黄灰色	口縁一部残	
1563	1431	土師器	羽釜	SK70	26.6	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	細砂混	淡黄橙色	口縁一部残	煤付着
1564	1232	土師器	羽釜	SK70	25.8	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	微砂混	白橙色	口縁一部残	
1565	1083	鉄釉陶器	皿	SK70	11.5	3.5	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕	微砂混	淡橙灰色	口縁1/4 と底部残	瀬戸産、口縁部に鉄釉、15C前半
1566	1084	磁器	青磁椀	SK70	—	5.1	—	削出高台、蓮弁文	微砂混	淡橙灰色	底部一部残	竜泉窯系、14C
1567	1302	無釉陶器	山茶椀	SK72	15.6	5.9	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～2㎜の石混	淡黄灰色	口縁1/4 と底部残	13C前半
1568	296	土師器	皿	SK74	9.0	5.2	2.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕	金雲母混	黄灰色	1/2残	12C末
1569	295	土師器	皿	SK74	—	6.6	—	ロクロナデ、底部外面糸切痕	金雲母混	黄灰色	底部1/2 残	12C末
1570	297	土師器	皿	SK74	—	5.1	—	ロクロナデ、底部外面糸切痕	金雲母混	黄灰色	底部残	12C末
1571	288	土師器	皿	SK74	15.9	7.8	3.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕	金雲母混	淡黄褐色	口縁部1/2 欠	12C末
1572	290	土師器	鍋	SK74	20.0	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ・ナデ	～0.5㎜の石混	暗橙色	口縁一部残	12C前半
1573	289	土師器	鍋	SK74	19.2	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	～0.5㎜の石混	暗橙色	口縁部1/4 残	12C前半
1574	298	土師器	鍋	SK74	21.4	—	—	口縁ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	～0.5㎜の石混	浅黄橙色	口縁一部残	12C前半
1575	294	無釉陶器	小皿	SK74	—	5.8	—	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	浅黄橙色	底部のみ残	山茶椀系、12C中葉
1576	286	無釉陶器	小皿	SK74	11.0	5.1	3.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	淡褐灰色	1/2 残	山茶椀系、12C中葉
1577	292	無釉陶器	山茶椀	SK74	—	8.4	—	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	底部4/5 残	12C中葉
1578	291	無釉陶器	山茶椀	SK74	17.2	8.6	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	口縁部一部と底部残	12C中葉
1579	285	無釉陶器	山茶椀	SK74	14.4	5.5	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	浅橙灰色	1/6残	12C中葉
1580	287	無釉陶器	山茶椀	SK74	17.7	8.1	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	1/2 残	内面重焼痕、12C中葉
1581	284	無釉陶器	山茶椀	SK74	17.6	9.4	5.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰黄色	1/2 残	12C中葉
1582	299	陶器	広口瓶	SK74	19.2	—	—	ロクロナデ	密	灰白色	上半部1/2残	オリーブ色の自然釉付着、12C中期
1583	304	無釉陶器	山茶椀	SK75	16.3	8.3	5.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	灰白色	2/5 残	13C前半
1584	207	須恵器	椀	SK76	14.0	7.8	3.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～1㎜の白石混	浅黄色	3/5 残	在地産か、歪み大、9C
1585	305	無釉陶器	山茶椀	SK77	15.0	7.1	4.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の石混	灰白色	2/3 残	13C前半
1586	301	無釉陶器	山茶椀	SK79	14.0	6.0	5.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	灰白色	口縁1/2と底部残	13C後半
1587	562	無釉陶器	小皿	SK80	8.2	4.6	2.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕、内面一方向ナデ	～1㎜の石混	灰白色	完形	山茶椀系、外面底部に墨書、13C後半
1588	322	無釉陶器	山茶椀	SK83	16.4	8.8	4.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	細砂混	灰白色	4/5 残	12C末～13C前半
1589	320	無釉陶器	山茶椀	SK83	15.7	5.2	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂多混	灰白色	口縁部1/4欠	口縁から内面に自然釉付着、12C末～13C前半
1590	323	無釉陶器	山茶椀	SK83	16.5	7.6	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	灰白色	2/3残	12C末～13C前半
1591	321	無釉陶器	山茶椀	SK83	15.9	8.8	4.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～1㎜の石混	灰白色	口縁部1/2欠	自然釉、重焼痕、12C末～13C前半
1592	311	土師器	鍋	SK84	—	—	—	口縁部ヨコナデ、顎部～体部指圧、外面ハケメ	～1㎜の石混	黄褐色	口縁部片	13C中葉
1593	309	無釉陶器	山茶椀	SK84	15.4	6.7	4.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	灰白色	口縁部2/3欠	淡悪色の自然釉付着、12C末～13C前半
1594	310	無釉陶器	山茶椀	SK84	15.4	8.0	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	微砂混	灰色	1/3残	13C前半

第58表　出土遺物観察表（5）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm) 口径	底径	器高	調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
1595	317	土師器	鍋	SK85	32.8	−	−	口縁部ヨコナデ・指圧、体部外面ハケメ	細砂混	暗橙黄色	口縁部1/2残	13C 中葉
1596	313	陶　器	山皿	SK85	5.4	4.2	2.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	微砂混	暗灰褐色	2/5 残	12C 末～13C前半
1597	318	無釉陶器	山茶椀	SK85	16.2	9.2	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	灰白色	1/4残	自然釉付着、12C末～13C前半
1598	312	無釉陶器	山茶椀	SK85	16.2	7.6	6.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	淡灰褐色	口縁部5/6欠	自然釉付着、歪み大、12C末～13C前半
1599	314	無釉陶器	山茶椀	SK85	16.0	5.4	4.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	灰褐色	1/4残	自然釉付着、12C末～13C前半
1600	37	無釉陶器	山茶椀	SD3	14.9	6.2	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	3～7㎜の石混	灰色	3/5残	13C前半
1601	128	無釉陶器	山茶椀	SD3	14.7	6.3	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～3㎜の石少混	白灰色	口縁部1/4欠	淡緑色の自然釉、13C前半
1602	38	無釉陶器	山茶椀	SD3	14.2	5.9	4.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～5㎜の白石混	灰色	口縁1/8底部 1/2残	13C前半
1603	39	無釉陶器	山茶椀	SD3	15.8	8.2	5.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～8㎜の白石混	白灰色	口縁部1/3と底部残	13C前半
1604	127	無釉陶器	山茶椀	SD3	16.0	4.0	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～4㎜の白石多混	白灰色	口縁部1/5と底部残	13C前半
1605	130	無釉陶器	山茶椀	SD3	14.9	7.2	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	～3㎜の石混	褐色	1/2残	淡緑色の自然釉、13C前半
1606	129	無釉陶器	山茶椀	SD3	17.2	8.7	4.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～4㎜の白石混	灰白色	口縁部1/4欠	13C前半
1607	126	無釉陶器	山茶椀	SD3	16.4	6.9	5.2	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・内面一方向ナデ	～4㎜の白石多混	灰茶色	口縁部1/5と底部残	煤付着、13C前半
1608	586	無釉陶器	小皿	SD4	8.2	4.1	2.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・内面一方向ナデ	～3㎜の黒石多混	灰色	底部のみ残	山茶椀系、12C末～13C前半
1609	2-708	無釉陶器	山茶椀	SD4	8.4	4.6	2.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕・内面一方向ナデ	細砂混	灰色	1/2残	12C中葉
1610	585	無釉陶器	山茶椀	SD4	15.8	7.0	5.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	～2㎜の白・灰石混	灰色	口縁部1/3と底部残	厚く自然釉付着、12C末～13C前半
1611	2-701	無釉陶器	小皿	SD5	9.0	5.2	2.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～2㎜の白・灰石混	灰色	2/3残	山茶椀系、12C末～13C前半
1612	2-702	無釉陶器	山茶椀	SD5	16.0	6.2	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	淡灰色	口縁一部と底部残	12C末～13C前半
1613	1099	土師器	ロクロハジ皿	SD6	10.0	6.0	1.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕	細砂混	暗黄橙色	ほぼ完形	12C頃
1614	1961	無釉陶器	山茶椀	SD6	15.5	5.9	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～3㎜の石混	淡褐灰色	1/2残	13C前半
1615	1033	土師器	鍋	SD8	25.9	−	−	ヨコナデ、頸部から体部内面ナデ・外面ナデ	細砂混	淡黄橙色	口縁部1/6残	13C中葉
1616	1018	無釉陶器	山茶椀	SD8	14.8	6.8	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～1㎜の石混	白灰色	完形	13C前半
1617	1019	無釉陶器	山茶椀	SD8	15.5	6.0	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	～5㎜の石混	淡褐灰色	口縁一部欠	13C前半
1618	1455	土師器	皿	SD15	14.4	10.6	2.2	ヨコナデ、底部指圧	微砂混	乳灰色	1/8残	
1619	1316	無釉陶器	小皿	SD15	7.8	4.5	2.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕	～2㎜の石混	乳灰色	完形	山茶椀系、内面薄い自然釉付着、13C前半
1620	1493	土師器	皿	SD15	9.4	4.4	2.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕・ヘラ調整	金雲母混	淡橙色	1/4残	13C初
1621	1434	陶　器	平椀	SD15	−	5.4	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	密	黄灰色	底部のみ残	乳緑色の灰釉、14C
1622	1497	無釉陶器	山茶椀	SD15	13.7	6.4	5.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	密	灰色	1/6残	13C後半
1623	1466	陶　器	皿	SD15	16.7	−	−	ロクロナデ	微砂混	黄褐色	口縁一部残	緑灰色の灰釉、14C
1624	1492	陶　器	丸椀	SD15	12.7	−	−	ロクロナデ、体部下半外面ヘラケズリ	密	黄褐色	口縁部1/2残	淡灰緑色の灰釉、16C
1625	1461	陶　器	甕	SD15	32.2	−	−	ヨコナデ	密	淡褐灰色	口縁一部残	口縁部に自然釉付着、14C
1626	1464	土製品	土錘	SD15	長さ−9.2cm、径−4.0cm、孔径−2.2cm、重さ−85.0g				密	明黄色	2/3残	
1627	1325	土製品	土錘	SD15	長さ−6.2cm、径−1.2cm、孔径−0.2cm、重さ−7.2g				密	乳黄褐色	完形	
1628	1337	土師器	皿	SD18	9.2	6.6	1.5	ヨコナデ、底部外面指圧・ナデ	細砂混	淡黄橙色	ほぼ完形	山茶椀系
1629	1336	無釉陶器	小皿	SD18	9.2	5.0	2.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕	細砂混	褐灰色	3/4残	常滑産、口縁部に自然釉付着、13C中期
1630	1421	陶　器	甕	SD19	−	−	−	ヨコナデ	細砂混	淡褐灰色	口縁一部残	煤付着、15C
1631	1427	土師器	羽釜	SD19	25.2	−	−	ヨコナデ、体部ハケメ	微砂混	淡橙色	口縁一部残	尾張産、13C 前半
1632	2-709	無釉陶器	山茶椀	SD23	13.3	5.8	5.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰黄色	口縁一部欠	
1633	1245	土師器	皿	SD29	8.6	1.3	6.0	剥離著しく不明	～2㎜の石混	淡橙色	1/4残	15C?
1634	1246	土師器	皿	SD29	13.0	9.0	2.0	剥離著しく不明	細砂混	淡黄灰色	1/6残	14C
1635	1244	土師器	鍋	SD29	38.0	−	−	ヨコナデ、頸部外面指圧	細砂混	淡白橙色	口縁部1/6残	
1636	1102	土師質	黒色土器椀A	C11-9包	14.8	8.7	4.4	外面ヘラケズリ、内面ハケメ・ヘラミガキ	金雲母混	黄褐色	口縁1/4底部1/6残	
1637	61	土師質	黒色土器椀A	G7-17包	14.2	5.7	5.7	ヨコナデ、体部指圧・ナデ、内面粗いヘラミガキ、剥離著しい	細砂混	灰褐色	1/2残	
1638	349	土師質	黒色土器椀A	F9-10包	16.0	−	−	ヨコナデ、体部外面粘土紐接合痕・指圧、内面粗いヘラミガキ	細砂混	褐色	口縁部1/3残	
1639	343	土師質	黒色土器椀A	G7-18包	13.7	7.0	5.1	内面はハケ状工具で一周・ナデ・ヘラミガキ	金雲母多混	暗褐色	口縁部1/4 と高台残	
1640	352	土師質	黒色土器椀A	F4-24包	−	9.3	−	外面ナデ・貼付高台、底部内面粗いヘラミガキ	4㎜程の石混	暗褐色	底部のみ残	
1641	356	瓦　質	瓦器椀	F8-14包	−	6.3	−	底部内面ヘラミガキ、貼付高台	8㎜程の石混	黒色	底部のみ残	
1642	766	土師器	皿	D20-17包	8.1	−	1.6	ヨコナデ、底部外面指圧・内面ナデ	細砂多混	浅黄橙色	完形	
1643	469	土師器	皿	G2-18包	9.8	−	−	ヨコナデ、底部ナデ	～2㎜の石混	淡褐色	口縁一部欠	
1644	470	土師器	皿	G6-14包	9.1	−	1.4	ヨコナデ、底部ナデ	4㎜程の石混	淡黄色	ほぼ完形	
1645	772	土師器	皿	D20-17包	8.1	−	1.5	ヨコナデ、底部ナデ	細砂多混	浅黄橙色	ほぼ完形	
1646	749	土師器	皿	D23-12包	13.6	9.8	2.2	ヨコナデ、底部外面指圧・ナデ	細砂混	浅黄橙色	1/4残	

第59表　出土遺物観察表（6）

報告No	整理No	種類	器種	出土遺構及び出土位置	法量(cm)			調整・技法の特徴	胎土	色調	残存度	備考
					口径	底径	器高					
1647	478	土師器	高台付皿	G7-14包	11.4	7.1	2.5	ヨコナデ、剥離著しく不明瞭	細砂混	暗黄橙色	1/2残	11C末期
1648	477	土師器	高台付皿	G7-17包	12.4	7.8	4.0	ヨコナデ、剥離著しく不明瞭	細砂混	暗褐色	2/3残	11C末期
1649	480	土師器	鍋	G7-4包	20.4	−	−	ヨコナデ、頸部指圧	細砂混	浅黄橙色	1/4残	13C中葉
1650	447	土師器	甕	G8-13包	13.2	−	−	ヨコナデ、体部ハケメ	細砂少混	浅黄橙色	口縁部1/8 残	10C
1651	467	土師器	鍋	G1-14包	25.4	−	−	ヨコナデ、頸部指圧	1㎜程の石混	浅褐色	口縁部1/3 残	煤付着、12C末〜13C初期
1652	1863	土師器	羽釜	E17-22包	19.2	−	−	ヨコナデ、体部外面ハケメ・内面指圧	細砂混	暗黄橙色	口縁部1/9 残	
1653	46	土師質	製塩土器	B12-8包	21.4	21.0	5.3	外面指圧痕・輪積み痕、底部外面籾殻痕	〜3㎜石多混	淡茶褐色	1/6残	平安
1654	48	緑釉陶器	皿	B18-2包	−	5.4	−	剥離著しく不明	密	黄白色	2/5と高台部残	京都産、内外面に濃緑色の緑釉
1655	49	緑釉陶器	小椀	B13-16包	−	7.0	−	剥離著しく不明	細砂少混	白黄色	高台部半欠	近江産、内外面に濃緑色の緑釉、軟質
1656	47	緑釉陶器	小椀	B18-5包	−	7.2	−	高台接地面に凹み	密	白灰色	小片のみ残	猿投産、全面に緑釉、硬質
1657	50	灰釉陶器	皿	B18-1包	11.6	6.1	2.2	ロクロナデ	〜0.5㎜の石混	白灰色	2/5残	重焼痕、淡灰色の灰釉、11C
1658	175	灰釉陶器	皿	B18-19包	10.9	4.6	5.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕	〜7㎜の白石混	淡褐灰色	口縁部1/3と高台残	重焼痕
1659	563	灰釉陶器	皿	G17-8包	12.7	6.0	2.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	微砂混	灰白色	口縁一部残	口縁部にオリーブ色の灰釉、11C
1660	446	灰釉陶器	皿	F13-24包	12.8	6.4	2.0	輪花	3㎜程の白石混	淡灰色	2/7残	重焼痕、口縁部に自然釉付着
1661	33	灰釉陶器	皿	B18-20包	12.7	6.1	2.5	四輪花	〜2㎜の白石混	乳灰色	口縁一部欠	重焼痕、10C
1662	305	灰釉陶器	椀	B20-19包	11.8	5.0	3.6	ロクロナデ	密	白灰色	2/3残	9C
1663	145	灰釉陶器	椀	B23-10包	14.4	−	−	ロクロナデ	〜2㎜石少混	白灰色	口縁部1/8残	
1664	323	灰釉陶器	椀	B19-2包	−	7.7	−	ロクロナデ	細砂混	灰色	底部1/4残	
1665	313	灰釉陶器	椀	B19-5包	19.8	8.2	6.9	ロクロナデ	〜3㎜の石混	灰色	1/4残	11C
1666	345	無釉陶器	小皿	G6-12包	8.2	4.3	2.4	ロクロナデ、底部外面糸切痕	3㎜程の白石多混	灰褐色	ほぼ完形	山茶椀系、12C末〜13C前半
1667	209	無釉陶器	小皿	A15-19包	8.1	4.8	1.7	ロクロナデ、底部外面糸切痕	1〜3㎜の白石混	灰白色	完形	山茶椀系、12C末〜13C前半
1668	169	無釉陶器	小皿	A15-4包	8.6	5.4	1.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕	〜1㎜の石混	灰白色	完形	山茶椀系、13C後半〜14C前半
1669	1032	無釉陶器	小皿	C24-2包	8.3	4.8	1.6	ロクロナデ、底部外面糸切痕	〜3㎜の白石混	灰白色	口縁一部欠	山茶椀系、底部外面に墨書、13C前半
1670	436	無釉陶器	山茶椀	G6-12包	−	7.4	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	〜7㎜の石混	灰色	底部1/2残	底部外面に墨書、12C末〜13C前半
1671	757	無釉陶器	山茶椀	D14-25包	12.0	5.3	4.0	ロクロナデ	細砂混	灰白色	1/4残	11C後半〜12C前半
1672	153	無釉陶器	山茶椀	B13-11包	10.6	4.3	3.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕	〜2㎜の石混	褐灰色	口縁 1/6 と底部残	11C後半〜12C前半
1673	180	無釉陶器	山茶椀	B12-14包	12.0	5.9	3.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕	〜2㎜の白石多混	白灰色	口縁 1/3 と底部残	淡灰色の自然釉付着、11C後半
1674	107	無釉陶器	山茶椀	SX 4	−	7.2	−	剥離激しく不明	微砂混	褐灰色	底部1/2 残	12C末〜13C前半
1675	2007	無釉陶器	山茶椀	E12-9包		7.7		ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰黄色	底部1/2残	底部外面に墨書、12C末〜13C前半
1676	457	灰釉陶器	椀	F4-25包	−	7.4	−	ロクロナデ、口縁部外面下半ケズリ、釉付け掛け	〜2㎜石少混	淡褐色	底部1/6 残	
1677	784	無釉陶器	山茶椀	D20-17包	15.5	6.4	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	1.5㎜程の石混	灰白色	口縁一部欠	12C末〜13C前半
1678	687	無釉陶器	山茶椀	B25-1包	16.3	6.7	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	1㎜程の石多混	灰白色	2/3残	13C前半
1679	211	無釉陶器	山茶椀	SX 4	17.6	8.4	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	5㎜程の白石混	灰色	1/2残	歪有、重焼痕、12C中葉
1680	1310	無釉陶器	山茶椀	E18-1包	12.9	5.5	5.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	1〜2㎜の石混	乳灰色	口縁一部欠	尾張産、底部外面に墨書、13C後半
1681	785	無釉陶器	山茶椀	D20-17包	14.8	6.6	5.1	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	2㎜程の白石混	灰白色	ほぼ完形	13C前半
1682	428	無釉陶器	山茶椀	G1-14包	15.1	7.4	5.0	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	細砂混	淡褐灰色	ほぼ完形	13C前半
1683	694	無釉陶器	山茶椀	B20-33包	7.0	7.4	5.5	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台、輪花	5㎜程の石混	浅黄色	口縁部1/8と底部残	12C前半
1684	369	無釉陶器	山茶椀	G1-13包	14.8	6.3	4.8	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	2.5㎜程の石混	淡褐色	口縁部1/6と底部残	底部外面に墨書、13C前半
1685	1966	無釉陶器	山茶椀	C24-8包	−	6.0	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂多混	褐灰色	3/4残	底部外面に墨書、13C前半
1686	1082	無釉陶器	山茶椀	E12-12包	−	8.4	−	ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台	〜2㎜の石混	暗灰色	底部のみ残	底部外面に墨書、13C前半
1687	805	無釉陶器	山茶椀	A10-22包		6.7		ロクロナデ、底部外面糸切痕・貼付高台・籾殻痕	細砂混	灰白色	底部1/2のみ残	底部外面に墨書、13C前半
1688	788	磁器	青磁椀	B25-10包	13.8	−	−	ロクロナデ、陰刻文後施釉、底部ヘラケズリ	精	白灰色	1/10残	同安窯系
1689	358	磁器	青磁皿	G1-17包	−	6.0	−	ロクロナデ、陰刻文後施釉、底部ヘラケズリ	精	褐白色	底部のみ1/4残	同安窯系、灰緑色の緑釉
1690	778	陶器	甕	D12-21包	34.0	−	−	ロクロナデ	細砂多混	褐灰色	口縁一部残	常滑産、口縁部に自然釉付着、13C
1691	1856	陶器	灯明受け皿	E17-25包	6.7	3.9	1.3	ロクロナデ、底部外面糸切痕、ロクロケズリ	微砂混	褐灰色	完形	暗赤褐色の釉
1692	758	陶器	天目茶椀	D14-25包	11.3	3.9	6.1	削出高台	細砂混	暗黄橙	口縁の一部と底部残	褐灰色から黒褐色の鉄釉、16C
1693	1868	陶器	皿	E17-6包	12.0	4.6	2.9	ロクロナデ、施釉	〜0.5㎜の石混	暗黄橙	口縁部一部と底部残	淡乳緑色の釉
1694	1867	陶器	皿	E17-20包	12.2	6.4	2.9	ロクロナデ、底部外面糸切痕	細砂混	浅灰黄色	1/3残	
1695	803	石製品	砥石	D17-19包	長さ-7.5cm、幅-1.5cm、厚さ-0.9cm、重さ-66.2g、緑泥岩製?					淡緑灰色		磨面四面

第60表　出土遺物観察表（7）

Ⅷ 考　察

1　縄文時代

大鼻遺跡の縄文時代の主要な遺構と遺物は、『概要Ⅲ[1]』以来提唱してきた早期初頭の大鼻式土器[2]の頃を中心とする。この大鼻式とは、現在までに確認されている押型文土器中最古の型式として、大川式[3]の前に位置付けたものである。型式設定に際しては、当大鼻遺跡出土土器と共に、坂倉遺跡出土土器[4]も併せて基準資料とした。したがって、大鼻式土器に関する一応のまとめをするに先立って、以下に坂倉遺跡出土の関連資料について概観しておく。

(1)　坂倉遺跡の類例

位置と立地　坂倉（さかくら）遺跡は、三重県多気郡多気町大字東池上字坂倉に所在する。

当遺跡は、伊勢湾に注ぐ櫛田川下流の南岸に位置し、丘陵から西に張り出す比高５ｍ程の段丘端部に立地する。西から北にかけては沖積地が広がり、北約1.2kmには櫛田川が東流する。

現在は、遺跡の南約0.5kmにＪＲ多気駅があり、東接して紀勢線と参宮線が分岐している。調査された内の南地点は県史跡に指定され、保存されている。

調査（第119図）　坂倉遺跡は、昭和49年度県営圃場整備事業に先立ち、発掘調査が実施された。調査は、独立小丘陵上の南（Ａ）地点と、一段低い北（Ｂ）地点とに分かれる。両地点は50ｍ程離れ、４ｍ以上の高低差がある。

南地点では、縄文時代早期初頭頃の「土壙」（ＳＫ）４基以上と「炉跡」（ＳＦ）19基が検出された。「土壙」とされたものは竪穴住居の可能性が高い。「炉跡」とされたものの大部分は煙道付炉穴であったと考えられている。出土遺物は、大鼻式を中心に少量の大川式を含む押型文土器と、微量の撚糸文土器や石器である。この点は北地点と共通する。ただし、有茎尖頭器（第123図の84）は南地点から１点出土したのみである。

北地点では、該期の顕著な遺構は認められなかった。しかし、表裏縄文土器類は北地点に集中していた。押型文土器や撚糸文土器に関しては、南地点と同様な様相を呈していたが、量的には南地点を凌いでいる。

この坂倉遺跡からは、前・中・晩期の土器も出土しているため、所属期を限定し難い遺物も混じる。したがって、明らかに早期初頭頃と判断される土器と有茎尖頭器のみを掲載した。しかし、このほかにも大鼻式土器の細片と少数の石鏃が出土している。

掲載した遺物は南北地点別にしたが、合計で表裏縄文土器10点、大鼻式土器91点、大川式土器５点、撚糸文土器４点、有茎尖頭器１点である。これは、大鼻式土器の細片を除いた該期遺物の大部分を占めている。口縁部と底部等から推定される個体数は、表裏縄文土器類が３個体以上、大鼻式土器が24個体以上、大川式が５個体以上、撚糸文土器が３個体以上である。

表裏縄文土器類（１～10）　口縁部は大鼻式のようには屈折せずに緩く外反し、体部にも押型文を施さず、縄文文様のみで構成されるものである。斜縄文を口縁部の内外に施した一群（１・２）と、外面にのみ施した一群（３～10）とがある。

口縁部の内外に斜縄文を施す一群には、角頭形の口唇部にも斜縄文を施す例（１）と、丸棒状の口唇部は無文とする例（２）とがある。いずれも内面の斜縄文は口唇部から２～３cm程に限定される。１は口径16cm余りと小型であり、頸部には斜縄文の上に縄の側面圧痕を１条残す。

外面にのみ斜縄文を施す一群は、同一個体の可能性が高い。３の口頸部片から推定すると、口径は30cm程あり、比較的大型である。やはり口縁部は緩く外反し、丸味のある口唇部にも斜縄文を施す。内面

には指圧痕が目立つが、口縁部付近には軽いヨコナデも施されている。口頸部片（3・4）では、原体を変えて羽状に施している。

大鼻式土器（11～70・78～80・82・83・85～110）

器形は、短く屈折する水平口縁と、全体的に良く尖るが乳頭状突起の未発達な底部に特徴がある。大多数は深鉢だが、あまり深くない鉢（12）もある。深鉢の場合は、11や17に見るように頸部よりも体上部に最大径があるらしい。口縁部は全て水平口縁であり、短く外反する。余り強くなく屈折する例（11・12・14・17）を中心とするが、屈折というよりも強く屈曲する例（16・20・21）もある。

文様帯は、口唇部と口縁部外面、体底部の3帯を原則としており、内面施文の例はない。ただし、頸部文様帯はないが区画線的な縄の非回転文様を持つ例も一部にはある。また、文様帯と施文方向の一般原則から逸脱した、密接帯状施文⑤の例もある。

口唇部文様は、全て回転縄文である。

口縁部文様は向かって左から右への横位回転施文を原則とし、縄文を主体とするが、一部に押型文を施す例もある。縄文施文のものには、側面圧痕を水平に2～4条重ねる例（11～13・85・88・89）と横位回転斜縄文の例（14～17・86・87）、先端刺突を施す例（18・90）とがある。

口縁部外面に押型文を施すものは少数例であるが、いわゆる枝回転文⑥の例（19・20）と市松文の可能性もある例（21）とがある。これらの口縁部は屈折というよりも強く屈曲しており、後続する大川a式⑦に近い。しかし、枝回転文は大川a式には見られない文様である。また、21には頸部文様帯がない。

頸部文様帯は、大鼻式には原則として見られない。しかし、1条の区画線を縄の側面圧痕（17）や先端刺突列（16・24・85・87）で施す例もある。

体底部文様は、上から下への縦位回転施文が原則である。密接帯状の例を除くと、73点中47点（約64％）が枝回転文、19点（約26％）が市松文、7点（約10％）が格子文である。さらに、未発表の細片を加えれば、枝回転文の比率はさらに高いはずである。ただし、これら3種の文様は峻別できるものではない。また、市松文や格子文の例は、大川a式に属する例も含まれている可能性を残す。

底部片（83）は、1点出土したのみである。大鼻遺跡出土例と同じ角度で強く立ち上がり、乳頭状突起は未発達である。当例は、大鼻式土器としては大変珍しく無文である。

密接帯状施文の例もしくはその可能性がある例は、口縁部から体上部の破片23点中に6点（約26％）、体部片67点中に1点（約1.5％）認められた。この内の3点（17・24・25）は口唇部と口縁部に横位、体部に縦位という一般原則に加えて、体上部にも斜縄文を横位施文している。他の口縁部例である14は、斜縄文に加えて格子文を縦位施文しており、20は口縁部から枝回転文を縦位施文している。体部例（26）はおそらく下半部片らしく、縦位施文した枝回転文と縦位施文らしい単節斜縄文を密接施文している。

縄文は、全体的に単節が多く、複節や無節も混じる。撚りの方向には、特に傾向がないらしい。太くて軟らかい原体を強く撚る例が一般である。

枝回転文は、凹文部が疎らで浅く、中央が小さく突起する、大鼻遺跡でB類とした例が多い。原体の大きさは、19では長さ19㎜以上、径7㎜、22では径7.3 ㎜かと観察される。市松文に近似する91では、長さ27㎜、径9㎜と推定される。

市松文は、不整形で凸部が狭くて枝回転文や格子文との区別が困難な例（55～58・61・62・64～66・68・78・80）が多く、粗大で角張った例（59・67・109・110）や、小粒で丸味を持つ例（21）と長方形の例（57・60・63）がある。原体は、21で長さ18㎜以上、径5.5㎜、59で長さ18㎜、径5㎜と推定される。ただし、大川a式例を含む可能性もある。

格子文は乱れた大粒の例（23・69・70・79・82）が多いが、大粒でない正格子文（14）もあり、斜格子文（12・89）もある。69は無文部を残す珍しい例である。12の原体は、長さ24㎜、径 7.5㎜と推定される。ただし、大川a式例を含む可能性もある。

製作は正立状態でなされたことが、擬口縁の例（22・27・45・49・51・58・66・93・107）から推定される。擬口縁部分は、上下に長く重なることはない。したがって、接合部分も文様が施され、接合用粘土が剝離した下から観察されるという例はない。

内面には全体に指圧痕を残している。ただし口縁部は、外面文様、口唇部縄文、内面ヨコナデの順で

施しており、内面の指圧痕はナデ消されている。また体部内面には、ヘラミガキ状の調整痕をとどめる例（25）もある。

口径は、19㎝前後の例（16・88）と24～27㎝程の例（12・14・17）に分かれる。なお、85はこれらよりも大型の可能性が高い。

大川a式（71・72・75～77）　全出土土器の内でも5点に過ぎず、掲載土器 110点中でも5％足らずである。大川式の通例にもれず、口唇部には円棒状具の斜位押圧の例（76・77）を主として、縄文あるいはヘラキザミ（75）の例もある。口縁部には市松文を横位施文する例（75・76）と、円棒状具による右からの刺突を施す例（77）とがある。頸部には右斜下あるいは右横から、やはり棒状具による刺突を施している（71・72・75）。

なお、72は体上部に斜行沈線文を持つ密接帯状施文例であり、この沈線文は押型文かとも考えられるが判然としない。内面には指圧痕を残す。

撚糸文土器（73・74・81・111）　4例共体部片であり、太い縄を深く疎らに縦位施文した撚糸文土器である。撚糸原体は単節Rを中心に、複節らしい例（73）もある。74は頸部直下らしく、上端に側面圧痕らしい1条を残す点が注目される。内面には指圧痕を残す。

当坂倉遺跡では、早期初頭頃と考えられる撚糸文土器は、上記4片のほかに1片の計5片が認められた。しかし、三重県下の押型文土器には例外的に伴出するのみである。大鼻遺跡では106点を掲載し得たが、撚糸文土器は1点も含まれない。やはり、当地方出土例は搬入品と考えて問題なかろう。

なお、これらの撚糸文土器に共伴した押型文土器の型式は特定し難い。しかし、約95％が大鼻式であり、約5％が大川a式であることから、確率的には大鼻式に伴った可能性が高い。

(2)　表裏縄文土器

大鼻遺跡や坂倉遺跡では、外面と口縁部内面、あるいは外面のみに縄文だけを施文した土器が、大鼻式土器と共に出土した。これらは、出土状況からは大鼻式土器に先行するか同時期かは断定できず、当地方の関連資料も乏しい。そのためにいくつかの問題点を持っているが、型式的には大鼻式に先行すると理解され、『概要Ⅲ』の段階から、草創期の表裏縄文土器の末葉に位置するものと推定してきた。ともかく、以下に基礎資料を再検討しておく。

型式的特徴　まずは、大鼻・坂倉両遺跡から出土した関係資料の型式的特徴を以下に再度確認しておく。

器形は、口縁部が緩く外反する深鉢であるが、全体形や底部の形態等は不明である。口唇部の形態は、面取りする例と、丸味のある面を持つ例、丸棒状を呈する例、の3種が認められる。

文様帯は、口唇部と外面全体、及び個体によっては口縁部内面に認められる。明確な頸部は成立しておらず、区画線的な文様が付加された例もあるが、口縁部文様帯や頸部文様帯が明確に分離・成立していたとは考え難い。

文様は全て縄文であり、押圧手法と回転手法が併用されている。体部にまで縄文を施す点は、大鼻式と異なる。特に、異なる原体による羽状縄文を横位に施す例や、側面圧痕も持つ例が注目される。これらの縄文は、比較的太くて硬い原体をやや強く撚る傾向がある。単節の例が多いが、複節の例もある。なお、内面の無文部には指圧痕が顕著である。

胎土は大鼻式土器よりも砂粒が目立つ。色調は、大鼻式よりもやや明るく茶褐色を呈するが、灰黒色を呈する例も見られる。

口唇部に面取りする例は、口唇部や口縁部内面にも斜縄文を施す。口縁部内面の縄文は、口縁端から2～3㎝の幅に限られる。頸部には斜縄文の上に縄の側面圧痕を1～2条残すが、以下は不明である。口唇部の外側が拡張気味になる例が多い。

口縁部に丸味のある面を持つ例は、外面と口唇部に施文する。外面には、異なる原体による縄文を横位羽状に施す。

口唇部が丸棒状を呈する例は、口唇部には施文せず、口縁部の内外に斜縄文を残す。この類は小片のみであるため、口縁部は直立するか外反するかは不明である。

これらの型式的特徴を要約すると、口縁部は緩く外反し、文様は縄文のみである。縄文は外面全体に及ぶが、口縁部内面や口唇部にも施す例がある。縄文の種類は斜縄文を中心とし、異なる原体による羽

状縄文や側面圧痕が見られる。

表裏縄文土器とした一群は、以上のような特徴を備えており、大鼻式土器とは明らかに別な、単一土器型式を構成する可能性が高い。しかし資料の絶対量が少なく、先行する土器群も不明であるため、現段階で型式設定することは控えておく。

類例は、三重県内では石川遺跡[8]や栢垣外遺跡[9]、鴻ノ木遺跡[10]、広垣内遺跡[11]に見られる。県外の関連資料としては、滋賀県の粟津湖底遺跡[12]や岐阜県の飛瀬遺跡[13]等からの出土品が挙げられる。

この内少なくとも県内の例は、上記の大鼻・坂倉両遺跡例と同一型式として問題あるまい。しかし、県外の例は、やや様相が異なるようであり、同一型式とは即断できない。各々の共伴関係や、各地域毎の先行土器の研究を待ちたい。

大鼻式との型式的連続性　既に記したように、大鼻・坂倉両遺跡出土の表裏縄文土器は、一定の型式的斉一性を備えている。そして、これらの口縁部裏面の斜縄文に替えて強いヨコナデとし、体部の縄文に替えて枝回転文等の押型文としたものが、大鼻式土器ではないかと考えられる。出土状況からは、表裏縄文土器と大鼻式土器とが併存するか否かは断定できない。しかし、型式学的には大鼻式に先行すると推定しておくが順当である[14]。

なお、中央構造線地帯に所在する坂倉遺跡では、特徴的な緑色片岩を胎土に含んだ例もある。県下の数遺跡に類例が認められることと併せ、当該土器は搬入品ではなく、在地の土器と考えて問題なかろう。

(3) 大鼻式土器

大鼻式土器は、『概要Ⅲ』で設定した土器型式である[15]。これは、現在確認されている最古の押型文土器として大川・神宮寺式に先行し、既述の表裏縄文土器を母体として成立した、と推定したものである。型式設定には大鼻・坂倉両遺跡出土土器を基準資料としており、大鼻遺跡の正報告をするにあたって基準資料に立ち返り、型式内容を再検討しておく。

なお、確認されている器種は尖底の深鉢を中心としており、あまり深くない鉢も散見される。口径は17～19cmと24～27cm、及び33cm前後のものが知られている。ちなみに、図上復元された深鉢は口径は約33cm、器高は48cm程である。

A　型式的特徴

器形　短く屈折する口縁部と、乳頭状突起が未発達で立ち上がりの強い底部に特徴があり、深鉢は後続型式よりも一段と深い。

口縁部は全て水平口縁であり、短く外反する。外反の形態には、あまり強くなく屈折する例を中心とするが、水平に近いまでに強く屈折する例もある。また、屈折というよりも強く屈曲する、後続する大川a式に近似する例もある。『概要Ⅲ』以来、水平に近いまでに強く屈折する例が最も大破片であったことから、こうしたものが大鼻式の典型という印象を受けていた。しかし、その後に増加した類例を見てもこのような例は数量的に必ずしも多くなく、むしろ強くない屈折の例が大鼻式の典型とするべきであった。なお、口縁部の施文は外面から口唇部の順であり、最後の内面へのヨコナデによって外反が完成する。したがって、上記のような口縁部の外反形態の微差は、内面からのヨコナデの強さと施す範囲によって生じたものである。

口唇部は例外なく斜縄文を施すことから、角頭形を呈する。内外にやや拡張気味になる例が多いが、概して内側よりも外側への拡張の方が強い。この点は、先行する表裏縄文土器の口唇部に面取りして斜縄文を施す例にも通じる。なお拡張気味になる理由は、外面の施文や内面のヨコナデの圧力が器厚を相対的に薄くした一方、この圧力は口縁端部までは充分に至らずに厚さを残したことにあり、さらに口唇部への施文が拡張傾向に拍車を掛けたものと理解される。

頸部は屈折点に過ぎず、一定の幅を持つものではない。深鉢の場合、頸部よりも体上部に最大径を持つ傾向があり、この点も後続型式とは異なる。

体部は上記のように上部に最大径があり、そのまま大きく外湾せず、直線的に底部に続く。

底部は、乳頭状突起が未発達な薄手の尖底である。体底部全体が直線的に尖っており、鋭角的な立ち上がりは特徴的である。これに対して大川・神宮寺式では、乳頭状突起が発達して強く突起し、一方で立ち上がりが緩くなって体下部と底部の境界での屈曲が目立つようになる。

文様帯　原則として、口唇部と口縁部外面及び体底部にあり、一部には頸部にも区画線が見られる。

口唇部には、例外なく斜縄文が施される。

口縁部外面には大多数が縄文を施すが、一部には押型文も見られる。縄文にしても押型文にしても、回転手法の場合は横位施文を原則としている。それも確認できた例は、向かって左から右に回転させている。これは、右利きの製作者が左手で土器を内側から支え、右手で手前から回転施文することが一般的であったことを窺わせるものである。また、縄文の半分程は非回転手法であり、その大部分は側面圧痕であるが、一部には先端刺突もある。この先端刺突手法は、施文原体を替えて後続型式にも存続する。

頸部には、原則として一定の幅を持った文様帯はない。ただ、一部には縄の側面圧痕や先端刺突による区画線的文様がある。この、一部の頸部に見られる縄の非回転手法は、表裏縄文土器以来の伝統的な手法の残存であり、大鼻式一般に備わった固有な特徴ではない。なお後述するが、口縁部の縄の側面圧痕の一部や、密接帯状施文例の体上部文様帯は頸部文様帯と見なされ易い。しかし当報告では、やはり頸部にある文様帯のみを頸部文様帯と呼んでおく。

体底部は、原則的に縦位密接施文の押型文がひとつの文様帯となっている。体底部に縄文を施さないことも、大鼻式の原則のひとつである。

文様　大鼻式に使用されている文様は、縄文と押型文のみであり、両者が併用されている点が特徴的である。縄文あるいは押型文のみの個体は知られていない。縄文には、回転手法と非回転手法がある。回転手法は斜縄文のみであり、単節が多いが複節や無節もある。非回転手法には、側面圧痕と先端刺突がある。側面圧痕は、横線状が大部分だが、鋸歯文やループ文の例[15]もある。押型文は、枝回転文が圧倒的に多く、市松文や格子文もある。しかし、山形文やネガティブな楕円文等は確認されていない。

口唇部の文様は、既述のように斜縄文に限られている。この縄文は、他の文様帯のものと同一原体が用いられていると推定される。縄文は太くて軟らかい原体を強く撚ったものであり、単節を中心に複節や無節も見られる。

口縁部外面の文様は、縄文を主体とするが押型文も一部に見られる。縄文には、回転手法と非回転手法がある。回転縄文は、横位に施した斜縄文である。非回転手法には、横位の側面圧痕を２～４段重ねる例を中心に、先端刺突を市松状に配する例もある。回転縄文例と側面圧痕例とがほぼ同数でほとんどを占め、先端刺突例はわずかである。なお、回転縄文を地文として側面圧痕を重ねた例もある。また、大鼻・坂倉両遺跡にはないが、西出遺跡にはループ文を配した例も知られている。

口縁部外面に押型文を施した例は、枝回転文のほかに市松文も微量ある。また、密接帯状施文の口縁部例には格子文もわずかに見られる。これらの口縁部に押型文を施す手法は、後続型式につながる要素である。当例は、屈折というよりも強く屈曲する大川a式に近似する口縁部にのみ見られる事実も示唆的である。これらは『概要Ⅲ』以来、その所属期が判然としなかったものである(211・212頁の「型式細分の課題」参照)。その理由は、該当例で頸部以下まで明らかな資料にほとんど恵まれなかったために、頸部文様帯や口縁部への押型文施文例の評価が定まらなかったことによる。正報告の現段階でも良好な関連資料には恵まれてないが、上記のように頸部文様帯を規定的要素と見なし、口縁部に押型文が施されていても頸部文様帯がないか、縄の押圧手法による区画線的なものであれば、大鼻式に包括しておく。

頸部の文様は、上述のように一部のものに縄の押圧手法が、１条の区画線的に用いられるのみである。押圧手法には、側面圧痕と先端刺突文とがある。先端刺突文は、やや下から縦に施して横に並べている。

体底部の押型文様の種類は、第65表(237頁）に見るとおり圧倒的に枝回転文が多く、市松文や格子文も散見される。この３種の文様の比率は、掲載できなかった細片まで含めると、当報告書に掲載した以上に実際は枝回転文が多かったと考えられる。

制作技法ほか　成形は、僅かながら確認される擬口縁から、正立状態でなされたと判断される。これは、体底部の文様は上から下に施されているが、右利きの製作者が左手で内面から支え、右手で上から施文した結果と推定される。そして擬口縁の接合部は、内外どちらにも傾斜せずに短い。したがって、接合

部より下に大きく粘土が覆い被さることもなく、剝がれた粘土の下から先に施した文様が現れるということもない。

正立状態で成形されたにも拘わらず、尖底部分や文様が押しつぶされた様子はない。また、口縁部は厚手の例が多いが、体底部は薄手であるか厚手ではない。ところが、当該期の文様は深く施文される傾向が強い。したがって、成形後にある程度乾燥させ、その後に再度器表を湿らせてから施文したと推定される。

内面には、指圧痕が目立つことも特徴的である。ただし、口縁部内面は強いヨコナデによって平滑に仕上げられている。内面の指圧痕は、後続する大川式にも見られるが、神宮寺式[17]では内面全体が平滑に仕上げられている。

なお、口縁部の文様は、既述のように向かって左から右に施されている。その理由は、体底部とは大きく角度の違う口縁部に施文するには、右利きの製作者が左手で内面から支え、右手で手前から向こう側に施文した結果と考えられる。

また、一部の頸部に見られる文様は、縄の押圧手法である。これは、単なる屈折部であって頸部文様帯として一定の幅を持ち得ないために、平坦面を幅広く必要とする押型文よりも、押圧あるいは刺突手法が適していたためと推定される。ちなみに頸部への刺突手法そのものは、原体は異なるが大川式にも引き継がれる。

密接帯状施文例　無文地への「異方向帯状施文」例に対し、密接施文するが異なる文様を帯状に持つものを意味する[18]。この概念の成立の前提には、近畿・東海地方の前半期押型文土器は、口唇部や口縁部は横位に、体底部は縦位に施文することを原則とする、という認識があった。このような一般原則から逸脱した文様帯構成の例が、各型式に存在する事実を指摘し、沢・樋沢式との前後関係等の議論を事実に則したものにしようとした次第である。

具体的には、口唇部や口縁部に加えて体上部にも横位の施文帯を持つ例を中心に、口唇部直下から垂下する文様帯を加えた例も見られる。また、体下半部の小片に縦位の異文様を持つ例もある。これら自身に一定の構成原理があるのか、また一般原則例に対する比率はどの程度か、等は未詳である。しかし、これら自身が原則を踏み外した存在であることから、おそらく一定の構成原理は持たないであろう。また一般原則例に占める比率は、具体的な数字を示す程の資料の蓄積はないが、後続型式よりも大鼻式期にやや多い印象を受ける。

B　課題

枝回転文　枝回転文の凹文部の多くは、斜めに刺突したように一方は緩く、他方は急な角度で窪んでいる。これは、派生する芽もしくは枝の角度と折り取られた面の角度を反映したものである。そして、急角度な斜面の中央が小さく突起している場合が多いが、原体の棒から派生しようとしていた芽を折り取るとできる凹凸を反映したものである。凹文部の全体形が半月形に近い例が多いことも、膨らみつつある芽を欠いた場合の形状と一致する。このような典型的な枝回転文は、各凹文部の間隔は疎らであり、あまり深くない。ところが、凹文部が密で深い例もある。この場合は、先端を欠損して直下から密に萌芽更新した小枝を原体としたものと考えられる。

ところで、枝回転文は市松文や格子文と異なり、原体彫刻を施さない。しかし、これらの区別は現実には困難な例もある。その理由は、枝回転文の原体である小枝から派生しようとしている芽、あるいは派生した更なる小枝の除去法にある。すなわち、折り取れば問題なく枝回転文であるが、刃物をつかって除去した場合は原体彫刻か否かの判断が困難になる。あえて発展段階論的に区分すれば、刃物不使用の原体調整段階と、刃物使用の原体調整段階、原体彫刻の段階、という3段階が想定できる。もちろんこれは極めて観念的な段階設定であり、大局的な流れは示しているとしても、現実には重畳的変化を遂げた可能性が高い。しかし今後、大鼻式の型式細分を試みる場合の留意点のひとつであろう。

型式細分の課題　撚糸文土器が棒と縄を施文材料にしたように、大鼻式土器も棒と縄を施文具としている。この内の縄は、伊勢地方では大川a式の古段階まで残存し、以降には姿を消す。そして、小枝をそのまま原体とした枝回転文と、原体彫刻した市松文や格子文という押型文が制作・施文された。この内の枝回転文は、現状では大鼻式にのみ知られる。一

方、市松文や格子文は大鼻式に少量見られ、後続する大川式に多い。したがって、市松文や格子文の出現割合は、大鼻式を型式細分する際のひとつの指標となる可能性がある。

ところが、枝回転文に対する市松文と格子文の出現割合は、南の坂倉遺跡では大鼻遺跡よりやや高い。一方、北の粟津湖底遺跡ではほとんどが枝回転文であるらしい。しかし、各遺跡間には器形や文様帯に大勢として差異はなく、むしろ南北の地域差の可能性もある。やはり型式細分するにあたっては、文様の種類の漸移的な変化だけではなく、その他の型式徴標も考慮して慎重に検討してゆく必要があろう。

この点に関連して、口縁部が短くてあまり強くなく屈折する大多数の例に対して、短いが強く屈曲する口縁部の例が注目される。この屈曲する口縁部には、原体を彫刻した押型文が施される例が多い。この口縁部形態も文様の種類も、後続する大川a式に近似する。しかし、この一群は一部に縄の非回転手法による区画線を持つが、基本的に頸部文様帯はなく、大鼻式の範疇に含まれる。これに対して、大川a式には棒状具による一定幅の頸部刺突文様帯が成立しており、口縁部は屈曲が相対的に弱く、長くなっている。

したがって、口縁部が短く屈折し、押型文は枝回転文のみ、あるいは圧倒的に枝回転文が用いられる大鼻式の古段階が設定できる可能性がある。もちろんこれに対をなして、口縁部が短く屈折するというよりも強く屈曲し、市松文や格子文が出現、あるいはやや増加した、大鼻式の新段階も設定できる可能性もある。しかし、型式細分には地方色の問題も関係するため、より広範囲な資料の充実を待って再検討していきたい。

分布　大鼻式土器は、大鼻・坂倉両遺跡以外に三重県内では美里村西出遺跡⑲、白山町広垣内⑳・西出㉑・南出遺跡㉒、美杉村上羽遺跡㉓、嬉野町釜生田遺跡㉔、松阪市鐘突㉕・鴻ノ木遺跡㉖、飯南町足ケ瀬遺跡㉗、小俣町石川遺跡㉘、度会町栢垣内遺跡㉙から出土している。県外では、奈良県大川㉚・上津堂前尻遺跡㉛、滋賀県粟津湖底遺跡㉜、岐阜県飛瀬遺跡㉝、愛知県大麦田㉞・北貝戸遺跡㉟、長野県お宮の森裏遺跡㊱の例が知られている。

このように、三重県ではかなり普遍的に分布しており、隣接する奈良県や滋賀県でも同様に普遍的な状況が推定される。ところが、岐阜県や愛知県・長野県では類例が乏しく、各地における在地の土器であったか、それとも搬入品であったか、現時点では断定できない。しかし一般に、早期初頭の土器型式の分布範囲がこの程度の狭さとは考え難い。又、大鼻式設定以来の類例の増加傾向も勘案すると、現状よりも分布範囲も広がり、分布密度も密になる可能性が高い。将来は地域型式の細分もあり得ようが、この問題も含めて現状では取りあえず、大鼻式として一括しておく。するとこの大鼻式は、近畿東部から東海地方を中心に広く分布していたものと概括できる。おそらく、より広い地域に分布していた表裏縄文土器に後続して、大鼻式もしくは類似した押型文土器が出現したのであろう。今後の類例の増加が期待される。

(4)　搬入土器

大鼻遺跡出土例中には、異質な縄文土器が1点ある。また、坂倉遺跡では撚糸文土器片も伴出している。これらは明らかに在地の土器とは異なり、他地方から搬入されたものと考えて誤りあるまい。

直口の縄文土器（第16・19図の25）　大鼻遺跡からの出土品である。既述のように、角頭形の直口口縁部片であり、外面に横位1条の縄の側面圧痕とこの上下の斜縄文によって矢羽根状を呈する。胎土は非常に脆弱で軽く、灰褐色を呈する。このような特徴は、いずれの点も在地の土器とは異なる。ただ、胎土は静岡県東部の駿豆地方の土器に類似する。しかし、駿豆地方の該期土器中に当例と同様な器形や文様構成の例は管見にして知らない。したがって、もし駿豆地方からの搬入品であっても、彼地における未確認型式の可能性もある。胎土の肉眼観察だけで産地を同定することは困難であり、まして胎土の類似をもって特定地方の特定型式に比定することは控えなくてはなるまい。

撚糸文土器（第123・124 図の73・74・81・111）大鼻遺跡では出土しなかったが、坂倉遺跡で少量が認められた。伊勢地方においては大鼻式だけではなく、大川式や神宮寺式にも微量だが伴出する。しかし、

当地方の押型文土器期には全く例外的な存在であり、搬入品と考えられる。

坂倉遺跡出土の撚糸文土器は、いずれも太い縄を疎らに巻いたものを深く施文しており、体部には縦位に施文している。このような特徴の撚糸文土器は、関東地方よりも静岡県地方のものに近似する。ところがこの内の1例（74）は、側面圧痕らしい1条を上端に残している。この類例を求めれば、その文様構成は井草Ⅰ式[37]に通じる。また、駿豆地方の若宮遺跡第Ⅲ群1類[38]にも共通する可能性も否定できない。しかし、若宮例は当例程施文が深くなく、胎土は明らかに異なる[39]。関東地方に西接する地域の、井草Ⅰ式並行期の土器型式が明らかになることが望まれる。

(5) 土偶

最古の土偶　大鼻遺跡から出土した土偶（32頁の第18図の107）は、竪穴住居（ＳＨ４）の埋土から出土した。土器片と同様に欠損し、竪穴住居が埋没する過程で廃棄された状況で出土した。このため、厳密には土器と共伴したわけではない。しかし、関係遺構から出土した土器の圧倒的多数が大鼻式であり、この土偶も大鼻式期に所属する可能性が極めて高い。もし大鼻式期でなかった場合は、この直前の表裏縄文土器期以外には考えられない。

大鼻式土器は、『概要Ⅲ』以来論じてきたように、現在確認されている限り最古の押型文土器型式である。そして、押型文土器は関東地方の撚糸文土器と大略並行関係にあり、両者の出現をもって早期とする、という立場に報告者は立っている。

したがって、大鼻遺跡出土の土偶は縄文時代早期初頭に属する、と理解される。もし早期初頭の大鼻式期でなければ、草創期末の表裏縄文土器期に位置付けざるを得ない。今は「早期初頭頃」としておく。

石製のいわゆるビーナス像を除いて、草創期の土偶は現在のところ知られていない。早期押型文土器分布圏内の近隣の例としては、大阪府神並遺跡例[40]が知られている。これは神宮寺式期に属し、報告者の編年観に従えば、関東地方の夏島式期[41]にほぼ並行する。そして、現在関東地方で最古とされているものは、夏島式土器に伴うとされる千葉県両国沖Ⅲ遺跡[42]の出土品である。ただ、現状では広域の土器編年が未確立であり、また現在の資料段階での「最古」に決定的な意味があるわけでもない。今は、早期初頭頃にはすでに土偶は出現していた、という事実をまずは確認しておかなくてはなるまい。

土偶の型式　近年は、土偶に関しても土器と同様に型式や様式を認定しようとする意識的な立場が多いが、優品主義や直観的な解釈論を脱して客観的な認識を深めるためには不可欠な視座であろう。

関東地方では、同じ撚糸文土器分布圏内でも具象的な「ヴァイオリン形土偶」と幾何学的な「逆三角形土偶」が存在する[43]。

同様に、当地方の押型文土器前半期には、大鼻遺跡のように「ヴァイオリン形土偶」にやや類似する具象的な例と、神並遺跡のような四角形の幾何学的な例とが存在している。このように東西日本のそれぞれにおいて、異なる型式の土偶が併存したらしい。土偶においては、複数系統の併存が一般的なあり方であった可能性も考慮して、その発生や伝播等の問題も考究されるべきであろう。

毀損廃棄の有無　大鼻遺跡出土の土偶は、腰から下と頭頂部や両腕先を欠損している。しかし、これらの欠損は非常に自然なものであり、特に意識的な毀損とは思われない。出土状況も特別意識的な要素は見られず、無造作に棄てられた感じである。

早期の土偶は、「出土数の割りには完存品が多く、意識的な毀損や、特定な欠損パターンが把握できない」ため、「完全な形のままで“まつり”に供され」たと考えられているが、大鼻遺跡例もこの見解を否定するものではない。

土器片と同様に破片で出土している状況は、少なくとも早期の土偶にとっては一般的なあり方である。しかし、もし土偶に意図的な毀損を認めるなら、土器も一般に欠損廃棄されている事実も併せて説明されなくてはなるまい。

祭祀単位　大鼻遺跡から出土した土偶は、現存の高さ4.5cm、最大幅5.8cm、厚さ1.7cmと小型である。他の早期の例も共通して小型である。

土偶が何らかの宗教的遺物であることには間違いなく、祭祀行為の対象もしくは祭祀具であったと考えて問題なかろう。するとその大きさは、祭祀の形

態や集団規模をある程度反映していた可能性がある。

当該期の集団規模に関しては、後述する（「（9）押型文期の文化」、218～225頁）ように、各単位集団が5～6㎞の領域をもって棲み分けており、この各単位集団はおそらく1～2棟の竪穴住居に居住する数人から十数人の小集団が一般的であったと推定される。

論理的には、複数の単位領域を包括した広域の祭祀単位も想定可能である。しかし、定住化を高めて永くなかろう早期初頭頃に、そこまで上位の社会組織化が実現していたとは考え難い。やはり、数人から十数人を基本形とする各単位集団が祭祀の単位でもあったと推定しておきたい。初期土偶が小型であることは、このような小集団が祭祀単位であったこととも無関係ではなかったであろう。

盛行の背景　土偶は、大鼻遺跡例を始めとして早期には一般化する。微視的には資料に恵まれていない地域もあるが、巨視的には列島規模で普遍化したと理解される。

この早期初頭頃とは、後述する(218～225頁）ように定住化の高まりが認められる時期である。縄文時代早期初頭頃には、気候の温暖化に伴ってコナラ亜属やクリ類等の堅果類、あるいは根茎類等々の植物質食料が豊富になった。また、土器や凹石、敲石、磨石等といった加工具がすでに用いられ始めている。こうして主客の条件が整い、その結果として定住性が高まり、本格的な掘削を伴う竪穴住居や煙道付炉穴等も見られるようになった。さらには、限られた種類とはいえ栽培植物、すなわち農耕文化さえも萌芽している。定住性の高まりにも窺えるように、「安定食料」としての植物質食料の重要性は前代よりも飛躍的に増したはずである。そして、植物質食料の採集・栽培・貯蔵・加工という一連の作業は、女性が担い手であったと推定される。女性による農耕社会とまでは至っていなかったであろうが、女性による安定食料負担社会ではあったのであろう。

これに対して、土偶の消滅した弥生時代は言うまでもなく本格的な農耕社会であり、男性耕作社会である。

ところで、土偶の性格は、女性の妊娠・出産能力に仮託した豊穣の呪具、と一般に理解されている。しかし、この女性の能力は超歴史的なものであり、縄文時代にのみ盛行したことの説明としては不充分である。まして農耕社会である弥生時代には反対に消滅した事実を説明できるものではない。もちろん、新来の農耕文化は新しい精神文化も文化複合として伴なっていたであろうし、新しい宗教が伝統的な土偶祭祀を駆逐した、との理解もあり得よう。しかし、人間の交代が汎日本列島的には無かったにも拘らず、宗教という最も保守的な部分がすっかり刷新された理由は、新文化を受容した社会の主体的条件の内に求めなくてはなるまい。

上部構造としての文化史・宗教史上の問題とは別に、基礎構造としての労働様式[44]に土偶の歴史的本質を求めようとする限り、発生あるいは盛行の開始と消滅の問題を統一的に説明できなくてはならない。ステートピギーやビーナス像等という前史や発生の具体的経過、あるいは早期以降の縄文文化の発達に伴なう具体的な展開は、文化史上の問題として別に論じられるべきである。

土偶が縄文時代に特徴的に盛行した背景には、女性が植物質食料の採集・栽培・加工・貯蔵という一連の作業の担い手であった、女性が安定食料を負担した社会があったのではなかろうか。

(6)　早期初頭頃の石器

既述のように大鼻遺跡では、尖頭器1点と石鏃43点、スクレーパー3点、突錐1点、楔形石器19点、磨製石斧2点、敲石2点、凹石1点、不明品1点の計73点が認められた。これ以外には、チャートの剝片が認められたが、石核は確認されなかった。

尖頭器（108）　確かな例では、基部を欠損するが有茎尖頭器ではなく、周縁加工のみのサヌカイト製の粗製品が1点検出されたのみである。

当地方の押型文土器前半期には尖頭器は確実に伴い、三重県下では多くの遺跡から有茎尖頭器や木葉形尖頭器が出土している（第66・67表）。これらの内、大鼻・坂倉両遺跡（大鼻式期）や鴻ノ木遺跡（大川a式期）、井ノ廣遺跡（神宮寺式期）では遺構に伴なった。また、東野B遺跡（大川式期）や一色山遺跡（神宮寺式期）等では包含層から出土した。さらに、石川・栢垣外・大原堀遺跡からは大鼻式か

ら大川式の土器、足ケ瀬・上ノ垣外・八王子遺跡からは大川式土器、上寺・上ノ広・上村池A・池ノ谷・大間広遺跡からは神宮寺式土器と共に表面採集されている。このほか、牟山遺跡や上ノ広遺跡等のように、押型文土器も出土したが、尖頭器やスクレーパー等は更に古い可能性が高い例もある。このように、遺構出土の例を中心に全体的な傾向を見ると、少なくとも三重県下の尖頭器は、押型文土器の前半期いっぱい、神宮寺式期までは存続したと考えざるを得ない。尖頭器を草創期に近畿・東海地方に盛行させた社会は、引き続き早期押型文土器文化を盛行せしめたものと思われる。

なお、これら押型文土器に伴う例は、凸基式の例が多いが平基式もあり、有茎式と無茎式とがある。有茎で押圧剝離を施したいわゆる柳又型[45]の例は、坂倉遺跡例を始めとして認められる。しかし、精良な製品は早い時期に多く、神宮寺式期のように新しくなると粗雑な製品が目立つ。

石鏃（109～151）　全て無茎の打製品であり、平基式と凹基式がある。精良な例もある一方、一次剝離面を多く残した加工度の低い例も多い。

大鼻遺跡出土例にもいくつかの形態があるが、当地方の大鼻式や大川式の頃には、いわゆる五角形鏃（109～118）が特徴的である。しかし、大阪の神並遺跡ではない。この五角形鏃は神宮寺式以降には見られず、明確な時期差を示している。

なお、石鏃の石材にはサヌカイトが多用されている。眼下の鈴鹿川ではチャートの転石が得られ、現に大鼻遺跡でもスクレーパーや突錐・楔形石器に多用されている。サヌカイトの最寄りの産地は、西南西に約80km離れた二上山である。小型の石器である石鏃には遠隔地のサヌカイト、相対的に大型の石器類には地元のチャート、という用途別の選択があったようである。しかし、チャートでも十分に石鏃は製作可能であったにも拘らず、入手がより困難であったはずのサヌカイトを選んだ理由は、石材としての品質という要因に加えて、文化的慣習なりの人為的要因も考慮する必要があろう。

また、早期初頭頃の遺構のあった約13m四方からは43点の石鏃が出土した。この部分の西半部（Ⅰ区）の遺構埋土は篩掛けした結果である。縄文時代各期の遺物を含む奈良県の大川遺跡では、1,242㎡の調査で402点が出土している。一方、大川遺跡と土質の良く似た美里村西出遺跡では、約1,000㎡の調査で主要遺構の埋土を全て篩掛けしたにも拘らず、十数点を確認してのみである。大鼻遺跡の43点も満足な完成品は29点であり、印象としては多くない。

石斧（175・176）　磨製の小型らしい2点の破片が出土した。しかし、そのほかには打製石斧もない。

一般に押型文土器前半期には磨製石斧は多くなく、石器を豊富に出土した神並遺跡にも見られない。この事実から、当時はまだ伐開能力が未発達であったと推定し、竪穴住居の集中傾向は大木の密生する地点を避けて開地を選んだ結果ではないかとも推定した（「占地の限定性」、218～219頁）。

なお、打製石斧は大鼻遺跡や神並遺跡には見られない。一方、後半期の神並遺跡上層期の樋ノ谷遺跡からは、1例だが礫の一端に刃を作り出した打製石斧が出土している[46]。当地方では類例に乏しく、あえて類例を求めれば、関東地方の撚糸文土器に伴うものが考えられる。

敲石と凹石（177～179）　いずれも砂岩の自然円礫であり、片手で握るに好都合な程の大きさである。特に、凹石の中央部は良く窪んでおり、長期に使用されたことを物語っている。

敲石2点、凹石1点と少数例だが、早期初頭頃の事例としては貴重であり、堅果実や根茎類等の植物質食料の加工に用いられたものと考えられる。これらは、煮沸加工用の土器、及び本格的な掘削を伴う竪穴住居や煙道付炉穴と共に、早期初頭頃にはすでに定住性の高まりが見られたことを示すものと考えられる。

組成の変化　大鼻遺跡から出土した上記の石器類のほかに、早期初頭頃の石器組成としては、尖頭器類や打製石斧、石皿、磨石等が考えられる。既述のように、尖頭器類は一般に押型文土器の前半期までは存続する。石皿は、当該期以前から少量は存在している。同じく煙道付炉穴の検出された鹿児島県地方でも、「草創期の古段階で、すでに磨石・敲石類と石皿が使われるようになっている」という[47]。磨石は、神並遺跡でも出土している。

一方、押型文土器の後半期にのみ確認されている

石器には、異形局部磨製石鏃（いわゆるトロトロ石器）や、小礫による打製石斧がある。反対に後半期に入ると尖頭器類は見られなくなる。また、押型文土器前半期末に属する神宮寺式期の上寺遺跡や神並遺跡では、石匙も出土している。なお、石錘は押型文土器期では確認されていない。

押型文土器期直前の様相が不明な現状では全体的な評価は困難であるが、上記のように、石器の組成は総体的に神宮寺式期頃を画期として大きく変化するようである。

なお、大川式や神宮寺式等の押型文土器を出土した東野Ｂ遺跡[48]からは、線刻礫（第118図の７）も出土している。

(7) 煙道付炉穴

特徴　大鼻遺跡では、早期初頭頃の竪穴住居群に重複、あるいは近接して、合計16基程の焼土坑（ＳＦ１～16）が検出された。これらは全般に削平が著しく、基底部を残すのみであった。このため、全てが同じ構造であったかは不明である。

しかし、比較的残りの良いＳＦ９は、長さ1.25ｍ以上、幅0.8ｍ以上の隅丸二等辺三角形、もしくは長楕円形であったらしい。床面はほぼ平らであり、両側壁の残りの良い部分は前傾（over hang）していた。床面や内壁は強く焼けており、埋土には焼土や炭化物が混じる。

全体構造が不明の例が多いために「焼土坑」と総称したが、上記のような例は「煙道付炉穴」[49]と呼ぶべきものであろう。

県下の煙道付炉穴　大鼻遺跡の煙道付炉穴と同じ構造と推定される遺構は、三重県下には坂倉遺跡をはじめ、鴻ノ木遺跡や西出遺跡で検出されている。いずれも、早期初頭の大鼻式から大川a式に属している可能性が高い。

これらは一般に、長楕円形もしくは隅丸の二等辺三角形を呈し、両端は開口するが、中央部はトンネル状に天井が張られている。長い例では2.65ｍ、最大幅は0.8ｍ程であり、遺存度の高い例[50]では深さが約0.65ｍである。やはり床面や内壁は良く焼けており、焼土塊や炭化物が混入している。もちろんこの焼土塊は、遺構の崩壊に伴って堆積したものであろう（第128図）。

大鼻遺跡のＳＦ２からは、格子押型文土器片（35）も出土した。また、鴻ノ木遺跡の「炉15」からは完形の大川a式土器も出土し、坂倉遺跡の例（ＳＦ７）からは、有茎尖頭器（第123図の84）も出土した。

竪穴住居との重複関係　各遺跡共、煙道付炉穴は竪穴住居と重複もしくは近接して造られている。特に、大鼻遺跡のＳＨ１とＳＦ３～６・８～10や、鴻ノ木遺跡の屋外炉13～14・炉15のように、竪穴住居から放射状に延びた例が目立つ。放射状とまではならなくても、竪穴住居と重複する例は多い。それ故、竪穴住居と一体の遺構ではないか、との疑問も生じ易い。しかし、確認し得た限りは切合関係にある。また、屋内炉としては不可解な大きさと構造である。まして、１棟の竪穴住居に複数が設けられていたとは考え難い。さらに、煙道付炉穴が全く認められない竪穴住居も多々存在し、また煙道付炉穴だけが単独で存在する例も多い。したがって、煙道付炉穴を含めた焼土坑全般は、竪穴住居とは別に、しかし近接して営まれていたものと推定される。竪穴住居跡等の窪地に重複する例が多い理由は、焚口付近が低い方が、灰の掻き出しに好都合であったことによるのであろう。

耐用期間　煙道付炉穴の絶対耐用期間は不明である。しかし、大鼻遺跡の場合は、竪穴住居８棟に対して煙道付炉穴は16基程が検出されている。坂倉遺跡でも、竪穴住居の２～３倍の煙道付炉穴が存在したらしい。主柱も無い竪穴住居の耐用年数は長くはなかったであろうが、トンネル状の天井を持った煙道付炉穴は崩れ易く、さらに耐用年数は短かったであろう。したがって、煙道付炉穴が竪穴住居の２～３倍も多く造られた理由は、竪穴住居よりも相対的な耐用年数が1／2 ～1／3 と短かったため、と考えられる。

分布と消長　三重県下の煙道付炉穴は、大鼻遺跡や坂倉遺跡では早期初頭の大鼻式期頃のものが検出されている。一方、鴻ノ木遺跡では大川a式期に多い。これより後では、例えば神宮寺式新段階期の井ノ廣遺跡や鴻ノ木遺跡の神宮寺式直後の例では、集石土坑は多く存在するが、煙道付炉穴は検出されていない[51]。なお、大鼻式より古い草創期の遺構は、現段階

の三重県下では不明である。一方、愛知県の馬場遺跡では、大川ｂ式期の類例が報告されている[52]。

以上、三重県と愛知県の例から、東海地方では煙道付炉穴は大鼻～大川ｂ式期に特徴的である、と指摘できそうである。そしておそらく、東海地方では大鼻式期以前にも煙道付炉穴が造られていたのであろう。

一方、南九州地方では、「掃除山遺跡の草創期段階から貝殻文円筒土器系統の早期前葉の限られた時期の集落に付随[53]」して、「相当数が検出されている。」しかし、「今のところ中九州や北部九州」及び中国・四国地方「にはみられない。ところが、三重県鴻ノ木遺跡」や坂倉・大鼻遺跡等、及び愛知県馬場遺跡では、先述のように早期前葉に、「確認されている。さらに、関東地方では早期後半にこの種の炉穴の存在が早くから指摘されていた[54]」。

このように煙道付炉穴は、いまだ孤立分散的なあり方ではあるが、日本列島のかなり広い範囲に分布しており、その消長には地域的跛行性が認められる。しかし、これらは構造的に良く類似しており、各地域で個別に発生したものとは考え難い。やはり同一系統の文化的所産なのであろう。

その出現は、南九州が草創期からと最も古くまで確認されている。これに対して、東海地方では草創期は不明だが早期前葉にはあり、関東地方は早期後半と遅い。したがって現段階では、西日本から東日本に波及したものと推定される。

また、この時期は気温の上昇期にあたり、植物性食物も豊富になったと考えられる。温暖化は植生の変化も促進したであろう。このような現象が、煙道付炉穴が西から東に波及した背景にあったと考えられる。加えて、これが関東地方より北の寒冷地には波及しなかった理由でもあろう。おそらくこの煙道付炉穴は、特定の植生の分布と密接に対応していたのであろう。

食物の新しい加工法に伴う新出の遺構と考えられる煙道付炉穴[55]が、九州地方から東方に伝播したであろう時期は、草創期から早期であった。この煙道付炉穴は、中央部をトンネル状に掘り残した細長い炉穴である。したがって、このように本格的な掘削を伴う遺構は遊動生活には不向きであり、定住生活にこそ則したものである。それゆえ煙道付炉穴は、竪穴住居や土偶等と共に、定住性の高まりを物語るものであろう[56]。

いずれにせよ、今後はその機能の解明が課題である。また、同時期に存在した集石土坑との関係や、両者が消滅してから屋内炉の出現に至る過程等も、今後の研究課題である。

(8) 竪穴住居

規模と形態　大鼻遺跡では、13ｍ四方程の範囲に８棟程の竪穴住居が集中していた。これらは典型的には、直径４ｍ程の不正円形の平面形であり、付属施設としては壁際に垂木穴を残すのみであった。壁は前傾（over hang）しており、床面はわずかに舟底状を呈していた。

焼土坑と重複する例も多いが、前述のとおり前後関係にあり、屋内炉ではない。周溝状の部分もあったが、局部的であり、周溝とは考え難い。むしろこの周溝状部分は、壁際の垂木穴の布掘りされたものかとも考えられる。

壁際の垂木穴は、直径0.1ｍ程のものが多く、0.1～0.3ｍの間隔を置いていたらしい。この垂木穴は、床面から壁への傾斜変換部分にあり、円形住居の中心に向かってやや傾斜する例が多い。後の時代の竪穴住居では、主柱穴とは別に壁際に柱が直立させてある場合がある。このような例は、いわゆる「壁柱穴」と呼んで差し支えなかろう。しかし、当遺跡のように直立せずに中心に向かって傾斜させ、しかも柱とするには細くて密に配している例は、「壁柱穴」ではなくて垂木尻を埋設した穴と推定される。

なお、この垂木穴が比較的良く遺存していたＳＢ11では、南西の一か所だけが1.1ｍ程と大きく間隔を開けており、ここが出入口であった可能性が高い。

復元的考察（第128図）　竪穴住居の深さは、検出した最深部で0.45ｍであった。しかし付近の焼土坑の深さは、竪穴住居よりやや浅いか、ほぼ等しい。この焼土坑としたものの大部分は、煙道付炉穴と推定された。坂倉遺跡や鴻ノ木遺跡の遺存状態の良い煙道付炉穴は、深さが0.65ｍはあって、天井部も残存していた。このことから、大鼻遺跡の焼土坑や竪穴住居は、0.2ｍ以上は削平されていたものと推定

される。すると、竪穴住居の本来の深さは、0.65ｍ以上であったと考えられる。

今仮に、深さを0.8ｍとすると、径４ｍの竪穴住居を建てるためには、先ず10㎥程の土を掘ったはずである。この際、壁は前傾（over hang）させ、床もやや舟底状にした。次に直径0.1ｍ程の垂木穴を、0.1～0.3ｍの間隔で中心に向かって傾斜させて掘った。ただし、一か所は垂木穴の間隔を1.1ｍ程あけ、出入口とした。

垂木は頂部でひとつに縛られ、以下には細枝で横桟を結び付け、これに茅等を葺いたのであろう。しかし単にこれだけの仕事では、雨水が竪穴住居内に流入してしまう。そこで、第128図のようにいったん葺いた屋根と壁の間を、地表面よりも高くまで埋め戻し、さらにこの上に再度葺き下ろしたものと推定される。このように、壁際は埋め戻しすることが掘削前から予定されていたからこそ、掘削作業の省力化のために壁を前傾させたのであろう[57]。

耐久性と定住性　竪穴住居の柱の太さは、堅牢性よりも腐朽への耐久性を考慮したものであって、住居の安定性を示す指標である、として注目されている。

しかし、大鼻遺跡をはじめとして、早期初頭頃の竪穴住居の多くは主柱穴を持たず、壁際に垂木穴が囲繞するだけである。そして、その垂木穴は垂木痕跡か掘形かは不明だが、直径20㎝以内と小さいものが一般的である。これは、後の主柱穴を持つ屋根組み構造と比較して、構造的には明らかに弱く、耐久性も低かったはずである。

とはいえ、これは個々の竪穴住居の耐久性の問題であり、定住性の問題に直結されるべきものではない。むしろ、地面を一定程度掘削して住居を建てることが一般化した事実こそ、住環境の整備に多くの労力を投入するようになったこととして、評価されるべき側面である。

ほとんど掘削せずに屋根組みもない段階から、本格的な掘削を伴うが本格的な屋根組みのない当該期のような段階、そして本格的な掘削と屋根組みが揃う段階、と竪穴住居の構造は建築史的に大きく３段階に区分されよう。この流れは、巨視的には定住性の高まりに対応した建築技術の発達史である。しかし、建築史的な画期と定住化の画期とは、必ずしも厳密な対応関係はなくても不思議はない。

(9)　押型文期の文化

遺跡規模　再三指摘したように、大鼻遺跡における早期初頭頃の遺構と遺物は、同様な地形が広くあるにも拘らず、13ｍ四方程の範囲に集中していた。検出された遺構は、８棟の竪穴住居（ＳＨ１～８）と、その大部分が煙道付炉穴であろう16基の焼土坑（ＳＦ１～16）である。

出土遺物は、13個体以上百数十点の土器片と１点の土偶、及び73点の石器等である。特に石器は、石鏃の未製品（138～144）や製作途中に失敗したらしい欠損品（145～151）がある。石核はないが、剝片は認められた。したがって大鼻遺跡では、石器製作もしていたと推定される。

検出した竪穴住居は、その重複状況から４期以上に及んでいたと判断され、各期には１～２棟が存在しただけであろう。しかし、竪穴住居は調査区よりも北方に及んでおり、調査区北壁から約20ｍの位置にこの台地を南北に分ける微かな分水嶺がある。そこで、居住域は大地の南斜面にあったと想定すれば、検出した13ｍ四方程の約２倍の面積になる。したがって、調査区外も同様に竪穴住居が密集していたなら、竪穴住居や焼土坑は倍程の数になる。しかし、もとよりこれは推測を重ねた話であり、北隣接地の保存と将来の調査が期待される。

ともあれ、調査区内に限定すると、地形以外の理由で特定地点に集中して１～２棟が４期以上にわたって建てられている。坂倉遺跡でも、狭い範囲に集中する傾向がある。

占地の限定性　上記のように、同様な地形のなかで局地的に重ねて建て替えられた理由は、歴史時代と同様に考えることは不適切である[58]。当遺跡のような縄文時代早期初頭頃の場合、あるいは以下のような理由であったのかとも考えられる。

すなわち、遺跡が営まれる前の密生する原生林でも、老大木が枯死した跡地にはポッカリと開地が生じる。あるいは別のなんらかの事情で局地的に開地が生じたこともあったであろう。人が最初に選地した時、樹木が生い茂る中にあって、大木もなく、伐開し易かったのがこの地点だったのではなかろうか。

当遺跡からは、この時期に属する伐開用の大型磨製石斧の確かな例はないことも示唆的である[59]。そして、間断のない継起的居住であればもちろん、季節か何年かの間をおいた断続的居住であっても、木々が太く茂る前に同地点に何回か回帰した結果、著しい重複が生じたのではなかろうか。このように、微地点の選定は植生に規制された可能性がある。

一方、少数とはいえ複数棟が同時存在した場合は、相互の位置関係が重要であり、新築棟が既存棟の近くに選地され続けた結果、重複が激しくなったという側面もあろう。

遺跡の立地　一般に縄文時代の遺跡は、河川の上・中流域の沖積地に面した丘陵上に立地することが多い。源流域は現代の開発が少ないためか、遺跡発見の機会が少ない。とはいえ、源流域に遺跡の少ない基本的要因は、気候上の条件が厳しくて動・植物相も比較的単純であり、日当たりの良い開地も少ないことにあろう。一方、下流域では沖積作用による埋没が激しいためか、やはりあまり遺跡が発見されていない。これに対して、上流や中流の蛇行する部分の舌状台地等に遺跡が立地する例は、枚挙にいとまがない。

大鼻遺跡は、鈴鹿川本流を眼下に見下ろす台地南縁という開地に立地している。台地上はあまり浸食が進んでおらず、単調な平坦部が多い。眼下の鈴鹿川は、比較的大きな河川であり、当該地域は中流域にあたる。

このような遺跡の立地点は、山林と開地、丘陵と水辺という、自然環境の変換点である。堅果類を中心として有用植物の繁茂し易い開地に占地し、山林を始めとした狩猟地、内水面漁場となった水辺等、大鼻遺跡の人々も又、依拠する動・植物相が多面的で豊かな、いわゆる林縁効果の高い地点を好んで生活の場を選んだことが窺われる。

しかしながら、大鼻遺跡の立地する鈴鹿川中流域では、「位置と環境」の章（３～４頁）で概観したように同時期の遺跡は未詳である。したがって現状では、遺跡間の相互関係を追求して領域の問題を検討することは困難である。そこで、比較的多くの同時期の遺跡が調査されている南伊勢の櫛田川流域に例をとり、以下に若干の検討を加え、大鼻遺跡の理解への一助としておく。しかしこの前に、温暖化に伴う女性の生業の変化と、分析の鍵となる領域概念について、必要最小限の検討を加えておく。

温暖化と女性の生業変化　大鼻遺跡から約55km西北西方向の琵琶湖底に、粟津湖底遺跡が存在する。この粟津湖底遺跡の調査からは、大鼻式土器問題にとどまらず、自然環境の復元に関しても多くの重要な成果が得られている[60]。

これによると、最下位のＴ層では「コナラ亜属が約20％と優占するが、マツ属単維管束亜属（いわゆるゴヨウマツ類）も10数％と高く、」「カシワ・コナラ・クリの果実がふつうに産出」している。これより上層の大鼻式土器を含むＲ層では、「コナラ亜属が50％以上を占め最優占する」。そしてこの上のＰ層では「コナラ亜属が50％前後を占め最優占する。」特に同層中のP2層では、大鼻式土器を伴う「クリ塚」が検出されている。この『いわゆるクリ塚からは、クリの果皮・炭化子葉・刺、ヒョウタンの種子・果皮、人為的な打撃行為が加えられたとみられるオニグルミの核、それにこれまで「緑豆」とされてきたいわゆる「緑豆」類の炭化した種子が産出したが、多量の土器・編物などの遺物とともに産出していることから、人の生業と深く係わるものとみられ』ている。なお、これより上層のＬ層には神宮寺式土器が伴い、「コナラ亜属が45～50％と最優占し」ているという。

一方、若狭湾に面した鳥浜貝塚[61]でも、「早期の押型文土器をつくった人が住んだころは、ブナ林を中心とする冷温帯林は後退し、ナラ類・クリなどの暖温帯落葉広葉樹林の時期にあた」り、「クリの実が多く検出され」ている。このような一連の森林植生の変化は、完新世初頭の急速な気候の温暖化によるものとされている。

これらにおいて特に注目される点は、早期初頭の大鼻式土器の頃には、コナラ亜属を中心とする暖温帯落葉広葉樹林が優占しており、「クリ塚」まで形成されていたことである。粟津湖底遺跡において確認されたようなコナラ亜属の最優占状況は、当然この堅果類の食用化を推測させる。すでに草創期の鹿児島県東黒土田遺跡ではアク抜きの必要なコナラ属の堅果類の詰まった貯蔵穴が検出されていることも

あり[62]、注目すべき重要な問題である。

加えて、ヒョウタンという栽培植物が認められ、「緑豆」類も検出されている。栽培植物に関しては、縄文時代も時代が下るにしたがって、各地で確認された種類がふえている。「ただし、縄紋時代の栽培に関しては、考古学の中で否定的立場をとる人も」多い。しかし、「この土器とこの種子とは同時期のものであることを、確実に認める」「ところまでが、考古学の仕事で」ある。「それを植物の専門家が栽培種であると認めて、しかも外来種であると認めているわけ」であり、考古学の立場からは「それを否定することは」できない、という指摘は至言である[63]。これが考古学研究者としての本来の立場であろう。早期初頭に栽培植物がすでに存在したことは、とりもなおさず、農耕文化が存在したことを物語っている。とはいえ、農耕文化の端緒的成立が、即農耕社会の形成に至らないことはもちろんである。縄文早期文化の一端に農耕文化を率直に認める必要がある一方、過大評価は慎まなくてはならない。

このような意味で、「塚」まで形成された程に利用されたクリをはじめとする堅果類は、どの程度品種改良が進んでいたか否か、今後の研究成果が待たれるところである。しかしそれはともかくとして、今着目すべき重要な点は、例え野性種のままであっても、すでにクリが重要な食料資源となっていた事実である。代表的な狩猟民族とされてきたサン族（いわゆる「ブッシュマン」）等でさえ、動物質食料よりも植物質食料への依存度が高いという研究成果も想起される[64]。貯蔵可能な堅果種の大量出現と利用は、当時の社会を大きく変容させたと想像するに難くない。

ところで、「後氷期の温暖化によって増加したクリ、ヒシ、ドングリ類」「などは、いずれもデンプン質の種子やナッツである。一時に大量に食べることができるが、しかしこれを食べるためには、加熱調理が不可欠である。」「後氷期の温暖化に伴って、土器や石皿、磨石などが出現する。これらは明らかに、デンプン性食料の大量調理を示す遺物である」と指摘されている[65]。大鼻遺跡においても、煙道付炉穴が設けられ、凹石や敲石が使用されていたが、このような視点からの歴史的評価がなされるべきであろう。　鳥浜貝塚の調査結果によれば、前期における二次林の展開に対して、早期前葉では二次林を示す要素は欠けているという[66]。したがって、定住化の歴史もまだ浅かったことが確認される。まして、いかほどかの農耕文化が縄文早期初頭の社会に存在していても、主要な食料を賄う程のものとは考え難い。むしろ、自然林に増加した植物質食料の採集・貯蔵・加工の比重が増大したことこそが重要である。このような植物質食料の採集・貯蔵・加工を中心として、一部に栽培植物の栽培も含んだ経済活動は、以後の縄文社会の基盤を成したものであろう。類人猿から多くの民族例までメジャーフードは植物であるが[67]、列島の後期旧石器時代では相対的に植物質食料への依存度は低かったと推定されている[68]。しかしここに至って、採集に加工や貯蔵、さらに栽培まで加わった食文化を実現させたのである。そしてこの生業活動の主な従事者は、女性であったと考えられる[69]。狩猟と採集における男女の分業は、多分に生物学的次元に係わるものであり、あえて縄文社会を例外とする根拠はないからである。

一方、例えばサン族（＝ブッシュマン）のような遊動採集狩猟民の場合は、食料の量的中心は植物（安定食料）[70]に置きながらも、肉こそが「本当の食物だ」といっているという[71]。このことが示すように、縄文時代も男性による狩猟活動は「優良食料」としての重要性を保持していたと考えられる。

とはいえ、縄文時代早期初頭までに実現した女性による植物質食物文化の発展は、「安定食料」としての植物質食料の重要性をいっそう高めたのであろう。既述（「盛行の背景」214頁）のように、こうした変化が縄文時代のみに土偶という女性像を盛行させた背景にあったと考えられる。

領域概念（第128図）　近年は、自然環境の分析を通して当時の生業活動を復元しようとする生態的研究と共に、領域分析が盛んである。このために「遺跡、遺跡群、水系、水系群」[72]あるいは「生活領域」や「集団領域」、「クニ」[73]等の領域概念が提起・使用されている。また、一般にその行動域は、採集狩猟民が半径10km（歩行時間２時間）、定住生活民では半径５km（歩行時間１時間）と推定されている[74]。そして、このような広さの中で各「住居は、食料生産

の場に設けられているというのが前提であるが、そこからごく近いところがもっとも利用されるとするものであり、歩行時間10分ぐらいの距離が最重要の領域としている。」[75]ここでは、社会組織の上下という同心円構造と共に、利用度という質的な二重の同心円構造も加味されているのである。実際問題、生活に利用する土地の範囲は、活動の中身によっても異なっている。例えば、集落近くのクリ林と、たまに猟に出向く遠くの森とでは、ナワバリ意識にも強弱があったであろう。又例えば、同じく狩猟でも弓矢猟とワナ猟では、その活動領域は異なっていたであろう。

ところが、以下に概観する櫛田川流域の状況は、利用度による区分が2段階ではなく、3段階の方がより合理的に説明できそうである[76]。そこで、哺乳類一般の分析概念を参考として[77]、利用度による次の3段階区分を措定しておく。すなわち、

拠点利用域＝「集中利用域」の中でも特に利用度が高い地域。クリ林等の主要食物資源の存在が遺跡の立地を規定しており、住居とその周辺。櫛田川流域では、往復1km程の範囲。

集中利用域＝「単位領域」の中でも特に利用度が高い地域。「拠点利用域」の選定候補域であり、「拠点利用域」の累積の結果として認識される領域。櫛田川流域では往復3km前後の範囲。

単位領域　＝単位集団の日常的な生活範囲。「拠点利用域」を核として、周辺に無住の山野を包括する。櫛田川流域では、往復5～6km程の範囲。

以上の様な概念をもって、以下に具体的な検討を加えることとする。

櫛田川流域の遺跡群（第126・127図）　三重県下の押型文土器は、百余の遺跡から出土している。そしてこれらの遺跡の分布動向は、過半を発見した奥義次氏によって公表されている[78]。氏の分布図を基に検討すると、各河川の上・中流域で数遺跡が比較的狭い範囲に群在することが目に付く[79]。例えば、員弁川水系の大安町石榑で4遺跡、雲出川水系の白山町二本木で4遺跡、同町家城で5遺跡、森本・釜生田付近で6遺跡、宮川水系の勢和村色太周辺で7遺跡、等々である。

そしてこのほかに櫛田川水系では、上下直線距離26.5km内の両岸に24遺跡が確認されており、7遺跡群にまとまっている。まず最上流の飯高町神殿では、1遺跡だけが単独で確認されている。おそらくこれも、周辺の未知の遺跡と共にひとつの遺跡群を形成していたのであろう。したがって現状では、1遺跡だけだが1遺跡群として扱っておく。この下流には、飯南町粥見付近で4遺跡、勢和村片野で6遺跡、松阪市御麻生薗町付近で3遺跡、松阪市中万町周辺で5遺跡、多気町JR多気駅周辺で3遺跡、多気町JR相可駅周辺で2遺跡が認められている。

この内、松阪市中万町及び多気町の多気駅周辺と相可駅周辺の遺跡群は、氾濫原が広くなった下流域に立地する関係からか南北両岸に分離され、南岸では散在傾向が強い。また、多気町相可駅周辺では2遺跡が確認されているのみであり、不確定要素も多い。しかし、北岸にある中万町周辺の5遺跡は良く集中しており、地理的なまとまりも窺える。そこで、これら下流域を一応上記のように3遺跡群と理解しておく。

なお、北岸に位置する中万町周辺の5遺跡中の4遺跡は、何らかの程度の発掘調査が行われている。そこで次に、松阪市中万町周辺の遺跡群を中心として考えてみることとする。

中万集団　第69表のように、松阪市中万町周辺の遺跡群は、各々異なる型式の土器を出土する傾向が強い。一部に同一型式の土器を出土する遺跡もあるが、この両遺跡間には出土土器量に圧倒的な差があるか、型式内での新旧が推測される。したがって、櫛田川流域における遺跡群とは、同一単位集団が一定領域内で継起的に1～1.5kmの距離で住居を移した累積の結果、と推定される[80]。累積の結果とはいえ、周辺にも同様な立地が続くにも拘らず往復3km前後に集中している現象は、この地域への意識が伝統的に存在したこと、おそらく特に利用度が高い範囲であったことを物語っていよう。これが「集中利用域」と

したものである。

さらに、各集中利用域は5～6㎞程の距離を保っており、その間は地形的に特別不都合とも見えないが、遺跡の空白地帯が続く。したがって、この往復5～6㎞程の領域は、前述の「単位領域」に相当する。この領域範囲は意外に狭小とも感じられるが、これは川沿いの直線距離である。実際には背後の深い丘陵地帯も含めた、より広い領域が利用されていたのであろう。おそらく、集中利用域程には排他性の強くない単位領域の周縁部が、広域間交流の前提ともなっていたのであろう。また論理的には、上記のような集中利用域や拠点利用域の固定化は、一定程度の定住性の実現を前提として出現した領域であったはずである。

なお、大分水嶺はともかく、入り組んだ小支流や平坦な下流域では、水系単位に社会集団を把握することは必ずしも実際的ではない。水系、あるいは水系群という領域区分は、巨視的には正しかろうがあくまで抽象概念であり、その実地への適用には実際に即した判断が必要と実感される。

ともかく、上記のように具体的に検討して見ると、早期前半における櫛田川水系には、7程の単位集団が5～6㎞の距離を保って棲み分けていた、と推定された。各単位集団は、各々往復5～6㎞の単位領域、この内に往復3㎞前後の集中利用域、さらに往復1㎞程の拠点利用域が存在したと推定される。そして各単位集団は、各集中利用域内でほぼ単一土器型式期間毎に住居を移動していたと推定された[81]。県下の他の流域での遺跡の分布状況も櫛田川と同様なことから、集団領域のあり方も共通していたと推定される。したがって、おそらく大鼻遺跡の立地した鈴鹿川流域でも、基本的に同じであったであろう。

住居移動の理由　上述のように、各単位集団が空閑地を挟んで棲み分け、各集中利用域内で1～1.5㎞以内の距離で住居を移していた様子が推定された。このような近距離への移動は、動物を対象とした狩猟中心の生活では説明できない。住居周辺での動物資源の枯渇は、少々居を移しただけでは解決しなかったはずだからである。したがって、住居を移した理由は別にあったと考えられる。

そこで別な経済的理由としては、動物を対象とした狩猟中心の生活ではなく、植物資源への依存を基礎とした社会であったから、と推定したい。典型的な狩猟民とされていた遊動生活者であるサン族（＝ブッシュマン）でさえ、「移動の時期と経過は、100パーセント近く、植物性食物の量に基づいて決定され」ている事実も示唆的である[82]。縄文人も、クリやコナラ亜属の堅果の繁茂する林、あるいは根茎類を求めて移動した、と考えるのである[83]。

ただ、これらの主要な食用植物林も、自然の植生の一部である限り、乱獲や植生の遷移と共にやがて収穫量は低下する。特に根茎類は、堅果類よりも歳毎の作柄の変動が大きく、乱獲による資源の枯渇が生じ易い。有用植物への保護・管理がある程度されても、植林や播種・株分け等という積極的な栽培という再生産がされない限り、やがて生産高は低下する。このように、主要な食用植物の繁茂期間が各遺跡の存続期間を規定した結果、単一土器型式期間を超えることは少なかったのではなかろうか。縄文時代の早期初頭頃には、すでに一定の定住性の高まりを可能ならしめていた要因は、一方で一定以上の定住化への限界性をももたらしていたのである。

縄文的生活様式の実現　大鼻遺跡では、竪穴住居や煙道付炉穴という、長期的な居住を前提とした遺構が認められた。土器も大型品が認められ、これも定住生活にこそ適している。

一方、当時は粟津湖底遺跡に見るように、気候の温暖化に伴ってクリ等の堅果種が重要な食料となっていた。このような気候の温暖化とそれに伴う食生活の変化は、新しい食物加工遺構としての煙道付炉穴を出現させた。煙道付炉穴の分布は、現状では南九州と東海・関東でのみ確認されている。しかし、気候の温暖化に伴うクリやコナラ亜属という暖温帯落葉広葉樹林を背景として、列島規模で生起した一連の文化動向であろう。

当時は櫛田川水系で見たように、3㎞前後の範囲内で、1～1.5㎞程という近距離に住居を移すことを繰り返していたらしい。この現象は、狩猟の対象である動物以上に、植物を求めて住居を移した結果であり、主要な食物が植物質であったことを示していると理解された。しかし、基本的に自然林に求められたクリ等の堅実類は、植生の遷移によってやが

て生産高が低下する。そこで、クリ林等の繁茂期間が一定程度の定住化を可能とする一方、定住期間の限界ともなったと推定した。また加えて、堅実類よりも簡単に枯渇し易い根茎類の資源状況も移動の重要な動機であったとも推定した。

大鼻遺跡で検出された竪穴住居は、同時には1～2棟存在したのみと推定された。未調査区を加えても、この倍程度と考えられる。このような小規模の単位集団が、往復1㎞程の拠点利用域を持ち、往復3㎞前後の集中利用域を持っていたと推定された。そして各集中利用域は、無住の山野を周辺に擁し、往復5～6㎞程の単位領域を形成していた。一定の居住対象域を持ちながら山野を挟んで棲み分けていたのである。このように、小規模な単位集団が意外と狭い領域で生活していたと推定されたことからも、植物質食物への依存度の高さが窺われよう。また、集中利用域の固定化や各側面に窺われる定住性の高まりは、当然社会組織の発達の前提ともなったはずである。

土器を始めとする凹石・敲石等の調理具の発達は、すでにメジャーフードであった植物質食料の加工度を高め、その重要性をさらに増したであろう。さらに一部の栽培植物は早くから伝来し、食生活の安定化に寄与していたと思われる。また完新世の温暖化は、こうした植物質食料の採集・栽培・貯蔵・加工調理の比重を自然環境面から増加させた。前期旧石器時代以来何回か訪れたであろう温暖期の後に、始めて主体的条件と環境条件が満たされ、本格的な縄文文化の成立を可能ならしめたのである。

そして、このような植物質食料の採集・栽培・貯蔵・加工調理という仕事は、男性の狩猟と対をなして分業化した女性の仕事であったと考えられる。土偶は、安定食料を女性が中心的に賄う社会の出現を背景として盛行し始め、男性耕作社会である弥生農耕社会への移行と共に消滅した女性像なのであろう。

後氷期の中緯度森林地帯に存在した大鼻遺跡は、上記のような生活領域の下に女性を担い手とする採集中心の生業戦略を構築し、これに対応して一定程度定住性を高めた遺構や遺物を実現していたと評価される。このような生業形態は、基本的に変わることのなかった縄文時代の特徴である。大鼻遺跡は、すでに早期初頭の段階において、縄文時代的な生活様式が基本的に完成していたことを物語っているのである。

（山田　猛）

〔註〕

① 梅澤裕・山田猛『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』（三重県教育委員会、1987年）。

② 註①の文献、及び下記の文献において型式設定したものである。
山田猛「押型文土器群の型式学的再検討－三重県下の前半期を中心として－」（『三重県史研究』第四号、三重県、1988年）。

③a 酒詰仲男・岡田茂弘「一　大川遺跡」〔『奈良県文化財調査報告（埋蔵文化財編）』第二集、奈良県教育委員会、1958年〕。
b 松田真一ほか『大川遺跡』（山添村教育委員会、1989年）。
なお、報告者も註①・②の文献で型式内容を再定義した。

④ 註①の文献、及び下記の文献。
a 三重県教育委員会「坂倉遺跡」（『三重県文化財年報5』1975年）。
b 奥義次「第二編　原始」（『多気町史　通史編』多気町、1992年）。

⑤ 近畿・東海地方の押型文土器は一般に密接施文であるが、一部に異なる文様を帯状に施すものがあり、これを指した報告者の造語である（註②の文献の60～62頁）。

⑥ 矢野健一「押型文土器の起源と変遷に関する新視点」（『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）の100～103頁。

⑦ 大川式の二分案は、註①及び②の文献で示した。大川式の報告でも、この二分案の妥当性は確認されている（註③bの文献の275～276頁）。時間細分と共に、地域色に関しても下記の文献aで触れた。ところがその後、特に大川b式に関して異なる考えも提示された（下記文献bの6～8頁）。しかし報告者は旧拙稿のとおり、大川式は頸部文様帯に大きな特徴があり、愛知県萩平遺跡や岐阜県九合遺跡の例及び立野式に先行するとの立場に立つ。なお、この見解の相違は、註㊴でも少々触れるように、静岡県や関東地方との並行関係への見通しにも重要な意味を持っている。
a 山田猛「大鼻式・大川式の再検討」（『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）の16・17頁。
b 矢野健一「押型文土器の起源と変遷－いわゆるネガティブな楕円文を有する押型文土器群の再検討－」（『考古學雑誌』第78巻第4号　日本考古學會、1983年）。

⑧a 奥義次「第一編　原始社会」（『大宮町史　歴史編』大宮町、1987年）の付図6のNo.5。
b 奥義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」（『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）の121頁のNo.1。

⑨ 岡田登「麻加江栢垣外遺跡とその遺物」（『歩跡』第3号、皇学館大学考古学研究会、1976年）の第5図のNo.29。

註⑧ｂの文献の123頁のNo.１。

⑩　小濱学・田村陽一「Ⅵ.鴻ノ木遺跡（第５次）」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1994年）36頁のNo.１。

⑪　註⑧ｂの文献の109頁のNo.１～２。及び当報告書第118図（226頁）のNo.１・２。

⑫　松澤修ほか『粟津湖底遺跡』滋賀県教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会、1992年）の文中(100頁)で触れられている、表裏に絡条体圧痕もしくは縄文を表裏に施す例等を、松澤修氏のご好意によって実見させて頂いた。

⑬　佐野康雄氏や谷口和人氏のご好意によって実見させて頂いた。

⑭　註⑦ｂの文献の４～６頁。

⑮　註②に同じ。

⑯　下記の文献に示された、美里村西出遺跡の例である。

ａ　堀田隆長「30　三重県安芸郡美里村西出遺跡」〔『日本考古学年報』42（1989年度版）、日本考古学協会、1991年〕のNo.４。

ｂ　山田猛「大鼻式・大川式の再検討」（『研究紀要』第２号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）の26頁のNo.20。

⑰ａ　片山長三『神宮寺遺跡発掘報告』（交野町教育委員会・交野考古学会、1959年）。

ｂ　下村晴文・菅原章太ほか『神並遺跡Ⅱ』（東大阪市教育委員会・財団法人東大阪市文化財協会、1987年)。

⑱　註⑤に同じ。

⑲　註⑯ａの文献のNo.１～４・７。
註⑧ｂの文献の118頁。

⑳　註⑧ｂの文献の109頁のNo.５～10。及び当報告の第118図（226頁）のNo.３～６。

㉑　服部久士「Ⅱ.一志郡白山町　算所遺跡」（『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告Ⅰ』三重県教育委員会、1989年）の34頁のNo.67。

㉒　註㉑の文献の34頁のNo.54。

㉓　奥義次氏によって表面採集されている。

㉔　大鼻式は掲載されてないが、関係文献は下記のとおりである。
『釜生田遺跡』（三重県教育委員会、1988年）現地説明会資料。
註⑧ｂの文献の154～155頁。

㉕　奥義次ほか『鐘突遺跡発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1981年）のNo.16～20・57・63等。

㉖　註⑩の文献の36頁のNo.２～６。

㉗　奥義次「第一章　原始」（『飯南町史』飯南町役場、1984年）の図16のNo.1　。
註⑧ｂの文献の124 頁のNo.1　。

㉘　註⑧ａの文献の付図６の13等。
註⑧ｂの文献の121頁のNo.３・４等。

㉙　註⑨の文献の第５図のNo.26・27等。
註⑧ａの文献の付図６のNo.１・２等。
註⑧ｂの文献の123 頁のNo.２～７等。

㉚　註③ａの文献の18頁のNo.４等。
註③ｂの文献の92・95頁のNo.387・391・424・425等。

㉛　平岩欣太「上津堂前尻遺跡」（『大和を掘る－1993年度発掘調査速報展－』14、奈良県立橿原考古学研究所付属博物館、1994年）。松田真一氏や桑野一幸氏のご好意によって実見させて頂いた。

㉜　註⑫の文献の39頁のNo.１・２、40頁のNo.５～７。

㉝　註⑬に同じ。

㉞　鈴木茂夫・鈴木昭彦『大麦田遺跡概報』（足助町教育委員会、1987年）の35頁のNo.147。

㉟　鈴木昭彦「北貝戸遺跡」（『愛知県埋蔵文化財情報　８』愛知県教育委員会・財団法人愛知県埋蔵文化財センター、1993年)。

㊱　新谷和孝「お宮の森遺跡の調査と中間報告」〔『表裏縄文土器から立野式土器へ』長野県考古学会縄文時代（早期）研究部会、1994年〕の26頁のNo.19～21。

㊲　小林達雄「第４章　縄文早期前半に関する問題」（『多摩ニュータウン遺跡調査報告』Ⅱ、多摩ニュータウン遺跡調査会、1966年）。

㊳　馬飼野行雄ほか『若宮遺跡』富士宮市教育委員会ほか、1983年)。

㊴　註⑨とも関係するが、報告者は愛知県萩平遺跡や静岡県三沢西原遺跡・大平Ｃ遺跡例は、神宮寺式の新しい部分（Ｖ期）に並行すると考えている。なお、報告者は若宮遺跡例に関しては今まで触れたことはない。
宮崎朝雄・金子直行「若宮遺跡出土土器群の再検討－静岡県東部における押型文系土器群の出現と展開－」（『研究紀要』第９号財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団、1992年）の２頁。

㊵　註⑰ｂの文献に同じ。

㊶　註㊲に同じ。

㊷　篠原正『両国沖Ⅲ遺跡発掘調査報告書』（両国沖Ⅲ遺跡発掘調査会、1982年)。

㊸　以下、当節での引用は下記の文献に拠る。
原田昌幸『日本の美術　第345号　土偶』至文堂、1995年）。

㊹　林直道『史的唯物論と所有理論』（大月書店、1974年）の174～178 頁。

㊺ａ　小林達雄「長野県西筑摩郡開田村柳又遺跡の有舌尖頭器とその範型」（『信濃』第19巻４号、信濃史学会、1967年)。

ｂ　森嶋稔「柳又遺跡」〔『長野県史　考古資料編　主要遺跡（中信）』長野県史刊行会、1983年〕。

㊻　高見宜雄「Ⅰ　度会郡大宮町樋ノ谷遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年）の139頁のNo.１。

㊼　雨宮瑞生「温帯森林の初期定住－縄文時代初頭の南九州を取り上げて－」〔『古文化談叢』第30集（下）、九州古文化研究会、1993年〕の989頁。

㊽　『東野Ｂ遺跡』（三重県教育委員会、1987年）現地説明会資料。

㊾　「連穴土坑」や「煙道付き炉穴」等とよばれるものであるが、当報告では下記文献に従って「煙道付炉穴」と表記する。
原田昌幸「遊動と定住－縄文時代の初期定住－」（『季刊　考古学』第44号、雄山閣、1993年)。

㊿　河瀬信幸ほか「Ⅱ　鴻ノ木遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年)。

(51)　及び註⑩の文献。註⑩・㊿の文献に同じ。

(52)　鈴木茂夫ほか『馬場遺跡概報』（足助町教育委員会、1981年)。

(53)　この段落における引用は、すべて下記の文献に拠る。なお、引用文中の註(54)は引用者のものであり、次の註(54)に記した。
新東晃一「縄文集落の変遷＝九州」（『季刊　考古学』第44号、雄山閣、1993年)。

(54)　佐藤明生『「炉穴」研究ノート』（『貝塚』33、物質文化研究会、1984年)。

(55)　肉を燻製するための土坑、とする考えもある。
瀬戸口望「連穴土壙のもつ機能的性格について」（『鹿児島考古』第21号、鹿児島県考古学会、1987年)。

(56)　遊動から本格的な定住に至る類型に関しては、下記の研究もある。しかし、大鼻遺跡の調査結果からは、通年の居住か否かの確証は得られなかった。そこで、「固定的定住」とか「移動型定住」、あるいは「半定住」等といった用語は避け、単に「定住性の高まり」とのみ表現しておく。
渡辺仁『縄文式階層化社会』（六興出版、1990年）16～20頁。

(57)　同様な指摘は、すでに下記の文献においてされている。
宮本長二郎「５住居」（『岩波講座　日本考古学　４集落と祭祀』岩波書店、1986年)。

(58)　報告者は、かって７世紀前後の竪穴住居の重複現象を所有関係において考察したことがある。しかし現象面では類似しているが、その意味するものは全く異なると考えられる。
山田猛「７世紀初頭における集落構成の変質」（『考古学研究』第28巻第３号、考古学研究会、1981年）。

(59)　神並遺跡（註⑰ｂの文献）においては石器類が多数出土したが、ここでも磨製石斧は認められていない。

(60)　註⑫の文献に同じ。

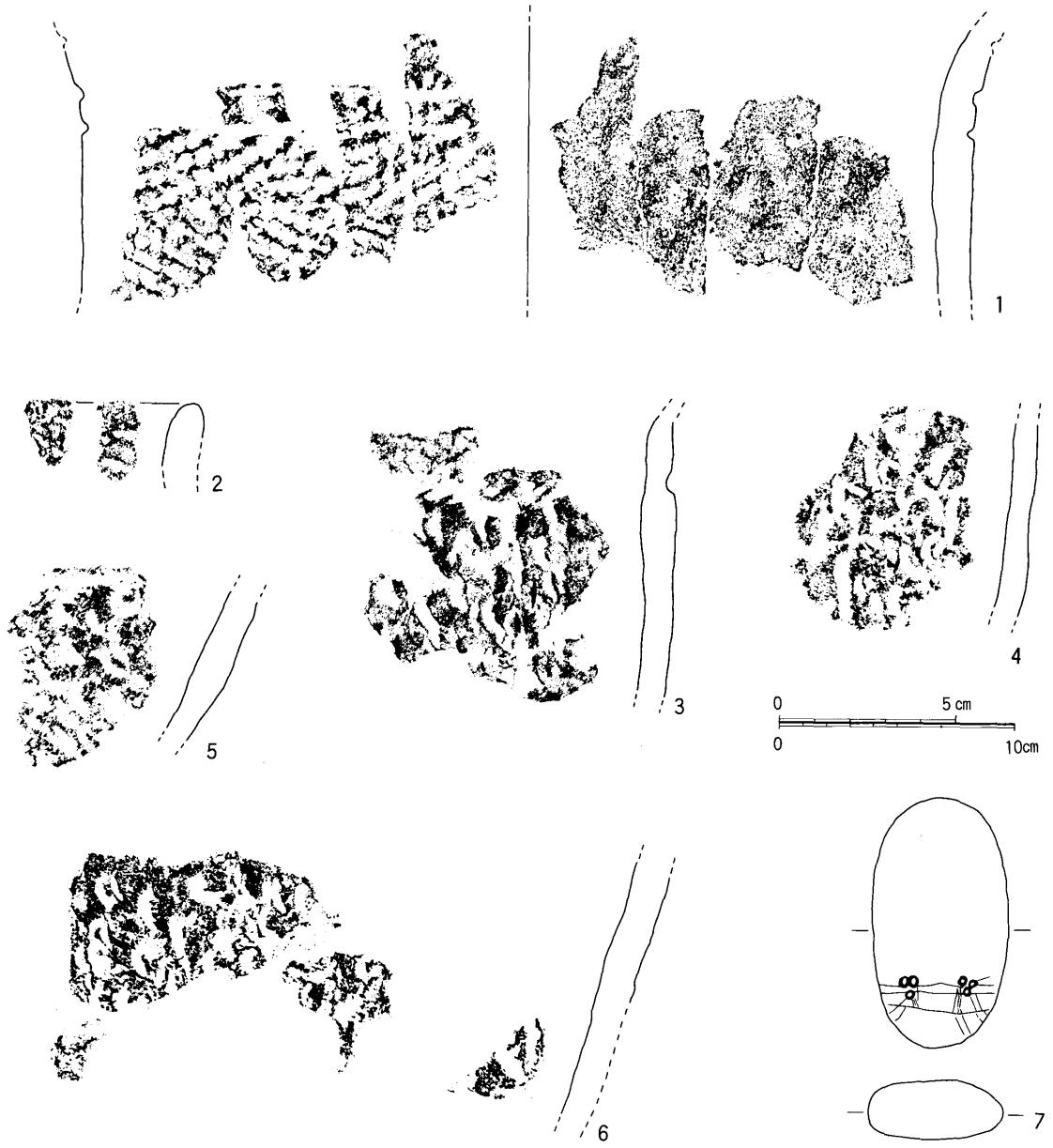
(61)　森川昌和・橋本澄夫『日本の古代遺跡を掘る１　鳥浜貝塚－縄文のタイムカプセル』（読売新聞社、1994年)。

(62)　瀬戸口望「東黒土田遺跡発掘調査報告」（『鹿児島考古』第15号、鹿児島県考古学会、1981年)。

(63)　佐原真『考古学千夜一夜』（小学館、1993年）の47頁。

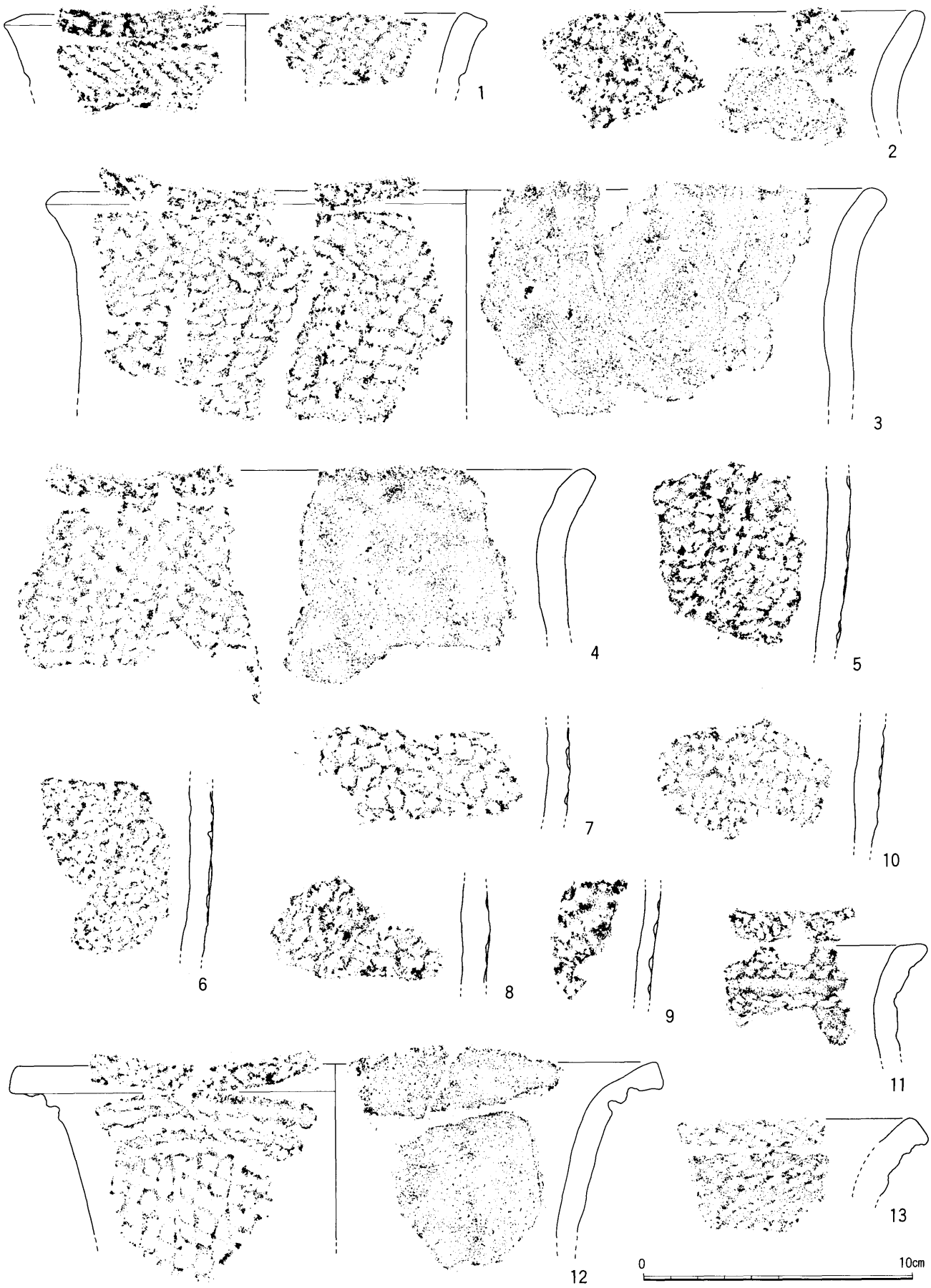
(64)　Richard B. Lee, “What Hunters Do for a Livng, or. How to Make out on Scare Resources, in Man the Hunter, ed. Richard b. Lee and Irven Devore, （Chicago : Aldine, 1973）, p30”

⑮ 西田正規『定住革命』（新曜社、1986年）の42～43頁。
⑯a 福井県教育委員会『鳥浜貝塚』（1979年）。
b 福井県教育委員会『鳥浜貝塚』（1981年）。
c 福井県教育委員会・福井県立若狭歴史民俗資料館『鳥浜貝塚』（1985年）。
⑰a 田中二郎『ブッシュマン』（思索社、1971年）の138頁。
b 渡辺仁『ヒトはなぜ立ちあがったか』（東京大学出版会、1985年）の81～87・126～151・212～216頁。
なお一般に、女性も小動物は捕獲し、男性も植物の採集を副次的には行っていたと考えられている。
⑱ 鈴木忠司「素描・日本先土器文化の食料と生業」[『朱雀－京都文化博物館（仮称）研究紀要 第1集』財団法人京都文化財団、1988年]。
⑲ 註⑰aの文献の105頁、及び註⑰bに同じ。
⑳ 西田正規「縄文時代の食料資源と生業活動－鳥浜貝塚の自然遺物を中心として－」（『季刊人類学』第11巻第3号、1980年）の38頁。
㉑ 註⑰aの文献の80頁。
㉒ 藤本強『考古学を考える』（雄山閣出版、1985年）127～140頁。
㉓a 小林達雄「縄文時代領域論」（『坂本太郎博士頌寿記念日本史学論集 上』国学院大学文学部史学科編、1984年）。
b 小林達雄「2 原始集落」（『岩波講座 日本考古学4集落と祭祀』岩波書店、1986年）この文献の註(96)(73頁）において、「最下位の集団領域を構成するのが」「単位集団であり」、この領域を「生活領域」と呼んでいる。
㉔ 赤澤威『採集狩猟民の考古学』（海鳴社、1983年）の12頁。
㉕ 註㉒の文献の77頁。
㉖ サン族（＝ブッシュマン）の調査でも、実質的に3段階の領域が認められている（註⑰aの文献の84～88頁）。
㉗ 杉山幸丸『サルはなぜ群れるのか』中央公論社、1990年）29～30頁。
㉘ 奥義次「三重県における押型文土器出土遺跡の分布動向」（『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）。
㉙ 註④bの77頁でも、同様な指摘がされている。
㉚ 「セトルメント・システム」の、A・Bパターンの両方に該当する部分としない部分がある（下記文献）。早期初頭頃には、AパターンがBパターンのように短期間に存在した例が一般的であったと推定される。ただし、三重県内でも井ノ廣遺跡（註⑧bの文献）や美里村西出遺跡（註⑯の文献）のように、短期間に住居が多数営まれた例もある。このように、定住化の初期におけるセトルメントは、その後とは自ずから異なるパターンも持っていたと考えられる。
小林達雄「多摩ニュータウンの先住者－主として縄文時代のセトルメント・システムについて－」『月刊 文化財』112号、第一法規出版株式会社、1973年）。
㉛ 集落論や領域論の前提として、単一土器型式の実年代幅が問題となる。しかし、小稿ではこの問題は明らかにし得ず、保留しておく。
㉜ 註⑰aの文献の85頁。
㉝ 「定住革命」に係わる内水面漁労の重要性が指摘されている（註⑮の文献）が、大鼻遺跡では漁労具は認められなかったため、定住性の高まりに関する内水面漁労の問題には触れ得なかった。

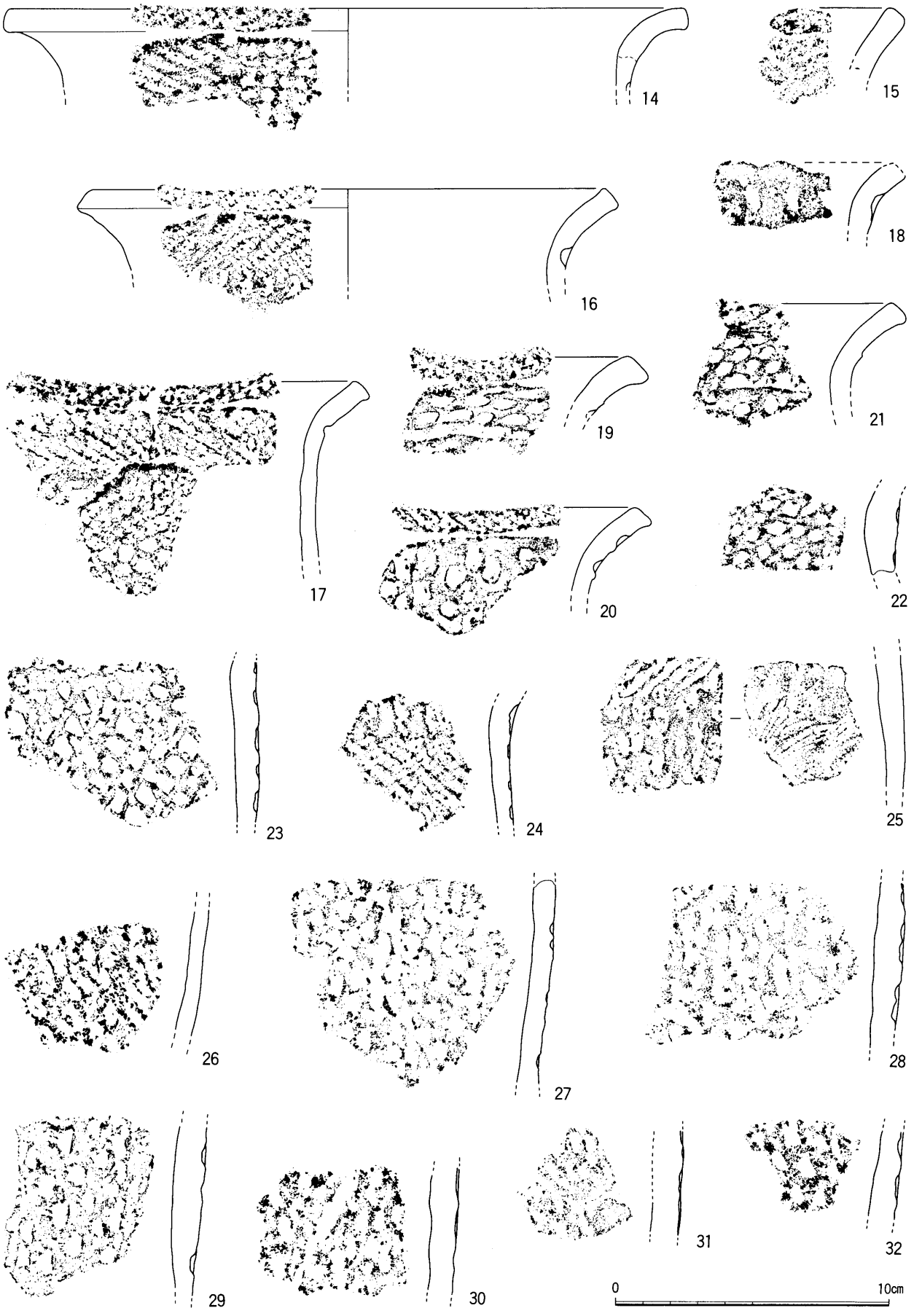


第118図　参考遺物実測図（1～6は広垣内遺跡出土土器1：2、7は東野B遺跡出土線刻礫1：3）

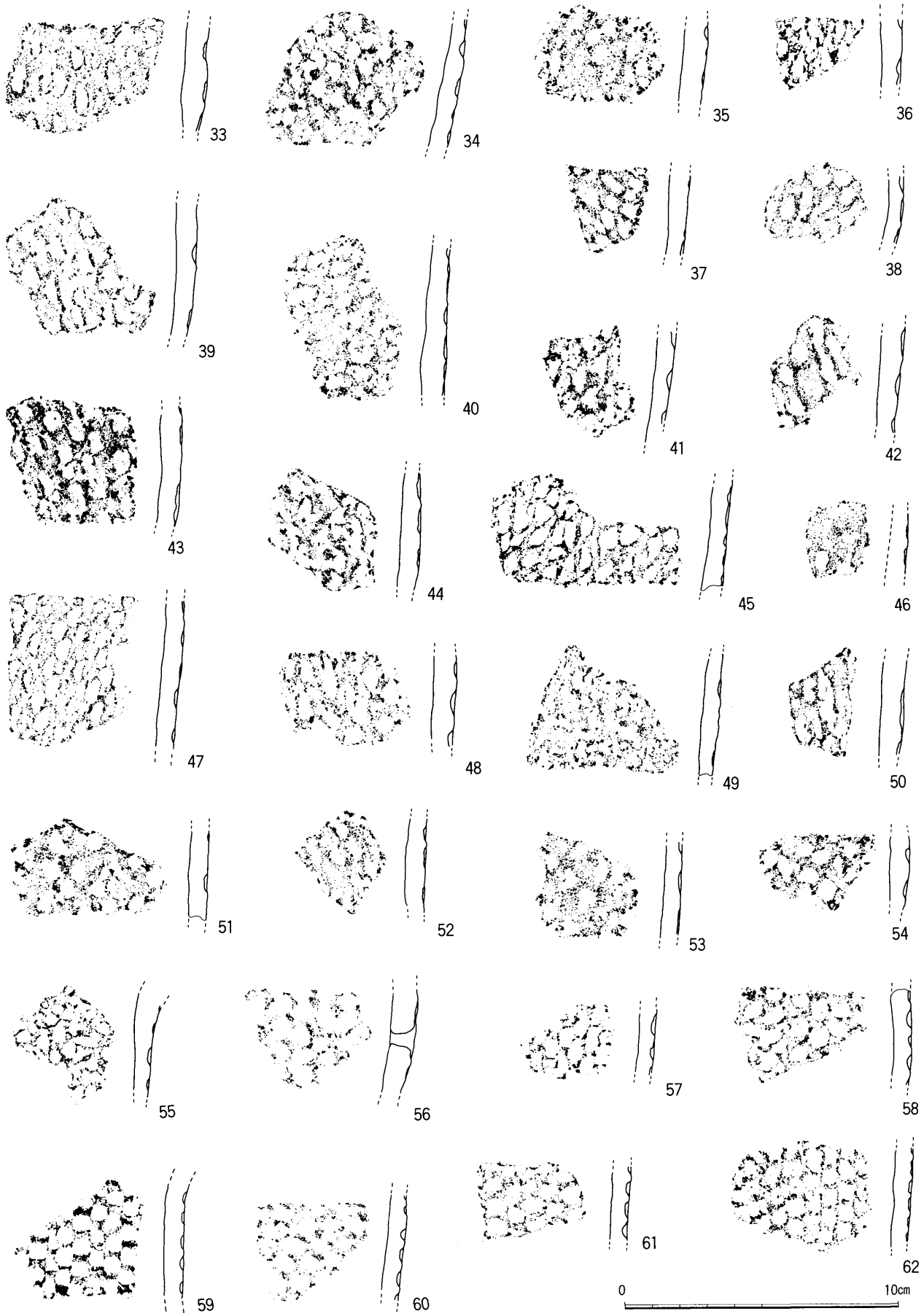
第119図　坂倉遺跡Ａ地区平面図（1：250）　網目は大鼻式期頃の遺構



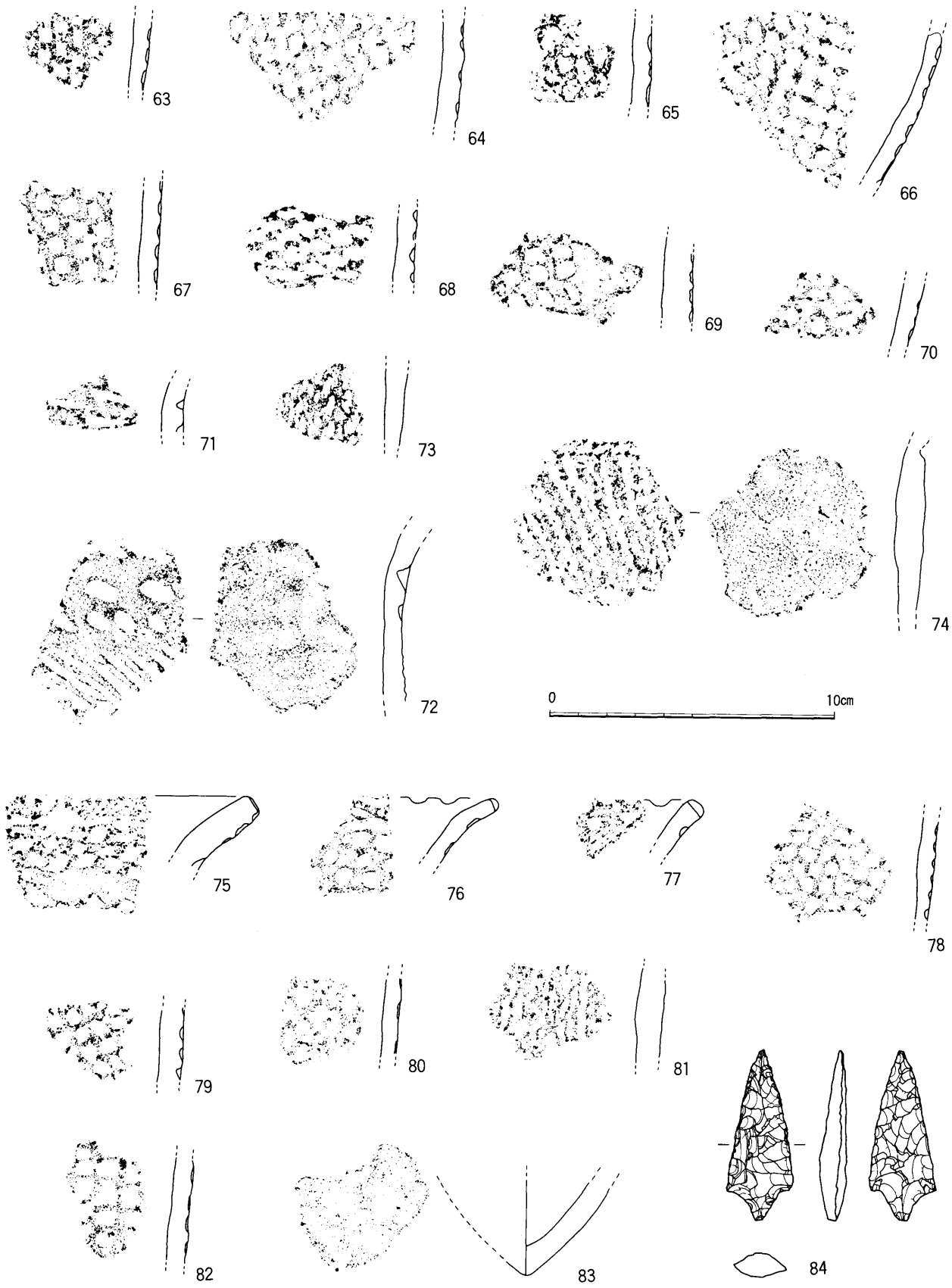
第120図　坂倉遺跡出土遺物(1) 北地点（1：2）



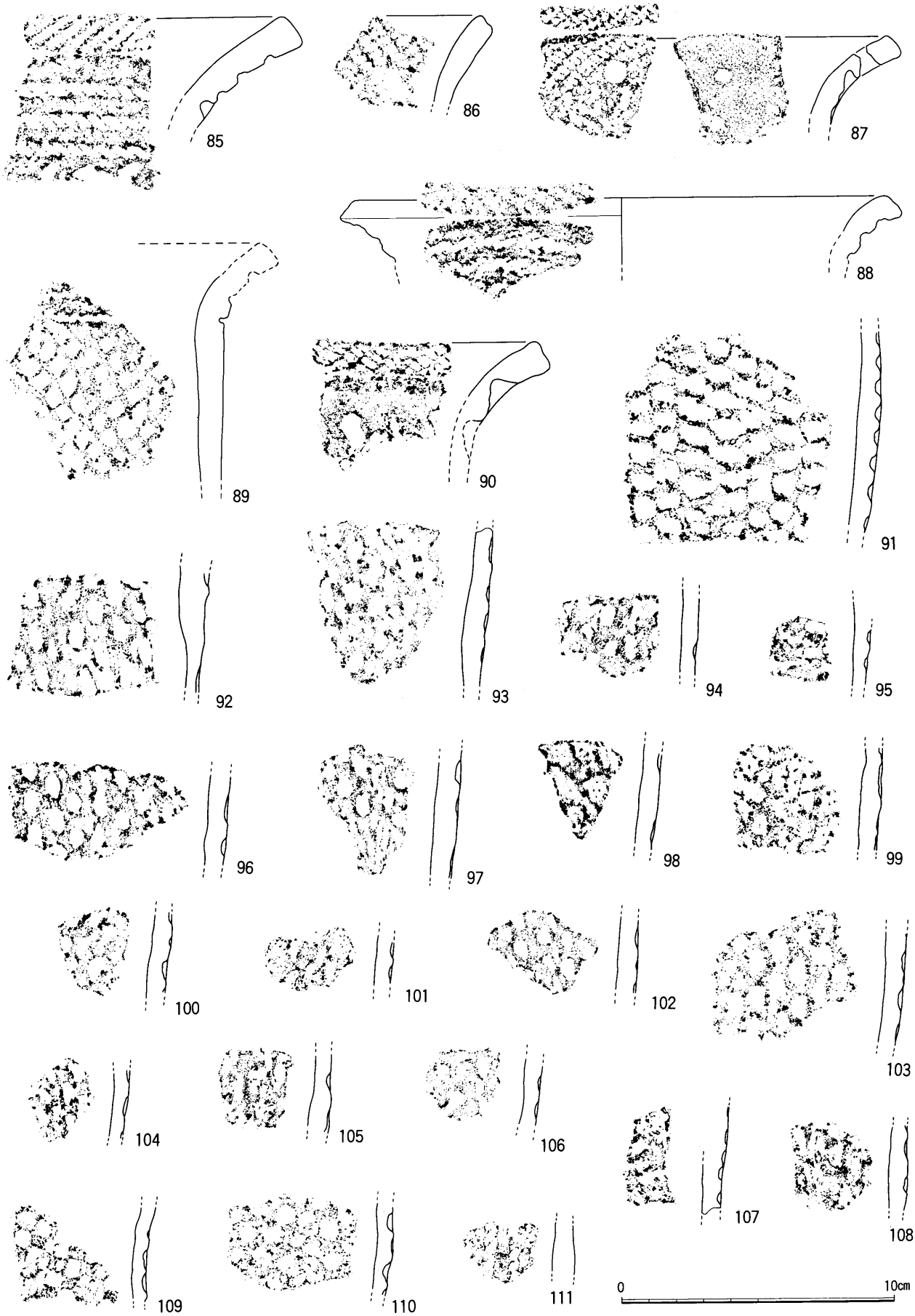
第121図　坂倉遺跡出土遺物(2) 北地点（1：2）



第122図　坂倉遺跡出土遺物(3) 北地点（1：2）



第123図　坂倉遺跡出土遺物(4)　上段は北地点、下段は南地点（1：2ただし石器は2：3）



第124図　坂倉遺跡出土遺物(5) 南地点（1：2）

報告No.	出土地区	出土遺構	製作・調整技法等の特徴	色調	備考
1	北地点21－I	土坑	角頭形の口縁部片。内面と口唇部に太い斜縄文（単節Lで横施文か）。外面には単節Rの斜縄文と1条の側面圧痕。共に軟らかい繊維を強く撚る原体	暗灰褐色	表裏縄文土器、口径は16.2cm
2	北地点22－H	暗褐色土	外反する丸棒状の口縁部片。外面に単節Rの斜縄文。内面3cm程に単節Lの斜縄文を横位施文し、以下は無文。原体は共に軟らかく太い繊維を強く撚る	茶褐色	表裏縄文土器
3	北地点23－J	土坑	緩く外反する丸味のある角頭形の口縁部片。口唇部に斜縄文。外面は原体を変えた斜縄文。口縁部は横位・体部は縦位施文。縄文原体は、太い繊維を強く撚る複節。内面は指圧。口縁部内面にはヨコナデ	灰黒色	表裏縄文土器類、口径は30cm程、No.4～8と同一個体か
4	北地点23－J	土坑	緩く外反する丸味のある角頭形の口縁部片。口唇部に斜縄文。外面は原体を変えた斜縄文。口縁部は横位・体部は縦位施文。縄文原体は、太い繊維を強く撚る複節。内面は指圧。口縁部内面にはヨコナデ	灰黒色	No.3・5～8と同一個体か
5	北地点23－J	土坑	体部片。複節Rの斜縄文を縦位施文、原体は太い繊維を強く撚る。内面には指圧	灰黒色	No.3・4・6～8と同一個体か
6	北地点23－J	土坑	体部片。複節Rの斜縄文を縦位施文、原体は太い繊維を強く撚る。内面には指圧	灰黒色	No.3～5・7～8と同一個体か
7	北地点23－J	土坑	体部片。複節Rの斜縄文を縦位施文、原体は太い繊維を強く撚る。内面には指圧	灰黒色	No.3～6・8と同一個体か
8	北地点23－J	土坑	体部片。複節Rの斜縄文を縦位施文、原体は太い繊維を強く撚る。内面には指圧	灰黒色	No.3～7と同一個体か
9	北地点23－J	土坑	体部片。単節Lの斜縄文を縦位施文か、原体は太い繊維を強く撚る。内面には指圧	灰黒色	表裏縄文土器類
10	北地点24－H	土坑	体部片。外面に太い繊維を強く撚る複節斜縄文。内面は指圧	灰黒色	表裏縄文土器類
11	北地点23－H	暗褐色土	屈折する口縁部片。口唇部外側を拡張。外面は3条の縄の側面圧痕を残す。口唇部は複節Rの斜縄文。内面はヨコナデ	灰褐色	大鼻式
12	北地点21－I	土坑	屈折する口体部片。口縁部は2条の縄の側面圧痕。体部は斜格子文（原体は長さ24㎜、径7.5㎜）を上から縦位施文。口唇部は単節Lの斜縄文。内面は指圧痕。口縁部内面はヨコナデ	黄褐色	大鼻式、深くない鉢か、格子文は乱れた市松文にも類似、口径23.8cm
13	北地点24－J	褐色土	口縁部片。外面は4条の縄の側面圧痕を残す。口唇部は斜縄文。縄文原体は単節R	暗黄褐色	大鼻式
14	北地点20－H	土坑	屈折する口縁部片。外面は正格子文と単節Lの斜縄文を縦位施文か。口唇部は単節Lの斜縄文を横位施文。施文後に外反させたため、文様が潰れている	黄褐色	大鼻式。密接帯状施文例、口径約24.5cm
15	北地点24－I	溝	口縁部片。外面と口唇部に斜縄文（細い複節Lか）を横位施文	暗黄橙色	大鼻式、やや粘性のない胎土
16	北地点22－H	茶褐色土	口縁部片。外面と口唇部に単節Lの斜縄文。軟らかい原体を強く撚り、横位施文。頸部には縄の先端刺突。内面はヨコナデ	暗茶褐色	大鼻式、口径は18.6cm程か
17	北地点21－I	―――	口縁部から体部片。口縁部外面に複節Rの斜縄文を横位施文。軟らかく強く撚った原体。口唇部と体上部には複節Lの斜縄文（原体は太くて強い撚り）を横位施文。更に、屈折する頸部に縄の側面圧痕を1条。体部は市松文を縦位施文。体部内面は指圧痕。口縁部内面はヨコナデ	茶褐色	大鼻式、密接帯状施文例、口径は26.5cm程か
18	北地点25－J	土坑	口唇部を欠き、強く屈折する口縁部片。外面に縄の先端刺突文	暗橙色	大鼻式
19	北地点23－I	褐色土	口縁部片。外側に拡張気味の口唇部に単節Rの斜縄文（原体は軟らか）。外面は横位に枝回転文（原体は長さ19㎜以上、径7㎜か）。頸部は原体不明の刺突文。内面はヨコナデ	暗灰褐色	大鼻式
20	北地点23－I	褐色土	強く屈曲する口縁部片。口唇部に単節Rの斜縄文（原体は軟らか）。外面には枝回転文を縦位施文か。内面には指圧痕とヨコナデ	暗灰褐色	大鼻式、密接帯状施文例か

第61表　坂倉遺跡出土遺物観察表（1）〔出土地区・遺構については、土器の注記に拠った〕

報告No.	出土地区	出土遺構	製作・調整技法等の特徴	色調	備考
21	北地点21－I	土坑	強く屈曲する口縁部片。口唇部には単節Lらしい斜縄文。軟らかい原体を強く撚る。外面は丸味のある市松文(原体は長さ18㎜以上、径5.5㎜）を横位施文。体部にも丸味のある市松文。内面のヨコナデは弱い、これらの押型文は枝回転文の可能性も大	暗灰褐色	大鼻式
22	北地点23－H	暗褐色土	口頸部付近の破片。或いは口唇部を残す口縁部片か。外面は枝回転文を横位施文。下端は擬口縁	灰褐色	大鼻式、原体径は7.3㎜
23	北地点25－H	褐色土	体上部片。上端に縄の側面圧痕で緩い鋸歯文か。体部には、原体斜め刻みの格子文を縦位施文。内面には指圧痕	灰黒色	大鼻式、或いは密接帯状施文例か
24	北地点24－H	黒褐色土	頸体部片。頸部に縄の先端刺突列1条を残す。体上部は、軟らかい原体を強く撚った単節Rの斜縄文を横位施文。以下には市松文か。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式、密接帯状施文例
25	北地点22－H	茶褐色土	体部片。上部に無節Lの斜縄文を横位施文。以下には枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕とヘラミガキ状の調整痕	黒茶色	大鼻式、密接帯状施文例
26	北地点24－Y	褐色土	体下部片。左2/3程は枝回転文を縦位施文。右1/3程は軟らかい原体を強く撚った単節斜縄文（縦位か）	黄褐色	大鼻式、密接帯状施文例
27	北地点23－J	褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。上端は擬口縁	灰黄褐色	大鼻式
28	北地点23－J	褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	灰黄褐色	大鼻式
29	北地点25－H	黒褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面はヘラミガキ状の調整痕	灰褐色	大鼻式
30	北地点23－H	暗褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	灰黄褐色	大鼻式
31	北地点21－I	土坑	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面はヘラミガキ状の調整痕	褐灰色	大鼻式
32	北地点23－J	褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗橙色	大鼻式
33	北地点23－J	土坑	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面は強い指圧痕	暗黄褐色	大鼻式
34	北地点23－J	土坑	体下部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	黄灰色	大鼻式
35	北地点23－J	土坑	体下部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
36	北地点23－J	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
37	北地点23－J	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文	暗黄橙色	大鼻式
38	北地点24－J	褐色土	体下部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗赤褐色	大鼻式
39	北地点25－H	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗橙色	大鼻式
40	北地点24－J	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
41	北地点23－J	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
42	北地点23－H	暗褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	褐灰色	大鼻式
43	北地点23－H	暗褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗橙色	大鼻式
44	北地点23－J	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	灰褐色	大鼻式
45	北地点25－J	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕。下端は擬口縁	灰褐色	大鼻式
46	北地点25－H	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文	暗橙色	大鼻式
47	北地点26－H	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	黒褐色	大鼻式
48	北地点25－H	黒褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗橙色	大鼻式
49	北地点25－J	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕。下端は擬口縁	黄灰色	大鼻式
50	北地点24－J	褐色土	厚手の体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	黄灰色	大鼻式
51	北地点21－I	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕。下端は擬口縁	灰褐色	大鼻式

第62表　坂倉遺跡出土遺物観察表（2）〔出土地区・遺構については、土器の注記に拠った〕

報告No.	出土地区	出土遺構	製作・調整技法等の特徴	色調	備考
52	北地点24－H	暗褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文	暗黄褐色	大鼻式
53	北地点21－I	黒褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面に指圧痕と炭化物	暗黄橙色	大鼻式
54	北地点23－J	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文	暗黄橙色	大鼻式
55	北地点25－J	褐色土	頸部から薄手の体部片。丸味のある市松文を頸部に横位、体部に縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
56	北地点23－J	土坑	厚手の体部片。市松文を縦位施文。焼成後に1穿孔	暗黄橙色	大鼻式
57	北地点23－H	褐色土	体部片。市松文を縦位施文	暗褐灰色	大鼻式
58	北地点24－J	褐色土	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕。上端は擬口縁	褐灰色	大鼻式
59	北地点22－H	暗茶褐色土	厚手の体部片。市松文（原体は長さ18㎜、径5㎜）を縦位施文内面は指圧痕。	暗茶褐色	大鼻式
60	北地点24－J	褐色土	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	灰白色	大鼻式
61	北地点24－J	褐色土	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	黄灰色	大鼻式
62	北地点25－J	土坑	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	暗褐色	大鼻式
63	北地点23－J	土坑	体部片。市松文を縦位施文	暗褐色	大鼻式
64	北地点24－I	褐色土	体部片。市松文（原体長は32㎜以上か）を縦位施文	淡黄褐色	大鼻式
65	北地点23－J	土坑	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
66	北地点23－H	暗褐色土	体部片。丸味のある市松文を縦位施文。内面には指圧痕。上端は擬口縁	暗黄橙色	大鼻式
67	北地点23－J	土坑	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	灰褐色	大鼻式
68	北地点25－J	土坑	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	暗褐色	大鼻式
69	北地点25－J	土坑	厚手の体部片。格子文と無文部あり。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
70	北地点24－J	褐色土	体下部片。格子文を縦位施文	灰褐色	大鼻式
71	北地点24－J	褐色土	頸部片。細い棒状具で右からの刺突列を2段残す	暗褐色	大川a式
72	北地点23－H	暗褐色土	頸体部片。頸部に径約5㎜の円棒状具による右下からの刺突列3段を残す。体上部には斜行沈線文（押型文か）。内面は指圧痕。刺突文の内側は膨らむ	暗黄褐色	大川a式、密接帯状施文例
73	北地点21－H	暗褐色土	体部片。複節らしい、太く疎らな撚糸文を深く縦位施文。内面は指圧痕	暗黄褐色	撚糸文土器
74	北地点23－H	暗褐色土	頸体部片。単節の太く疎らな撚糸文を深く縦位施文。上端に側面圧痕を横位に1条残す。内面は指圧痕	暗灰褐色	撚糸文土器
75	南地点10－M	褐色土	口頸部片。口唇部は細い斜縄文或いはヘラキザミを浅く施す。口縁部は市松文を横位施文。頸部は円棒状具による右下からの刺突列を1段残す	橙褐色	大川a式
76	南地点10－Q	褐色土	薄手の口縁部片。口唇部は円棒状具の斜位押圧。口縁部は丸味のある市松文を横位施文	赤褐色	大川a式
77	南地点9－O	炉址	薄手の口縁部片。口唇部は円棒状具の斜位押圧。口縁部は円棒状具による右からの刺突文	暗褐色	大川a式
78	南地点8－N	褐色土	体部片。市松文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
79	南地点11－N	褐色土	体部片。格子文を縦位施文	暗橙色	大鼻式
80	南地点11－Q	褐色土	体部片。丸味のある市松文を縦位施文	暗黄橙色	大鼻式
81	南地点11－Q	土坑	体部片。体部に単節の撚糸文を縦位施文。内面は指圧痕	灰褐色	撚糸文土器
82	南地点13－R	土坑	体部片。格子文を縦位施文。内面は指圧痕	淡黄灰色	大鼻式
83	南地点11－O	褐色土	底部片。無文。内外にナデ	暗黄橙色	大鼻式

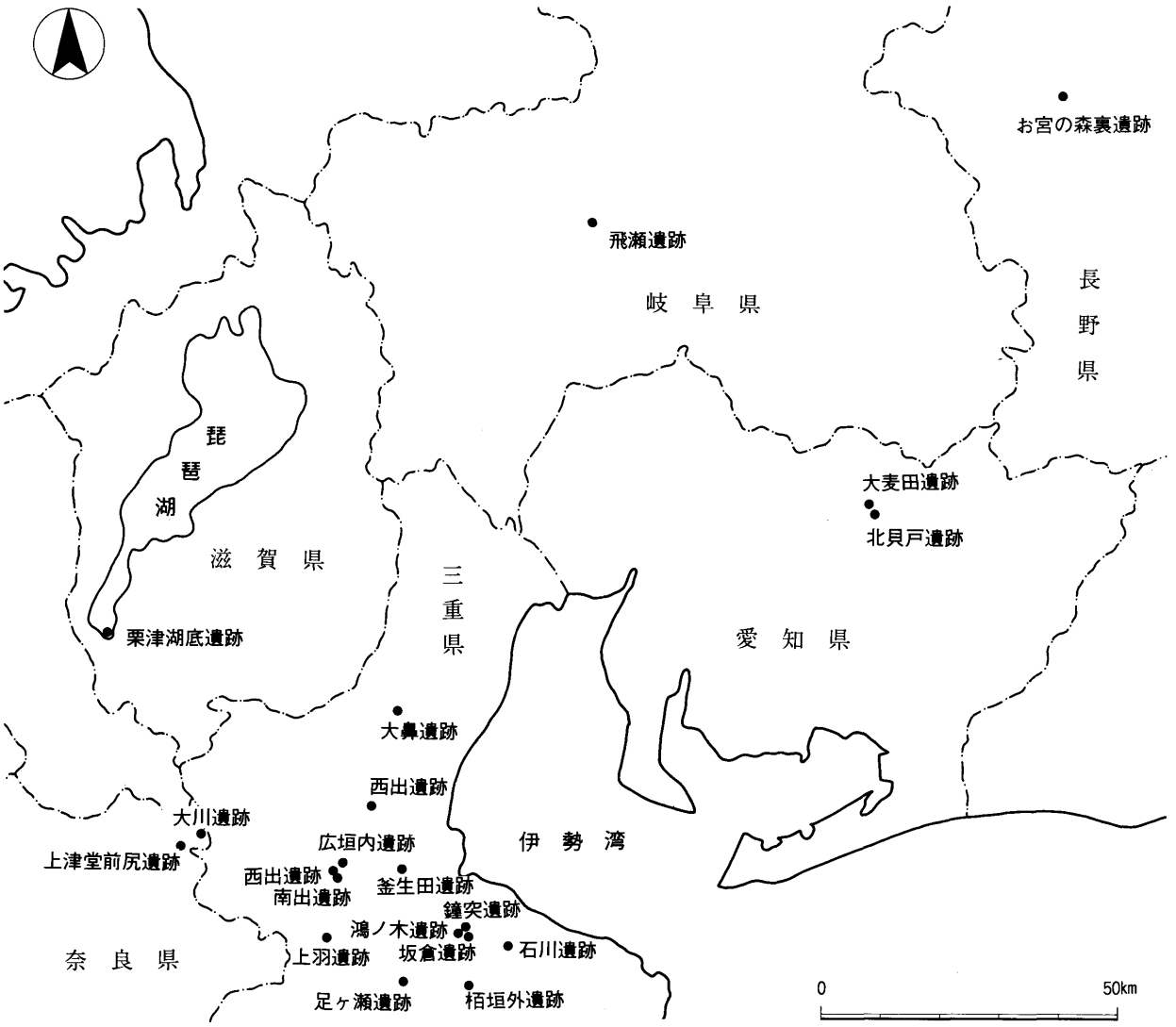
第63表　坂倉遺跡出土遺物観察表（3）〔出土地区・遺構については、土器の注記に拠った〕

報告No.	出土地区	出土遺構	製作・調整技法等の特徴	色調	備考
84	南地点	7号炉	チャート製有茎尖頭器。現存長45㎜	青黒色	大鼻式期、先端を僅かに欠損
85	南地点11－Q	土坑	口頸縁部片。口唇部は斜縄文。口縁部外面に軟らかい原体を強く撚った単節Lの縄の側面圧痕を3条。頸部に縄の先端刺突を1段残す。内面はヨコナデ	暗黄橙色	大鼻式、大型深鉢
86	南地点10－N	褐色土	口縁部片。口唇部は斜縄文か。外面は単節Rの斜縄文を横位施文。軟らかい原体を強く撚った原体。内面はヘラミガキ状の調整	灰褐色	大鼻式
87	南地点8－R	土坑	口縁部片。口唇部と口縁部外面に単節Lの斜縄文。同一原体らしく、強く撚る。頸部は縄の先端刺突文。以下にも縄文（不詳）。内面はヨコナデ。焼成後に1孔穿孔	灰褐色	大鼻式
88	南地点9－O	土坑	口縁部片。口唇部は複節Rの斜縄文を横位施文。外面は縄の側面圧痕を3条残す。同一原体らしく、強く撚る。内面はヨコナデ	淡黄土色	大鼻式、口径約19.3㎝
89	南地点11－N	褐色土	屈折する口縁体部片。口縁部は単節Lの縄の側面圧痕を2条残す。体部は斜格子文を縦位施文	黄褐色	大鼻式
90	南地点10－L	土坑	口縁部片。口唇部は単節Lの斜縄文を横位施文。原体は強く撚る。外面は縄の先端刺突を2段残す。内面は強いヨコナデ	暗黄灰色	大鼻式
91	南地点8－R	土坑	体部片。市松文に近似する枝回転文（原体長27㎜、径9㎜）	黄土色	大鼻式
92	南地点12－Q	褐色土	体上部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
93	南地点11－Q	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕。上端は擬口縁	暗橙色	大鼻式
94	南地点10－R	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文	暗褐色	大鼻式
95	南地点9－N	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
96	南地点12－Q	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
97	南地点11－Q	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文	暗黄橙色	大鼻式
98	南地点12－Q	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗橙色	大鼻式
99	南地点13－R	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
100	南地点11－Q	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
101	南地点11－P	炉跡1	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	灰褐色	大鼻式
102	南地点11－Q	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
103	南地点11－N	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文。内面に指圧痕	橙褐色	大鼻式
104	南地点12－P	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕	暗黄橙色	大鼻式
105	南地点13－R	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文	暗黄褐色	大鼻式
106	南地点9－Q	炉跡12	体部片。枝回転文を縦位施文。内面に炭化物	暗橙色	大鼻式
107	南地点11－Q	土坑	体部片。枝回転文を縦位施文。内面は指圧痕。下端は擬口縁	暗黄橙色	大鼻式
108	南地点10－P	褐色土	体部片。枝回転文を縦位施文	橙褐色	大鼻式
109	南地点10－Q	Pit 1	体部片。市松文を縦位施文	暗黄橙色	大鼻式
110	南地点11－Q	土坑	体部片。市松文を縦位施文	橙黄色	大鼻式
111	南地点10－R	褐色土	体部片。単節の太くて疎らな撚糸文を深く縦位施文	暗橙色	撚糸文土器

第64表　坂倉遺跡出土遺物観察表（4）〔出土地区・遺構については、土器の注記に拠った〕

	大鼻遺跡	坂倉遺跡	合計	印象的補正値
枝回転文	70点（86%）	47点（64%）	117点（76%）	90%
市松文	9点（11%）	19点（26%）	28点（18%）	8%
格子文	2点（2%）	7点（10%）	9点（6%）	2%
合計	81点（99%）	73点（100%）	154点（100%）	100%

第65表　大鼻・坂倉遺跡の押型文様（坂倉遺跡例中には大川a式が含まれる可能性もある）
（印象的補正値とは、非掲載例も考慮した推定値）



第125図　大鼻式土器出土遺跡

No.	遺跡名	所在地	特徴	石材	所属期
1	大鼻遺跡	亀山市太岡寺町字大鼻ほか	周縁加工	サヌカイト	竪穴住居に大鼻式土器と伴出
2	坂倉遺跡	多気郡多気町東池上字坂倉	凸基有茎式、押圧剥離	チャート	大鼻式期らしい煙道付炉穴から出土
3	鴻ノ木遺跡	松阪市射和町字鴻ノ木	木葉形２、凸基有茎式２、不明１	チャート、サヌカイト	大川式期の竪穴住居や包含層から出土
4	井ノ廣遺跡	一志郡嬉野町釜生田字井ノ廣	凸基有茎・平基無茎式	サヌカイト	神宮寺式期の竪穴住居や陥穴状土坑から出土
5	西出遺跡	安芸郡美里村三郷字西出	平基無茎式	サヌカイト	大川・神宮寺式等の土器包含層から出土
6	一色山遺跡	四日市市堂ケ山町一色山	凸基有茎式	チャート	神宮寺式土器包含層から出土
7	東野Ｂ遺跡	一志郡嬉野町森本字東野	形態不明	チャート	大川・神宮寺式土器包含層から出土
8	大原堀遺跡	松阪市広瀬町字大原堀	凸基有茎式	サヌカイト	大鼻・大川式土器等も出土、２点
9	上寺遺跡	松阪市中万町字上寺	形態不明	チャート	神宮寺式土器も出土
10	上ノ広遺跡	松阪市広瀬町字上ノ広	木葉形、凸基有茎式、形態不明	サヌカイト・チャート	神宮寺式土器等も出土
11	焼野遺跡	松阪市笹川町字焼野	凸基有茎式	チャート	高山寺式土器も出土
12	牟山遺跡	多気郡多気町相可字牟山	木葉形、凸基有茎式	サヌカイト・チャート	大川・神宮寺式土器も出土
13	上村池Ａ遺跡	多気郡明和町上村字道越	凸基有茎式	チャート	神宮寺式土器も出土
14	上ノ垣外遺跡	飯南郡飯南町横野字上ノ垣外	凸基有茎式	サヌカイト	大川式土器と共に表面採集
15	足ケ瀬遺跡	飯南郡飯南町粥見字足ケ瀬	木葉形・凸基無茎式	サヌカイト	大川式土器等と共に表面採集
16	桧広遺跡	飯南郡勢和村丹生字桧広	凸基有茎式	チャート	神宮寺式（？）土器も出土
17	池ノ谷遺跡	飯南郡勢和村丹生字池ノ谷	凸基有茎式	チャート	神宮寺式土器も出土
18	大間広遺跡	飯南郡勢和村古江字東山	木葉形・凸基有茎式	サヌカイト・チャート	神宮寺式土器も出土、数点
19	石川遺跡	度会郡小俣町新村字石川	木葉形・凸基有茎式	サヌカイト・チャート	大鼻・大川式土器と共に表面採集、数10点
20	栢垣外遺跡	度会郡度会町麻加江字栢垣外	片面加工、未製品か	チャート	大鼻・大川式土器と共に表面採集
21	八王子遺跡	名賀郡青山町種生字番田	凸基有茎式・形態不明	サヌカイト	大川式土器と共に表面採集

第66表　尖頭器出土遺跡一覧表（三重県下で押型文土器も出土した遺跡に限る、このほかにも遺跡周辺で出土した例もある）

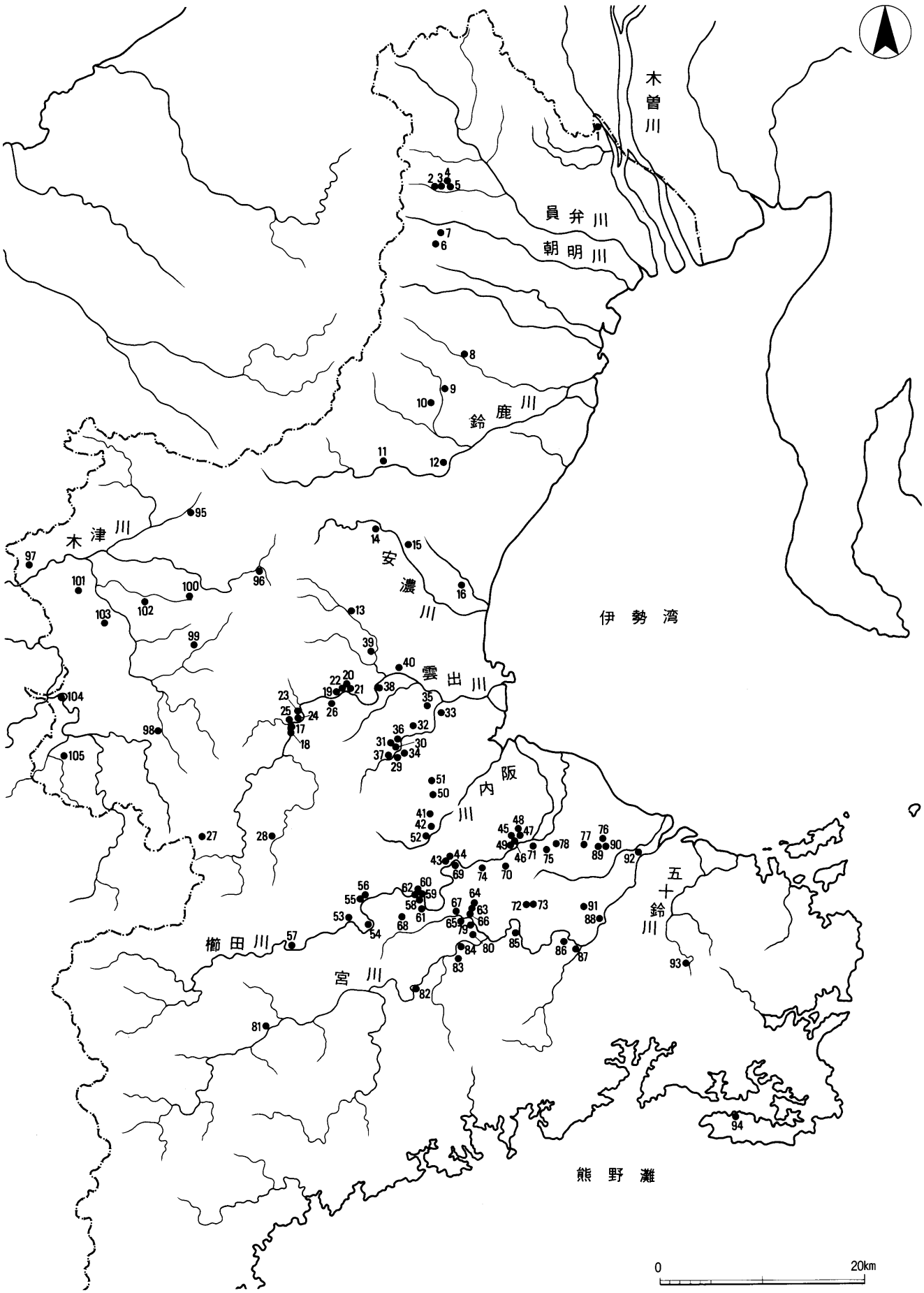
No.	文献
1	a　梅澤裕・山田猛『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』（三重県教育委員会、1987年）の第8図のNo.32 b　当報告書の34頁のNo.108
2	a　梅澤裕・山田猛『一般国道1号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅲ　大鼻（二～三次）・山城（三次）遺跡』（三重県教育委員会、1987年）の第26図のNo.164 b　奥義次「第二編　原始」（『多気町史　通史』多気町、1992年）の94頁のNo.1 c　当報告書の231頁のNo.84
3	a　河瀬信行ほか「Ⅱ　鴻ノ木遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅰ』三重県埋蔵文化財センター、1991年）の25頁のNo.17・22 b　小濵学・田村陽一「Ⅵ.鴻ノ木遺跡（第5次）」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1994年） c　『国道42号バイパス松阪・多気　発掘調査だより』（三重県埋蔵文化財センター、1994年）の最終頁の写真
4	奥義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」（『研究紀要』第２号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）
5	堀田隆長「30 三重県安芸郡美里村西出遺跡」［『日本考古学協会年報』42（1989年度版）、日本考古学協会、1991年］
6	井上光夫「1.一色山遺跡」（『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会、1970年）の22頁のNo.1
7	a　『東野Ｂ遺跡』（三重県教育委員会、1987年）但し、現地説明会資料 b　奥義次・田村陽一・穂積裕昌「三重県下の前半期押型文土器」（『研究紀要』第２号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）
8	奥義次「2　縄文時代」（『飯高町郷土誌』飯高町、1986年）の53頁のNo.18
9	奥義次ほか『上寺遺跡発掘調査報告書』（松阪市教育委員会、1981年）の20頁のNo.4
10	田村陽一・新田剛・新田智子「1.上ノ広（森下池西方）遺跡」｛『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告―第一分冊1―』三重県教育委員会、1989年）の38頁のNo.1～8
12	奥義次「一　牟山遺跡」（『多気町史』多気町、1992年）の83頁のNo.1～7
14	奥義次「上ノ垣外遺跡」（『飯南町史』飯南町役場、1984年）の80頁のNo.20
15	奥義次「足ケ瀬遺跡」（『飯南町史』飯南町役場、1984年）の62頁のNo.37・38
19	奥義次「原始社会」（『大宮町史　歴史編』大宮町、1987年）の130頁の表に掲載
20	岡田登「麻加江栢垣外遺跡とその遺物」（『歩跡』第３号、皇學館大学考古学研究会、1976年）の62頁のNo.18
21	『青山町史』（青山町役場、1979年）の16頁

第67表　尖頭器出土遺跡文献一覧表（第66表に対応、両表の作成に当たっては奥義次氏と田村陽一氏に多くの教示を得た）

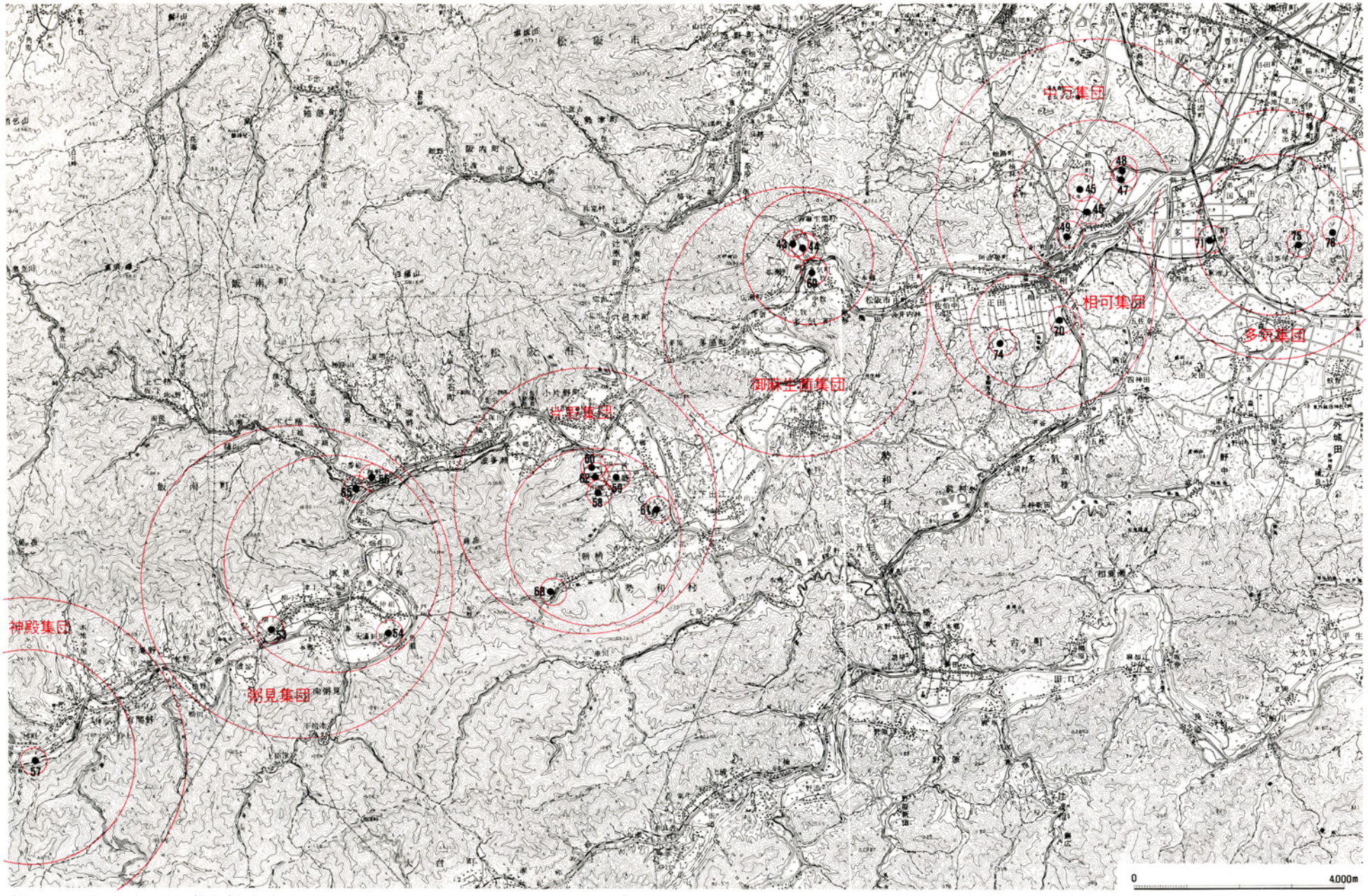
番号	遺跡名	所在地
1	一ノ谷B	桑名郡多度町柚井字一ノ谷
2	照光寺	員弁郡大安町石榑南前林
3	野々田	〃　〃　〃　字野々田
4	小原	〃　〃　石榑東字小原
5	中大野	〃　〃　〃　字中大野
6	杉谷	三重郡菰野町杉谷
7	下江平	〃　〃　田光字下江平
8	一色山	四日市市堂ケ山町一色山
9	南畑田	鈴鹿市伊船町南畑田
10	東庄内A	〃　東庄内町
11	大鼻	亀山市太岡寺町字大鼻ほか
12	山城	〃　川合町字山城
13	西出	安芸郡美里村三郷字西出
14	北奥A	〃　芸濃町多門字北奥
15	赤坂	〃　〃　岡本字赤坂
16	橋垣内（A地区）	津市大里窪田町橋垣内
17	西出	一志郡白山町南家城字西出
18	南出	〃　〃　〃　字南出
19	岩井戸	〃　〃　二本木字岩井戸
20	和遅野	〃　〃　〃　字和遅野
21	亀ケ広	〃　〃　〃　字亀ケ広
22	市河原	〃　〃　〃　字市河原
23	八幡	〃　〃　北家城字八幡
24	広垣内	〃　〃　〃　字広垣内
25	高瀬	〃　〃　〃　字高瀬
26	黒木	〃　〃　川口字黒木
27	蕨折（大洞山総合遺跡）	〃　美杉村八知字蕨折
28	上羽	〃　〃　下多気字下之世古
29	御前坊	〃　嬉野町森本字御前坊
30	井ノ廣	〃　〃　釜生田字井ノ廣
31	鹿伏	〃　〃　〃　字鹿伏
32	蛇亀橋	〃　〃　島田字焼野
33	針箱	〃　〃　中川字針箱
34	東野B	〃　〃　森本字東野
35	馬ノ瀬	〃　〃　天花寺字赤坂
36	釜生田	〃　〃　釜生田
37	下沖	〃　〃　宮野字下沖
38	（上野山狐塚古墳群）	〃　一志町高野字野田・高岡
39	上垣内	久居市　一色町上垣内
40	善応寺	〃　庄田町　通称）善応寺 〃　戸木字上野
41	横尾	松阪市岡山町字横尾
42	焼野	〃　笹川町字焼野
43	上ノ広	〃　広瀬町字上ノ広
44	大原堀	〃　〃　字大原堀
45	鐘突	〃　中万町字鐘突
46	上寺	〃　〃　字上寺
47	射原垣内	〃　〃　字八ノ坪
48	尾ダケ	〃　〃　字尾ダケ
49	鴻ノ木	〃　射和町字鴻ノ木
50	伊勢寺	〃　伊勢寺町
51	新田	〃　小阿坂町田村新田
52	椙垣外	〃　矢津町字椙垣外

番号	遺跡名	所在地
53	奥新田	飯南郡飯南町粥見字奥新田
54	足ケ瀬	飯南郡飯南町粥見字足ケ瀬
55	百合	〃　〃　下仁柿字百合
56	上ノ垣外	〃　〃　横野字上ノ垣外
57	川ノ上	〃　飯高町宮前字川ノ上
58	山ノ垣内	多気郡勢和村片野字山ノ垣内
59	南新木	〃　〃　〃　字南新木
60	立岡	〃　〃　〃　字立岡
61	ニコ谷	〃　〃　〃　字ニコ谷
62	中広	〃　〃　〃　字中広
63	池ノ谷	〃　〃　丹生字池ノ谷
64	桧広	〃　〃　〃　字桧広
65	栃木広（瓦山）	〃　〃　色太字栃木広
66	石神（南地点）	〃　〃　〃　字石神
67	大間広（東山）	〃　〃　古江字東山
68	西垣内（A）	〃　〃　上朝柄字西垣内
69	花ノ木	〃　多気町牧字花ノ木
70	牟山	〃　〃　相可字牟山
71	坂倉	〃　〃　東池上字坂倉
72	牛バサマA	〃　〃　野中字牛バサマ・定越
73	牛バサマB	〃　〃　〃　〃　・ナルコ
74	高皿	〃　〃　四疋田字高皿
75	上村池（北地点）	〃　明和町上村字道越
76	打越（須磨ケ広南東地点）	多気郡明和町新茶屋字打越
77	発シB	〃　〃　有爾中字垣場
78	丸山B	〃　〃　池村字丸山
79	後山ノ西A	〃　大台町栃原字後山ノ西
80	黒ケ谷北	〃　〃　〃　字黒ケ谷
81	中ノ切	〃　宮川村明豆字中ノ切
82	樋ノ谷	度会郡大宮町神原字樋ノ谷
83	野手北地点	〃　〃　野添字野手
84	大西	〃　〃　野原字大西
85	栢垣外	〃　度会町麻加江字栢垣外
86	西林	〃　〃　上久具字西林
87	万野	〃　〃　下久具字万野
88	上ノ垣外	〃　〃　葛原字上ノ垣外
89	百町	〃　小俣町新村字百町
90	石川	〃　〃　〃　字石川・大仏前
91	楠ノ木	〃　玉城町勝田字楠ノ木
92	大藪	伊勢市磯町字大藪
93	大床谷D	〃　今在家町字大床谷
94	柳谷	志摩郡志摩町越賀字大差地・通称柳谷
95	南出構	阿山郡伊賀町下柘植字南出構
96	平松代	〃　大山田村上阿波字平松代
97	上小山	〃　島ケ原村中村字上小山
98	八王子	名賀郡青山町種生字番田
99	勝地大坪	〃　〃　勝地字大坪
100	和田	上野市喰代字和田
101	池ノ側	〃　朝屋字池ノ側
102	奥小波田	〃　下友生字奥小波田
103	田中（不確実）	〃　猪田字田中
104	薦生	名張市薦生
105	垣添	〃　赤目町柏原字垣添

第68表　三重県の押型文土器出土遺跡地名表〔奥義次「三重県における押型文土器出土遺跡の分布動向」（『研究紀要』第2号、三重県埋蔵文化財センター、1993年）を加筆転載〕



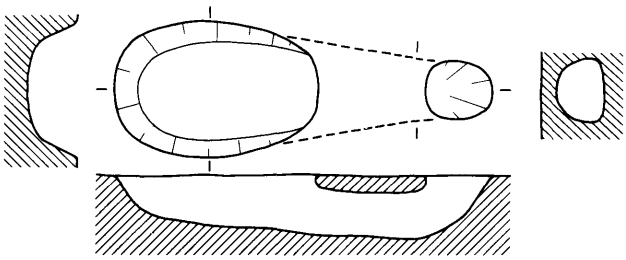
第126図　三重県下の押型文土器出土遺跡分布図（註㊽の文献から加筆転載）



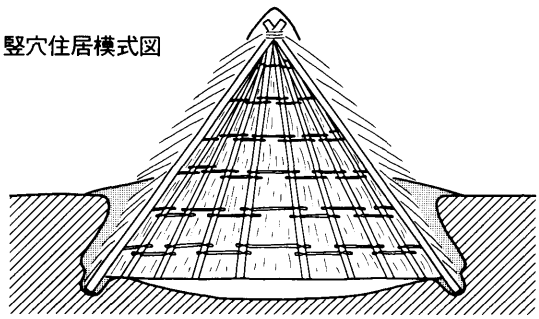
第127図　櫛田川流域の集団領域（1：100,000）国土地理院「二本木」、「松阪」、「丹生」、「伊勢」（1：50,000）から

単位集団名	No.	遺跡名	存続期（土器型式名） 大鼻	大川 a	大川 b	神宮寺		高山寺
中万	45	※鐘突遺跡						
	49	※鴻ノ木遺跡						
	48	尾ダケ遺跡						
	47	※射原垣内遺跡						
	46	※上寺遺跡						
多気	71	※坂倉遺跡						
	75	上村池（北地点）遺跡						
	78	丸山田Ｂ遺跡						
相可	70	※牟山遺跡						
	74	※高皿遺跡						
御麻生薗	44	大原堀遺跡						
	43	※上ノ広遺跡						
	69	花ノ木遺跡						
片野	59	南新木遺跡						
	61	ニコ谷遺跡						
	58	中広遺跡						
	62	山ノ垣内遺跡						？
	60	立岡遺跡						？
	68	西垣外遺跡						
粥見	54	足ケ瀬遺跡						
	56	上ノ垣外遺跡						
	53	奥新田遺跡			？			
	55	百合遺跡						
神殿	57	川ノ上遺跡						

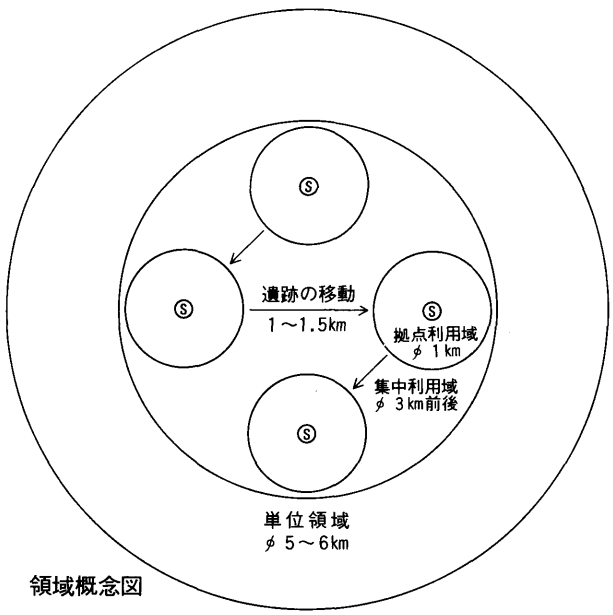
第69表　櫛田川流域の押型文土器出土遺跡とその存続期一覧表［※印は、発掘調査済］



煙道付炉穴模式図（削平後）



竪穴住居模式図



領域概念図

第128図　煙道付炉穴・竪穴住居模式図、領域概念図

2 弥生時代

(1) 方形周溝墓の型式

半辺陸橋型 当遺跡で検出された11基の方形周溝墓の内の2基（ＳＸ5・10）は、2本のＬ字形の周溝を持ち、ＳＸ11の2か所でも「陸橋」は見られない。これらは、中期末から後期初頭頃の造営と推定された。しかしそのほかは、全体が不明なＳＸ8・9も含めて中期後半と推定され、四隅にいわゆる「陸橋」を持つ。

ところが、それ以上に全体を通じて共通する点は、長さが1辺の半分程の周溝が、各々の1辺に見られることである。さらに、他の1辺の周溝は辺の中央に位置して短く、残りの2辺の周溝は長い。

これらの特徴は、2本のＬ字溝で構成されるＳＸ10にも窺えそうである。すなわち、西周溝の北半が途切れ、東周溝は中央以外が浅い。したがって、後世の削平がもう少し進行していたなら、他と同様な形態になったはずである。

一般に方形周溝墓の隅部分は、途切れて「陸橋」となっているか、浅く幅狭い傾向がある。しかし、何カ所かで周溝が途切れている場合でも、少なくともその内の1カ所では、隅というよりも1辺の端と理解できる場合が多い。また、周溝が全周する例は、欠山式期や元屋敷式期に属する例が多い。より先行するが全周しない場合でも、周溝の遺存度を考慮する必要がある。ともかく周溝は一見多様な在り方をするが、多くの例に共通する要素として、1辺の端寄りの部分、それも多くの場合は半分程が途切れている点こそが重要と考えられる。そこで、大鼻遺跡におけるこのような特徴を、今仮に「半辺陸橋型」と呼んでおくこととする（第130図左端の上下2例）[1]。当遺跡においてこの型式は、中期後半を中心に後期初頭まで営まれている。三重県下の例では、遅くとも中期前葉には出現しており[2]、後期まで存続している。

中央陸橋型 その後三重県下では、後期末の欠山様式古段階[3]には、1辺の周溝の中央が途切れる、いわば「中央陸橋型」が出現する[4]。文字通りの「陸橋」、すなわち「道」[5]が積極的に用意された段階である。

中央突出型 さらに三重県下では、欠山様式新段階[6]に墳丘の一部としての突出部が付加された、いわば「中央突出型」が出現する[7]。埋葬のためという一次的目的から出発した主墳丘に、『「道」が祭祀行為の中で特別の意味を持つ段階で突出部としての発達を遂げた[8]』ものである。この突出部の出現は、高塚墳墓の発達史上画期的な事柄と評価される[9]。なお周溝は、突出部の前面にまでは囲繞されてない。

前方後方型 次の元屋敷式（＝山城Ⅰ式）期[10]では、突出部も周溝に囲繞された「前方後方型周溝墓」が、県下でも存在した可能性がある[11]。当型式の周溝外縁は墳丘と相似形であり、その点は前方後方墳とは異なる。突出部が墳丘型式に本格的に取り込まれ、定着したものとして評価される。

以上のような、「半辺陸橋型」から「中央陸橋型」、「中央突出型」、「前方後方型」へと続く方形周溝墓の発展は、四角な主墳丘とこれへの「道」、祭祀場の定式化、墳丘化の過程である。

造営の意図と基準線 大鼻遺跡の方形周溝墓の傾向は、実は上述のほかにもある。それは、多くの周溝に見られる平面形である。すなわち、内側縁が直線的であり、さらに外側縁や両端は内湾する傾向があることである。極端に表現すれば、細長い半月形を呈しているのである（第129図）。

目を広げてみると、同様な特徴はひとり大鼻遺跡にとどまらず、三重県下はもちろん、広く一般に認められる。これは、築造に先立つ平面形決定の段階で、区画することよりも盛土する墳形に、意識の中心があったことを反映しているのであろう。このことは、「掘削面の墳丘際に構築の平面プランを描」いたとする巨勢廃寺遺跡第8号方形周溝墓における復元的考察は、単に特定例のみの特徴ではなく、方形周溝墓一般の特徴であることを示している[12]。

これに対して、山陰を中心に分布する四隅突出墳では、内側縁も内湾する4本の周溝をもつものが発生母体と推定されている。この場合は、盛土よりも平面的な区画に意識の中心があったと考えられる[13]。

もちろんこのような、盛土と区画のどちらに重点を置いたかという差異は、出発点における土木的な意識の差に過ぎない。歴史的に重要な点は、すでに弥生時代中期には墳墓においても地方色が胚胎していた事実であり、両形態共が高塚墳墓として発達していったという共通点である。

(2) 方形周溝墓の造営順（第131図）

陸橋 前述したように、大鼻遺跡の方形周溝墓は、「半辺陸橋式」と呼んだ型式である。この陸橋、すなわち「道」は、確認できた全てが各々の北半部に位置することも注目に値しよう。すなわち、北辺の東西どちらかの半分、あるいは東西どちらかの辺の北半部に陸橋がある。

ただし、東西に連結している場合を除いて、陸橋は北辺ではなく、東西どちらかの北半部を原則としている。この理由については、宗教的要素も含めて考慮すべき今後の課題である。

それはともかく、当遺跡では各方形周溝墓の北半部に陸橋が設けられた理由について、以下に若干検討してみよう。すると、まず地形が問題となる。具体的には、当遺跡の南辺には大きな段丘崖が迫っており、下は鈴鹿川本流の氾濫原である。したがって、南方に居住域を推定することは不可能である。また、東西に広く調査したが、弥生時代の住居等は検出されなかった。ところが、北方には居住域も考えられる台地が広がっている。この台地は、北に向かってわずかに低くなっており、さらに北方には耕地も推定できる。したがって、これらの方形周溝墓群を形成した集団は、北方に居住していたと推定される。

方形周溝墓の陸橋が、各々の北半部にあることの理由は、この居住域との位置関係にあったのであろう。そして、居住域と各方形周溝墓の陸橋は、墓道によって結ばれていたと考えられる。

墓道 近畿・東海地方の弥生時代中期の方形周溝墓は複数埋葬が多く、一般に追葬が考えられる。また、祭祀も行われたであろう。したがって、居住域と墓域を結ぶ墓道の存在は想定しなくてはなるまい。

当遺跡では具体的に検出することはできなかったが、北方の居住域に繋がる墓道の存在を想定することと、各周溝の重複関係や出土土器の検討から、第131図のような概念図が推定できる。すなわち、3群の方形周溝墓には、各群で最初に造営されたものに至る墓道があり、結果的にこれが幹線となった。そして、その後の方形周溝墓の造営に伴ってこの幹線から支線が派生した、と考えられる。

具体的に西群の場合は、北側にＳＸ１が営まれ、この東辺北半部の陸橋まで墓道が設けられた。次に、これに南接して造られたＳＸ２の東辺北半部の陸橋まで、墓道が延長されたのであろう。

また中央群では、ＳＸ４→６→５→７の造営順と推定された。ただし、ＳＸ３とＳＸ５・６の前後関係は不明である。ＳＸ８の陸橋も不明である。ともあれ推定可能な範囲内では、まずＳＸ４の西辺北半の陸橋に向けて墓道が付けられ、これから東のＳＸ６に向けて支道ができたのであろう。さらにこの支道からＳＸ５に向けて派生し、次にこれからＳＸ７に向けても墓道が付設されたと推定される。

東群の場合は、検出された限りではＳＸ11が最初に造られたのであろう。次に南接してＳＸ10が営まれ、この陸橋は西辺北半部に設けられている。このＳＸ10の陸橋の位置から、ＳＸ11の入口も西辺北半にあったと推定される。ただし、ＳＸ９との前後関係は不明である。

先行土器 西群や中央群とした方形周溝墓は中期後半に属するが、これらの周辺では中期前半の土器片も出土している。一方、これらの遺構の存在しない地点では、弥生時代の遺物はほとんど見られない。

この事実から、方形周溝墓に先行して何らかの遺構があったが、その後に削平されたとも考えられる。しかし、それでは土器に時間幅がある点は説明できるが、具体的な遺構がない点については説得力が弱い。また、方形周溝墓と同一地点であることの説明も付かない。とはいえ、同一方形周溝墓の存続期間が中期いっぱいとは考え難く、いずれにせよ問題として残る点である。

(3) 墓域の構成

方形周溝墓群 すでに繰り返し述べたように、３群計11基の方形周溝墓が検出された。この内、西群は２基から成る。これより東に約20ｍ間隔を置く中央群は、６基が検出された。さらに東に40ｍ程間隔を

置く東群は、3基が検出された。これらは、いずれも中期後葉を中心としている。また、これら3群相互は継起的ではなく、大部分の時期は同時存在したものと推定された。したがって、調査区北方に存在したであろう居住域も、少なくとも3群の単位集団が同時存在したのであろう。

ところで、各方形周溝墓の造営間隔であるが、例えば中央群に見るように、その存続期間と数から、世代毎の造営の蓋然性が最も高い。

各方形周溝墓における被葬者数は、当遺跡の場合は不明である。しかし、近畿地方や愛知県の例から、複数であった可能性が高い。

したがって、各方形周溝墓は世代毎に築造され、これに同一単位集団の構成員が追葬されており、同様な様子が同一集落内に3群以上存在したものと推定される。

箱式木棺墓　一方、方形周溝墓の西群よりもさらに西に約70m離れて、同じ中期後半の箱式木棺墓の可能性が高いSX12が検出された。東方に20m程と40m程の間隔を置いて併存する3群の方形周溝墓群に対して、西に約70mとやや大きく離れているが、溝等の区画施設はない。幅の狭くなった調査区の最西端で検出されたため、他に何基存在したかは不明である。また、他に同時代の土壙墓らしい遺構も検出されなかった。以下、箱式木棺墓と仮定して検討しておく。

墓域の構成　併存する3群の方形周溝墓群は、同質な単位集団として問題なかろう。問題は箱式木棺墓の位置付けである。

箱式木棺墓が方形周溝墓のような墳丘を持たない点は、相対的に劣位とも見える。しかし、棺を持つ点は方形周溝墓の中心的な埋葬主体と遜色がなかったであろう。

箱式木棺墓は何基存在したかは不明であるが、もし方形周溝墓に次ぐ第4の単位集団であったならば、集落内に単位集団間格差が存在したと推定できる。

一方、方形周溝墓を造営したいずれかの単位集団に属しながらも、例えば婚入者のように出身地が異なる者が死後は別に埋葬された、等という場合も推定可能である。ただし、箱式木棺墓から出土した土器（246）は、在地産である。むしろ、搬入品かとも推定される例（307）は、方形周溝墓の付近から出土しており、速断はし難い。

一方、例えば県内の鳥居本遺跡[14]や大阪府の宮の前遺跡等では、方形周溝墓群と共に土壙（墓）群も検出されている。このような埋葬遺構の差異に関しても、今後の検討課題である[15]。　（山田　猛）

〔註〕

① 小稿における分類は、下記文献の分類と次のような対応と相違が認められる。ただし、小稿では弥生時代後期以降の動向を主眼としているわけではないため、方形周溝墓に多くの形態が存在することは了解しているが、当報告の趣旨の範囲で全体を概括するように努めた。

a　石黒立人「伊勢湾周辺地方における方形周溝墓出現期の様相」（『マージナル』№7、愛知考古学談話会、1987年）。

b　赤塚次郎「東海系のトレース－3・4世紀の伊勢湾沿岸地域－」（『古代文化』Vol.44、財團法人古代學協會、1992年）。

山田分類	石黒分類	赤塚分類
半辺陸橋型	A_1～A_5型	A型のL字・コ字型
中央陸橋型	B_1型	B_1型
中央突出型		B_2型
前方後方型		B_3型

② 三重県下の中期前葉の方形周溝墓には、下記の例がある。

a　『下之庄東方遺跡（高畑地区）』（三重県教育委員会、1987年）の6号墓ほか。

b　河瀬信幸ほか『片野遺跡発掘調査報告』（三重県教育委員会、1985年）のSX100。

c　竹内英昭「Ⅲ.津市安東町　松ノ木遺跡」（『松ノ木遺跡・森山東遺跡・太田遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター、1993年）のSX10・11。

なお、SX11は前期末の可能性もあるとされている。

③ 山田猛ほか「Ⅲ　山城遺跡」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年）の編年案に拠る。

④ 『草山遺跡発掘調査月報』№5（松阪市教育委員会、1983年）のSX114・115。

⑤ 近藤義郎「古墳以前の墳丘墓－楯築遺跡をめぐって－」（『岡山大学法文学部学術紀要』第37号、1977年）。

⑥ 註③に同じ。

⑦ 西村修久「Ⅲ.巣護遺跡」（『一般国道42号松阪・多気バイパス埋蔵文化財発掘調査概報告Ⅳ』三重県埋蔵文化財センター、1994年）において、「前方後方型周溝墓」として報告された例である。

⑧ 都出比呂志「前方後円墳出現期の社会」（『考古学研究』第26巻第3号、考古学研究会、1979年）の21頁。

⑨ 山田猛「Ⅰ　安芸郡安濃町　前田遺跡」（『昭和57年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』三重県教育委員会、1983年）の148頁においては、地山の削り出しや盛土の程度よりも、主墳丘に造出しが付加された段階を重視し、この有無をもって当時問題となっていた「墳丘墓」と「方形台状墓」を区別することを考えた。この、突出部の出現を重視する立場に変更は

ないが、墳墓の各型式名称は小稿のように改めたい。

⑩　註③に同じ。

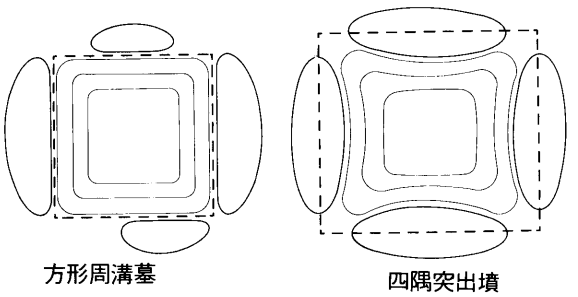
⑪　小林秀「7.松阪市大足町　大足遺跡」（『伊勢寺廃寺・下川遺跡ほか』三重県埋蔵文化財センター、1990年）の1号墳。

⑫　一瀬和夫「方形周溝墓・方形台状墓　そして古墳－方形周溝墓の墳丘立面性を中心として－」（『末永先生米壽記念獻呈論文集』末永先生米壽記念会、1985年）の184頁。

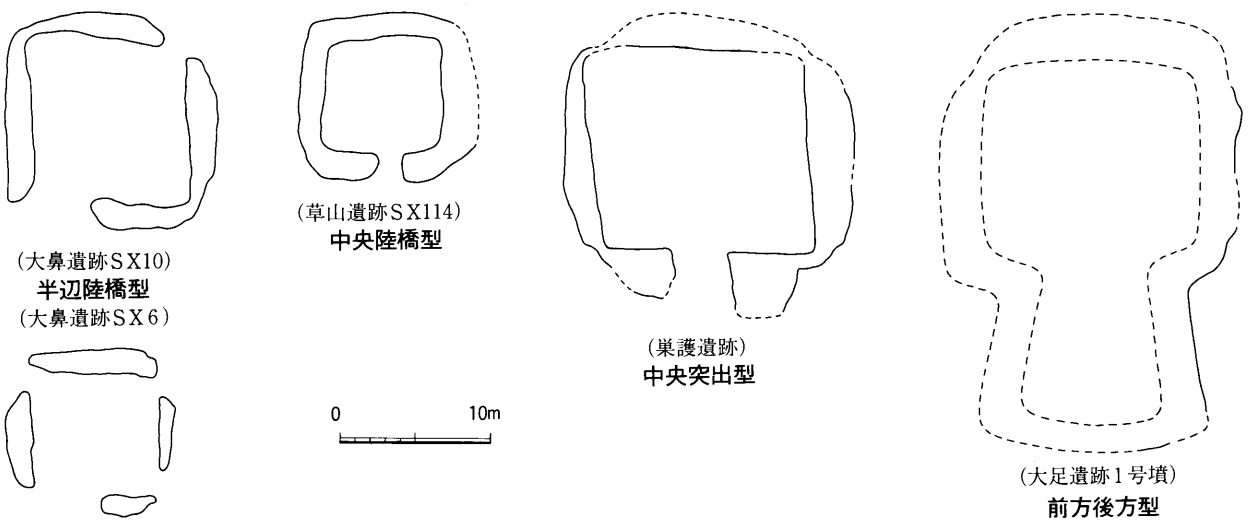
⑬　註⑧の文献の20頁。

⑭　河北秀実『近畿自動車道（久居～勢和）埋蔵文化財発掘調査報告－第3分冊10－鳥居本遺跡』（三重県教育委員会・三重県埋蔵文化財センター、1991年）。

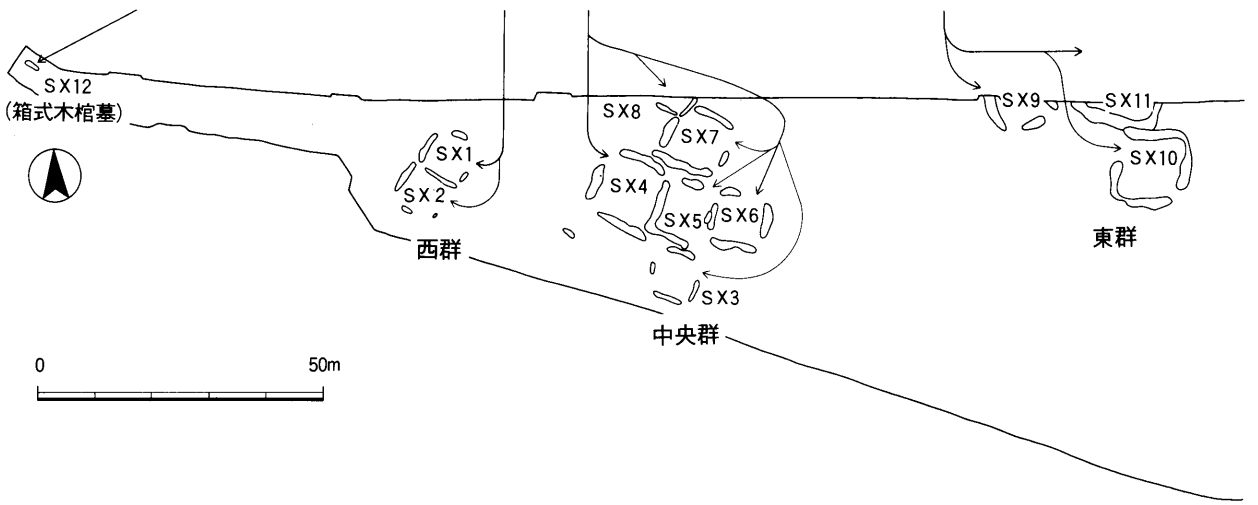
⑮　都出比呂志『日本農耕社会の成立過程』（岩波書店、1989年）の223頁。



第129図　方形周溝墓と四隅突出墳の基準線



第130図　三重県下の方形周溝墓の類型



第131図　墓道と築造順

3　古墳時代～奈良時代

大鼻遺跡は、縄文時代から室町時代に至るまで断続的に営まれた複合遺跡であるが、遺跡の中心をなす遺構群の一つに古墳時代から奈良時代にかけての竪穴住居がある。これらは、Ⅰ区を除く全ての調査区にわたってみられ、総数は90棟に及ぶ。時代別には、古墳時代66棟、飛鳥時代４棟、奈良時代17棟、不明３棟である。ここでは、各時代別に竪穴住居の変遷を中心に集落構成について若干の考察を行い、結語としたい。

なお、竪穴住居の埋土については、Ⅱ区（ＳＨ９～11が該当）を除いて全て篩掛けを実施している。その結果、滑石製臼玉を中心とする玉類が確認されたので、このことについても少し触れておきたい。

(1)　古墳時代の集落

古墳時代後期に属する竪穴住居が66棟ある。掘立柱建物は伴わず、竪穴住居のみで集落は構成される。

古墳時代の竪穴住居は、Ⅳ区からⅧ区の東西400ｍ程の範囲に分布する。Ⅲ区以西及び、Ⅷ区東端には竪穴住居は分布しないことから、集落の広がりについては、東西には調査区内で納まる可能性が高い。また、南側については、遺跡が段丘南縁に立地することから、Ⅷ区を除いて調査区外に広がる可能性はない。北側については、段丘南縁から40～100ｍ程北に微かな分水嶺が認められることから、調査区外に大きく広がることはなく、集落は台地南縁の南斜面を中心に営まれたものと考えられる。調査区の北側、もしくは南側の低位段丘上には、水田が広がる可能性が指摘できる。なお、古墳時代の竪穴住居は、Ⅳ区以西に分布する弥生時代の方形周溝墓群域にはみられず、古墳時代には方形周溝墓群が前代の墓域として、直接的あるいは間接的に集落の占地に影響を及ぼしていた可能性があり、興味深い。

集落の確実な形成時期は５世紀末葉である。ここでは、第Ⅴ章で行った各竪穴住居の時期の細分に基づき、５世紀末葉から６世紀初頭を古墳Ⅰ期、６世紀前葉を古墳Ⅱ期、６世紀中葉を古墳Ⅲ期、６世紀後半を古墳Ⅳ期として、各時期別に竪穴住居の変遷をみたい。

古墳Ⅰ期　竪穴住居15棟がある。これらは第132図－ｃの通り、西群・中央群・東群の３つの単位集団に群別することができる。この３群はⅡ期以降にも存続するもので、大鼻遺跡の古墳時代集落がその開始期から一貫して３単位集団によって構成されていたことが認められる。また、前述したように、古墳時代の集落は東西約400ｍ程の範囲に分布するが、この範囲を３等分する東西130ｍ前後の範囲を各単位集団の園宅地としていた可能性がある。なお、中央群と東群の間には市道が通る谷が開析されているが、この谷は当時からあった可能性が高く、両群の区画はこの谷に拠ったものかもしれない。

Ⅰ期の西群には、５棟の竪穴住居がある。住居には規模の大小がみられ、一辺が６ｍ以上の大型のもの１棟（ＳＨ36）、一辺が4.5ｍ程の中型のもの２棟（ＳＨ35・41）、一辺が４ｍ以下の小型のもの２棟（ＳＨ21・29）からなる。しかし、住居の規模の大小による出土遺物の明確な差異は認められない。

中央群には６棟の竪穴住居がある。一辺が６ｍ以上の大型のもの２棟（ＳＨ56・57）、一辺が５ｍ前後の中型のもの２棟（ＳＨ53・61）、一辺が４ｍ以下の小型のもの２棟（ＳＨ55・59）からなる。やはり、住居の規模の大小による出土遺物の差異は明確ではない。しかし、ＳＨ56から手捏土器１点が出土している。

東群には４棟の竪穴住居がある。一辺が６ｍ以上になる大型のものはなく、一辺が５ｍ前後の中型のもの３棟（ＳＨ74・88・89）、一辺が４ｍ以下の小型のもの１棟（ＳＨ90）からなる。やはり、住居の規模の大小による出土遺物の差異は明確ではないが、ＳＨ74から手捏土器１点が出土している。ＳＨ89からは砥石や鎌状石製品が出土しているが、これらは埋没過程で廃棄されたものである可能性が高い。なお、東群の竪穴住居は調査区の北端と南端にみられるもので、２群に分ける余地もあるようだが、Ⅱ期

以降の住居の分布状況をみると、一つのまとまりとしておいて良さそうである。

古墳Ⅱ期　竪穴住居17棟がある。やはり、3単位集団からなると推定されるが、それぞれの園宅地のなかで住居の拡散傾向が認められる。

西群には6棟の竪穴住居がある。一辺が6m以上の大型のもの1棟（SH25）、一辺が5m前後の中型のもの3棟（SH19・22・31）、一辺が4.1m以下の小型のもの2棟（SH20・40）からなる。やはり、住居の規模の大小による出土遺物の差異は明確ではないが、SH31から子持勾玉1点が出土している。また、調査区南端に孤立して存在するSH40は、竈や貯蔵穴をもたない小型の竪穴住居であるが、滑石製臼玉が66点出土しており注目される。滑石製臼玉の工房跡等も考えられるが、出土した滑石製臼玉は、他の竪穴住居出土のものと変わらず、未製品等、製作跡を推定させる出土遺物も検出されていない。現状では、竈を伴わないことから、一般的な住居とは性格の異なる建物である可能性が高いことだけを指摘できるにとどまる。

中央群には5棟の竪穴住居がある。一辺が6m前後のやや大型のもの2棟（SH47・54）、一辺が4m前後のやや小型のもの3棟（SH50・51・68）からなる。これらのうちSH50・51は重複するものである。やはり、住居の規模の大小による出土遺物の明確な差異は認められない。

東群には6棟の竪穴住居がある。SH72・73は重複する住居である。共に規模は不明であるが、他の4棟は一辺が5m前後の中型の住居である。住居間には出土遺物の明確な差異は認められないが、SH91からは石製紡錘車2点が出土している。

古墳Ⅲ期　やはり、3単位集団からなると推定されるが、それぞれの園宅地のなかで住居の拡散傾向はより顕著になる。竪穴住居の数は最も多く、24棟を数える。

西群には7棟の竪穴住居がある。一辺が8m以上（SH37）、7m前後（SH38）の大型のもの2棟、一辺が5m前後の中型のもの1棟（SH45）、一辺が4.1m以下の小型のもの3棟（SH14・23・39）がある。SH26は、主柱穴の規模から一辺が6m前後と推定される。これらのうち、SH37・38は重複する住居である。やはり、住居の規模の大小による出土遺物の明確な差異はないが、SH37から手捏土器2点が、SH45から石製紡錘車1点が出土している。SH39は、古墳Ⅱ期西群のSH40と同様に調査区南端に孤立してみられるもので、竈や貯蔵穴をもたない小型の竪穴住居である点でも共通する。その性格の断定は困難であるが、一般的な住居とは性格の異なる建物の可能性が高く、公共的な性格をもったものかもしれない。

中央群には7棟の竪穴住居がある。一辺が6mを越える大型のものや、4m以下の小型のものはみられず、中型の竪穴住居で構成される。住居間には出土遺物の明確な差異は認められないが、SH69からは土師器ミニチュア横瓶が出土している。園宅地のなかで、住居域が中央部と東端部に分かれる傾向がみられる。

東群には10棟の竪穴住居がある。SH75～77は重複する住居である。規模の不明瞭な住居が多いが、一辺が6.4m以上の大型のもの1棟（SH94）、一辺が5.5m前後の中型のもの1棟（SH75）、一辺が4.4m以下の小型のもの4棟(SH76・78・83・98)がある。住居の規模の大小による出土遺物の明確な差異は認められないが、SH75から砥石1点が、SH92から手捏土器1点が出土している。

古墳Ⅳ期　やはり3単位集団からなると推定されるが、集落の衰退傾向がみられる時期で、竪穴住居の数は10棟を数えるのみである。東群のように1棟の住居からなるものもある。

西群には5棟の竪穴住居がある。一辺が5m以内の中型もしくは小型の住居で構成される。住居間には出土遺物の明確な差異は認められない。

中央群には4棟の竪穴住居がある。Ⅲ期において、住居域が園宅地の中央部と東端部に分かれる傾向がみられたが、当期では中央部には住居域はみられず、竪穴住居は東端部に集中して分布する。SH67のようにやや大型の住居もあるが、中型もしくは小型の住居で構成される。住居間には出土遺物の明確な差異は認められない。

東群は衰退傾向が顕著で、竪穴住居1棟（SH82）のみである。SH82は、一辺が5m前後の中型の竪穴住居であり、特筆すべき遺物の出土はない。

まとめ　大鼻遺跡の古墳時代集落は、5世紀末葉に開始期をもち、6世紀中葉に最盛期を迎え、6世紀後半には既に衰退傾向をみせる。

集落は、3単位集団で構成され、各単位集団は東西130m前後の園宅地をもっていた可能性が高い。この3単位集団及び園宅地は、Ⅰ期～Ⅳ期まで継続してみられるもので、各単位集団は園宅地の墨世的占有、すなわち私的所有を実現していたと考えられる。近畿地方の一般的な集落における、園宅地の私的所有の実現は7世紀初頭とする見解もある[①]。しかし、大鼻遺跡ではこの傾向が6世紀代から認められたことになる。

なお、園宅地内における住居域には移動がみられ、一定空間への永続的な固定性は認められない。

また、各単位集団は大小の竪穴住居で構成されるが、出土遺物には住居規模の大小による差異は認められず、大型住居の優位性などは認められない。住居の規模には関係なく、手捏土器やミニチュア土器が出土する竪穴住居が、Ⅰ期の中央群（SH56）・東群（SH74）、Ⅲ期の西群（SH37）・中央群（SH69）・西群（SH92）のように、各群に1棟ずつみられる傾向があり、注目される。

(2)　飛鳥時代の集落

4棟の竪穴住居を数えるのみである。いずれも一辺が5m以下の小型の住居で、調査区に散在的にみられる。飛鳥時代以降の竪穴住居は、弥生時代の方形周溝墓と重複はしないものの、この墓域にも進出している。なお、掘立柱建物は伴わない。

第Ⅵ章でみたように、飛鳥時代は出土遺物に恵まれず、時期比定に不安を残す竪穴住居もある。住居の時期の細分は困難だが、7世紀初めの可能性がある住居2棟（SH63・71）、7世紀後半の可能性がある住居2棟（SH11・43）があり、7世紀中頃に集落の断絶が認められる。須恵器の杯身・蓋でいえば、古墳時代のSH81の混入品と考えた杯身624（中村編年のⅡ－6[②]に並行か＝7世紀初め）以降、杯蓋の内面に、いわゆるかえりのみられる段階のものは確認されず、この間に断絶が認められる。

5世紀末葉に開始された大鼻遺跡の古墳時代集落は、7世紀初めの住居を最後に消滅すると考えられる。古墳時代の単位集団の区分でいうと、SH63が中央群の最後の住居の可能性があり、SH71が東群の最後の住居の可能性がある。

(3)　奈良時代の集落

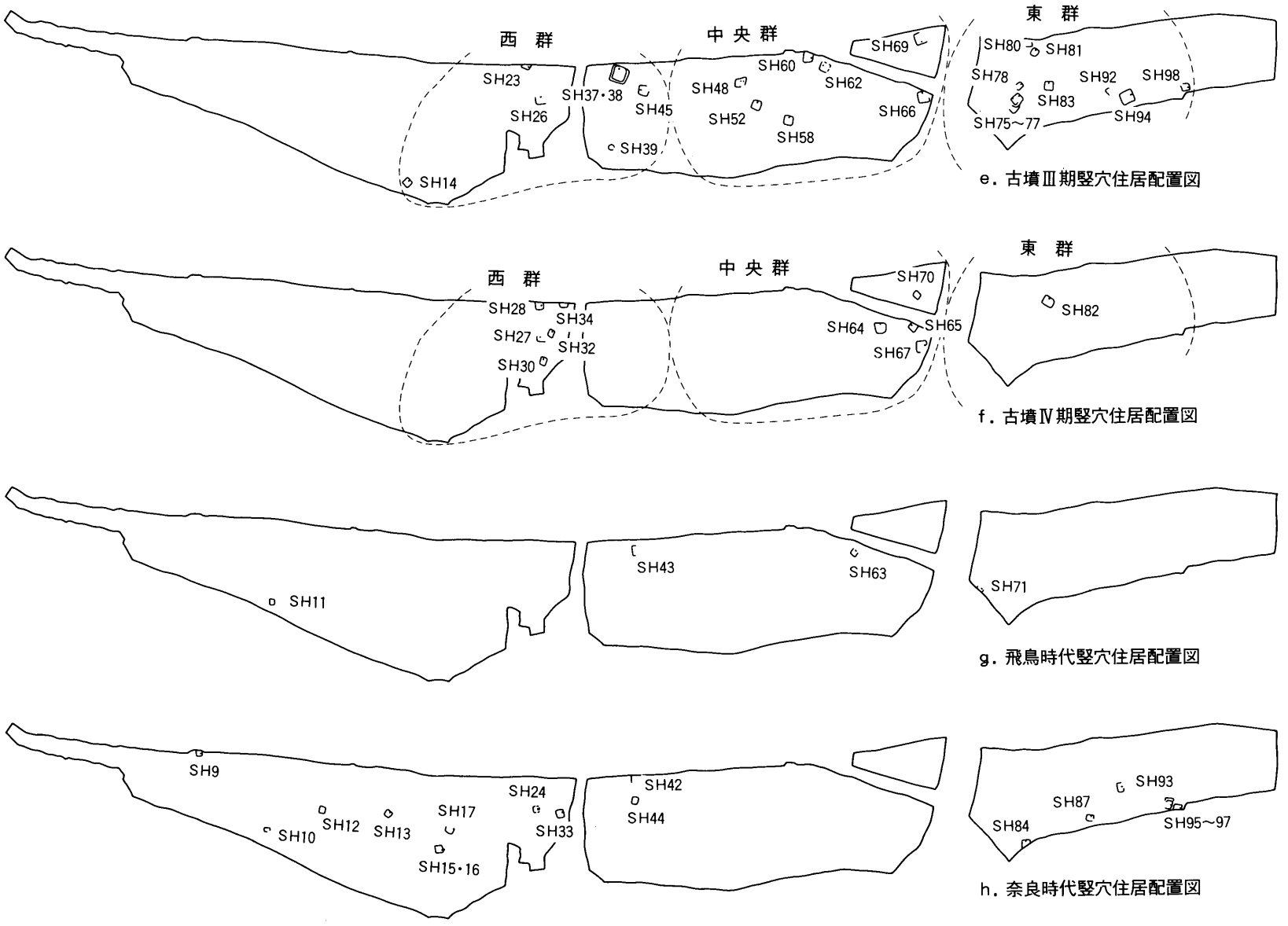
7世紀後半から再び確認される大鼻遺跡の集落は、8世紀代に引き続きみられ、竪穴住居17棟がある。しかし、掘立柱建物は確認されず、竪穴住居のみで集落は構成される。

分布の状況は、西群と東群の2群に大きく分けることができるが、これらは、古墳時代にみられた単位集団とは、全く別のものである。

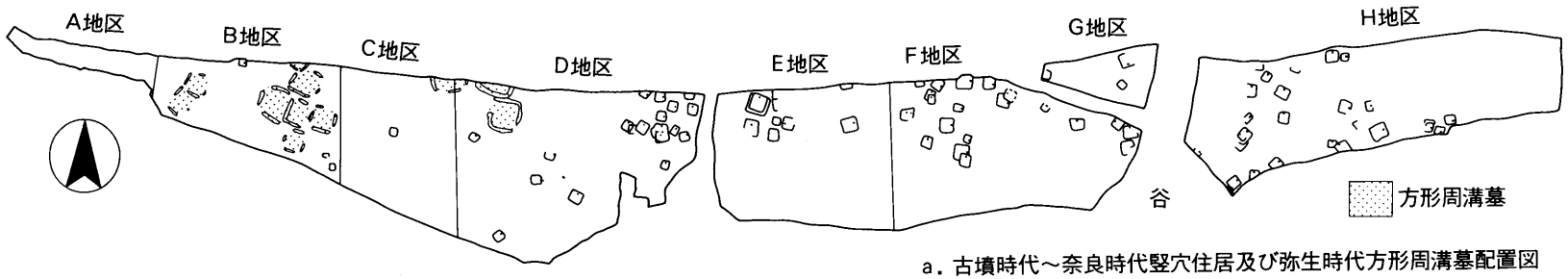
西群はⅡ区中央からⅤ区西部にかけて、東西230m程の範囲に11棟の竪穴住居がある。重複するものや近接する住居もあるが、各竪穴住居は明確なまとまりをみせず、25～45m程の間隔を空けて点在する。一辺が5mを越えるような竪穴住居はみられず、比較的小型の住居で構成される。出土遺物には、4棟で滑石製臼玉が確認されているほかには、明確な差異は認められない。

東群はⅧ区に、東西85m程の範囲に6棟の竪穴住居がある。西群とは200m程の距離をおく。西群と比較すると、竪穴住居は集中する傾向がみられるが、全体的な印象としてはやはり散在的でまとまりにかける。一辺が4.4m以下の小型の住居ばかりで構成される。出土遺物には、3棟で滑石製臼玉が確認されているほかには、明確な差異は認められない。

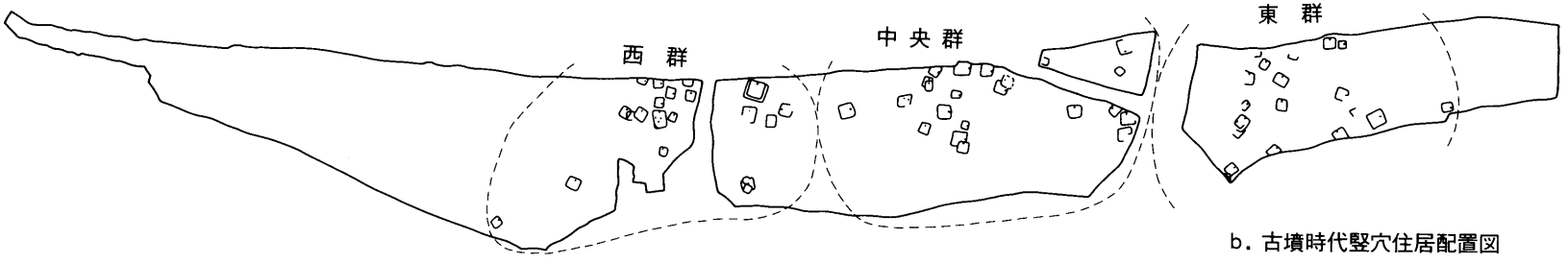
以上のように、奈良時代の大鼻遺跡の集落は大きく2群に分けることができるが、両群とも規模及び出土遺物等の点で比較的均質な竪穴住居が点在するものである。この点在するという分布傾向は、同時存在の竪穴住居を抽出した場合、さらに強まるものであろう。こうした分布状況から、当該期の大鼻遺跡の集落は、単位集団を認定するというよりは、各竪穴住居が孤立的に存在するという印象を受けるものである。また、当地方の奈良時代集落では掘立柱建物の普及が広範に認められるが、大鼻遺跡の当該期集落は竪穴住居のみで構成され、掘立柱建物は伴わない。このことは、同じ亀山市内の地蔵僧遺跡[③]の奈良時代集落と比較してもより後進的である。これらのことから、大鼻遺跡の奈良時代集落は、社会階



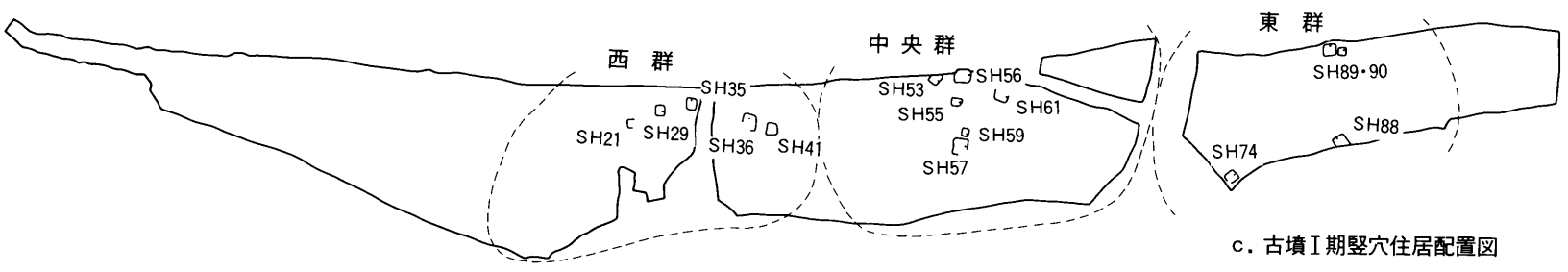
第132図　古墳時代～奈良時代竪穴住居変遷図（1：3,000）



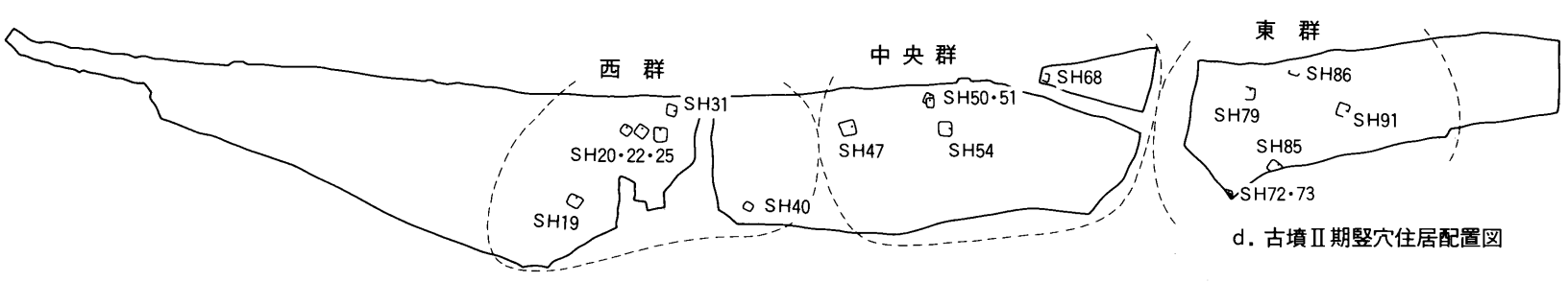
a．古墳時代～奈良時代竪穴住居及び弥生時代方形周溝墓配置図



b．古墳時代竪穴住居配置図



c．古墳Ⅰ期竪穴住居配置図



d．古墳Ⅱ期竪穴住居配置図

層的により下層に属する隷属的な集団であった可能性が高いと考えられる。

一方、墓の存在を推定させる遺物には、須恵器台付細頸瓶(1316)や須恵器把手付薬壷(1338)等、やや有力者層の墓を想定させるものがみられ、対照的である。

(4) 竪穴住居出土の玉類

前述したように、大鼻遺跡の調査ではⅡ区（ＳＨ９～11が該当）を除くほぼ全ての竪穴住居の埋土を篩掛けしている。その結果、古墳時代の竪穴住居では、約７割の住居で総点数398個の滑石製臼玉が確認された。他に、ガラス小玉５点、滑石製管玉２点、土製臼玉10点、土製丸玉５点、土製ナツメ玉２点が確認されている。また、飛鳥・奈良時代の竪穴住居でも篩掛けを実施した17棟の住居の内、９棟で総点数35個（飛鳥時代は４棟の内、１棟で１点）の滑石製臼玉が確認された。

大鼻遺跡以外でも、亀山市内の山城遺跡[4]や鈴鹿市の伊奈富遺跡[5]・稲生遺跡[6]、上野市の北掘池遺跡[7]等で、古墳時代後期の住居跡から滑石製臼玉が確認されている。これらの内、稲生遺跡では検出された古墳時代後期の竪穴住居33棟全てで、篩掛けを実施している。その結果、ほとんどの住居で滑石製臼玉が確認された。

大鼻遺跡や稲生遺跡は、遺構や遺物をみる限り決して特殊な遺跡ではない。両遺跡の篩掛けの結果をみたとき、この地方の古墳時代後期の竪穴住居は、篩掛けを実施すれば、滑石製臼玉が普遍的に確認されることが予想され、当該期、当地方の集落では滑石製臼玉が一般的に使用されたものと推定される。

なお、大鼻遺跡では奈良時代に降る竪穴住居でも滑石製臼玉が確認されている。当該期の事例は県内では類例をみないものであり、現状では大鼻遺跡の奈良時代の事例が、本来的に竪穴住居に伴うものかどうかの判断は決し難い。しかし、出土点数をみるとＳＨ84出土の15点のように、決して無視できるものではない。この時代には、土馬や斎串など律令的祭祀遺物が取り沙汰されるが、一方で前代の祭祀具である滑石製臼玉が一部に残るものなのかどうか、更に検討を要する。（森川幸雄）

〔註〕

① 山田猛「７世紀初頭における集落構成の変質」(『考古学研究』第28巻第３号、考古学研究会、1981年)。
② 中村浩ほか『陶邑Ⅲ』（大阪府教育委員会、1987年)。
③ 倉田直純ほか『地蔵僧遺跡発掘調査報告』（亀山市教育委員会、1978年)。
④ 山田猛・岸田早苗「山城遺跡」(『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年)。
⑤ 小玉道明「伊奈富遺跡」（『国鉄伊勢線関係遺跡調査報告』鈴鹿市教育委員会、1966年)。
⑥ 穂積裕昌ほか「稲生遺跡」(『一般国道23号中勢道路埋蔵文化財発掘調査概報Ⅴ』三重県埋蔵文化財センター、1993年)。
⑦ 三重県教育委員会『北堀池遺跡発掘調査概要(3)』(1979年)。

4　平安時代～室町時代

大鼻遺跡の特徴として、調査区全体に密度の差はあるものの、平安時代末から中世にかけての時期に属すると思われる概ね30cm前後のピットが無数にあることが挙げられよう。しかし、それにもかかわらず今回建物としてまとめることができたものは、掘立柱建物として45棟、柱列は4列のみである。

また、その他の遺構として中世墓8基、井戸6基、土坑は30cm前後のものからⅥ区の東側ほぼ半分を占める大土坑群まで大小合わせて71基、溝は大小33条を確認している。

掘立柱建物等各遺構とその出土遺物の詳細については前述した通りであるが、これらからみた平安末期から中世にかけての大鼻集落について、若干検討を加えてみたい。

(1)　墨書土器

墨書土器は21例が確認されている。いずれも山茶椀系の椀底部に書かれている。墨書は大半が一文字で、判読可能なものに、「×」「大」「上」「九□」などがある。興味深い例としては、ＳＥ2出土墨書土器があげられよう。山茶椀系の椀底部に稚拙な筆運びで「大」と一文字書かれたものを合計5例確認した。一文字しか書かれていないため、その持つ意味を推定するのは非常に困難であるが、井戸からの一括資料であることから、「大」という文字が、この井戸を利用していた人々にとっての何らかの印的な記号（それは文字としての意味も含めて）であったことは容易に推定できる。一つの集落からある一定種類の墨書が多数出土することは、まま見られることであり、「大」という文字も大鼻遺跡以外でも見られる。このある一定種類の墨書を書く意味については議論の分かれるところであろうが、中世社会における村々での饗宴の場で使用するために持ち寄った食器類の所有者を識別する目的で書かれたのではないかという解釈は以前にも書いた[①]。当遺跡出土の墨書についても、同様の推測が可能であろう。

また、ＳＸ15・ＳＫ37から出土した墨書土器は、判読はできなかったものの、筆運びがほとんど同じで、字画の多いやや複雑な文字が書かれた例も3点出土している。花押の可能性も考えられ、これらの遺物が出土した中世墓ＳＸ15と直径40cm程の円形の小穴であるＳＫ37の関係を考える上でも興味深い。

いずれにしても、これらの墨書の持つ意味が明らかになれば、大鼻集落のみならず中世集落全体の像がさらに生き生きと見えてくるであろう。今後の成果に期待したい。

(2)　土坑を伴う掘立柱建物

12～14世紀にかけて多く見られる土坑を伴う掘立柱建物は、当遺跡においても8例を数える。時期はこの種の建物が一番多くなる12世紀後半から13世紀に属し、建物規模は2間×2間～8間×6間まで各種見られる。土坑を〝伴う〟掘立柱建物が8例と述べたが、これらの中には、建物の中に土坑が存在するものの、建物と土坑の関係が今少し明らかでないものも含まれている。確実に建物に付属すると見られる土坑を持つものは、さらに減少して6例となる。いずれも総柱建物で、東南隅に1間×2間前後の土坑を持つ。浅尾悟は「土坑を伴う中世掘立柱建物について」[②]の中で、土坑を伴う中世掘立柱建物の傾向を分析しているが、当遺跡から検出されているこれらの掘立柱建物も、時期・規模・土坑の状況等浅尾が検討・指摘した類例にほぼ共通している。ただ、土坑の性格について浅尾は「厩」である可能性を説いているが、現状では結論を出すことは難しい。一部の土坑にはその可能性までは否定しきれないとしても、必ずしも単一な性格を想定すべきではあるまい。例えばＳＢ8に伴うＳＫ25やＳＢ14に伴うＳＫ33などの土坑には、排水溝と考えられる溝（ＳＤ4・5、8）を持つことから、「厨房」の可能性もあろう。特にＳＢ8内の土坑ＳＫ25は、砂礫土層と粘土層が交互につき固めて敷かれ、土師器皿や山茶椀系椀等多数出土しており、今後こうした建物を検討する一つの好例となるだろう。

また、ＳＢ14は先に述べたように、ＳＢ13の付属施設的な性格を持つと考えられる2間×2間の小さ

な建物であり、その半分の面積を土坑ＳＫ33が占めている。これらも非常に興味深い一例である。

(3) 建物小群

当該期の大鼻遺跡の建物の印象は、検出できなかった遺構があることを考慮に入れても、その調査面積に比べて、全体的にまばらな感を受ける。

掘立柱建物の方位　時期的には平安時代後期に属するものが３棟、残りの大半は、明確に時期決定できる出土遺物を伴うものが少ないが鎌倉・室町時代のものであろう。

棟方向は東西棟が大半を占め、45棟中34棟を数える。南北棟として報告した11棟の建物の中には、平面形がほぼ正方形に近いものが４棟あり、これらについても東西棟の可能性を残す。

このことや、河岸段丘上の南端に沿うように立地する遺跡であることから、大鼻遺跡において優先された棟方向は東西であったことが判る。

建物の方位は、第70表にみられように概ね東で北に13度から東で南に20度の範囲に集中している。個々の建物の方位は各々において決定しており、また建物復元時における多少の誤差も考慮に入れると、さらに各建物小群内の相互建物の方位の誤差は縮まるだろう。

建物小群　では、各掘立柱建物の関連性はどうだろうか。前述したように、大鼻遺跡の遺構はまばらである。そのため、建物小群としてとらえられる遺構もわずかではあるが、建物相互間の距離や方位を基準として、以下に検討してみる。

なお、当遺跡においての使用尺については、概ね１尺が30～30.5cmの範疇に収まるにもかかわらず、柱間は尺単位の完数値を求めることが困難であった。当遺跡から検出された掘立柱建物では、一棟の建物内においても柱掘形の大きさ・形・並び方等に非常に不規則なものが多い。これらから想像を逞しくすれば、柱間等の企画性よりも、建物を建築する際の使用部材の制約等の方が優先されるような建物の性格であったと考える方が、より適当ではないかと思われる。また、そのことが当集落を形成していた人々の階層をも彷彿とさせてくれるのではないだろうか。推測はさておき、とりあえず当該報告においての使用尺については、最も蓋然性が強いと考えられる[3]１尺＝30.3cmとして以下の検討を行う。

ＳＢ10・11（第133-A図）　Ⅳ区西側に位置する建物小群である。ＳＢ10は大鼻遺跡で検出された最大の10間×６間という建物である。ＳＢ11は３間×３間のほぼ正方形をした建物である。棟方向は東西棟であり、東で南に５～７度振れる。ＳＢ10の南面から約59尺の所にＳＢ11の南面が位置し、東面をそろえる。これらから、ＳＢ10は居住用建物（主屋）と考えられ、ＳＢ11は倉庫もしくは副屋であろう。ちなみに、ＳＢ10内にはＳＸ14・15があり、これらの中世墓が造られた13世紀には、ＳＢ10はすでに存在しなかっただろうと考えられる。

ＳＢ13・14（第133-B図）　Ⅳ区西側、ＳＢ11のすぐ東側に位置する。ＳＢ13は５間×４間、ＳＢ14は２間×２間の総柱建物である。ともに棟方向は東西棟で、東で北に２度振れ、ＳＢ13の梁行の南東１間分とＳＢ14の梁行北西１間分とが接している。双方とも、南東隅に１間×２間分づつ土坑が存在する。これらから、ＳＢ13は居住用建物（主屋）と考えられ、ＳＢ14は副屋もしくは倉庫であろう。さらに想像を逞しくすれば、溝を伴う土坑ＳＫ33を持つＳＢ14は、ＳＢ13の厨房的な施設であるかもしれない。しかし、これらを建物小群ととらえられるのかどうか、若干の疑問も残る。

ＳＢ25～27（第133-C図）　Ⅴ区東北に位置する建物小群である。いずれも東西棟であり、棟方向は東で北に９～13度振れる。ＳＢ25・26は概ね北面を揃える。ＳＢ25の東面からＳＢ26の西面の間は８尺、ＳＢ26の東面からＳＢ27の西面の間は16尺開く。建物の規模等からＳＢ26が主屋、ＳＢ25・27は倉庫・副屋であろう。

ＳＢ31・32（第133-D図）　Ⅵ区北西に位置する建物小群である。棟方向は東西であり、東で北に１～２度振れる。ＳＢ31の東面からＳＢ32の西面の間は約14尺である。建物の規模等からＳＢ32が主屋、ＳＢ31は倉庫であろう。

ＳＢ33・34（第133-D図）　Ⅵ区中央北側に位置する建物小群である。ともに東西棟であり、棟方向は東で南に１～２度振れる。ＳＢ33・34は南面を揃える。ＳＢ33の東面からＳＢ34の西面の間は約７尺で

ある。建物の規模等からＳＢ33が主屋、ＳＢ34は副屋であろう。ちなみにＳＢ32の東面とＳＢ33の西面は約39尺離れる。

ＳＢ40～43（第133-E 図）　Ⅶ区やや東側に位置する建物小群である。いずれも東西棟であり、棟方向は東西軸で東で北に５～９度振れる。ＳＢ40・41は西面を揃え、ＳＢ41・43は北面を揃える。ＳＢ40の南面からＳＢ41の北面の間は約７尺、ＳＢ41の西面からＳＢ43の西面の間は約20尺である。また、ＳＢ40の西面からＳＢ42の西面の間は約24尺であり、ＳＢ42の南面からＳＢ43の北面は約19尺である。建物の規模等からＳＢ43が主屋、ＳＢ41・42は副屋、ＳＢ40は倉庫であろう。

以上のように検討をおこない得た大鼻遺跡の建物は、45棟中３分の１の15棟にすぎない。これらの建物小群においての建物棟数で最も多い単位は２棟で、建物群内の方位の振れは４・５度ほどである。この方位については、前述したように復元時による誤差も考慮に入れるとしても、１～２度は建築時での施行誤差と考えられよう。また、既述したように、一棟の建物内における柱掘形等の不揃いさも建築時の許容範囲である可能性が高い。繰り返すが、こういった状況からも当集落を形成していた人々の階層、つまり建物を建築する際にさほど厳密な規格性を保持し得なかった階層の居住者が推定されよう。そして、上記のような建物小群以外の大半の建物は、おそらく複数の建物を持たずに単独で存在していたのであろう。また、建物周辺の空閑地は耕作地であっただろうと推測される。

(4)　区画の意識をもった溝・ピット列

当遺跡では、該期の溝を大小合わせて33条検出している。このうち、区画を意識していると考えられるものは、南北及び東西に走る溝があげられる。複数重なっている溝を改修・重複の結果であると考えれば、南北溝は７条、東西溝は３条数えられる。南北溝は概ね160～230尺の間隔で走り、東西溝については間隔は不明である。

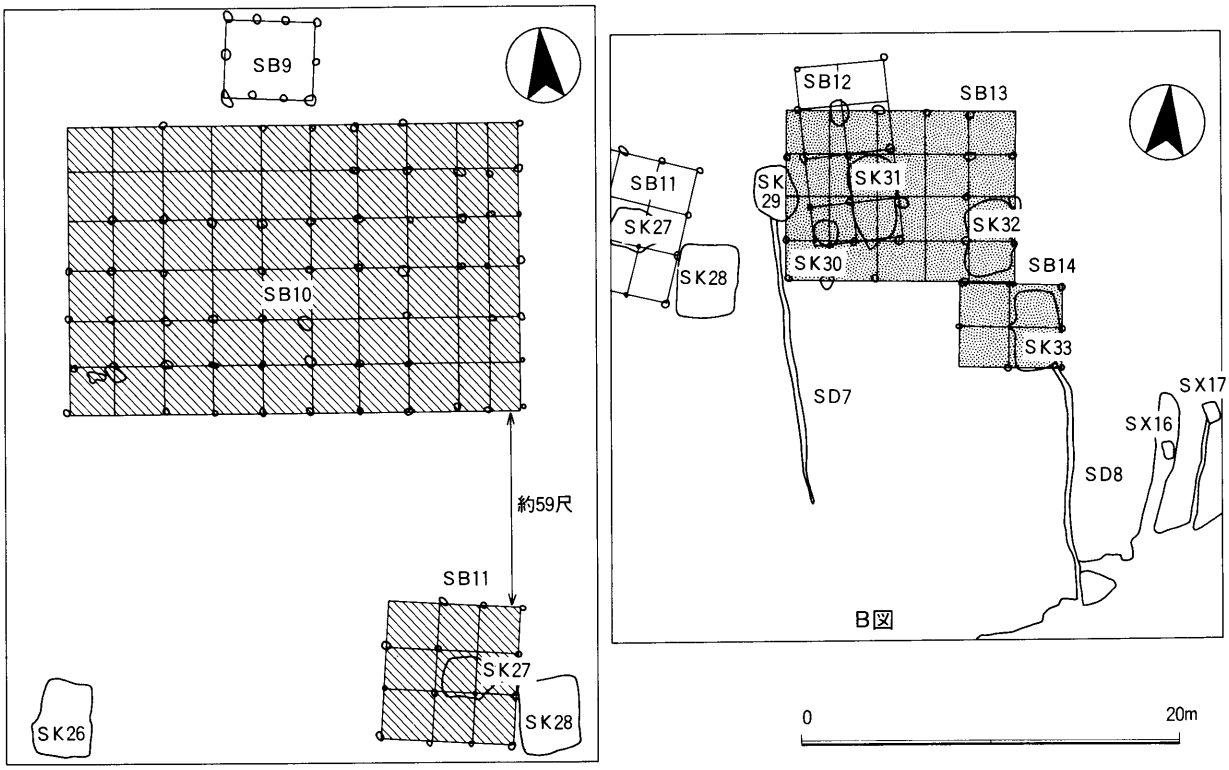
また、柱穴がほぼ東西方向や南北方向に群在して帯状に並ぶ地点もある。しかし、これらの遺構についても方位は一定ではなく、間隔も一定ではない。

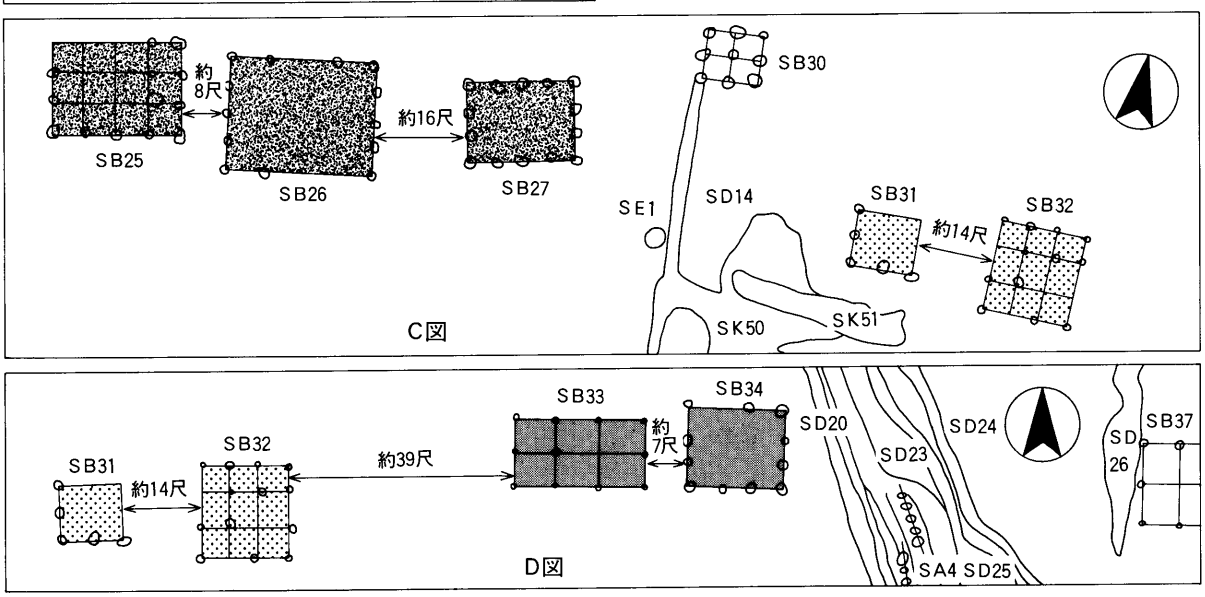
建物が溝や柱列と重複している例（ＳＢ23・24とＳＤ９～12やＳＢ28とＳＤ13など）も複数あることから、どこまでこれらの溝や柱列が土地を規制するものとして意識されていたかは定かではない。建物と溝の先後関係は定かでなく断定するのは難しいが、おそらく溝の方が新しいものであろう。一概には言い切れないが、この溝や柱列によって区画されていた空間と、建物が配置されていた空間とは、時期を異にしていたであろうと推測できる。つまり、大鼻遺跡全体がそうであったかどうかは定かでないが、掘立柱建物が建てられた頃の地割りは、溝や柱列が造られた頃にはすでに存在していなかった可能性があろう。

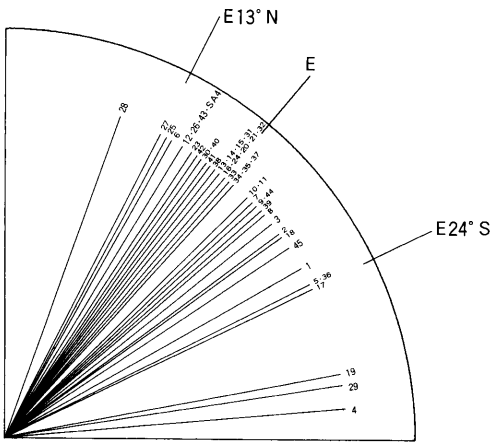
興味深いのは、Ⅵ区で検出された宇気比神社跡と溝ＳＤ20～23・柱列ＳＡ４の関係である。ＳＡ４の南端が神社跡のほぼ東側に位置していることから、神社の垣のようなものであり、その南端が神社の入口であったことが推定される。宇気比神社については、出土遺物もほとんど無く、その縁起や境内の構成・配置については不詳であるが、南側の空間は境内の広場であったと推測される。

いずれにしても、平安時代末期から室町時代にかけての大鼻遺跡の景観は、大鼻遺跡から北東に位置する糀屋垣内遺跡[4]や大藪遺跡[5]のように建物が密集するのではなく、１～２棟の建物が点在する散村であったものと推測される。　（岸田早苗）

〔註〕
① 岸田早苗「Ｂ　墨書山茶椀」（『山城遺跡・北瀬古遺跡』三重県埋蔵文化財センター、1994年）の75・76頁 。
② 浅尾悟「土坑を伴う中世掘立柱建物について」（『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ』、三重県埋蔵文化財センター、1990年）。
③ 山田猛ほか『北堀池遺跡発掘調査報告第２分冊』（三重県埋蔵文化財センター、1992年）。
④ 亀山隆『糀屋垣内遺跡』（三重県埋蔵文化財センター・亀山市教育委員会、1994年）。
⑤ 平子弘・浅尾悟・近藤健「大藪遺跡」（『一般国道１号亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅴ』、三重県埋蔵文化財センター、1990年）。

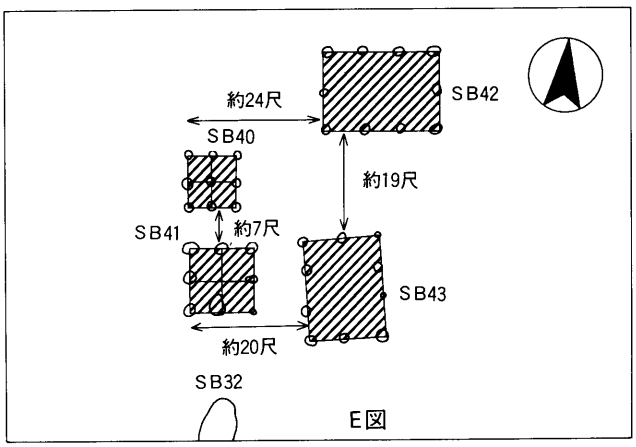






第70表　掘立柱建物・柱列の方向

（南北棟は、東西面を測る）



第133図　建物小群位置関係図（1：200）

（A図：SB10・SB11、B図：SB13・SB14、C図：SB25・26・27、D図：SB31・32、SB33・34、E図：SB40・41・42・43）

5　まとめ

大鼻（おおばな）遺跡は、三重県亀山市太岡寺町字大鼻ほかに所在する。当遺跡は、伊勢湾に東流する鈴鹿川中流域にあたり、北岸の台地南縁に立地する。調査は、一般国道１号亀山バイパス建設事業に先立って、東西640ｍ、幅員平均43ｍ、調査合計面積27,500㎡を、三重県教育委員会が昭和60年度から平成２年度までに５次に分けて実施した。

調査の結果、縄文時代早期初頭頃の竪穴住居群と「大鼻式」と型式設定した押型文土器をはじめ、弥生時代中期の方形周溝墓３群11基、古墳時代から奈良時代の竪穴住居98棟、平安時代後期から室町時代頃の掘立柱建物45棟等々を検出した。

縄文時代　調査区西部の一画に集中して、早期初頭頃の竪穴住居８棟と焼土坑16基を検出した。竪穴住居は径４ｍ程の略円形であり、やや前傾する壁とわずかに舟底状を呈する床面を持つ。壁際には垂木穴が巡るものの、柱穴や屋内炉等はない。焼土坑は、その大部分が煙道付炉穴と呼ばれるものと推定されるが削平が著しく、全容の確認には至らなかった。

出土遺物には、草創期末の表裏縄文土器と推定した縄文施文土器と、早期初頭の押型文土器や土偶、石器がある。押型文土器は、当大鼻遺跡と坂倉遺跡の出土例を基準資料として型式設定した「大鼻式」であり、縄文と押型文を併用する。押型文様は、枝回転文を圧倒的多数として一部に市松文や格子文も用いられるが、山形文やネガティブな楕円文等は見られない。

土偶は１点出土した。早期初頭の大鼻式に伴う可能性が高く、さもなければ草創期末に位置付けられる。いずれにしても、現在確認されている最古の土偶である。

石器には、早期初頭頃の尖頭器や石鏃、スクレーパー、突錐、楔形石器、敲石、凹石等がある。このほかに、調査区の各所から各期の石鏃が検出され、耳栓や後・晩期の土器片も出土した。

弥生時代　弥生時代の大鼻遺跡は、居住域が調査区外の北方に推定され、方形周溝墓も埋葬主体が全て削平されていたため、集落の構成を本格的に検討するには至らなかった。

しかし、中期後葉を中心とする３群計11基の方形周溝墓を検出できた。これらは「半辺陸橋式」と呼んだように、共通する特徴を備えていることが明らかにされた。これは、後続する方形周溝墓の墳丘型式の発展序列と整合するものである。今後は、他の事例も同様な観点から検討してゆく必要があろう。

また、これらの方形周溝墓は、ほぼ世代毎に造営されたらしい。さらにこれらと同時期に、やや離れて箱式木棺墓も推定された。このような埋葬遺構の差異はどのような社会構成を反映しているのか、これも又今後の課題である。

古墳時代　集落のほぼ全容が明らかにでき、竪穴住居が66棟検出された。集落の確実な形成時期は５世紀末であり、６世紀中葉に最盛期を迎え、６世紀後半には衰退していく。

集落は、各期を通じて約130ｍの距離を保って東西に並んだ３単位集団が認められる。したがって、園宅地の墨世的な占有、すなわち私有が実現していたものと推定される。各単位集団は、内部で竪穴住居が偏在する傾向はあるが、各時期毎に内部での変動が見られる。これにより、建物の敷地や作業場的な広場、耕地等の占地は、いまだ固定的ではなかったと考えられる。

なお、66棟全ての竪穴住居の埋土を篩掛けした結果、約７割の竪穴住居で玉類が確認された。その内訳は、滑石製臼玉 398点を中心に、ガラス小玉や滑石製管玉、土製の臼玉や丸玉・ナツメ玉がある。このほかに、子持勾玉も１点出土している。このように、古墳時代後期の集落から玉類が普遍的に出土することは、他の遺跡の調査でも確認されつつあり、後期群集墳の副葬品との関係等から注目に値する。

飛鳥・奈良時代　竪穴住居は、７世紀初頭と後半に各２棟、８世紀に17棟が推定され、７世紀中頃にしばらく断絶があったらしい。７世紀後半から８世紀の竪穴住居は東西２群に大別され、古墳時代とは様相が異なっていた。両群とも、竪穴住居が散在する傾向が強く、竪穴住居の規模や出土遺物は比較的均

質である。なお、当該期の掘立柱建物は認められておらず、やや後進的な集落かと思われる。

また、竪穴住居の埋土を篩掛けした結果、17棟中9棟から滑石製臼玉が出土した。当該期の竪穴住居の埋土を篩掛けした事例はまだ少ないこともあり、竪穴住居の埋土に前代の玉類が混入した可能性も考慮しておく必要がある。しかし、出土した点数は必ずしも無視できるものではない。もし、7・8世紀にも古墳時代以来の玉類が残存するなら、そしてこの玉類が祭祀に関わるものならば、律令的な支配体制の一環としての斎串や土馬等という新たな祭祀文化の展開期にも、一般集落層では伝統的な祭祀が残っていたとも考えられ、興味深い。

平安～室町時代　平安時代後期以降の集落であり、掘立柱建物45棟、柱列4列、井戸6基、墓壙8基、土坑71基、溝33条等を検出した。このほかにも建物としてまとまらなかった柱穴が多数あったが、全体的に遺構密度はあまり高くなかった。東西に広い台地の縁辺に、掘立柱建物による単位集団が散在していたようである。そして、溝等がこれらの屋地を区画していたようである。特に、南北の溝は60m間隔に並ぶ傾向が認められた。一方、井戸は単位集団の数程はなく、より大きな所有単位が想定される。

なお、椀や皿に墨書された例がある。これらのほとんどは、1文字か単一の記号である。このような事例は当該地方の中世集落には一般的であり、他の遺跡でも同一遺構から出土した土器に同じ墨書が施された例がある。これらは、銘々器に所有者を判別するために書かれた、一種の略押もしくは家紋かと推定されている。このことから、宮座のような集団での飲食が想定され、中世村落社会の動きの一端が垣間見えるようである。　（山田　猛）

付論Ⅰ

大鼻式土器の熱ルミネッセンス年代

日本文化財科学会員
元近畿大学教授　太田正臣

1．はじめに

1986年以来、三重県教育委員会の調査してきた大鼻遺跡から出土した縄文早期土器の年代測定については「一般国道1号線亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ」（1987）に予講を発表したが、その後の測定を加えて、現在まで、得られた結果を詳述する。

2．測定方法と測定過程

測定にはQuartz-inclusion techniqueをもちいる。Fleming（1970）が開始したこの方法は、土器に包含されている石英粒子を使用するものであり、石英粒子法といわれてきたものであるが、「含有石英法」と名づけたい。胎土の inclusionのなかで、サイズ 0.1㎜くらいの石英だけを選びだして測定するこの方法で、はじめて他の chronologyと無関係に絶対年代が求められ、つづいて1970年から改良されてきたものである。Fleming（1979）、市川(1984)、Aitken（1985）等の解説がある。原則的にそれらにしたがって年代を求めてきたが、計算を速やかに行うためコンピューターを使用している。

その理由は、従来の分析・計算によるものと、得られた結果が誤差の範囲内で一致することが確認できたからである。

長い間地下に埋蔵された土器は、毎年一定の放射線にさらされてきたとすれば、その土器が吸収した考古学的線量は、1年間あたりの線量、即ち年間線量率に年代を掛けたものになろう。このことから、年代の評価は、考古学的線量を年間線量率で割ってだせることがわかる。

含有石英法では、試料の石英粒子をフッ化水素でエッチングすることにより、アルファ線の試料への寄与を無視できる利点がある Fleming（1979）。さらに、土器の表面1－2㎜をはぎとれば、土器の外からのベータ線の寄与も無視できるようになる。そこで、年間線量率を求めるには、土器内のベータ線と内外からのガンマ線（宇宙線を含む）の測定だけで済ませることができる。

試料の作成方法は、方々で述べてきたとおりであるが、表1に示すような比較的簡単な過程をくりかえすため、かなりの時間を必要とする。

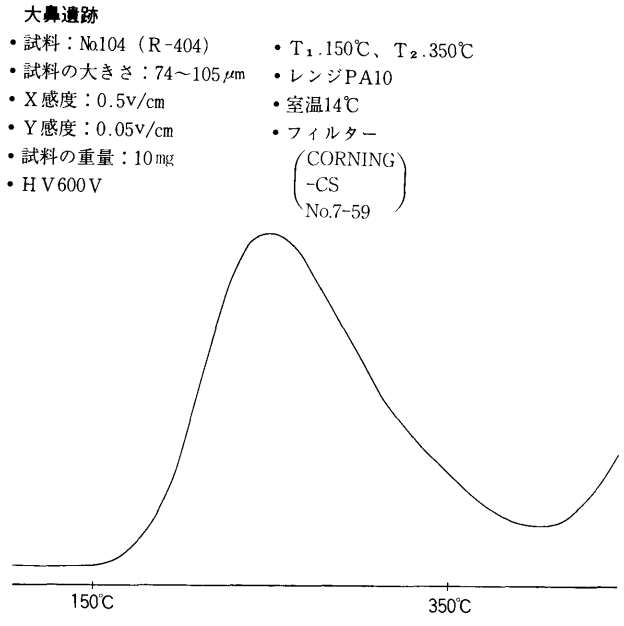
注意してきたことを列挙すると、

1．万力で、粉末化する時、顎の間に土器をはさみ結晶を砕かないようにゆっくり細かくくだく。

2．試料の作成過程は、すべて赤い光の下で行う。これは日光による Bleachingをさけるためである。

3．メッシュ分離で、不要になった土器の部分も、あとでベータ線測定に使うまで保存する。

作成した石英試料のエッチング済みのものを、10㎎ずつに分割し、2・3個はそのままのもの



第1図　熱発光曲線大鼻式土器

母体試料の表面削除
↓
試料の粉末化
↓
メッシュ分離
↓
純水洗浄
↓
ＨＣＩ洗浄
↓
ＮａＯＨ洗浄
↓
純水洗浄
↓
試料乾燥
↓
磁気分離
↓
ＨＦエッチング
↓
純水洗浄
↓
試料乾燥
↓
試　料

第１表　試料製作の過程図

(natural)、残りは、縄文早期土器の場合、例えば、10、20・・・グレイ（Gy）の^{60}Coガンマ線を照射したものの glow curve（熱発光曲線）をかかせる。照射量は大体予想される土器の被曝量とおなじ桁であることが望ましい。誤差を減らすためには測定点が多いほどよい。即ち、試料がある程度の大きさ・厚さの破片であることが必要である。

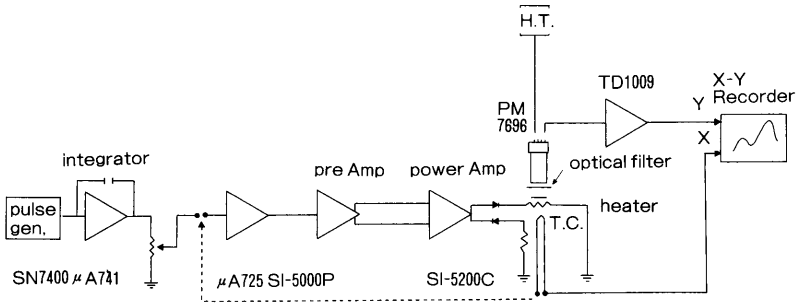
試料を10mgヒータープレートの上にのせ、毎秒20度の加熱速度で室温から500℃まで速やかに温度上昇させて熱発光させる。この蛍光をフィルター（CORNING CS NO7-59）を通して、光電子増倍管にみちびき、光電流に変換・増幅して、Ｘ－Ｙレコーダーに記録させる。Ｘ－Ｙレコーダーは縦軸でＴＬの強度、横軸で試料の温度を記録する。これが熱発光曲線である。光電子増倍管は浜松Ｒ269を用いている。

この熱ルミネッセンス記録のためのブロック・ダイヤグラムを図に示す。〔第２図(2)〕

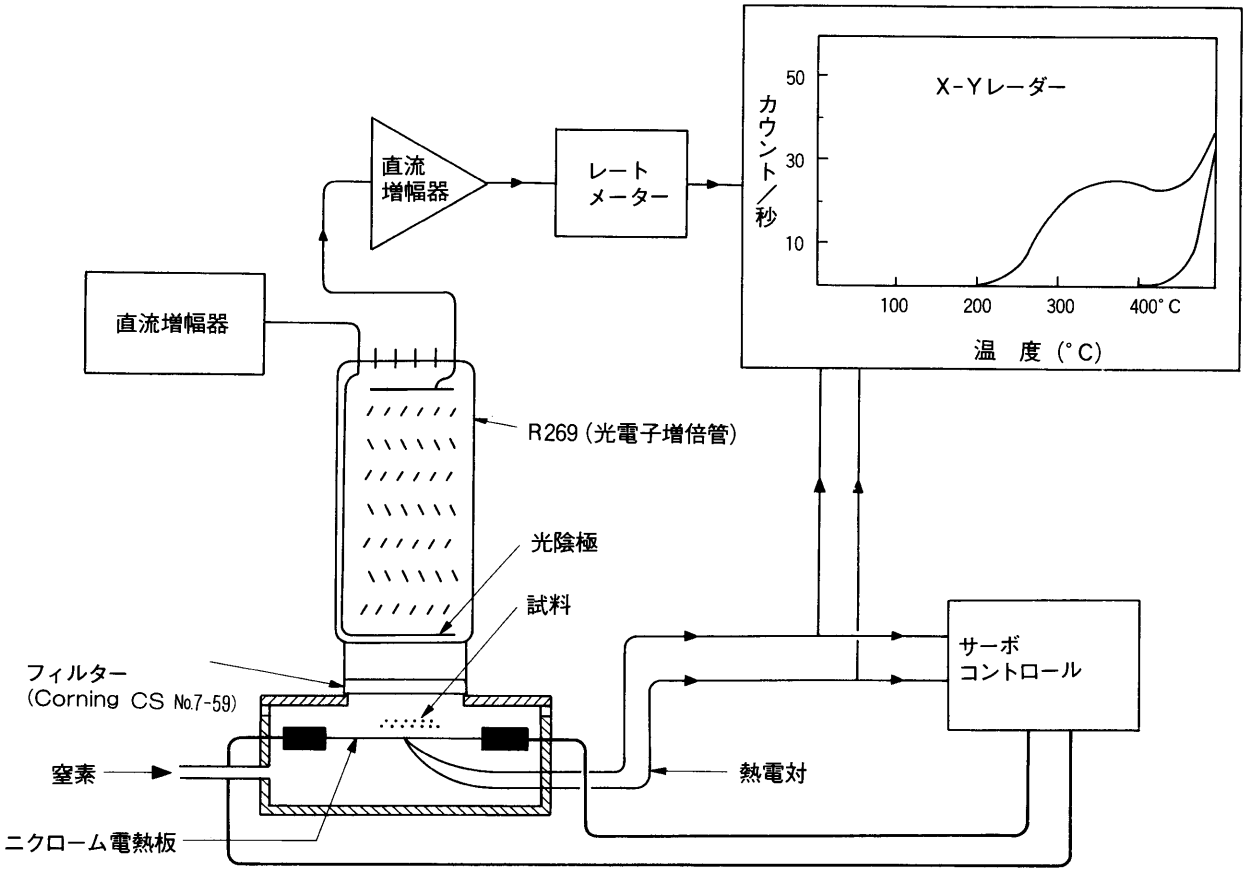
また、コンピューター制御の設備もだんだん一般的になり、多くの研究グループがそれぞれ自身の電算機オペレーティング・システムを開発している。マイコンがたいへん多く利用されるようになった。

わたしの実験室では、グロー曲線から結果を得る分析過程を、コンピューターにやらせるようにしている。

これらの熱発光曲線をもとにして、同一試料のプラトーテストを行う。得られたプラトー部分が、ＴＬエネルギーの考古学的時間にわたる貯蔵の安定さを示す部分と考えられるので、その部分の光量即ちＴＬ量を求める。このＴＬ量は積分によって求められる面積で、第３図の例では300～320度の範囲の値である。この値をＸ軸に線量をとったグラフのＹ軸



第２図　温度コントロール回路と光検出部（1）



第2図　温度コントロール回路と光検出部（2）

にプロットすると、測定がうまくなされた場合には、naturalと10、20・・・Gy照射のＴＬ量は当然一直線上にのり、最小二乗法を用いてかいた直線のＸ軸の切片の値から等価線量が求められる。また誤差もだすことができる。

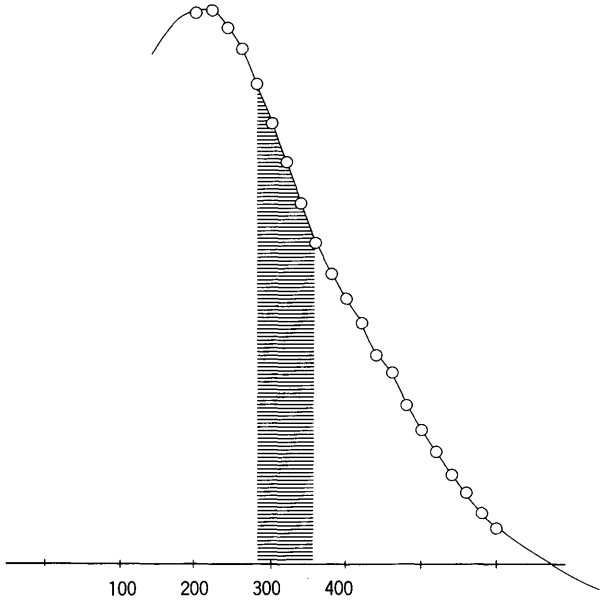
つぎに、再び、10、20・・・Gyの放射線をあてて、ＴＬを測定し一回目と同じように直線をえがかせると、この直線が、原点を通らないときがある。このことをスーパーリニアリティ（supralinearity）という。このズレを第一次（1st）の値に補正する必要がある。（第4図）

前に述べたように、土器の中の石英粒子にあたる放射線は、土器の胎土からくるベータ線と周囲の土からくるガンマ線と宇宙線である。これらの放射線が1年間当りいくら石英粒子にあたるかを測定するのが年間線量の測定である。

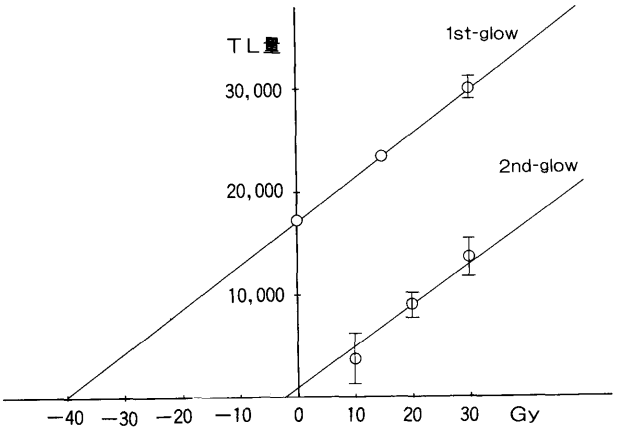
年間線量のガンマ線とベータ線の評価には高感度の蛍光体を使用する。ＴＬＤ（熱ルミネッセンス線量計）といわれるもので、いろいろ市販されているが、われわれの測定では $CaSO_4$：Tmをつかっている。

ガンマ線量の測定は、長さ50mm、内径8mm、壁の厚さ1mmほどの銅のパイプのなかにＴＬＤをいれ、このパイプを土器が埋まっていた包含層中に、周りの土が30cm以上あるところに、打ち込んでおく。土の含水量による影響を考慮し、季節的変動を平均するため1年間埋め込まなければならない。1年後に取り出したＴＬＤの熱発光量を測定し、予め作成した校正曲線と比較して線量を決める。校正曲線はＴＬＤに^{60}Coガンマ線を、線量1・2・3ミリグレイ（mGy）あて、原点とそれらの点の測定に基づき作成したスプライン曲線である。（第5図）

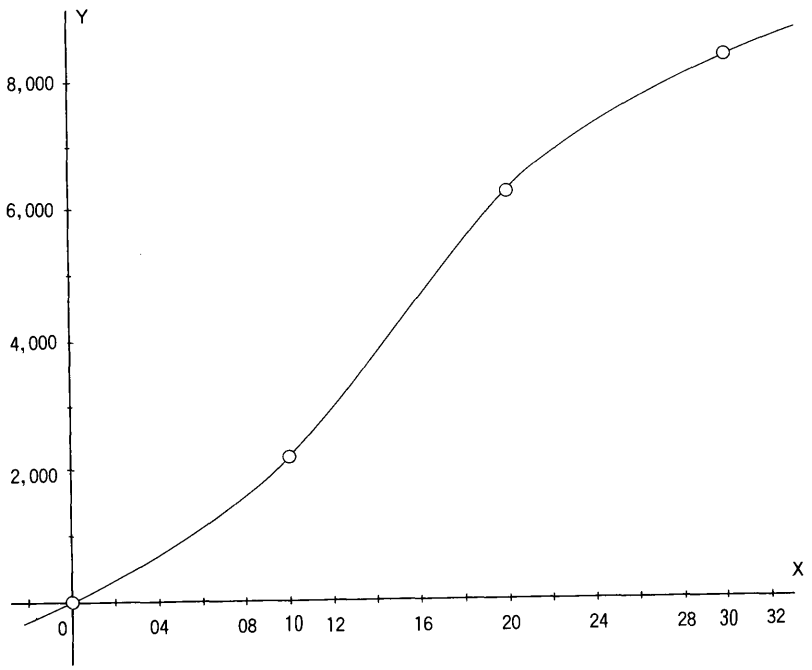
ベータ線量の測定は、アルファ線を遮断するためＴＬＤを薄いポリエチレンでつつみ、試料作成の時残った粉末中にいれ、ガンマ線や宇宙線を遮断できる鉛のブロック中に、20日間くらい放置する。取り出したＴＬＤをガンマ線同様に測定した値を年間値に換算する。



第3図　コンピューターの画いた熱発光曲線



第4図　スーパーリニアリティー



第5図　年間線量用校正曲線（プラトー180℃−230℃）

いずれの場合でも、減衰率はYamashita et aI.（1971）のデータを使用し補正する。

これらの年間線量の測定は有効数字2桁の測定がやっとである。

3.測定結果と考察

試料（№106）の1例について詳しく述べよう。この土器片の質量は10.66gであった。表面を削って、残りの10.01gを処理し、エッチングずみの試料のTLを測定した。

1st glow（一次発光）でnaturalが1つ、ガンマ線 15Gyを照射した1つ、30Gy照射したものを2つ。2nd glow（二次発光）では、10、20、30 Gyガンマ線を照射したものの測定を二回ずつ行った。そして、その各々の平均と誤差をプロットしたのが第4図である。

これらの値から、最小二乗法で求めた横軸との切片の値は、1st glowでは40.1Gy、2nd glowでは−2.3Gyであった。プラトー領域は290°C−330°Cとして求めている。この結果、蓄積線量は37.8±10.2 Gyとなる。

年間線量の測定は、ベータ、ガンマ両線にわけて行ない年間線量率は合計して出した。

(1) ベータ線の年間線量率

蓄積線量の測定に使用しなかった直径75～104 μm以外の土器片粒子の中にポリエチレン薄膜で包んだＴＬＤを入れ、１つを10日間、２つを20日間放置した後取り出して、ＴＬ測量装置でＴＬ量を測定し、これを一年間分に換算し、ベータ線の年間線量率を求めると2.4±0.5mGy／year（ミリグレイ／年）となった。

(2) ガンマ線の年間線量率

銅製のパイプの中にＴＬＤを入れ、土器が埋まっていた付近の土中に埋めて、１つを342日間、１つを425日間放置した後、ＴＬ量測定装置でＴＬ量を測定し、これを一年間分に換算し、ガンマ線の年間線量率を求めると、2.1±0.1mGy／yearとなった。ところが、ＴＬＤは長い期間放置されるとfadingを起こす。これを考慮するとガンマ線の寄与は95%であったことになる。そのための補正を行なうと、2.2±0.1mGy／yearとなり、

$$\text{年代} = \frac{\text{蓄積線量}}{\text{年間線量率}}$$

$$= \frac{37.8 \pm 10.2\ (\text{Gy})}{(4.6 \pm 0.4) \times 10^{-3}\ (\text{Gy/year})}$$

$$= 8100 \pm 2300\ (\text{年})\ \text{B.P.}$$

これより、大鼻遺跡より発掘された、№106の土器片のＴＬ年代は8100±2300B.Pとなる。（註）

ところで、大鼻式土器の年代測定について、測定進行中における試料の質量損失が著しく、ある程度の補正（換算）を加えている。

この質量欠損の原因としては、ヒータボックスに試料を入れ窒素を流した際吹き飛んだものか、あるいは試料質量の測定中に欠けたものかと思われる。これらの原因を防止するため、もしくは結果への影響をなくすためには、試料を多めに作っておくなどして常に分割した量を等しくすべきであったと考える。

蓄積線量は1986、1987年の２回求められ太田（1990）はそれまでの値として、蓄積線量を平均して37.4±7.0Gy 年間被爆量（annual dose）は4.7±0.5mGyとし、年代（age）は8100±1900年とした。

その後1988年さらに焼土坑から集められた焼け土の蓄積線量が37.1±3.7Gyと求められた。

この結果は土器と誤差の範囲内でおなじ年代であることを示した。そして３回の測定は一致して大鼻式土器が大川式土器（7600±700年）（註）より古いという考えにくみする、とした。

（註）B.P.は現在（1950年）より以前の意味。

謝　辞

縄文土器の測定を始める契機をつくってもらい、種々の点にわたって御意見をたまわり御教示くださった帝塚山考古学研究所の堅田　直所長や縄文文化研究会の土肥　孝氏、泉　拓良氏、松田真一氏、山田　猛氏、竹下　賢氏その他御名前は列記しませんがメンバーの方々に深甚の感謝をいたします。

また、三重県教育委員会のメンバーの方々には、現地でいろいろ御世話になりました。厚くお礼申しあげます。

補註

(1) 太田（1990）により、大川式土器の年代は7600±700年（B.P.）神宮式土器は5500±900年（B.P.）と熱ルミネッセンス年代が出せたので、編年は大鼻式→大川式→神宮寺式とすべきで、統計があがればこの考えはますます、確認できると信じている。

(2) 年代の単純平均をとれば、大鼻式土器は8200±2300年B.P.、9300±2900年B.P.から、平均8800±1800年B. P. となる。

文　献

Aitken,M.J(1985) Thermoluminescence Dating. Academic Press

Fleming,S.J(1970) Thermoluminescent dating, refinement of the quartz inculusion method. Archaeometry 12:133

Fleming(1979) Thermoluminescence Techniques in Archaeology. Clarendon Press,Oxford.

三重県教育委員会（1987）大鼻（二-三次）・山城（三次）遺跡：一般国道１号線亀山バイパス埋蔵文化財発掘調査概要Ⅱ

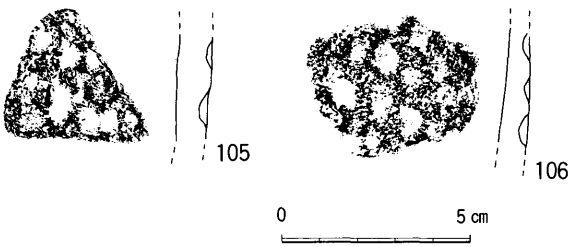
太田正臣（1988）ＴＬからみた縄文早期の年代「縄文早期を考える－押型文文化の諸問題－」帝塚山考

古学研究所331-343
太田正臣（1990）近畿地方の縄文土器の熱ルミネッセンス年代.「考古学と自然科学第22号」日本文化財科学会誌85-93頁
山田　猛（1988）　押型文土器群の型式学的検討「三重県史研究」4 45-74
矢野健一（1984）　近畿地方における押型文土器前半期の編年案「縄文文化研究会広島大会資料」
Yamashita,T.Nada.Onishi,H and Kitamura,S (1971)
Calcium sulfate activated by thulium or dysprosium for thermoluminescence dosimetry. Health Phys.21,295-300

試料の説明

右に掲載した試料（105・106）は、本文で説明したとおり、大鼻式に属する押型文土器である。やや磨耗してはいるが、いわゆる「枝回転文」であり、a類とした体部片である。茶褐色を呈して焼成は良好であり、石英等の砂粒を含んでいる。これらの特徴は、大鼻式の一般的な例と変わるところはない。

（山田　猛）



第6図　測定対象土器（1：2）

付論Ⅱ

大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定

富山大学理学部地球科学教室
広岡公夫、田中彰子

はじめに

地球には磁場が存在し、地球上に住む我々は四六時中その磁場の影響を受けている。磁石の針が北を指すのも、その磁場が磁針に力を加えて、磁針のN極を北に向くように廻すからであり、電離層ができてラジオや通信の電波が遠くまで届くのもこの磁場のおかげである。この磁場を地球磁場（地磁気）という。地球磁場は遠い地質時代から存在していたことが分かっているが、常に一定の定常状態ではなかったことも明らかになっている。

地球磁場の分布は、地球の中心に小さいが非常に強い仮想の棒磁石があるとすると、うまく説明できる。この仮想の棒磁石を地磁気双極子という。実際には、地球の中心部は非常な高温なので、如何なる物質も永久磁石の状態では有り得ないことが分かっている。地球の核内を、金属の流体が流れているために発電し、その電流が地球磁場を作ると考えられている。発電機の原理と同じなので、ダイナモ理論と呼ばれているが、地球内部の状態が余りよく分かっていないので、この理論によって、詳しい地球磁場の分布や変動を予測するまでには至っていない。

地球磁場の方向および強度は、地球上の位置によって異なる。赤道付近では大略北向きの水平方向であるが、緯度が高くなり極に近づくにつれて伏角が大きくなり鉛直方向に近づく。また、地球磁場強度は、極付近では、赤道地域の2倍になる。その上、地磁気双極子の磁軸は地球の自転軸と斜交しているので、地理学上の極と磁極の位置は一致しない。このように地磁気は、場所ごとにその方向と強さを異にしている。

地磁気は、更に、ゆっくりとではあるが時間的にも変化している。日本では明治16（1883年）から東京で継続的な地磁気観測が始まり、それ以降の地磁気の方向についての観測記録があるのみで、それ以前の時代については偏角に関する観測記録が1613年以来に散見されるだけで、詳しい変動の様子は観測記録からは分からない。観測記録によると、1883年の東京の偏角は西偏4° 03’（Imamiti、1956）であったのが、現在は西偏6° 45’程度であるから、百年で2.7°ほど変化したことになる。このようなゆっくりした変化を地磁気永年変化という。

熱残留磁化

通常の土の中には、磁鉄鉱、赤鉄鉱、チタン磁鉄鉱など、鉄あるいは、少量のチタンを含む鉄の酸化物が1～3％程度含まれている。これらは、俗に“砂鉄”と呼ばれているもので、磁石になることができる。このような磁石になることができる物質を磁性体といい、磁石になることができる性質を磁性という。磁性体は全て加熱され高温になると、その磁性体の種類に固有の温度で磁性を失う。この温度はキューリー点と呼ばれ、磁鉄鉱（Fe_3O_4）では578℃、赤鉄鉱（Fe_2O_3）では670℃である。チタン磁鉄鉱（$(Fe,Ti)_3O_4$）の場合は、チタンの含有量によって異なり、最高はチタン含有量が0の磁鉄鉱のキューリー点578℃で、チタン含有量が多くなるほどキューリー点は下がる。土に含まれているのは550℃程度のものが多い。磁性鉱物をキューリー点より高い温度（磁性を失った状態）から冷やしていくと、キューリー点の温度を通過した瞬間から、再び磁性を取り戻し、そのときに作用している磁場に平行な方向の磁化を持つ磁石になる。このようにして獲得される磁化を熱残留磁化という。再加熱されるようなことがなければ、この残留磁化の多くは非常に安定で、一旦磁化すると何百万年経っても変わらない磁化方向と強度を保ち続ける。

炉跡や窯跡などのような、焼かれて熱残留磁化を獲得した時点以降に動かされていない焼土遺構では、残留磁化の方向は最後に焼かれたときの地磁気の方向の記録となっている。したがって、このような焼土の残留磁化を測れば、観測記録のない遠い過去の

地磁気の方向をも知ることができるのである。このような考古学的な遺構や遺物の残留磁化を測定して、歴史・考古学が扱う時代の地磁気の変動を明らかにする研究を考古地磁気学といい、考古地磁気学的測定によって得られた地磁気永年変化を考古地磁気永年変化という。日本では、西南日本各地の遺跡焼土の測定によって、過去2000年間にわたる相当詳しい考古地磁気永年変化曲線が作成されており（Hirooka、1971；広岡、1977）、それを用いて考古地磁気学的に年代の推定も行われているが、それ以前の時代の地磁気永年変化がどのようなものであったかは、未だ詳しくは分かっていない。

縄文時代の考古地磁気研究

縄文時代の考古地磁気データはあることはあるのだが、断片的で何千年という長い期間の全体をカバーするにはデータ数が少なすぎて、詳しい永年変化を明らかにするまでには至っていない。縄文中期以降の時代のデータは比較的多い（Watanabe、1959；広岡・井口、1989；広岡他、1992）が、縄文草創期、早期については非常に少ない。わずかに、関東地方で田戸式や茅山式についての測定結果（Watanabe、1959）、長崎県の泉福寺遺跡の隆線文土器が出土した層準のデータ（Hirooka and Tokieda、1979）があるのみであって、年代の推定の際に照合比較する考古地磁気データはないに等しい。しかし、最近、堆積物などの古地磁気測定のデータも合わせて得られた完新世の永年変化の報告（広岡・酒井、1984；Hyodo et al.、1993）があるので、それらを参考にすることはできる。

試料の採取と測定結果

大鼻遺跡の２－Ａ区東端の竪穴住居11の周りに位置する11基の焼土坑（ＳＦ）で考古地磁気サンプリングを行なった。焼土坑９から13個（試料番号JM 71～83）、焼土坑８から10個（JM 91～100）、焼土坑３から８個（JM 101～108）、焼土坑４から９個（JM 111～119）、焼土坑２から12個（JM 121～132）、焼土坑６から13個（JM 141～153）、焼土坑10から11個（JM 51～61）、焼土坑９から12個（JM 161～172）、焼土坑12から13個（JM 21～33）、焼土坑14から14個（JM 1～14）、焼土坑１から10個（JM 41～50）の総計125個の試料を得た。

残留磁化の測定には夏原技研製リングコア・スピナー磁力計（SSM-85型）を使用した。

試料がかつて焼かれた時に自然に磁化し、そのまま現在までもっている残留磁化を自然残留磁化（Natural Remanent Magnetization、略して、ＮＲＭ）という。大鼻遺跡の試料のＮＲＭを測定した結果、結構強い磁化強度を持っていたが、磁化方向のまとまりはあまり良くなかったので、まず手はじめに焼土坑12について、25、50、75、100 Oe の４段階で交流消磁を行った。100 Oeでは磁化のばらつきが大きくなったので、焼土坑11では、25、50、75 Oeの３段階で消磁した。これらの交流消磁実験で、50 Oeまたは 75 Oeでまとまりがよくなり、25 Oeでは磁化方向のまとまり具合にあまり改善が見られなかったので、残りの焼土坑については、50 Oeと 75 Oe の２段階で消磁した。交流消磁実験には夏原技研製の交流消磁装置（DEM-8601C型）を用いた。それぞれの消磁段階の残留磁化の測定結果は第１～36表に示されている。

これらの測定結果から、各焼土坑のそれぞれの消磁段階での平均磁化方向や平均磁化強度、磁化のばらつきの程度を表わすパラメータを、フィッシャーの統計法（Fisher、1956）を用いて計算した。同じ焼土坑の同じ消磁段階の場合でも、少数個の試料が大きく外れた磁化方向を示すときがある。これは、試料として採集した部分が、焼成後に動いたか、あるいは十分に温度が上がらなかったためである可能性が高く、正しい地磁気の記録とはいえないので、統計計算の際には除外した。第１～36表で＊印がついているのが、そのような除外された試料である。統計計算の結果は第37表のようになる。同表には統計計算に用いた試料の個数（Ｎ）、平均偏角（Ｄ）、平均伏角（Ｉ）、フィッシャーの信頼角（α_{95}）および精度係数（Ｋ）、平均磁化強度が示されている。磁化方向のまとまりがいいほど、α_{95}の値は小さく、Ｋは大きくなる。各消磁段階の結果を比べて、α_{95}最小になり、Ｋが最大になる段階を選んでそのデータを考古地磁気データとして採用した。焼土坑７は 50 Oeの段階が最もまとまりがよく、それ以外の焼土坑では75 Oeの段階でまとまりが良くなることが判明した。

考古地磁気学的考察

第37表で考古地磁気データとして採用した結果を拡大シュミット・ネットに投影したものが第1図である。同図からわかるように、伏角が50°～53°と少し浅いグループと55°以上の深いグループの2つに分かれるように見える。更に詳しくみると、伏角が浅く、偏角が西偏4°～7°の焼土坑9、2、6、14のグループ（Aグループと呼ぶことにする）と、伏角が56°～57°で、偏角が真北に近い（東偏1°～西偏2°）焼土坑3、4、12、13のグループ（Bグループ）に大きく分けられ、焼土坑8、9、10（Cグループ）は両グループをつなぐ中間の磁化方向を示している。これらA、B、Cの3グループの磁化方向の差異は、少し時代が異なることを示しているのではなかろうか。順番を付けると、A→C→B、あるいは、B→C→A、となるのではないか。ただ、焼土坑10は、Bグループの焼土坑3、4、12と同様にα_{95}が大きいので、誤差の範囲を考えればBグループに入れるべきものかもしれない。

今回の大鼻遺跡焼土坑の磁化方向、即ち、偏角が東偏2°～西偏10°、伏角が55°～59°は非常に平凡な方向で、地磁気が同じ様な方向になったのは、過去に何度もあり、詳しい永年変化曲線が出来ていないこともあって、年代を特定することは困難である。縄文時代の年代推定を可能にするためには、一層のデータの蓄積に努めねばならないが、今回、その一部となる貴重なデータを得られたことは、今後の研究に大いに寄与するものと思われる。

引用文献

Fisher, R. A. (1953) Dispersion on a sphere, Proc. Roy. Soc. London, A, vol.21 7, 295-305.

Hirooka, K. (1971) Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in southwest Japan, Mem. Fac. Sci., Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral., vol.38, 167-207.

広岡公夫（1977）考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向、第四紀研究、vol.15, 200-203.

Hirooka, K. and K. Tokieda (1979) Archaeomagnetic results of Sempukuji Remains, the cave site, and the Holocene paleoscular variation in Japan, Rock Magnetism and Paleogeophysics, vol.6, 18-24.

広岡公夫、酒井英男（1984）先史時代の地磁気永年変化、「古文化財の自然科学的研究」、古文化財編集委員会編、同朋舎出版、812-816.

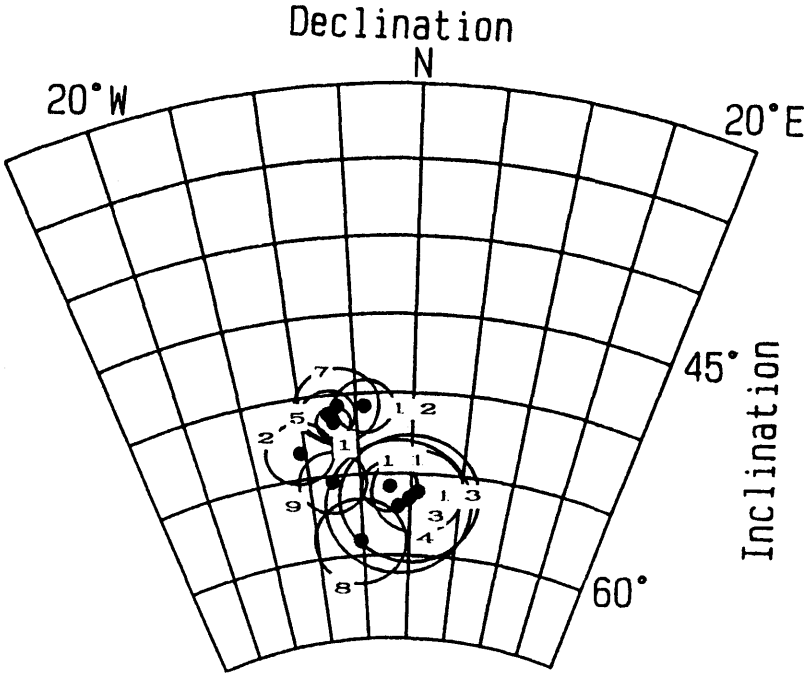
広岡公夫、井口滋存（1989）米泉遺跡の考古地磁気学的測定、「金沢市米泉遺跡」石川県立埋蔵文化財センター、313-318.

広岡公夫、小竹信成、森定尚（1992）境A遺跡の考古地磁気測定、「境A遺跡総括編」、北陸自動車道遺跡調査報告　朝日町編7、富山県埋蔵文化財センター、223-232.

Hyodo, M., C. Itota and K. Yasukawa (1993) Geomagnetic secular variation reconstructed from magnetizations of wide-diameter cores of Holocene sediments in Japan, J. Geomag. Geoelectr., vol.45, 669-696.

Imamiti, S. (1956) Secular variation of the magnetic declination, Mem. Kakioka Magnetic Observatory, vol.7, 49-55

Watanabe, N. (1959) The direction of remanent magnetization of baked earth and its apprecation to chronology for anthropology and archaeology in Japan : an introduction to geomagnetochronology, J. Fac. Sci., Univ. Tokyo, Sect. V, vol.2, 1-188.



図の説明

第1図　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定結果

1：焼土坑9、　2：焼土坑8、　3：焼土3、　4：焼土坑4、
5：焼土坑2、　7：焼土坑6、　8：焼土10、　9：焼土坑9、
11：焼土坑12、　12：焼土坑14、　13：焼土1、
Declnation：偏角、Inclination：伏角、

第1表　大鼻遺跡焼土坑9のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
*JM	71	2.7	60.3	3.96
	72	− 6.0	59.2	5.57
	73	− 7.6	61.9	4.76
	74	− 9.5	53.3	22.8
	75	− 5.5	55.5	14.5
	76	− 9.3	53.5	20.1
	77	− 6.8	54.1	24.6
*	78	3.3	57.5	5.44
	79	− 1.2	55.6	7.41
	80	−16.8	55.9	9.39
*	81	−18.4	50.7	16.3
	82	−15.8	53.6	14.3
	83	− 8.8	54.3	22.5

*：統計計算の際に除外したもの。

第2表　大鼻遺跡焼土坑9の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	71	− 4.4	53.2	2.40
	72	− 5.0	52.4	3.96
	73	− 5.6	54.4	3.06
	74	− 8.0	51.4	19.9
	75	− 6.2	53.7	11.9
	76	− 8.6	51.9	17.7
	77	− 7.3	52.8	22.2
*	78	0.9	53.3	3.53
	79	− 6.1	51.4	5.27
	80	−11.2	53.1	6.81
*	81	−13.6	48.7	14.6
	82	−11.5	51.2	12.7
	83	− 7.1	51.4	19.7

*：統計計算の際に除外したもの。

第3表　大鼻遺跡焼土坑9の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	71	− 4.2	51.6	1.53
	72	− 5.0	50.7	2.86
	73	− 6.4	53.3	2.37
	74	− 8.1	50.9	17.1
	75	− 7.4	53.1	9.89
	76	− 8.6	50.9	15.3
	77	− 6.2	51.9	19.6
*	78	0.5	52.5	2.44
	79	− 4.9	50.4	4.01
	80	−11.2	52.6	5.10
*	81	−13.2	49.6	12.7
	82	−10.6	51.6	11.1
	83	− 6.4	51.4	16.8

＊：統計計算の際に除外したもの。

第4表　大鼻遺跡焼土坑8のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	91	− 6.0	59.6	4.64
	92	− 8.0	61.7	2.13
	93	−18.4	59.0	3.90
	94	− 2.4	62.5	4.03
	95	−12.6	62.0	0.921
	96	3.0	63.7	4.71
	97	− 5.9	59.1	4.14
*	98	−28.8	60.5	1.72
	99	−14.0	62.5	1.93
	100	−11.7	56.3	5.55

＊：統計計算の際に除外したもの。

第5表　大鼻遺跡焼土坑8の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	91	−10.4	54.4	2.83
	92	− 9.7	55.4	1.26
	93	−13.0	52.0	2.52
	94	− 1.1	56.4	2.25
	95	−12.1	56.0	0.472
	96	− 2.2	53.6	2.88
	97	− 6.0	52.7	2.41
*	98	−18.7	54.1	0.899
	99	−14.9	56.1	1.35
	100	− 8.8	53.7	3.86

＊：統計計算の際に除外したもの。

第6表　大鼻遺跡焼土坑8の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	91	−10.9	53.4	1.89
	92	− 8.6	54.3	0.832
	93	−12.5	50.7	1.75
*	94	2.6	54.9	1.50
	95	−12.8	54.3	0.305
	96	− 2.9	51.8	1.91
	97	− 6.8	52.2	1.59
	98	−15.9	53.4	0.583
	99	−16.1	55.8	0.991
	100	− 8.7	53.7	2.71

＊：統計計算の際に除外したもの。

第7表　大鼻遺跡焼土坑3のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	101	5.1	59.2	0.460
	102	11.7	59.9	0.510
	103	− 8.8	60.6	2.73
	104	3.5	56.2	3.27
*	105	156.5	70.4	2.17
	106	27.7	65.1	0.780
	107	− 30.4	77.0	0.510
	108	− 20.6	70.2	1.20

＊：統計計算の際に除外したもの。

第8表　大鼻遺跡焼土坑3の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	101	1.0	54.4	0.226
	102	3.9	56.1	0.260
	103	− 5.1	57.9	1.50
	104	− 2.9	52.5	1.87
*	105	170.7	61.0	1.13
	106	5.1	56.9	0.405
	107	− 1.4	69.1	0.266
	108	− 6.5	64.7	0.673

＊：統計計算の際に除外したもの。

第9表　大鼻遺跡焼土坑3の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	101	1.5	53.6	0.150
	102	4.8	55.8	0.177
	103	− 5.8	57.5	0.958
	104	− 4.9	49.9	1.22
*	105	173.1	58.2	0.730
	106	0.5	53.9	0.255
	107	6.9	62.4	0.178
	108	− 2.3	61.9	0.460

*：統計計算の際に除外したもの。

第10表　大鼻遺跡焼土坑4のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
*JM	111	− 61.9	49.5	1.44
	112	− 27.4	64.3	0.662
	113	3.9	70.1	1.05
	114	− 2.4	67.8	0.825
	115	42.2	73.6	0.529
	116	− 14.7	74.3	1.69
	117	− 43.4	85.5	1.20
	118	− 2.7	65.2	4.68
	119	39.6	83.3	0.866

*：統計計算の際に除外したもの。

第11表　大鼻遺跡焼土坑4の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
*JM	111	−38.9	42.3	0.699
	112	− 9.6	56.5	0.352
	113	5.1	60.5	0.513
	114	− 2.8	57.7	0.424
	115	19.6	58.0	0.278
	116	− 3.6	61.1	0.953
	117	− 3.8	71.0	0.521
*	118	− 7.9	56.4	2.77
	119	13.5	68.1	0.396

*：統計計算の際に除外したもの。

第12表　大鼻遺跡焼土坑4の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
*JM	111	−34.0	34.4	0.454
	112	− 9.2	53.6	0.233
	113	5.0	57.7	0.308
	114	− 4.1	55.1	0.273
	115	5.6	49.7	0.169
	116	− 3.8	57.8	0.628
	117	− 2.4	64.6	0.309
	118	− 7.8	54.7	1.77
	119	8.2	62.0	0.245

*：統計計算の際に除外したもの。

第13表　大鼻遺跡焼土坑2のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	121	1.0	56.5	4.23
	122	−14.1	60.8	4.98
	123	−12.9	57.0	9.41
	124	− 9.6	56.1	6.94
*	125	19.2	46.7	1.74
	126	− 0.4	57.5	3.65
	127	− 5.4	51.4	27.1
	128	− 5.5	57.1	3.82
	12.9	4.1	58.9	3.32
	130	− 3.9	54.8	5.94
*	131	0.2	66.1	2.45
	132	− 4.6	59.2	4.86

*：統計計算の際に除外したもの。

第14表　大鼻遺跡焼土坑2の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	121	− 4.3	52.0	2.38
	122	−10.2	55.2	3.03
	123	−11.8	53.0	7.21
	124	− 5.0	52.7	4.88
*	125	24.0	27.5	1.01
	126	− 6.3	55.0	2.28
	127	− 5.6	49.6	23.4
*	128	− 6.5	51.6	2.39
	129	− 2.6	51.1	1.88
	130	− 7.9	50.1	4.15
*	131	− 3.6	59.8	1.20
	132	− 8.3	53.5	3.07

*：統計計算の際に除外したもの。

第15表　大鼻遺跡焼土坑２の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	121	− 4.1	51.1	1.51
	122	− 9.7	53.2	1.98
	123	−12.7	51.8	5.62
	124	− 7.7	52.6	3.63
*	125	29.6	12.8	0.769
	126	− 7.9	53.4	1.59
	127	− 5.1	48.9	19.3
	128	− 8.2	51.0	1.56
	129	− 4.9	47.9	1.23
	130	− 8.7	49.0	3.00
*	131	− 6.5	57.9	0.682
	132	− 7.3	52.6	2.03

＊：統計計算の際に除外したもの。

第16表　大鼻遺跡焼土坑６のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	141	0.9	57.6	11.3
	142	5.3	54.8	11.0
*	143	114.0	64.8	2.54
*	144	66.6	81.9	0.877
	145	−26.0	65.6	1.39
	146	2.1	52.9	6.36
	147	−17.6	65.6	2.58
*	148	34.2	70.8	1.25
	149	− 6.4	54.4	5.02
	150	− 3.2	60.8	3.92
*	151	27.7	82.1	1.37
	152	− 4.3	53.6	5.93
	153	−23.3	57.1	2.23

＊：統計計算の際に除外したもの。

第17表　大鼻遺跡焼土坑６の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角伏 (° E)	伏 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	141	− 2.3	52.8	9.41
	142	− 0.3	50.3	8.91
*	143	121.7	60.6	1.45
*	144	− 87.8	75.3	0.286
	145	− 15.1	51.7	0.595
	146	− 2.5	47.3	4.88
	147	− 7.2	53.5	1.69
*	148	8.4	56.3	0.585
	149	− 7.5	50.9	3.88
	150	− 6.5	48.4	2.90
*	151	9.3	61.2	0.606
	152	− 6.1	50.1	4.09
	153	− 13.4	50.7	1.24

＊：統計計算の際に除外したもの。

第18表　大鼻遺跡焼土坑６の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	141	− 3.6	51.7	7.63
	142	− 1.1	49.5	7.07
*	143	130.0	54.3	0.956
*	144	− 99.0	63.6	0.174
	145	− 13.2	43.4	0.376
	146	− 3.5	46.0	3.73
	147	− 6.0	49.3	1.22
	148	0.4	52.7	0.348
	149	− 7.2	50.4	3.13
	150	− 8.7	46.7	2.39
*	151	6.0	56.1	0.369
	152	− 5.7	49.2	2.98
	153	− 11.2	48.0	0.827

＊：統計計算の際に除外したもの。

第19表　大鼻遺跡焼土坑10のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
*JM	51	−77.8	81.2	1.55
	52	− 2.8	74.6	3.22
	53	− 3.6	79.3	2.21
	54	3.6	69.7	3.13
	55	11.5	79.5	0.536
*	56	− 5.9	55.6	12.4
	57	−21.5	70.8	1.80
	58	13.3	79.2	0.918
	59	−10.0	72.4	0.452
	60	1.6	81.3	0.886
	61	−14.6	75.5	1.20

＊：統計計算の際に除外したもの。

第20表　大鼻遺跡焼土坑10の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	51	− 5.5	64.8	0.752
	52	0.6	61.4	2.36
	53	− 3.6	57.1	1.35
	54	− 7.0	56.3	2.16
	55	−12.8	63.8	0.259
*	56	− 5.9	51.0	10.8
	57	−10.9	54.0	1.14
	58	− 1.3	63.4	0.517
	59	− 5.5	60.6	0.273
	60	− 3.0	64.3	0.424
	61	−15.3	64.4	0.701

＊：統計計算の際に除外したもの。

第21表　大鼻遺跡焼土坑10の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	51	− 0.9	60.2	0.472
	52	0.4	59.7	1.73
	53	− 5.6	53.7	0.946
	54	− 5.2	53.5	1.50
	55	−13.4	62.5	0.167
*	56	− 7.9	50.5	8.62
	57	−10.7	51.7	0.787
	58	− 5.1	60.3	0.333
	59	− 4.8	58.3	0.193
	60	− 1.9	61.8	0.263
	61	−12.4	61.1	0.478

＊：統計計算の際に除外したもの。

第22表　大鼻遺跡焼土坑 9 のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	161	− 4.9	61.9	0.825
	162	− 3.2	62.8	1.29
	163	−10.5	64.8	4.48
	164	− 4.1	65.5	1.35
	165	− 4.6	60.9	2.64
	166	− 4.1	65.5	2.17
	167	− 5.5	65.4	2.24
	168	− 6.1	69.7	0.636
	169	− 5.8	71.0	1.21
*	170	32.3	72.3	0.892
*	171	32.9	70.6	0.856
*	172	44.8	58.4	0.579

＊：統計計算の際に除外したもの。

第23表　大鼻遺跡焼土坑 9 の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角伏 (° E)	伏 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	161	− 7.5	56.9	0.420
	162	− 4.1	56.1	0.718
	163	− 9.2	58.7	3.37
	164	− 8.1	54.4	0.805
	165	− 9.1	54.0	1.71
	166	− 8.6	56.3	1.13
	167	− 7.8	57.5	1.23
	168	−13.0	61.9	0.307
	169	− 7.1	62.2	0.521
*	170	8.8	64.2	0.482
*	171	14.4	66.8	0.521
*	172	12.7	60.3	0.308

＊：統計計算の際に除外したもの。

第24表　大鼻遺跡焼土坑 9 の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	161	− 6.5	54.9	0.273
	162	− 3.1	53.1	0.510
	163	− 9.4	56.2	2.64
	164	− 6.3	52.1	0.541
	165	− 9.4	52.4	1.19
	166	− 7.2	54.7	0.713
	167	− 8.5	56.7	0.805
	168	− 9.9	59.9	0.199
	169	−10.6	58.3	0.311
*	170	5.5	60.2	0.323
*	171	14.1	66.9	0.382
*	172	10.5	58.9	0.215

＊：統計計算の際に除外したもの。

第25表　大鼻遺跡焼土坑12のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	21	−19.2	69.9	1.56
	22	16.9	69.4	1.91
	23	−23.3	71.1	2.11
	24	15.1	67.4	1.98
	25	5.8	69.6	2.22
	26	− 0.3	70.0	2.05
	27	3.4	71.0	2.98
*	28	10.6	81.6	1.88
	29	9.7	71.4	3.23
*	30	−19.1	59.0	3.61
	31	7.2	65.3	1.26
*	32	3.7	58.4	1.72
	33	−10.3	62.5	0.629

＊：統計計算の際に除外したもの。

第26表　大鼻遺跡焼土坑12の25 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	21	−14.4	64.8	1.33
	22	8.6	66.0	1.59
	23	−17.5	65.0	1.78
	24	7.1	66.2	1.54
	25	− 0.3	64.6	1.86
	26	− 1.2	64.1	1.80
	27	− 2.9	66.1	2.61
*	28	− 2.6	76.8	1.56
	29	3.9	66.5	2.79
*	30	−13.2	55.1	3.25
	31	4.6	63.6	1.11
*	32	4.3	56.0	1.43
	33	− 4.3	60.5	0.543

＊：統計計算の際に除外したもの。

第27表　大鼻遺跡焼土坑12の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	21	− 9.9	60.1	0.883
	22	5.3	55.8	1.04
	23	− 9.8	58.5	1.15
	24	− 1.2	60.7	0.903
	25	− 0.1	57.6	1.23
	26	0.7	57.8	1.27
	27	− 4.0	58.8	1.85
*	28	2.4	69.1	1.01
	29	2.7	58.1	1.96
*	30	− 9.9	52.5	2.40
	31	2.5	57.1	0.785
*	32	− 1.3	52.8	0.915
	33	− 7.7	57.5	0.374

＊：統計計算の際に除外したもの。

第28表　大鼻遺跡焼土坑12の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	21	− 4.5	56.9	0.579
	22	4.1	55.7	0.67
	23	− 8.7	54.9	0.748
	24	− 3.7	57.1	0.560
	25	− 0.2	56.5	0.838
	26	0.5	55.2	0.902
	27	− 5.2	56.5	1.28
*	28	0.6	65.7	0.671
	29	2.5	54.6	1.33
*	30	− 9.1	61.6	1.67
	31	1.1	54.6	0.526
*	32	− 2.1	51.9	0.587
	33	− 7.2	55.6	0.266

＊：統計計算の際に除外したもの。

第29表　大鼻遺跡焼土坑14のNRMの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	1	− 0.7	60.4	4.13
	2	− 0.7	56.9	20.3
	3	6.2	55.4	5.67
	4	4.3	57.5	4.06
	5	− 1.1	55.2	18.8
*	6	−12.1	48.7	19.2
	7	6.8	55.4	3.47
	8	2.8	57.3	4.36
*	9	9.7	70.5	2.53
	10	−11.0	61.6	12.7
*	11	− 7.4	50.8	40.3
	12	−14.7	57.7	8.71
	13	− 6.5	57.8	5.23
	14	− 6.2	54.7	29.7

＊：統計計算の際に除外したもの。

第30表　大鼻遺跡焼土坑14の25 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	1	− 4.1	58.9	3.80
	2	− 1.9	56.0	19.6
	3	4.7	52.9	5.04
	4	0.9	55.4	3.54
	5	− 3.9	54.0	18.4
*	6	−10.1	48.5	18.3
	7	5.0	56.1	2.89
	8	− 0.7	55.2	3.86
*	9	1.9	60.8	1.79
	10	−10.7	59.2	12.2
	11	− 4.7	50.0	39.2
	12	−13.1	56.1	8.45
	13	− 4.7	51.6	4.58
	14	− 7.3	53.7	28.9

＊：統計計算の際に除外したもの。

第31表　大鼻遺跡焼土坑14の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	1	− 4.8	54.8	3.04
	2	− 3.8	54.4	18.1
	3	0.4	49.1	3.83
	4	− 1.5	51.1	2.50
	5	− 5.4	52.1	16.7
*	6	−10.7	47.4	16.3
	7	2.3	53.0	1.95
	8	− 3.2	51.2	2.72
	9	− 1.4	56.8	1.32
*	10	− 9.5	57.2	10.6
	11	− 7.0	49.7	35.7
*	12	−12.7	52.4	7.12
	13	− 5.3	48.3	3.77
	14	− 6.3	52.7	26.5

＊：統計計算の際に除外したもの。

第32表　大鼻遺跡焼土坑14の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	1	− 7.5	52.1	2.26
	2	− 4.2	53.8	15.6
	3	− 2.3	47.8	2.80
	4	− 1.9	50.2	1.67
	5	− 5.6	51.4	14.2
*	6	−10.4	46.7	13.6
	7	1.0	49.6	1.28
	8	− 5.0	49.9	1.78
	9	− 1.2	54.3	0.900
*	10	− 8.9	56.5	8.67
	11	− 7.3	49.2	30.7
*	12	−12.9	51.6	5.75
	13	− 6.3	47.5	2.83
	14	− 7.4	52.4	22.5

＊：統計計算の際に除外したもの。

第33表　大鼻遺跡焼土坑14の100 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	1	− 8.0	50.8	1.64
	2	− 5.5	53.5	12.7
	3	− 2.4	47.6	1.87
	4	− 1.6	49.0	1.05
	5	− 6.5	50.9	11.0
*	6	11.6	46.0	10.3
	7	3.2	49.1	0.769
	8	− 3.7	48.7	1.12
	9	− 3.6	53.0	0.576
*	10	− 9.4	56.1	6.42
	11	− 6.3	48.8	24.2
*	12	−14.2	51.6	4.21
	13	− 7.3	46.1	1.95
	14	− 7.0	51.5	17.3

＊：統計計算の際に除外したもの。

第34表　大鼻遺跡焼土坑１のＮＲＭの磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	41	18.3	63.4	0.425
	42	−10.3	69.0	1.65
	43	− 4.5	66.0	3.43
*	44	22.3	72.6	0.342
	45	−10.9	66.5	0.717
*	46	− 9.6	54.4	11.2
	47	13.2	63.7	2.02
	48	16.2	65.8	0.461
*	49	17.8	72.8	0.397
*	50	−16.9	56.0	0.340

＊：統計計算の際に除外したもの。

第35表　大鼻遺跡焼土坑１の50 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	41	7.2	57.0	0.274
	42	− 3.7	56.8	1.01
	43	− 4.7	57.6	2.18
*	44	11.1	62.2	0.200
	45	− 5.1	59.7	0.393
*	46	− 7.0	52.0	7.98
	47	2.2	57.8	1.3
	48	7.7	58.2	0.278
*	49	9.6	63.1	0.258
*	50	− 7.3	51.9	0.205

＊：統計計算の際に除外したもの。

第36表　大鼻遺跡焼土坑１の75 0e消磁後の磁化測定結果

試料番号		偏角 (° E)	伏角 (°)	磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
JM	41	7.8	56.4	0.208
	42	− 2.3	54.4	0.682
	43	− 5.2	54.7	1.49
	44	4.6	56.1	0.147
	45	− 5.6	57.7	0.274
*	46	− 7.6	51.6	5.75
	47	− 1.4	57.6	0.894
	48	7.2	55.3	0.21
*	49	11.8	59.2	0.204
*	50	− 4.7	50.3	0.157

＊：統計計算の際に除外したもの。

第37表　大鼻遺跡焼土坑の考古地磁気測定結果

遺構名	消磁段階	N	D (° E)	I (°)	α95 (°)	K	平均磁化強度 ($\times10^{-4}$emu/g)
(焼土坑9	(MRM)	10	− 8.8	55.6	2.29	444.9	14.6)
(焼土坑9	(50 0e)	11	− 7.3	52.5	1.00	2064.9	11.4)
焼土坑9	(75 0e)	11	− 7.1	51.7	0.97	2236.7	9.61)
(焼土坑8	(MRM)	9	− 8.6	60.8	2.48	431.0	3.55)
(焼土坑8	(50 0e)	9	− 8.6	54.6	2.01	657.4	2.20)
焼土坑8	(75 0e)	9	−10.5	53.4	1.90	732.8	1.40)
(焼土坑3	(MRM)	7	1.3	64.9	7.85	60.0	1.35)
(焼土坑3	(50 0e)	7	− 0.6	58.9	4.74	163.2	0.743)
焼土坑3	(75 0e)	7	− 0.1	56.5	3.89	241.3	0.485)
(焼土坑4	(MRM)	8	− 1.9	74.2	7.21	60.0	1.44)
(焼土坑4	(50 0e)	8	1.0	61.5	5.13	117.3	0.776)
焼土坑4	(75 0e)	8	− 1.2	57.0	4.06	187.3	0.492)
(焼土坑2	(MRM)	10	− 5.1	57.0	2.41	401.6	7.43)
(焼土坑2	(50 0e)	10	− 6.8	52.4	1.51	1030.0	5.47)
焼土坑2	(75 0e)	10	− 7.5	51.2	1.50	1035.1	4.15)
(焼土坑6	(MRM)	9	− 7.0	58.5	4.66	113.2	5.53)
焼土坑6	(50 0e)	9	− 6.7	65.7	2.34	484.8	4.18)
(焼土坑6	(75 0e)	9	− 6.1	48.8	2.36	419.3	2.97)
(焼土坑10	(MRM)	9	− 4.1	76.1	3.23	254.4	1.59)
(焼土坑10	(50 0e)	10	− 6.4	61.1	2.74	311.6	0.994)
(焼土坑10	(75 0e)	9	− 5.3	59.1	2.57	401.1	0.676)
(焼土坑9	(MRM)	9	− 5.3	65.3	2.20	546.7	1.87)
(焼土坑9	(50 0e)	9	− 8.2	57.6	2.02	653.4	1.13)
焼土坑9	(75 0e)	9	− 7.7	55.4	1.90	736.4	0.798)
(焼土坑12	(MRM)	10	0.6	69.2	3.38	205.1	1.99)
(焼土坑12	(25. 0e)	10	− 1.7	65.0	2.42	400.9	1.70)
(焼土坑12	(50 0e)	10	− 2.0	58.3	1.90	646.6	1.14)
(焼土坑12	(75 0e)	10	− 2.1	55.8	1.55	977.6	0.770)
(焼土坑14	(MRM)	11	− 1.7	57.4	2.44	350.7	10.6)
(焼土坑14	(25 0e)	12	− 3.3	55.0	2.20	389.8	12.5)
(焼土坑14	(50 0e)	11	− 3.3	52.1	1.77	665.7	10.6)
(焼土坑14	(75 0e)	11	− 4.3	50.6	1.63	786.2	8.77)
(焼土坑14	(100 0e)	11	− 4.4	50.0	1.74	687.9	6.74)
(焼土坑1	(MRM)	6	4.4	66.2	4.89	188.6	1.45)
(焼土坑1	(50 0e)	6	0.6	58.0	2.72	607.3	0.906)
焼土坑1	(75. 0e)	7	0.7	56.1	2.55	560.9	0.558)

N：試料個数、D：平均偏角、I：平均伏角、α_{95}：フィッシャーの偏頼角、
K：フィッシャーの精度係数.
（ ）は年代推定のための考古地磁気データとして採用しななったものを示す。

平成6(1994)年3月に刊行されたものをもとに
平成19(2007)年1月にデジタル化しました。

三重県埋蔵文化財調査報告　１００－５

大　鼻　遺　跡

――本　文　編――

１９９４年3月　発行
編集・発行　三重県埋蔵文化財センター
印 刷 者　東 海 印 刷 株 式 会 社